北陸自動車道遺跡調査報告

―― 朝日町編6 ――

境A遺跡
土器編
（第1分冊本文）

1991年3月

富山県教育委員会

序

北陸自動車道の建設に先立ち、富山県教育委員会では路線内に包蔵される遺跡の発掘調査に全力をあげて対応してまいりました。とくに新潟県との県境に近い朝日町の境A遺跡は、昭和59・60年の2か年に渡って発掘調査しましたが、ここでは縄文時代を中心とする集落跡からおびただしい量の石器などの遺物が発見されました。

富山県埋蔵文化財センターにおいて、その後5か年間の計画で、これら遺物の整理作業をすすめ、その成果の一部は、遺構編（昭和63年度）・石器編（平成元年度）としてとりまとめ、刊行してまいりました。

本書は、境A遺跡出土の土器について本年度までに得られた成果の概要をまとめたものであります。ここで取り扱った資料は膨大な量であり、記録保存という本来の目的からも、遺物の実測と写真および拓本による事実の収録に多くの時間を費やす結果となりました。

本書をまとめる過程で、北陸における土器編年に関して、幾つかの新しい知見を得ることができましたが、これらについてはさらに時間をかけて検討し、別途報告する予定でおります。

この報告書が、縄文時代の今後の研究と埋蔵文化財の愛護に広く役立つことを願う次第であります。なお、発掘調査と報告書作成に当り、あたたかいご理解とご協力をいただきました地元朝日町の方々をはじめ、関係各位に深く感謝いたします。

平成3年3月

富山県埋蔵文化財センター
所長　邑本順亮

例　　言

1．本書は、高速自動車国道北陸自動車道建設に伴う朝日町境Ａ遺跡の発掘調査報告書である。

2．発掘調査は、日本道路公団新潟建設局の委託を受け、富山県教育委員会が昭和59・60年度の二箇年にわたり実施した。

3．本書は、境Ａ遺跡調査報告書の第三部にあたる土器編で、主として縄文時代土器の報告を行なう。発掘調査の経過及び調査体制等は、昭和63年度刊行の第一部遺構編を参照願いたい。

4．本土器編はさらに、本文編・写真図版編の二分冊からなる。

5．土器の整理については、昭和62年度：狩野　睦・神保孝造・橋本正春。昭和63年度：狩野　睦・神保孝造。平成元年度：狩野　睦。平成２年度：狩野　睦・酒井重洋が担当し、本書の編集・執筆は、富山県埋蔵文化財センター職員の協力を得て狩野・酒井が行なった。

6．本書に掲載した土器の写真撮影及びプリントは、株式会社チューエツに委託して実施した。なお、土器展開写真は狩野が写真撮影及びプリントを作成した。

7．図版類の縮尺はできるだけ統一を図り、実測図は1/4、拓本は1/3を基本として、それ以外の縮尺は図版下に表示した。

8．土器の整理と報告にあたり、多くの方々から指導・助言をいただいた。次に記して感謝の意を表したい。

小林達雄・小島俊彰・安孫子昭二・橋本　正・舘野　孝・石岡憲雄・南　久和・
寺崎祐助・高橋　保・米沢義光・西野秀和・久田正弘・吉田　淳

9．土器の復元・実測・トレースなどの整理作業の参加者は、次のとおりである。

清水友博・名苗静子・中沖恵子・西野美和子・西野恭子・村井睦子・尾崎靖子・鷹島由美子・佐々木敬子・大滝ひろみ・北村はま子・西野さわ子・吉田　都・酒井由美子・岩杉直人・四家井さゆり・五十嵐ひとみ・塚本裕子・入井智子・岡田知亜紀・竹内千賀子・宮永陽子・宮田佐和子・藤野良子・北川美佐子・浦沢純子・常岡美保・西本佐知子・竹内勤子・田畑寿恵・大浦靖子・津川絵理・中嶋恵子・島崎良子・城石孝子・鷲本かをる

目　　次

Ⅰ　序　　章 …… 1
Ⅱ　遺構と集中区の土器 …… 3
1　住 居 跡 …… 3
第1号住居跡 …… 3
第2号住居跡 …… 3
第3号住居跡 …… 3
第4号住居跡 …… 3
第5号住居跡 …… 3
第6号住居跡 …… 3
第7号住居跡 …… 3
第8号住居跡 …… 3
第9号住居跡 …… 4
第10・11号住居跡 …… 4
第12号住居跡 …… 4
第13号住居跡 …… 4
第14号住居跡 …… 4
第15号住居跡 …… 4
第16号住居跡 …… 4
第17号住居跡 …… 5
第18号住居跡 …… 5
第19(34)号住居跡 …… 5
第20号住居跡 …… 5
第21号住居跡 …… 7
第22号住居跡 …… 8
第23号住居跡 …… 8
第24号住居跡 …… 8
第25号住居跡 …… 8
第26号住居跡 …… 9
第28号住居跡 …… 9
第29号住居跡 …… 10
第30号住居跡 …… 10
第31号住居跡 …… 10
第32号住居跡 …… 10
第33号住居跡 …… 10
第35号住居跡 …… 11
第36号住居跡 …… 11
2　集 中 区 …… 11
3　穴 …… 14
Ⅲ　土器各説 …… 15
1　早・前期 …… 15
(1)　早　期 …… 15
(2)　前　期 …… 15
2　中　　期 …… 15
(1)　前　葉 …… 15
(2)　中　葉 …… 16
(3)　後　葉 …… 18
3　後　　期 …… 19
(1)　前　葉 …… 19
(2)　中　葉 …… 22
(3)　後　葉 …… 24
(4)　末　葉 …… 27
4　晩　　期 …… 30
(1)　初　頭 …… 30
(2)　前　葉 …… 31
(3)　中　葉 …… 33
①中屋式期 …… 33
②下野式期 …… 36
引用・参考文献 …… 39
穴出土遺物表・図　　版

挿 図 目 次

第1図　周辺の地形と発掘区割図 …… 2
第2図　遺構概略図 …… 2

Ⅰ 序　　章

1．はじめに

境Ａ遺跡の発掘調査は、北陸自動車道建設に先立ち、昭和59・60年の２箇年を費やして実施し、総発掘面積は12,100㎡に達する。その結果縄文時代を中心に住居跡34棟と約1,200箇所以上の穴群を検出した。遺物は先土器時代から中・近世のものが出土した。特に縄文時代の土器と石器の出土量は膨大で、平箱で7,000箱にのぼる。

遺物の整理及び報告は、石器は３箇年、土器は４箇年の整理計画を策定して行なってきた。その成果は、昭和63年度に第一部遺構編［富山県教委1989］、平成元年度に第二部石器編［富山県教委1990］、同２年度に第三部土器編を刊行し、同３年度に縄文時代以外の遺構と遺物、土製品、木製品等を含めて第四部総括編を刊行する予定である。

2．土器の出土状況

土器の出土状況は、遺跡中央を流れる竹屋川用水の西側で、丘陵から緩やかに傾斜する遺構分布密度の濃い地区から大量に出土した。その中で特に中期中葉のものは、住居跡集中区と第20号住居跡を中心とするＸ70～74Ｙ74～78区の遺物包含層および遺構覆土層より大量の出土を見た（第２図）。また後期中葉から晩期は、住居跡集中区の北側に広がる穴群の遺構覆土層とその上の遺物包含層より出土が多かった。

3．土器の整理経過

土器の整理は、昭和60・61年度に第一次整理作業として、水洗・注記及びバインダー液による処理を行ない。昭和62年度より４箇年を土器の整理及び報告書作成期間とし専従者を１～３名あてた。

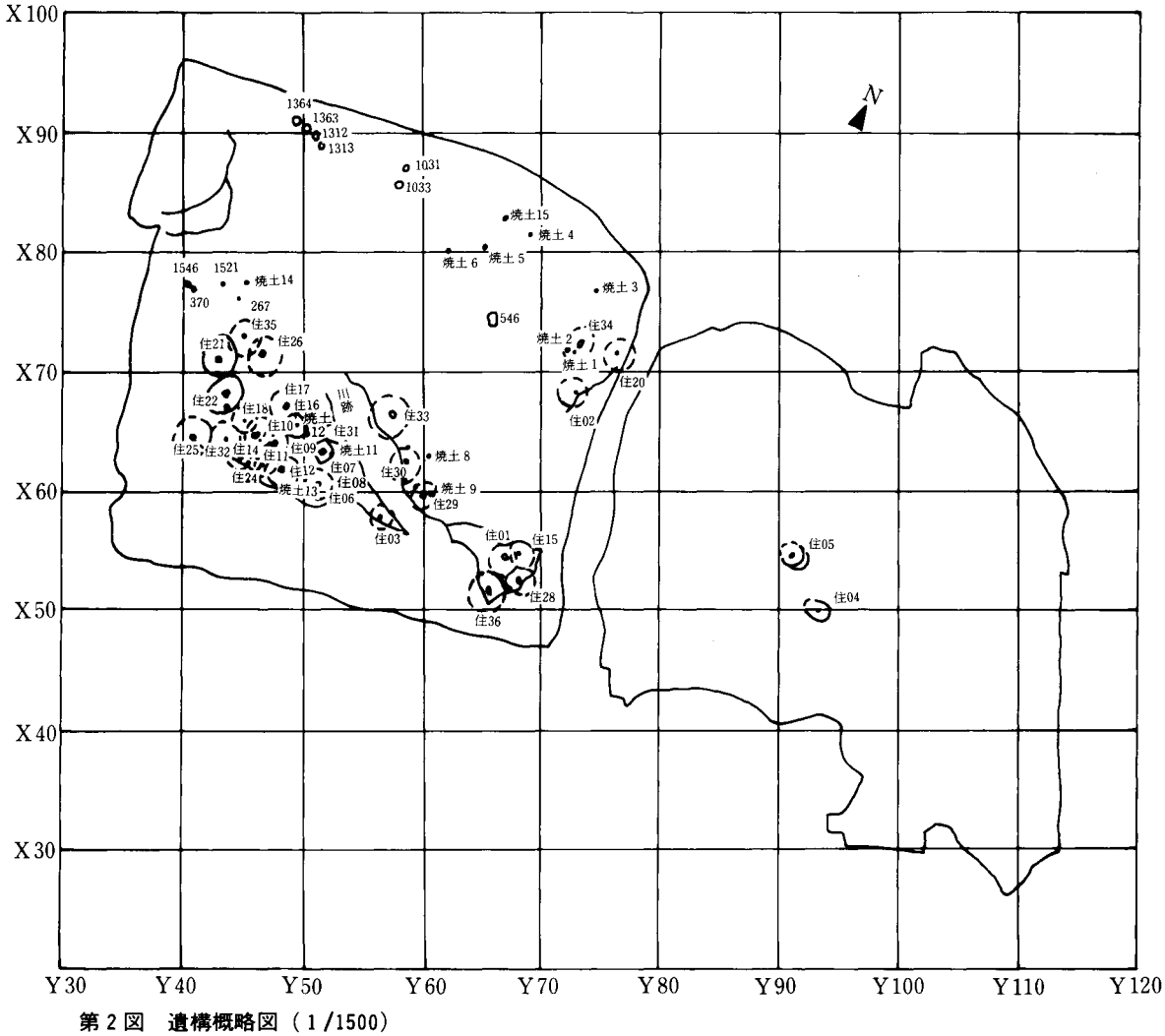
昭和62年度前半は第一次整理作業を終了した土器を、出土区ごとに時代・時期、文様の有無、復元可能かどうか等による第一次選別を行なった。ただ、調査時に一括出土した土器は、昭和61年度に一部復元作業に着手しており、第一次選別終了段階で復元可能な土器の個体数を約500個体と推定した。後半は第一次選別で選び出した復元可能な個体から、土器整理の基礎資料である土器台帳を作成し、それを基に第一次復元作業として、復元可能個体の破片を各区より抽出する作業と、平面的に全体の接合関係を見るための復元作業を行なった。

昭和63年度前半は第一次復元作業と平行して、破片の接着と石膏入れによる第二次復元作業を行なった。後半は第一・二次復元と土器の実測作業を実施した。実測は文様が比較的単純な大形破片については手測による実測とし、文様が複雑な個体は写真実測を導入した。写真実測は35㎜一眼レフカメラと長焦点レンズを使用し、被写体と離れることで、立体物が平面的になり、歪みの少ない画像が得られる。その写真を等倍ないし1/2のスケールで引伸し、セクションフイルムで写し取る。そのため実測時間は従来の実測と比較して大幅に短縮できた。

平成元年度は第一・二次復元と写真実測及び展開写真による展開写真実測を主として作業を進めた。展開写真実測は、従来の扇型に展開する実測と比較すれば誤差が大きいと思われるが、土器における文様の割付け、文様の単位、文様の施文方向等が作図から読み取れればと考え実施した。そのため時間的にも大幅に短縮出来た。

平成２年度は土器整理計画の最終年として報告書刊行に向け、前半は第二次復元、写真・展開写真実測及びそのトレース、第一次選別した土器から更に各時期の資料を抽出する第二次選別を実施した。なお、写真実測は約350点、展開写真実測は約90点を対象として実施したが、人員及び期間的に制約がある場合、実測方法として有効な方法と思われる。後半は第二次選別した土器の拓本とその断面図実測、各実測図の版組とトレース、写真撮影の依託と写真図版の版組等の作業を経て、原稿作成へと経過した。　（狩野）

第１図　周辺の地形と発掘区割図（１/2000）



第２図　遺構概略図（１/1500）

Ⅱ　遺構と集中区の土器

1．住　居　跡

第１号住居跡（図版77の1～9）

土器の出土量は少なく、ほとんどが細片である。１～４は隆帯と半隆起線文による渦巻文の構成から中期中葉に位置付けられる。5・6は突線文で中期後葉の岩峅野式［柳井1976］である。8は外反器形と肥厚する口縁部を特長とし、口縁端部に沈線を引く、9は緩い波状の沈線を垂下させることより後期前葉と思われる。

第２号住居跡（図版１，77の10～24）

中期中葉の土器が主体を占める。土器の器種には深鉢、台付鉢、浅鉢がある。図版１の１には隆帯がなく、半隆起線文で渦巻文を構成するが、三叉状の彫込みを残しており中期中葉の中頃と考える。２は頸部に隆帯と半隆起線文を巡ぐらし、眼鏡状突起を付す。５は体部上方で「く」の字状に内湾し、口縁下に幅広の粘土帯を貼りつけている。図版77の15は頸部に隆帯を巡らせ口縁部文様帯と胴部文様帯を区画し、胴部には横位の半隆起線文下に間隔を置いて短い半隆起線文を垂下させており、前葉的な様相がうかがえる。14は玉抱き三叉文と眼鏡状突起、半隆起線文の沈線を連続的に刺突することから中期中葉でも古い様相と思われる。

第３号住居跡（図版77の25）

土器の出土はほとんどない。隆帯と半隆起線文で構成し、半隆起線文がやや幅広く中期中葉の後半と考える。

第４号住居跡（図版２の１，77の26・27）

１は石組炉内に埋設されていた土器で、口縁部は緩く外反し、胴部に幅広の粘土帯と沈線で「Ｓ」・「Ｃ」字状の文様を施し、外側に縄文を充填する。類例は県内でもなく、大木10式に近いと思われる。26・27は隆帯と半隆起線文で文様構成し中期中葉の中頃から後半と思われる。

第５号住居跡（図版77の28）

土器の出土は極めて少なくほとんどが細片である。28は口縁部で文様はないが、緩く外反する器形と、口唇部の一端を内面に押す手法より中期後葉の岩峅野式と思われる。そのほか中期中葉と思われる浅鉢がある。

第６号住居跡（図版２の２，77の29～31）

中期中葉と後葉の土器が出土している。２・29は炉内より出土。２は緩い波状口縁で、口縁部に幅広の沈線を平行に引き、部分的に縦の短沈線で区切る。手法的に串田新Ⅰ式［小島1976］の工字状区画の変形と思われる。29はクシ状工具による刺突と半隆起線文より中葉の後半と思われる。30は口縁部に隆帯で渦巻文が施され、隆帯基部の両側に沈線が引かれることより、ｃ系統の土器と考える。[注①]

第７号住居跡（図版78の１～12）

中期中葉と後葉の土器が出土している。１・２・４・５は炉内から出土。１・２は隆帯に爪形文を施し中葉の前半と思われる。３は半隆起線文間の帯状区画を連続に刻むことより中葉の後半と考えたい。６は縄文地に渦状の沈線を引く事よりｃ系統の土器と思われる。10は浅鉢で半隆起線文の区画内を上下に三角状の彫込みを入れる。12は口縁部にクランク状の沈線を施すことから串田新Ⅰ式と考えられる。

第８号住居跡（図版２の３，78の13～26）

中期中葉と後葉の土器が出土。３は住居跡の重複から、第８号住居跡か第12号住居跡出土と考えられ断定できない。器形は台付鉢で、クシ状工具で刺突した隆帯と沈線で文様構成し、中葉の後半でも新しい様相と思われる。14・15・18・23は炉内から出土。18は爪形文を施した隆帯と三叉文より中葉でも前半と思われる。15はやや幅広の半隆起線文

で、引き方も丁寧でなく中葉の後半と思われる。20・21は浅鉢で、20は口縁端部を肥厚させ、口唇部に玉抱き三叉文を施す。21は円形の粘土帯を貼り、その上に赤色顔料が残る。22～24は搬入品と思われ、22は多量の雲母を混入し、23は隆帯と縦位の沈線文でａ系統の土器と考えられる。24は隆帯による渦巻文と区画よりｃ系統の土器と考える。25は幅広の沈線区画内に貝殻腹縁文を施す事より串田新Ⅰ式である。

第９号住居跡（図版78の27～37）

中期中葉と後葉の土器が出土。27～32は炉内から出土。27～30は隆帯上をヘラ状工具で刻み中葉の中頃に相当する。31は沈線で三角状の区画内に細沈線を施す。32は隆帯上に貝殻腹縁を施し、沈線で横位に区画し区画間に縦の短沈線を引く。31・32は串田新Ⅰ式と考える。33は口縁端部に爪形文を施した隆帯を巡らせ、その下に縄文地に半隆起線文を縦に引く、時期は中葉と考えるが類例は少ない。36は隆帯間の空白部に縦の細沈線を充填しており、ｂ系統の土器に類似する。

第10・11号住居跡（図版２の４，78の38～42，79の１～８）

２個所の炉跡が同一レベルで接近し、炉内出土以外はどの住居跡のものか確認できなかった。土器は中期中葉と後葉が出土。38・40・42は第11号住居跡の炉内から出土、細片で時期判別は難しいが、半隆起線文より中葉の後半と見たい。図版２の４は隆帯で区画し横「ハ」の字状の沈線を引き串田新Ⅱ式［小島1964］と考える。図版79の４は半隆起線文間に、同５は隆帯上にクシ状工具による刺突を施す。同６・８はｃ系統の土器で、8には赤色顔料が残る。

第12号住居跡（図版79の９～13）

土器の出土量は少ない。９～12は炉内出土。９～11は中期前葉と思われ、混入したものと考える。12は爪形文を施した渦状の隆帯から中期中葉の前半と見たい。

第13号住居跡（図版２の５，79の14～18）

土器の出土量は少ない。14・15は炉内出土のもので、14は口縁部を突起状に盛り上げ、その上に半隆起線文と円形の刺突文を施す。時期は中期中葉の中頃と考えるが、文様構成において類例は無く断定できない。５は無文の台付浅鉢と推定する。12は半隆起線文とクシ状工具による刺突より中期中葉の後半。13は波状口縁で、沈線で楕円状の区画をし縦の短線を引くことより串田新Ⅰ式と考えたい。

第14号住居跡（図版２の６，79の19～34）

中期中葉と後葉の土器が出土。６は半隆起線文だけで文様構成し、半隆起線文の空白部に三叉状の彫込みを入れる。時期は中葉の中頃に近いと考える。19～21は隆帯上をヘラ状工具で刻み、22・25～27は隆帯もしくは半隆起線文上をクシ状工具による刺突を施すことより中葉の後半と思われる。30・31は口縁部に貝殻腹縁文を施し串田新Ⅰ式と考える。32は隆帯間に波状の沈線を施し串田新Ⅱ式に近いと思う。34は隆帯の基部に円形状の突起を付し、その下に斜方向の沈線を引くことで、ｂ系統の土器に類似する。

第15号住居跡（図版79の35～37）

土器の出土量は少ない。36は半隆起線文とその間の空白を、ヘラ状工具ないし半載竹管で刻み、三叉状の彫込みを施す。時期は細片のため断定できないが中期中葉の中頃と思われる。

第16号住居跡（図版３・４，80の１～15）

中期前葉と中葉の土器が出土。器種には深鉢・台付鉢・有孔鍔付土器・浅鉢・台付浅鉢がある。土器のほとんどがＰ２よりの出土で、住居跡とＰ２の前後関係から見れば、Ｐ２は住居跡の貼床を堀込んでおり、Ｐ２が住居跡より新しいと言える。また住居跡の炉は地床炉で、時期は中期前葉の可能性がある。

住居跡の覆土層からは図版３の２、４の２、80の４・12が出土した。図版３の２は台付鉢と思われ、器形は口縁部を上から見れば楕円形状で、横から見れば舟状になることより、舟形土器と呼称している。文様は隆帯と半隆起線文

による渦巻文を横に連続してつらねる。時期は中葉の後半に位置付けられる。4は隆帯上を綾杉状に刻む、12は半隆起線文と沈線で構成することより中葉の中頃と考える。図版4の2は台付浅鉢で口縁部に隆帯と半隆起線文による渦巻文を4箇所配し、その上の口唇部を肥厚させて玉抱き三叉文を彫込む。

P2から出土した土器には、前葉と中葉のものがある。図版80の1～3・5～9は前葉と思われ蓮華文・格子状文・木目状撚糸文を施す。図版3の3・4は隆帯で縦に文様帯を区分し、玉抱き三叉文ないし円形の刺突と三角状の彫込みが見られ、中葉の前半に位置する。同1は口縁上部を欠くが、隆帯と半隆起線文を口縁部から胴部に斜めに配し先端に渦がつらなる。文様の単位は3単位で、時期は中葉の中頃と考える。図版80の13は台付鉢と思われ、口縁部にW状の隆帯を貼りつけ中葉の後半に近いと思われる。図版3の5は縄文地に楕円形状の粘土帯を、胴部と口縁部に貼り三角状に区画する。胴部には波状の沈線が垂下する。類似するものは県下になく、また時期も不明であるが、出土状況から中葉と推定したい。図版4の1・3は浅鉢で、1は口縁部を隆帯で区画し蛇体様モチーフと眼鏡状突起を交互に四箇所配し、その間の無文帯には三叉文を彫込む。また無文帯の縁は連続的に刻まれる。口唇部は蛇体様モチーフの上が肥厚し、玉抱き三叉文を入れる。時期は中葉の前半と考える。

第17号住居跡（図版5の1～4，80の16～27）

中期中葉と後葉の土器が出土。図版80の16は複式炉の主炉より出土したもので、細片のため文様は不明であるが縦横の沈線と、それにつらなる縄文より串田新Ⅰ式と考えたい。図版5の2は台付鉢で、頸部にW状の隆帯と突起を付け、胴部には花弁状文を施す。また図版80の17・19～21は隆帯上をヘラ状工具で刻むことより、これらの時期は中葉の中頃と思う。同27は貝殻腹縁文と沈線文より串田新Ⅰ式と言える。同22・25は同一個体と思われ、26共々隆帯と斜行沈線の組み合わせよりb系統の土器と思う。

第18号住居跡（図版80の28～33）

土器の出土量は少なく、28は隆帯と半隆起線文間の無文帯の縁を連続的に刻み中期前葉と思われる。29は隆帯上をヘラ状工具で刻み、30は半隆起線文間に縦の短線を半載竹管で引く、時期は中葉の後半と思われる。33は隆帯と沈線の区画内に斜行沈線を引き、その下は頸部まで無文とし、b系統の土器と考える。

第19（34）号住居跡（図版5の5・6，80の34～36，87の20～23）

中期中葉の土器が出土。図版5の5は炉内埋設土器で、隆帯はなく半隆起線文で全面を区画し、空白部をヘラ状工具で刻むことより中葉の後半と考える。同6はキャリパー状の器形で、口縁部は隆帯と沈線で区画して綾杉状の沈線を充填する。また頸部には隆帯を横走させ、胴部は縄文地に沈線を垂下させ区画する。図版80の34は半隆起線文で区画した中に縄文を施す。同35は半隆起線文と沈線で構成しc系統の土器と思われる。36は隆帯と沈線の区画内に斜沈線を引くことより、b系統の土器と類似している。図版87の20・22は爪形文を施した隆帯と半隆起線文より中葉の前半と考える。

第20号住居跡（図版6～20，81の1～15）

中期中葉の土器が主体として出土した。その他には中期前葉と後葉の土器が若干あるが、復元できる個体はない。住居跡はX70～74Y74～78区の土器集中区内に位置し、土器集中区と合わせて大量の土器が出土した。また出土した土器には復元できるものが多数あり、土器廃棄場にされていたことがうかがえる。なお住居跡出土とした土器と、土器集中区出土の土器を分割して記述するが、出土状況に差は見られなかった。

土器は住居跡と土器集中区において、数段階に細分されると思われるが、各土器の出土状況と各器種ごとの変遷等について検討を加える必要があるが、現状ではまだその段階に達していないため、ここでは各器種ごとに説明を加える。また時期については上山田・天神山土器様式の第Ⅱ～Ⅳ様式［小島1988］に相当する。

土器の器種には、深鉢・台付鉢・台付双子土器・鉢・浅鉢・有孔鍔付土器がある。また深鉢・台付鉢には粗製土器

があり、出土状況から中葉に属する可能性が高いと思われここで扱った。

深鉢の口縁部にはA，平縁（図版６～８）と、B，波状（図版９）がある。**A**，図版６の１は口縁部に隆帯による渦巻文から隆帯を下方へ降ろす。文様は２単位で構成され、円形と三叉状の彫込みがあるが、玉抱き三叉文とはならない。同２は頸部に１条の隆帯を巡らせ、１箇所で渦巻文を入れる。口縁部は半隆起線文で文様を構成する。同３・４は台付鉢の可能性もある。３は頸部に１条の隆帯を巡らせ、胴部に横「Ｓ」字状の渦巻文を連ねる。４は口縁部に指頭状の押圧した隆帯が巡り、胴部には横「Ｓ」字状の渦巻文を列ねる。図版７は口縁部にW状の隆帯を持ち、文様も半隆起線文で構成し類似するが、１は胴部の半隆起線文間にW状の彫込みはなく、縦引きの半隆起線文が施される。また胴下半部も花弁状文ではなく縄文となる。一方W状の隆帯は１・２が成形されたW状となるのに対して、３は３本の隆帯を貼りつける、４は貼りつけた３本の隆帯に沈線を引くと異なる。図版８の１は口縁部にW状の隆帯はないが、文様構成で図版７の４とよく似る。このように各土器の様相に差はあるが、前後関係で考えるのはむずかしい。図版８の２は口縁部に一条の隆帯を巡らし、眼鏡状と思われる突起とW状の隆帯を接続させて、残りの部分に半隆起線文を施す。同３は隆帯はなく半隆起線文だけで文様を構成するが、文様の単位はくずれている。

B，図版９の１は胴部を３箇所でくびれさせ、頸部と胴部の２箇所のくびれに大小の眼鏡状突起を配す、文様は四波頂にあわせた４単位で隆帯と半隆起線文で構成し、空白部の周辺を半載竹管で連続的に刻み、胴下半部の空白部に三叉文を彫込む。２は口縁部から胴部の半分以上を欠くが、四波頂と思われ、胴下半まで垂下する隆帯は２条しか見られず２単位で構成すると思われる。文様は口縁部から胴部にかけて隆帯と半隆起線文で区画し、空白部に玉抱き三叉文ないし三叉文を彫込む。また隆帯の接点には眼鏡状突起を配す。胴下半部は縄文地に半隆起線文を引く。３は頸部に隆帯を巡らし口縁部と胴部の文様帯を区分する。口縁部の文様は波頂下に渦巻文を入れ、他の部分は半隆起線文を充填し、部分的に半隆起線文で三叉状の文様としている。胴部は半隆起線文を繰返して施文し、その下は縄文地に花弁状文を施す。なお頸部の隆帯にはW状の隆帯に類するものが付く。

その他胴部破片（図版８の４～６）は半隆起線文で文様構成し、６は半隆起線文間をクシ状工具で刺突する。

台付鉢（図版10～14）は文様で、１類，隆帯と半隆起線文で構成し、隆帯が口縁部から胴部に見られる。２類，隆帯と半隆起線文で構成し、隆帯は胴上部に１条巡る。３類，隆帯は無く半隆起線文で構成に分類できる。

１類（図版10の１・２，11の１）　図版10の１は器形より台付鉢と考えた。口唇部には突起が付き、この突起の内面には円形の穴に対応するように三叉文が配される。文様は規則性が見られ４単位になると考える。同２は隆帯と半隆起線文で区画した空白部に細沈線を充填する。この時期の土器群には細沈線を用いる例は県内にほとんどなく、ａ系統の土器の影響と思われる。図版11の１は胴部を内面より瘤状に盛り上げた外面に、隆帯で渦巻文が施される。この瘤状の盛り上がりは７箇所で、本遺跡において多数の類例があり、また時期的に限られた手法と考えられる。

２類（図版10の３，11の２・12・13）　文様は比較的よく似ており、全体が半隆起線文で構成される。胴上部の隆帯にはW状の隆帯と、図版13の２以外には眼鏡状突起が付される。隆帯上は図版11の２はクシ状工具による刺突で、他はヘラ状工具により刻む。図版12は口唇部を鋸歯状とし突起を１個付け、その下を胴上部まで盛り上げ、部分的に肥厚させ、内面の胴上部から口縁部にかけ孔が貫通する。この孔の内部には炭化物が厚くこびり付いていた。

３類（図版14の１～４・６）　１～４は半隆起線文を施す。１は胴部を内面から瘤状に押し上げており、この瘤状の高まりは７箇所と思われる。６は波状口縁で台付鉢に波状口縁は少なく、縄文地に半隆起線文を描く。図版14の５は基隆帯は無く３類に類似するが、頸部に隆帯を貼りその上に沈線を引いてW状の隆帯としている。文様は胴上部の縄文地に半隆起線文を平行に引き、半隆起線文間の縄文地に上下から切れ込みを入れる。

台付双子土器（図版15）双子土器に脚部を付けたもので、全国的に類例はなく初例と言える。器形は脚部の上に深鉢を２個体のせたもので、胴部を共有しているが口縁部は分離しており、この口縁部に向い合うように小突起が付さ

れる。文様は個々の個体に半隆起線文で区画文を描く。

鉢（図版19の１）文様は半隆起線文で全体を構成し、口縁部に隆帯を１条巡らし、それに沈線を入れた隆帯を３本貼りつけW状の隆帯としている。また口唇部は幅広くして連結する三叉状の彫込み入れる。

浅鉢（図版19の２～５）２・３は口唇部を部分的に肥厚させて玉抱き三叉文を彫込み、その下の口縁部に隆帯と半隆起線文で渦巻文を施す。なお２は口縁部に半隆起線文で区画し、その区画内を上下より連続した三角状の彫込みをする。３は口縁部に平行な半隆起線文を２条巡らす。４・５は無文で、浅鉢としてはやや器高が高く鉢に近い。器形は底部から体部にかけて緩く開き、体部の上方で「く」の字状に内傾する。

有孔鍔付土器（図版19の６）頸部には橋状把手を４箇所付ける。文様は胴部を沈線で区画して、その区画内を無文とするものと、細沈線を充填するものを交互に配す。

粗製土器（図版16～18）図版18の８・９は無文で、その他は縄文を施文。器種は図版18の６・７は台付鉢で、他は深鉢である。深鉢は**A**，頸部で「く」の字状に外反（図版16・17）。**B**，頸部でくびれ口縁部が緩く弧を描いて内湾（図版18の１）。**C**，波状口縁で胴部と頸部でくびれ外傾する（図版18の２・３）がある。

その他（図版20）搬入品と思われるものを一括した。１～３は器形がキャリパー形で、口縁部に隆帯による渦巻文が施される。また１にはクランク文が、３には隆帯による剣先文が見られる。胴部は１・２が縄文、３が縄文地に沈線文が施される。４は浅鉢で口縁部の縄文地に隆帯で渦巻文を施す。５は波状口縁で口縁部を肥厚させて沈線を引き波頂間を結び、波頂部に渦巻文を入れる。６は器形がキャリパー形で、口縁部を無文とし頸部以下胴部に隆帯と沈線で文様を構成する。胎土には多量の雲母と角閃石を含む。これらの土器は１～４がC系統、５がｂ系統、６がａ系統で曽利Ⅰｂ段階［末木1988］と考えられる。

第21号住居跡（図版21，81の16～30，82，83の１～24）

土器の出土量は多く後期前葉の土器が主体として出土し、他に中期後葉のものがある。

中期後葉の土器で図版81の16・18は隆帯間に短沈線を引き、17は隆帯を基線とする葉脈状文、19は口縁にそって沈線が引かれ、口唇部の一端を内面に押す。これらは串田新Ⅱ式と思われる。20は外反器形と幅広の沈線、21は突線文、22は突線文を基線とする葉脈状文を施すと思われ岩峅野式と考える。

後期前葉の土器は出土量は多いが、ほとんどが破片で復元できる個体は少なく、文様により分類した。

１類（図版81の24・29）　24は押し引きによる沈線で、29は内湾器形より気屋式に近いと思われる。

２類（図版81の23）　口縁部に波状沈線を引き、内湾器形より気屋Ⅰａ式［米沢1989］である。

３類（図版21の１，81の26～28・30，82の１～９，）　図版21の１は波状口縁の深鉢で口縁部から頸部にかけ押し引きで三角形刺突文を施すが、三角形刺突文は部分的に沈線状となる。胴部にはRの縦縄文が施される。波頂部内面には円形の凹が付く。26～28・30、82の１～５は口縁部から頸部にかけ三角形刺突文を数条巡らせる。口縁部は26・30・４・５が内湾ないし内湾気味となり、27・28・１・３は外反する。なお３・４は口縁端部に斜縄文を施す。６～９は沈線内に棒状工具により連続刺突するもので、口縁部はやや内湾気味となる。

４類（図版21の２～４，82の10～26，83の１・２・５・７～11・14）　口縁部の文様を主に沈線で構成するもので、口縁部は内湾ないし緩く立ち上がるものがほとんどだが、図版82の21のように「く」の字状に外側に折れるものもある。口縁部の文様は沈線と末端刺突文や円形刺突文を組み合わせる例が多い。また沈線にそって刻みを加えるものも多い。頸部から胴部の文様は図版21の３のように沈線文の下に縄文を施す。図版21の４は縄文地に沈線文を施し、胴部に沈線を１条巡らせて区画し以下縄文となる。図版21の２、82の16は縄文が施文される。それ以外に図版83の７～11・14は頸部から胴部の破片で、沈線文を主体とし末端刺突文を加えるものもある。また図版83の12・13は沈線文の区画内に縄文を施す。

5類（図版83の３・４）　口縁端部に沈線と３は円形刺突文、４は末端刺突文を施し、以下無文とする。

6類（図版83の６）　器種は不明であるが比較的薄手の精製土器で、口縁部の内外面に沈線文を施し、外面の沈線文下方に刻みを施した隆帯が見られる。

7類（図版83の15・17）　頸部から胴部の破片で、頸部に沈線を巡らせその下は縄文地に沈線を縦位に引き、長方形ないし長楕円形に区画する。

8類（図版83の16）　横位の沈線区画内に節の細かい斜縄文を、区画の下は節の扁平なＲＬの縦縄文と２種類の縄文を使い分けている。

9類（図版82の27～30）　口縁部に斜縄文、頸部以下に縦縄文を施すもので、28は口縁部から頸部にかけ３条の沈線を引き、30は幅広の沈線を数条引く。同31は頸部以下も斜縄文で、口縁部に刻みを施した沈線を１条巡らす。28・30・31には口唇部にも縄文が施される。器形は殆どが外反器形となるが、29はやや内湾器形となる。

10類（図版83の18～23）　破片で器種は不明だが類例より、18は深鉢でその他は浅鉢と考えられる。器形の特長は大きい波状口縁で、口縁部が「く」の字状に折れやや外反気味に立上がる。文様は口縁部に沈線と円形刺突文を組合せて施すが、波頂部では23のように内面にも施文される。胴部は無文になる例が多い。沈線は19・22・23に見られるように幅広のものがある。24は浅鉢の橋状把手の部分と思われ、沈線区画内に列点文を施す。

３～10類の時期については多少時期幅があると思われるが、ほとんど気屋Ⅰｂ式に比定できる。ただ８類は気屋Ⅱ式と考えられる。また６類については堀之内式との関連が推定される。

第22号住居跡（図版83の25～32，84の１～13）

中期中葉と後葉の土器が主体として出土し、若干ではあるが後期前葉の土器がある。25・28は隆帯と半隆起線文で構成するが、渦巻状とはならない。26・27は隆帯はなく、半隆起線文間の帯状区画を半載竹管で連続に刻む。これらは中期中葉でも後半と思われる。29・30・32は隆帯による渦巻文よりｃ系統の土器と考えられる。31は口縁部が内湾し、沈線文が施される。胎土には多量の雲母を含むことよりａ系統の土器と考えたい。

後葉の土器で１～３は長楕円形の沈線を施す。４・６・７は隆帯をクシ状工具で刺突し、６は隆帯間に縦の短沈線を引き、波頂部に把手を付ける。５は平行に引いた沈線間に貝殻腹縁文を施す。４～７は串田新Ⅰ式と考えたい。８は口縁部に平行な沈線を引き、その間に縦の沈線と列点文を入れる。９は口縁部に刺突した隆帯を、10は沈線を１条巡らせる。８～10で特長的なのは、口縁端部を部分的に内面に押しており、岩峅野式と思われるが、やや串田新Ⅱ式的な様相を残す。11は炉跡からの出土で、平行な沈線と条痕文を施しており後葉と考える。12は外反器形と、口縁部に平行な沈線より岩峅野式と思われる。

後期前葉の土器の13は口縁部に斜縄文、頸部以下に縦縄文を施し気屋１ｂ式である。

第23号住居跡（図版22の１，84の14～22）

中期中葉・後葉、後期前葉の土器が出土。１は炉跡から出土したもので、無文の口縁部の下に縦縄文を施しており、時期は断定できないが後葉と考えたい。14はＷ状の隆帯が付き中葉の中頃と思われる。22は口縁部に隆帯で渦巻文を施し、口縁部内面に隆帯を貼り、胎土には雲母の混入が目立ちａ系統の土器と考える。15は隆帯区画内に「Ｓ」字状沈線を、16は斜沈線、19は波状沈線を施す。17・18は隆帯上をヘラ状工具で刻む。時期は15が後葉段階、16～19が串田新Ⅱ式と考える。20・21は内湾器形で、沈線と円形刺突文より気屋Ⅰｂ式である。

第24号住居跡（図版84の23～27）

土器の出土量は少ない。23・25は半隆起線文を施したもので、中期中葉の後半と推定する。24は浅鉢で口縁部に半隆起線文、体部には縄文が施される。26・27は隆帯が添え付け後にナゾられておりｃ系統の土器と考える。

第25号住居跡（図版22の２，84の28～32）

中期中葉と後葉の土器が出土している。2・28・29は炉内から出土したが、2は炉内に敷かれており、28・29は混入したものと言える。2は口縁部にクシ状工具で刺突した隆帯を巡らし、2箇所ある波状部で湾曲した隆帯を垂下させる。また沈線による工字状文を施文することより串田新Ⅰ式と言える。28は半隆起線文、29は爪形文を施した隆帯より中葉の中頃と思われる。30・31はクシ状工具で刺突した隆帯と沈線、32には沈線よる工字状の区画と推定できる文様があり、これらは串田新Ⅰ式と考えられる。

第26号住居跡（図版22の5～8，23，84の33～36，85，86の1～7）

土器の量は多く、中期前葉・中葉・後葉、後期前葉のものがある。図版22の5～8、23の1～3・5は炉内に敷かれて出土した。図版22の6は口縁部に平行に刺突した隆帯を巡らせ、その間に横「ハ」の字状の沈線を引くことで串田新Ⅱ式と言える。同5は縄文地に沈線を縦に引く。同7・8、図版23の1～3・5は粗製土器で、器形は口縁部が胴部から緩く開くものと（7・8・2）、胴部から口縁部まで真直ぐに立上るもの（1・3・5）がある。口縁部は無文とし、胴部に縄文が施されるが、5にはクシ状工具による条痕文が施される。これらの土器の時期は断定できないが、6との伴出関係から串田新Ⅱ式に比定できる可能性がある。

覆土層から出土した土器で、図版84の33は口縁端部に爪形文を施した隆帯を巡らし、波状口縁の波頂下に「し」の字状の隆帯を持ち、中期前葉の後半と考える。同34は爪形文を施した隆帯と玉抱き三叉文を彫込み、中葉でも前半と思われる。図版22の3は台付鉢と思われ、胴部に隆帯を巡らしその上にW状の隆帯を付し、口縁部から胴部に半隆起線文、胴下半部に花弁状文を施す。同4は胴上部が欠損しており、半隆起線文と花弁状文を施す。図版84の33～36、85の1～3は半隆起線文、隆帯と半隆起線文で文様構成し、3には把手が付く、時期は中葉の中頃と考えたい。図版85の4～9は半隆起線文を主文様とし、隆帯も渦巻状とはならなく中葉の後半と思われる。同10は有孔鍔付土器で橋状把手を持ち、内外面に赤色顔料を施したものと思われ痕跡が残る。同11～15は搬入品と思われ、13はc系統、その他はb系統の土器と類似する。

図版85の16～18は16が沈線と貝殻腹縁文、17は刺突した隆帯間に縦の短沈線を引く、18はヘラ状工具で刻んだ隆帯間に縦の沈線を引くことより串田新Ⅰ式。同19・20は19が隆帯区画内に横「ハ」の字状の沈線、20は隆帯区画内に列点文を入れ串田新Ⅱ式。同21～24は21が沈線区画内に「S」字状の沈線文、22は突線文、23は突線文を基線とした葉脈状文で岩峅野式と考える。同24・25・41は24が頸部に押し引き状の列点文を施し、25は外反器形と沈線文を施す、41は沈線と押し引き痕を残す沈線が交互に引かれ岩峅野式でも新しい様相をもつ。

図版85の26は内湾器形と波状沈線文より気屋Ⅰa式。同27・29は三角形刺突文を施す。同28は沈線内をヘラ状工具で連続刺突する。同30・31は口縁部に斜縄文、頸部に押し引き状沈線を引く、同32～35・38は沈線文と円形刺突文・末端刺突文を組合せるもので、33には沈線間に縄文が施される。同39は口縁部に列点文、頸部に沈線文を施す。同40、図版86の2・3・4は胴部片で沈線文を施し、40には幾何学的な文様が見られる。同36、図版86の1は「く」の字状になる口縁部で、口縁端部に円形刺突列を持ち、頸部は無文となる。同37は浅鉢と考えられるもので、口縁部が「く」の字状に折れて外反し、口縁部の沈線区画内に円形刺突文を施す。以上これらの土器は多少の時期幅を持つと思われるが、気屋Ⅰb式と考えられる。

図版86の5は外反器形で、口縁端部の内面が張りだす。文様は沈線区画内に縄文を充填し、称名寺式に類似している。図版85の42は円形刺突を持つ隆帯と「8」の字状張付文より堀之内Ⅰ式と考える。図版86の6は細い沈線区画内に縄文を充填し、堀之内Ⅱ式と考えられる。同7は沈線文と沈線間を斜めの沈線で刻んでおり、後期前葉から中葉のものと考えられる。

第28号住居跡（図版86の8～14）

中期中葉・後葉、後期前葉の土器が出土。8は波状口縁の波頂部に円形の張付文と半隆起線文を施し、中葉の後半

と考える。9は浅鉢で口縁部に半隆起線文で渦巻文と、平行に引いた半隆起線文間を半載竹管で縦に刻む。口唇部には沈線が入り中葉の中頃と考える。12はc系統の剣先文の棘と思う。10・11は隆帯をクシ状工具で刺突、13は貝殻腹縁で刺突し串田新Ⅰ式。14は肥厚した口縁部と頸部に、三角形刺突文を施し気屋Ⅰb式と思う。

第29号住居跡（図版86の15～18）

中期中葉と後葉の土器が小量出土。18は波状口縁の波頂部で大きい眼鏡状突起を持ち、口縁部内面に三叉状の彫込みが施される。21は半隆起線文と爪形文を施した隆帯で渦巻文を構成する。15はW状の隆帯を頸部に付す。19・20は半隆起線文。16は隆帯の下に半隆起線文を半円形に連ねる。17は口縁端部と隆帯上にクシ状工具で刺突し、その間に幅広の沈線を入れる。時期は中葉でも18・21が前半、15・19・20が中頃、16・17が後半のものと考える。

22は釣手土器で口縁端部に沈線を1条引く。23は隆帯を「U」字状に垂下させ、周囲にある斜め方向の沈線を葉脈状文と推定すれば、串田新Ⅱ式と考えられる。

第30号住居跡（図版86の24～28）

土器の出土量は少なく、中期中葉・後葉、後期前葉のものがある。25は爪形文を施した隆帯と半隆起線文より中葉の前半と考える。25は縄文地に半隆起線文を施し、中葉の後半と考える。26は縦横の隆帯間に縦の沈線を充填すると思われ、a系統の土器と思われる。27は隆帯間に横「ハ」の字状の沈線を施すもので串田新Ⅱ式である。28は頸部に三角形刺突文を施し、気屋Ⅰb式と考える。

第31号住居跡（図版24の1・2，86の29～34）

中期前葉の土器が主体として出土し、若干中期中葉のものがある。1は口縁部が「く」の字状に外反する。口唇部には突起が付され、口縁端部に綾杉状に刻んだ隆帯が巡り、突起の下に「し」の字状の隆帯が付く。文様は半隆起線文で縦横に区画し、区画内は格子目文、区画の上下の縁を刻み無文帯とする。2は外反器形で、口縁部に半隆起線文で区画文を施し、「し」の字状の隆帯が付され、胴部には結節縄文が施される。29・30は半隆起線文と格子目文を施す。これらの土器は前葉の新保・新崎土器様式［加藤1988］の第Ⅵから Ⅶ様式と考えられる。

31は爪形文を施した隆帯と半隆起線文より中葉の前半。32は半隆起線文、33は隆帯と半隆起線文による渦巻文で中葉の中頃。34は頸部に縄文を押圧し、胴部に縄文を施す。時期は前葉から中葉の前半と思われる。

第32号住居跡（図版23の7，24の3・4，86の35～40，87の1～4）

中期中葉と後葉の土器が出土した。図版87の1は炉内より出土したもので、花弁状文より中葉の中頃と考える。図版86の35～40はヘラ状工具で刻んだ隆帯と半隆起線文や、半隆起線文等で文様構成し中葉の後半と考える。図版87の2はクシ状工具で刺突した隆帯と、幅広の半隆起線文より中葉後半の古串田新式［小島1972］と考える。

図版23の7は縄文施文した隆帯で文様構成する。図版24の3は頸部に棒状工具により刻んだ隆帯で、区画を作りその区画内に列点文を施す。図版87の3は口縁端部に幅広の沈線を引き、その沈線内を刺突する。同4は縦位の隆帯だけで構成する。以上の土器は串田新Ⅱ式と言える。図版24の4は口縁部を無文とした縄文施文のもので、第26号住居跡の炉跡出土土器と類似しており、串田新Ⅱ式に伴うものと考えられる。

第33号住居跡（図版24の5，87の5～19）

中期中葉・後葉、後期前葉の土器が出土。図版24の5、87の12・14・16は炉内より出土した。5は搬入品と考えられ、器面全体に刺突文を施し三十稲場式の古段階［田中1989］のものと思われる。12は外反器形と幅広の沈線文で岩峅野式と推定する。14は台付鉢と思われ、沈線と波状沈線文を縦位に施文し気屋Ⅰa式より、やや様相的に古いものと考えたい。16は口縁部に沈線を1条巡らし、その下を刺突し後期前葉段階のものと考える。

図版87の6は爪形文を施した隆帯と半隆起線文で中期中葉の前半。5・7・8はヘラ状工具で刻んだ隆帯と半隆起線文や半隆起線文で構成し中葉の中頃。19は2条の隆帯と綾杉状沈線より、b系統の土器。9・10は刺突した隆帯間に

斜めの沈線か、横「ハ」の字状の沈線を引くと思われ串田新Ⅱ式と考える。

11は横走する沈線間に波状沈線を施す。13は口縁端部に波状沈線を入れる。15は横走する沈線間に押し引き状の列点を施す。17は沈線内に三角形刺突文を施す。18は沈線内に縄文を施す。時期は11・13・15が気屋Ⅰa式よりも古い様相を残しており、一段階古いものと考えたい。17・18は気屋Ⅰb式と思われる。

第35号住居跡（図版24の6，87の24～34）

中期後葉と後期前葉の土器が出土。24は炉内出土で口縁部に2条の平行沈線を巡らし、その間に列点を刺突する。25・28・29は隆帯間に縦の沈線や横「ハ」の字状の沈線を施す。26は隆帯上に縄文を施す。30は隆帯上をヘラ状工具で刻む。なお28～30は山形の波状口縁と思われる。これらの土器の時期は串田新Ⅱ式と言える。

6は外反する口縁部に数条の隆帯を巡らし、口縁端部に縄文を施す。胴部は縄文が縦走する。27は口縁部が内湾しており、列点と沈線を施す。31は押し引きによる沈線。32は円形文と末端刺突。33は末端刺突。34は沈線区画内に縄文を施す。時期は27が気屋Ⅰa式、6・31～33は気屋Ⅰb式、34は堀之内Ⅱ式と考える。

第36号住居跡（図版24の7・8，25，87の35～38）

中期中葉の土器が出土した。7は波状口縁の台付鉢と推定され、クシ状工具で刺突した隆帯と半隆起線文で渦巻文を施す。胴部の渦巻文を施した部分は内面から瘤状に盛り上げている。また口縁端部の内面に三叉状の彫込みが見られ、中葉の中頃と考える。8は縦走する2条の沈線間に縄文を施すもので、胴上半の文様が不明のため断定できないが、加曽利E式系の土器と推定する。図版25は器形がキャリパー形で、口縁部に隆帯で渦巻文を施し、頸部に無文帯を設ける。胴部には縄文地に沈線で渦巻文が施されc系統の土器と言える。35・36は半隆起線文で中葉の中頃。37は条痕文に突起を付けた有孔鍔付土器と思われる。38は円形の粘土帯を貼った浅鉢である。

2．集中区（図版27～47）

第20号住居跡でも記したが、X70～74Y74～78区で住居跡覆土をも含めて大量の土器が出土し、出土状況から土器の廃棄場と考えられる。土器は主に中期中葉のものが出土し、他に中期前葉と後葉のものが少しある。なお集中区と住居跡覆土で図化した土器の点数は約200個体以上あり、中葉の土器変遷を考える上で重要な位置を占めるものと考える。ここでは各器種ごとに説明を加える。土器の時期は上山田・天神山土器様式の第Ⅱ～Ⅳ様式に相当する。

土器の器種には、深鉢・台付鉢・浅鉢・有孔鍔付土器がある。また、第20号住居跡と同様に深鉢・台付鉢に粗製土器があり、出土状況から中葉に比定できると考えここで含めて扱つた。

深鉢の口縁部には、A，平縁。B，平縁に突起がつく。C，波状に分類できる。

A（図版27～29の1・2）　文様から1類，隆帯と半隆起線文で構成。口縁部には隆帯を1条巡らし、渦巻く隆帯が口縁部から胴部に見られる。2類，隆帯と半隆起線文で構成するが、隆帯は胴上部に1条巡り、他は半隆起線文で構成。3類，隆帯は無く半隆起線文で構成。4類，口縁部に巡る隆帯はなく、口縁端部より隆帯を胴部まで斜行。5類，その他に分類できる。

1類（図版27の1～5，28の2・5，29の1）　図版27の1は口縁から右下がりに隆帯を下ろし、胴上部で左に回り先端で渦巻く。文様は4単位と考えられる。同2は口縁部から胴部に渦巻文が連なる。文様はA＋Bの2単位である。同3は個々の隆帯が口縁部から胴部で渦巻き、文様の単位も明確でない。同4は「S」字状渦巻隆帯を5箇所に配す。同5は胴部に隆帯を巡らし、口縁部と胴部の文様帯を分けているかもしれない。隆帯上は図版28の5は無文、同4は爪形文、図版29の1はクシ状工具による刺突、他はヘラ状工具ないし半載竹管で刻む。

2類（図版28の3・4）　2は口縁部に眼鏡状突起を付け、半隆起線文を平行に引き渦巻文は施されない。4は胴部に半隆起線文で渦巻文を横に連ね、胴下半部には花弁状文が施される。

3類（図版28の１）　隆帯はなく、本来隆帯があると思われる場所の半隆起線文上をヘラ状工具で刻む。

4類（図版27の６）　波状口縁に近いが、器形等を考えここで扱った。隆帯は口縁端部より胴部まで斜行するが先端は渦巻かず、途中にこの隆帯と離れた別の隆帯による渦巻文が施される。文様は４単位で構成する。

5類（図版28の６・７，29の１）　６は口縁部に縄文を、頸部以下は半隆起線文を施す。７は口縁部を無文とし、胴部の縄文地に半隆起線文で区画する。１は口縁部に隆帯による弧状区画内へ半隆起線文を縦に引く。

B（図版29の４・５，30，31の１）　環状の突起で頂部が波状に刻まれ、突起の内外面もしくは内面に、円形の穴に対応するように三叉文が彫込まれる。文様は隆帯と半隆起線文で構成する。また隆帯上は爪形文が施される。４は胴上部で口縁部と文様帯を区画し、胴下半部には縄文が施される。口縁突起下の頸部には眼鏡状突起が付く。文様は規則正しく２単位になる。５は口縁部に隆帯と半隆起線文、胴部には花弁状文が施される。隆帯上には口縁突起下及び、隆帯の接点に眼鏡状突起が配される。文様の単位は規則性がなく不明である。図版30は隆帯による渦巻文を整然と配置しており、文様も２単位になる。１は環状の突起間に台形状の突起がさらに加わり波状口縁とも言えるが、他の環状の突起を持つ土器との関連よりここに含めた。文様は縦走する隆帯で２単位に区切られ、その間に「Ｓ」字状の渦巻隆帯が各々２箇所配される。

C（図版31の２～４，32の１）　２・３は４波頂で、膨らみをもつ胴部が胴下半部でくびれる。波頂部には２が眼鏡状突起、３が円形の穴が付く。文様は爪形文を施した隆帯と半隆起線文で構成し、口縁部から胴部にかけて、隆帯の接点に眼鏡状突起または小突起が配される。文様の単位は３が２単位と思われる。４は波頂部に円形の張付文を付し、口縁部に半隆起線文を横走させ、胴部は縄文地に半隆起線文を縦に引く。１は波頂部が「Ｕ」字状にくぼむ。文様は半隆起線文と口縁部に爪形文を施した隆帯を１条巡らし、胴部に隆帯を横にはわす。

その他胴部破片（図版32の２～９）は２～４が隆帯と半隆起線文で、隆帯上は２が爪形文、４がヘラ状工具により刻む。５・８は半隆起線文。６・７・９は縄文地に半隆起線文を縦に引く。

台付鉢（図版33～37）は文様を、１類，隆帯と半隆起線文で構成し、隆帯が口縁部もしくは頸部から胴部に見られる。２類，隆帯と半隆起線文で構成するが、隆帯は胴上部に１条巡るに分類できる。

1類（図版33，34の１～７，37の１～３）　図版33の１・２、34の２～４・６、37の１は口縁部ないし頸部に隆帯を１条巡らせてその下に、隆帯による渦巻文を横に連ねる。その内図版34の４・６、37の１は胴部を内面から盛り上げた所に渦巻文を配す。図版33の３、34の１は頸部に巡る隆帯はなく、頸部から胴部に隆帯をもつ渦巻文が横に連なる。図版37の２は底部から胴部へ緩く立上り、口縁部へと移行する屈曲のない器形で、台付鉢に類例のない器形を示すが、底部に脚部の接合痕が残り台付鉢とした。文様は口縁部を無文とし、胴部に隆帯による渦巻文を配す。隆帯上は図版33の１、34の５～７は爪形文。図版37の１はヘラ状工具で綾杉状に刻む。図版37の３はクシ状工具で刺突する。その他はヘラ状工具で刻む。なお図版33の１、34の１は三叉文を図版37の１は玉抱き三叉文を彫込む。図版33の３、34の５には眼鏡状突起、その他には小突起が隆帯上に配される。

2類（図版34の８，35・36）　図版35の１・２は胴下半部に隆帯をもつ渦巻文が施されるが、胴部に隆帯が巡ることよりここで扱った。図版35の１は口唇部に突起をもち、その下から胴上部の隆帯へかけて把手が付される。同２～４、36の１には眼鏡状突起が、図版36の１～３にはW状の隆帯が胴上部の隆帯に接して配される。なお、図版35の２には口縁部から胴上部の隆帯にかけて、３条の隆帯が渡されるがW状とはならず、口縁部に玉抱き三叉文が残ることより、W状の隆帯で初期段階になるものと考えられる。また図版36の４は隆帯ではないが、半隆起線文を３～４条渡し、W状の隆帯と関連するものと考えられる。隆帯上は図版35の１・２が爪形文を施す。図版35の５はクシ状の工具による刺突。その他はヘラ状の工具による刻みとなる。

その他破片（図版37の４・５）は４が半隆起線文で構成され、文様の類似性より２類の胴部に相当するものと思わ

れる。5は脚部で円形の透かしに対応して、三叉文が彫込まれる。

浅鉢（図版41～46）は口縁部の形状より、A，「く」の字状に内傾する。B，内湾する。C，緩く立上りほぼ直立する。D，「く」の字状に立上りほぼ直立する。E，緩く湾曲しながら開くに分類できる。

A（図版41の1，42の4・5，43の2・4，45の3～6）

1類（図版41の1，42の4・5，43の2・4）　文様は口縁部に半隆起線文で施す。図版41の1は橋状把手が付き、その上の口唇部は肥厚し玉抱き三叉文が施される。図版42の4・5は口唇部に沈線を1条入れるが玉抱き三叉文は無い。この沈線は橋状把手や渦巻文を施した土器の大半に見られる。またその多くは口唇部には玉抱き三叉文を施し、浅鉢の変遷に関係があると思われる。図版43の4は4箇所に円形と弧状の粘土帯を交互に貼る。

2類（図版45の3～6）　無文で、口唇部に半隆起線文を横走させて1条の沈線を引く。

B（図版41の2～4，42の1～3，43の3・5・6，44の1・5～7，45の1，46の5）

1類（図版41の2～4，42の1～3，43の3・5・6，44の1，46の5）　文様は口縁部に隆帯と半隆起線文、半隆起線文のみ、粘土帯を貼る、器面を彫込むで施される。図版41の2～4は隆帯をもつ渦巻文、図版42の1～3は半隆起線文による渦巻文で、この渦巻文の上の口唇部は肥厚し玉抱き三叉文が施される。図版43の3は半隆起線文を3条横走させる。図版43の5・6、44の1は粘土帯を貼るもので、5・6は1箇所、1は6箇所に施される。図版46の5は口縁部に6箇所で内面より瘤状に盛り上げ、その盛り上がり間に三叉状の彫込みを施す。

2類（図版44の5～7，45の1）　無文で、5～7は口唇部に半隆起線文を横走させて1条の沈線を引く。

C（図版42の6，44の2～4）　6は半隆起線文で渦巻文を施すと思われる。2は口縁部から体部にかけて円形の粘土帯を貼る。なお3・4にも粘土帯が見られ弧状を描く。

D（図版43の1，45の2）　1は半隆起線文を、2は口唇部に半隆起線文を横走させ1条の沈線を引く。

E（図版46の1～4）　口唇部に半隆起線文を横走させて1条の沈線を引く。

有孔鍔付・鍔付土器（図版47の1～5）1は突起を、2・3は橋状把手を頸部に4箇所、5には眼鏡状突起が1箇所付く。1は沈線区画内と突起にクシ状工具で刺突を施す。2は隆帯区画内と胴部に格子目状に沈線を引く。3は縄文地に橋状把手の下から隆帯を胴部にはわせ、先端が三叉状に分かれ、両棲類の足をモチーフしたものと思われる。4・5は頸部に隆帯を1条巡らす。文様は沈線で区画文を描き、5には区画内に三叉文が入る。

粗製土器（図版38～40）図版40の8～12は無文、同7はクシ状工具による条痕文、同6は撚糸文で、それ以外は縄文が施される。器種には図版39の10～12、40の9が台付鉢で、他は深鉢である。深鉢は**A**，頸部で「く」の字状に外反（図版38の1～7，39の3～6，40の6～8）。**B**，口縁部までくびれがなく外反（図版38の8～10，39の2・9）。**C**，口縁部が内湾（図版39の8）。**D**，口縁部が直立（図版38の7，39の1）。**E**，頸部でくびれ口縁部が内面に弧を描いて外反（図版39の7）がある。Aの図版38の1～4には頸部に縄文が押圧される。

その他（図版47の6～11）搬入品と思われるものを一括した。6・7は浅鉢で口縁部の縄文地に、6は突起間を弧状の隆帯で結ぶ。7は隆帯で渦巻文を施す。8は大小の突起を6箇所配し、個々の突起を口唇部に引いた沈線で結び、2箇所の大きな突起の上部を渦巻状としている。胴部には縄文地に沈線で区画文を施す。9は頸部に交互刺突を施し、胴部には隆帯区画内に沈線を縦に引く。10は口縁部を無文とし、胴部に隆帯と沈線が縦走する。また胎土には雲母と角閃石を多量に含む。11は無文で、1箇所にだけ山形の突起を付け、突起の内面に円形の張付文を施す。これらの土器は6～8がc系統、9・10がa系統の土器と考えられる。（狩野）

注①　搬入品と考えられる土器には、a，曽利式（唐草文）系統、b，新潟県上越地方から長野県の北信地方にかけて分布する中期中葉の後半から前後の土器［寺崎他1990］の系統、c，大木8bないしその影響を強く受けた新潟県地方の土器の系統があると考えられる。以上搬入品と考えられる土器については記述で、a系統・b系統・c系統として記す。

3　穴

出土土器は、整理箱約250箱を数える。何れも小・中片で復原できる個体は少ない。また、穴は中期から晩期に至る遺物包含層を掘り作られており、各時期ものが混在して見られる。そのため穴の時期を特定することは極めて難しい状況となっている。そこで、土器は時期の判別がつきやすい有文の物を中心として写真で示し一部の破片は図化をおこなった。なお出土穴番号は、表１～６に示した。今回掲載した土器は、総数1,213個の穴うち622個分で約半数にあたる。

出土状況　土器は、単一時期を示す例は少なく、多くは大小の破片が複数の時期を示す混在状態である。しかし、中期では比較的単純な出土状況を示す第39、143、149、235、573、711、714、729、731、794、945号穴などがある。また、後期前葉では第144、222、231、248、824、845、856、865、1117、1167号穴などが比較的単純な様相を示している。穴出土の土器は後期では、前～中葉の土器が比較的多くの覆土から検出される。後葉から晩期かけては比較的大型の破片が覆土内から出土している。晩期中葉では、小型破片がかなり多くの覆土にみられ遺跡内穴群の作られた時期を示しているのかもしれない。

遺物の接合及び同一個体　２者間の接合、同一個体の検出例は143-170（写図84-３、685-29）、546-556（写図89-１、５、29）、625-631（写図91-30、92-17）、922-1009、1102-1106（写図41-40）、1222-2017（写図41-11、20）、1306-1307（写図45-45）の６例。また、複数の穴との共有関係を示す例は４例で282-277-275（写図78-40、43・79-16）535-536-538-1148（図版76の２）、694-784-788（図版249の11）、925-928-953-965（図版68の３）などである。時期別に見ると中期３・後期４・晩期３例である。検出例の多くは、約４ｍ程の範囲の広がりを示すが、1222-2017例で約18ｍ、143-170例で約10ｍ、538-1148例で約40ｍの移動が認められる。しかし、出土状況をみるとこのような関係を持つ穴が必ずしも同時性を持つとは判断できない。接合関係　535・925の２例は中破片が覆土内から出土し互いが複数の破片と接合するもので他の例とは異なる。

中期の土器（第26図１～８）　第945・794・729号穴からは、鍔付土器が出土している。５は、小型で４単位のブリッチ状の隆帯がつけられる。７は、胴張りで５同様の隆帯がつけられる有孔鍔付き土器。中期中葉。

８は、胴部に渦巻き状の文様を半肉彫り状に施し、花弁状に飾る隆帯を巡らす。作りは丁寧で、口縁部内面と外面に鮮やかな赤彩痕を残す。穴内に正位で潰れた状態で出土（遺構編図版46の３）。中期後葉。

１、４は小さく緩い突起が付けられる深鉢。中期後葉。３は、波状口縁の深鉢。頸部に３状の沈線を施し、胴部は縦縄文。中期末葉。２は、台付き土器の器台部分。交互に三角と円形の透かしを設ける。中期中葉。６は、手ずくねの小型土器。

埋甕　（遺構編図版19・44）５箇所検出されている。復元できた物は10～12である。10は、複節の縄文を縦に施す。中期中葉。11は、底部を穿孔した例で中期中葉。中から拳大のヒスイ原石が出土している。12は、口縁部欠損の埋甕。胴部に縦縄文を施し、底部付近は同一原体で羽状縄文とする。このような施文方法は、後期後半に多くみられる。また、底部は穿孔される。遺構編では、中期と報告しているが修正しておく。第1361号穴出土の９も同様の特徴を持っており後期後葉。

後・晩期の穴出土土器は、写真図版71～124に示すように混在状態でありここでは個別にはふれず第Ⅲ章土器各説で触れることとする。　（酒井）

Ⅲ　土器各説

1　早・前期

(1)早期（図版88の１）

１点出土。平行沈線間にゆるい波状沈線を引く。色調は茶褐色で、胎土及び焼成は良く、早期中頃の田戸上層式系統の土器である。隣接する馬場山Ｄ遺跡で比較的まとまった資料が出土している（富山県教委1987）。

(2)前期（図版88の２～12）

２は爪形文を横列に施し、３は平行沈線間に半載竹管を縦に押し当ててコンパス文を施す。胎土及び焼成は良好である。時期は細片のため断定できないが、中葉の朝日Ｃ式と思われる。４は羽状縄文。５は数条の沈線で方形区画を描き、各区画の交点に「Ｓ」字状の沈線を入れる。この４・５は即断できないが、共に中葉に位置すると思われる。７～11は縄文地または無文地に細い粘土紐を貼るか、あるいはその粘土紐上に細半載竹管文を施す。また12は口縁部に鋸歯状印刻文を施文し、後葉の福浦上層式に比定できる。

2　中　　期

(1)前葉（図版48・88～92）

土器の出土量及び復元できる個体は少ない。器種は深鉢と浅鉢がある。深鉢は文様で１類，半載竹管文系。２類，連続刺突文系。３類，縄文ないし撚糸文系に分類する。また１類の口縁部は、Ａ，キャリパー状になる。Ｂ，頸部で外反し、緩く湾曲して立上る。Ｃ，緩く外反ないし、ほぼ直立に立上るに３分類できる。

１類Ａ（図版88の16・19～22・28，89の５・35）　文様は口縁部に半隆起線文を平行に引き、その間に蓮華文を施す。28は縦位の平行沈線を一方向から三角状に抉り取る蓮華状文で、手法的に古い様相を示す。16は波状口縁で、波頂部内面に円形の突起を付す。

Ｂ（図版48の１，88の13～15・17・18・23～27・29～38，89の１～４・８～10・28・29，90の１～７・９）　口縁部に隆帯もしくは半隆起線文で、横位に区画して文様帯としている。この隆帯や半隆起線文の上は爪形文を施す例が多い。図版88の15は横位の文様帯を無文帯としている。また図版48の１、89の２・９・10、90の２・３は横位無文帯の上下の縁を連続的に刻む。図版88の13は口縁部に「し」の字状の突起が付される。図版88の17・27・30、90の２・６は緩い波状口縁で、6以外は波頂部外面に円形の突起が付される。

Ｃ（図版89の６・７・11～27・30～34，90の19）　口唇部は肥厚し、その下に蓮華文を施文するものが多いが、６・11・14は格子目文が施される。13・15・17は口唇部に半円状の突起が付く。12は半隆起線文を平行に引き区画し、蓮華文と縄文を施す。

２類（図版92の35～37・39・40）　細片で文様構成等は不明であるが、36・37・39・40は口縁部に隆帯で半円状ないし三角状に区画し、その基部を連続刺突する。35は隆帯にそって連続刺突文を二重に施す。

３類　縄文系としては図版48の３・４、92の12～17がある。３・４・16・17は口縁上部を部分的に肥厚または粘土紐を貼り、縄文を縦位に押圧する。15は縦方向の羽状縄文を施文する。撚糸文系は図版92の18～23がある。撚糸文はすべて縦方向の木目状撚糸文で、18・19は頸部に１条の爪形文を施した半隆起線文が巡る。

浅鉢（図版92の24～32）は口唇部の形態と口縁部から体部への屈曲で浅鉢と考えた。口唇部は全体的に幅広で、24・26～28・30・32のように口唇部へ沈線を引くものは、中葉前半の浅鉢へ系譜がたどれる資料と思われる。文様は半隆起線文の区画内に蓮華文を施すものが多く、34は同区画内を無文帯とし上下縁を連続に刻む。

その他の土器（図版48の２・５，92の38・41～43）　２は４単位の波状口縁で、波頂部内面に玉抱き三叉文を施す。口縁部には縦に短い半隆起線文を、頸部に隆帯を挟んで半隆起線文を平行に引き突起を配す。５は台付鉢で半隆起線文による区画内を無文帯とし、上段の縁を連続的に刻み三叉文を彫込む。38・42は押圧縄文を持つもので搬入品と思われる。38は縄文地に押圧縄文を施し、42は隆帯と押圧縄文を組み合わせる。この二個体は細片で断定できないが、大木７式［丹波1989］に類似している。41・43は類例がなくここに版組した。41は弧状に沈線と隆帯で区画し、その中を沈線で埋める。43は無文地に隆帯を配し、その基部を連続刺突文する。

以上前葉の土器群の時期については、一部に古い様相を残しているが、全体として新しい様相がうかがえる事より、新保・新崎式土器様式の第Ⅵから Ⅶ様式と考えられる。

(2)中葉（図版49～64，93～106，107の１～22）

遺構及び土器集中区以外から出土したものをここで扱う。時期的には多い少ないはあるが中葉のほとんどの時期のものがあり、各器種ごとに説明を加える。土器の器種には深鉢・台付鉢・浅鉢・有孔鍔付土器がある。

深鉢の口縁部はA，平縁。B，平縁に突起が付く。C，波状に分類できる。

A（図版49の２・４～７，50）　土器集中区と一部重複するが文様より１～４類に分類した。

１類（図版49の２・７）　隆帯と半隆起線文ないし沈線で構成。口縁部には隆帯を１条巡らし、渦巻く隆帯が口縁部から胴部に見られる。２は小型品で文様を２単位で構成し、表面に赤色顔料の痕跡が残る。７は様相的に新しく、半隆起線文はなく沈線となる。隆帯上は２がヘラ状工具で刻み、７はクシ状工具で刺突となる。

２類（図版49の４）　隆帯と半隆起線文で構成するが、隆帯は胴上部に１条巡らし、隆帯に接してW状の隆帯が配される。隆帯上はヘラ状工具で刻む。

３類（図版49の５・６，50の２）　隆帯は無く半隆起線文で構成する。２は口縁部の形状と胴部に膨らみのない器形が４類の１と非常に類似している。文様は半隆起線文の区画内にクシ状工具で刺突を施す。

４類（図版50の１・２）　口縁部に１条の隆帯を巡らし、その下に隆帯を頸部まで配するが、隆帯は渦巻状にならない。１は隆帯間及び胴部に半隆起線文で埋め、半隆起線文の区画内に半載竹管によると思われる刻みを充填する。５は隆帯間は沈線文を施し、胴部には縄文が施される。

B（図版49の１・３）　文様は隆帯と半隆起線文で構成する。１は５箇所に山形状の突起を付け、突起の内面に円形の貼付文と三叉状の彫込みを施す。また口縁部には半隆起線文の空白部に三叉文を彫込む。文様帯は口縁部と胴部に分け、A＋Bの２単位で文様構成する。３は４箇所に環状の突起を付け、突起の内外面には円形の穴に対応して三叉文が彫込まれる。文様は２単位で構成すると思われる。１・３とも隆帯上は爪形文が施される。

C（図版51の１～６）　１～３は膨らみをもつ胴部が胴下半部でくびれる。波頂部には１・３は眼鏡状把手、２は円形の穴が付く。文様は１～３が隆帯と半隆起線文で、４・５が隆帯は無く半隆起線文だけで、６が隆帯と沈線文で構成する。隆帯上は１～３が爪形文を、６はクシ状工具で刺突し沈線区画内も同工具で刺突する。

台付鉢（図版52～55）は器形を口縁部の上面から見て、A，円形。B，楕円形に分類できる。

A（図版52・53）　第20号住居跡と同様に文様で、１～３類に分類した。

１類（図版52の１，図版53の６，図版55の１・２）　隆帯と半隆起線文で構成し、隆帯が口縁部から胴部間に見られる。図版52の１は胴部の突起を付した箇所は、内面より瘤状に盛り上げている。この盛り上がりは突起と同数になると思われ８箇所に配される。６は波状口縁で器形より台付鉢と考えた。隆帯の接点には眼鏡状突起と小突起が付く。図版55の１・２は口縁部に隆帯を１条巡らし、その下に隆帯をもつ渦巻文が施される。隆帯上は図版52の１、55の１・２がヘラ状工具で刻み、図版53の６には爪形文が施される。

２類（図版52の２・３，53の１～３・５，55の４）　隆帯と半隆起線文で構成し、胴上部に隆帯が１条巡る。図版52

の2は隆帯の上部に突起、下に隆帯をもつ渦巻文が4箇所配される。図版52の3、53の1・5は隆帯上部にW状の隆帯が付く。図版53の5は隆帯と口縁部にクシ状工具で刺突される。その他は隆帯上をヘラ状工具で刻む。

3類（図版53の4）　半隆起線文で構成。器形は全体に丸みをおび、胴下半部には半隆起線文を縦に引く。

B（図版54）　舟形土器で、1～3は口縁部から胴部に渦巻状ないし「U」字状の文様を隆帯と半隆起線文で構成する。4は沈線で縄文地に渦巻文を施す。口縁部は1・2が平縁に突起を付し、3・4は波状となる。

その他深鉢・台付鉢の破片（図版93～97，107の1～22）は量的に多いが、破片のため全体の文様構成等は不明であり、個々の破片を取り上げて分類するのはほとんど不可能である。そのためここでは詳細に記述しないが、その中で図版94の10～26は胴部の内面より瘤状に盛り上げる。その盛り上がりの外面には隆帯で渦巻文を施す例が多い。器種には台付鉢と浅鉢（16，図版99の13）があり、屈曲をもつ器種に施すと思われ、深鉢には例を見ない。なお県内の遺跡では庄川町松原遺跡［橋本他1975］で1例ある。図版107の1～22は中葉の後半でも新しい様相で、幅広の半載竹管ないし沈線を用い、隆帯上もクシ状工具で刺突、ヘラ状工具で刻みとなる。

浅鉢（図版60～62）　土器集中区と同様に口縁部の形状より5分類する。

A（図版60の2・4・61の2）　「く」の字状に内傾する。文様は口縁部に半隆起線文で施す。2・4は橋状把手を付け、その上の口唇部を肥厚させ玉抱き三叉文を施す。図版61の2は半隆起線文で区画文を施す。

B（図版60の3・5・6，61の3・4）　内湾する。文様は口縁部に半隆起線文のみ、粘土帯を貼る、隆帯を付けるがある。図版60の3は半隆起線文を3条横走させ、口唇部に沈線が1条巡るが、玉抱き三叉文は無い。6は円形と菱形の粘土帯を4箇所に交互に貼る。図版61の3は口唇部を1箇所突起状にし、その下に「く」の字状の隆帯を付す。図版61の4は無文である。

C（図版60の5，61の1）　緩く立上りほぼ直立する。口縁部から体部に円形の粘土帯を4箇所貼る。

D（図版60の1）　「く」の字状に立上りほぼ直立する。文様は口縁部に隆帯と半隆起線文で構成し、4箇所で隆帯による渦巻文を付し、その上の口唇部を肥厚させ玉抱き三叉文を彫込む。隆帯上は爪形文を施す。

E（図版61の5・6，62の1～8）　緩く湾曲しながら開く。図版61の5・6，62の1～3・7・8は口唇部に半隆起線文を横走りさせ1条の沈線を引く。なお、7・8は全面に縄文が施される。

その他浅鉢の破片（図版98～100）で、図版98は隆帯による渦巻文や橋状把手の上に玉抱き三叉文を施すが、図版100の9～11・13は半隆起線文・無文のものに玉抱き三叉文を施す。図版100の17～31は口縁部はDの形状をとるものか多く、「の」の字状の渦巻文、沈線区画内にクシ状工具で刺突を施し、中葉の後半でも新しい様相をもつものである。同32は橋状把手をもつもので中葉より後葉と考えられる。

有孔鍔付土器（図版62の9～11）9は弧状の、10は弧状と垂下する隆帯を交互に施す。11は半隆起線文の区画内に縄文を充填し、器形と文様より有孔鍔付土器と推定する。

粗製土器（図版56～59）中葉に属す可能性があるもので、図版59の9～12は無文、同6はクシ状工具による条痕文、図版58の6は撚糸文で、それ以外は縄文を施す。なお図版56の2、59の3には縄文が押圧される。器種は図版59の1～6が台付鉢で、他は深鉢である。深鉢は**A**，頸部で「く」の字状に外反（図版56の1・4～8，57の1・3・4・6・7，58の6，59の12）。**B**，口縁部までくびれがなく外反（図版56の2・3，図版59の11）。**C**，口縁部が内湾（図版59の9）。**D**，口縁部が直立（図版57の5，58の4）。**E**，頸部でくびれ口縁部が内面に弧を描いて外反（図版58の2・3）。**F**，口縁部が「く」の字状に折れ直立（図版58の5）がある。

その他（図版63・64，101～106）搬入品と思われるものを一括した。図版63の1は浅鉢で口縁部の縄文地に隆帯で渦巻文を施す。同2はキャリパー形の器形で、口縁部に隆帯による渦巻文と剣先文を施し、頸部を無文帯としている。図版64の1は波状口縁の波頂部を肥厚させて、渦巻文を沈線で施す。胴部は2・1とも縄文地に縦の沈線で区画し、

区画内に沈線で渦巻文・剣先文を施す。図版63の３・64の２は口唇部の４箇所に突起を付け、その突起の下にクランク状の隆帯を施す。口縁部の空白部には沈線を充填する。図版64の３は縄文地に直線と波状の沈線を交互に施文する。これらの土器は図版63の１・２、64の１がｃ系統、図版63の３、64の２がｂ系統と思われる。図版64の３は施文の特徴より加曽利Ｅ式とやや類似するが、口縁部を欠損しており断定できない。

図版101～106は破片で系統的にａ・ｂ・ｃがある。その中に火焔型土器はほとんど無く、図版106の13の突起１点が鶏頭冠把手に類似している。図版101・102の３～26・103は文様の空白部に沈線文を充填することより、ａとｂ系統に比定できるものと考える。図版101は胎土に特長が認められ、雲母と角閃石の混入が顕著なものである。文様的に横位交互刺突文をもつのは図版101の13、102の26、103の16・24・25・27・29があり、25・27には沈線内刺突が施される。図版101の７・８は同一個体で半隆起線文の上に粘土紐を貼付ける格子目状隆帯貼付文を施している。図版103の１には「Ｘ」字状の橋状把手が付く。ｃ（図版102の１・２，104～106の１～12）は文様は口縁部に隆帯で波状文・渦巻文・楕円形状の区画する等があり、いずれも隆帯の基部には沈線が引かれる。またそれ以外に波状口縁のものは、波頂部の口唇部ないし口縁部を肥厚させ、その部分に沈線で渦巻文を施す（図版104の１～17，106の９）。図版102の１・２、106の１・２・７は突起・把手の上にも渦巻文を施す。図版102の２、106の12は透かし彫りした橋状把手である。図版106の13～21は口唇部に付く突起で、内外面ともに渦巻文で飾るものが多く、16のように精巧な透かし彫りしたものもある。

(3)後葉（図版65，107の23～28，108～113の１～20）

ここでは後葉を一応３時期に分ける。Ⅰ期は串田新Ⅰ式、Ⅱ期は串田新Ⅱ式、Ⅲ期は岩峅野式に対応する。

Ⅰ期（図版65の１～７，107の23～28，108～110の１～10）

前時期まで主流であった複合口縁は口縁部が外反器形へと変化し、半隆起線文も沈線へと移り変わる。文様は主に口縁部に施され、胴部は縄文施文となる。ただ口縁部から胴部まで残る個体で、図版65の４はクシ状工具による平行沈線を引く、図版109の21は沈線文を施す、図版110の１・２は沈線で楕円状区画内に縄文を施す、図版110の５は隆帯の縦区画内に列点を施し、他の無文帯部に沈線文を施す個体も若干ではあるが見られる。

文様はこの期の特徴である貝殻腹縁文は少なく、図版65の３、108の28・29、109の３・７・８、110の１などの隆帯上や沈線区画内に見られる。その反面隆帯上や沈線区画内には、クシ状工具による刺突と、ヘラ状工具で刻みを施す個体が多い。また口縁部に１ないし２個の把手を付ける個体も、図版109の26、110の１・５と少ない。

文様は概略的に二種類あり、ａ，口縁に平行する沈線を数条引き巡らし、その沈線を何箇所かで切り、間に縦の短線を１～２本引くことで工字状文とするもので、主に平縁の土器に施される。ｂ，口縁に平行する隆帯間に縦の沈線を充填するもので、主に波状口縁の土器に施される。

Ⅱ期（図版65の８～13，110の11～35，111）

Ⅰ期で多用された工字状文は見られず、隆帯上も貝殻腹縁とクシ状工具による刺突はなく、縄文施文、棒状工具による刺突、または無文のままとなる。文様は口縁部に主に施され、胴部はⅠ期同様に縄文施文となるものが多いが、縦の隆帯で構成するものは縄文地ないし無文、葉脈状文を施すものは葉脈状文で全周をうめるものが多い。

口縁部の文様は図版110の12～26のように沈線ないし隆帯区画内に、横「ハ」の字状文、葉脈状文を施す。図版111の１～６・15は隆帯ないし沈線区画内、または区画せずに縦の短線を引く。図版111の７～９・11～14・16～20は隆帯と棒状工具による刺突を組合せる。図版65の９～13、111の35～42は無施文の隆帯、同22・23・25は棒ないしヘラ状工具による刺突の隆帯、同30～32は縄文施文の隆帯を施す。

口縁部は図版65の９、111の８のように波状口縁の波頂部が「Ｕ」字状に落込み、この期の特徴とするが、図版65の10、111の９のように台形や山形の波状口縁、図版111の10・25・28の平縁の一端を内面に押す手法が見られる。こ

の口縁端部を押す手法はⅢ期へ受け継がれており、Ⅱ期からⅢ期への変遷を考える上で重要である。

Ⅲ期（図版112，113の１～20）

器形は胴部がやや張り、頸部で少しくびれて口縁部が緩く外反する。文様はａ，沈線文系（図版112の１～37）とｂ，突線文系（図版112の38～41，113の１～20・37）がある。ａは口縁部に幅広の沈線を主体とした文様と、列点文と組合せた文様で構成し、胴部には節の扁平な縦縄文を施す例が多い。文様は横走する沈線間に縦及び山形の沈線を入れる（図版112の１～６）。横走する数条の沈線を引く（図版112の10・11・17・19）、またはその沈線間に列点文を入れる（図版112の９・12～15・20・21・23～25）がある。なお横走する沈線を引くものには図版112の27・29～36のように「Ｓ」字状の沈線文が施される。ｂは突線文だけで構成するものと（図版112の38～41，113の１～14・37）、突線文と葉脈状文及び縦走する細沈線を組合せてるものがある（図版113の15～20）。

図版112の７・21は口縁端部の一端を内面に押す手法で、Ⅱ期からの引継ぎと言える。同24・25・34・35は押引き状に列点をつらね、17・19は横走する沈線に押引き痕が残り、次形式への流れを示している。

その他後葉に属すと思われるものに図版65の14・15の橋状把手を持つ浅鉢と、図版67の４の釣手土器がある。

3　後　　期

(1)前葉（図版66，67の１～３・５，113の21～36，114～127）

土器の出土量は多いが、復元できる個体は少ない。前葉は現在、気屋１ａ式、気屋１ｂ式、気屋２式に区分されている［米沢1989］。気屋式は前時期まで口縁部の器形が外反形態であったものが、頸部でくびれて口縁部が緩く内湾する器形へと変化する。また文様は口縁部や頸部に施す三角形刺突文を特徴としている。ここでは破片のため全体の文様構成が不明のため時期と文様で分類した。

第１群（図版113の21～23・25～36，114，126の35～42）　気屋１ａ式及び前段階に位置すると思われるもの。

１類（図版113の21・25・26・34）　蛇行沈線を施す。21は口縁部が緩やかに内湾する。

２類（図版113の27・28・30～33・35）　波状沈線を施す。27は横走する沈線間に、その他は縦位に波状沈線を施文する。28は葉脈状文と、31～33・35は縦走する沈線と組み合わせる。

３類（図版113の22・23・36）　沈線と刺突文を組合せる。22は波状口縁で波頂部を内面に押し、口縁部の沈線区画内に渦巻文と刺突文を施す。23は沈線に添って、36は縦走する沈線間に刺突文を施す。

４類（図版113の29）　縦走する沈線と「ハ」の字状の沈線を組合せる。

５類（図版114）　口縁部に施す横位の波状沈線文を主文様とし、「Ｊ」字状、渦巻文、長方形区画、平行線等を沈線で施すものもある。口縁部の形態は平縁が主で、19・38が波状口縁となる。器形は「く」の字状か緩く内湾するものが多く、１～４・13は緩く外反する。19・30・32・36・38～40には沈線内に押引き痕が残る。

６類（図版126の35～42）　胴部に特有の刺突文を横方向に丁寧に施す。また35・41は口縁部に橋状把手をもち、三十稲場式の古段階と考える。第33号住居跡の炉内から本群２類と伴出、第１群に平行するものと考える。

第２群（図版115～124，125の28～46，126の１～34）気屋Ⅰｂ式に比定でき、三角形刺突文を施す土器群を中心に、堀之内Ⅰ・Ⅱ式系統の新潟県や長野県等よりの土器群の影響が見られ、複雑な様相がうかがえる。また本土器群は数段階の変遷を考えなければならないが、器形及び文様構成等に不明な点が多く細分は難しい。

１類（図版115の26）　口縁部に隆帯を貼り、頸部に波状沈線文を巡らす。口縁部は外反する。

２類（図版115の１～３・５・25）　三角形刺突文で構成する。口縁部に数条の三角形刺突文を巡らせ、胴部には節が扁平な縦縄文が施される。器形は口縁部が「く」字状に外反するものが多い。25は「く」字状に内湾する。５・25は波状口縁の波頂部に指頭圧痕をもつ。２・３は口唇部を棒状工具で鋸歯状に刻む。

3類（図版115の6・8）　口縁部に斜縄文を、その下は三角形刺突文を数条巡らす。口縁部は外反する。

4類（図版115の4・7・12・13・15・19・21～23・27～29，116の6～8・10）　三角形刺突文を頸部に数条巡らし、口縁部に沈線文と末端刺突文ないし刺突文を施すものが多い。図版115の7・22は口縁部に三角形刺突文を1条巡らし、頸部には3条の沈線を横走させ、22は刺突したあとに沈線を引く。4・12・15・19・6・10は口唇部を棒状工具で刻み。また8は口唇部に縄文を施す。4・12・15・19・8は沈線の下側を刻む。

5類（図版116の2・3・5）　口縁部や頸部に押引沈線を施す。2は頸部に三角形刺突文が施される。

6類（図版115の11・14・16・20，116の9）　口縁部の沈線内に三角形刺突文を施す。胴部は幾何学的な沈線文が施される。口縁部は内湾する。

7類（図版115の9・10・17～19・24，116の1・4・11～25・27～31，117の1・2・5・8～30，123の3・10）　口縁部ないし胴部の文様を主に沈線文を主体として構成する。沈線の端や交点には刺突が加えられるものが多い。図版115の9・17・18・24、117の11は口唇部を刻み、同5・10・12は口唇部を「ハ」の字状に連続して刻む。図版115の9、116の11・13・17・19・21、117の1・2は沈線内を刺突する。

8類（図版113の24，116の26，117の6・7，118の30，123の27）　口縁部外面が肥厚し、口縁部の沈線区画内または外側に円形刺突列を施す。頸部は沈線を数条巡らし、胴部は6・7が幾何学文、30が縄文を施す。

9類（図版117の3・4，123の2・18・19）　口縁部に縦または斜めの短線を引き、胴部にも同様の沈線を引くと思われる。3・4・2は口縁部が肥厚する。

10類（図版67の1，118の1～21）　1・8以外は頸部に2～3条の沈線を巡らす。口縁部に斜縄文を胴部には18が無文で、他は縦縄文が施される。2～4・7・8・10～12・15・16・20・21は口唇部に縄文を施す。口縁部は緩く外反するものが多く、1・4・6はやや内湾気味となる。

11類（図版118の22～26）　頸部に沈線を巡らし、口縁部に縦ないし斜めの短線を引く。

12類（図版118の27～29）　口縁部の縄文地に円形刺突を施す。28・29は頸部に沈線を巡らす。

13類（図版118の31，119の1～24・26～28・30）　口縁部外面が肥厚し、口縁部は緩く外反する。口縁部には渦巻状沈線、弧線、同心円文、横位沈線等を施し、頸部に数条の沈線を巡らす。胴部は縦縄文地に沈線文を施すものと、縦縄文となる例がある。2・4・7・8・10・14・15・18・21・23・28は口唇部に縄文を施す。

14類（図版67の2，119の29～31・38，120の1～3・5・6・9～11・14・30，123の25・26，125の44，126の23～34）器形は頸部で外反し口縁部が「く」の字状に立上るか、内傾する。波状口縁の波頂部に渦巻状文、同心円文、円形文、弧線等を施し、各波頂部を横位沈線で結ぶ、この横位沈線の端には末端刺突が加えられるものが多い。また18・21～23・25・26・28～30には口縁部の内面にも施される。頸部は無文とし、17・19・21・22・24～29には縦ないし斜めに刻みを施した隆帯が垂下する。

15類（図版120の12，123の6・11・27）　口縁部の形態は14類と類似し、口縁部に横位沈線を巡らし、円形文を施すものもある。横位沈線下には縦の沈線を垂下させて、円形刺突文を施す。

16類（図版120の13，123の4・5・20・21）　13・4・5は14類と口縁部の形態と類似する。口縁部に横位沈線を巡らし、その下には縄文地に沈線を縦または斜めに引く。

17類（図版66，120の4・8，121の1～20）　第21号住居跡の10類と同類で、器形は図版66の鉢や浅鉢と同様なものと思われ、大きな波状口縁で、口縁部が「く」の字状に折れ外反気味に立上る。口縁部には沈線と円形刺突文を組合せて施し、波頂部の内面にも施される。胴部は無文もしくは図版66の1のように無文地に沈線文を施す。

18類（図版122）　器形は頸部でやや外反し、口縁部が緩く内湾する。文様は独特で口縁部に縦の隆帯を全周に貼り巡らし、隆帯が口唇部よりとび出て鋸歯状となる例が多い。隆帯上は縦の沈線を引き、沈線だけのもの、その内に

三角形刺突文や、端に円形刺突文を施すものがある。頸部には沈線を数条巡らす例が多く、30には三角形刺突文が施される。また胴部は半円状や縦の沈線を引くもの、縦縄文を施すもの（23）がある。

19類（図版123の１）　口縁にそう横位沈線と、波頂部下の沈線端部に末端刺突と「Ｃ」字状の沈線を施す。

20類（図版123の７・９）　器形は緩く外反する。口縁部の隆帯を刺突し、７には円形刺突文が施される。

21類（図版123の14）　丸く内湾する口縁部に沈線を１条巡らし、その下に斜行する沈線をつらねる。

22類（図版123の16・17・22・23）　口縁部は緩く外反し、16・17は無文地に22・23は縄文地に曲線的な沈線文を施す。17・23は波状口縁となる。また16は口縁部を棒状工具で刻む。

23類（図版123の28・31）　波状口縁で波頂部に円形の孔を穿つ。28は口縁部に末端刺突した横位沈線を巡らし、31は口縁端部を刺突する。

24類（図版124，125の46）　磨消縄文ないし縄文地に曲線的な沈線文を施す。１は鉢、２～４は浅鉢と思われる。３～５・７～13には円形刺突文が施される。26・27には口縁部に円形の孔が見られる。

25類（図版67の３，125の28～40，126の21）　接合例はないが14類の頸部になると思われる。29・37は頸部に巡る隆帯はなく、「８」の字状張付文を中心に半円状の多条沈線を施す。その他は１ないし２条の刺突した隆帯に「８」の字状張付文を渡す。また33・35・39・40には「８」の字状張付文の上に、刺突した隆帯が１ないし２条口縁部へ延びる。28は口縁部内面の端部を刻む。23・28は胴部に三角形状の幾何学文に縄文を充填する。

26類（図版125の41・42，126の14）　本来14のように内傾する器形と思われる。口縁部に１条の隆帯を巡らし、その隆帯に直交する隆帯を胴部に垂下させて区画する。区画内は41・42が縄文地、14が無文地に渦巻状文を施す。器種は器形と文様より注口土器と考える。また図版126の９～11・15～19もその可能性がある。

27類（図版121の21～24）　注口土器で、沈線と刺突文を施す。24は注口土器の把手と思われる。

28類（図版121の26）　蓋で１点のみ確認。体部へ口縁部にそつて３条の沈線と半円状の沈線を施す。

29類（図版67の５，121の27～29）　釣手土器で、５は両面に３箇所の円形の孔と沈線文を施し、沈線の交点に末端刺突する。27・29は同一個体と思われ、刺突文と三角形刺突文が施される。

第３群（図版123の８・30，125の１～27・45・47・48，127）　気屋Ⅱ式ないしその前後に位置する土器群と、伴出関係は未確認だが堀之内Ⅱ式系の土器群で構成すると考えられている［米沢1986］。堀之内Ⅱ式系の土器は口縁端部を「く」の字状に内傾するものが多く、節の細かいＬないしＲＬの縄文を施す。また器厚も薄い。

１類（図版127）　破片で器形をうかがえる個体はないが、胴部が張り頸部でややくびれて口縁部が外反する。縄文地に口縁部には数条の横位沈線を巡らせ、その下に三角形状の幾何学文、渦巻状文、円形文、曲線文等を組合せて施すものと思われる。また頸部から胴部には数条の横位沈線を巡らして区画し、21には胴部に縦縄文が施される。石川県では口縁部には節の細かい斜縄文が、胴部には節の扁平な縦縄文を使い分けて施すものが多いと考えられているが、本遺跡においては第21号住居跡の８類以外無く地域的な様相の相違かとも思われるが、資料的に少なく断定できない。口縁部の破片では４・６～12・15・16の口唇部に縄文が施される。

２類（図版123の８，125の１・３～８・10・11～13・17）　口縁部に刺突した隆帯を１から数条巡らし、その上に「８」の字状張付文を付す。１・４は器面の内外面をよく研磨しており、薄手である。１の口縁部内面には２条の横位沈線が引かれる。胴部には１・６・11・13が横位沈線区画、７が三角形状の区画に縄文を充填する。

３類（図版125の２・９）　第２群の14類に類似するが器厚は薄く、また口縁部の文様帯も狭い。

４類（図版123の30，125の15～16・18・19・20～27・45）　口縁部に横位沈線で区画し、胴部に三角形状の幾何学的な文様を施し縄文を充填する。30・19は波状口縁となり、30は口唇部に縄文を施す。（狩野）

(2) 中葉

条線文を主文様とする土器群と東日本に広く分布する加曽利B式類似の土器群がみられ、これらに西日本的要素の強い土器がわずかに伴う北陸の地域性をみせている。

1類（図版69の1）　縄文地に沈線を施し、入り組む連弧文を垂下させる深鉢。文様は5単位で口縁端部に縄文を施す。胴下半部は荒い縦縄文か。口縁部は一部残るが緩いカーブを描いており、あるいは波状となるかもしれない。この類は一点だけだが図版127の土器から系譜がたどれる。

2類（図版68の3・128の1～28）沈線により区画されない条線文を主文様とする土器群。

a 1（図版68の3・128の1～18）胴上部に条線文を直線、あるいは曲線的に施し、下半部は縦縄文となる深鉢器形は、68の3のように胴部がくびれ口縁部が開く平縁と波状口縁状となる例がある。

3類（図版68の2・69の3～5・129～133・137）2条の沈線間に「～」状に刻みや条線文を施す土器で、波状や平縁、小型深鉢がある。

a 1（129の1～25）縄文を地文として沈線間を「～」状に刻み、円、菱形、鍵手状の文様を施す。内面には、1～2条の沈線を巡らせる例が多いが、2，3のように文様を施す例もある。平縁の7，8と小波状の3～6がある。

a 2（図版69の3，5・129の26～35・130～132の1～24）「～」状の刻みと条線文の深鉢で69の3のような大型の平縁、130の21、22の突起状の波状口縁を持つ例がある。129の26～35，130の1～5は、「～」状文と横条線、130の6～19は、鍵手状の条線文。69の5・130の20～35・131の1～29は、波状・平縁で「～」状文を施す例。131の30～50・132の1～24・68の2・96の3は、菱形や円形、綾杉状文を施す例。

4類（図版133）は、大きな波状口縁深鉢で「～」状・縦刻みと条線文を組み合わせる例で、上記の例とは波頂部内面の文様が1に見られる波状口縁中間突起、口縁部への荒い刻みなど異なった様相がうかがえる。

5類（図版69の4・128の19～29・132の25～55）図版69の4に代表される小型の深鉢で小波状または平縁となる。細い沈線または条線で渦巻き、鍵手状、方形区画を描くものや、細かい条線で流水文風の文様を描く例（128の21，22）や「～」状の文様を沈線間に施す例（132の47～55）などがある。比較的堀之内Ⅱ式の要素の強い土器である。

6類（図版75の2，3，4・134～136・140）縄文を地文とした数条の沈線を巡らせ、沈線間を弧線、「し」、「の」状の文様などで区画する波状口縁の深鉢で、内面には幅広沈線が2～3条巡る。波頂部は斜めに捻じりあげた突起が付けられ円形刺突文を施す例が多くある。また、波頂部と波頂部の中間には「し」状の突起が付けられる例が多い。

a 1（図版134の10，11，15，17・135の1～13，15～17，19，25）沈線間を弧状文で交互に区切る134の10，11と「し」状に交互に区切る同図15，17がみられる。前者では、左右が対象に区切られる135の3，12や入り組ませる同図6などの変化がある。

a 2（図版134の8，9，13，14，16・135の10）「し」状に片側に区切る例である。あるいは、a 1の中に含めて考えるべきかもしれない。

a 3（図版134の6～8，18～26・140の1，2，4～6）「S」状に区切る例で、弧状の区切りを縦に連続して行う。また、区切り部分に刺突文を施す140の4～6などがみられる。

a 4（図版134の1，3，5・144の45，49，51）羽状、斜行沈線を施す例。図版144例は鉢になるのかもしれない。

a 5（図版135の14，18，21，24）波頂部に同心円文や連弧文を施す例で、a 1、a 2、a 3とした文様を持つ例に共通して施されている。

a 6（図版136の1～14）沈線を施す例で、a 1～a 5を含むと考えられる。

7類（図版136の13～30・137の1～14）外面無文と縄文を施す波状深鉢。内面には、1～2条の幅広沈線が引かれ波頂部は、穿孔または、刺突文が施される。

ａ１（図版136の13～26）外面無文の波状口縁深鉢。

ａ２（図版136の27～30・137の1～14）外面に縄文を施す波状口縁の深鉢。

8類（図版137～142）関東では加曽利Ｂ式細分の試標とされる三突起を持つ深鉢で、在地的要素の少ない土器である。7類と共通した文様構成をする例が多い。図版137の15～22は、５類の波頂部で４単位である。

ａ１（図版137の28，29・138の１，２・142の21，29，33）「の」状の区画文様を波頂部や胴部に施す例で、口縁部は長く「く」状に折れ、「し」状の突起が付けられる図版142の21が特徴的である。

ａ２（図版137の27・138の４，11・139の４，16，32・142の23～28，30，32，33，35）「Ｓ」状の対弧文で区切る例で、ａ１同様の口縁部と突起を持つ。器形は、胴部がくびれる。

ａ３（図版138の13・139の１）入り組文風の渦巻きで区切る例で、13は突起頂部も渦巻文とする。

ａ４（図版138の16・140の8・141の９，10，14～16）胴部に連弧文を施すもので、区画文は短い縦沈線や小さい「の」状文をつける。

ａ５（図版139の25，29，33～35・140の25，27・141の１，３・142の14，15）「し」状の区画文様を施す例。

ａ６（図版139の30、31・141の18～22）入り組文を区画文とするもの。

ａ７（図版137の29・139の3・141の35）列点状に区画文を施す。

ａ８（図版140の19～21）連続する「Ｓ」状文を区画文とする。

ａ９（図版140の22，23）小さな弧線文を連続して施す。

ｂ１（図版139の12～14，17，18）胴部が強くくびれ、口縁部が大きく開く器形で、縦の沈線文を施す。

ｂ２（図版138の21）縦沈線を区画文とする。

その他　文様の組み合わせ、器形はかなり複雑である。また、突起部分についてもかなりのバラエティーがみられる。その外３突起が付く深鉢の口縁部・胴部破片がある。

9類（図版140の11～15，18・142の１～13）２単位か３単位の波状口縁となる深鉢。142図例は中・小型品。

ａ１（図版140の15，18・142の1～15）区画文は「Ｌ」状。内面は数条の沈線を巡らせ、口縁部に連続刺突を施す。

ｂ１（図版140の11）交互に「し」状文を施す外反器形の深鉢。

ｂ２（図版140の12～14）波状か平縁かはっきりしないがまとめておく。12は、斜行沈線と縦列点区画文を施す例。13は、口縁部を綾杉状に刻む例。

10類（図版139の６，10，11・143の６～26）大きく口縁部が外反する鉢で、大きな突起が付けられる。

ａ１（図版139の10・143の６～21，24～26）「Ｌ」状の区画線を施す例。16～26は、突起部分。

ｂ１（図版139の6，11・143の22，23）中実、中空の突起部分で「Ｓ」状に隆帯が外面に付けられる。第2014号穴からも１点出土している。

11類（図版69の２・144・145の１～８）外面無文の浅鉢で内面に沈線文を施す。

ａ１（図版69の２・144の１～21，24～29，33～44）口縁部が小さく内側へ折れる鉢で、内面に連続刺突文を施す例とそうでない例がある。また、「の」状の区画文や鍵手状の文様を描く例がある。

ａ２（図版144の31，32，37）楕円文や細い沈線を施す例。堀之内Ⅱ式か。

ａ３（図版144の22，23，30）大きく口縁部が内側へ折れる鉢。

ｂ１（図版145の１～８）楕円形で２波状となる浅鉢と考えられる。

12類（図版145の９～47）中・小型の鉢で、「の」状・対弧文・弧文・鍵手状・楕円文などで沈線間を区切る手法もつ。口縁部は、内側へ摘み込むように尖がるものと、丸い例がある。

13類（図版145の48～50）いわゆるソロバン玉状の鉢で、連弧文と刺突文が組み合わせ施される。

14類（図版147の14～42・148の39）２～３条の沈線間を縦に区切る手法を持つ深鉢で口縁部が小さく外反する。

ａ１（図版147の14～34・148の15～38）外面の区切り手法は単純で内面に鎖線文などを施す147図例と同様の手法で文様を施文し、内面無文の148図例がある。

ａ２（図版148の10～14）沈線間を細かく刻む例。

ｂ１（図版147の35～42・148の１～９）小波状となる深鉢で、外面の区切り手法は、「川」状、「Ｓ」状、「し」状など変化がある。また、内面波頂部には、円形刺突や弧文が施される。外面無文となるものや縄文を施す例もある。148の26、28は地文を羽状縄文風に施す。

15類（図版70の３・149の1～45）縄文・羽状縄文を主文様とする鉢で後葉のものを一部含む。

ａ１（図版149の１，２，５）半球状の器形の鉢で、弧線文内に、縄文を施し磨く。

ａ２（図版70の３・148の40，43～45・149の３，６～８，11～21）半球状、胴部がくびれて外反する鉢の口縁部で、羽状縄文が施される。

ａ３（図版149の４，22，23）沈線間に交互の縄文を施し羽状縄文とする例。

ｂ１（図版149の３，10，43）細かな羽状縄文を入組だ帯状に施す球状の鉢。

ｃ１（図版149の44，45）「く」状に口縁部が折れ外反する鉢。

その他（図版149の24～42）ａ２の内胴部がくびれる鉢などの破片で、沈線区画の中に羽状縄文施す例と半肉彫り状に盛り上がる26，２や弧状沈線を施す41，42などがある。

16類（図版70の４・146・147の１～14・150）平縁・波状口縁の深鉢で羽状縄文を主文様とする。

ａ１（図版150の２～15，17～31，35，36）大きく緩い波状となる深鉢で４単位となるものは中間突起が付くと考えられる（８～10，12，13，25）。また、沈線間を刻む例とそうでないものがある。中間突起は、小さく「Λ」状に張り付ける25や大きく幅の広い９，12などがあり時間幅をみなければいけないだろう。

ｂ１（図版150の１，６，16，32，33）ａ１同様の器形で平縁の深鉢。

ｃ１（図版147の１～14）胴部にくびれを持たない平縁の深鉢。沈線間を交互に羽状縄文を施し楕円に区切る例や羽状沈線を施す14などがある。

その他（図版146の１～47）ａ・ｂ１の胴部破片をまとめた。１～18は、沈線間を交互に羽状縄文とする例で楕円文を描く例が多くみられる。19～33は、大きな楕円文や入り組文を描く。36～47は、矢羽状沈線文を施す例。

17類（図版148の47，48）トックリ状の形となる有孔土器で２例が出土している。

図版148の46は、表裏羽状縄文の土器口縁部。

(3) 後葉

北陸の後期後半には、井口式［小島1966］・八日市新保式［高堀1964］が設定されている。また、加曽利Ｂ式後半から井口式の間に石川で酒見式［高堀1965］、富山で井口１式がそれぞれ設定され、富山県東部の地域差として小島氏「1976」により羽状縄文の土器群の存在が指摘されてはいるが、十分な見解は示されていない。土器群の様相は、在地的な土器に東北・関東の東日本の土器や東海・近畿の西日本の土器が組合わさる複雑な様相となっている。

１類（図版150の37～48・151）中葉から系譜がたどれる羽状縄文の波状深鉢と大きな突起が付く深鉢である。

ａ１（図版150の37～48・151の１～13，23，24，29～45）緩い山形の波状となる例とやや尖る例がある。山形波状は、沈線間に交互に縄文を施し羽状とする。しかし尖る例では、入組文内に羽状縄文を施している。また、突起は内面に大きく膨れている。時間差かもしれない。

ｂ１（図版150の14～22，25～28）大きく肥厚した突起が付けられる深鉢。いわゆる瘤付土器に見られる突起に共通する形である。

2類（図版161の１～29）大きく肥厚した突起が付けられる平縁深鉢で、沈線間に交互に縄文を施し羽状とする文様を施す。

3類（図版69の６，７・76の４・152～154）「く」状に折れる複合口縁の波状深鉢で、加曽利Ｂ式期以降後期後半を代表する器形で、波頂部にその特徴がある。一部加曽利Ｂ式期に含まれるものが存在するが、器形等の変化を示すためここで扱う。

ａ１（図版69の10・152の１～32）４波状で、胴頸部と口縁部に文様帯を持つ深鉢で、胴部の無文帯が特徴的である。波頂部は円形で、内面に沈線を配し、外面には「し」状の隆帯を施す。隆帯上や文様帯は、地文に縄文・羽状縄文を施す。また、７のように矢羽状沈線文を施す例がある。加曽利Ｂ式期。

ａ２（図版75の５・76の４・152の33～42）アヒルの嘴状の波頂部を持つ例で、羽状縄文を地文とする。41は、巻貝頂部による圧痕文が施され、連続刺突による沈線文で飾る西日本的要素の強い土器。

ａ３（図版154の１～５，39～41・248の2）ａ２同様の波頂部を持ち、「Ｕ」状の隆帯を張り付ける例。

ｂ１（図版69の7・154の12～13，15～23，25～27，29，30）波頂部に縦の隆帯を垂下させるもので隆帯上は、縄文を施す。また、15，18などは縄文の施文方向を変え、羽状縄文風に施す。

ｂ２（図版154の14，24，28，31，32，34，35）尖った波頂に隆帯を垂下させ沈線や凹線を巡らせる波状深鉢。

ｃ１（図版154の６～17・248の６，７）波頂部に斜めに隆帯を設け、円形の押圧文などを施す波状深鉢。

ｄ１（図版154の33，36～38）地文縄文の円形の突起が付けられる波状深鉢。加曽利Ｂ式期か。

4類（図版153の37，42）弧線文に縄文を施す波状深鉢。

5類（図版155・156の１～31）波頂部に沈線で対弧文などを施す波状深鉢で、晩期までその系譜がたどれる。

ａ１（図版155の１～８）１類にみられた、隆帯が縄文地の沈線文に変化したと考えられる深鉢。

ａ２（図版155の９～31・156の１～15，17～22，24～31）波頂部に凹線を垂下させ対弧文を施すもので、弧線が複数となる156図の１，８などや沈線だけの例がある。

ａ３（図版156の16，23）波頂部に凹線だけを施す例で八日市新保式期か。

6類（図版157の１～27，31～39）あまり波頂部が高くならず、ずんぐりとした波状深鉢。

ａ１（３～18，26）波頂部下を瘤のように張り出させる例で、凹線を垂下させる３，４，５，円形の押圧文を施す13，15～18や縄文を施すものがある。

ａ２（19～27，30～35）波頂部に弧線文を施し、円形の押圧文などを加える波状深鉢。

7類（図版157の29）大きく肥厚する突起状の波頂部が付く深鉢。

8類（図版69の6・158）大きく頂部が平な波状口縁の深鉢で、口縁部の断面が三角形となる特徴をもつ。文様は、沈線・凹線・刻みなどを組合わせて施文する。また、頂部に瘤の付く１，３や穿孔する69図例がある。

9類（図版160の１，２，５～７）胴部にくびれをもち、緩く外反する深鉢で内面に凹線文を施す。１は、巻貝の押圧文が付けられる。井口式土器で元住吉山Ⅱ式とされる土器。

10類（図版69の11・153の46・156の32，33，38～40・160の８，11～17）凹線文を施す深鉢で井口式の特徴をもつ。しかし、凹線の下などに縄文を施すなどの地域差がみられる。

ａ１（図版69の11・160の８，11～17・248の14）「く」状に折れる口縁部をもつ平縁の深鉢で、胴のくびれ部と口縁部に凹線が巡り、巻貝による押圧文を付ける。凹線の下側に刻みや縄文が施されるものもある。また、248図14は、「Ｕ」状の張り付け文の例。

ｂ１（図版153の46・156の32，33，38～40）波状口縁の深鉢で波頂部などに巻貝による押圧文を施す。凹線下にａ１同様に刻みや縄文を付ける例がある。

11類（図版69の9・159の34～45）羽状沈線を胴部に施す深鉢で、波状と平縁がある。凹線や沈線を施す例、突起に変化があり、時間幅をみなければいけない。

12類（図版69の8・148の41，42・160の18～54）後期後葉の「く」状に折れる口縁部の浅鉢をまとめた。

ａ１（図版148の41，42）羽状縄文地に鎖線を施すもの。

ｂ１（図版69の８・160の18～41）凹線を区切るように円形、扇状に圧痕文をつけ、細かな刻みを施す浅鉢。井口式に特徴的なもの。また、圧痕文には、巻貝は利用されていない。

ｃ１（図版160の42～50）縄文地に沈線を施す例。

ｄ１（図版160の51～54）細い沈線を区切るように円形圧痕文をつける波状の浅鉢。

縄文施文の深鉢（図版70の11・76の１，２・161～166）縄文を施し沈線などで文様を描く平縁の深鉢をまとめた。おそらく中葉から末までの土器が含まれていると考えられる。

１類（図版76の２・161の30～52・162の１～８）羽状縄文を全面あるいは何段か口縁部に施す深鉢。破片が小さいために両者を分離できない。全面に施す76の２は、内面に沈線を施しアヒルの嘴状の突起がつけられる。また、162図７～９のように沈線間を羽状とする例がある。

２類（図版70の11・162の9～36）口縁部と、胴部の縄文の施文方向を変える深鉢。

ａ１（図版70の11・162の9～23）口縁部は斜縄文、胴部は縦縄文。

ａ２（図版162の24～36)口縁部がやや膨れる深鉢。

３類（図版162の37～50・163の１～４)口縁部を肥厚させ、無文部分をもつ深鉢。

４類（図版163の5～48・164の１～15）斜縄文を施すもの。

ａ１（図版163の6～26）口縁部に無文帯を持つ深鉢。

ａ２（図版163の27～48・164の1～15）斜縄文を施すもので、口縁部が内曲するものや立つもの、広がるものなど多くの例を含んでいる。

５類（図版164の16，17）沈線を引き縦に区切る16と口縁を小波状にし、内面を押さえる17がある。加曽利Ｂ式後半期の例。

６類（図版164の18～45・165の１～47・166の32～40）縄文地に沈線で楕円文などを描く深鉢。

ａ１（図版164の18～28）口縁部があまり肥厚せず、沈線間を羽状とする例。

ａ２（図版164の29～45・165の1～15）口縁部があまり肥厚せず、縄文の施文方向を変化させる例。

ａ３（図版165の16～47）口縁部が肥厚したものをまとめた。１，２と同様の文様を施すと考えられる。

ａ４（図版166の32，33，36，37）沈線や弧文を施す例。

７類（図版76の2・166の1～31・248の11）口縁部に突起と縄文、胴部に縄文地の沈線を施す深鉢。

中葉から後葉にかけての搬入または模倣品と考えられる土器など。（図版68の６・153の48～50・159の１～33・248の10）何処までが搬入品で何処までが模倣品であるかの判断は個人によりかなり抽象的とならざるをえない。また、ここで示す土器とは別に、注口土器やいわゆる瘤付土器がある。これらについては、別稿に記す。

図版76の２・159の31～33は、沈線内を連続刺突する西日本系の土器。一乗寺Ｋ式段階。

図版159の５～12は、弧線文を施すもので、元住吉山Ⅰ式。同図1～4は、東海地方蜆塚上層式土器で粘土紐を張り付ける例は見られない。また、同図14，248の11は、前者に後続する東海系土器。

図版159の15～19，22～30は、中部高地や関東地方にみられる安行１式期の土器。

図版153の48～50・159の13，20，21は，北陸ではほとんど類例をみず、他地域の所産とみられるが地域や時期を特定できないが、文様や器形などから加曽利Ｂ式後半期の可能性が強い。

後期中葉から後葉の土器

中葉から後葉の土器について分類を行ってきたが、これまでのおおよその見通しを述べておく。加曽利B式期の古い段階では、地域色の強い条線文を主文様とする土器群がみられる。その後、いわゆる加曽利B式の要素の強い土器群に変化し、後半期では羽状縄文を主文様とする一群が発生する。また、一方では口縁部や同部に沈線文を施し、幅広い無文帯を持つ波状口縁深鉢が発生する。この深鉢は波頂部に特徴があり、その変化をたどることができる。また、凹線文系の波状口縁深鉢とは異なった変遷を示し、受け継がれて行く。一方、凹線文系の井口式土器は、平縁深鉢や浅鉢として器種のセットに組込まれている。また、凹線文波状深鉢は、縄文や矢羽状沈線を持つ中部高地などと共通した様相となる。一方独自の変遷を示す波状深鉢は、頂部に垂下する隆帯の変化から、波頂部に対弧文を産みだし後期末葉へ受け継がれて行くのである。

(4) 末葉

北陸のこの時期には、八日市新保式が設定されている。研究者によりその見解は統一されておらず、古い段階を後期に含める見解と［小島1981］、八日市新保式全体を後期とし、連結三叉文に玉を抱く例を晩期とする見解がある［南1989・久田1986・西野1985］。また、小島氏は沈線の区切り手法の違いから八日市新保式の古い部分を3系統に分け、地域差を導き出そうと試みている。

1類（図版68の4・170・171・172の28，33，38～41・248の21）口縁部、胴部を巡る沈線に縄文を配し「)(」状や三角形に区切る波状口縁の深鉢。

1a（図版68の4・170・171の1～32・172の38～41）沈線を、「)(」状に区切る例で、波頂部にはあまり文様は施されない。小島氏［1981］が田家型としたもので、「)(」状の区切の間に、「×」・「ハ」状の刻みを施す、170の8，9，12や172の38～41などがある。また、ボタン状の瘤が付けられる171の6などの例もある。

a2（図版171の33～40）沈線を三角に区切る例で、小島氏により氷見水源地型とされた手法をもつ例。

2類（図版172の1～32）沈線を「川」状に区切り、波頂部に「山」状の連結三叉文を施す深鉢。

a1（図版172の1～3，6～20）比較的単純な「川」状区切りと「山」状の連結三叉文を施す物。

a2（図版172の21～32）半肉彫りの三叉状文・「山」状の連結三叉文を施す例。

b1（図版172の35～9）頸部が強くくびれ、口縁部に小山状の突起が付けられる深鉢で、幅の狭い沈線を数条の縦沈線で区切る。

3類（図版167～168）対弧文により沈線を区切る手法を持つ深鉢で、前1・2類に強く影響を与えていると考えられる。また、器形は、波状口縁と平縁があり、前者が多い。

a1（図版167の1～7，168の1～22）波頂部などの沈線を単純な対弧文で区切る波状深鉢。

a2（図版167の8～15）半肉彫りの三叉文や波頂部に「山」状の連結三叉状文を施す例。

b1（図版167の42～45）尖る波頂部に瘤が付けられる波状深鉢。

167図の16～41，46，47は、口縁部と胴部の破片で3類aの三叉文や「山」状文と同様の特徴をもつ。

4類（図版168の22～38・169の1～22）口縁部の文様帯が狭く刻みなどを施す例をまとめた。また、内面に凹線を持つ例や沈線の区切りが多条化するものもある。

a1（図版169の1～12）波頂部に三叉文を配し、沈線間に刻みや「川」状の区画文をつける。

b1（図版169の13～22）刻みを加えた山形の波頂部を無文、三叉文、楕円文とし、玉抱き三叉文や入り組文風の文様を施す例。168図は、3類の口縁部となる物を一部含むが刻み、多条の区切り線を持つ新しい様相の例。

5類（図版169の23～39，41～44・248の19）「く」状に折れる口縁の深鉢。弧線状の沈線を縦沈線や対弧文や三角の刻みなどで区切る例。

6類（図版169の40，45）斜めに三叉文をもつ楕円文を施す深鉢。

7類（図版173）「く」状に折れる口縁の浅鉢をまとめた。1～8は、口縁に隆帯を張り付ける。9，20は「U」状の張り付けがみられ、後葉の古い段階か。11～14、井口式段階の例。22～49、楕円文や弧線文を配した例で、八日市新保式の古い段階と考えられる。ただし、36は多条化した区切り沈線がみられ、新しい様相。

8類（図版174）「く」状に折れる波状口縁の浅鉢で、台付きとなる。

ａ1（図版174の1～19）「川」状文、対弧文を弧線や沈線の区画文とする浅鉢。

ａ2（図版174の20～36・175の4，5）半肉彫り状の三叉文を区切り線とし、「山」状の三叉文や玉抱き三叉文風の円文に縦沈線を配する文様を付ける30，34などがある。36は、内面に玉抱き三叉文をもつ。

ａ3（同図37～41）沈線文の例をまとめた。37は、多条の区切り線。39，41は、瘤状の張り付けをもつ。175図例は、半肉彫り状の三叉文を区切り線と円形圧痕文をもつ弧線が交互に配される。

ａ4（同図42～47）波頂部に連弧文を施す例。

9類（図版175の1～3，6～42）「く」状に折れる口縁の浅鉢で波状のものが含まれる。口縁部に数条の沈線や列点、縄文などを施し、沈線や圧痕文などで区切る例で文様の種類は多い。特徴的なものをあげると、瘤を付ける1、玉抱き三叉文風の6，9、連続「Λ」状文を付ける13、楕円文を交互に配する30、圧痕文を付ける35、などがある。

10類（図版176）「く」状口縁で立ちぎみとなる中型の鉢。

ａ1（図版176の1～19，22～35）口縁部が肥厚し、その部分に沈線、綾杉状文、斜格子文などを施文する。胴部は、弧線文、楕円文、対弧文などが施される。31，33は、突起が付く。

ｂ1（図版176の20，21）凹線を施し、刻む例で、井口式期のもの。

ｃ1（図版176の36～46）口縁がやや開く鉢をまとめた。立ぎみの口縁に突起が付く37，45や無文で突起の付く41，42、楕円文と三叉文を配する40などがある。

11類（図版176の1～39）内屈する浅鉢。

ａ1（図版176の1～12）沈線や楕円文を施す例。

ａ2（図版176の13～26）連弧文や入り組文を施す例。

ａ3（図版176の27～39）半肉彫り状三叉文と多重対弧文を施す。

その外に同図44の対弧文風の文様をもつ例、沈線を施す小型の台付き土器がある。

瘤付土器（図版70の2・178～181・248の12，13，15～18，20，23，24，26～28）模倣・搬入品と考えられるものや、在地の土器に瘤が付けられる深鉢をまとめた。この他に、注口土器・壺などがある。また、図版151の土器なども、含められるだろう。器形は大きな波状となる例と、平縁で口縁部に突起が付けられるものがみられる。

1類（図版178の1～14）

ａ1（図版178の1～16）縄文を施した尖る波状口縁の深鉢で半肉彫り状の入り組文で飾る。また、頂部に、瘤が付けられる11，13，14などがある。

ａ2（図版178の15，16）透かしの入る波頂部。加曽利Ｂ式後半期のもの。

2類（図版178の17～38・179）平縁で口縁部に突起が付けられる深鉢で1類の胴部を含む。

ａ1（図版178の17～38・179の1～15）幅の広い大きな弧線連結文が施される例で、17～23の突起が付けられる。24～26は、羽状縄文を施す例で古い段階か。また、179図例には、弧線文の連結部に瘤を持つ4や弧文内に沈線を施す例があり、瘤付土器第2段階のものだろうか［安孫子1988］。

ａ2（図版179の16～51）細目の連結弧線文がやや入り組み、瘤が多く付けられる。第2段階の例。

3類（図版70の2・180の1～32）5～6波状で、口縁端部が肥厚し、「ハ」状などの刻みが施される。

ａ１（図版70の２・180の1～29）肥厚する波頂端部が特徴で、縦長の張り瘤が付けられる。胴部は、弧線連結文内に沈線文が侵入する。新潟県下に多くみられる瘤付土器。20は、波頂部に対弧文がつけられる。
図版180の30～32は、後期末４類ｂ１としたもの。

４類（図版181の１～45）入り組文的なモチーフに刻みなどを施すものをまとめた。

ａ１（図版181の１～14・16）刻みを施す例。

ａ２（図版181の15，17，18，20～22）入り組文内に半載竹管による連続刺突文を施す例。

ａ３（図版181の19，23～29，42～45）縄文を地文として入り組文を施す例。

ａ４（図版181の30～40）弧線文を連続して施すものでややくずれた35，39などがある。40も仲間か。

図版183・184は、瘤付の在地系深鉢をまとめた。かなりのバラエティーがみられ、中窪み、中割れ、十字切り，周辺刻み、縦長刻み、などと沈線や縄文が組合わされている。中窪みは、羽状縄文などが施されるものや縦縄文のものに多くみられる。飛び出した32，38では圧痕文と組合わせる。縦長のものは、平縁の物に付くのが多いようだ。184の13～35は、胴部に見られる文様を集めた。沈線間に矢羽状文を施す例や斜格子状文を施す例、26の結節縄文を施す例などいろいろある。写真図版42は，瘤付土器第１段階の壺で，漆状の物が付着する例で容器として利用されている。

後期後半の壺・鉢・蓋・小型土器・器台などをまとめた（図版184～186）。

図184の１～19は、壺・鉢の破片と考えられる物で、連弧文や楕円文などを施す。１～５，７，９，10，11～14，16～20は、八日市新保式。15は、加曽利Ｂ式後半期。

同図20～30は、壺で頚部に縄文を施す無文の小型品（23～30）や入り組文の22、弧線文の21、瘤の付く20がある。同図31～44は、小型の椀状の器形で口縁部の立つ33，35～38，40や外へ開く31，32，43，44や内屈する41，４がある。同図45～49は、小型の蓋。同図50～54は、小型の鉢。いずれも八日市新保式段階の土器。

図版185の１～29は、中型の鉢。口縁部の形は、立つ例、外反する例、内屈する例など変化がある。文様は、弧線文、楕円文、半肉彫り状の三叉文などが見られる。同図30，31は、筒状器形となる例で、31は口縁が開く。有孔土器か。32，33は、鉢の底部か。

図版185の34～58・186は、器台部分を集めた。中葉から晩期の初頭までのものを含む。
34～36は、羽状縄文を施す例で加曽利Ｂ式期。37，38は、やや浮き上がった文様帯に縄文を施す例で、瘤付土器に伴う例か。図版186の17，20，21，24～26，31は、三叉文を持つ例で晩期のものを含む。その外の器台は、弧線文や楕円文などを施す。八日市新保式段階のもの。また、透かし状にする12，13や穿孔する15，20，28例がある。

注口土器（図版68の５・70の１・187～191・248の５，写真図版237・238）中葉から末葉までのものをまとめた。注口部は、胴部から良く剝落したようで断面に黒色の樹脂状の付着物が残り接着されたと考えられる例が多い。

図版186と248の５は、加曽利Ｂ１式期のもので、関東などに見られる注口土器とほとんど変わらない。また、写真図版137の１～８の注口部や138の37～46の釣り手部は、同期の例。

図版187は、ソロバン玉状の器形となり、貝殻擬縄文などを施す西日本系の注口土器。沈線内に連続刺突文や細かい矢羽状沈線を施す例などは、一乗寺Ｋ式段階。また、19のように羽状縄文や連弧文などを施す例は、元住吉山Ⅰ式期とされる［泉1989］。

図版189・190の１～４，９は、羽状縄文を施す注口土器で、ソロバン玉状の器形となる189の１～11と立つ長い頚部を持ち球胴の189の12～54と190図がある。ソロバン玉状となるものは、西日本系のものと同様の器形で、胴部文様が帯状弧線文となる。また、球胴のものでは、大きな突起が付けられる例24～26，28，29や矢羽状沈線を施す例などがある。31，32は、半肉彫り状の文様を施す例で、加曽利Ｂ式新しい段階。この注口土器は、加曽利Ｂ式の後半から瘤付土器にいたる段階のもの。

図版190の５～８，10～27・56～58，62は、柳葉状の文様を細い隆帯で描く、瘤付土器台１段階のもの。　同図28～42は、沈線や半隆起した柳葉状の文様が施され、文様の結節部に瘤が付けられる。瘤付土器２段階のものか。同図43～52は、刻みが付けられる例で瘤付土器の中でも新しいものであろう。

図版191の１～17は、頸部に沈線を数条付け、縦長の瘤を張るもの。

同図18～32・70図の1は、入り組文に縄文が施される例で、瘤付土器１・２段階のもの。同図34，35，37は、凹線を持つ例で、井口式の注口土器。38～55は、在地的要素の強い文様が施される例で八日市新保式期か。

後期末葉の土器　後期後半に見られた羽状縄文の土器は姿を消し、瘤付土器が一定量の比率で流入する。また、在地的様相の強い対弧文を波頂部に施す一群が、従来の八日市新保式と共存する。また、県東部に見られる沈線を楕円区画で区切る手法は、対弧文と共に主文様として施され、小島氏により水源地型、１Ｅ型とされた三角形や短線で区切る手法はむしろ少ない。この対弧文は、八日市新保式の新しい段階になると「山」状の文様と組合わされて、「川」状の沈線文を中に持つ弧線文と共に並行沈線の区切り文として多用され、晩期前葉まで受け継がれる。また、この区切り手法は、八日市新保式の「山」状の文様と同様に変化し、細い沈線から太い沈線による「Ｈ」状文へ、半肉彫り状文、そして三叉文状の彫り込み文へと変化する。このようにみると従来の八日市新保式の区切り手法と考えられていた「山」状文と組合わさる弧線文は、井口式の貝殻による区切り手法からの変化ではなく、別系統の手法と考えられるのである。また、波頂部とその中間に用いられていた区切り方は変化して、波頂部を中心とした短い単位の区切り方となり、交互に区切るなど、区切りの手法の変化がみられる。小島氏の田家型とした楕円文風の区切りの手法も同様の変化が窺えるが、田家型は晩期まで続かない。

4　晩　期

富山県下では、晩期初頭から前葉に岩瀬天神式、勝木原式、御経塚式、中屋式（大洞BC新段階）が設定さている。また，石川県下では従来の経塚式を３期に分け１を勝木原式（B1)、２を（B2)、３を（BC古）段階として細分している［高堀1986]。しかし、型式設定にあたっては両県下で、意見の一致をみていない。それは、富山県下は、東日本の影響が石川県下に比べ強く表れることと、資料の貧弱さによることもあるが、それだけでは解決できない点も多く岩瀬天神式期が富山県下にあり、石川県下に同期の土器形式が無いのである。

(1)　**初頭**（図版68・70・75・192～201）半肉彫り状の三叉文を特徴とする岩瀬天神式［湊1972］と玉抱き三叉文を特徴とする勝木原式［小島・出崎1967］が設定されている。

１類（図版192）小さな台形の波頂部が多数付けられる深鉢で、三叉文が特徴的である。波頂文様は左右が対象で、刻みを施す例が多い。また、瘤の付けられる25がある。

２類（図版68の７，８・70の７，８・75の５，６・193～195の１～16・249の４）４波状となる深鉢で、波頂部文様が左右対象となるものと、そうでないものがある。

ａ１（図版193の1～10）波頂部に両側から楕円文が配され、中央に三叉文を施す。瘤の付く９，10がある。

ａ２（図版193の11～15，43）波頂部に両側から楕円文や三叉文が配され、頂部に円文風の文様を施す例。

ａ３（図版70の７，８・193の16～37，40～42，44～47）波頂部に両側から楕円文や三叉文が配され、頂部に円文が付けられる。また、円形刺突文を施す21，22、円文の中に施す32，36，46などがある。

ａ４（図版193の38，39）八日市新保式の「山」状三叉文を複雑にし、玉を配した例。

ｂ１（図版194の１～10）波頂部に楕円文と三叉文を左右から単純に配するもの。

ｂ２（図版194の11～38）波頂部の文様が入り組み玉や三叉文が配置されたりする例。

ｂ３（図版68の７，８・75の６・195の１～16）短い三叉文が入り組んだり、不規則に配置されたりする例。

3類（図版195の17～27）小さな波状口縁の深鉢で入り組んだ三叉文が施される例と、単純な三叉文が付けられる23，26，27がある。

同図28～37は、搬入、模倣品と考えられるもので、玉抱き三叉文や三叉文が施される。丁寧な作りである。

図版196，197，198の１～16，19は、１、２類の胴部などと考えられる破片。

196の１～13は、対弧文や弧線文を施す例で後期段階と考えられる。

同図14～34は、対弧文から変化した縦沈線による区切りや三叉文、楕円文を組み合わせ施文する。同図35～42、楕円文と三叉文を組み合わせる例で楕円文が三叉文と共に横に並んで配置される41，42と楕円文が斜めに重なり合うように配置される（75の５が好例）35，38，39などがあり。一連の波頂部の変化と共に変わり斜め文様から横配列の文様となるようで勝木原式がその配列を持つようだ。197図のものは、斜めの文様構成が多い例で波頂部の楕円文が組み始めた段階のものであろうか。

図版198の１～16，19は、玉を抱く三叉文や入り組み文に三叉文が配される例で、後者の文様は横流れとなる。図版199の１～11は、弧線文のくびれ部分に三叉文を施す例。13は、胴部に曲線文を施す例。

4類（図版198の17，18，20～40）沈線による入り組文を施す土器で、富山県内ではあまり例をみない文様である。

5類（図版177の40～43・199の13～22，26，27・200の１・248の22，25）半球状の器形の浅鉢で三叉文などを施す。

ａ１（図版199の13～22，26，27）玉抱き三叉文や入り組文と三叉文を組み合わせて施す例。

ａ２（図版177の40～43・200の１・248の22，25）赤褐色の色調で入り組文を施す。模倣品かもしれない。

6類（図版70の６・199の23～42・200の２～９・249の３）波状口縁の浅鉢で玉抱き三叉文や三叉文が施される。また、内面の波頂部へ三叉文施文が盛んに行われる。249の３は、短い三叉文を組ませたり、沈線でつないだりするもので、内面に「山」状の崩れた三叉文を施す。古い要素を残した土器。

7類（図版200の10～30・201の１～23）大きく広がる浅鉢で口縁部にだけ文様をもつ。後期八日市新保式段階を含む。

ａ１（図版200の10～30）口縁端部がやや丸みをおび、小さく折れるものとそうでない例がある。文様は、口唇部に沈線を施し、細い隆帯を張り付けるものが多く見られる。また、突起状となる18や短沈線を施し、波状風にする22などがある。後期のものと考えられる。

ｂ１（図版201の１～23）角ばった口縁部で、細い隆帯を付け三叉状文や玉だき三叉文などを施す。

8類（図版201の25～27）壺をまとめた。広口のものと考えられ、入り組文が付けられる。27は、浅鉢にも共通の文様がみられる。25は、瘤が付けられる波状口縁のもので後期なのかもしれない。

同図24は、瘤付土器最終段階の深鉢。

図版201の28は、安行式にみられる角底の土器。

晩期初頭とした土器をみてきたが、ここで示した土器の多くは東日本的様相の強いもので、北陸の在地的な型式，八日市新保式の土器との関係が問題となろう。それは、深鉢・浅鉢・壺のわずかな器種だけで晩期初頭の土器群として成立するのかどうか、また前段階に見られた小型土器などがこの段階には殆ど伴わないのであろうか。これは、おそらく八日市新保式と岩瀬天神式・勝木原式を分けたためこのような土器組成となったと考えられ、八日市新保式の新しい部分は共存すると思われる。また、従来玉抱き三叉文を持つ土器の総称として勝木原式を使用してきたがそれ以外の土器を含め勝木原式段階を考えなければいけないであろう。

(2) 前葉

御経塚式期（図版70の９，10・71の１～３，11・76の３・202～207・249の５，６，８～10）

ここで言う御経塚式とは、石川編年［高堀1986］の御経塚１・２式のうち２段階にあたる。

1類（図版70の９・71の２，３・76の３・202～204の１～20・249の５，６，８）波状、平縁の深鉢とその胴部をま

とめた。単純に組む三叉文や入り組文を特徴とする。また、胴上部の内面に幅広の沈線をもつ例が多い。

ａ１（図版76の３・249の５，６）大きな台形の波頂部となる深鉢で、すり消し縄文帯などに三叉文を単純に施す例と、列点文と三叉文を入り組ませて施す76の3がある。新しい様相か。

ａ２（図版70の９・71の２）小さな台形の波頂部を持つ深鉢で、「Ｈ」状文・入り組文・三叉文などを施す。

ｂ１（図版202の１～12，17，18）波状口縁の深鉢で、波頂部に三叉文などを施す。10は楕円文風に施す例。

ｃ３（図版202の13～16）平縁の深鉢で、斜めの「Ｈ」状文や沈線文を施す。

図202の19～23は、胴部の内面沈線上に外から列点を施すもの。同図24～36は、縄文となる例。同図37～45は、列点文を施す例。図203の１～８・70の３は、鍵手状文と入り組文を施す例。同図９～16は、小さな三叉文を連続して施す例。同16～22は、連続する入り組文に三叉文を施す例。同23～32は、入り組んだ三叉文をもつ例。同33～42、図204の１～19は、「)-」状のモチーフの三叉状文と玉を抱く入り組文を施す例。

２類（図版204の20，39・205の12～29）大きく外反する台形の波状口縁深鉢で、御経塚式独特の「Ｔ」状のモチーフと三叉文を組み合わせて文様を施文する。また、縦の文様構成がみられるのもこの段階である。波頂部には、26，27のような大きく平坦な突起が付けられる。図206の７，８，10，11は、波状の深鉢。

３類（図版204の40，41・205の１～10，30～41・206の１～13・249の８，９）平縁の深鉢をまとめた。器形は口縁が大きく外反するものと立ぎみとなるものがある。

ａ１（図版204の40，41・205の１～10，30～41）入り組文と三叉文を組み合わせた複雑な文様となる41と沈線間をすり消しただけの図204の１～10がある。また、同図32，33，39～41は、入り組文が施される例。34，35は、工字文風の文様を施す例。

ｂ１（図版206の１～５，７，８，13）立ぎみの口縁部の深鉢で13は、入り組文が施される。

ｃ１（図版206の６，９，12）頸部にくびれをもたない深鉢で、入り組文や弧線文と三叉文を組み合わせた文様が付けられる。

４類（図版70の10）胴部がくびれる広口の鉢で入り組文に三叉文を組み合わせて施文する。

５類（図版206の14～39・207の34）「く」状に外反する口縁の鉢で、文様から時間幅を持つと考えられる。

ａ１（図版206の14，15）玉抱き三叉文施す例で、前段階の土器。

ａ２（図版206の16～39）入り組文と三叉文を組合わせて施文する例で、楕円文の31，33や入り組部に三叉文を配する35，38が特徴的。

６類（図版206の40，41・207の１～28，31，32）半球状となる鉢。

ａ１（図版206の40，41・207の１～20）口縁部が強く折れるものと折れないものがある。組みあった複雑な入り組文に三叉文を配する例。突起の付く例は、注口土器となるものがあるかもしれない。

ａ２（図版207の21～23）「Ｔ」状文で工字状文風にする例。

ａ３（図版207の24～26）三叉文の一辺が伸び入り組む例。

ｂ１（図版207の31，32）やや深くなる鉢。

７類（図版207の28～30，33，35，36）小破片のため全体が良く分からないが壺で、「Ｔ」状の文様や入り組文を施す例などがある。35，36は、小型品。

８類（図版207の37～39）蓋で三叉文を施す37，38と、粗文の39がある。

９類（図版207の40～43）口縁部に瘤や隆帯を付ける深鉢。ここに分類したが晩期後半の土器かもしれない。

(3) 前葉～中葉

① 中屋式期

中屋式は大洞BC式後半からC1式に並行する型式としてほぼ定着している。これは、石川県下の調査例に負う所が多く、最近さらに細分が試みられている［南1989］。

1類（図版208・209の1～14）縄文地の「F」状の入り組文を施す深鉢で口縁部に「B」字状の突起が付けられる。また、深鉢は平縁となり波状ものはみられなくなる。図209の1～4は、「～」状の入り組文で古い様相。また、三叉文を施す208の31，32例も見られる。

2類（図版209の15～36・210・211・212の1～17）羊歯状文と連続波状沈線文の深鉢で文様を共有しあうものがある。口縁部には「B」字状の突起が付けられる例もみられる。また、羊歯状文は左下がりが大半を占める。

a 1（図版209の15～36・210の1～14）羊歯状文があまり入り組まないもので、丁寧に施文される。

a 2（図版71の9・210の20～29）羊歯状文が入り組んだり、連結したりする例で21のように玉を抱く例もある。

a 3（図版210の17，18，31～35・211の1～16）羊歯状文の退化した例と列点文の深鉢で、羊歯状文と鍵手状文を施す32，34，35や列点文と連続波状沈線文を施す211の14，15がある。また、210の18は、不規則に刻みを施す例。

a 4（図版71の6，8・211の17～32・212の1，2）連続波状沈線文を施すもので、「S」状に短く切る例と、連続する例がある。18は、雷文状の鍵手文と連続波状沈線文、列点文を施す。20，21，22は、羊歯状文と連続波状沈線文を施す。

a 5（図版212の3～17）「F」状の入り組文が比較的つながり、沈線で描かれるもので、17では、短く切る波状沈線文と共に施される。

3類（図版72の3，6・212の18～33・213の1～15）「F」状の入り組文を交互に組み合わせる文様を持つ深鉢。

a 1（図版72の3・212の18～30）半肉彫り状の大きな入り組文を施す例で、鈎状文を施す21，24，26～28とそうでないものがある。

a 2（図版72の6・213の1～15）丸みのある半肉彫り状の入り組文を施す例。

4類（図版71の4・72の4・74の10，11・213の16～32・214）鍵手状文を施す深鉢で、口縁部まで文様を施文するものと、胴上部に文様を施すものがあると考えられる。

a 1（図版71の4・213の16～26，29～31）口縁部に幅の狭いクランク状の鍵手状文を2～3段に施す例で、「B」字状の突起が付く例や端部を押さえる例がある。やや下膨れの器形となる。

b 1（図版213の27，28，30）「く」状に外反する口縁で、胴の張る器形と考えられる。縄文を地文とした細かな鍵手状文が胴部に施される。

b 2（図版214の1～7）入り組んだ鍵手状文を施す深鉢。

b 3（図版72の4・74の10，11・214の8～25）幅の狭い胴部の文様帯内に鍵手状文を施す例。

5類（図版71の5，10・72の1，2，5・215の13～27・218～220の1～15）短く「く」状に外反する口縁を持つ深鉢。

a 1（図版71の5・72の2・215の13～27・218の1～15）粗文の深鉢で口縁部内面に、鎖線やサンゴ状の突起が付けられる例や小波状とする例がある。

a 2（図版72の1，5・218の16・219の1～23）「-(」状のモチーフと鈎手状文を施す例。72の5は、矢羽状に沈線を施し、縄文と擬縄文を部分的に施す。外面に、赤色の顔料が残る。

図版215～217は、1～4類の口縁部と考えられるもので、どの口縁がどの類にあたるかはっきりしないがいろいろな種類がある。外面から押圧して小波状とする例や、口縁上をヘラ状の工具で刻む例、「B」字状の突起が付けられる例、真っすぐに立つ口縁部、やや内屈ぎみの口縁部、口縁内面端部が肥厚するものなどである。

ａ３（図版71の10・220の１～10）縄文を地文として沈線のみを施す例。

ａ４（図版220の12）くずれた三叉文風の文様が施される例。

６類（図版68の９・71の７・74の１～４・220の11，16～23・221～223）条痕や無文の深鉢。

ａ１（図版68の９・74の１，４・220の11，16～23・221・222の１～12）「く」状口縁の深鉢で中屋式では最も一般的な土器。北陸西部では、粗文の深鉢はほとんど条痕となるが当遺跡では、量は少ない。

ａ２（図版71の７）小波状で楕円の沈線文が施されるもの。

ａ３（図版222の18～26・223の28，29）縦条痕で口縁を刻む深鉢。新しい段階の例。

ｂ１（図版223の16～21，23～26）無文の中型品で、小さく口縁部が外反する例と、長い例がある。

ｂ２（図版222の27～33）不規則に条線を施す深鉢。

ｃ１（図版222の12～17・223の30～32）やや内屈するくびれをもたない深鉢。31，32は、口縁部に刻みをもつ。

ｃ２（図版223の22）朝顔状に開く深鉢。

ｄ１（図版223の１～14）器形はよく分からないが結節縄文を施す深鉢がある。大洞BC式段階の土器か。

７類（図版224～227）「く」状口縁の中・小型深鉢で、胴の張るものとそうでないものがある。

ａ１（図版224の１～13・227の２）口縁が短く外反する深鉢。

ａ２（図版224の14～42・226の51～53・227の１，３，４）口縁が長く外反するもの。文様をみると連続波状沈線文を施す例や楕円形の鈎手文を施す例などがあり時間幅があると考えられる。

ａ３（図版73の１，２・224の25～32）無文で、連続刺突文などを施す例。

ｂ１（図版225の１～33，36）口縁が長く胴部が張る例。有文系の土器で丁寧に磨かれる例が多い。

ｂ２（図版225の34，35，37～46・226の１，２）口縁が小さく外反する例。

ｃ１（図版226の３～５）口縁が緩く外反する例。

図版226の７～45，49，50は、６類ｂの胴部と考えられるもので一部小型の壺胴部例を含んでいる。文様はバラエティーがみられ、入り組文・三叉文・鈎手状文・楕円文・連続波状沈線文などがある。同図46～48は、御経塚式段階の土器。

８類（図版227の５～12，15，16）丁寧に磨く小型の広口壺状の器形となる。

９類（図版227の13，14，17，18）「く」状口縁の中・小型の鉢と考えられる例。

10類（図版227の21，22）トックリ状の器形となる壺。

11類（図版73の５・227の19，20，23～39・228の１～36・249の18）広口の壺状の器形で、丁寧に磨き文様を施す。

ａ１（図版227の19，20，23～25，32～36）丁寧に磨き，円形の隆帯を張り付けたり「十」や「王」や「◇」状の文様を施す例。中屋式の古い段階か。

ａ２（図版227の28，29・249の18）擬縄文を施す例。いずれも赤彩される。

ｂ１（図版73の５）胴部に連続刺突文を施す例。

その外に弧線文を施す227の30や同図31の入り組文を施す例がある。

胴部片は、文様のバラエティーも多くみられる。図227の37～39は、鍵手状文を施す例。図228の６～23は、雲形文を在地的に変化させた入り組文や楕円文を施す例。同５，24，３は、鋸歯状文の例、同34は、入り組文内に刺突文を施す例。

12類（図版73の３，４・228の37～45・229の１～11）大・中型の壺。

ａ１（図版73の３）半肉彫り状の入り組文を施す例。

ａ２（図版228の37）器面を丁寧に磨き「キ」状の文様を施す。

ａ３（図版228の38，39・229の４）鈎手状文を施す例。38は、赤彩。

ｂ１（図版228の44，45・229の１～３）肩部に丸みを持つ例。44は、ブリッチが付けられる例。２，３は、頸部に沈線が付けられる例。

ｃ１（図版229の７～11）立ぎみの口縁をもつ口の広い壺。

その外、大きく開く口縁の壺で連続刺突文を施す図73の３、入り組文の図228の41、沈線間に刺突文を施す図229の５，６などがある。

13類（図版228の43・229の12～18）算盤玉状の器形となる注口土器。

14類（図版229の19～34・230の１～22・249の10）内面に段を持つと考えられる浅鉢で波状口縁と平縁のものがある。

ａ１（図版229の19～28・230の17）波状部に縄文を施す例で、口縁部を刻む22，26と刻まないものがある。

ａ２（図版229の10～12，14）無文の例で、10は、サンゴ状の突起が付く。

ａ３（図版229の19～22）有文の浅鉢で、列点文が付けられる。22は、羊歯状文風となる。

ｂ１（図版229の29～34）縄文を施す平縁の浅鉢。口縁部を刻む例とそうでないものがある。

ｂ２（図版230の４，６～９，11，15）無文平縁の浅鉢。６，７は、サンゴ状の突起が付く。

ｂ３（図版230の１，２，５，13，16，18・249の10）帯縄文を施したりする有文の浅鉢で入り組文を施す例がある。

ｂ４（図版73の７）丁寧に内外面を磨き、胴部に半隆起帯を設け２個一対の突起を付ける浅鉢。

この類は、中屋式の中でも古い段階に伴うと考えられる。

15類（図版231の７～11）内面に段を持たず大きく開く浅鉢。7は羊歯状文を施す。

16類（図版230の23）１点だけの出土。波頂部に三叉文を施す鉢または深鉢と考えられる。

17類（図版230の24～40・231の１～６）サンゴ状の突起が付けられる椀状の浅鉢で、突起部に２個一対の穴を穿つ。突起は、１箇所でその部分は波状風に口縁からび出す。

18類（図版231の12～48・232の１～14）内外面無文で口縁部に沈線や細い隆帯を張り付ける浅鉢をまとめた。

ａ１（図版231の12～15）口縁部に半円状の張り付けや刺突文を施す例。晩期でも古い段階か。

ａ２（図版231の16～33）「Ｈ」状のモチーフを沈線と張り付けにより施す例。沈線内に円形の張り付けをする32，33などもみられる。

ａ３（図版231の34～48・232の１，３）「Ｈ」状のモチーフと玉を配した三叉文を組み合わせる文様を施す例。

ａ４（図版232の２，５～14）入り組んだ渦巻き状になるサンゴ状の文様が施される例。

19類（図版73の10，11・74の８・75の8～10・232の15～36・233の１～21）大洞C1式期の雲形文や鈎手状文が施される浅鉢で、搬入品を含んでいる。また、黒色の漆状の被膜が残る例が多い。

ａ１（図版74の８）小型の皿状で内外面とも漆状の赤色被膜で覆われる。搬入品か。

ａ２（図版232の15～26）やや深めの皿状の鉢。18，19，21，22は、在地的な土器。その他は、搬入品か。23を除き漆状の被膜が残る。23は、赤色の例。

ｂ１（図版75の８・232の27～33）口縁部が小さく内屈する浅鉢。33は、在地的なもの。

ｃ１（図版73の10，11・233の14～21）緩く外反し、底部が平になる浅い鉢。17は、在地的土器で接合面にひだ状の刻み跡が残る。また、19には、黒色の被膜がみられる。

ｄ１（75の10・232の34～36・233の１～13）口縁が内屈する浅鉢で在地的な要素の強い土器。34，５，８などが搬入品と考えられる。また、34は、黒色の被膜が残る。

20類（図版71の12・73の６，８，９・75の９，10・233の22～33・234～236）丸みを持って外反する浅鉢をまとめた。一部御経塚式、中屋式以降のものを含んでいると考えられる。

ａ１（図版75の９，10・233の22～33・234の１～８，13，14）丸みをおびた立ぎみの口縁となり、底部が大きく浅い鉢と考えられる例で、沈線文が施される。また、口縁内面に「ハ」状に刻んだり、波状とする24，25，14がある。沈線文の鉢は、中屋式以降にもみられるが粗文で分離できない。

ｂ１（73の８，９・234の９～12）やや深い底部の小さい鉢で、粗文の234図と小波状となり鈎手状文などを施す73図例がある。

ｃ１（図版73の６）大きく開く無文の鉢で、口縁部に「ハ」状に刻み小波状とする。

ｄ椀状となる浅鉢をまとめた。全器形を示す例が少なく、ａ～ｃを含んでいると考えられる。

ｄ１（図版235の１，２）入り組三叉文を施す例。

ｄ２（図版235の３～５，７，15，17，22）口縁部にサンゴ状突起が付けられる例。

ｄ３（図版235の９，21，23，24，27）弧線文を施す例。

ｄ４（図版235の12，18・236の２，７～９，13，19，22，24）「Ｆ」状の入り組文を施す例。

ｄ５（図版235の16，26・236の９，17，23,）鈎手状文を施す例。

ｄ６（図版71の122・35の６，８～11，13，14，20，28・236の３～５，11，12，21，25～27，31）沈線間に縄文や刺突文や刻みを加える例。

ｄ７（図版236の34）全面に縄文を施し、楕円形の文様を張り付ける例で、蓋かもしれない。

ｅ１（図版236の28～33，39）内屈する口縁の浅鉢で、鈎手状文や弧線文を施す。

ｆ１（図版234の16，17）ソロバン玉状の器形となる鉢で、三叉文が施される。

21類（図版237・238）羊歯状文、入り組三叉文、鍵手状文などを施す蓋で、直径10cmから20cmくらいまで大小がある。

ａ１（図版237の１，40，42・238の18，21，22）羊歯状文を施す例。

ａ２（図版237の18～39）「入」状の入り組文を施す例で、先端が曲がり組手状となる例とそうでない例がある。

ａ３（図版237の２～８）鍵手状文を施す例。

ａ４（図版237の９～17，43，44）列点文や刺突文を施す例で区画線内に施す例と全面に施す11，43がある。

ａ５（図版238の13）「◇」状文を連続して施し、擬縄文を付ける。

図238は、蓋の握り手部分で円形で中央部を窪ませる例、突起部を付け多角形にする例、左右対象の長い握り手とする例などいろいろある。

亀ケ岡式土器の搬入・模倣品（図版239・240・249の12～14，17）

１，２図240の25，26は、大洞Ｂ式段階の例で数は少ない。BC式段階は最も量が多く器種も豊富で、深鉢、浅鉢、注口土器などがみられる。羊歯状文をみると単純な例、入り組む例、玉を持つ例などがある。また、羊歯状文などは、注口土器では亀ケ岡式の文様に近いが、深鉢では東北南部の秋田県、新潟県北部に似る。

大洞C1式段階では、浅鉢が最も多く深鉢、注口土器、器台がわずかにみられる。これらの土器は、その量も種類も多く、定量の土器が在地の型式の土器と共に器種セットとして使用されていたと考えられる。また、注口土器では、C1式段階のものに黒色の被膜が残る例が多い。

図240の24は、C2式段階の注口土器。図239の59，64は、C1期の器台と壺。同図60，61，63～73は、注口土器。図240の21～23，29は、BC期、27，28，31は、C1期の注口土器。30は、小型の壺。また、図239の36，62・図240の３，７，10，13，15，32は、在地の土器。

② **下野式期**（図版68の10・73の12・74の５，６，９・75の７，11，12・241～247・249の15，16）

大洞C2式からＡ式にかけては、下野式が設定されており、おおよそ３段階に細分されている。境Ａ遺跡にみられる土器は、大洞C2式段階で下野１・２式にあたると考えられる。

搬入・模倣品（図版74の５，６・241の26～36）

26，27，28は、丁寧に磨かれ工字文が施される下膨れの壺。29は、下半が撚糸文になると考えられるキャリパー状の深鉢。30～35は、粗文の深鉢で肩部に沈線や眼鏡状文を施す。36は、頸部にくびれを持たない深鉢。図74の5は、口縁部に入り組んだ鈎手文を施し胴部は網目状撚糸文となる。同６は、連続押し引き列点文を沈線風に施す。この２個体は、在地的要素が強い。その他、壺の中にも搬入品と考えられる図68の10や図243の11，13，19，２がある。図版245の24は、突帯文土器で隆帯上を平たい草木の茎状の工具で押圧する。

１類（図版75の７・241の１～25，37・242の１～14，33）眼鏡状の隆帯文を施す鉢で、胴部に楕円文や「Ｓ」状文が施される。口縁部に眼鏡状隆帯文を施す例と肩部に施す例がある。

ａ１（図版75の７・241の１～８，11，12，14～18，21～24・242の１～５，７～13）肩部に眼鏡状隆帯文を施す鉢で縄文地の楕円文や「Ｓ」状文が施される422の２，３と、沈線により楕円工字文を施す241の１，25・242の４がある。後者が新しい要素。

ａ２（図版241の９，10，13，19，37・242の33）口縁部がやや立ぎみとなる鉢で、縄文地に「Ｓ」状の文様を施す。

２類（図版242の15～32・243の１～５）立ぎみの口縁で胴の張る壺状の深鉢。

ａ１（図版242の15～24，28・243の１～５）地文縄文の楕円文や鈎手状文を施す深鉢。18，24，28は、頸部に隆帯をもつ。16は、胴部に網目状撚糸文を施す。20は、粗大工字文。

ａ２（図版242の29，30，32・249の15）頸部に隆帯を設け突起を付け、眼鏡状隆帯文風にする例。

ｂ１（図版242の25～27）口縁部が小さく外反し、眼鏡状隆帯文や楕円文などを施す。

ｃ１（図版242の31）無頸の壺状となる鉢で、沈線間の縄文を交互に擦り消す。

３類（図版68の10・243の６～20，24）壺を集めた。口縁部や肩部の破片である。

ａ１（図版243の６～９）口縁部に沈線を施す立ぎみの壺。

ｂ１（図版68の10・243の10～14，24）口縁部が外反する例で、眼鏡状文を施す68の10，243の10，24がある。また、10，11，14は、同一個体で幅広沈線の楕円文を施す。

ｃ１（図版243の16）口縁端部に眼鏡状隆帯文を持つ例で無頸の壺。

ａ２（図版243の19，20）肩部に眼鏡状隆帯文を施す例で20は、赤色の漆状の被膜が残る。

ｄ１（図版243の18）下膨れの壺で沈線文が施される。

４類（図版243の22，23，26～28）口縁立ち胴張りとなる深鉢。

ａ１（図版243の22，26～28）大型で沈線文を施す例で、「ハ」状に刻む27や縄文地に２条の斜行沈線を施す28などがある。

ａ２（図版243の23，25）縦条痕で口縁に刺突文を施す23とくずれた組手文風の文様を施す25がある。古い段階の例か。

５類（図版242の34・244の１～16，30～32）半円状の器形の浅鉢で、沈線文や楕円工字文が施されるもの。

ａ１（図版244の１，３～11，13，32）数条の沈線を施し、口縁部に鎖線状の沈線や刻みをつける例。10，13は、「ハ」状の文様の付く突起を持つ例。

ａ２（図版244の12，14，15，31・245の９）眼鏡状文や楕円工字文が施される例。31は、くずれた雲形文が付けられる例で古い様相か。

ａ３（図版242の34・244の16）縄文地に沈線や楕円文を施す例。

ｂ１（図版244の30）「く」状に折れる口縁の浅鉢。角ばった楕円文が施される。

６類（図版73の12・224の18～22，24～29・245の１～８，10～13，16～23，26）条痕や縄文を施す「く」状口縁の中型深鉢で胴上部に工字文が施される例がある。

ａ１（図版73の12・224の18～22，24～29・245の１～８，10，11）長く伸びる「く」状口縁の深鉢で、内面に幅広沈線を持つ例が多い。また、胴上部には、粗大工字文が施される図245例や列点文を施す例がある。

ａ２（図版245の12，13，16～22）ａ１と同様の器形でやや口縁部が短く、くびれも小さい。胴部には、列点文が施される。18は、口縁内面が肥厚する。

ｂ１（図版245の23，26）口縁が小さく外反すると考えられる深鉢。26は、撚糸文を施す例。

ｃ１（図版245の15）無頸の壺状となる例で、口縁部に列点文が施される。

７類（図版245の14，25，27～29・246の１～23，26～29）胴上部にくびれをもち、緩く外反する深鉢で縦条痕となる。

ａ１（図版245の14，25）有文で胴上部にくびれをもち、緩く外反する深鉢。

ａ２（図版245の28・246の１～３，５～９）口縁端部が膨れ、刻みや押し引きによるクシ状文を施す例で、突起状の瘤が付く。

ａ３（図版245の27，29・246の４，10～23，26～29）口縁端部が膨れず、頂部や外面から刻みや押圧を加える例で、列点文や楕円文を施すものがある。18，20，22，23は、新しい段階の例か。

８類（図版74の９・75の11・247の13）胴上部で小さくくびれ外反する深鉢で縦条痕を施す。図75例は口縁下に列点文が施される例。

９類（図版247の12，14，15）胴上部が張り、口縁が小さく外反する深鉢で端部に押圧が加えられる。

10類（図版75の12・246の24，26・247の１～11，16）胴部にくびれをもたない深鉢。

ａ１（図版75の12）底部から真っすぐに外反する例。

ｂ１（図版247の８～11，16）胴上部でやや膨らむ器形と考えられる例。

ｂ２（図版246の24，25・247の1～７，11）口縁端部をクシ状の工具で刻むか押圧で波状風にする深鉢。２，４，６，７は、凹線文を施す例。また、列点文を施す11がある。

11類（図版247の17～32・249の16）撚糸文を施す深鉢で、折り返し口縁を持つ例ともたない例がある。

ａ１（図版247の17～20）折り返し口縁の深鉢。17は、口縁，胴部とも撚糸文。18，20は、口縁部縄文，胴部は撚糸文。19は、無節の縄文。

ａ２（図版247の21，24）口縁を折り返さない例。21は、口縁部は横、胴部は縦の網目状撚糸文。

ｂ１（図版247の22，23）口縁が小さく外反する例。口縁部は擦り消し、胴部は網目状撚糸文。

25～30　は、11類の胴部と考えられるもの。

ｃ１（図版247の31，32・249の16）器形はよく分からないが胴部に撚糸文を施す例で、31は縄文と撚糸文で羽状とする。また、249の16は、撚糸文を斜行と縦に施し、鈎手状文が付けられる。32は、鋸歯文を施す例で、中屋式の蓋（238の13）にこのような文様があり、中屋式段階の土器か。

晩期中葉の土器は中屋式段階と下野式段階である。中屋式段階では、「く」状口縁の深鉢が比較的変化をたどりやすい。そこでおおよその変遷をたどってみる。第１段階では、羊歯状文や入り組文をもつ。第２段階では、羊歯状文に連続波状沈線文。第３段階では、「入」状組手文や雷文風の鍵手状文（文様帯幅が狭く何段も施す）。第４段階では、鍵手状文や組手状文に鈎状文を施す。第５段階では、「-(」状文に鈎状文。このようにおおまかに変化をたどることができる。しかし、各段階で前後の文様を共有したり、継続的に施す文様があり単純な組み合わせとはならないようだ。また、他器種の変化も考慮するとおおよそ３期ぐらいに分けられるだろう。

下野式期では、井口遺跡にみられた下野式の古い段階と丸山Ａ遺跡にみられる新しい段階の土器が含まれている。おそらく２分できるのであろう。また、下野式の古い部分を中屋３式として中屋式の範疇に含める南氏の考えには賛成しかねる。

（酒井）

引用・参考文献

安孫子昭二 1969 「東北地方における縄文後期後半の土器様式」石器時代 第9号

1971 「縄文後期中葉の土器」『平尾遺跡調査報告(2)』

1980 「コブ付土器様式から亀ケ岡様式への変遷過程」考古風土記 第5号

1981 「瘤付土器」『縄文文化の研究4』 雄山閣

1982 「縄文後期の土器 関東・中部地方」『縄文土器大成3』

1983 「第5章 縄文時代後・晩期」『村山市史』－別巻1－

1988・89 「加曽利B式土器の変遷と年代(上)(下)」 東京考古 第6・7号

1989 「瘤付土器様式」『縄文土器大観4』 小学館

泉 拓良 1981 「近畿地方の土器」『縄文文化の研究4』 雄山閣

1989 「縁帯文土器様式」『縄文土器大観4』 小学館

市堀藤夫 1974 「酒見新堂遺跡」『富来町史』－資料編－

大塚達郎 1983 「縄文時代後期加曽利B式土器の研究1」 東京大学考古学研究室研究紀要2

加藤三千雄 1986 「第6章 第1節 第12群土器」『真脇遺跡』 能都町教育委員会

1988 「新保・新崎式土器様式」『縄文土器大観3』 小学館

金子裕之 1989 「安行式土器様式」『縄文土器大観4』 小学館

金沢市教委 1981 『金沢市中屋遺跡』 金沢市教育委員会

狩野 睦・森 秀典 1985 『富山県立山町総合運動公園内野沢狐幅遺跡緊急発掘調査概要』 立山町教育委員会

狩野 睦 1988 「串田新・大杉谷式土器様式」『縄文土器大観3』 小学館

久保 清・高堀勝喜 1951 「河北郡宇ノ気町気屋遺跡」 石川考古学研究会会誌 第3号

紅村 弘他 1978 『東海の先史文化の諸段階』－資料編2－

小島俊彰 1964 『高岡公園小竹藪縄文遺跡』 高岡市教育委員会

1966 「東砺波郡井口遺跡出土遺物の紹介」 富山考古学会会誌 大境 第2号

小島俊彰・出崎政子 1976 『勝木原遺跡』 富山県立高岡工芸高校地歴クラブ

小島俊彰 1972 「縄文中期」『富山県史』－考古編－

1974 「北陸の縄文時代中期の編年－戦後の研究史と現状－」富山考古学会会誌 大境 第5号

1979 「本江遺跡」『滑川市史』－考古資料編－ 滑川市

1981 「井口式土器」『縄文文化の研究4』 雄山閣

1983 「"串田新Ⅰ式，Ⅱ式の編年観は逆転する"か」『北陸の考古学』 石川考古学研究会会誌 第26号

1988 「上山田・天神山式土器様式」『縄文土器大観3』 小学館

小林達雄 1988 「火炎土器様式」『縄文土器大観3』 小学館

酒井重洋 1976 「上市町眼目新丸山A遺跡」 富山考古学会会誌 大境 第6号

酒井重洋・橋本正春 1977 『富山県宇奈月町浦山寺蔵遺跡緊急発掘調査概要』 宇奈月町教育委員会

神保孝造・岡上進一・松本幸治 1977 『富山県砺波市厳照寺遺跡緊急発掘調査概要』 砺波市教育委員会

神保孝造・橋本正春・飯田 勉・島田修一・塚田一成 1985 『富山県八尾町長山遺跡発掘調査報告書』 八尾町教育委員会

末木 健 1988 「曽利式土器様式」『縄文土器大観3』 小学館

高堀勝喜 1964 「金沢市近郊八日市新保並びに御経塚遺跡の調査」『押野村史』

高堀勝喜 1965 「北陸」『日本の考古学(3)』－縄文時代－ 河出書房新社

高堀勝喜・小島俊彰他 1979 『上山田貝塚』 宇ノ気町教育委員会

高堀勝喜・西野秀和　1983　『上田うまばち遺跡』　押水町教育委員会
高堀勝喜編　1983　『野々市町御経塚遺跡』　野々市町教育委員会
1986　「第６章　第１節　北陸の縄文土器編年」『真脇遺跡』　能都町教育委員会
田中耕作　1989　「三十稲場土器様式」『縄文土器大観４』　小学館
丹羽　茂　1989　「中期大木式土器様式」『縄文土器大観１』　小学館
丹羽佑一　1989　「凹線文系土器様式」『縄文土器大観４』　小学館
寺崎裕助　1989　「新潟県中越地方における縄文中期後半の土器について」『新潟考古学談話会会報』第３号　新潟考古学談話会
寺崎裕助・秦　繁治・寺崎重雄・小島幸雄　1990　『十二平遺跡発掘調査報告書』　能生町教育委員会
出崎政子　1967　「北陸地方の縄文時代晩期についてⅠ」　富山考古学会会誌　大境　第３号
富山県教育委員会　1987　『北陸自動車道遺跡調査報告書－朝日町編３－』　馬場山Ｄ・Ｇ・Ｈ遺跡
1989　『北陸自動車道遺跡調査報告書－朝日町編４－』　境Ａ遺跡遺構編
1990　『北陸自動車道遺跡調査報告書－朝日町編５－』　境Ａ遺跡石器編
中島俊一・湯尻修平　1977　『松任市長竹遺跡発掘調査報告』　石川県教育委員会
永峰光一他　1967　『佐野』　長野県考古学会研究報告書３
永峰光一　1981　「中部・北陸地方」『縄文土器大成４　晩期』　講談社
新潟県　1983　『新潟県史』－資料編１－
西田泰民　1989　「堀之内・加曽利Ｂ式土器様式」『縄文土器大観４』　小学館
西野秀和　1989　「第５章　出土遺物　第１節土器・第８章　考察　第２節　後・晩期の土器編年」『金沢市米泉遺跡』石川県埋蔵文化財センター
沼田啓太郎1956　「旧石川郡安原村中屋遺跡調査報告」　石川考古学研究会会誌　第８号
橋本　正・神保孝造　1974　『富山県小杉町水上谷遺跡緊急調査概要』　富山県教育委員会
橋本　正・神保孝造・池野正男・柳井　睦　1975　『富山県庄川町松原遺跡緊急発掘調査概報』　庄川町教育委員会
橋本正・酒井重洋・久々忠義　1980　『富山県井口村井口遺跡発掘調査概要』　井口村教育委員会
久田正弘　1986　「第６章　第１節　第18群土器～第23群土器」『真脇遺跡』　能都町教育委員会
三上徹也　1988　「唐草文系土器様式」『縄文土器大観３』　小学館
三友国五郎他　1975　『高井東遺跡』　埼玉県教育委員会
湊　晨　他　1959　『天神山遺跡発掘調査報告書』　富山県教育委員会・魚津市教育委員会
湊　晨　1972　「縄文時代後・晩期」『富山県史』－考古編－
南　久和　1985　『北陸の縄文時代中期の編年　他９編－南久和著作集第１集－』
南　久和・増山　仁　1986　「第四章遺物（土器）」「考察の部１，２，３」『金沢市新保チカモリ遺跡－第四次調査兼土器編－』　金沢市教育委員会他
南　久和　1989　「北陸晩期土器様式」『縄文土器大観４』　小学館
百瀬長秀　1984　「羽状沈線文をもつ土器の系統と展開」　長野県考古学会会誌　第49号
柳井　睦・池野正男　1976　『富山県立山町岩峅野遺跡緊急発掘調査概要』　富山県教育委員会
柳井　睦・池野正男・久々忠義　1977　『富山県大沢野町布尻遺跡緊急発掘調査概要』　大沢野町教育委員会
山内清男　1964　「縄文式土器－総論－」『日本原始美術１』　講談社
山本正敏　1990　『安居五百歩遺跡(2)』（縄文時代編）　福野町教育委員会
吉岡康暢　1971　「石川県下野遺跡の研究」　考古学雑誌　第56巻　第４号
米沢義光　1983　「羽咋郡志賀町火打谷大垣内遺跡出土土器再見」『北陸の考古学』　石川考古学研究会会誌　第26号
1986　「第６章　第１節　第14群土器～第17群土器」『真脇遺跡』　能都町教育委員会
1989　「気屋式土器様式」『縄文土器大観４』　小学館

表・図版

遺構	図版及土器NO	備　　考
16	71-1~3	
17	71-4	
18	71-5	
21	71-6	
22	71-7	
23	71-8	32号住P9
25	71-9~22	
26	71-23~28	
37	71-29•30	
38	71-31~•32	26号住P30
58	71-33	33号住P26
59	71-34	
64	71-35~39	
79	72-1•2	
82	72-3~6	
92	72-7•8	
96	72-9	
100	72-10•11	
101	72-12	
102	72-13~15	19号住P23
105	72-16~25	
106	72-26•27	
110	72-28~33	
111	72-34•35	
112	72-36~46	19号住P27
121	73-1~3	
124	73-4~6	
125	73-7~14	
126	73-15~19	
127	73-20~24	
129	73-25•26	
130	73-27~30	
131	73-31•32	
135	73-33~35	
136	73-36~39	
138	73-40	
139	73-41	
140	73-42~53	
142	74-1•2	
143	74-3~13	穴170 と同一個体

遺構	図版及土器NO	備　　考
144	74-14~24	
145	74-25~29	
147	74-30~33	
148	74-34~36	
150	74-37	
153	74-38	
154	74-39•40	
156	74-41	
161	74-42	
164	74-43~45	
149	75-1~14　26-1　248-15•18	
162	75-15~23	
168	75-24•25	
170	75-26~31	穴143 と同一個体
171	75-32~38	
174	75-39~42　26-2	
177	76-1~3	
180	76-4~6	
185	76-7~13	
188	76-14~16	
190	76-17	
191	76-18~21	
199	76-22	
203	76-23~25	
205	76-26~37	
218	76-38~42	
220	76-43~45	
226	76-46~49	
229	76-50~53	
222	77-1~10	
223	77-11~23	
230	77-24~28	
231	77-29~35	
232	77-36•37	
233	77-38~42	
234	77-43	
235	26-3	
238	77-44•45	
239	77-46	
240	77-47•48	

遺構	図版及土器NO	備　　考
247	77-49	
248	78-1~3	
249	78-4~11	
251	78-12~16	
253	78-17•18	
255	78-19~21	
257	78-22~25	
258	78-26~28	
264	78-29	
266	78-30~33	
268	78-34•35	
270	78-36	
271	78-37	8号住P18
274	78-38•39	
275	78-40	穴278 と同一個体
277	78-41	穴282 と同一個体
278	78-42~45	穴275 と同一個体
279	78-46•47	
280	78-48~57	
281	79-1~10　68-1	
282	79-11~22 248-3	穴275•277•278 と同一個体
285	79-23~31	
287	248-20,21	
289	79-32~36	
290	79-37~39	
293	79-40~42	
294	79-43•44	
296	80-1~26　248-6	
297	80-27~30	
298	80-31~37	
299	80-38~45	
300	80-46~48	
326	80-49~51	
328	80-52•53	
321	81-1~8	
330	81-9•10	
331	81-11~18	
333	81-19~25	
336	81-26~28	

表１　境Ａ遺跡穴出土土器一覧表

遺構	図版及土器NO	備　　考
337	81-29~45	
338	81-46~50	
2002	81-51・52	
2006	81-53~55　248-16	
340	82-1~11	
2001	82-12~20	
2003	82-21~34	
2004	82-35~40	
2005	82-41~45	
347	82-46~49	
348	82-50~52	
351	83-1・2	
352	83-3 ~9	
356	83-10	
359	83-11~14	
362	83-15~17	
364	83-18~24	
368	83-25	
369	83-26~29	
371	83-30~37	
372	83-38~51	
375	84-1~4	
376	84-5~7	
379	84-8~12	
380	84-13~15	
384	84-16~18	
385	84-19~21	
388	84-22~32	
389	84-33~35	
394	84-36~39	
396	84-40~54　248-1	
398	84-55	
399	84-56・57	
400	85-1~4	
401	85-5~9	
402	85-10	
406	85-11~14	
407	85-15~18	
408	85-19~21	
409	85-22~27　248-12	

遺構	図版及土器NO	備　　考
411	85-28~33	
413	85-34~43	
415	85-44	
416	85-45	
417	85-46~49	
418	85-50~53	
419	85-54・55	
420	85-56~58	
423	86-1~12	
424	86-13~20	
425	86-21~23	
426	86-24~32	
427	86-33	
428	86-34~36	
429	86-37~45	
431	86-46~51	
432	86-52・53	
435	86-54~57	
436	86-58~63	
440	86-64	
445	86-65~70	
437	87-1~6	
438	87-7・8	
625	68-5	
502	87-9・10	
503	87-11~13　248-13	
506	87-14~16	穴565 と同一個体
512	87-17	穴525 と同一個体
513	87-18	
514	138-6	
515	87-19~25	
516	87-26~32　248-5	
517	87-33~36	
518	87-37~39	
522	87-40~42	
524	87-43~46	
526	87-47	
527	87-48・49	
528	87-50~52	
529	88-1	

遺構	図版及土器NO	備　　考
533	88-2・3	
534	88-4 ~10	
536	88-11~18　248-14	穴538・1148と同
538	88-19~22	穴536・1148と同一個体
540	88-23~25	
541	88-26~29	
543	88-30~50　68-4	
546	89-1~8	穴556 と同一個体
548	89-9~19	
552	89-20~25	
556	89-26~31	穴546 と同一個体
559	89-32~35	
560	89-36~40　248-24	
562	89-41~44	
566	89-45~49	
567	89-50~54	穴887 と同一個体
568	89-55・56	
570	89-57~59	
572	90-1~3	
573a	90-4~7　26-4	
573b	90-8~10　26-4	
573c	90-11~14　26-4	
574	90-15	
577	90-16・17　248-26	
579	90-18~20	
583	90-21	
584	90-22~27	
585	90-28~30	
590a	90-31・32	
590b	90-33~35	
591	90-36~40	
592	90-41	
596	90-42・43	
599	90-44・45	
604	90-46~49	
605	90-50~52	
610	91-1~3	
613	91-4~12	
614	91-13・14	
615	91-15・16	

表 2　境 A 遺跡穴出土土器一覧表

遺構	図版及土器NO	備　　考
616	91-17~19	
619	91-20~23	
622	91-24・25	
623	91-26~28	
625	91-29~42	穴631 と同一個体
626	91-43~46	
627	91-47~49	
628	92-1~8	穴625・628 と同一個体
629	92-9	
630	92-10~15	
631	92-16~24	穴625・628 と同一個体
632	92-25~27	
633	92-28~30	
636	92-31・32	
637	92-33・34	
639	92-35~44	
640	92-45~50	
642	92-51・52	
643	92-53~56	
648	92-57・58	
649	92-59	
641	93-1~14	
650a	93-15~26	
650b	93-27・28	
650d	93-29~32	
658	93-33~36	
660	93-37~39	
661	93-40	
666	93-41	
668	93-42	
669	93-43~47	
670	94-1~6	
672	94-7~9	
675	94-10~17　248-11	
676	94-18~22	
678	94-23~25	
680	94-26~29	
681	94-30~41	
682	94-42~44	
684	94-45・46	

遺構	図版及土器NO	備　　考
685	95-1~4	
688	95-5~9	
690	95-10~12	
691b	95-13~18	
691c	95-19~21	
691a	95-22	
693	95-23・24	
695	95-25~27	
696	95-28~34	
697	95-35~40	
698	95-41~43	
699	95-44~48	
700	95-49	
694	96-1~39 248-17　穴787・789 と同一	
704	96-40~42	248-10
705	96-43~45	
706	96-46~48	
710	96-49・50	
711	97-1~9	
713	97-10・11	
714	97-12~18	
715	97-19~22	
721	97-23~26	
723	97-27・28	
725	97-29~34	
726	97-35・36	
727	97-37・38	
728	97-39・40	
729	97-41~43　26-5	
731	98-1~4	
732	98-5~8　26-6	
733	98-9~15	
734	98-16~24	
735	98-25・26	
737	98-27~30	
738	98-31~43	
739	98-44~47	
742	98-48・49	
746	98-50	
747	98-51~53	

遺構	図版及土器NO	備　　考
750	98-54・55	
751	99-1~3	
754	99-4~11	穴925・953・965 と同一
763	99-12~17	
767	99-18~22	
768	99-23・24	
769	99-25~28　248-19	
771	99-29・30	
772	99-31~43	
773	96-7	
774	99-44~51	穴788 と同一個体
775	99-52	
776	99-53	
778	100-1	
779	100-2~6	
780	100-7	
781	100-8~12	
782	100-13・14	
784	100-15~17	
788	100-18~24	穴774 と同一個体
789	100-25~28	穴694・787 と同一個体
790	100-29・30	
791	100-31・32	
792	100-33	
794	100-34~36　26-3	
802	100-37・38	
803	100-39~44	
805	100-47~49	
806	101-1~3	
807	101-4~7	
808	101-8~11	
809	101-12~15	
810	101-16~18	
811	101-19~21	
812	101-22~28	
813	101-29・30	
814	101-31~37	
815	101-38~42	
817	124-53	
820	101-48・49	

表３　境Ａ遺跡穴出土土器一覧表

遺構	図版及土器NO	備　　考
823	101-50~52	
819	102-1~16	
824	102-17~23	
825	102-24•25	
827	102-26~31	
833	102-32•33	
834	102-34~36	
837	102-37~40	
839	102-41~44	
840	102-45~48	
847	102-49~51	
845	103-1~5	
848	103-6~11	
850	103-12•13	
851	103-14~16	
853	103-17	
854	103-18~23	
855	103-24	
856	103-25~30	
857	103-31•32	
858	103-33	
859	103-34~36	
860	103-37~39	
861	103-40~42	
862	103-43~47	
864	103-48	
863	104-1~6	
865	104-7~18	
867	104-19	
870	104-20•21	
872	104-22•23	
873	104-24	
875	104-25	
877	104-26~34	
878	104-35~37	
888	104-38•39	
893	104-40~43	
894	104-44	
895	104-45	
899	104-46	

遺構	図版及土器NO	備　　考
901	105-1~5　68-8	
908	105-6~10	
909	105-11~13	
910	105-14•15	
913	105-16•17	
914	105-18~23	
917	105-24•25	
918	105-26	
919	105-27~29	
920	105-30•31	
922	105-32•33	穴1007と同一個体
925	68-3	穴754•953•965 同一
928	105-34~38　68-3	
930	105-39•40	
931	105-41	
932	105-42•43	
927	106-1~12	
934	106-13~18	
935	106-19•20	
936	106-21~23	
937	106-24~26	
938	106-27	
942	106-28•29	
943	106-30•31　68-2	
945	26-8	
947	106-32•33	
948	106-34•35	
951	106-36•37	
950	107-1~5	
952	107-6~8	
953	107-9~11 68-3	穴754•925•965 同一
955	107-12~15	
956	107-16~33	
960	107-34•35	
961	107-36~39	
965	68-3	穴754•925•953 同一
967	107-40~42	
970	107-43~47	
975	107-48~51	
972	108-1•2	

遺構	図版及土器NO	備　　考
977	108-3~5	
983	108-6•7	
989	108-8•9	
993	108-10•11	
994	108-12~15	
1001	108-16•17	
1002	108-18•19	
1005	108-20~22	
1007	108-23~36	穴922 と同一個体
1008	108-37~39	
1009	108-40 42	
1018	108-43~45	
1010	109-1~10	
1013	109-11~18	
1017	109-19~26	
1024	109-27~36	
1025	109-37~41	
1027	109-42~46	
1030	109-47~49	
1026	110-1~12　68-7	
1028	110-13~30	
1031	110-31~35	
1032	110-36~49	
1033	111-1~13　68-9	
1034	111-14~16	
1037	111-17•18	
1038	111-19~22　248-25	
1039	111-23~27	
1042	111-28	
1043	111-29~31　248-2	
1102	111-32~40	穴1106と同一個体
1103	111-41	
1106	111-42~45	穴1102と同一個体
1107	111-46	
1108	111-47•48	
1112	111-49~54	
1113	111-55•56	
1114	111-57~60	
1115	112-1~6　248-27	
1117	112-7•8	

表 4　境Ａ遺跡穴出土土器一覧表

遺構	図版及土器NO	備　　考
1118	112-9~13	
1120	112-14・15	
1123	112-16~23	
1125	112-24~26	
1126	112-27~29	
1128	112-30~34	
1129	112-35・36	
1131	112-37~42	
1132	112-43~45	
1136	112-46~49	
1137	112-50	
1140	112-51~53	
1139	113-1	
1141	113-2~6	
1142	113-7~17	
1143	113-18・19	穴536・538 と同一個体
1144	113-20~23	
1148	113-24~31	穴536・538 と同一個体
1155	113-32~37	
1156	113-38	
1157	248-8	
1159	113-39・40	
1162	113-41~43	
1164	113-44~55	
1165	113-56・57	
1166	113-58・59	
1170	113-60	
1173	113-61~63	
1174	113-64・65	
1176	113-66	
1167	114-1~9	
1172	114-10~15　248-7	
1180	114-16・17	
1181	114-18~20	
1183	114-21~23	
1184	114-24~27	
1188	114-28~30	
1191	114-31~35	
1192	114-36~39	
1193	114-40・41	

遺構	図版及土器NO	備　　考
1194	114-42	
1196	248-23	
1197	114-43・44	
1198	114-45~55	
1199	114-56~58	
1203	114-59~63	
1213	115-1~4	
1216	115-5・6	
1218	115-7~9	
1222	115-10・11	穴1232と同一個体
1225	115-12~16	
1230	115-17~19	
1232	115-20~22	穴1222と同一個体
1301	115-23~27	
1302	115-28~32	
1303	115-33~35	
1304	115-36~40	
1305	115-41~45	
1306	115-46~51	穴1307と同一個体
1307	115-52 60	穴1306と同一個体
1308	116-1~6	
1312	116-7~14　68-10	
1313	116-15~21	
1315	116-22~25	
1316	116-26~33	
1318	116-34~40	
1319	116-41~45	
1321	116-46・47	
1322	116-48・49	
1327	116-50~53	
1328	116-54	
1323	117-1~4	
1329	117-5~8	
1330	117-9~12	
1331	117-13・14	
1332	117-15~22　248-22	
1333	117-23~27	
1334	117-28	
1336	117-29~31	
1337	117-32・33	

遺構	図版及土器NO	備　　考
1341	117-34~36	
1342	117-37~39	
1343	117-40~43	
1345	117-44~55　248-4	
1346	117-56・57	
1347	118-1~3	
1348	118-4~9	
1349	118-10	
1350	118-11・12	
1351	118-13~17	
1352	118-18~23	
1353	118-24・25　248-28	
1354	118-26~29	
1356	118-30~36	
1357	118-37~39	
1358	118-40~42	
1360	118-43~48	
1361	118-49~53　26-9	
1365	118-54	
1366	118-55	
1367	118-56	
1363	119-1~18	
1364	119-19~27	
1369	119-28~33	
1370	119-34~41	
1371	119-42~47	
1377	119-48・49	
1373	120-1~10	
1374	120-11~15	
1378	120-16~19	
1379	120-20~25	
1380	120-26	
1381	120-27・28	
1383	120-29~44	
1385	120-45-48	
1384	121-1~6	
1386	121-7~12	
1387	121-13・14	
1388	121-15~20	
1389	121-21~25	

表５　境Ａ遺跡穴出土土器一覧表

遺構	図版及土器NO	備　　考
1390	121-26・27	
1392	121-28・29	
1393	121-30~40	
1396	121-41~53	
1398	121-54~57	
1399	122-1~4	
1400	122-5~9	
1402	122-10	
1403	122-11~17	
1404	122-18・19	
1405	122-20~25	
1406	122-26~29	
1407	122-30・31	
1409	122-32・33	
1410	122-34~37	
1413	122-38~40	
1414	122-41	
1415	122-42・43	
1416	122-44	
1421	122-45	
1422	122-46・47	
1424	122-48・49	
1425	122-50~54	
1427	122-55~58	
1501	122-59~62	
1502	123-1~5　248-9	
1503	123-6・7	
1504	123-8・9	19号住P37
1507	123-10	
1512	123-11~13	
1513	123-14~16	
1514	123-17~20	
1518	123-21~23	
1519	123-24~26	
1522	123-27~29	
1523	123-30・31	
1526	123-32~34	
1527	123-35	
1528	123-36~38	
1529	123-39~45	

遺構	図版及土器NO	備　　考
1530	123-46~48	
1532	123-49~52	
1536	123-53~55	
1540	123-56	
1602	123-57~62	
1601	124-1~4	
1603	124-5~11	
1606	124-12~18	
1607	124-19-21	
1608	124-22・23	
1610	124-24~26	
1611	124-27	
1612	124-28~31	
1615	124-32	
2000	124-33~43	
2007	124-44	
2008	124-45~48	
2012	124-49~52	
2014	101-43~47	
2015	124-54~58	
913	123-8	

表の記載例

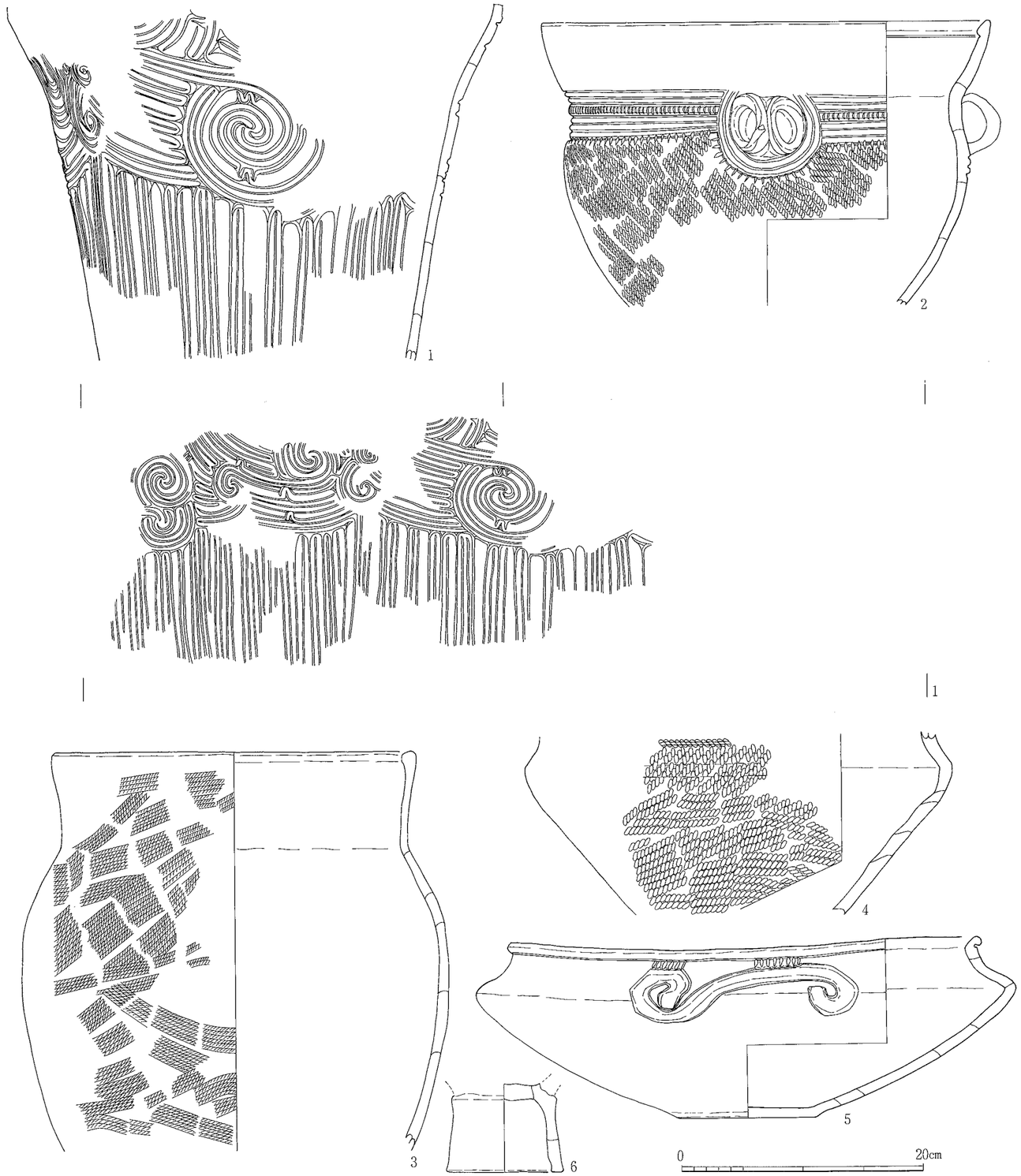
1．表中の遺構欄は、境Ａ遺跡第１分冊「遺構編」の穴番号に対比する。

2．図版及び土器No.欄は、図版番号を先に示し、「－」の後に、その写真図版頁内の番号を示した。また、実測図のあるものは、その後に、同様に示した。

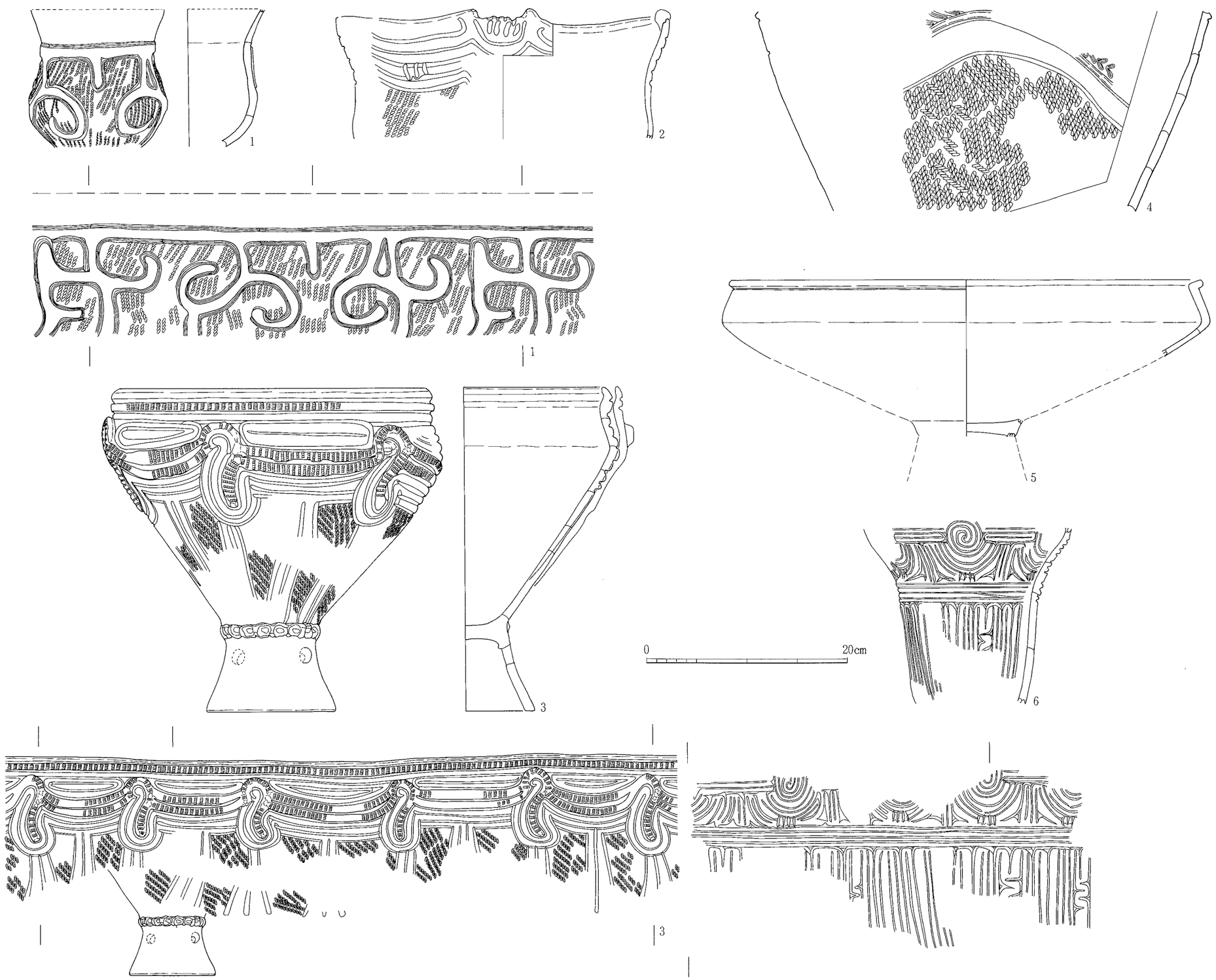
3．備考欄中の「穴170と同一個体」の表示は、第170号穴と第143号穴と同一個体の出土を示している。

表６　境Ａ遺跡穴出土土器一覧表

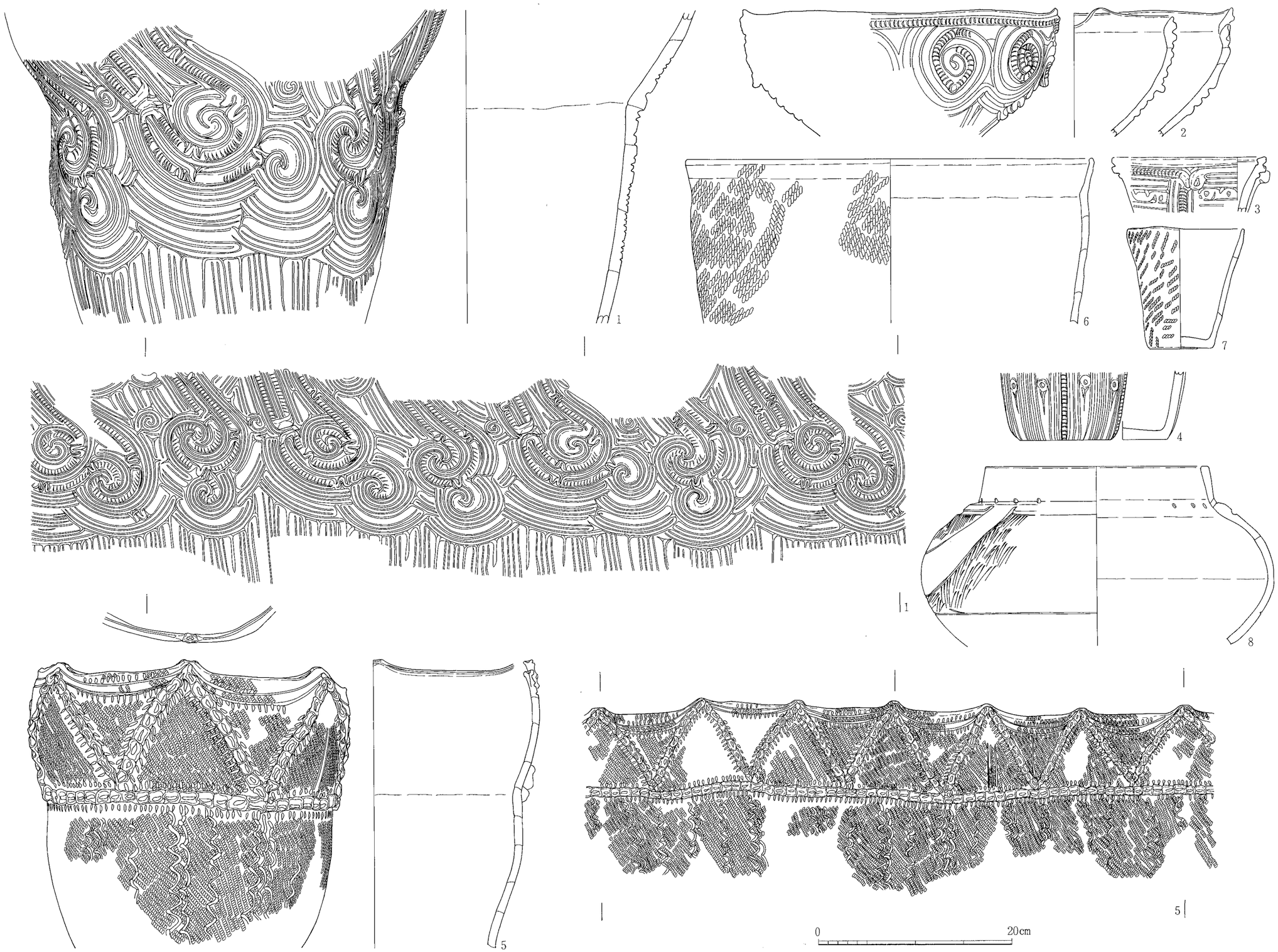
図　　版



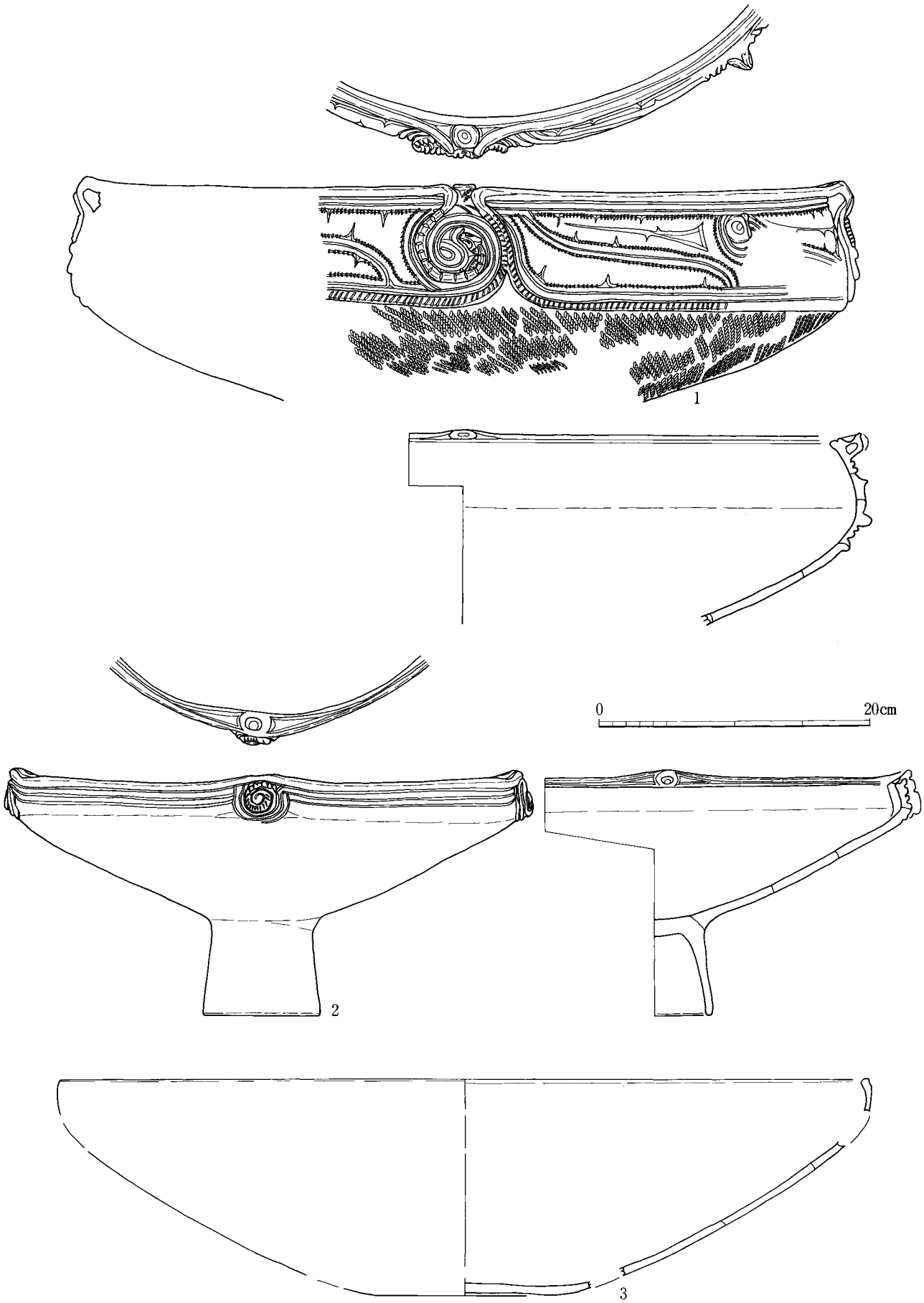
図版１　土器実測図・展開図（1/6）　第２号住居跡



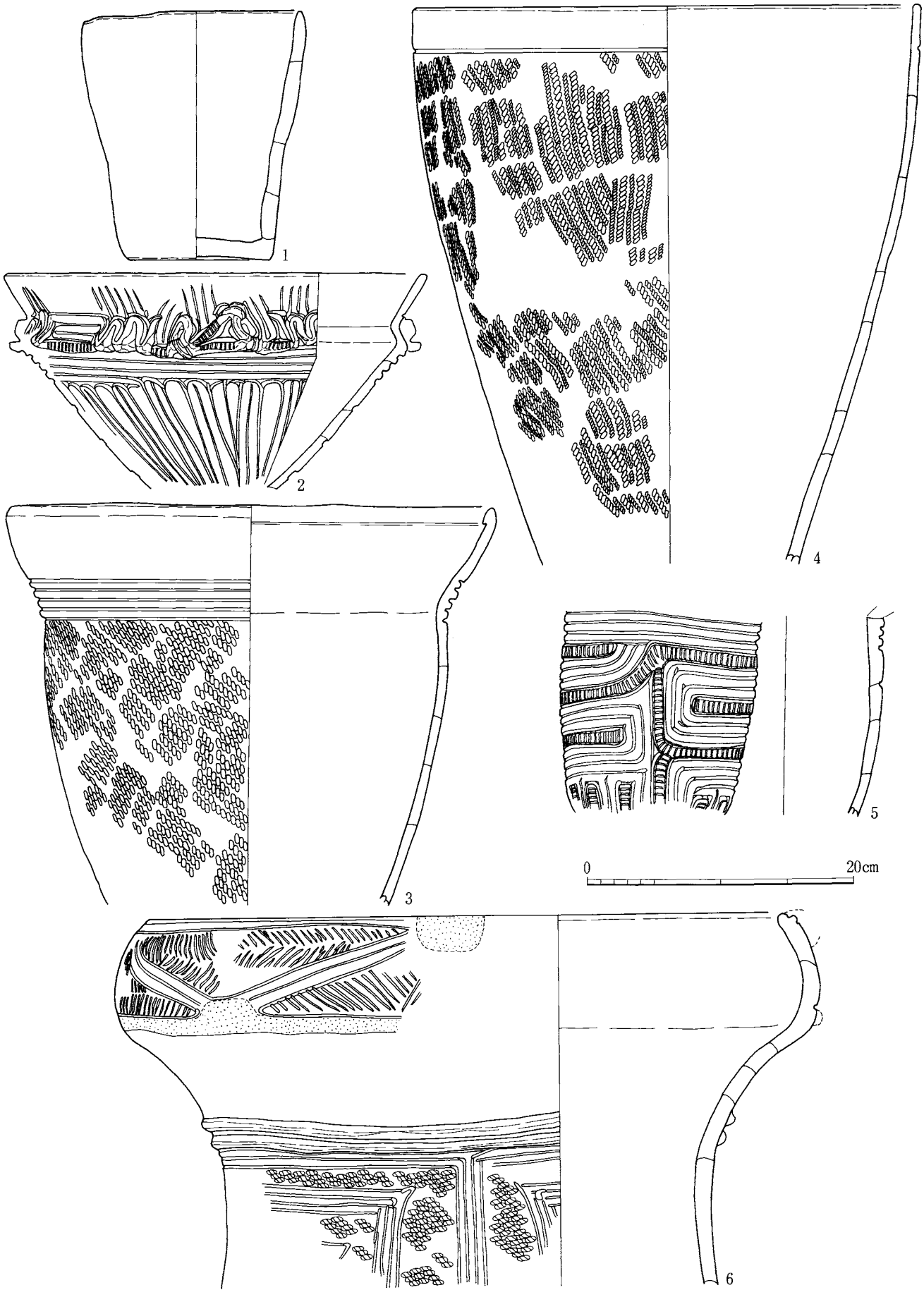
図版２　土器実測図・展開図 3(1/6). 6(1/4)　１．第４号住居跡　２．第６号住居跡　３．第８・12号住居跡　４．第10・11号住居跡
５．第13号住居跡　６．第14号住居跡



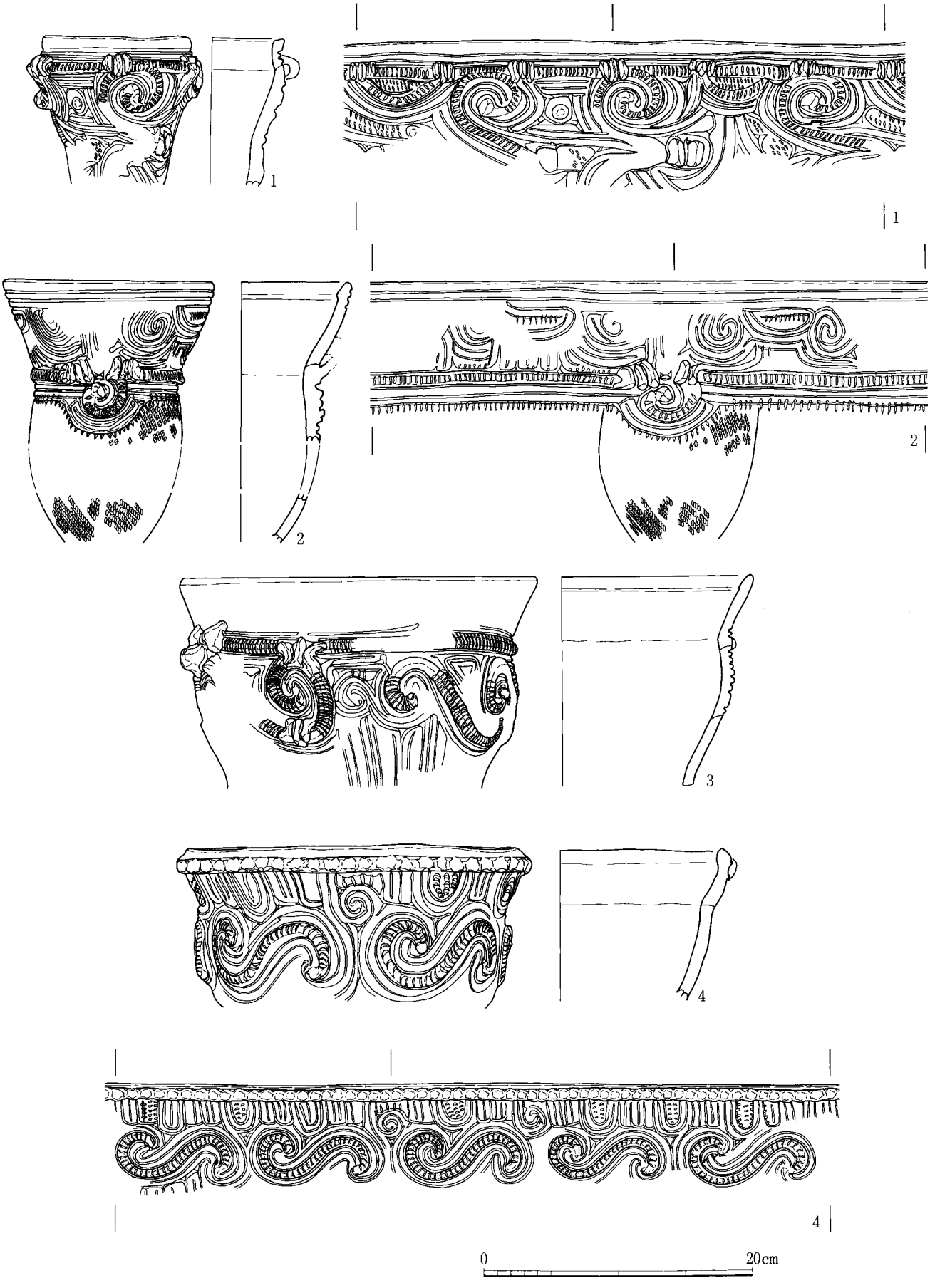
図版 3　土器実測図・展開図（1/6）　第16号住居跡



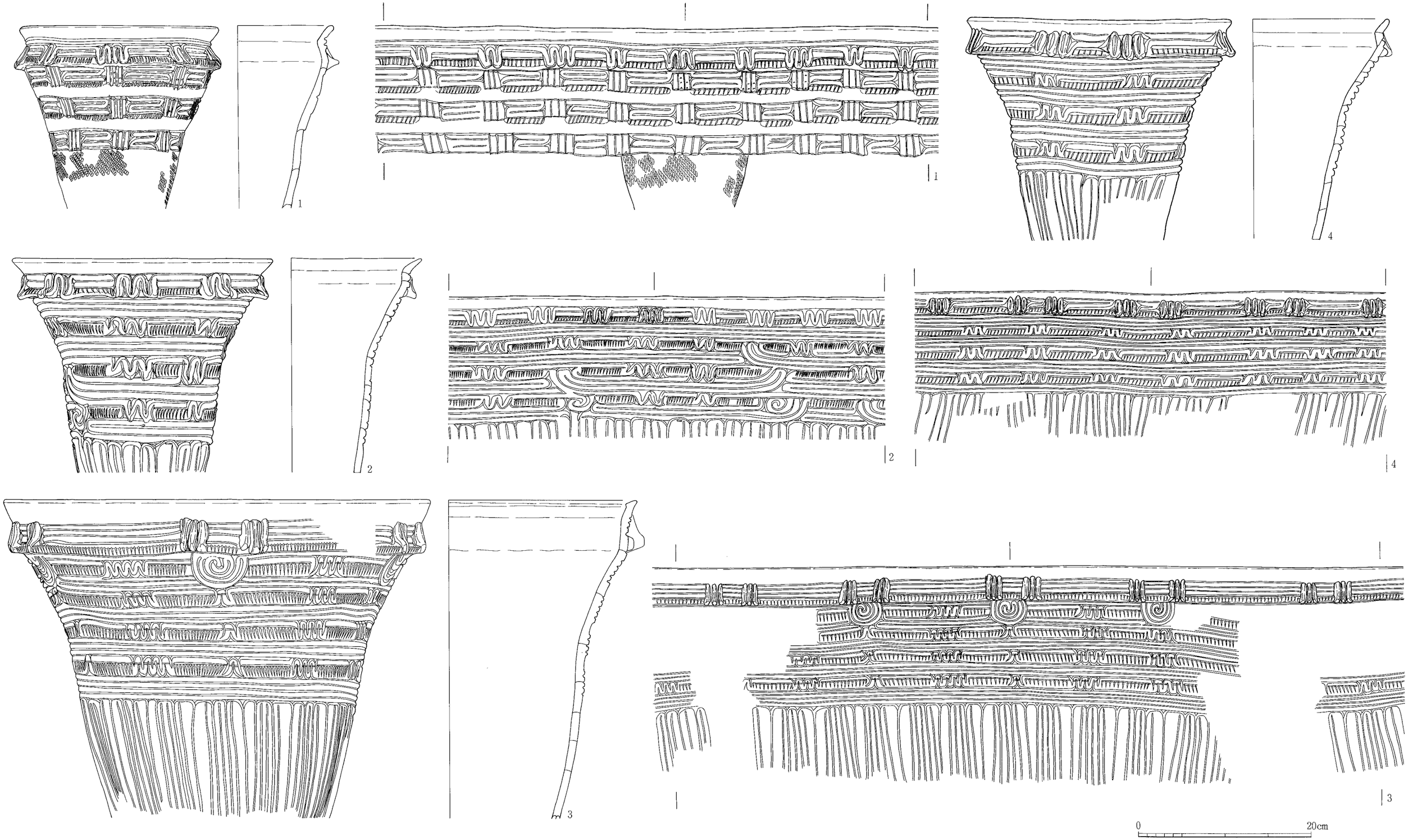
図版 4　土器実測図　第16号住居跡



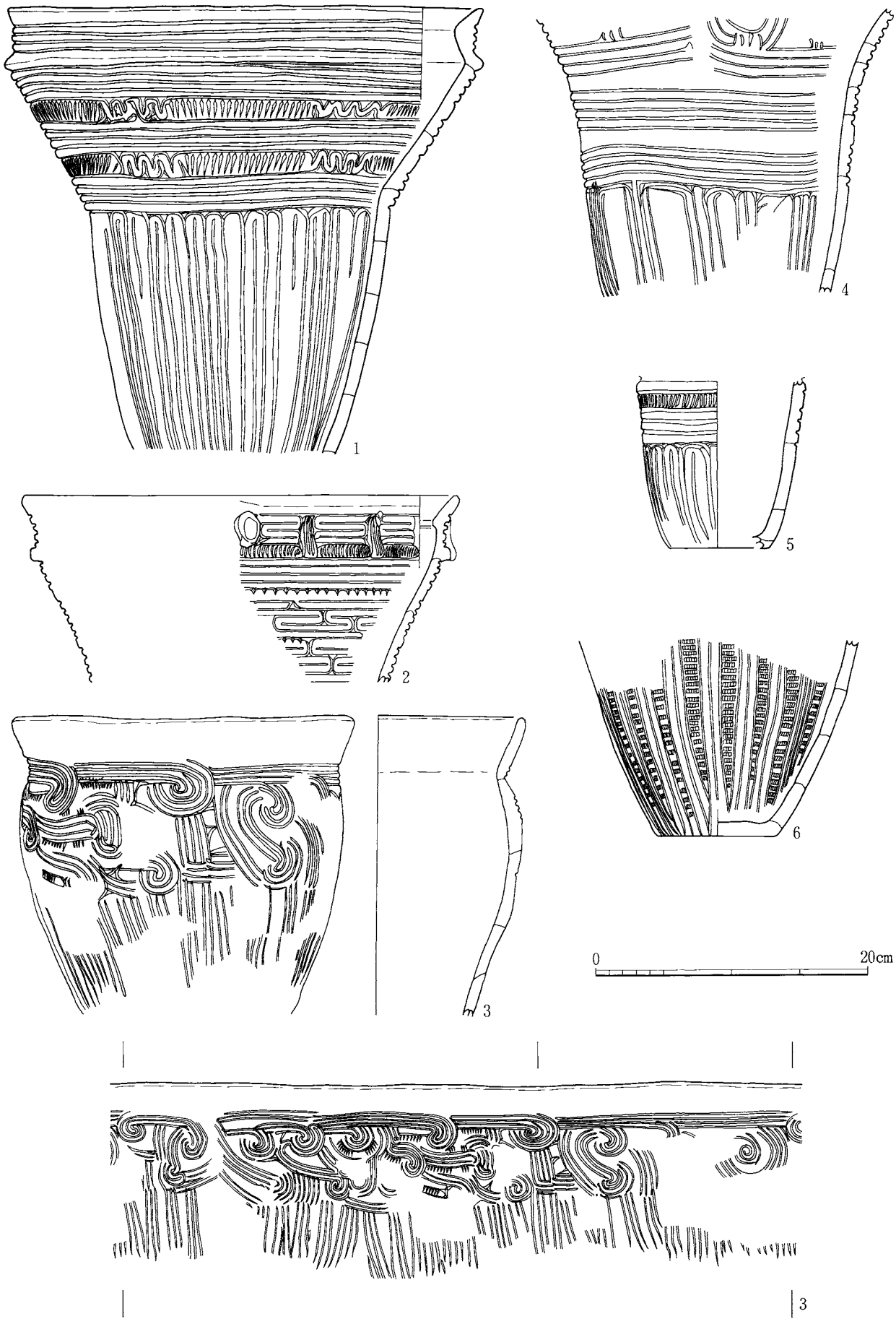
図版5　土器実測図　1～4．第17号住居跡　5・6．第19住居跡



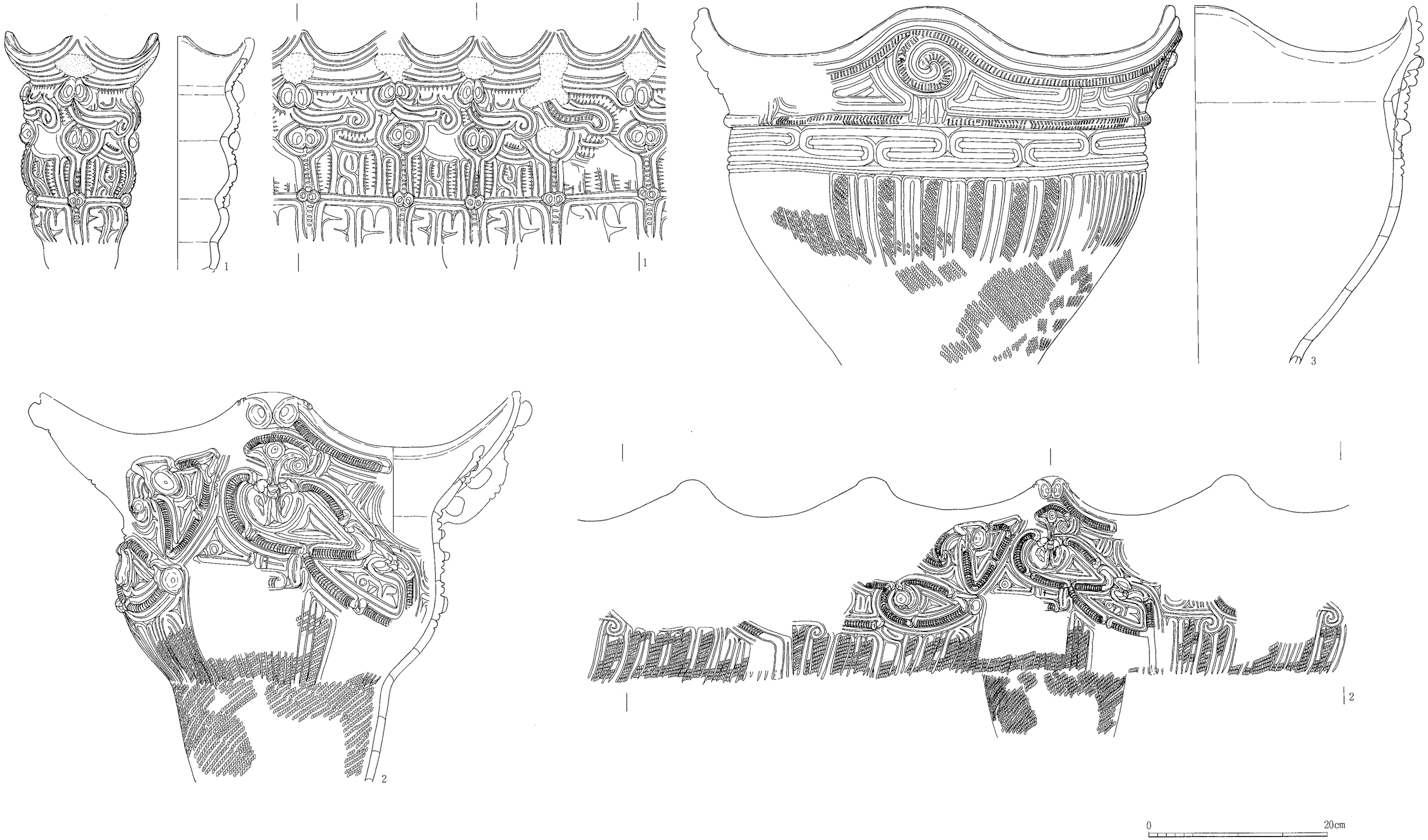
図版 6　土器実測図・展開図 1·2(1/4). 4(1/6)　第20号住居跡



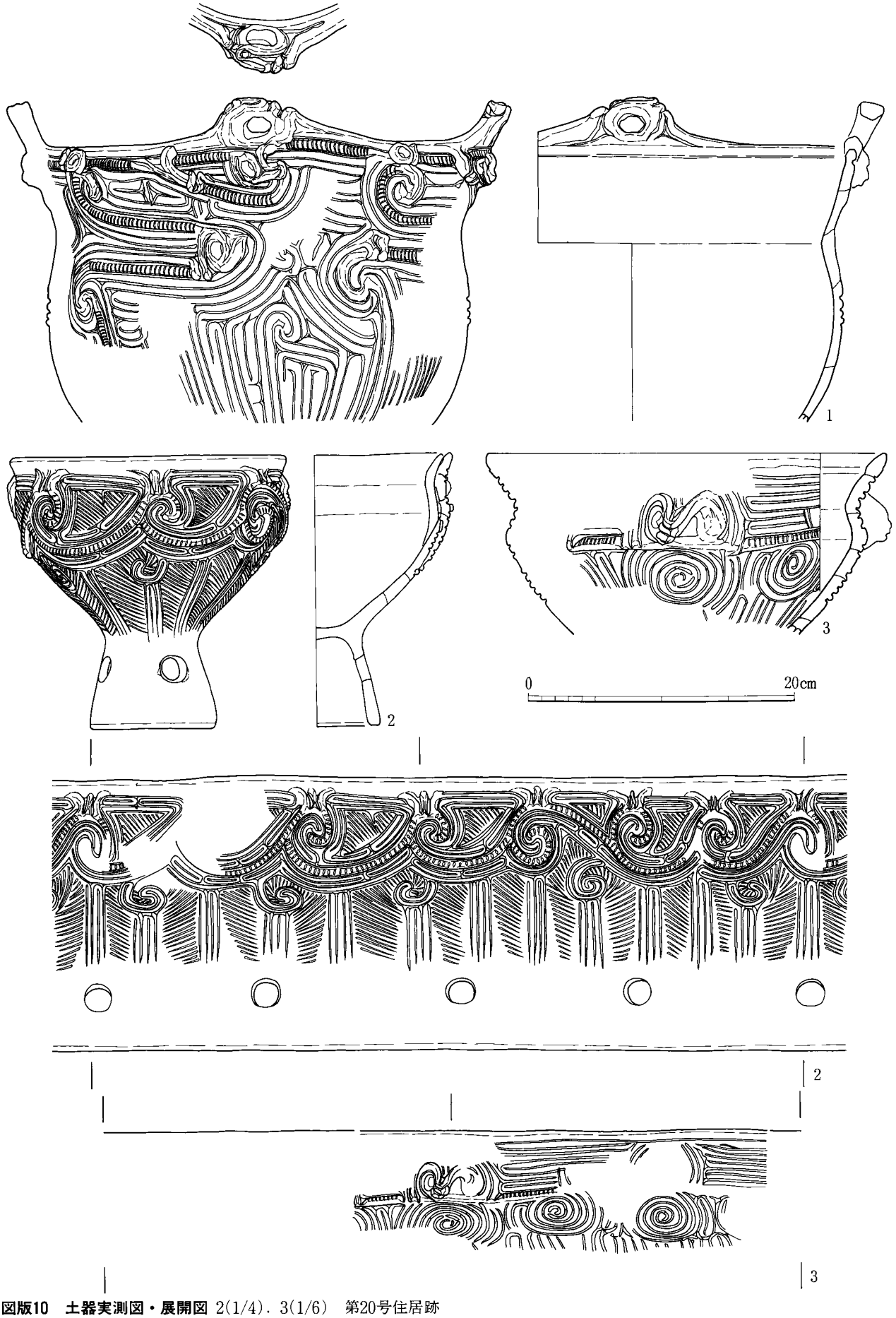
図版 7　土器実測図・展開図 1(1/4). 2～4(1/6)　第20号住居跡



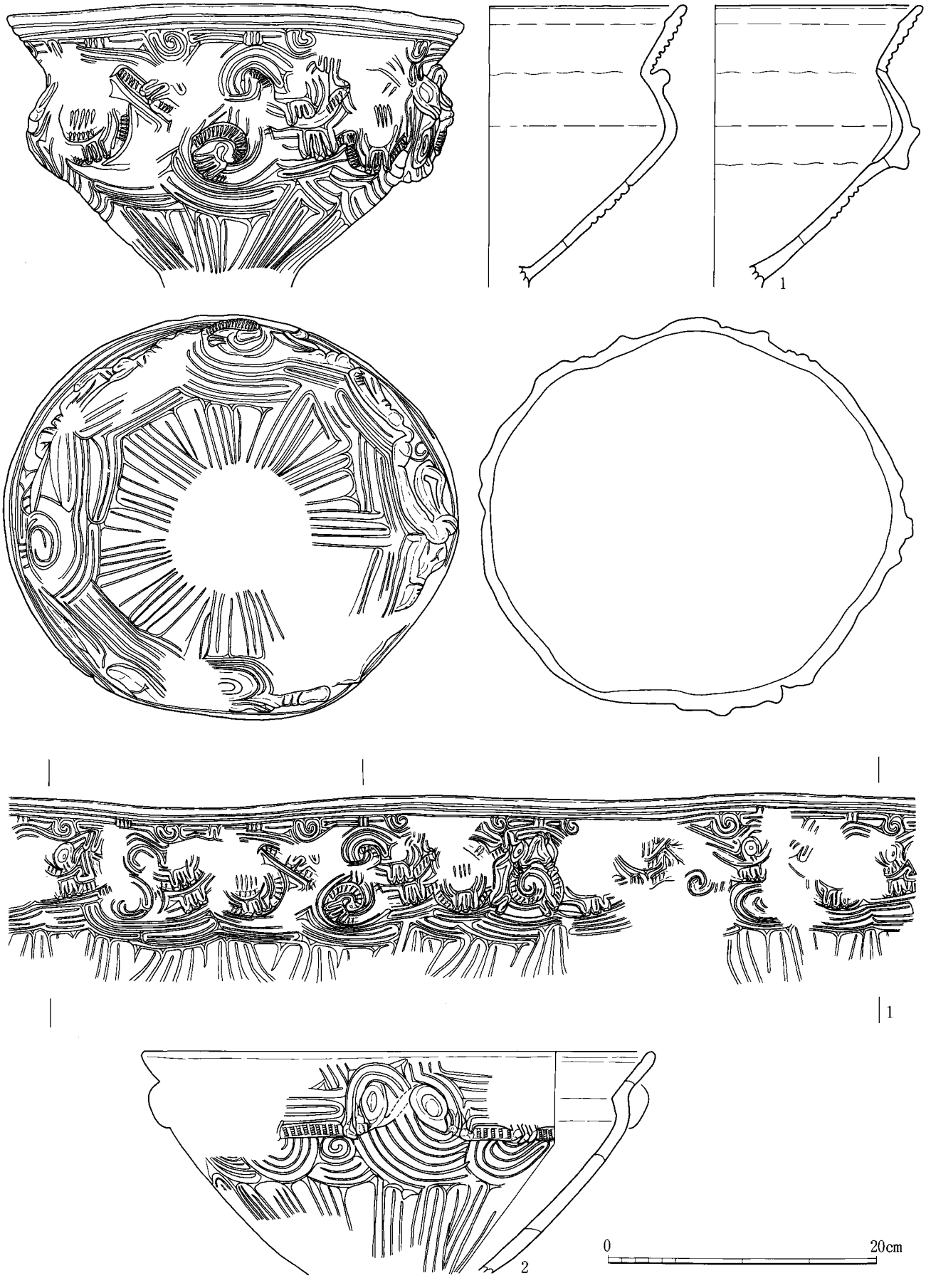
図版8　土器実測図・展開図（1/6）　第20号住居跡



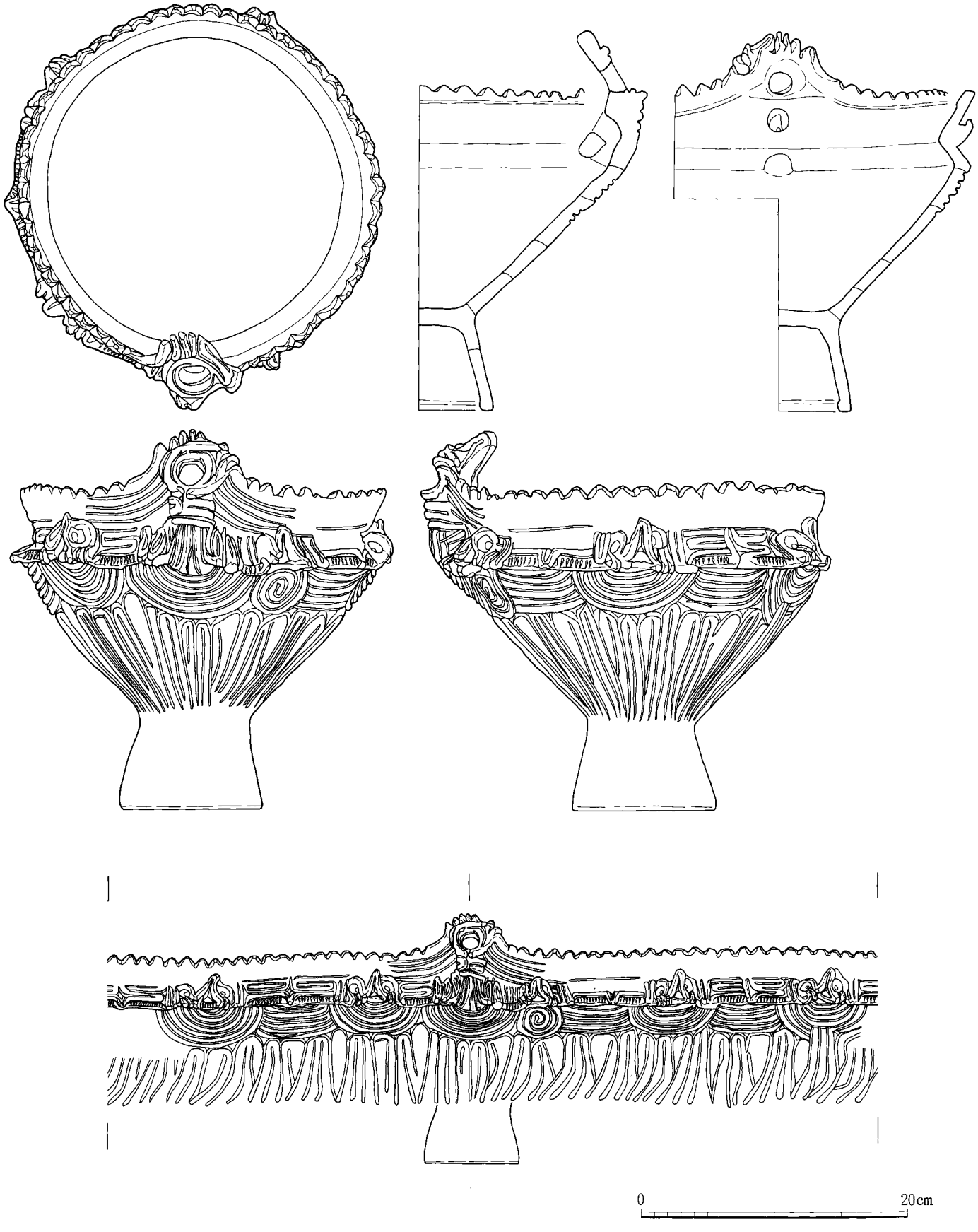
図版 9　土器実測図・展開図（1/6）　第20号住居跡



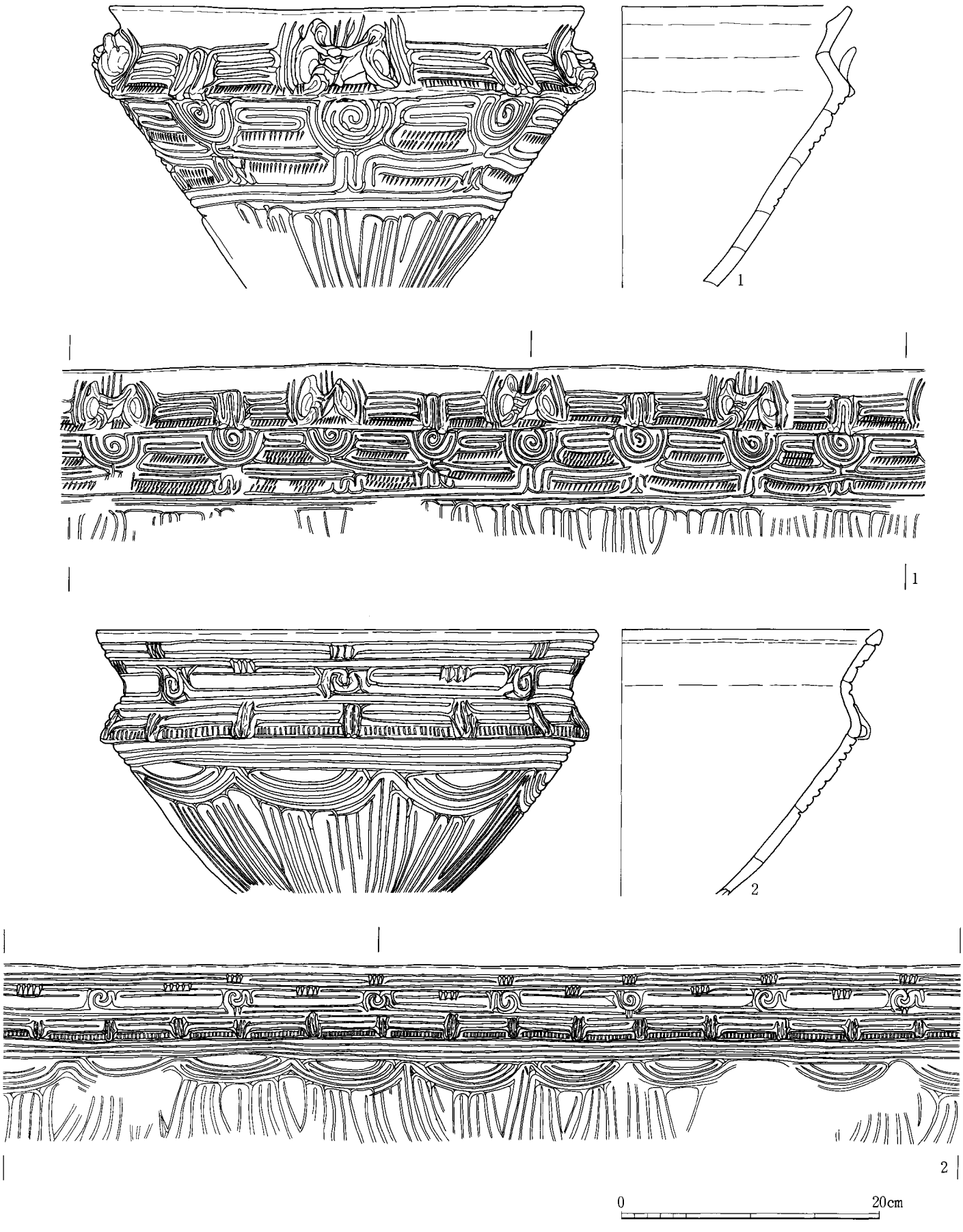
図版10　土器実測図・展開図 2(1/4)．3(1/6)　第20号住居跡



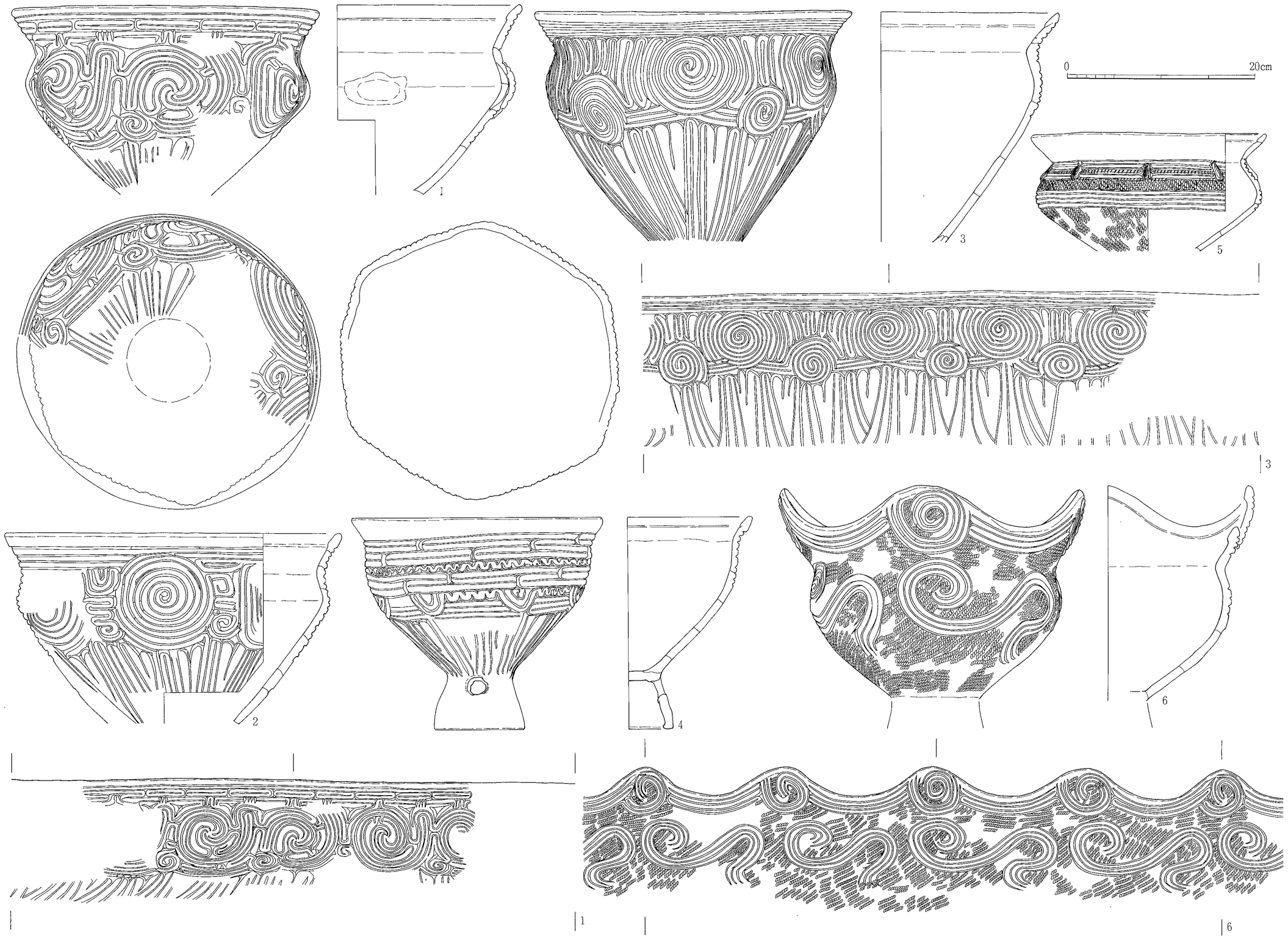
図版11　土器実測図・展開図（1/6）　第20号住居跡



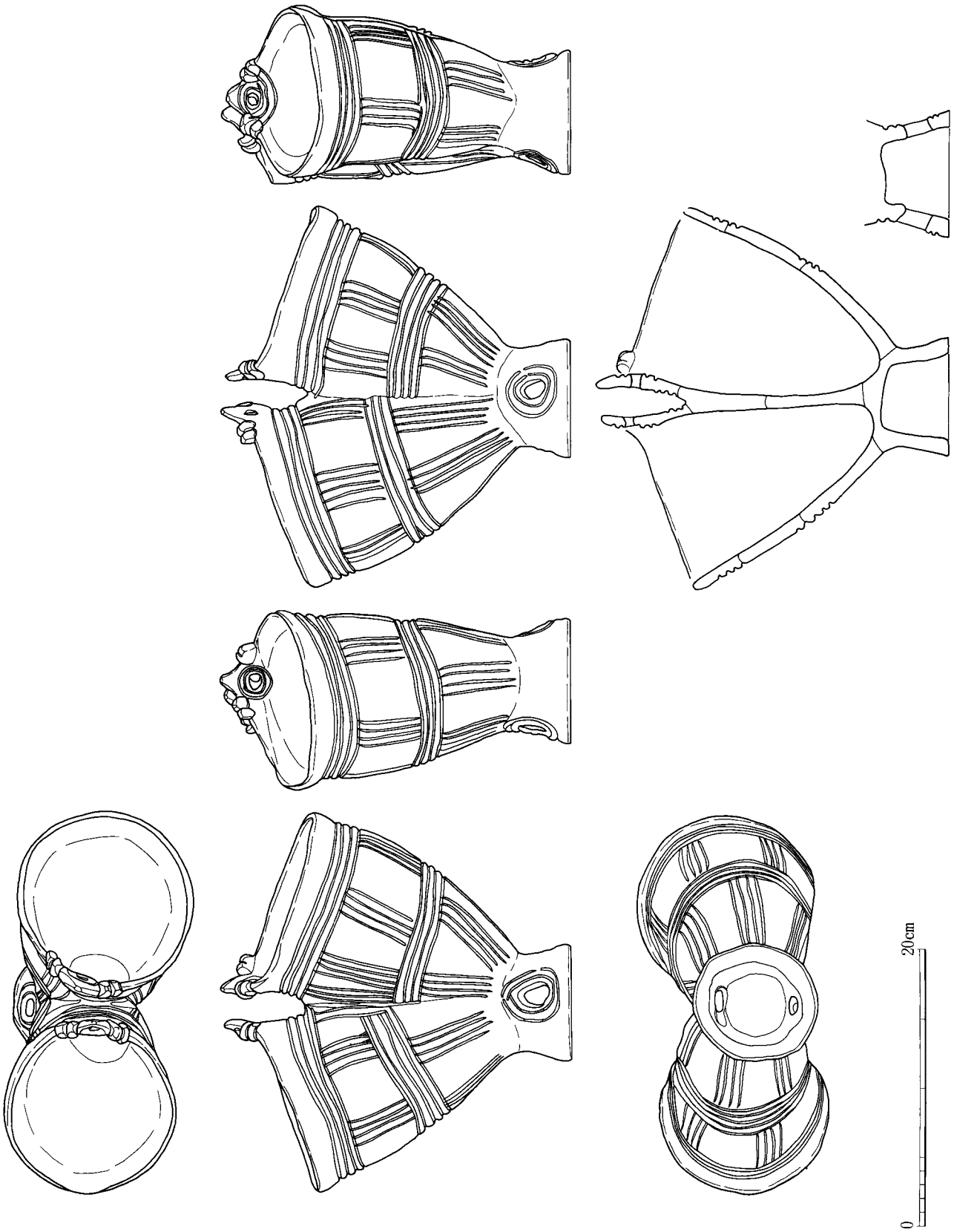
図版12　土器実測図・展開図（1/6）　第20号住居跡



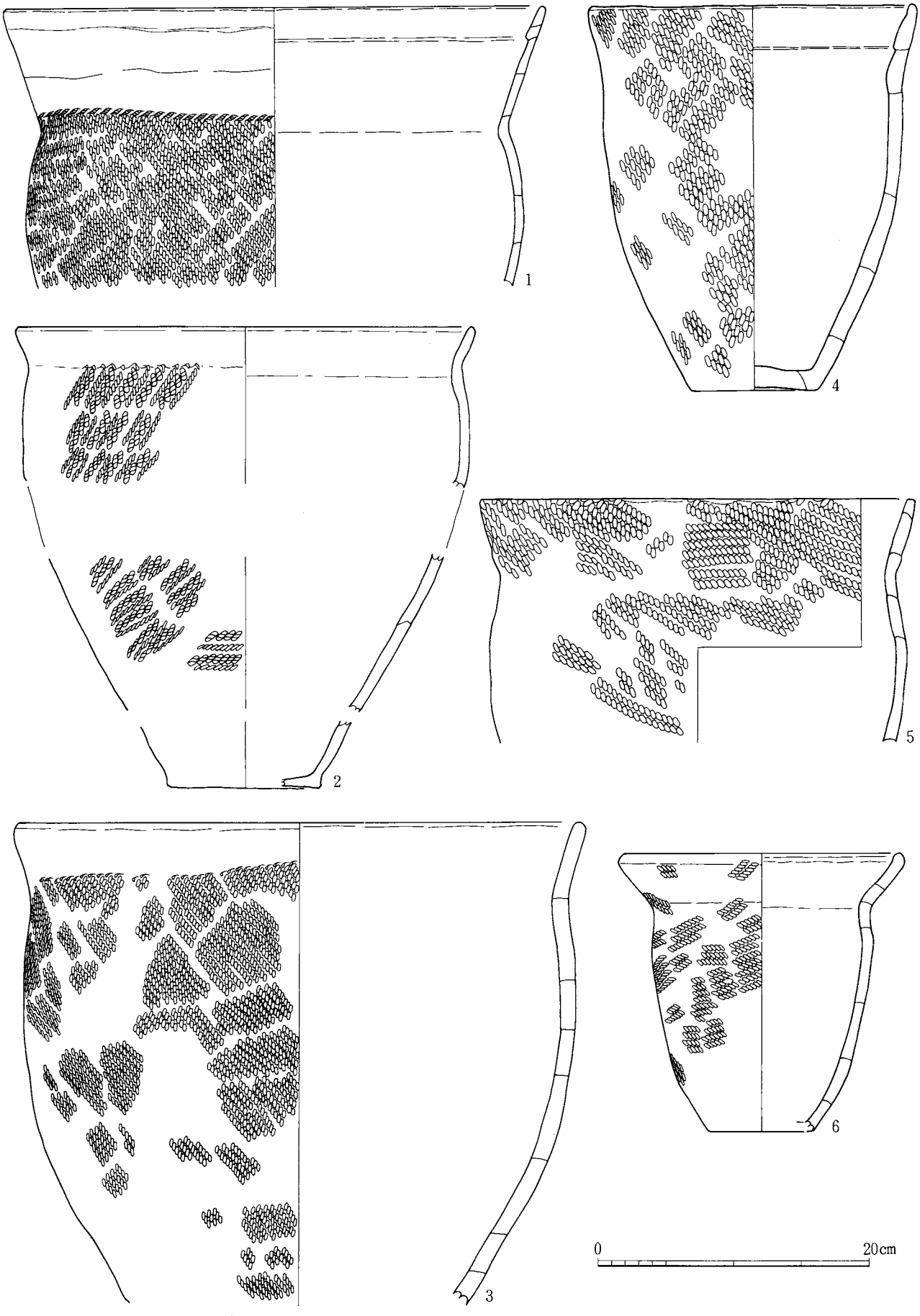
図版13　土器実測図・展開図（1/6）　第20号住居跡



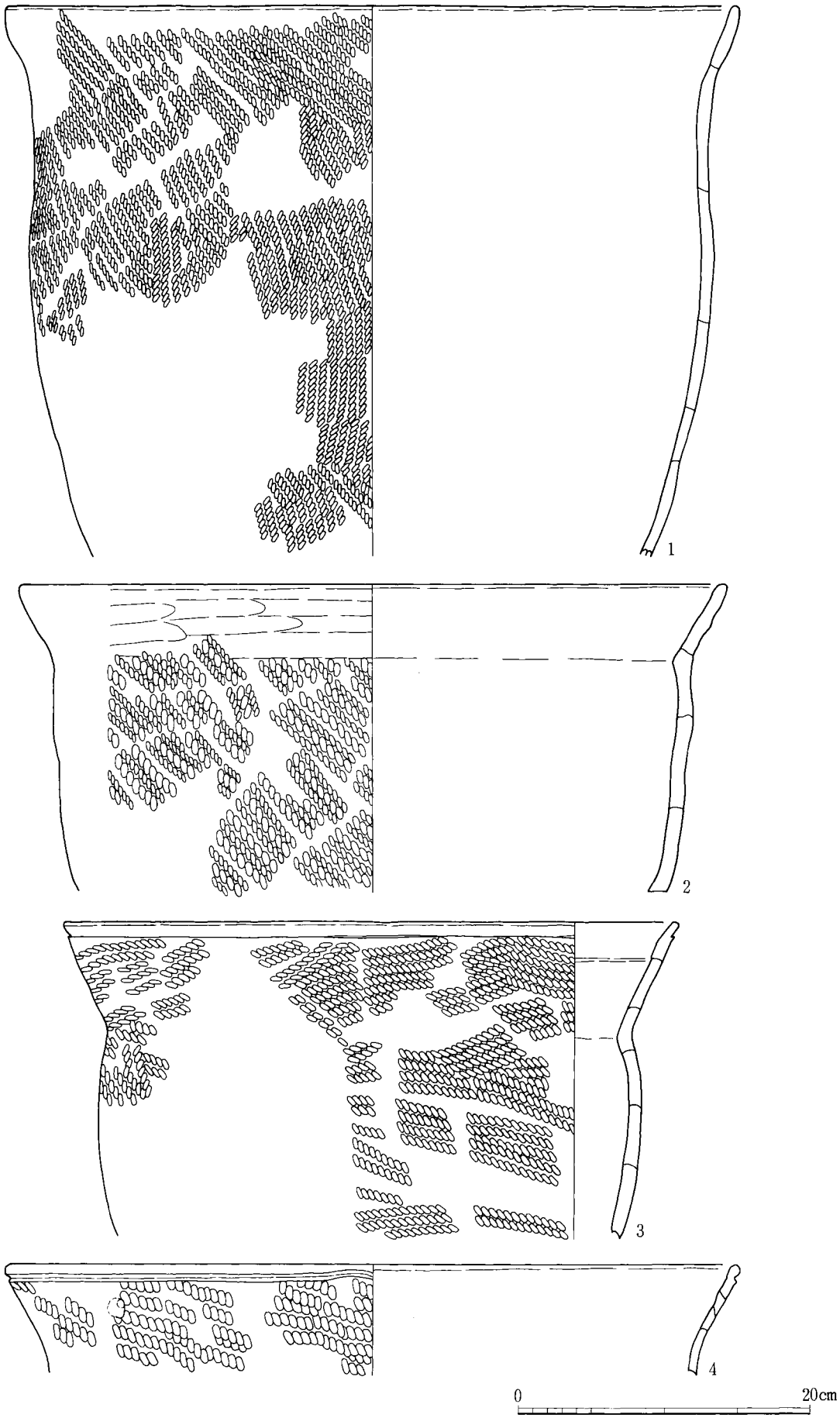
図版14　土器実測図・展開図（1/6）　第20号住居跡



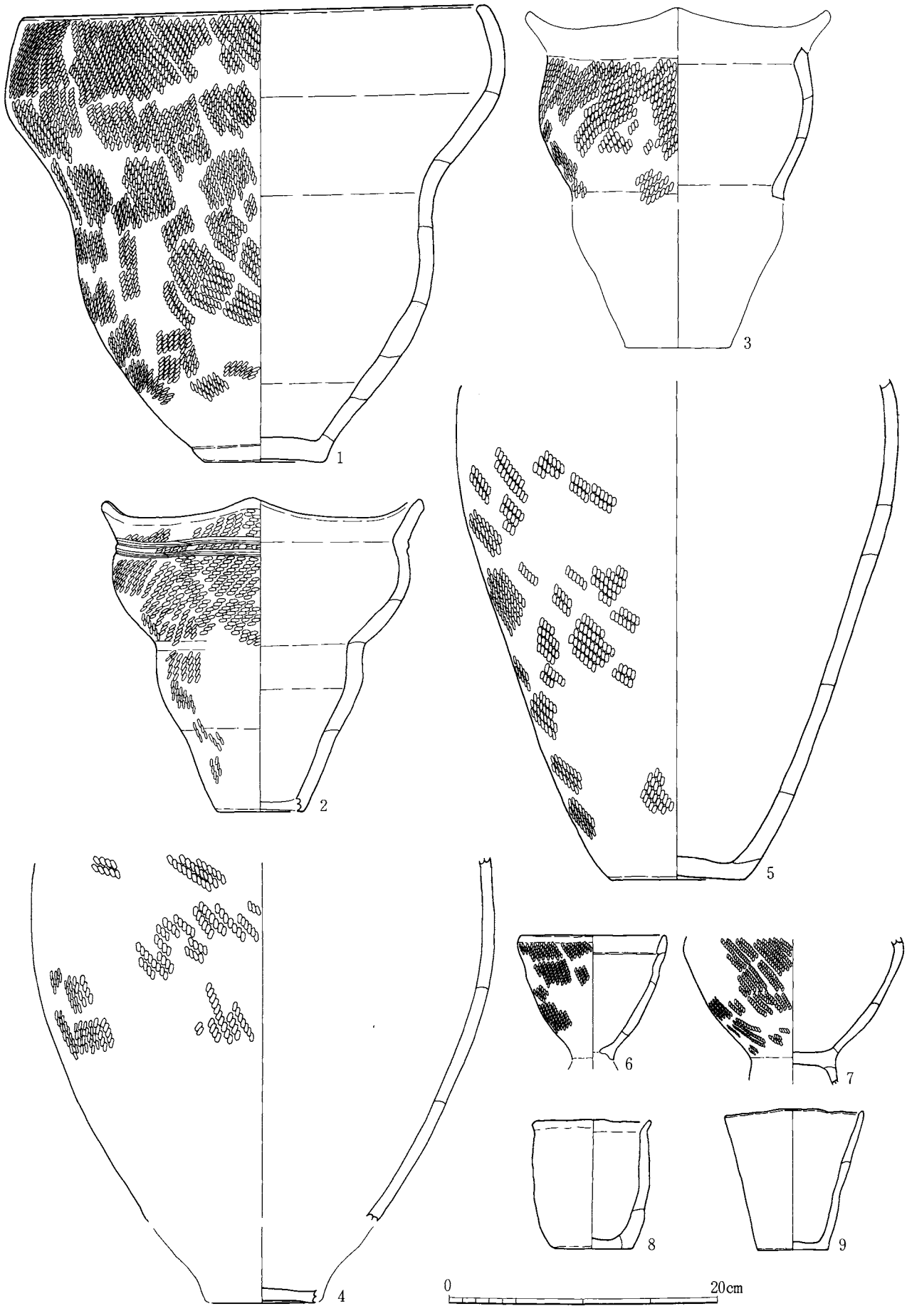
図版15　土器実測図　第20号住居跡



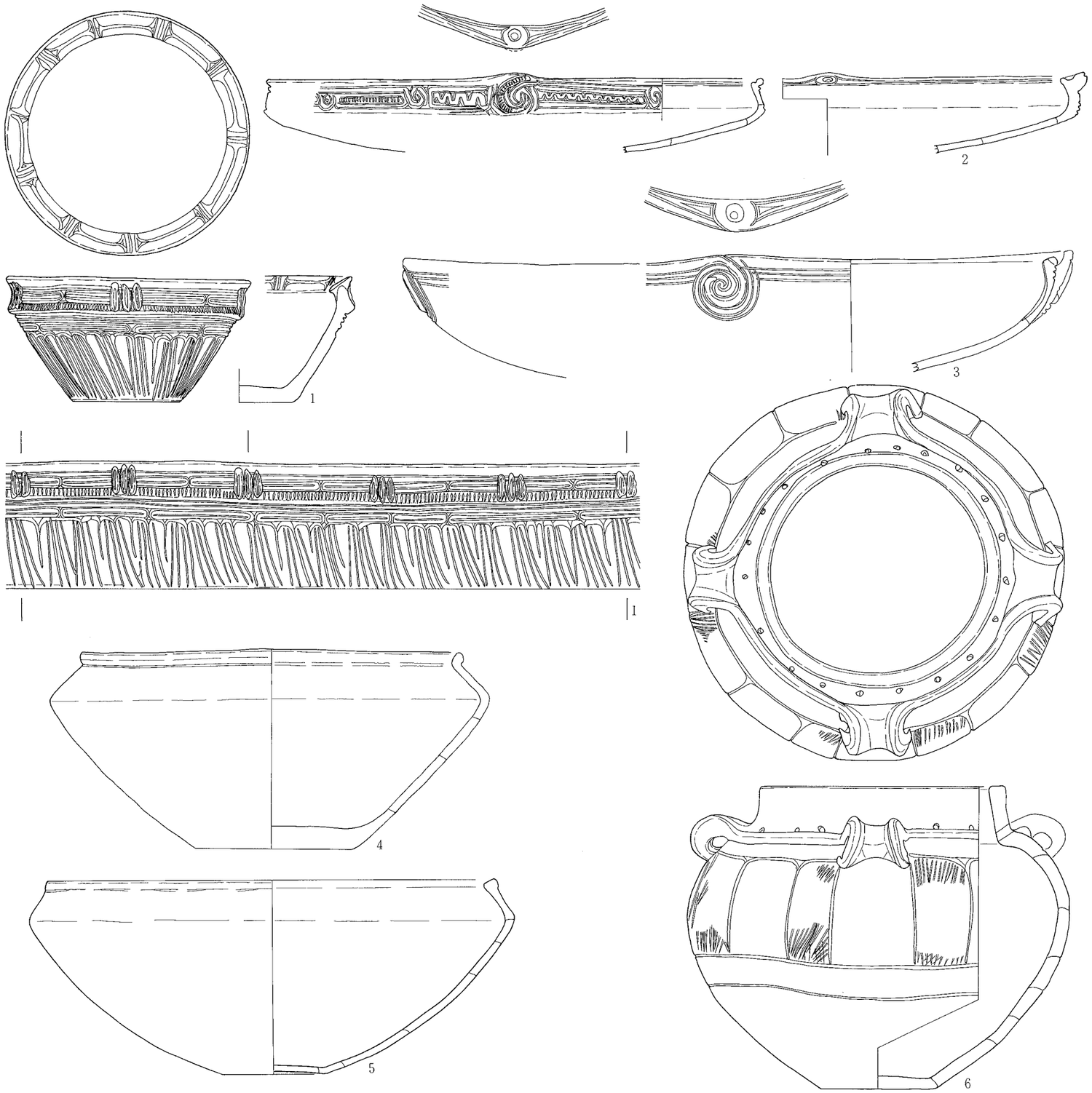
図版16　土器実測図　第20号住居跡



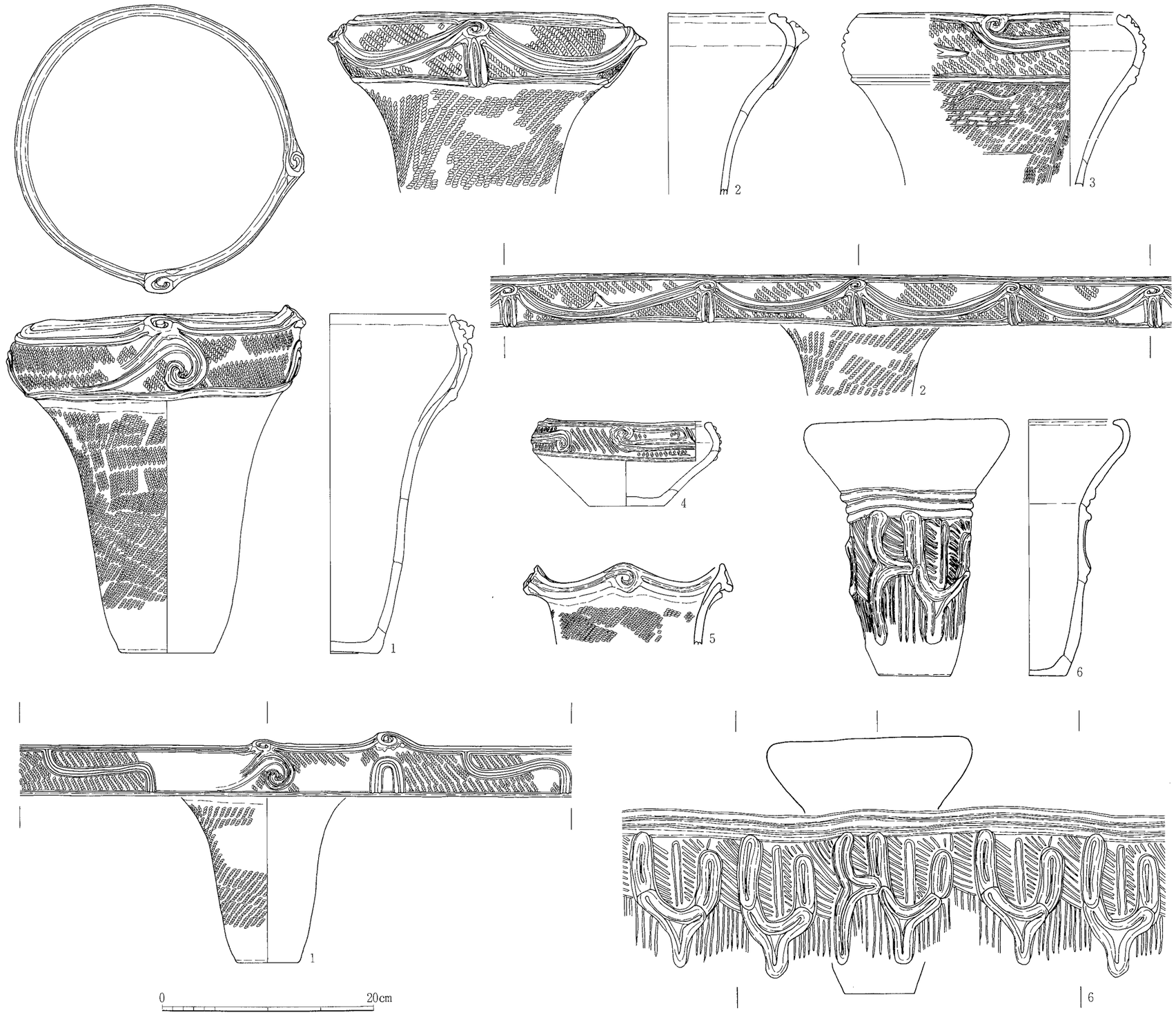
図版17　土器実測図　第20号住居跡



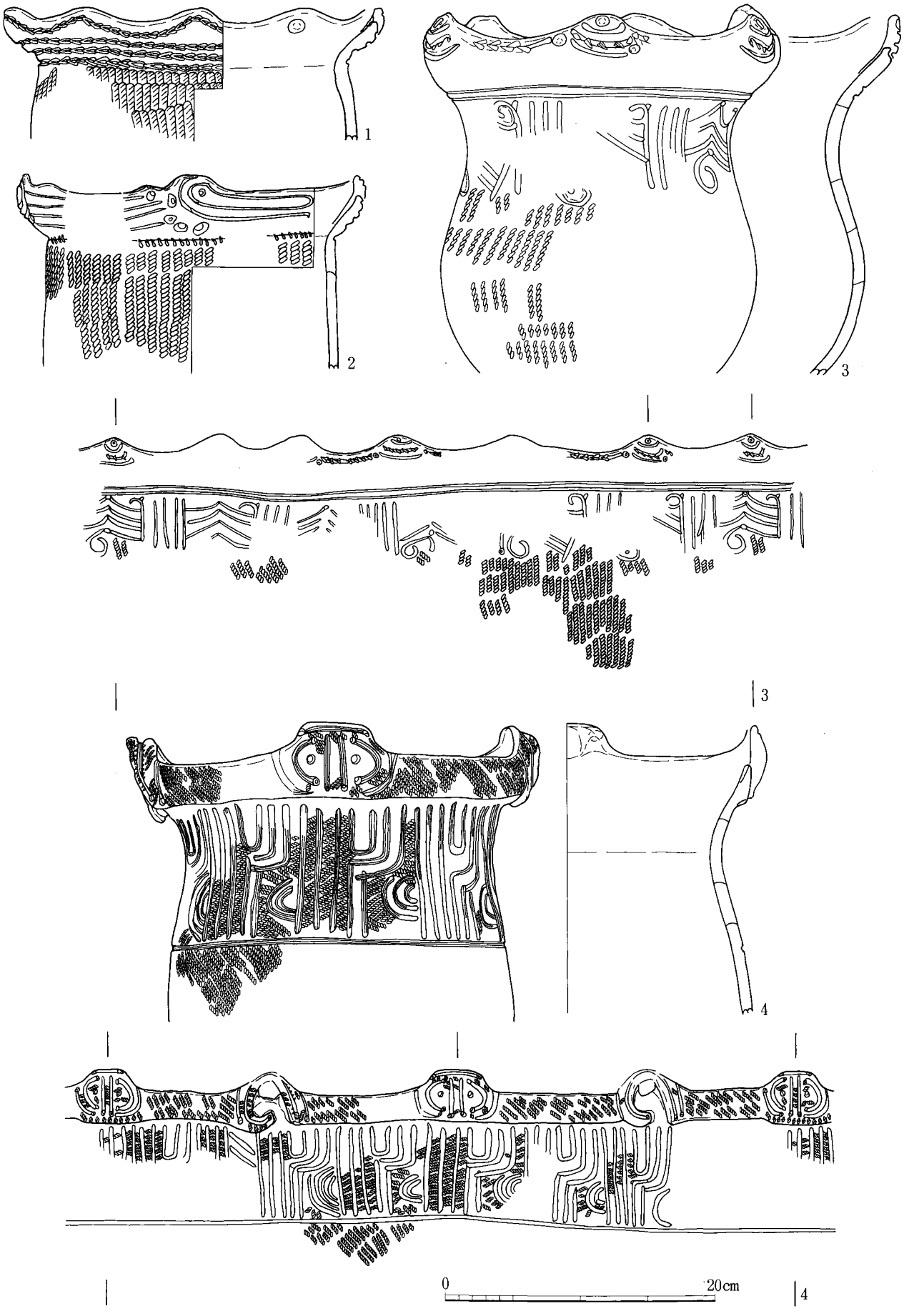
図版18　土器実測図　第20号住居跡



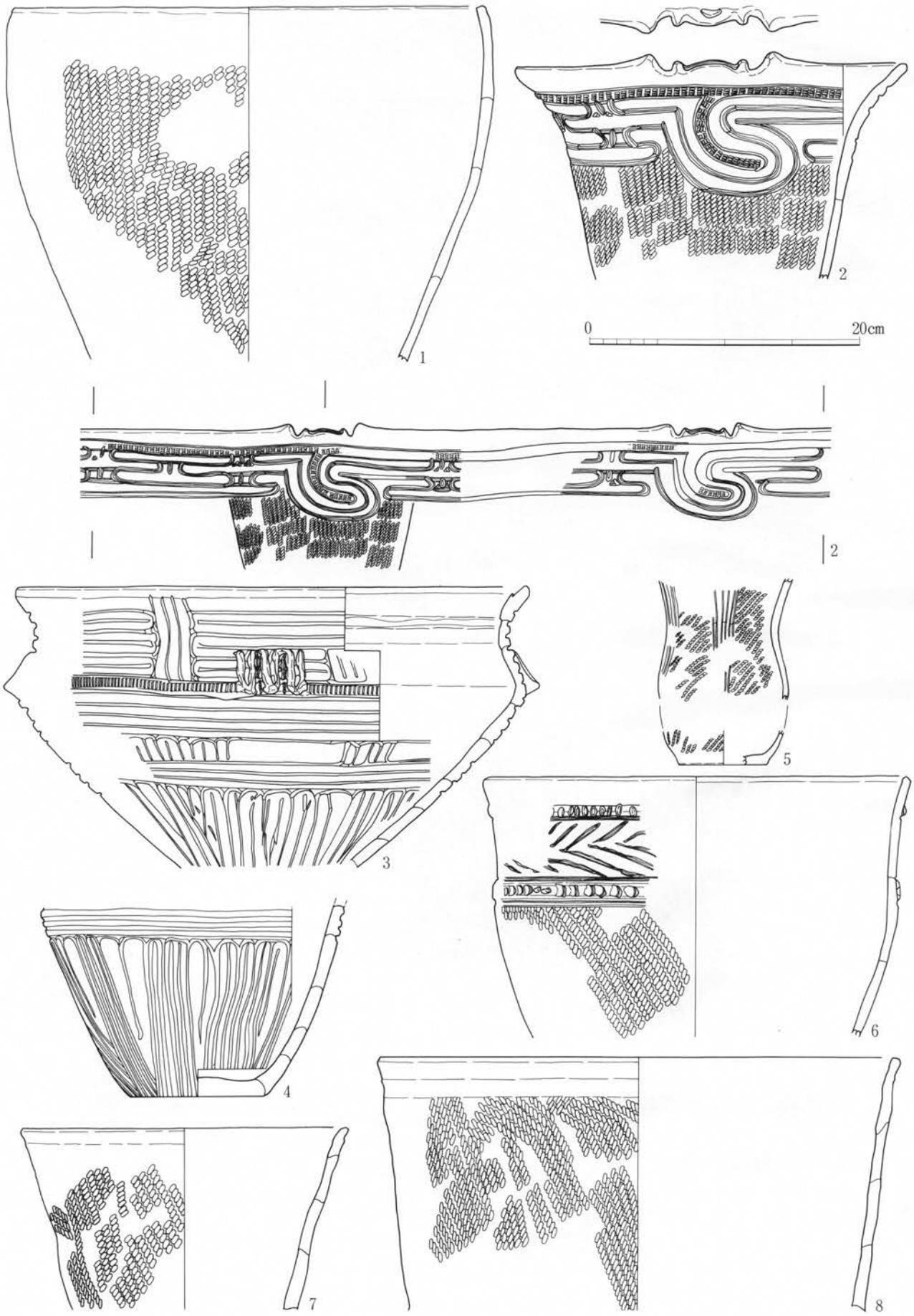
図版19　土器実測図・展開図（1/4）　第20号住居跡



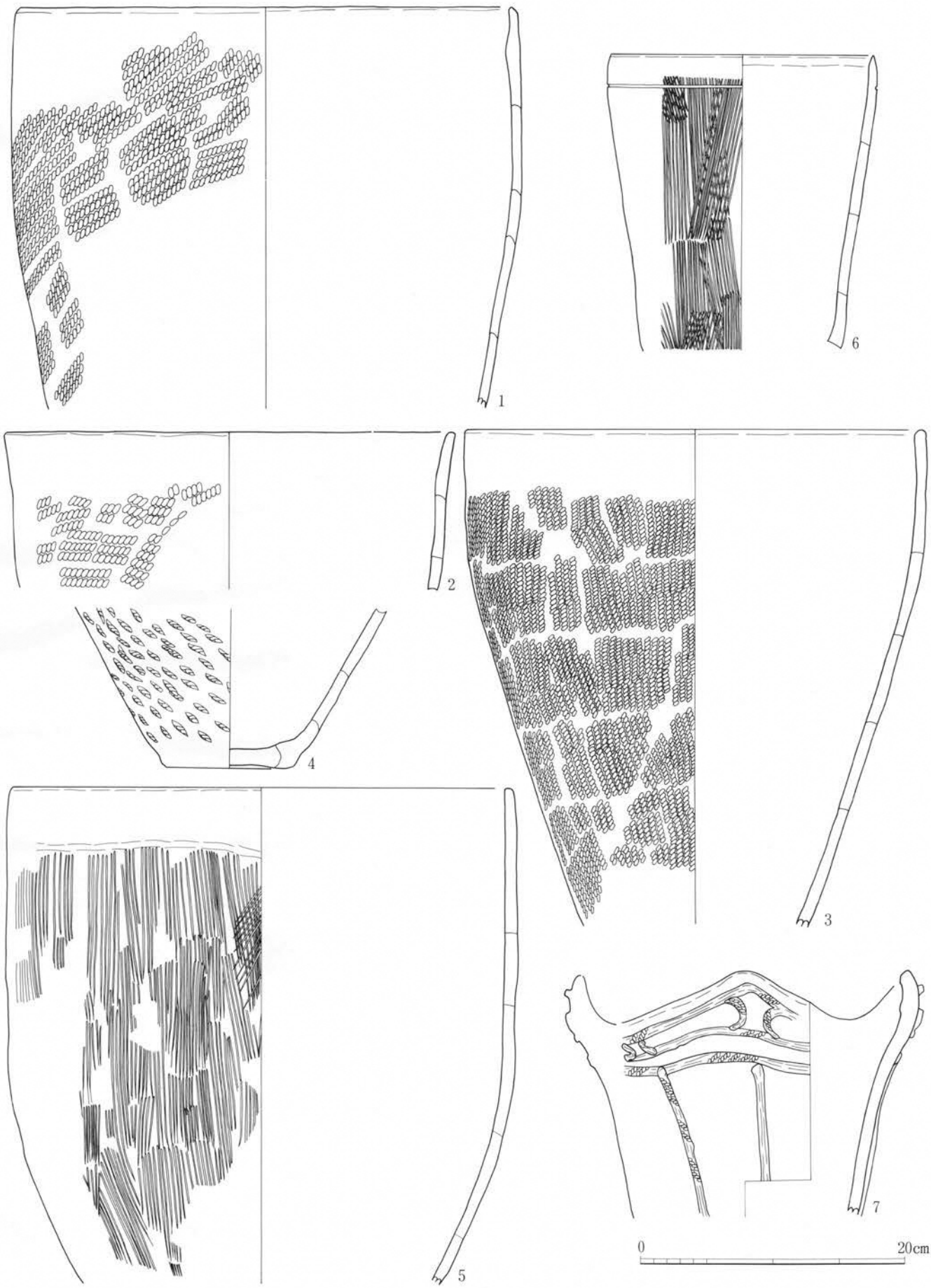
図版20　土器実測図・展開図 1･2(1/6)．6(1/4)　第20号住居跡



図版21　土器実測図・展開図（1/6）　第21号住居跡



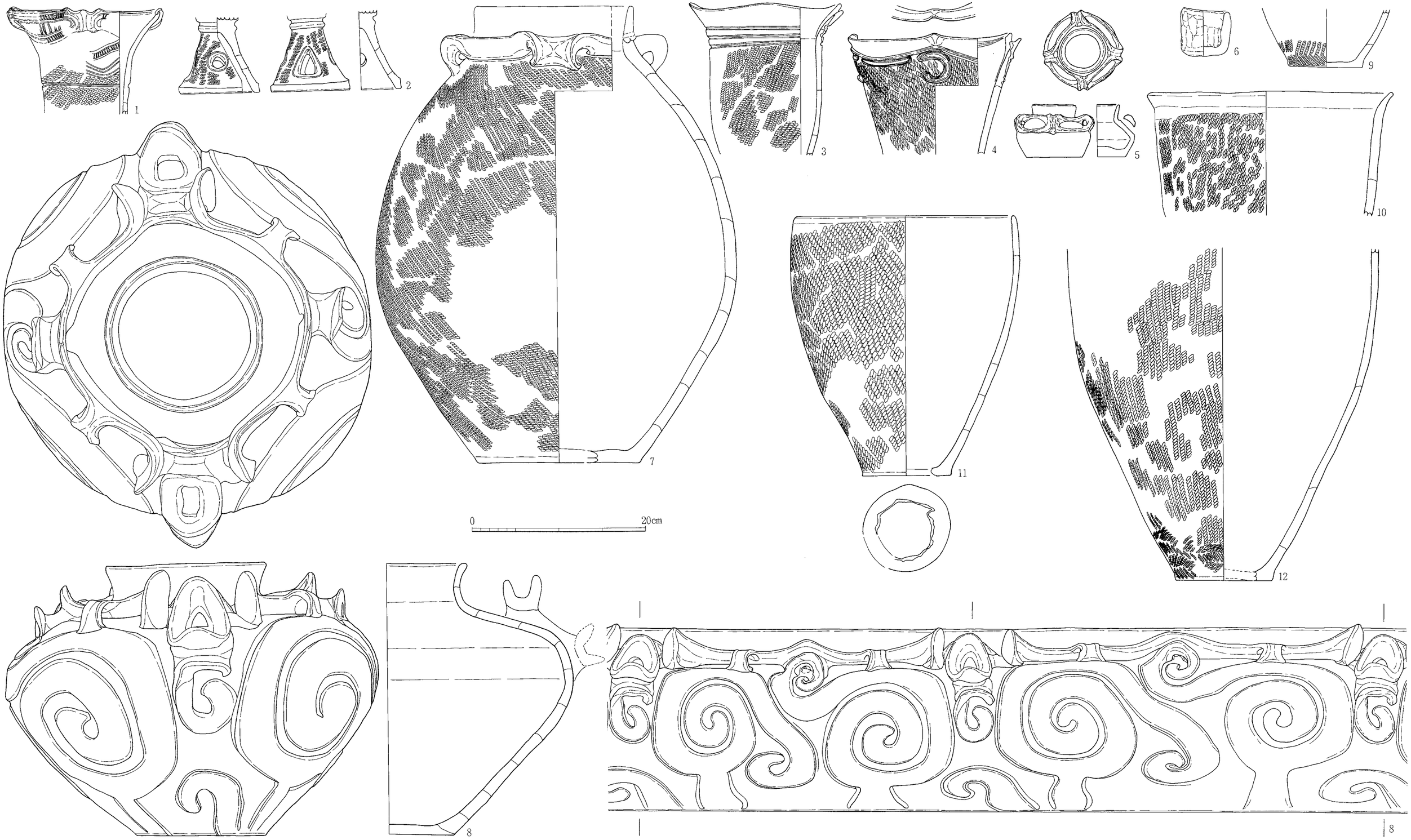
図版22　土器実測図・展開図（1/6）　1．第23号住居跡　2．第25号住居跡　3～8．第26号住居跡



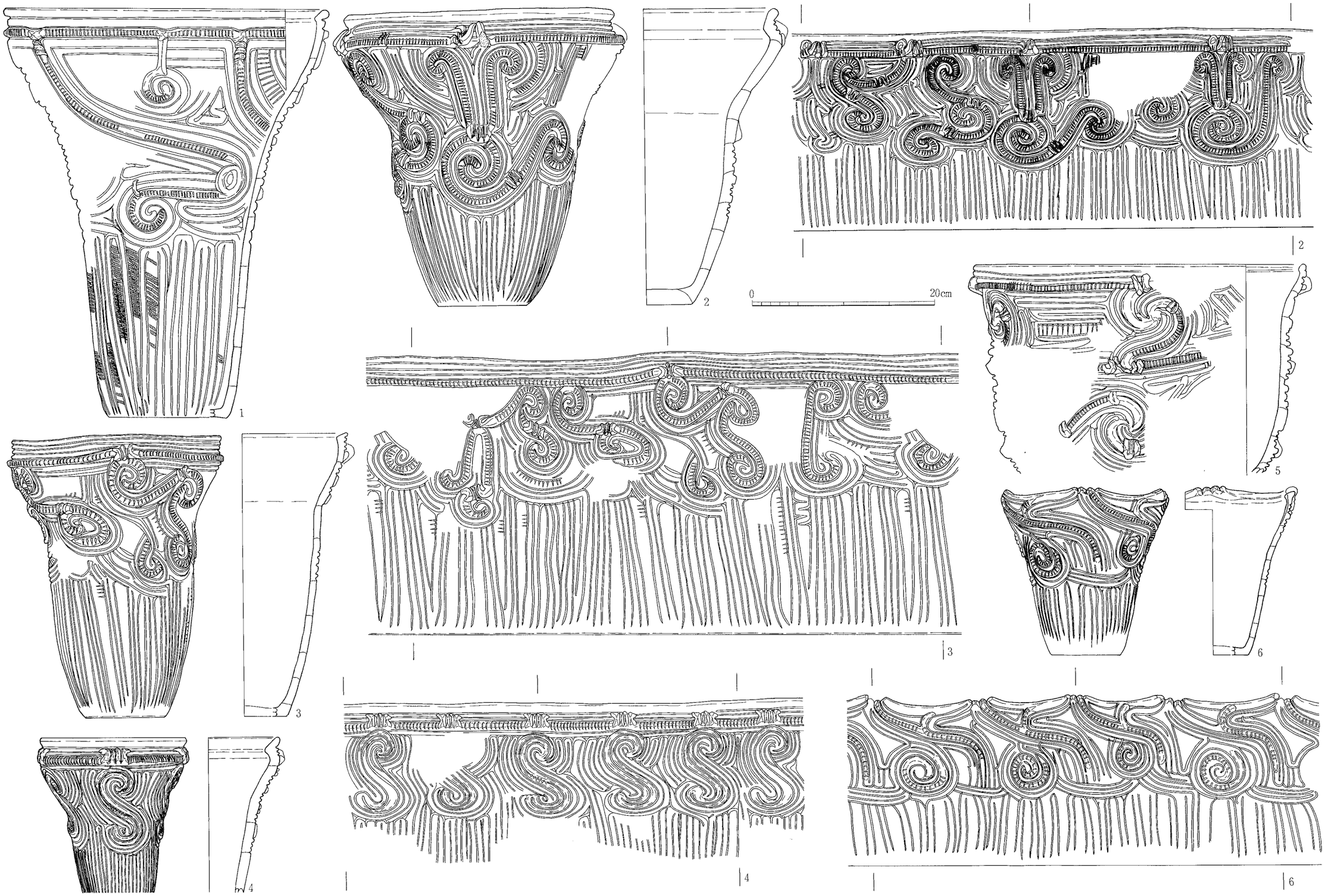
図版23　土器実測図　1～6．第26号住居跡　7．第32号住居跡

図版24　土器実測図・展開図（1/6）　1・2．第31号住居跡　3・4．第32号住居跡　5．第33号住居跡
6．第35号住居跡　7・8．第36号住居跡

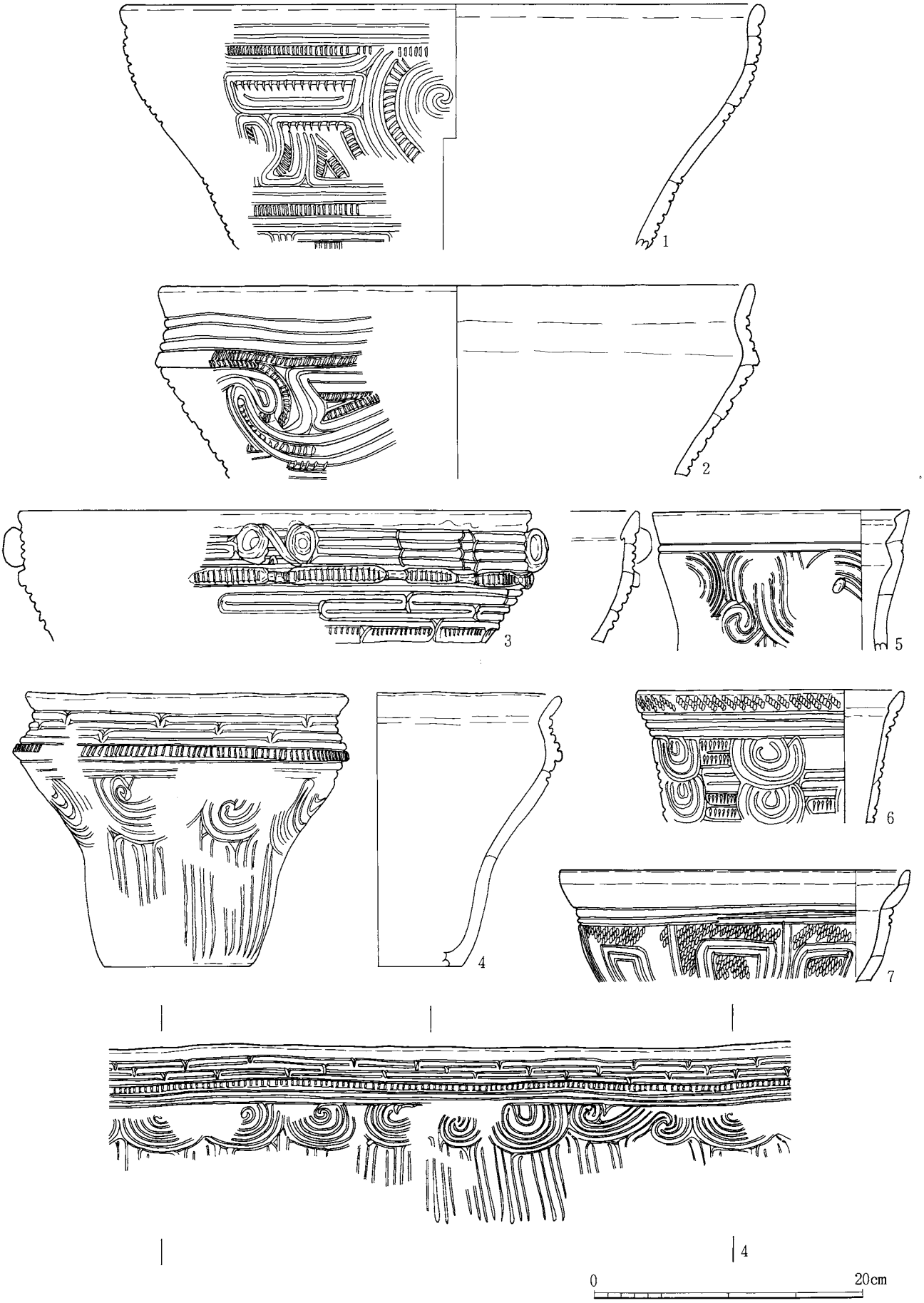
図版25　土器実測図・展開図（1/6）　第36号住居跡



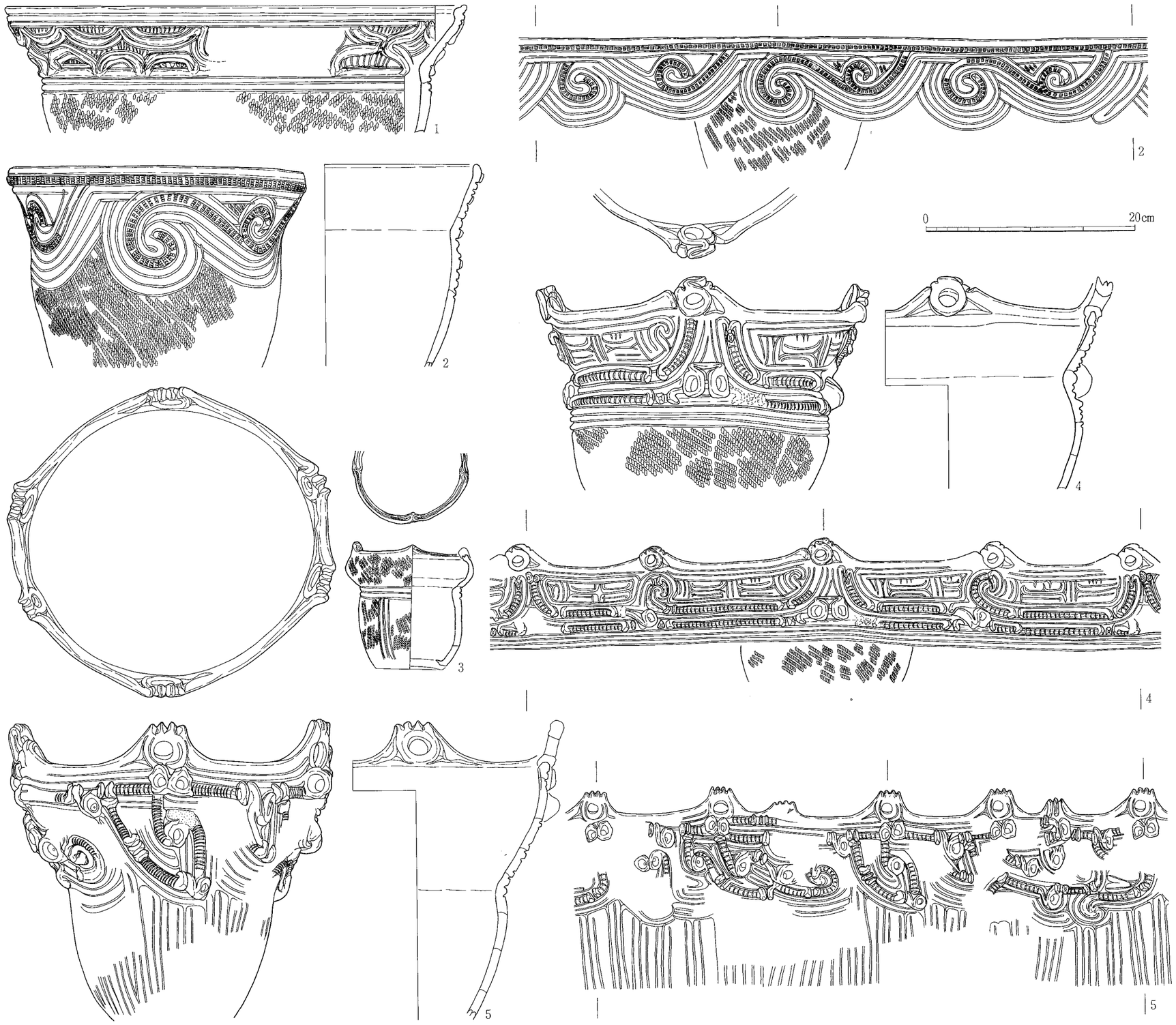
図版26　土器実測図・展開図（1/6）　1．第149号穴　2．第174号穴　3．第235号穴　4．第573号穴　5．第729号穴
6．第732号穴　7．第773．794号穴　8．第945号穴　9．第1361号穴　10．第３号埋甕
11．第４号埋甕　12．第５号埋甕



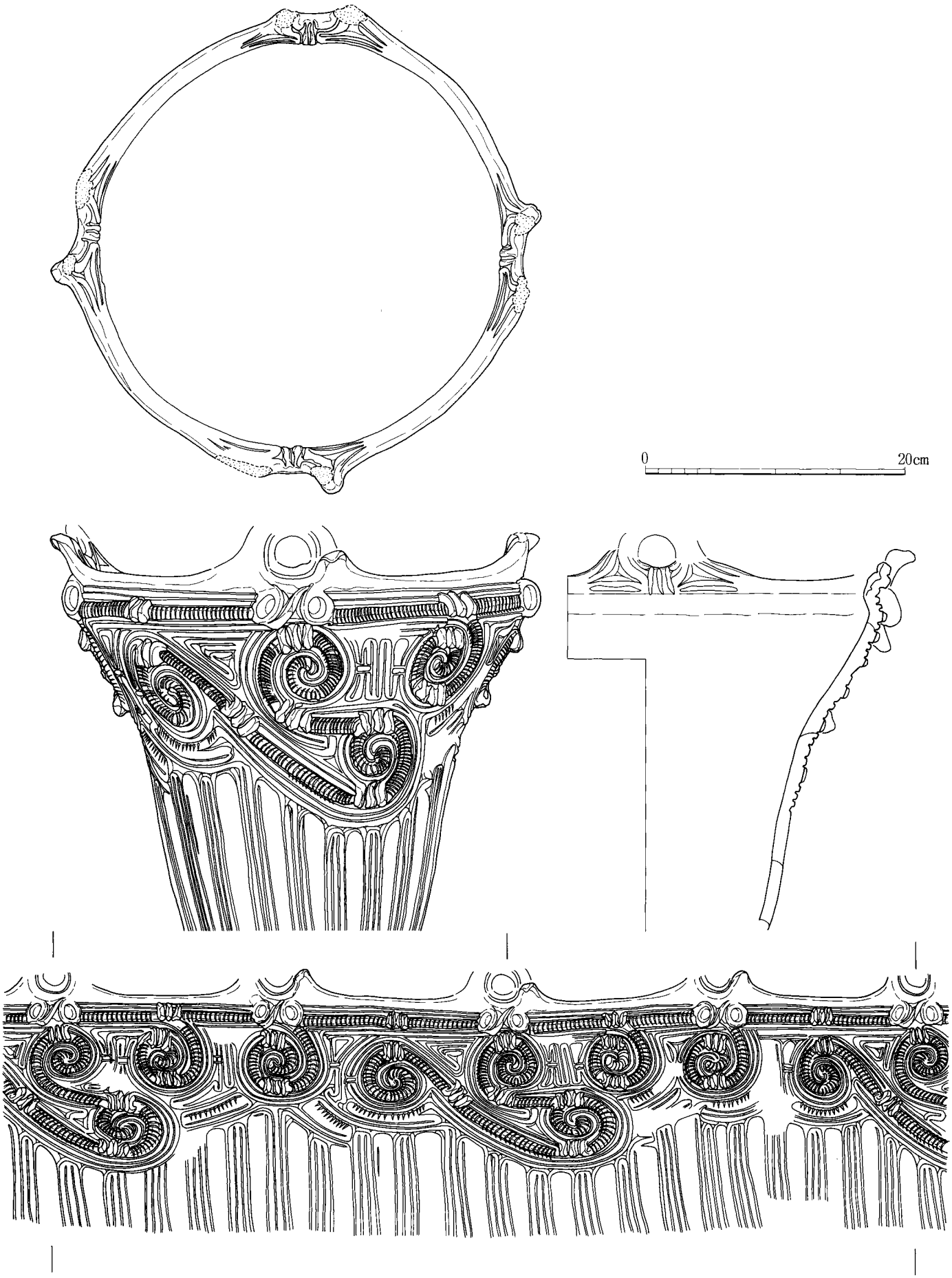
図版27　土器実測図・展開図 2(1/6). 3・4・6(1/4)　X70～74　Y74～78　土器集中区



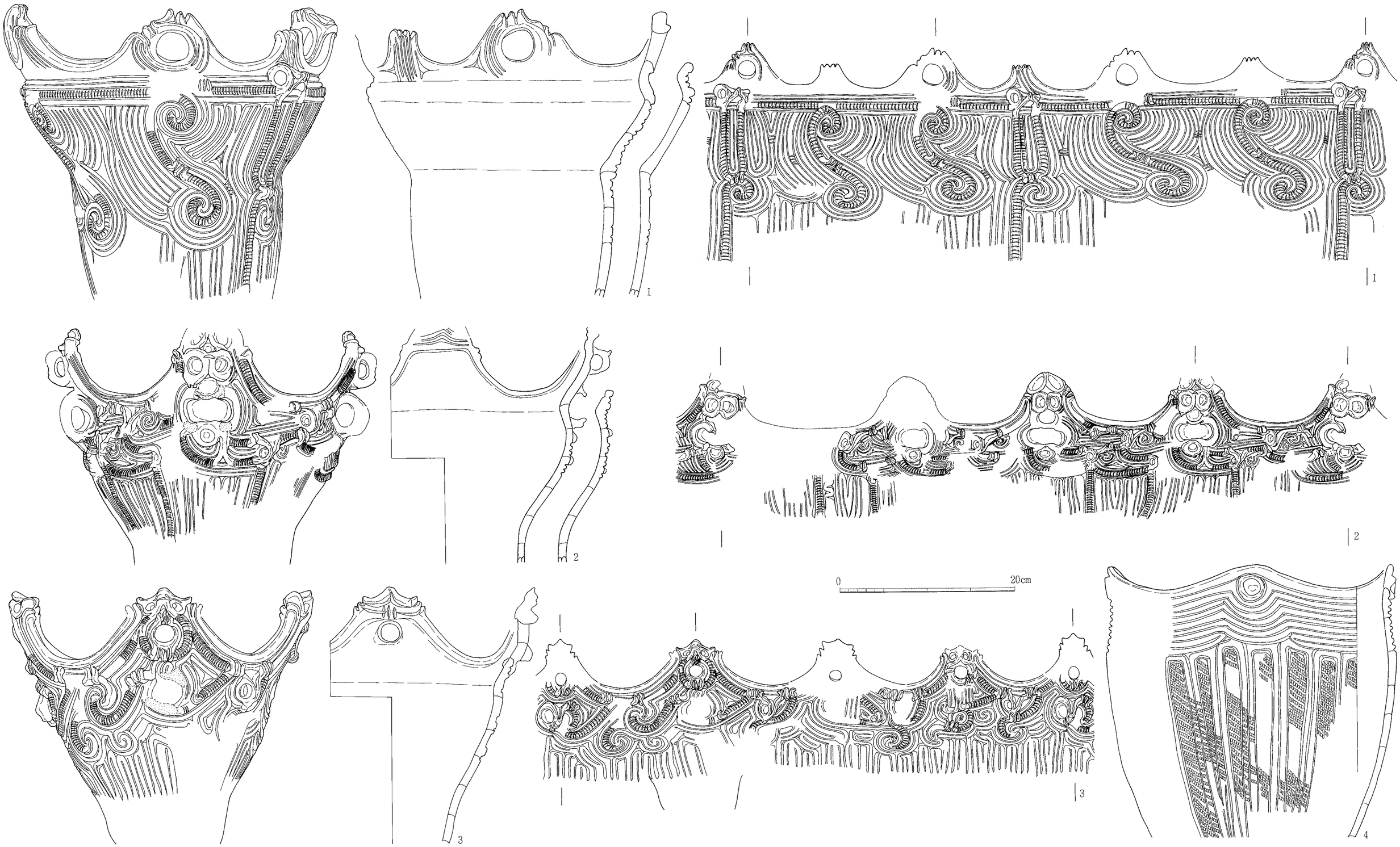
図版28　土器実測図・展開図（1/6）　X70～74　Y74～78　土器集中区



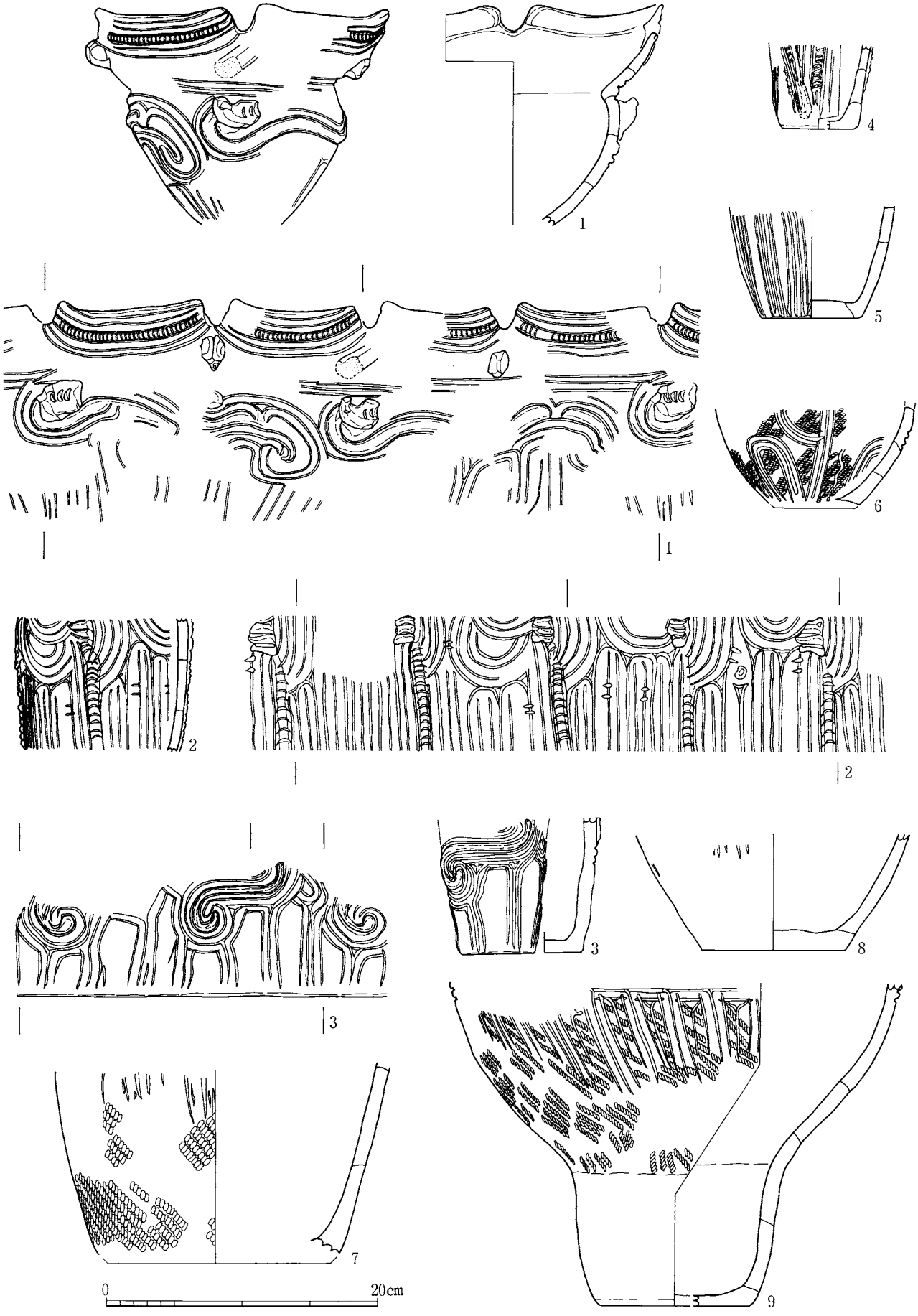
図版29　土器実測図・展開図（1/6）　X70～74　Y74～78　土器集中区



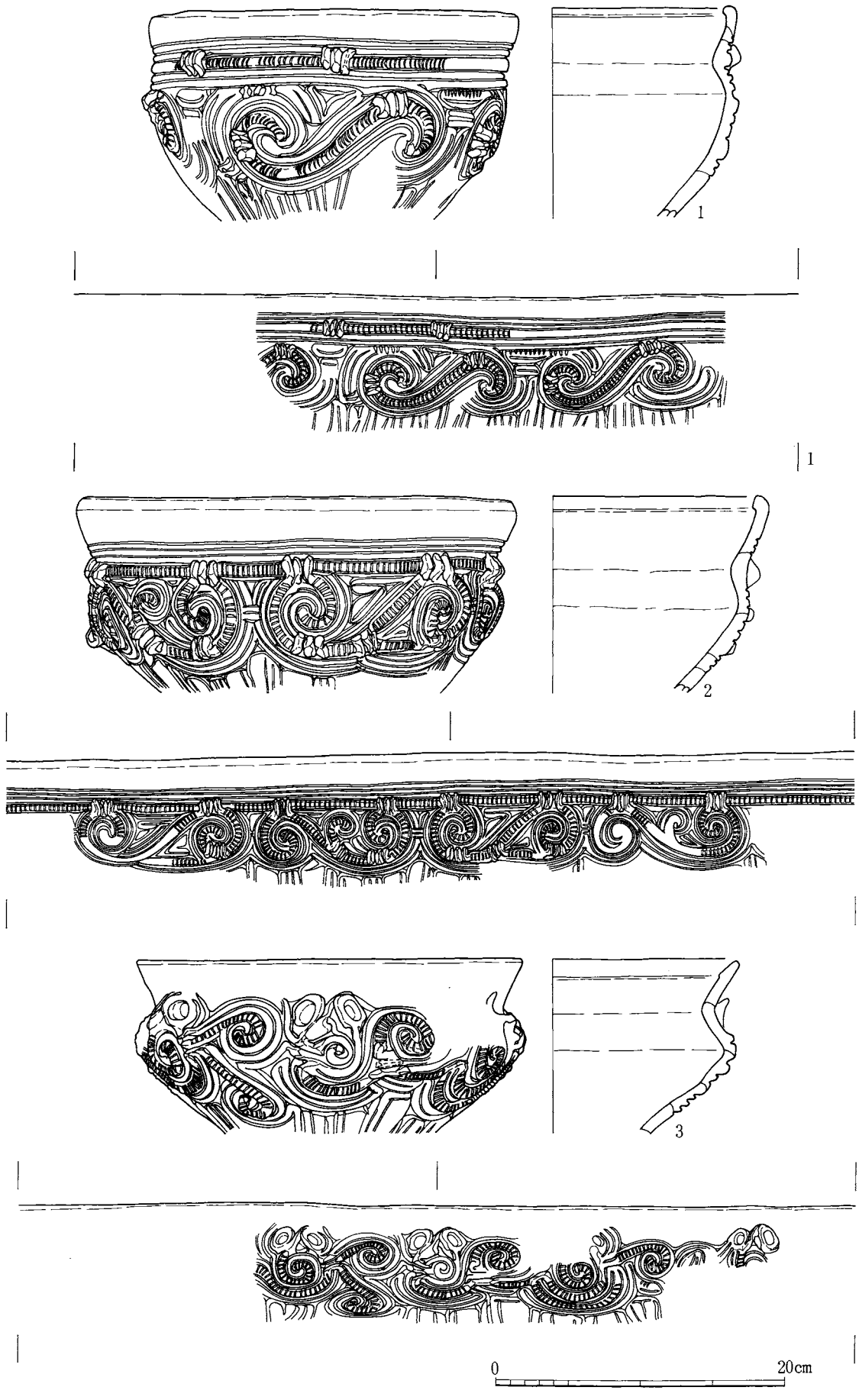
図版30　土器実測図・展開図（1/6）　X70～74　Y74～78　土器集中区



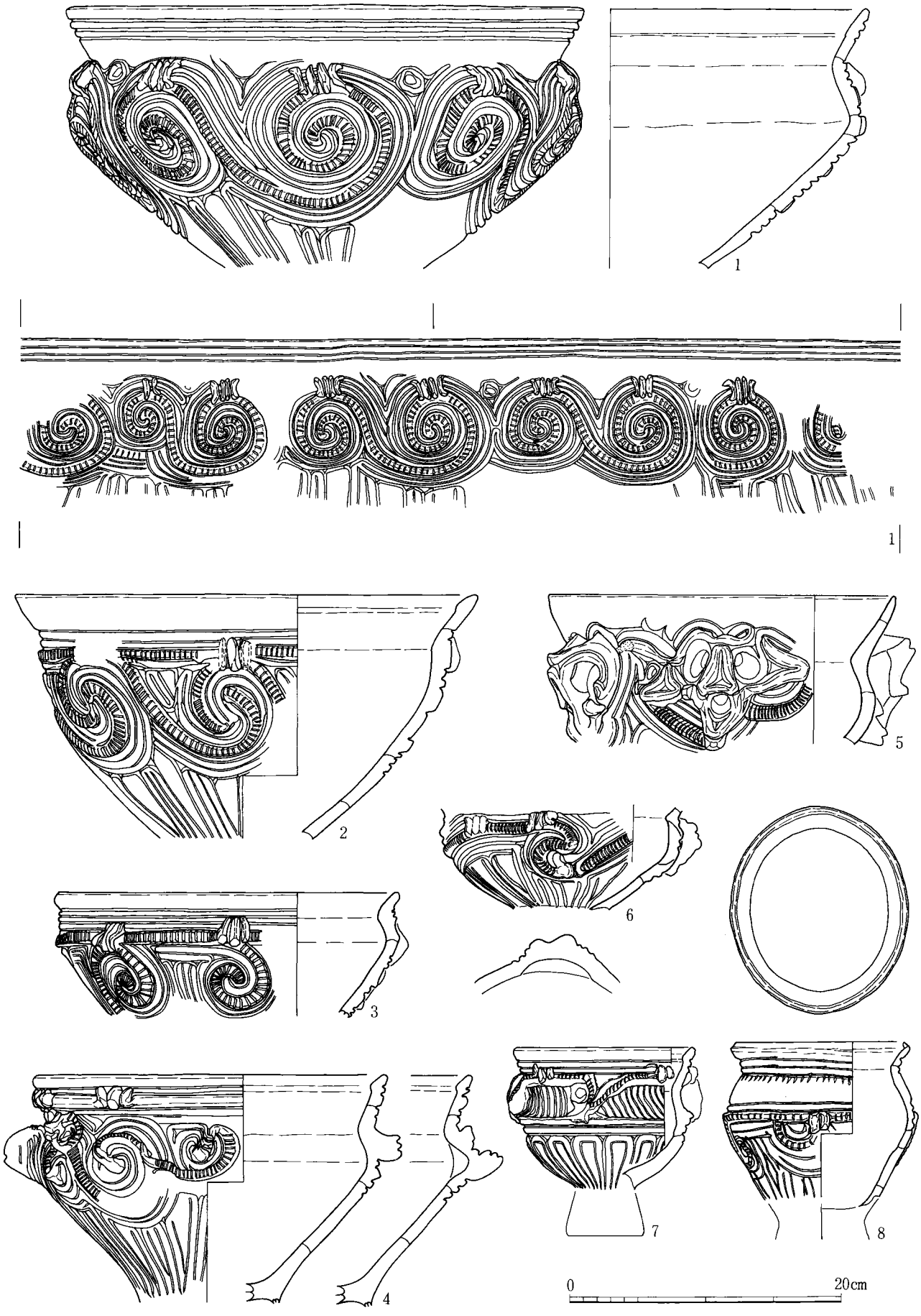
図版31　土器実測図・展開図（1/6）　X70～74　Y74～78　土器集中区



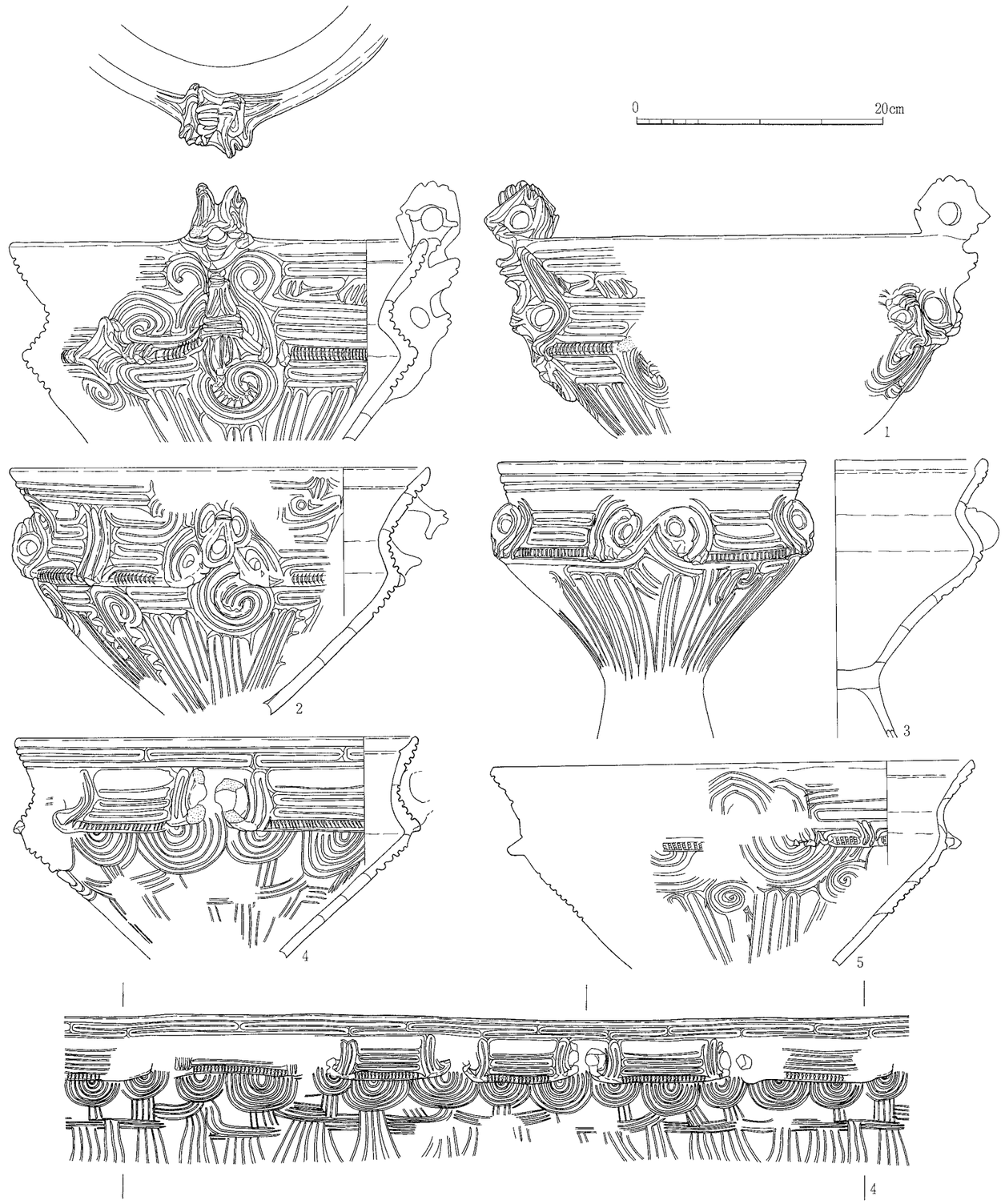
図版32　土器実測図・展開図（1/4）　X70～74　Y74～78　土器集中区



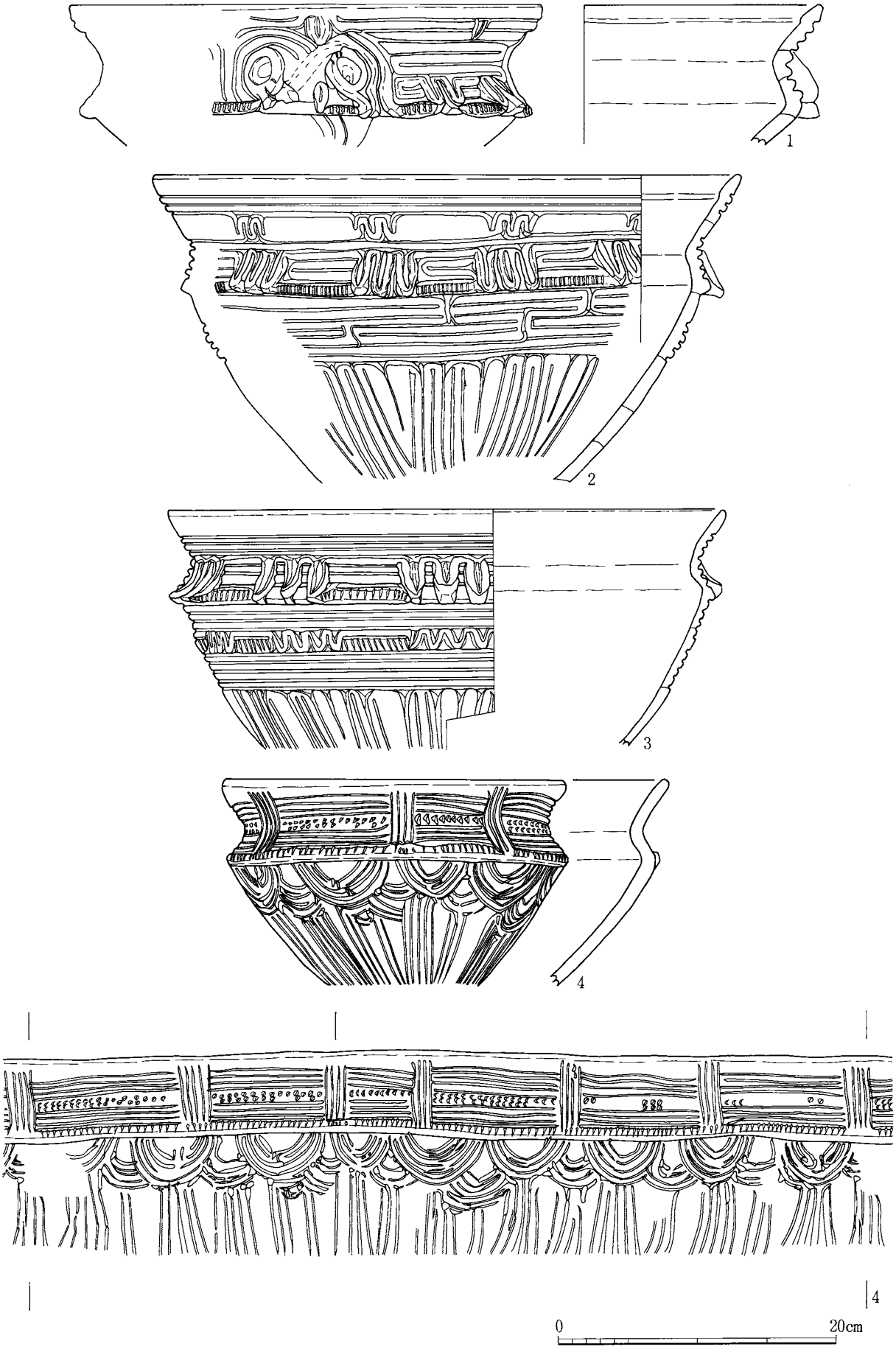
図版33　土器実測図・展開図（1/6）　X 70～74　Y 74～78　土器集中区



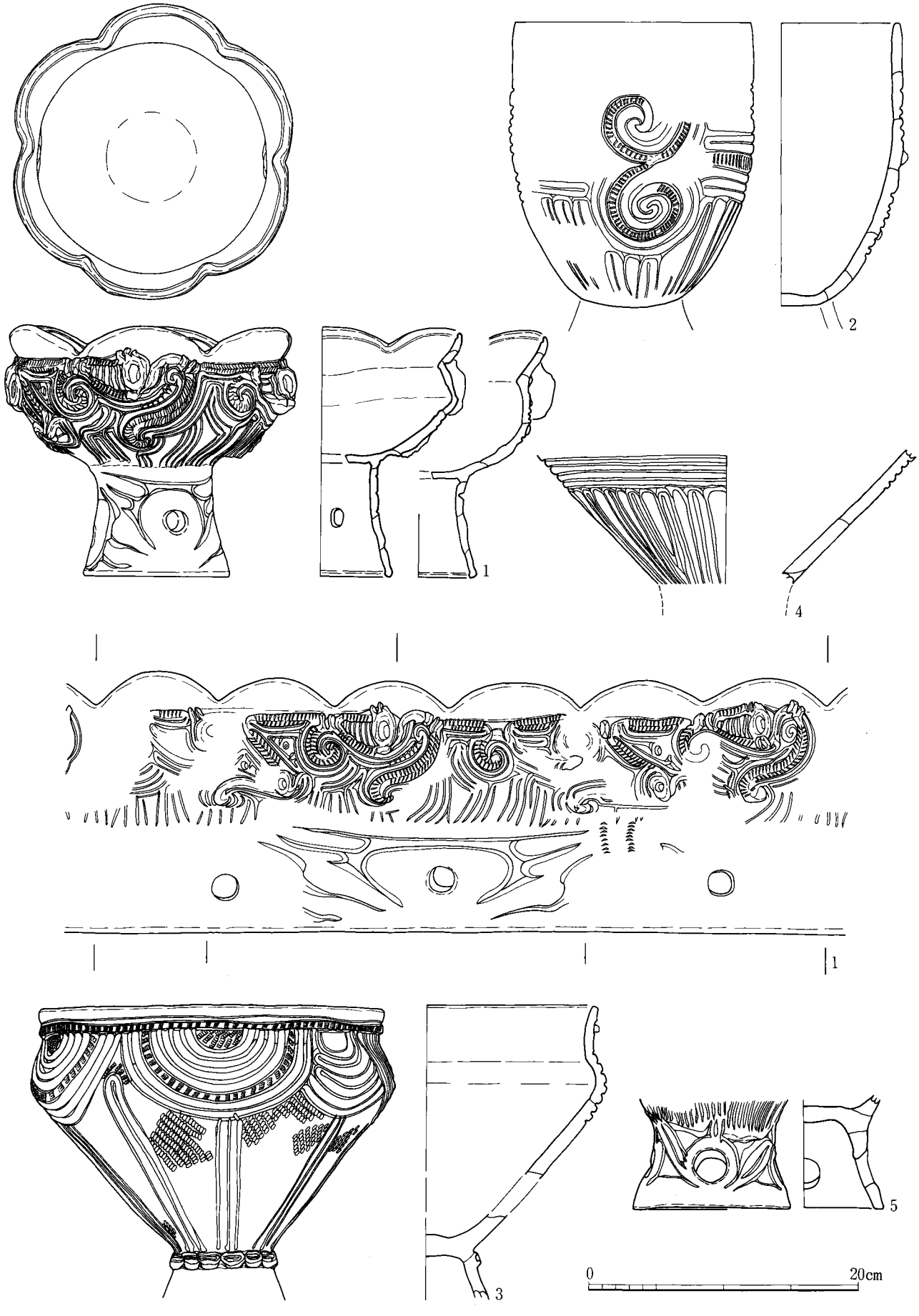
図版34　土器実測図・展開図（1/6）　X70～74　Y74～78　土器集中区



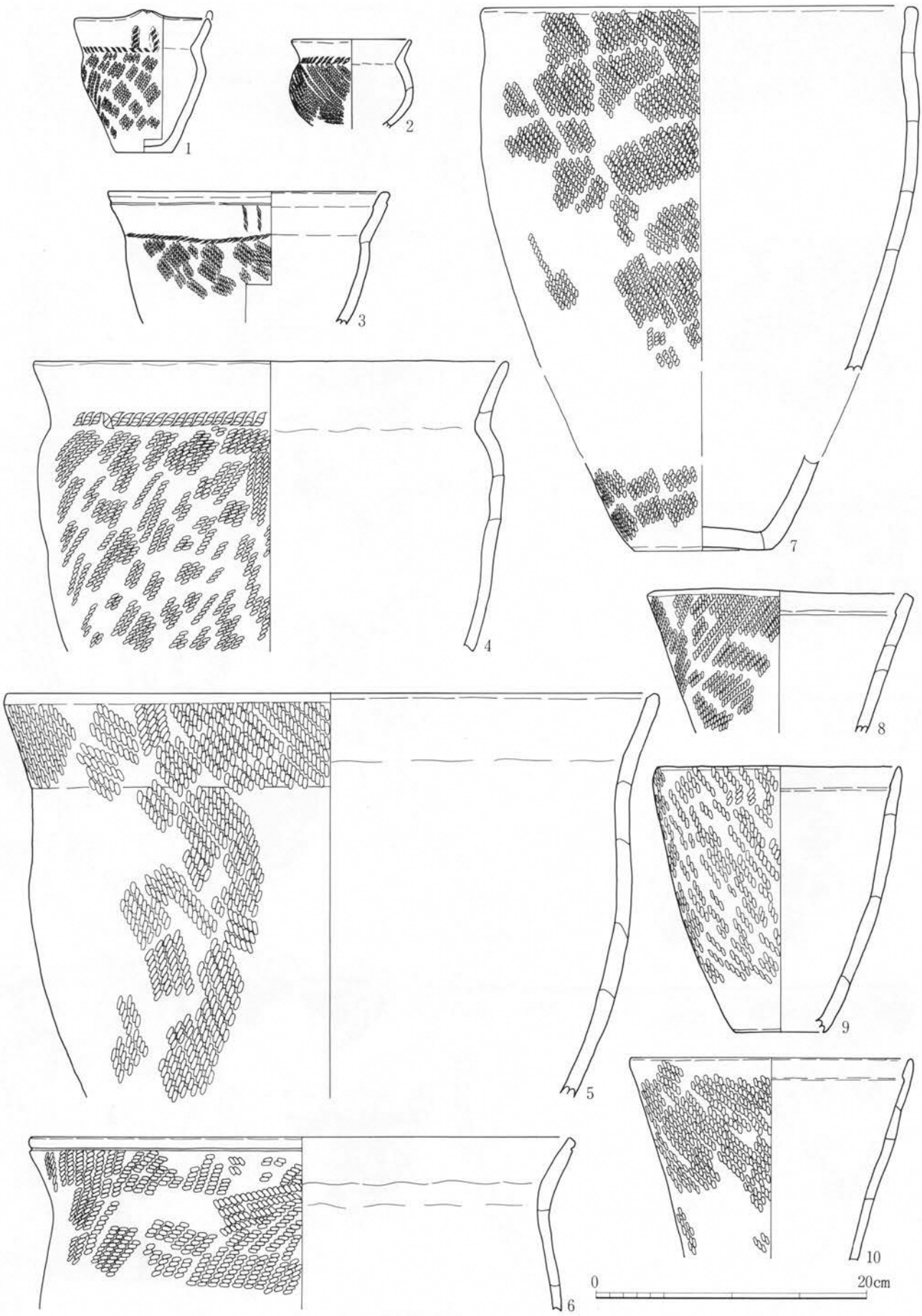
図版35　土器実測図・展開図（1/6）　X70～74　Y74～78　土器集中区



図版36　土器実測図・展開図（1/4）　X70～74　Y74～78　土器集中区

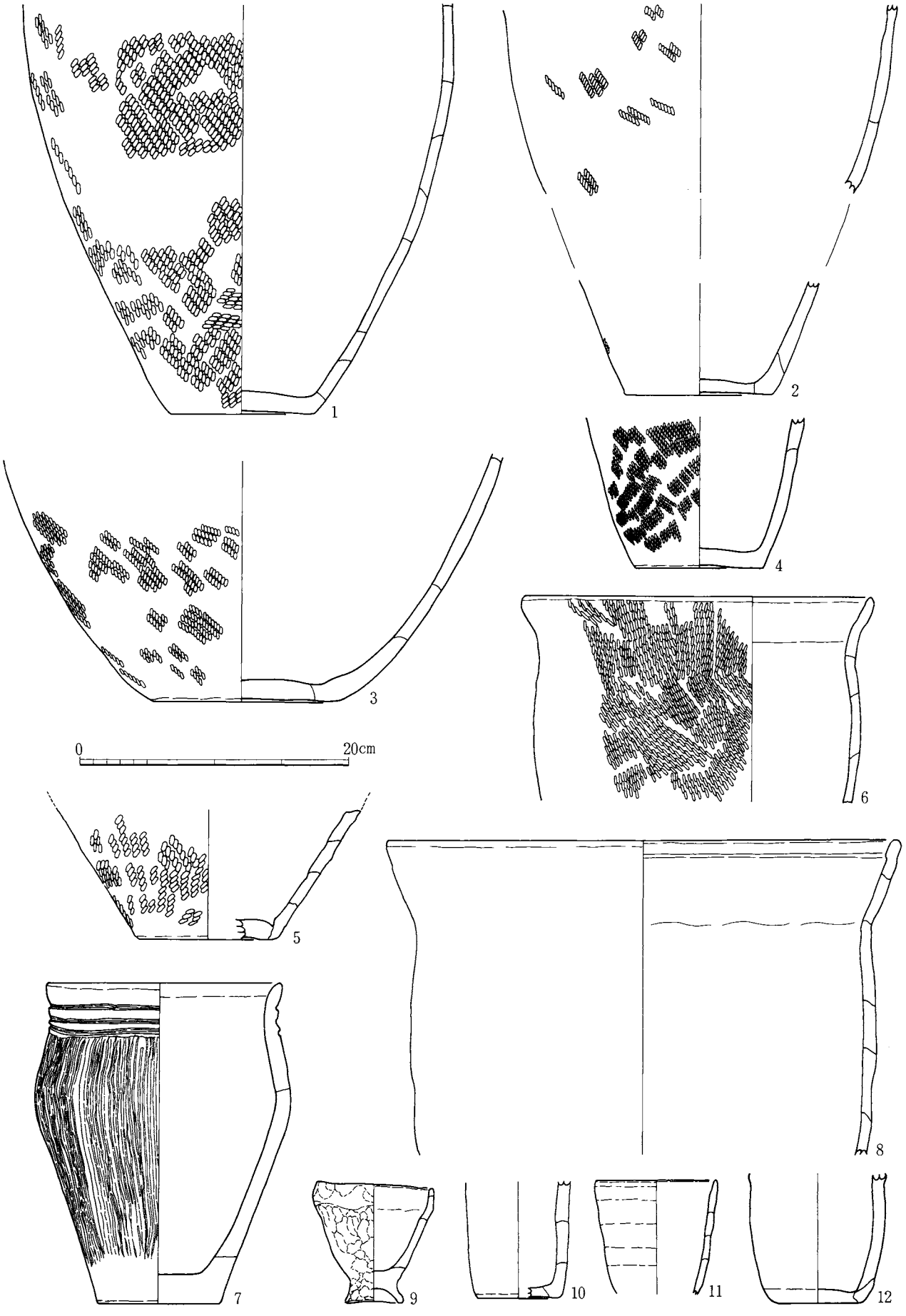


図版37　土器実測図・展開図（1/4）　X 70～74　Y 74～78　土器集中区

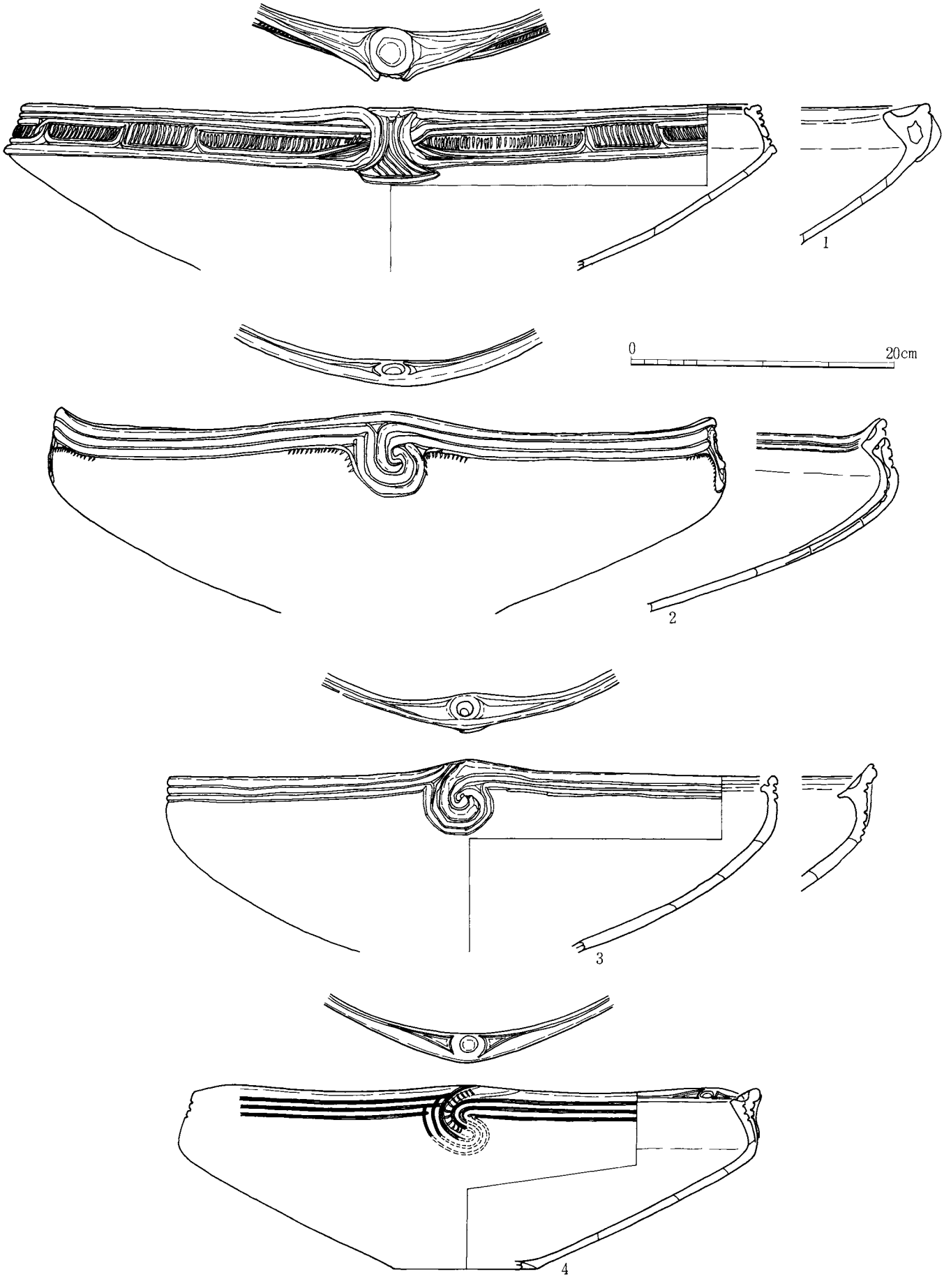


図版38　土器実測図　X70～74　Y74～78　土器集中区

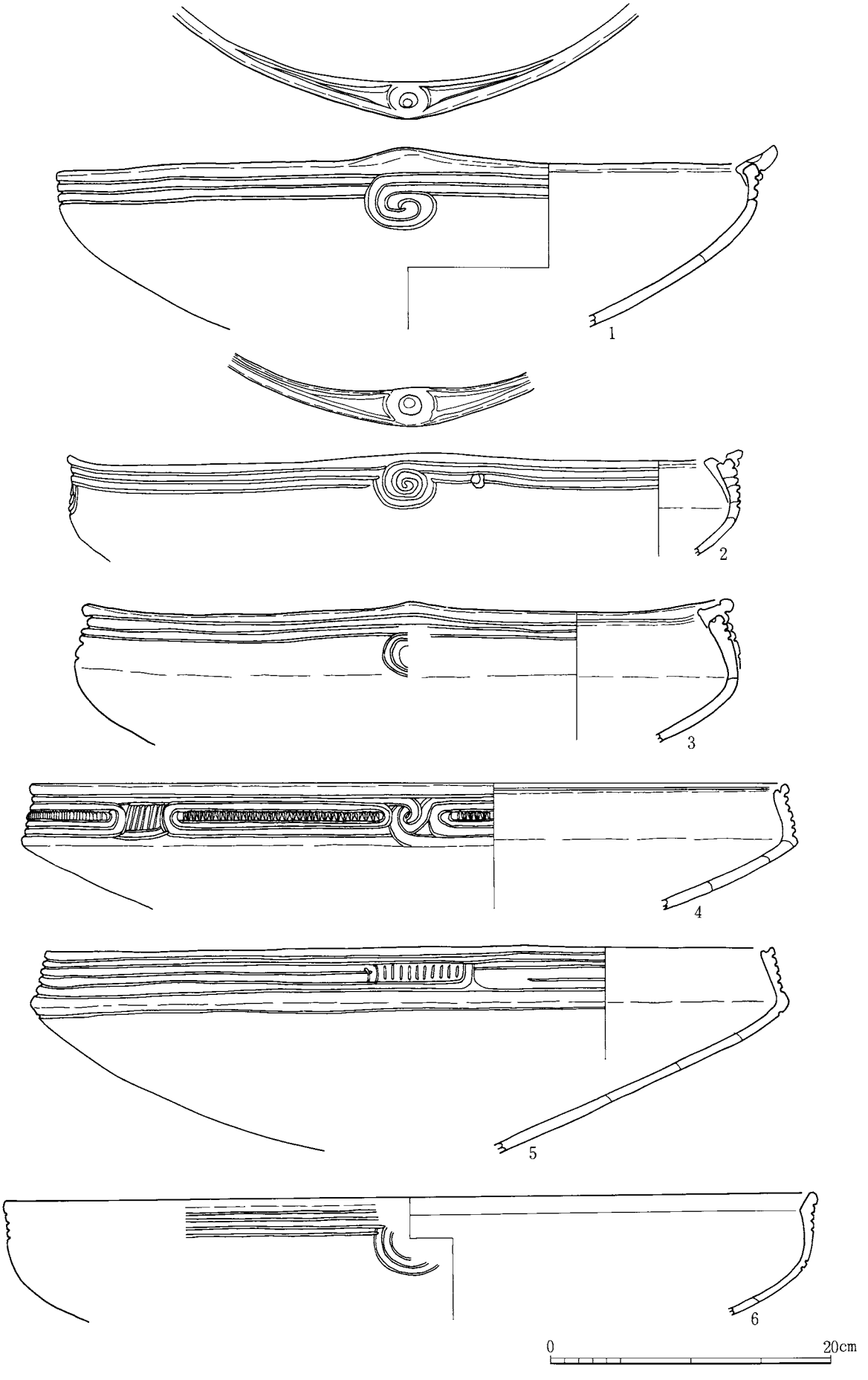
図版39　土器実測図　X70～74　Y74～78　土器集中区



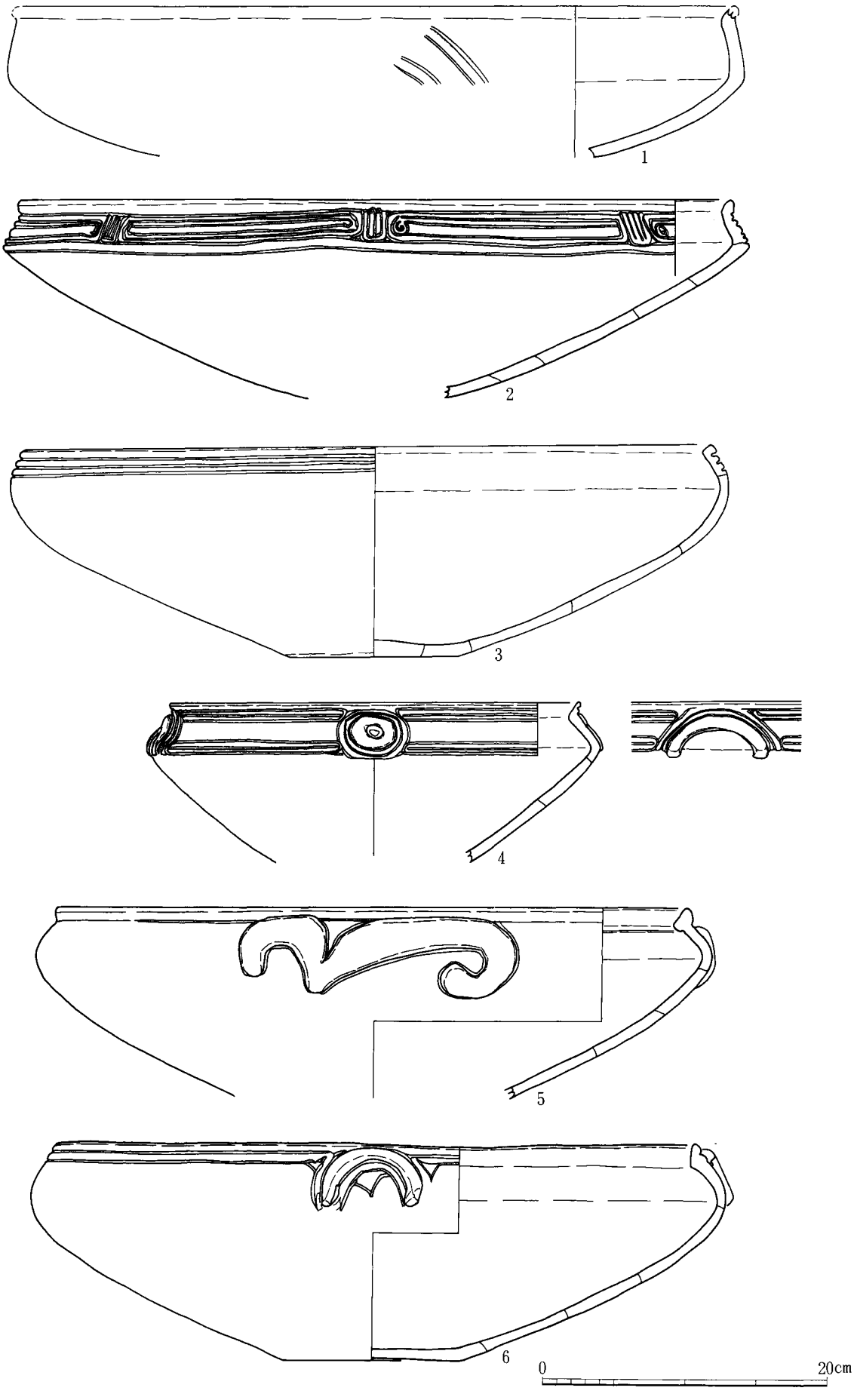
図版40　土器実測図　X70～74　Y74～78　土器集中区



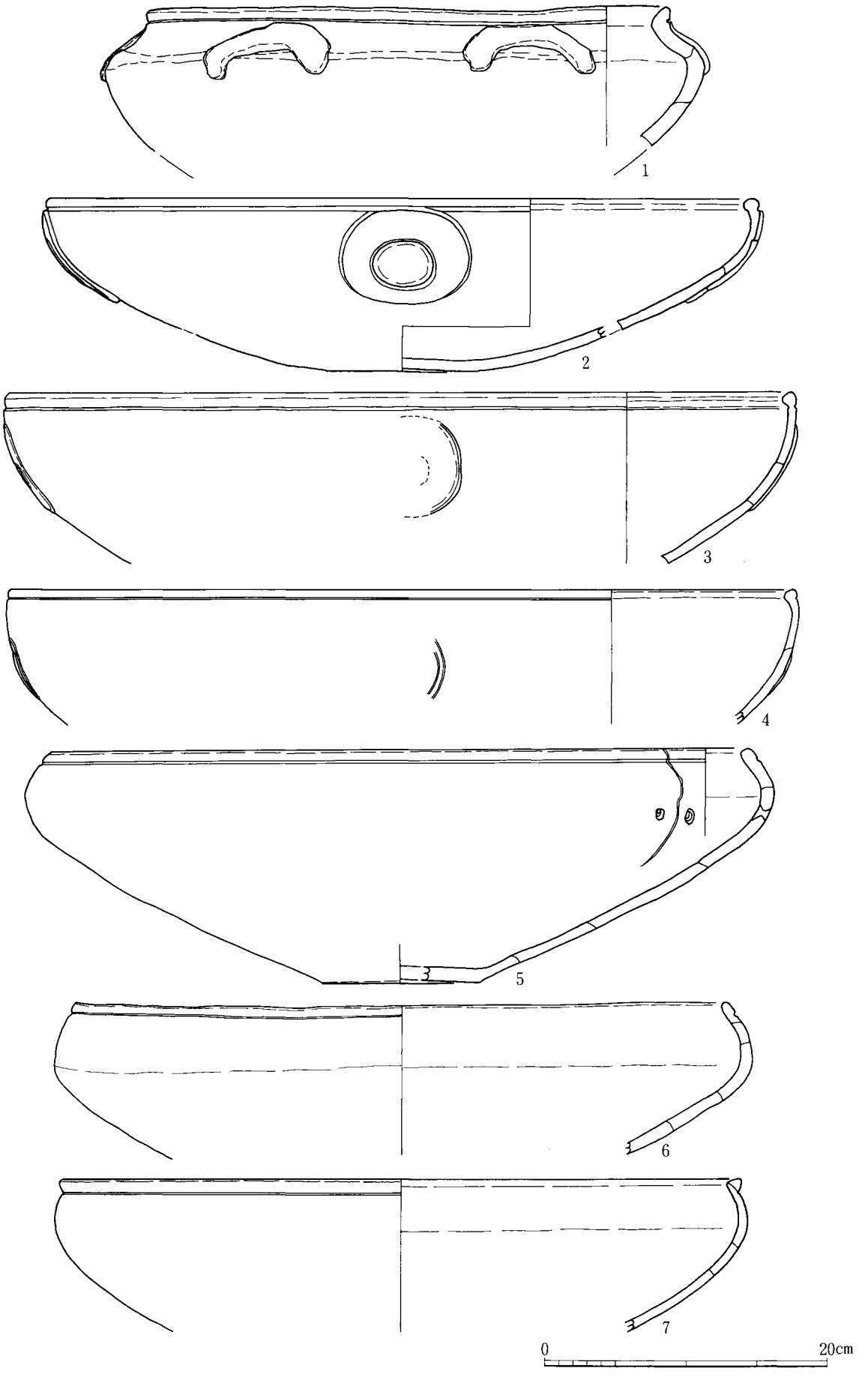
図版41　土器実測図　X70～74　Y74～78　土器集中区



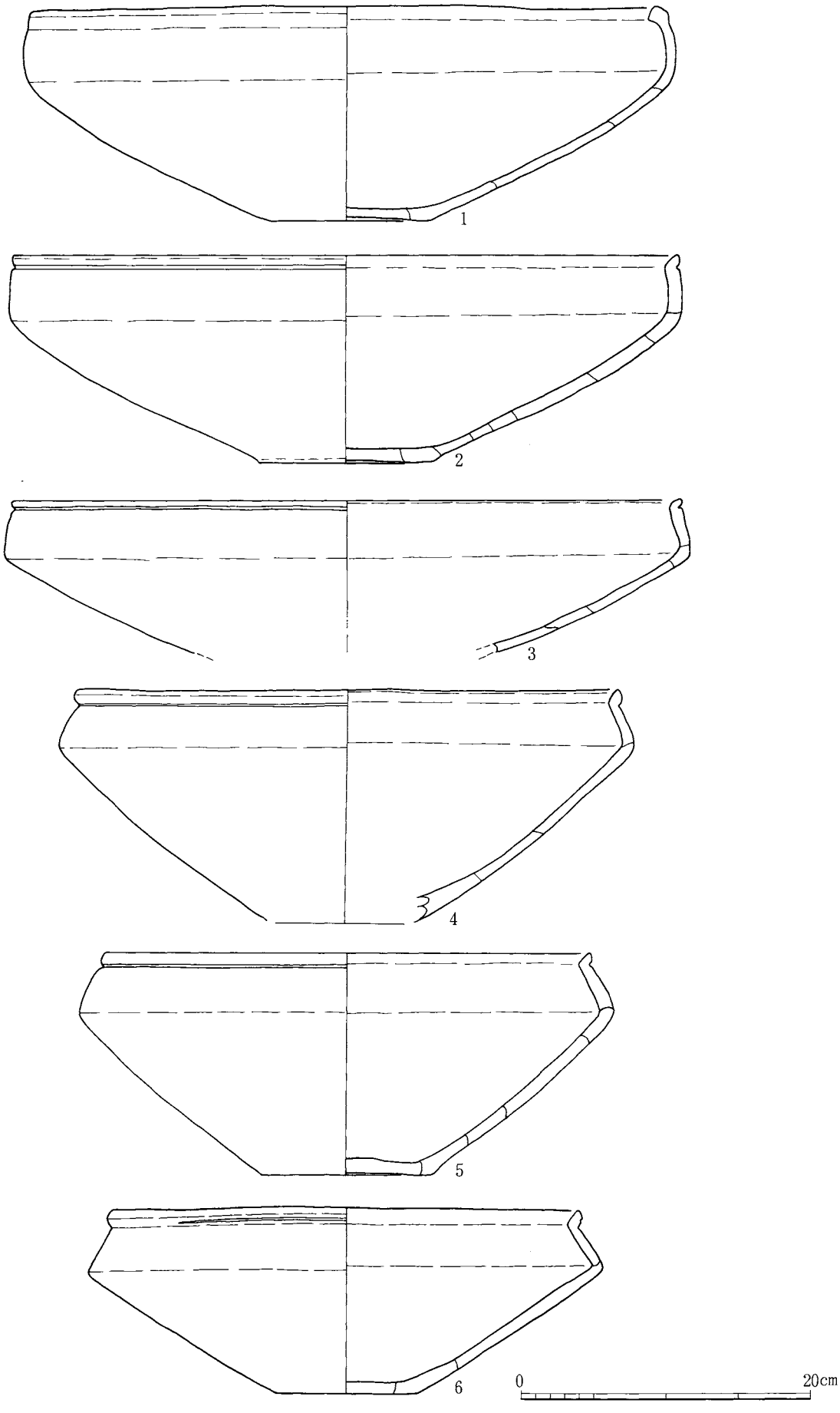
図版42　土器実測図　X70～74　Y74～78　土器集中区



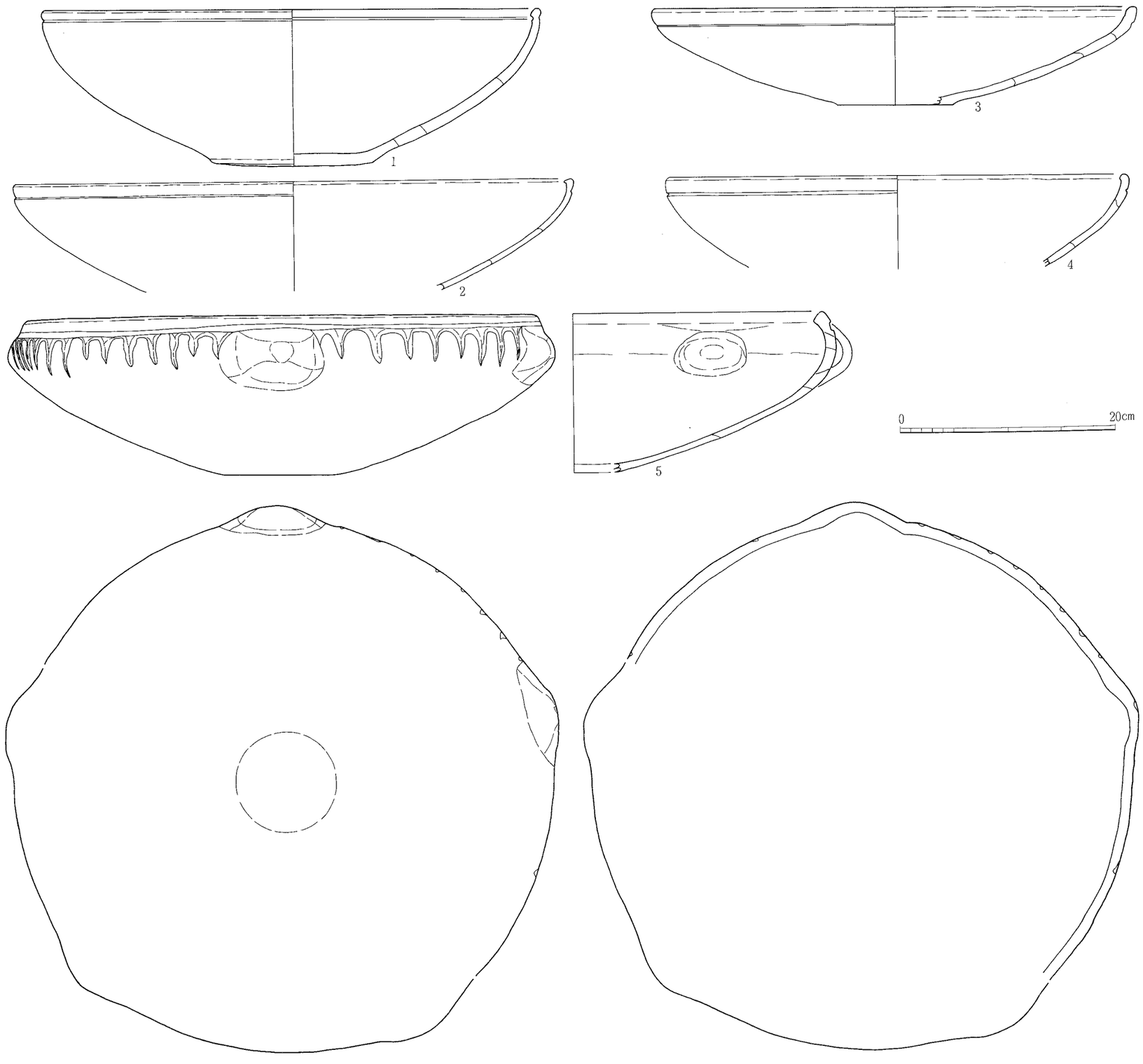
図版43　土器実測図　X70～74　Y74～78　土器集中区



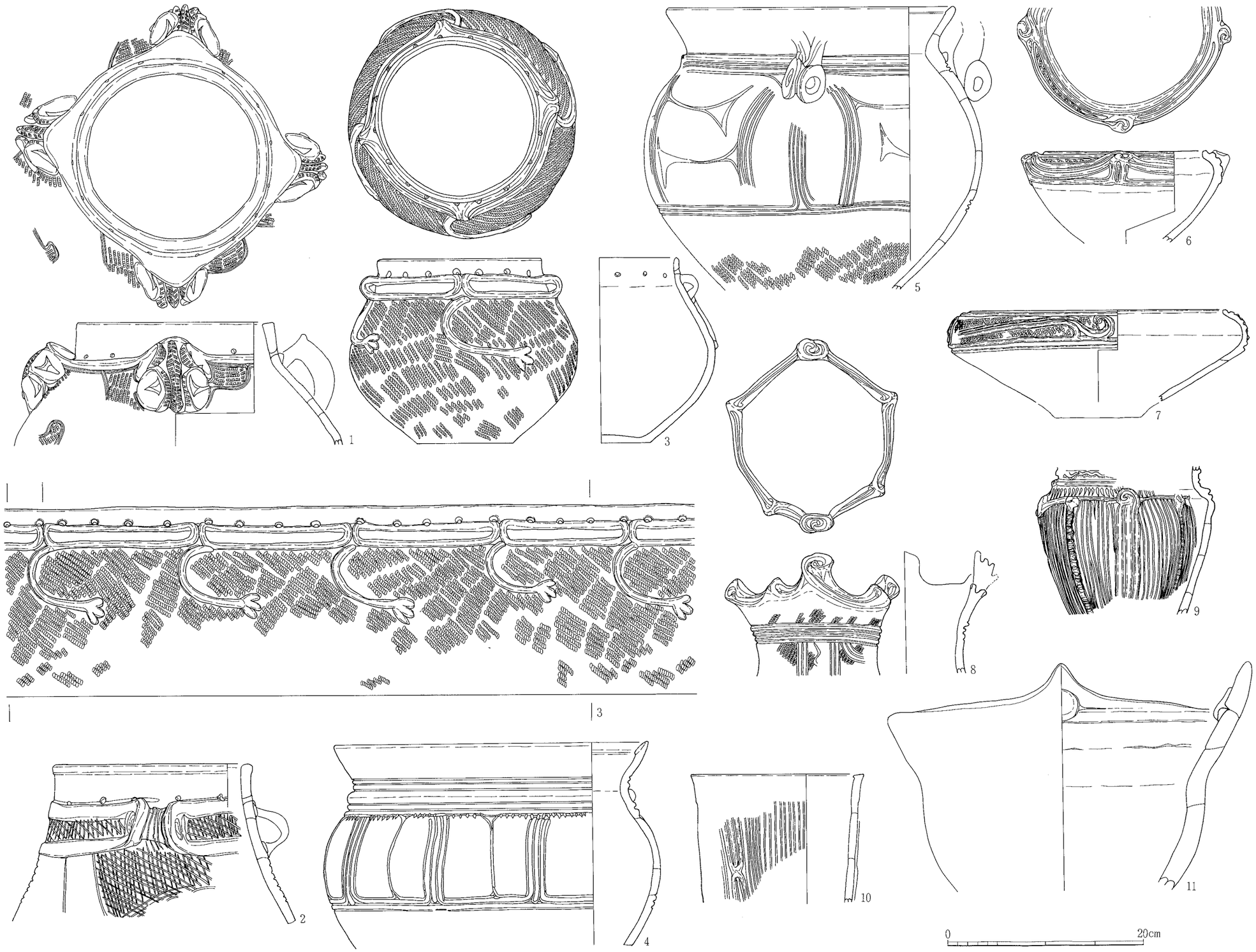
図版44　土器実測図　X70～74　Y74～78　土器集中区



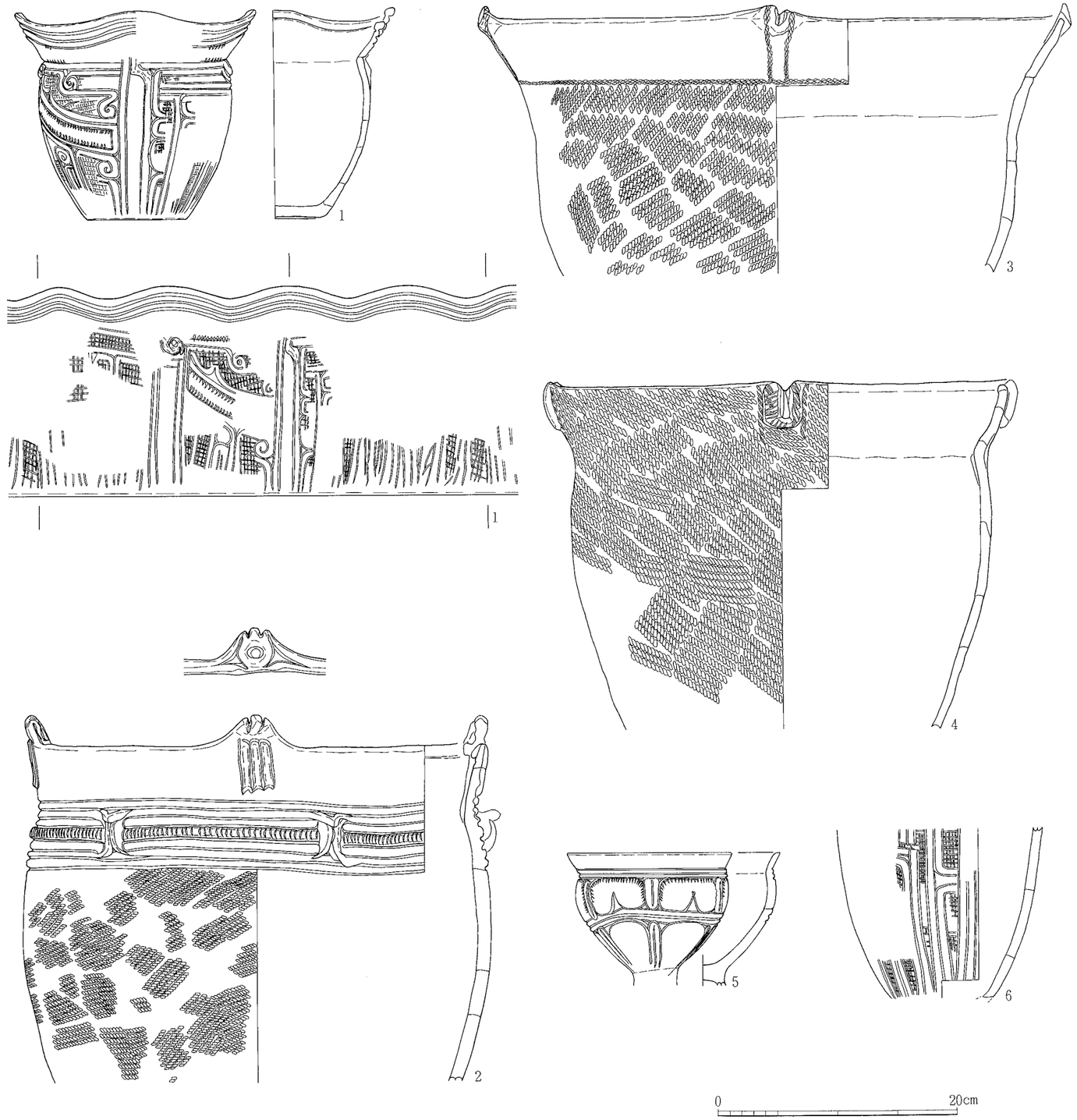
図版45　土器実測図　X70～74　Y74～78　土器集中区



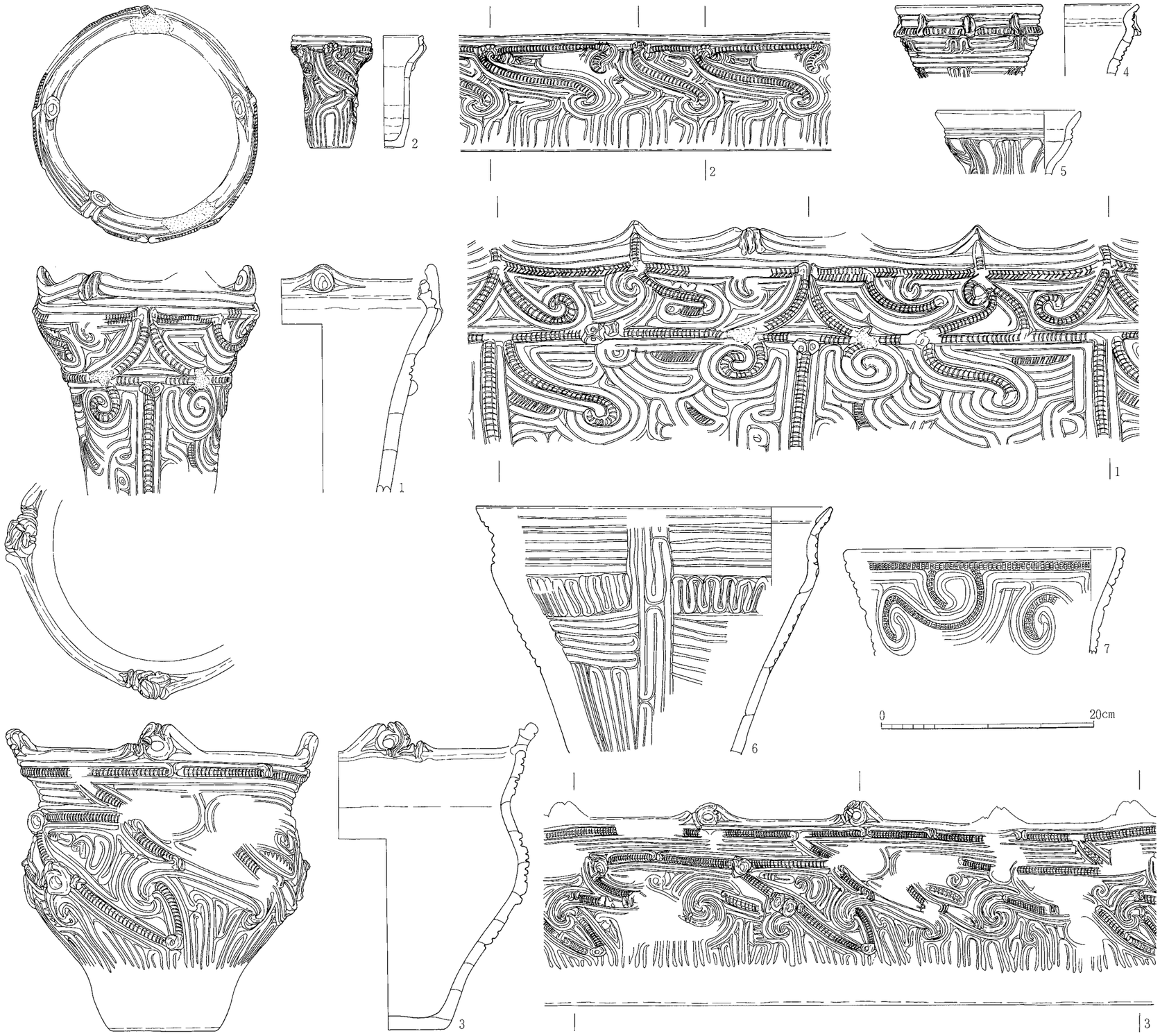
図版46　土器実測図　X70～74　Y74～78　土器集中区



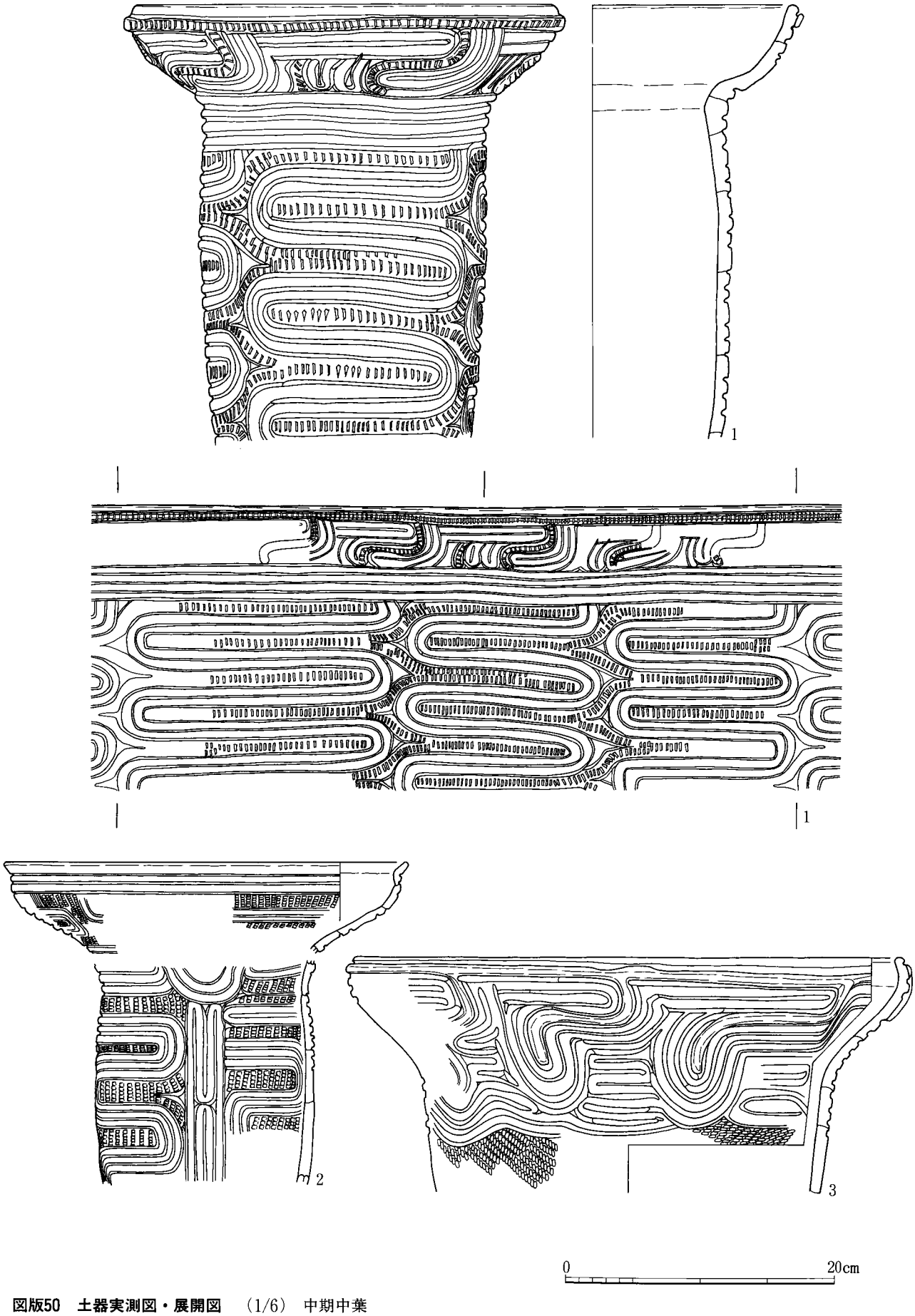
図版47　土器実測図・展開図（1/4）　X70～74　Y74～78　土器集中区



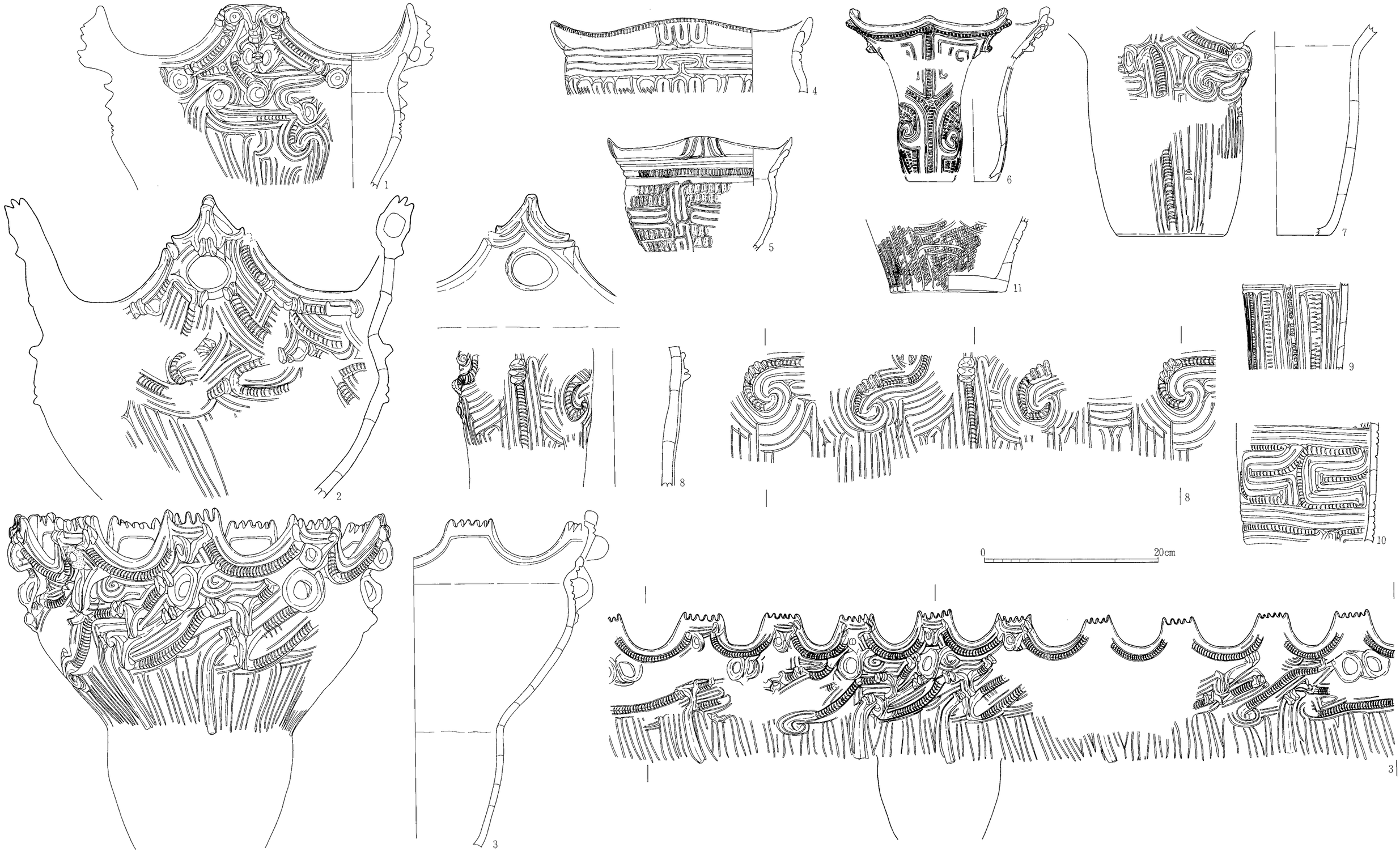
図版48　土器実測図・展開図（1/4）　中期前葉



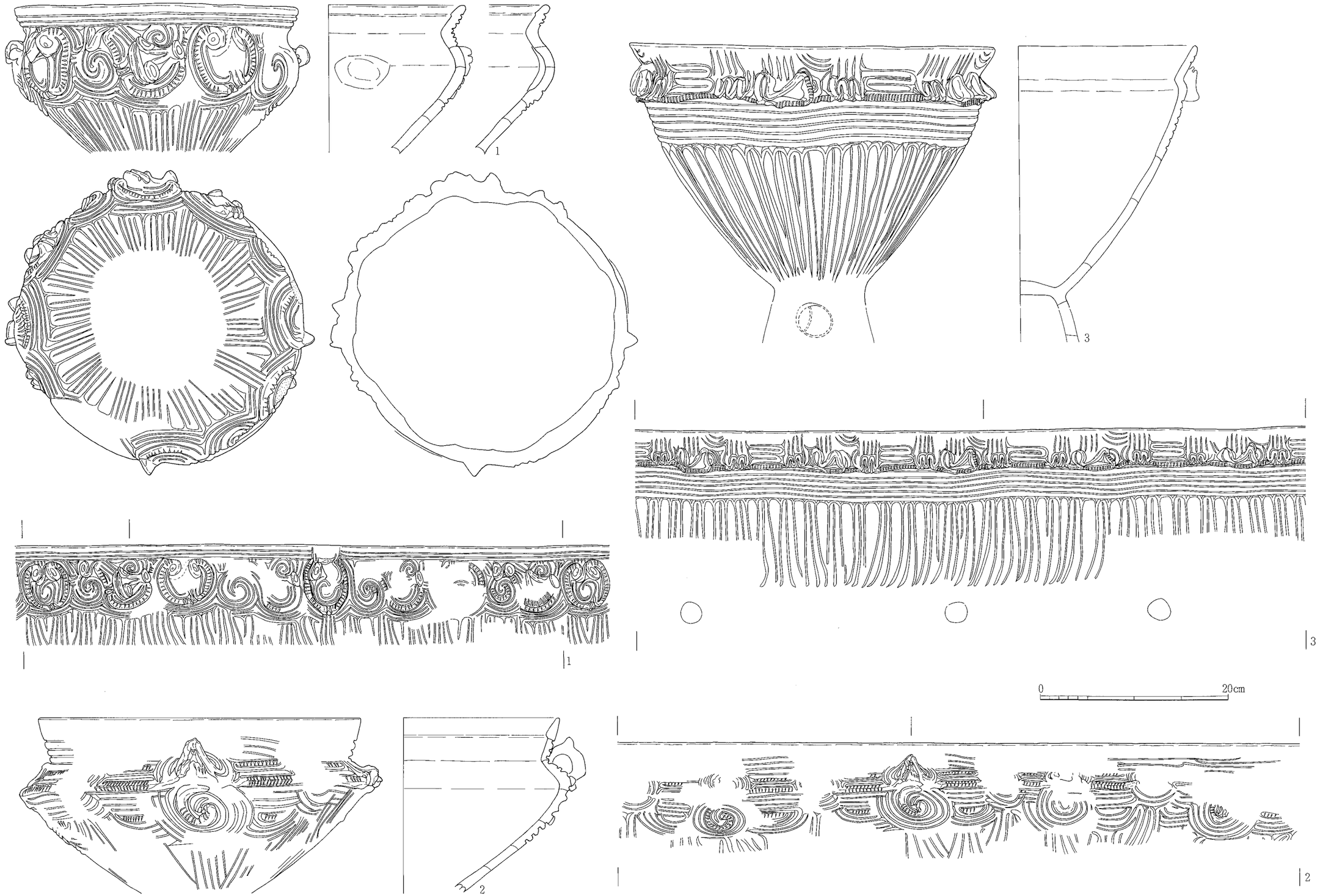
図版49　土器実測図・展開図 1(1/4). 3(1/6)　中期中葉



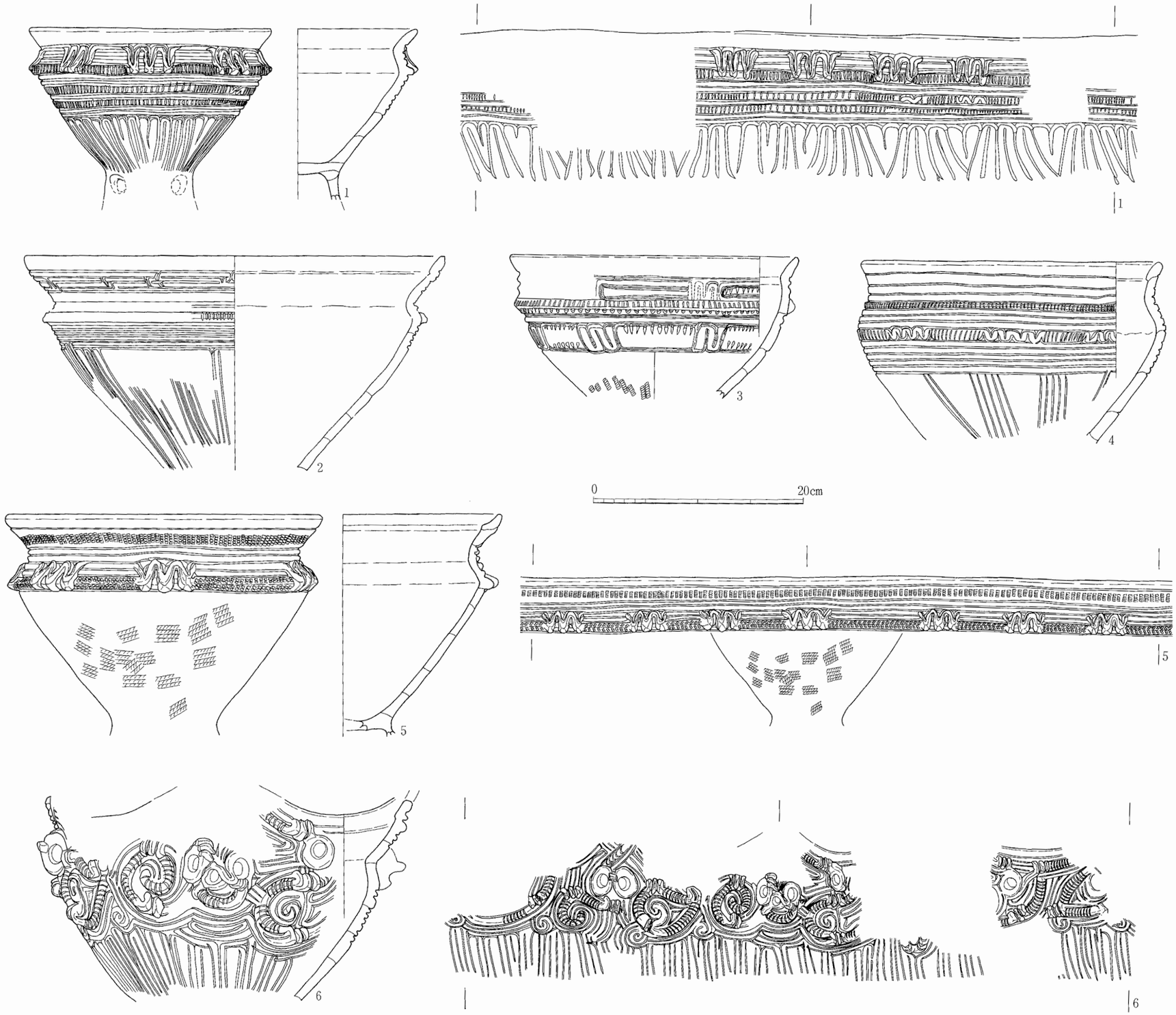
図版50　土器実測図・展開図　(1/6)　中期中葉



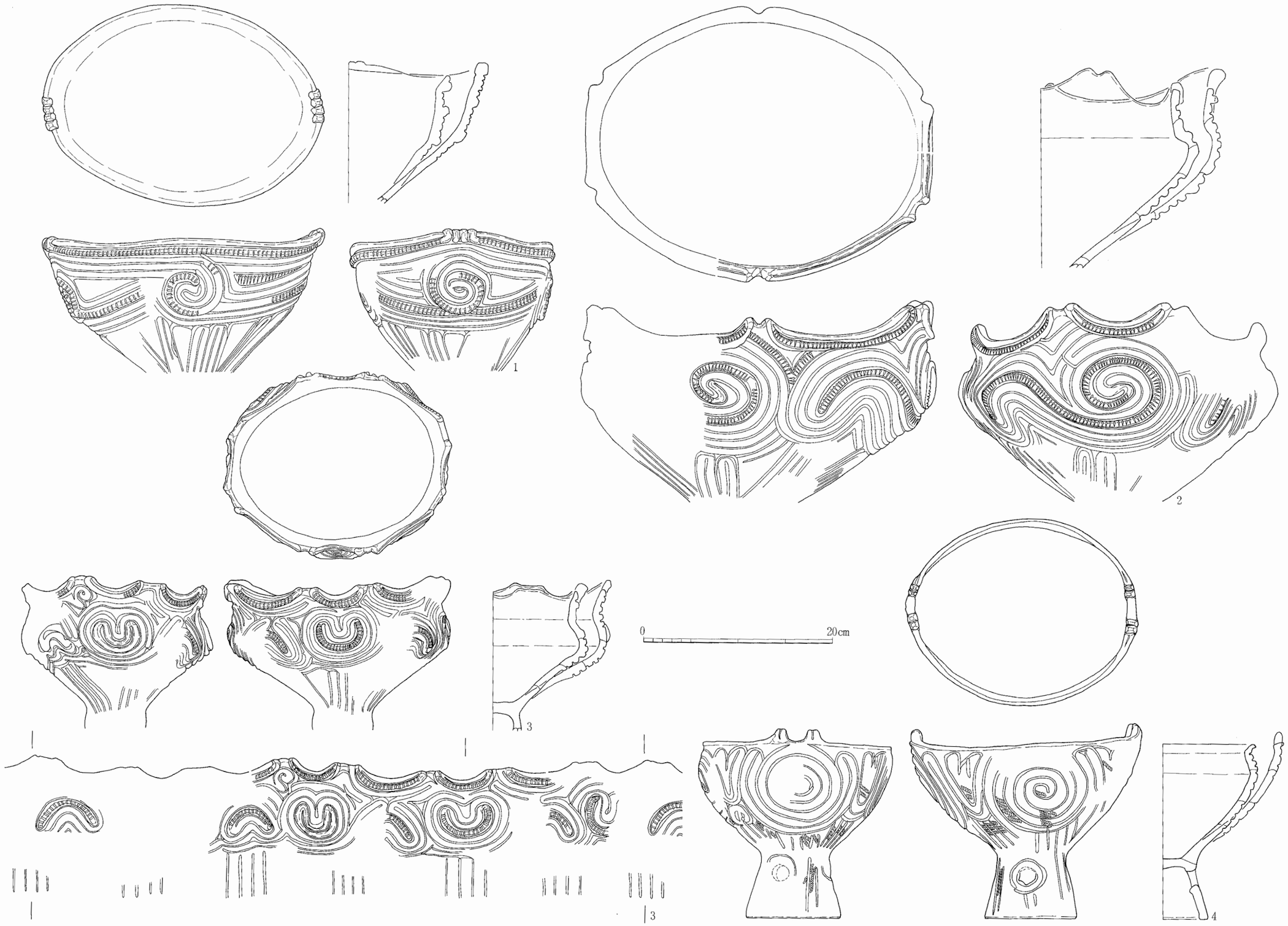
図版51　土器実測図・展開図 3(1/6)・8(1/4)　中期中葉



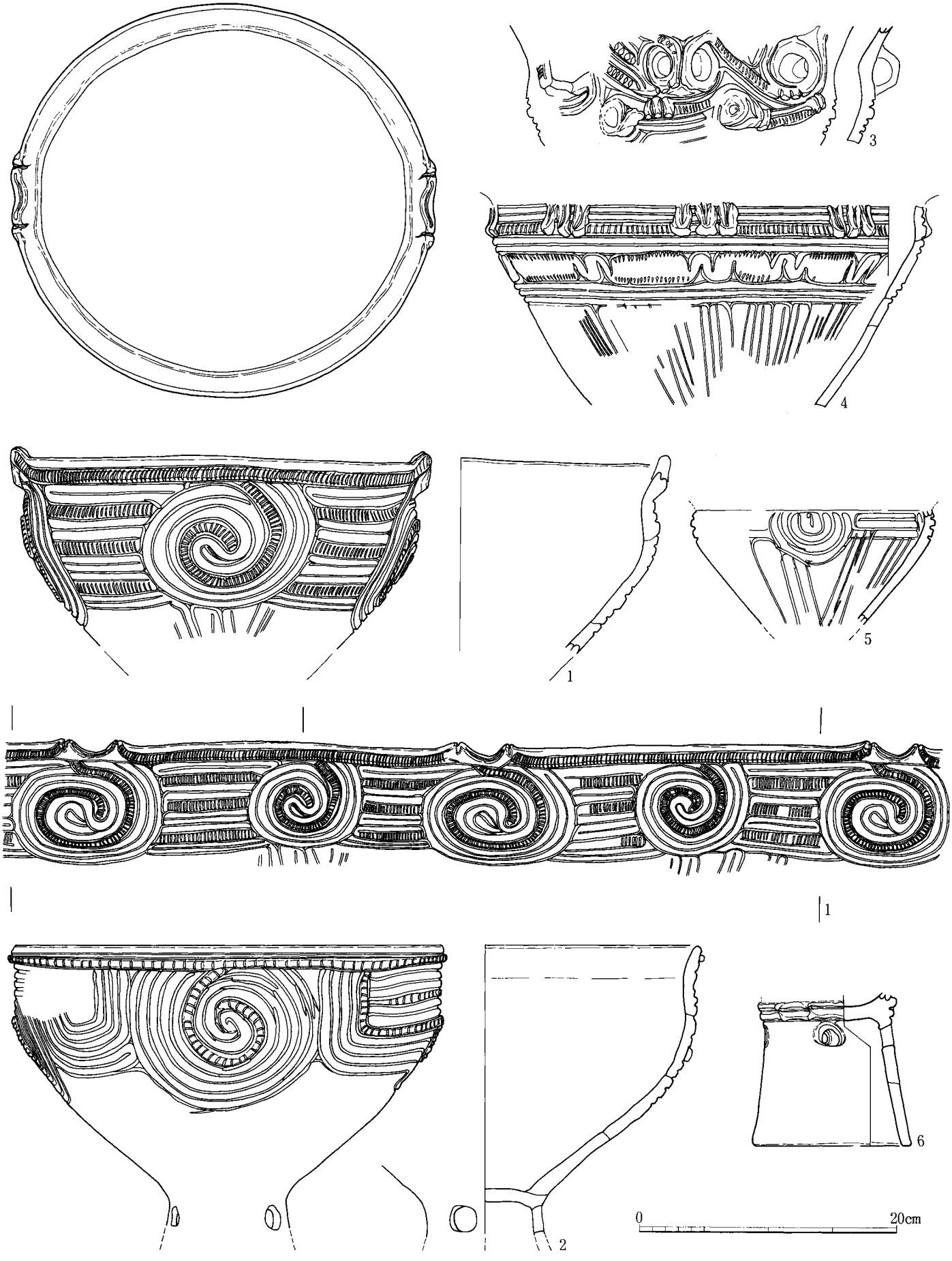
図版52　土器実測図・展開図（1/6）　中期中葉



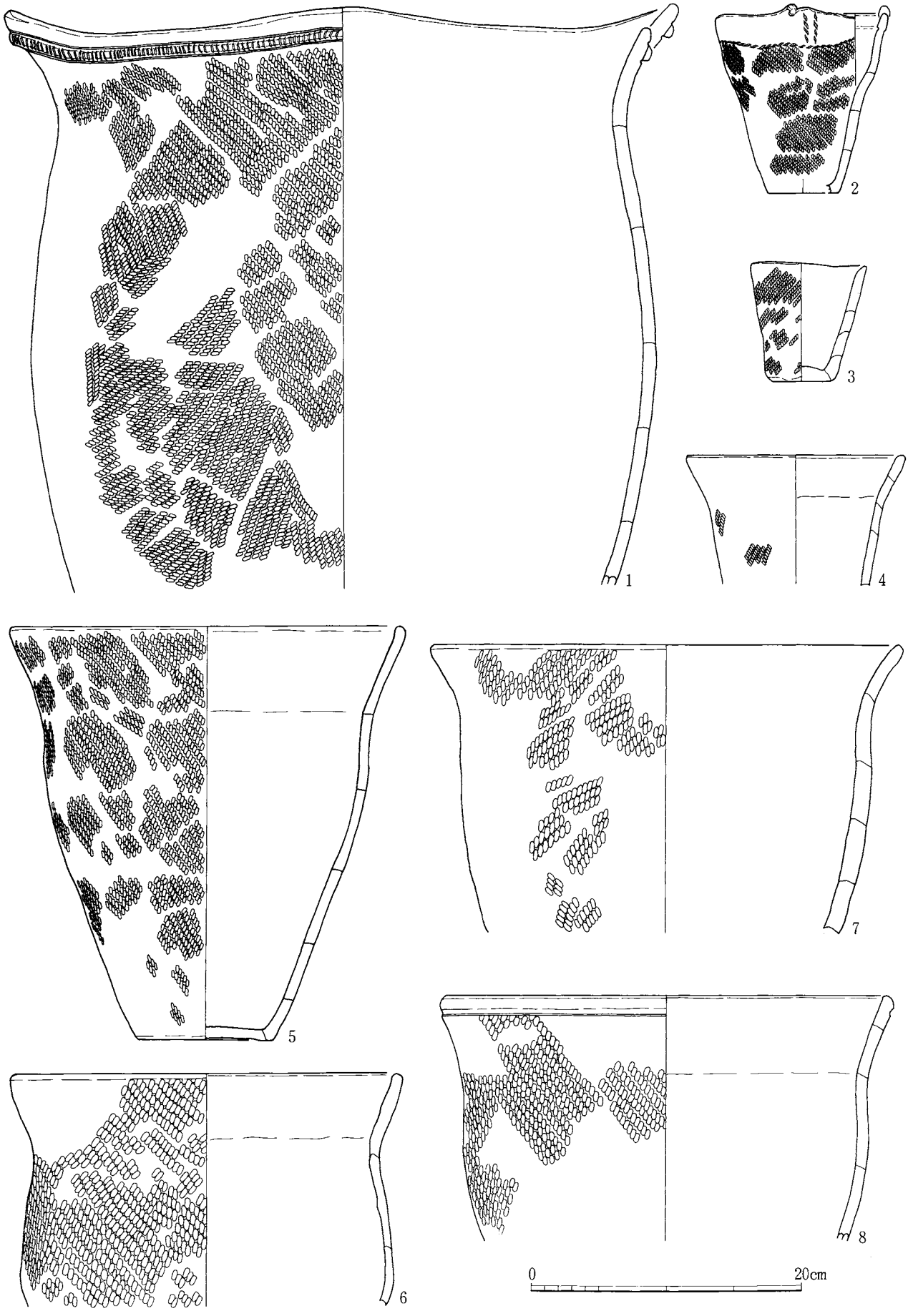
図版53　土器実測図・展開図 1(1/4)．5・6(1/6)　中期中葉



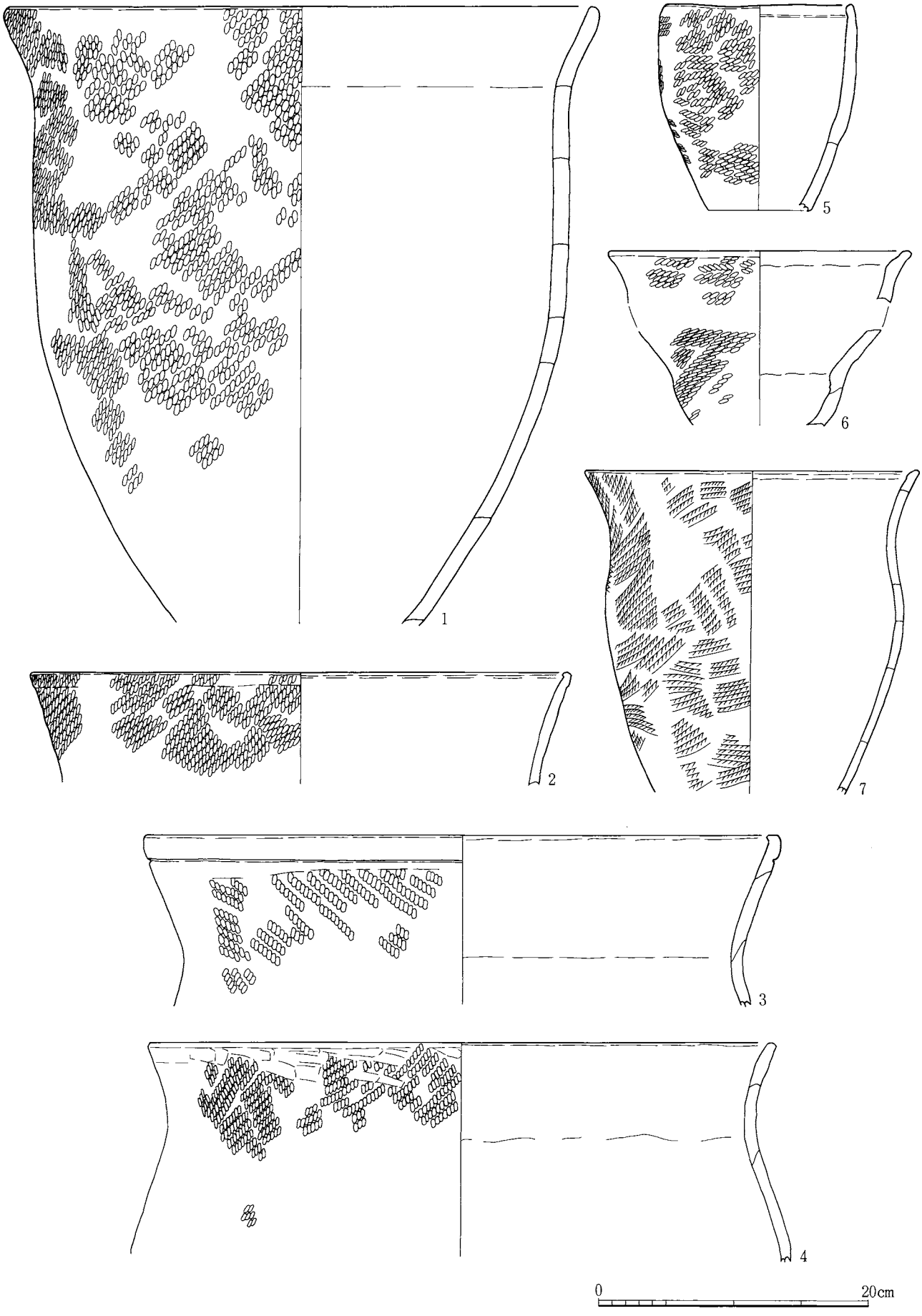
図版54　土器実測図・展開図（1/4）　中期中葉



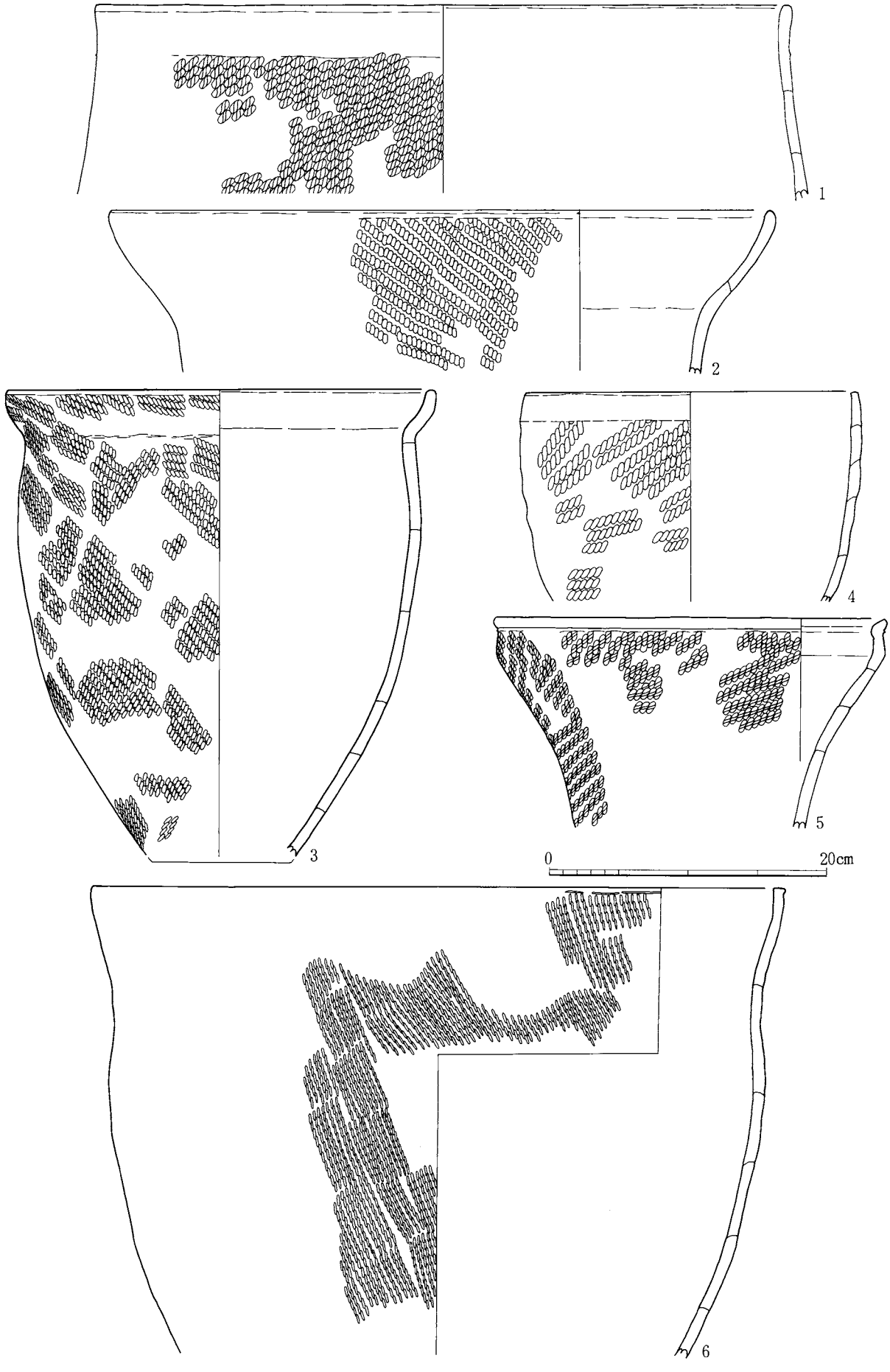
図版55　土器実測図・展開図（1/6）　中期中葉



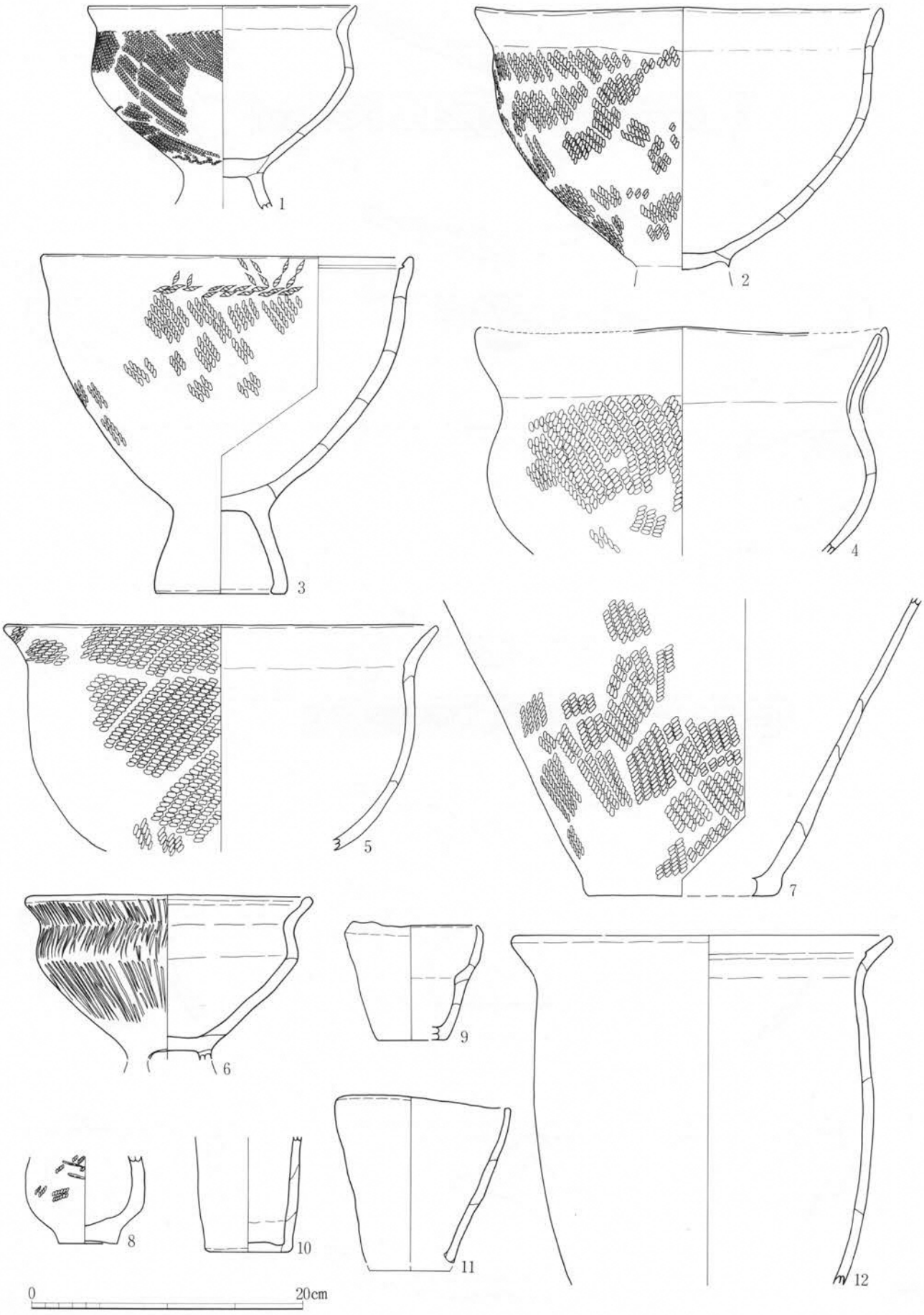
図版56　土器実測図



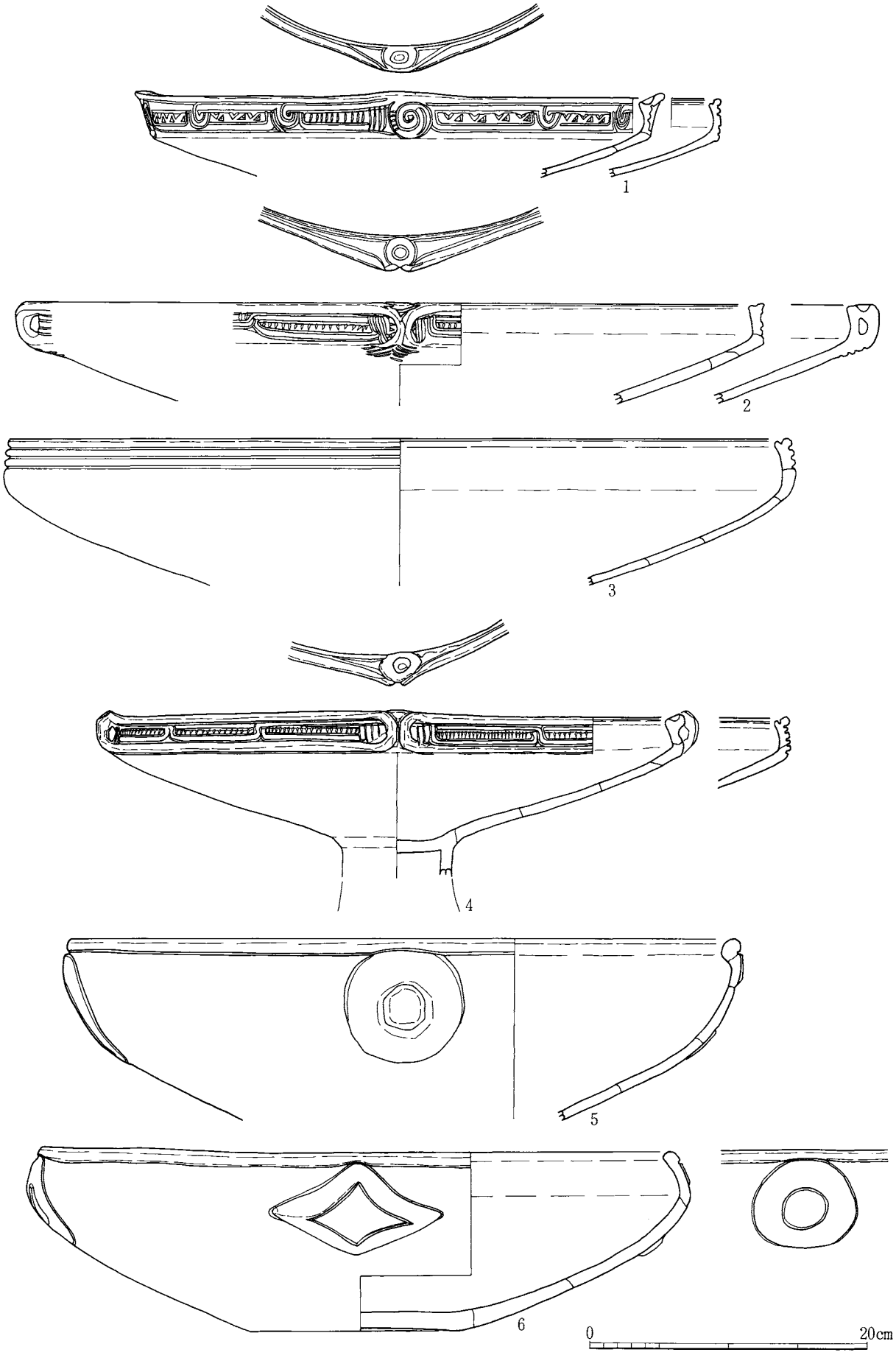
図版57　土器実測図



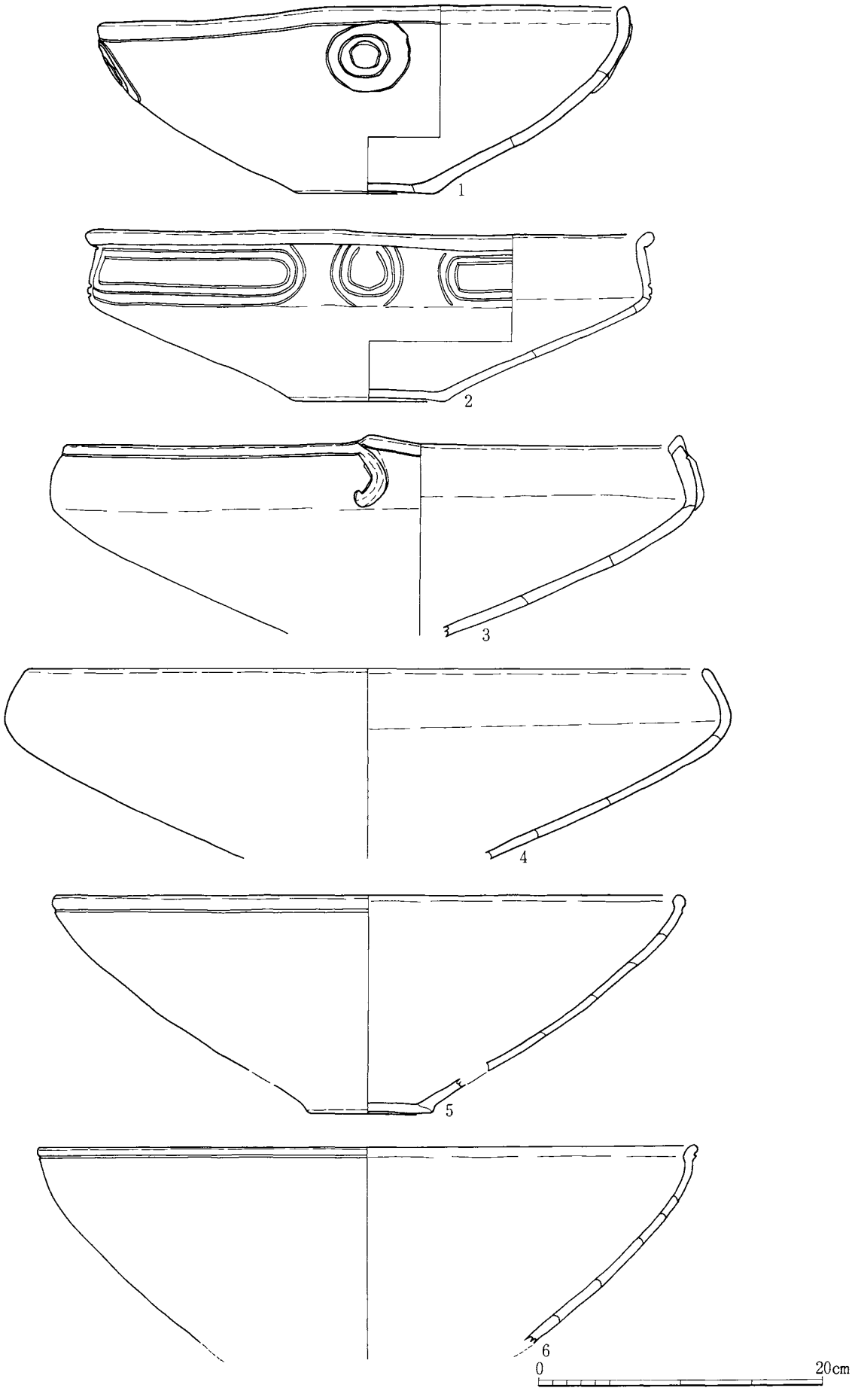
図版58　土器実測図



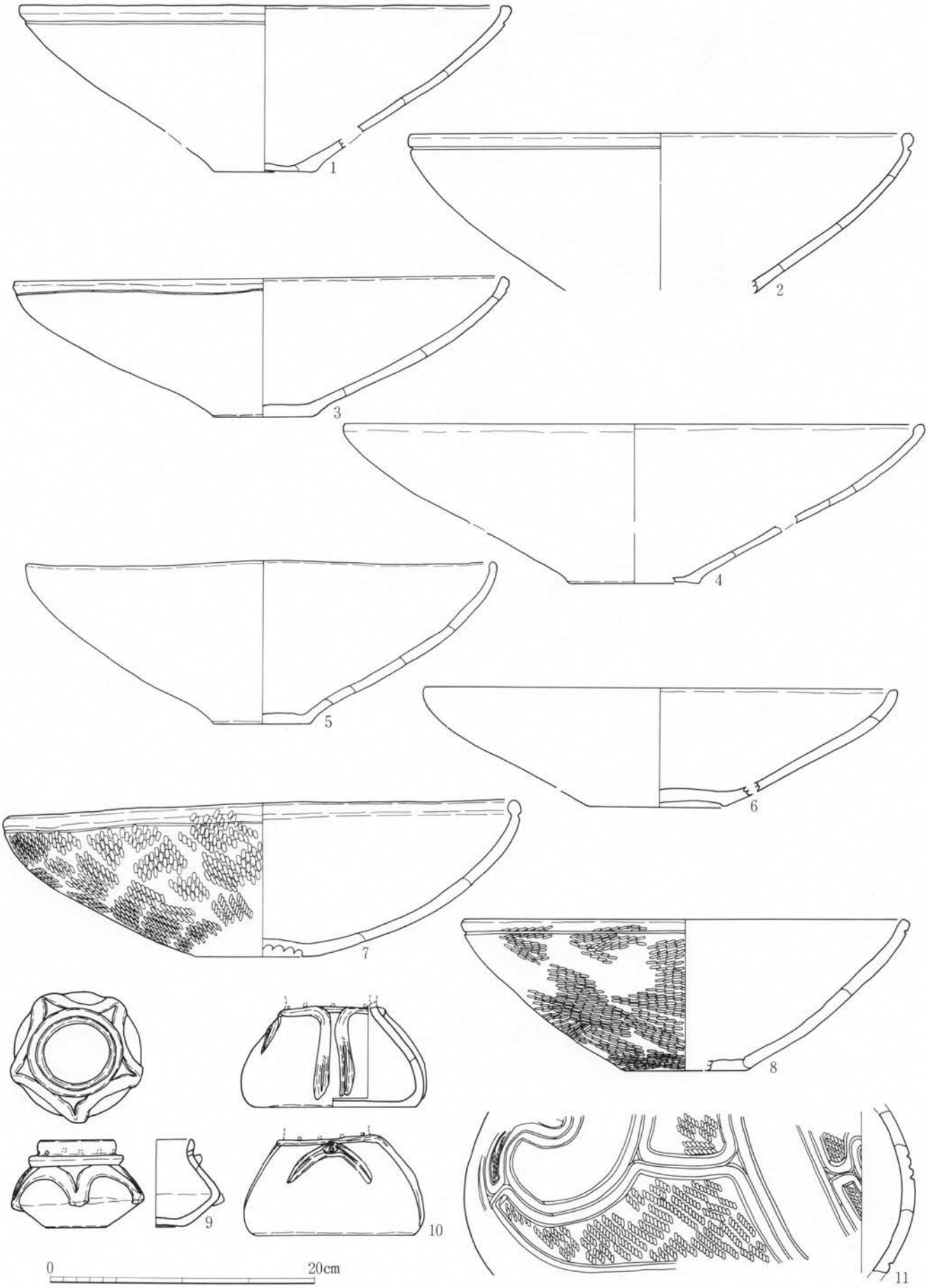
図版59　土器実測図



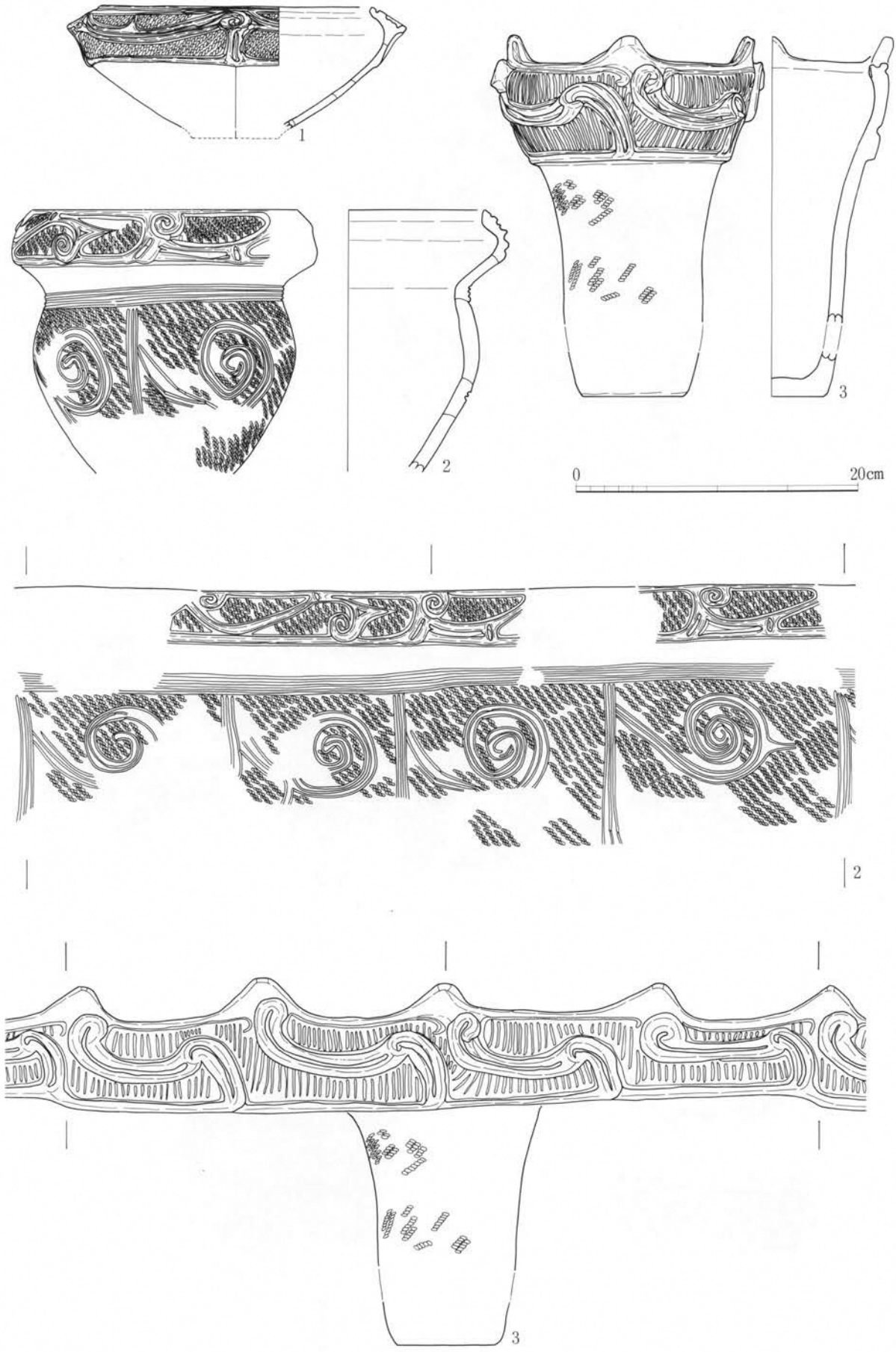
図版60　土器実測図　中期中葉



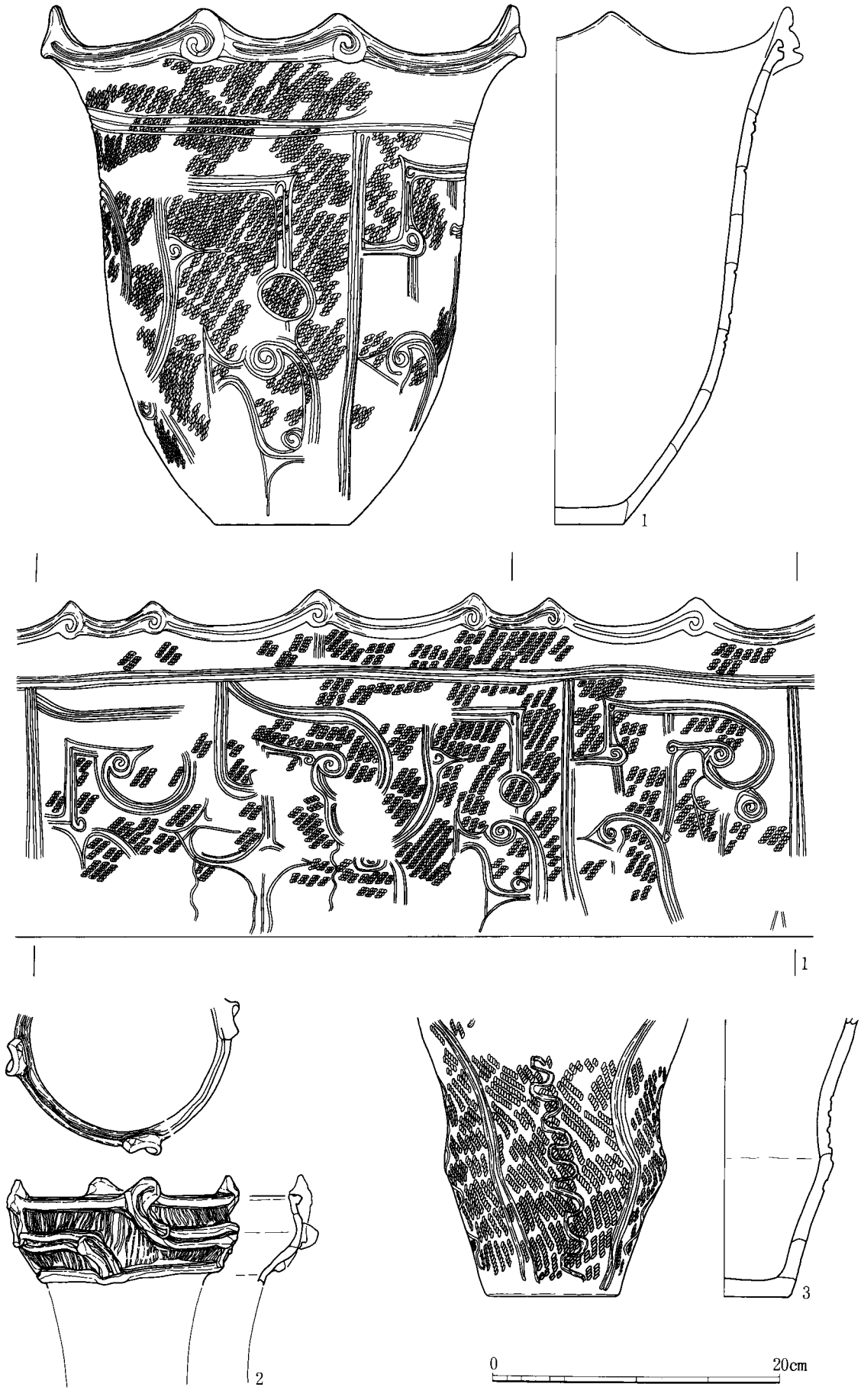
図版61　土器実測図　中期中葉



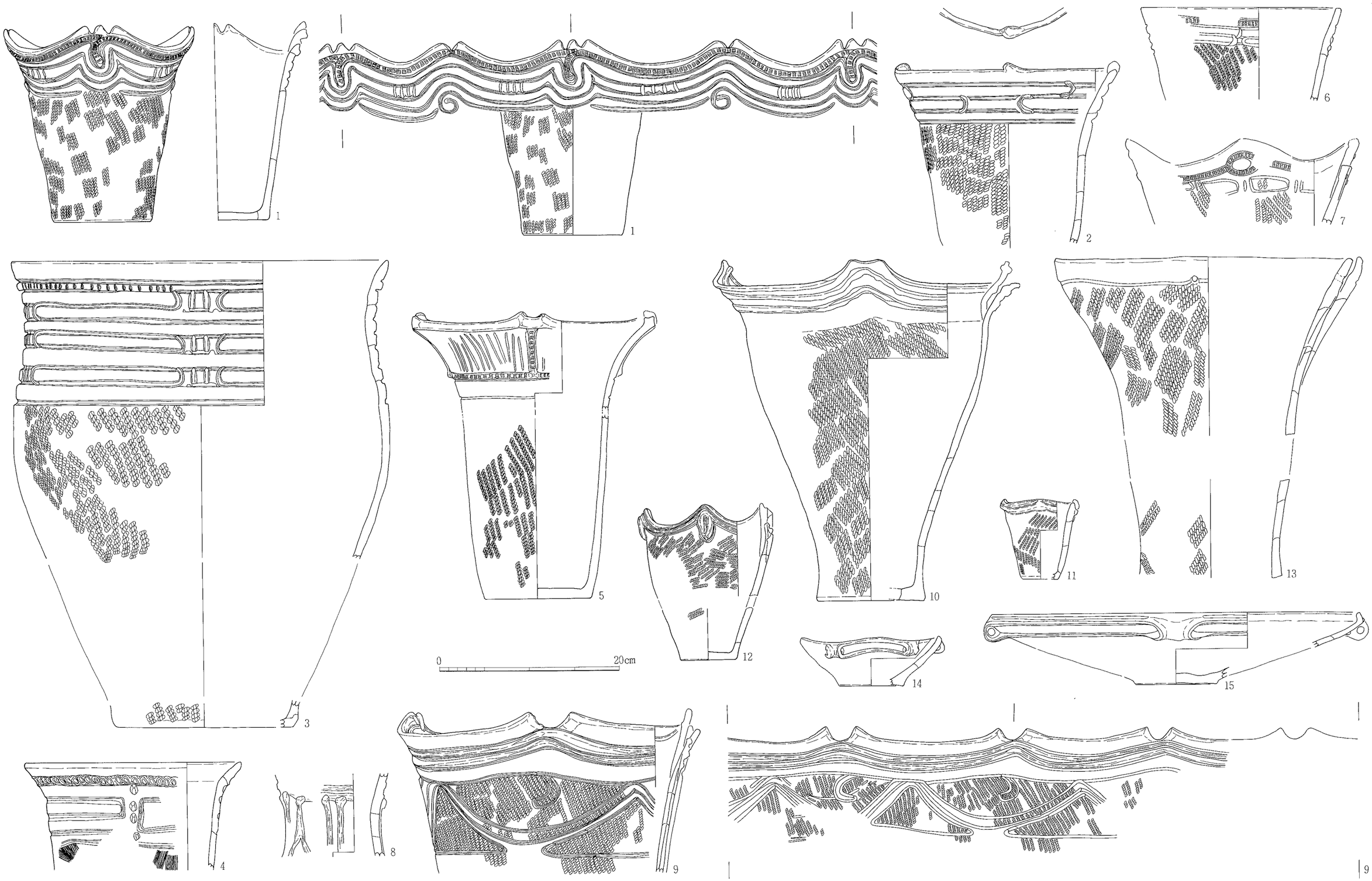
図版62　土器実測図　中期中葉



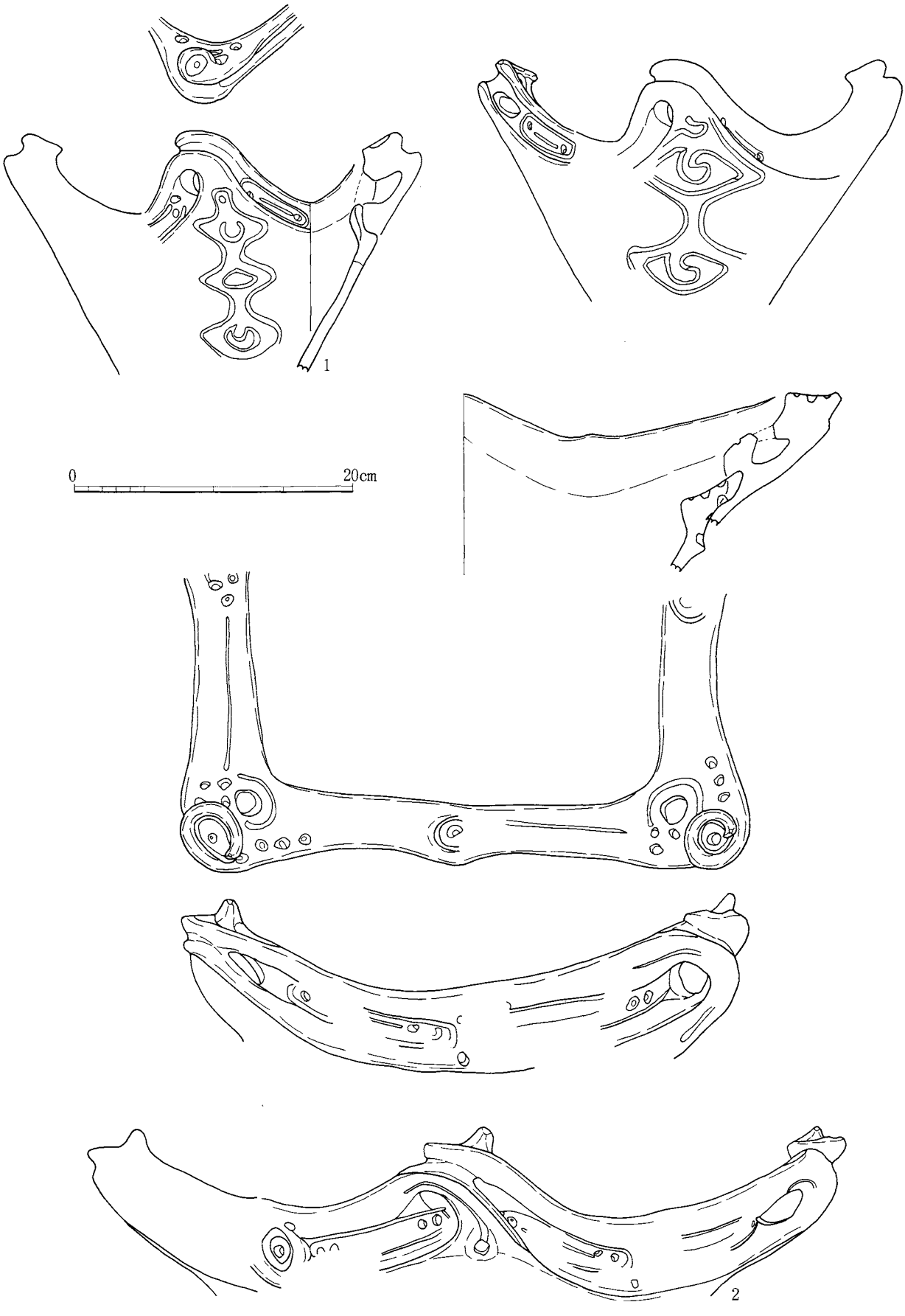
図版63　土器実測図・展開図（1/4）　中期中葉



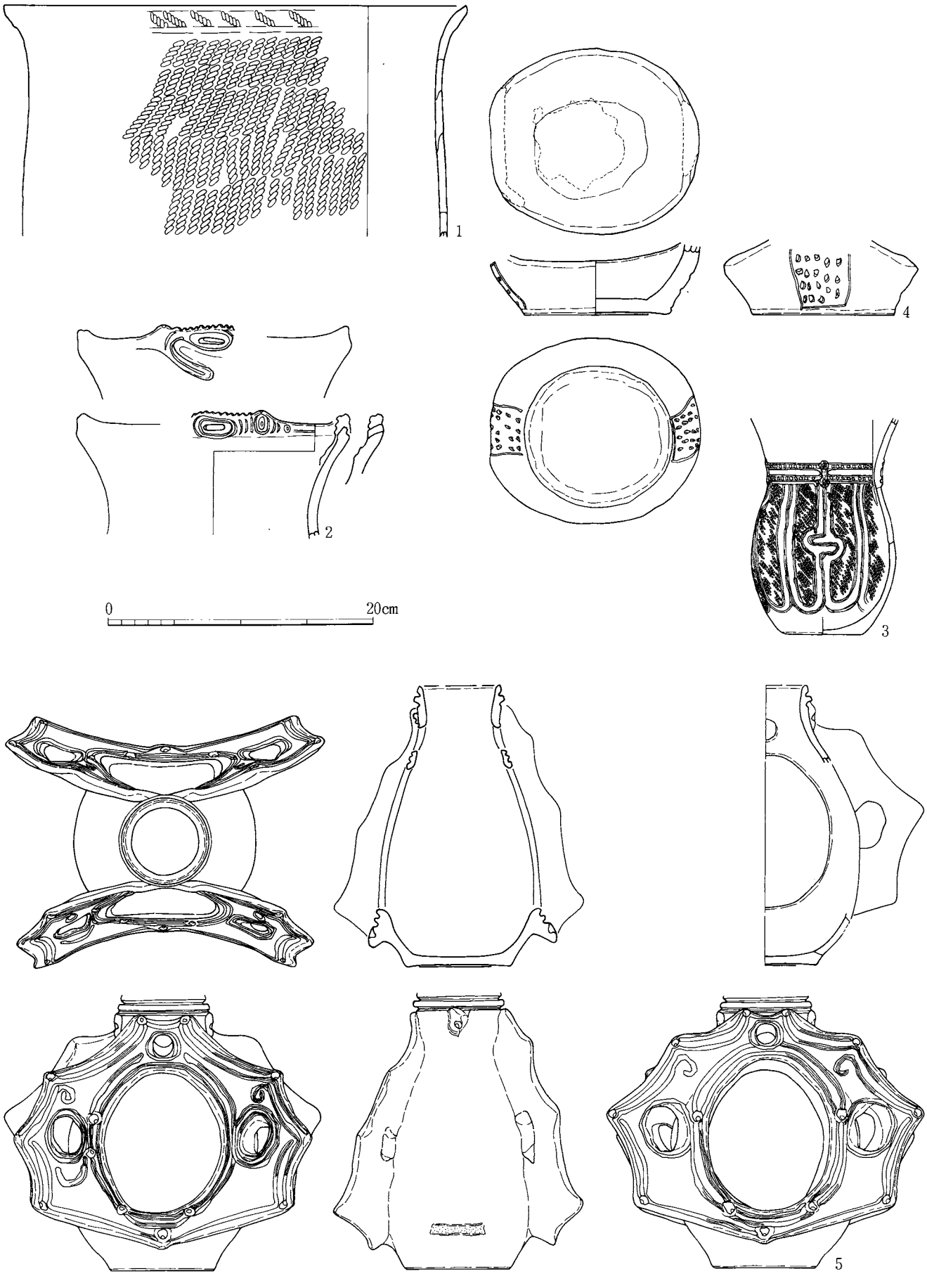
図版64　土器実測図・展開図（1/6）　中期中葉



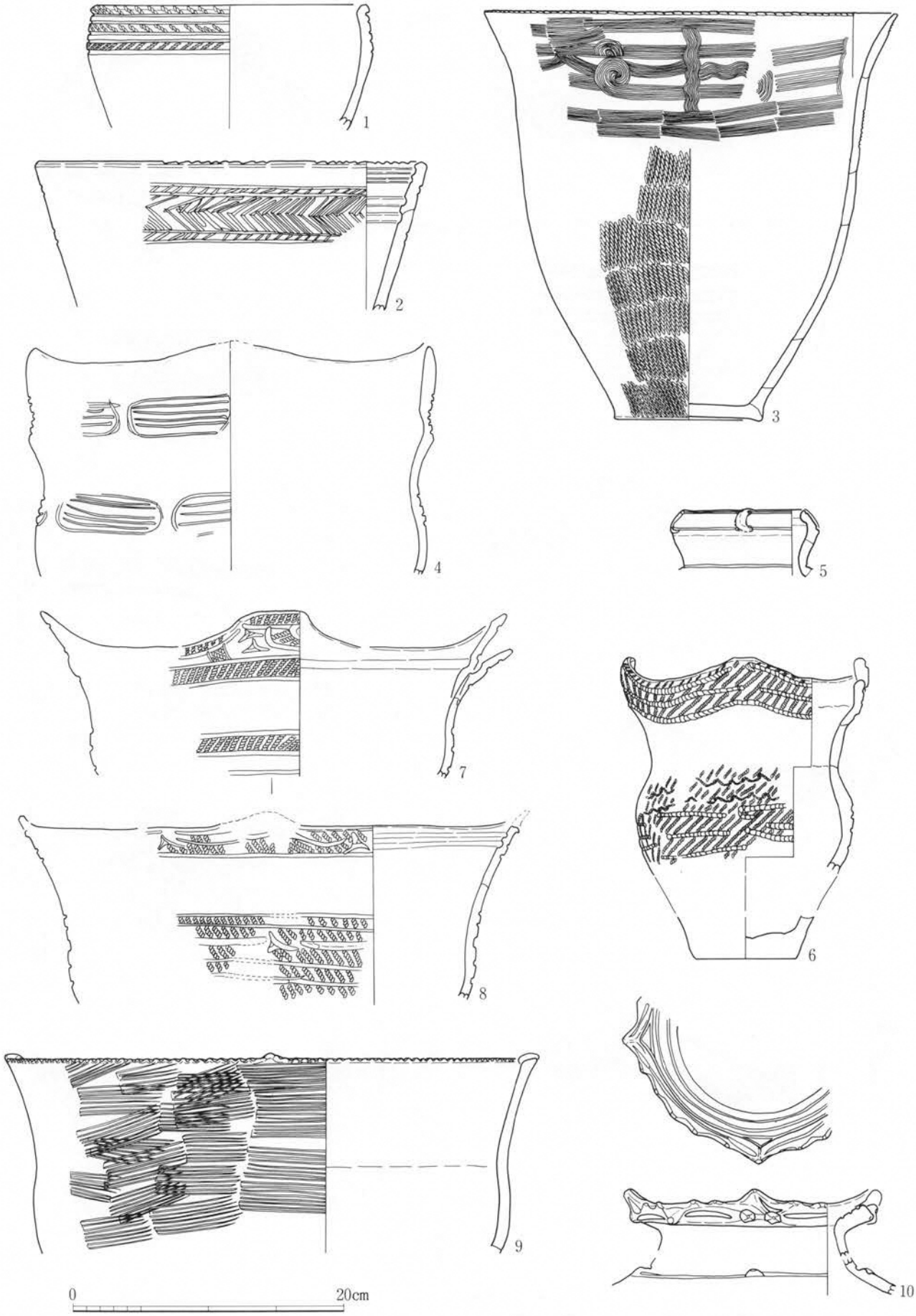
図版65　土器実測図・展開図 1(1/4)・9(1/6)　中期後葉



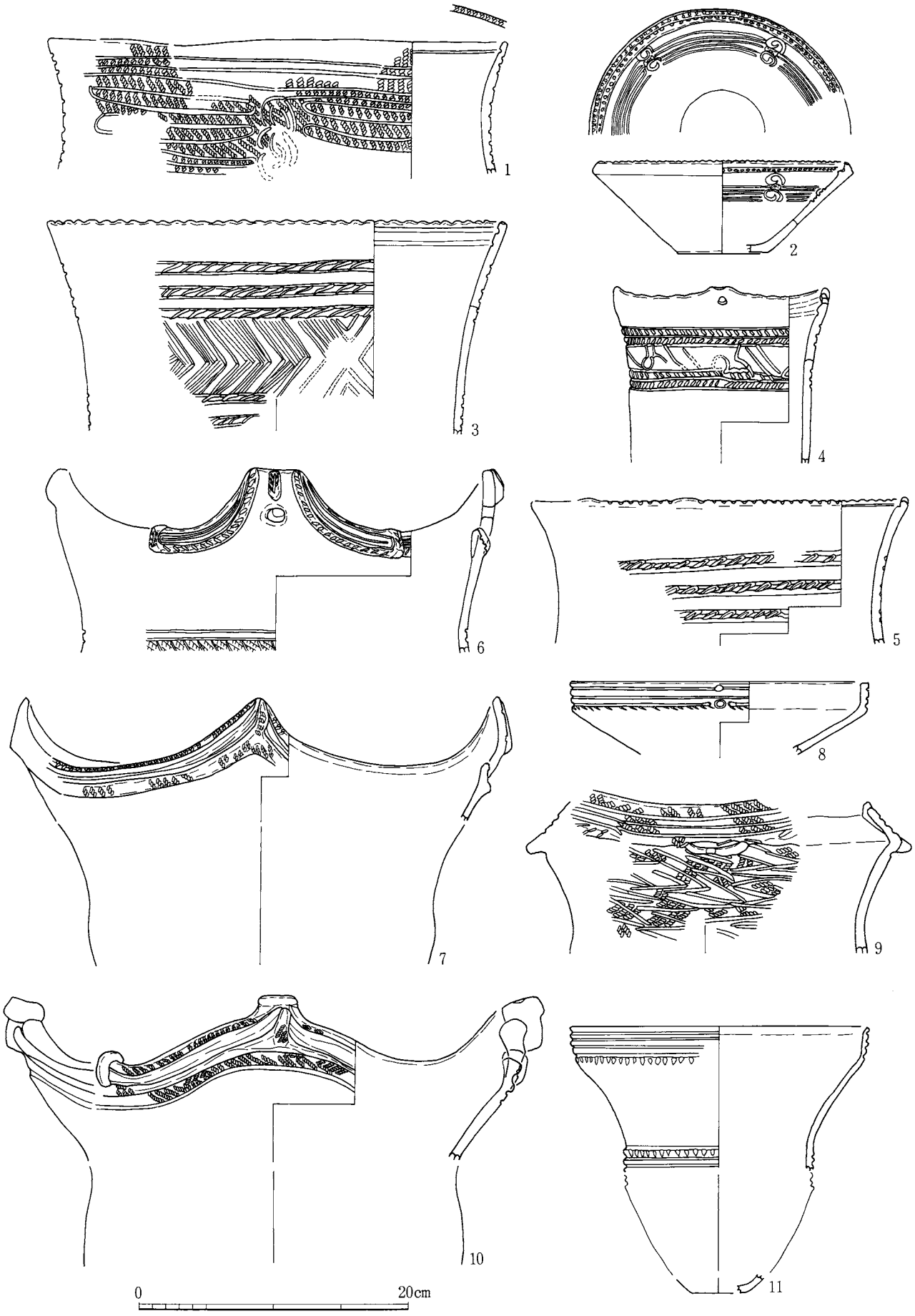
図版66　土器実測図　後期前葉



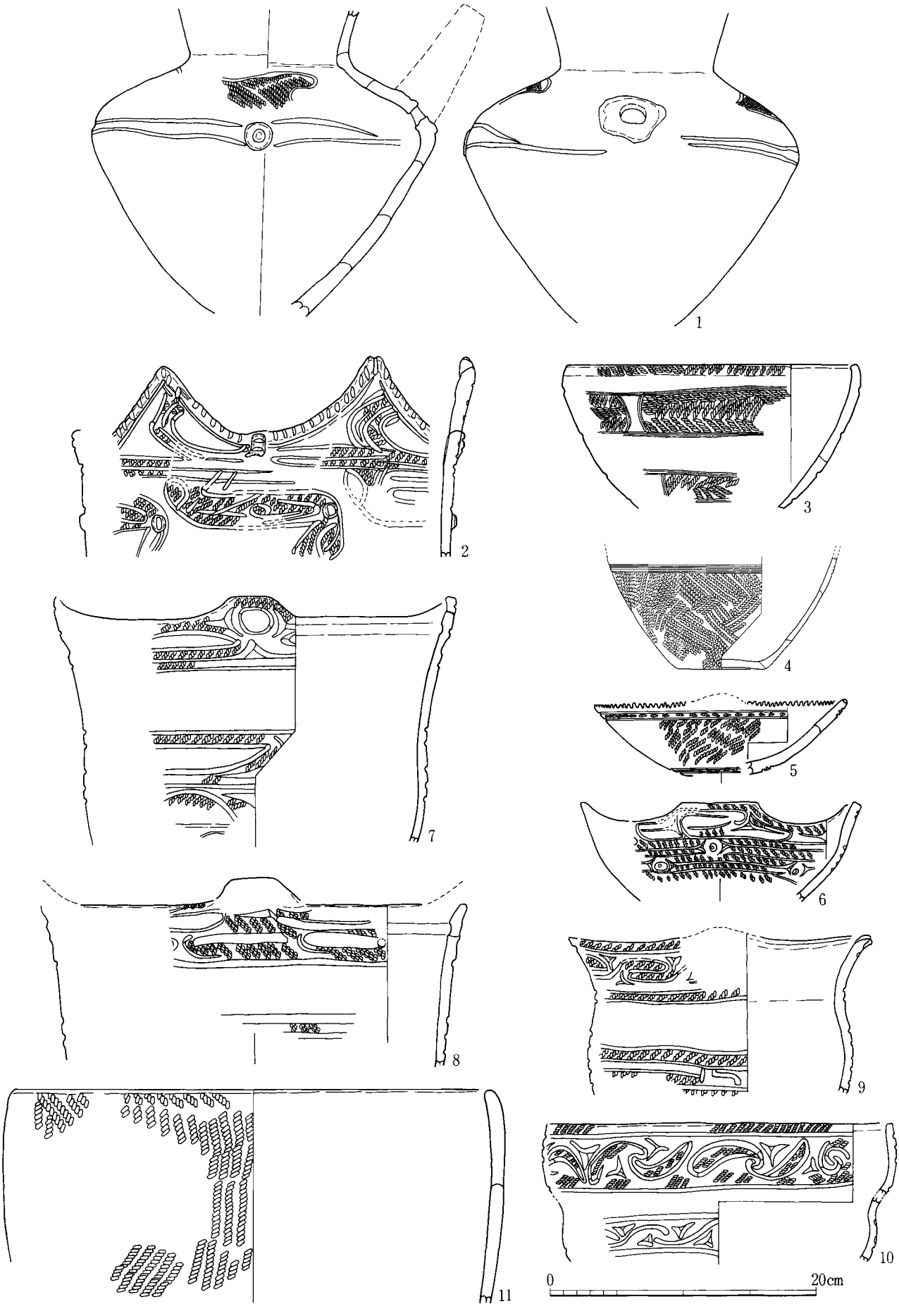
図版67　土器実測図　中期後葉・後期前葉



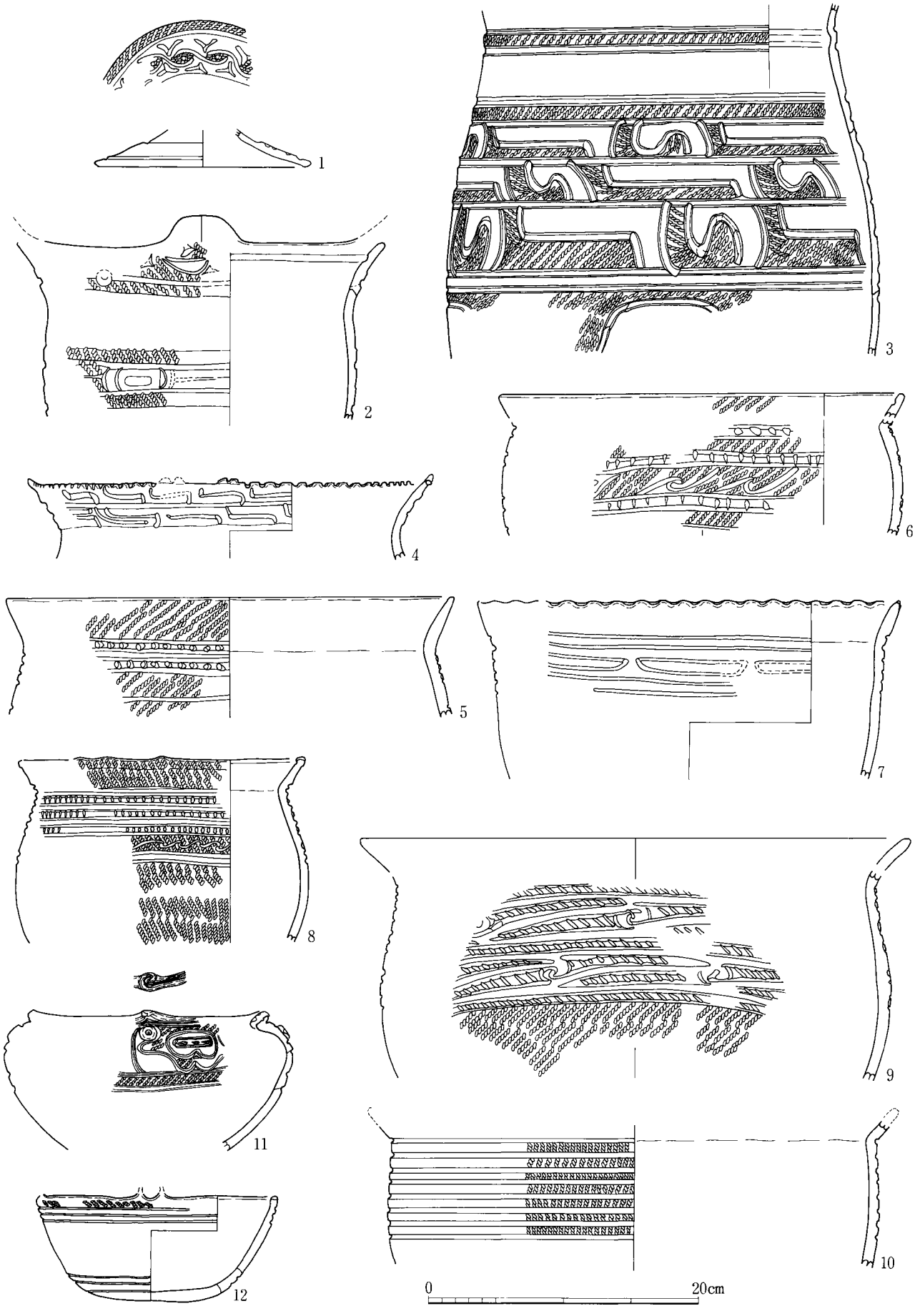
図版68　土器実測図　6(1/2)　1．第281号穴　2．第943号穴　3．第925・928・953・965号穴　4．第543号穴
5．第492号穴　6．第514号穴　7．第1026号穴　8．第901号穴　9．第1033号穴
10．第1312号穴



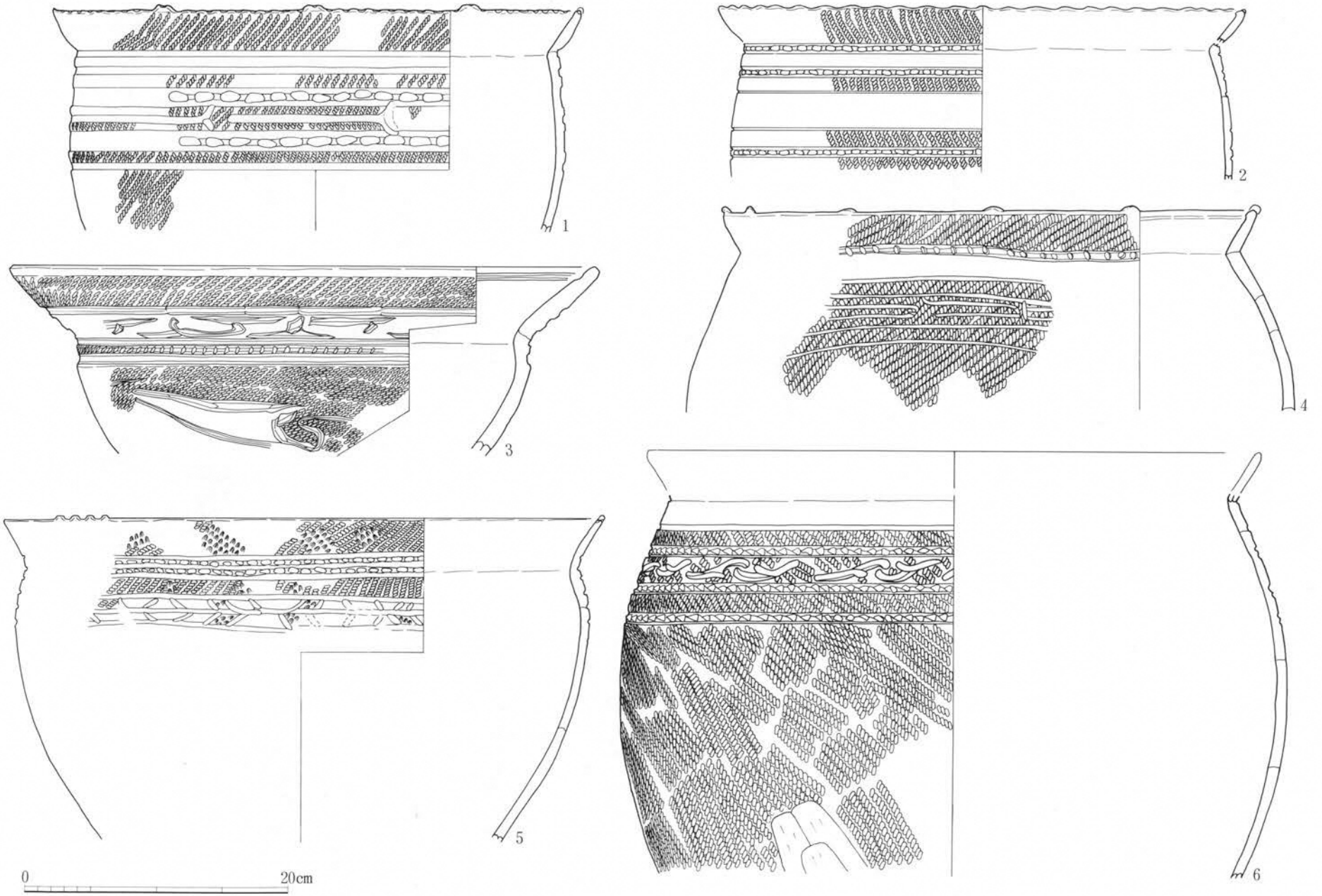
図版69　土器実測図



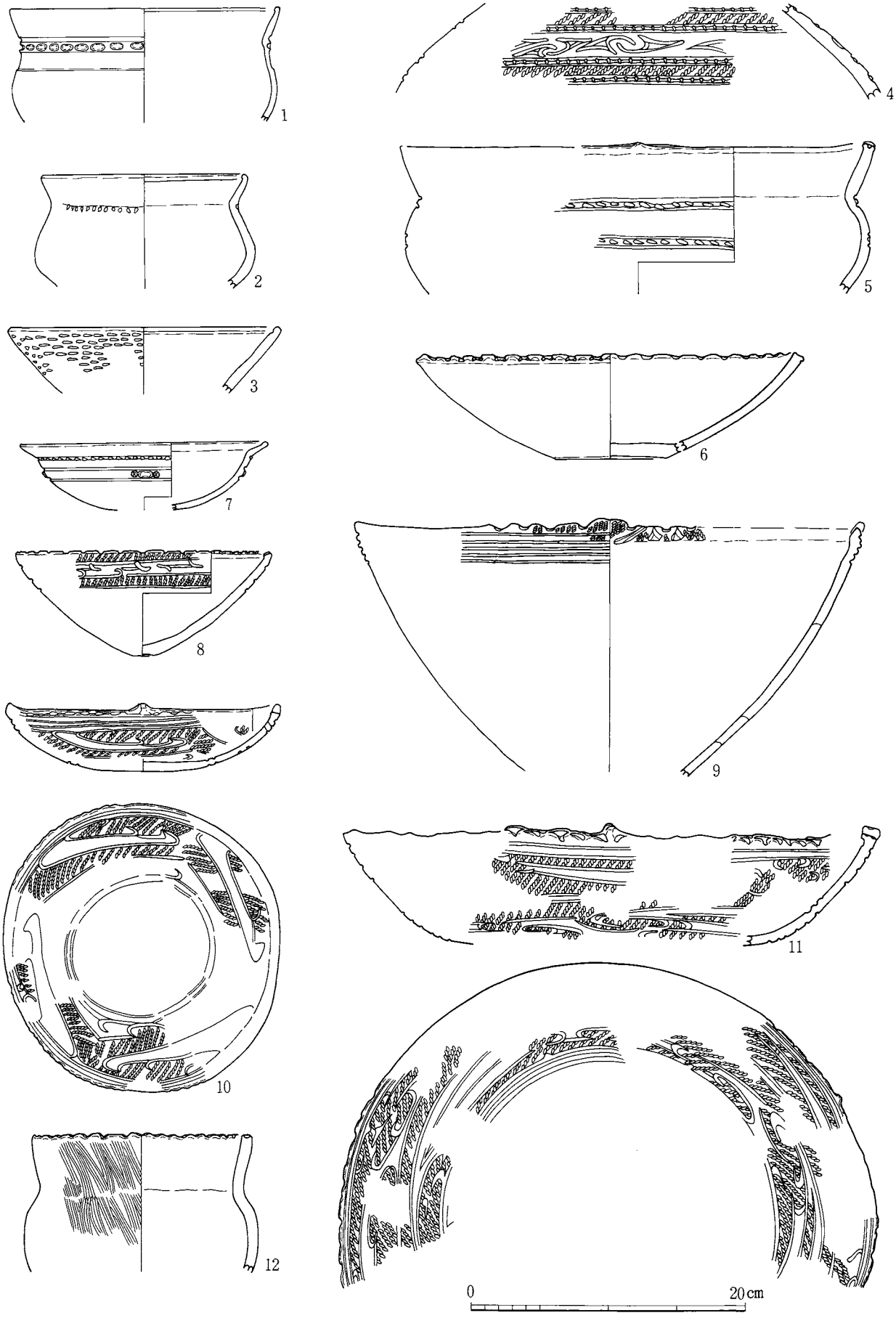
図版70　土器実測図



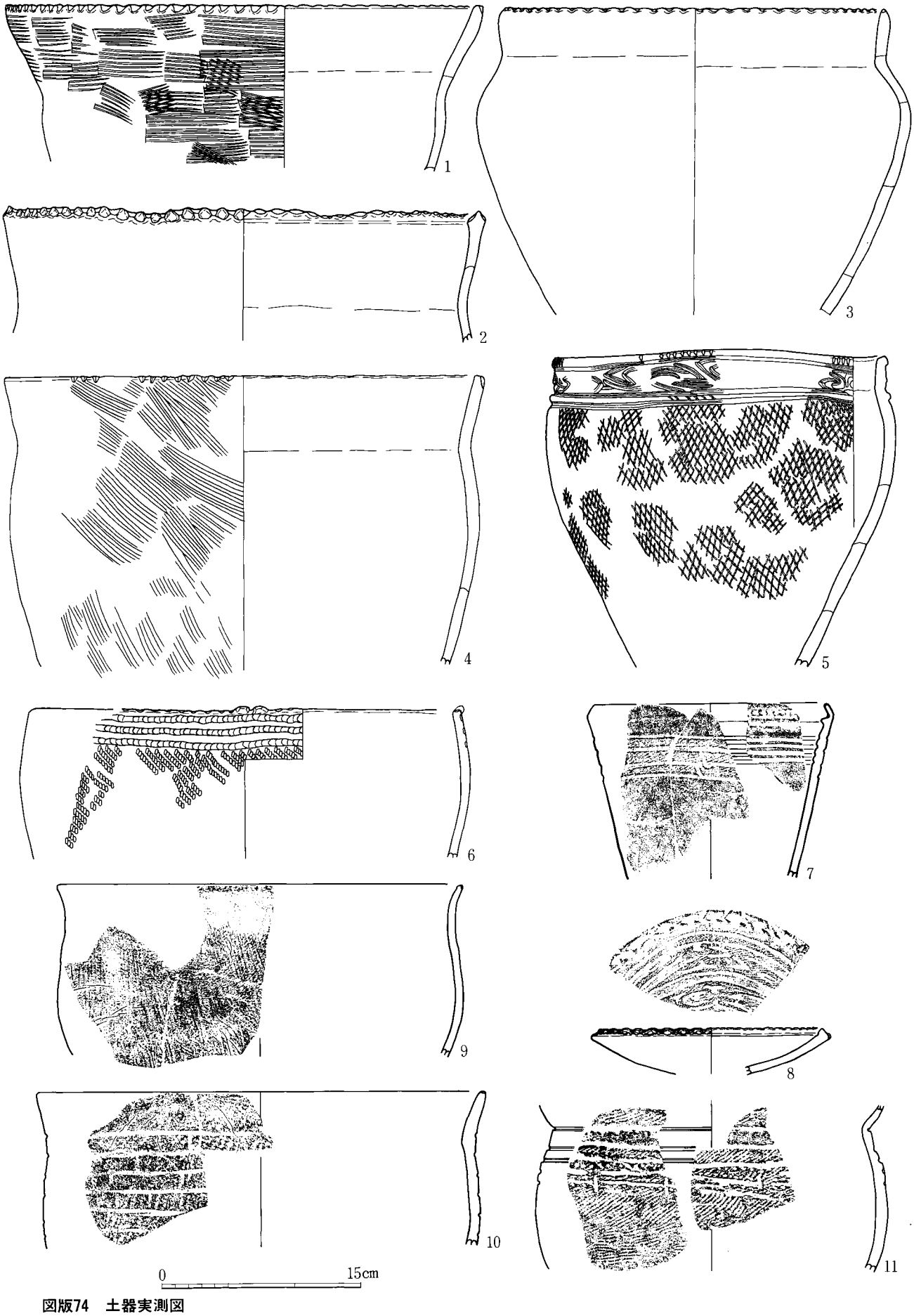
図版71　土器実測図



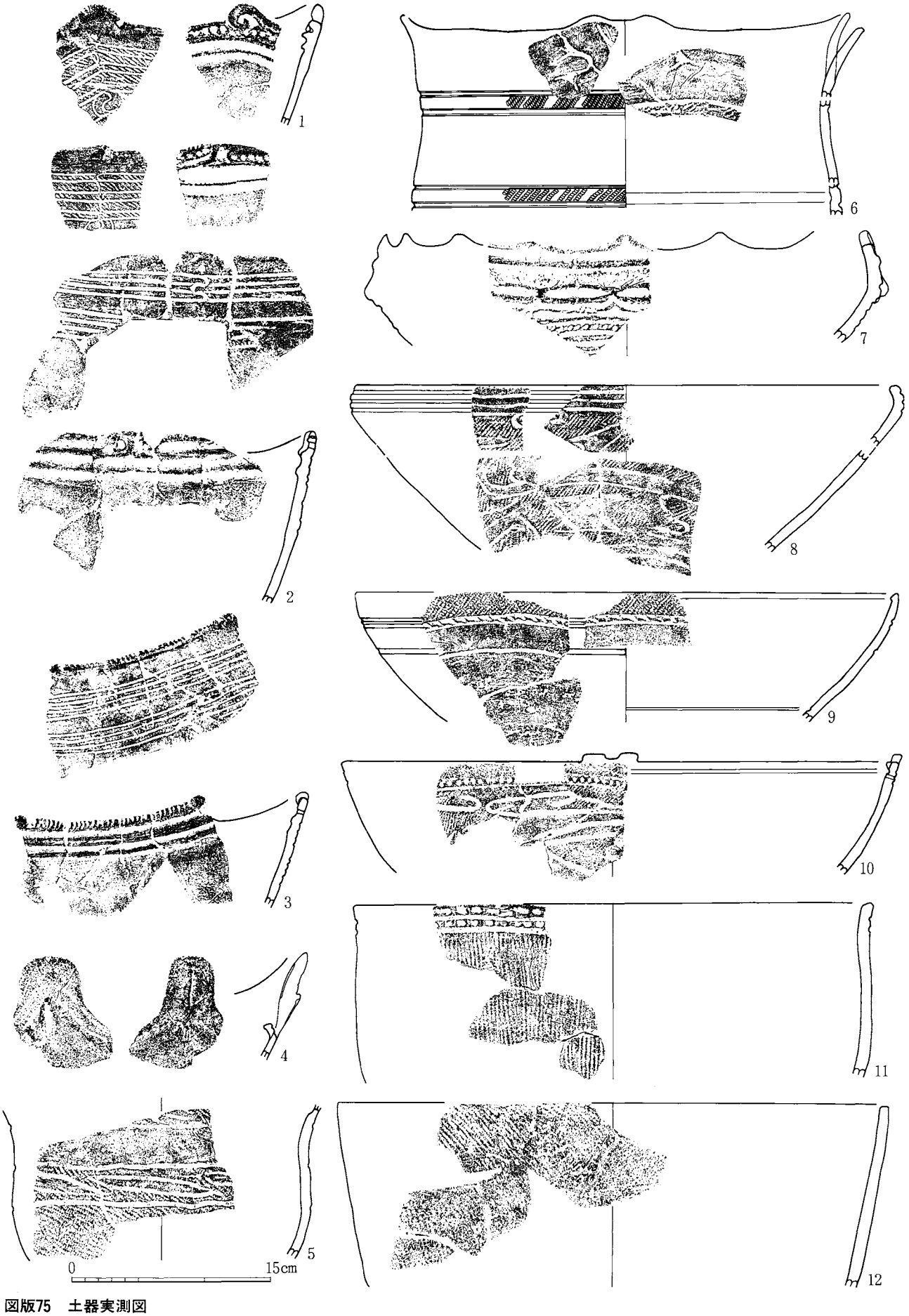
図版72　土器実測図



図版73　土器実測図

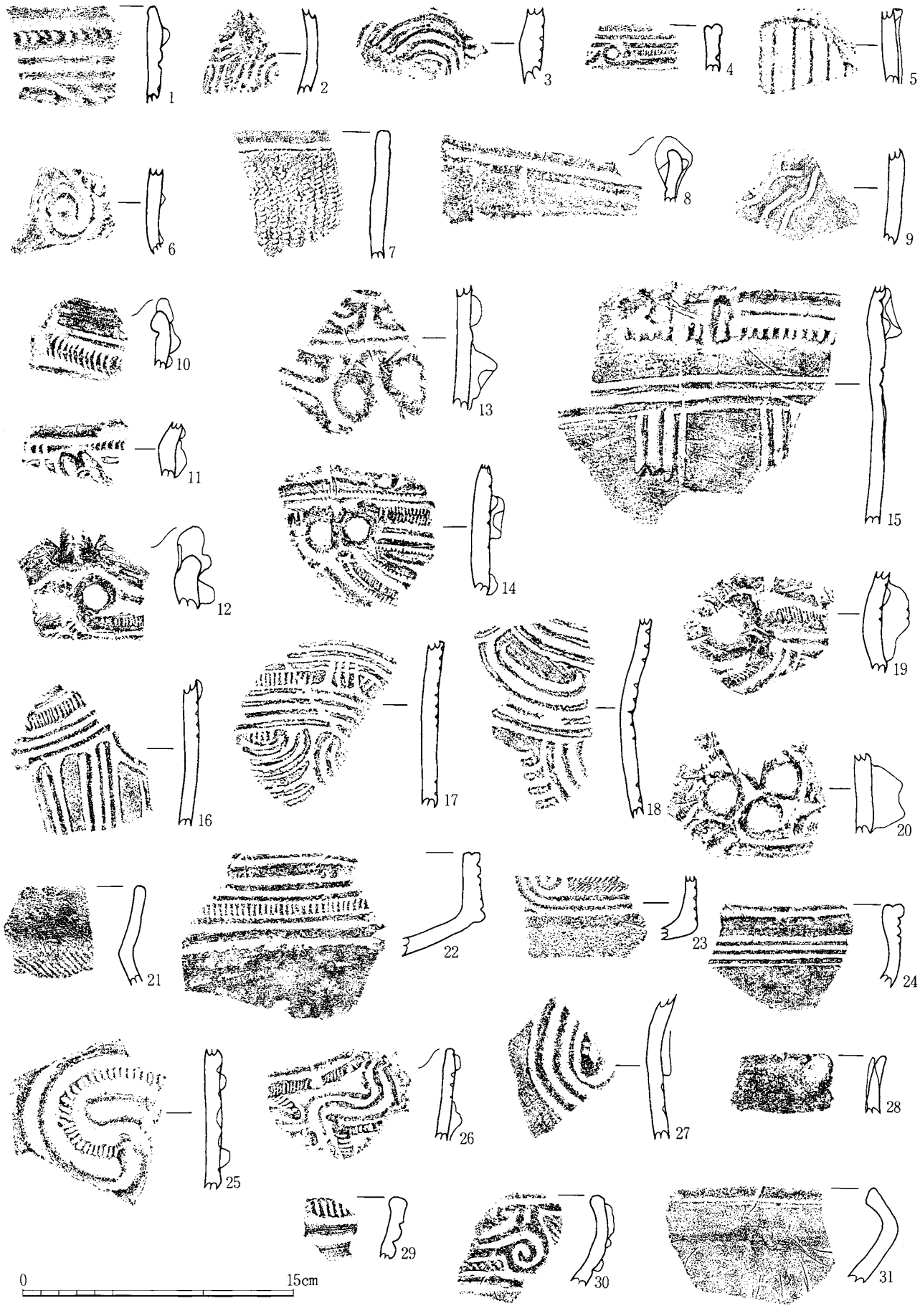


図版74　土器実測図

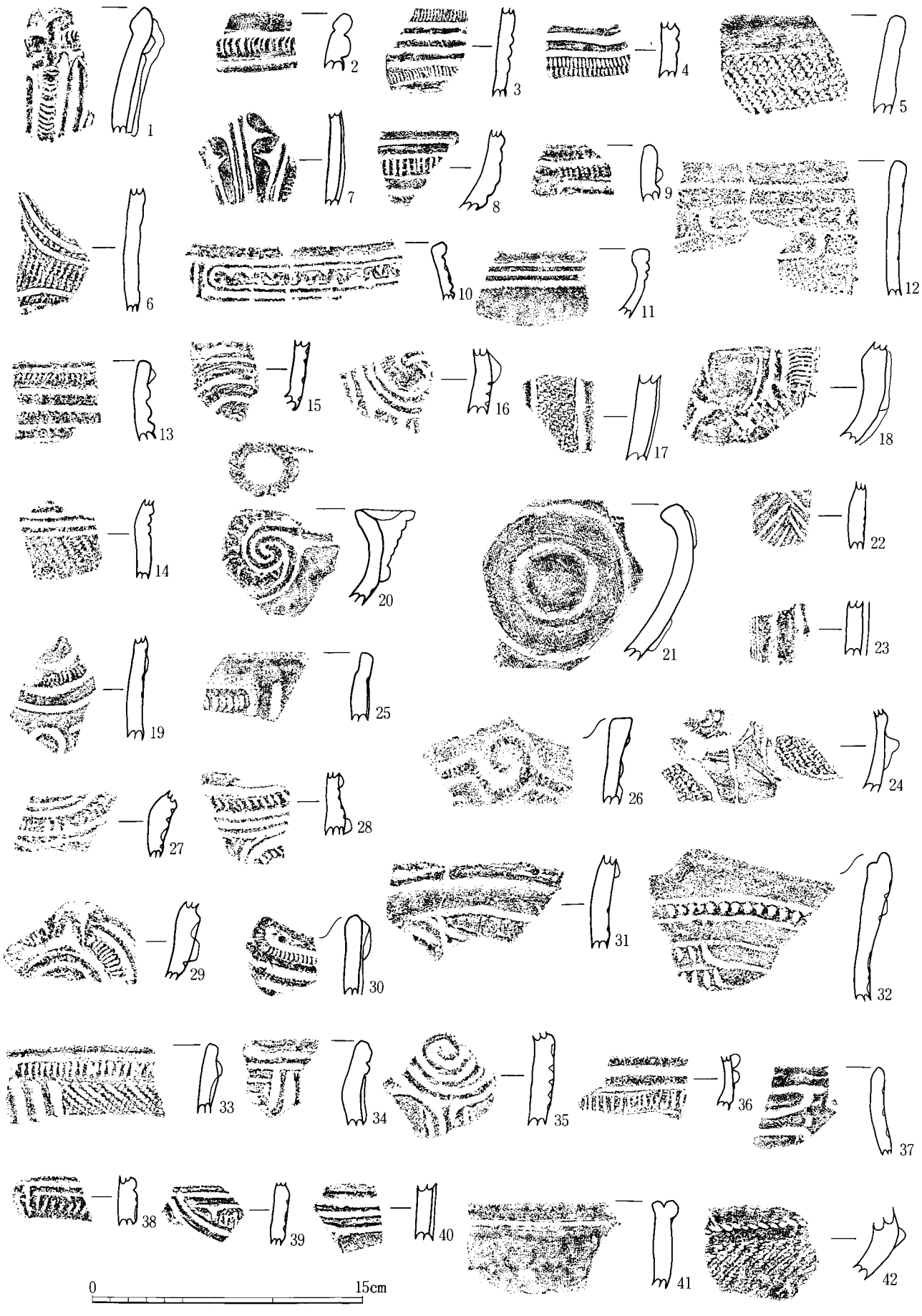


図版75　土器実測図

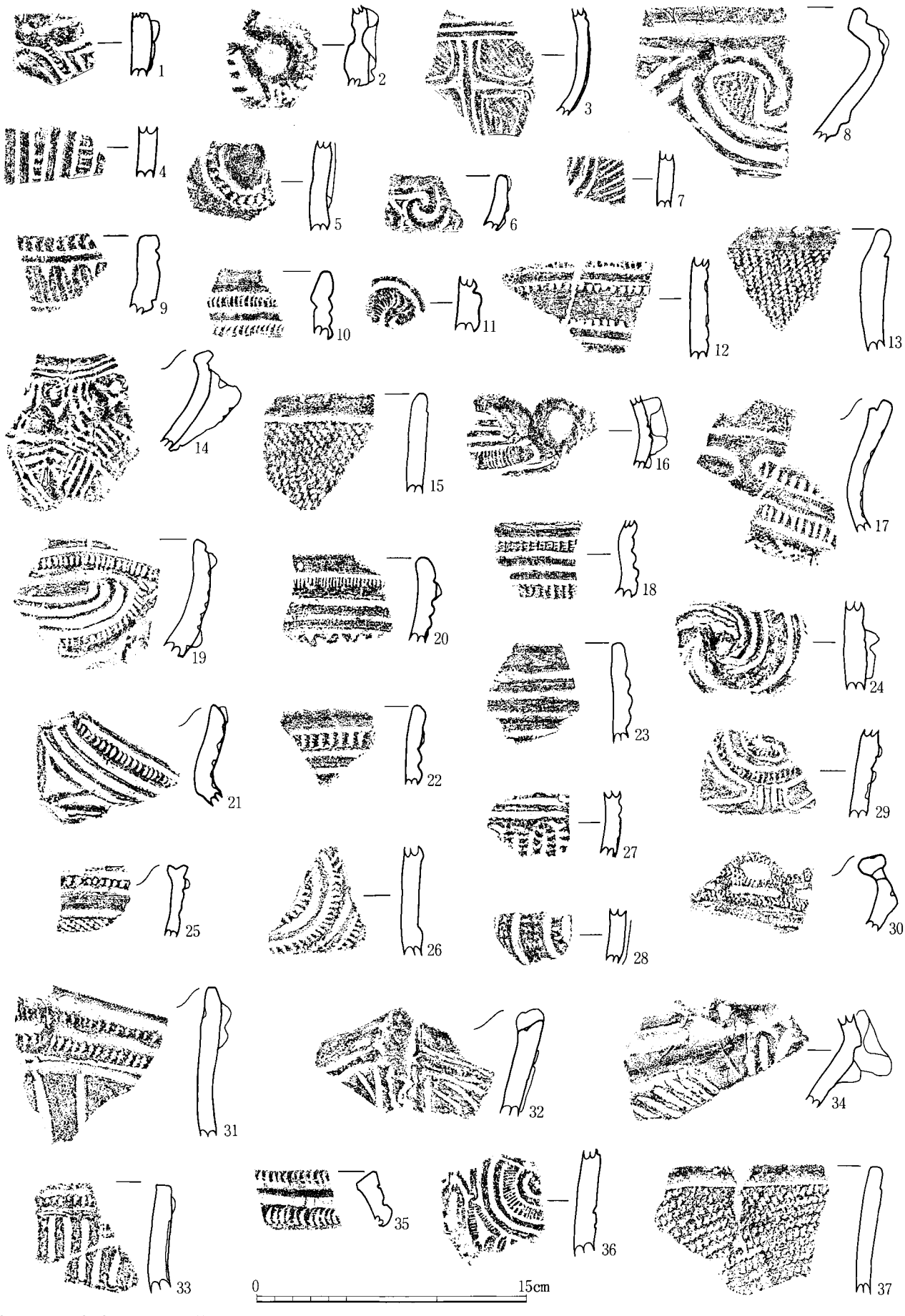
図版76　土器実測図　2．第535・536・538・1148号穴



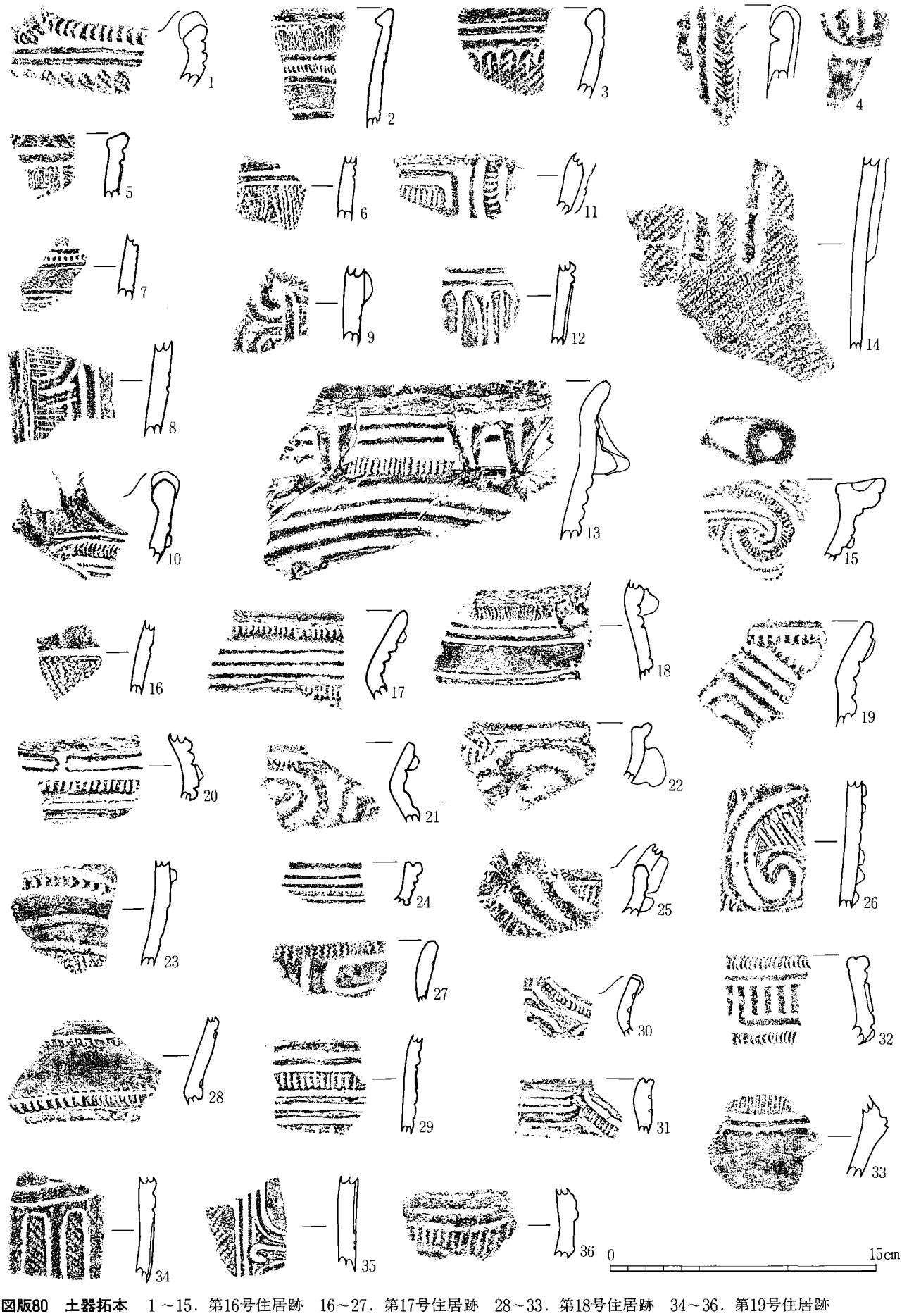
図版77　土器拓本　1～9．第1号住居跡　10～24．第2号住居跡　25．第3号住居跡　26・27．第4号住居跡
28．第5号住居跡　29～31．第6号住居跡



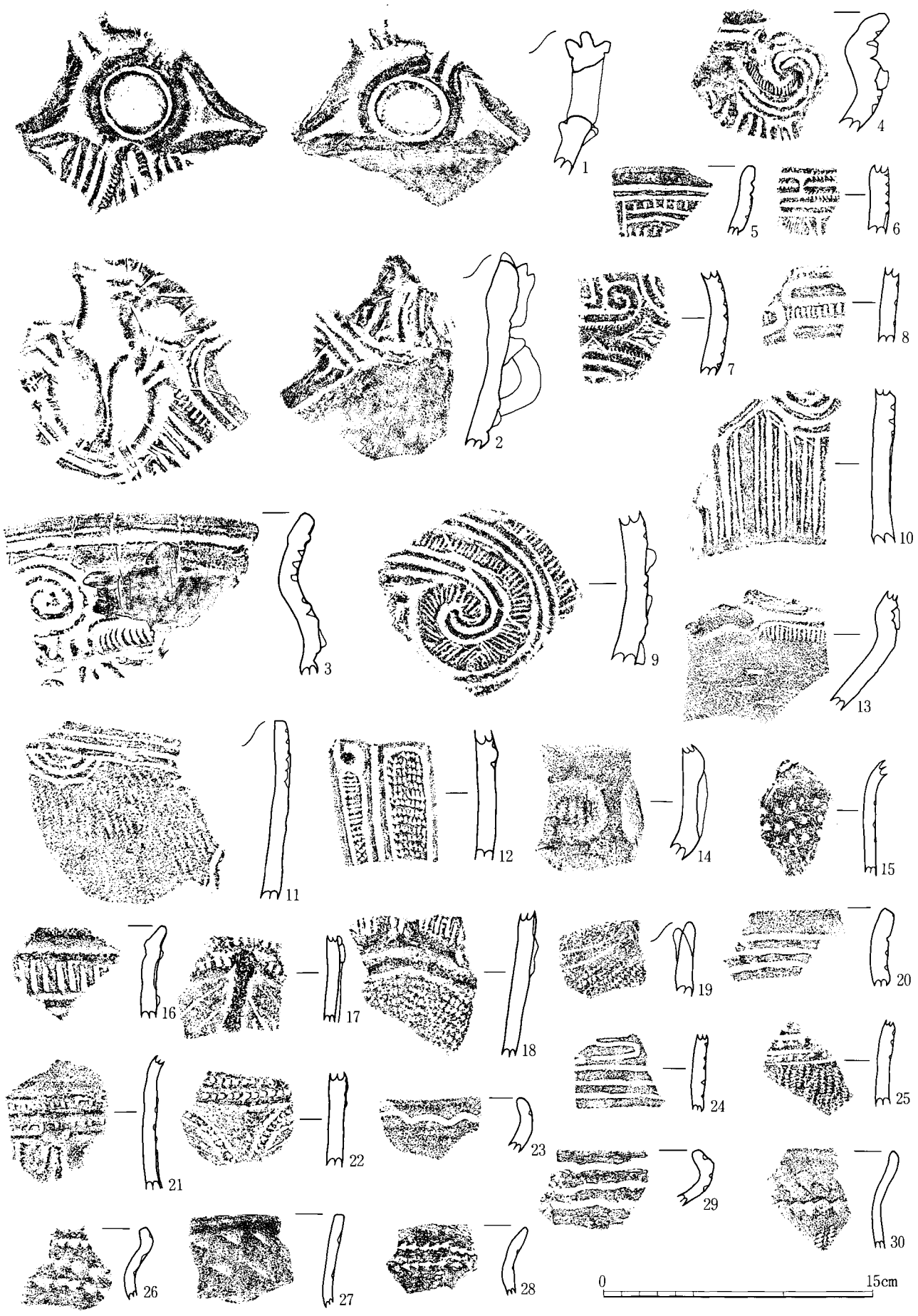
図版78　土器拓本　1～12．第7号住居跡　13～26．第8号住居跡　27～37．第9号住居跡　38～42．第10・11号住居跡



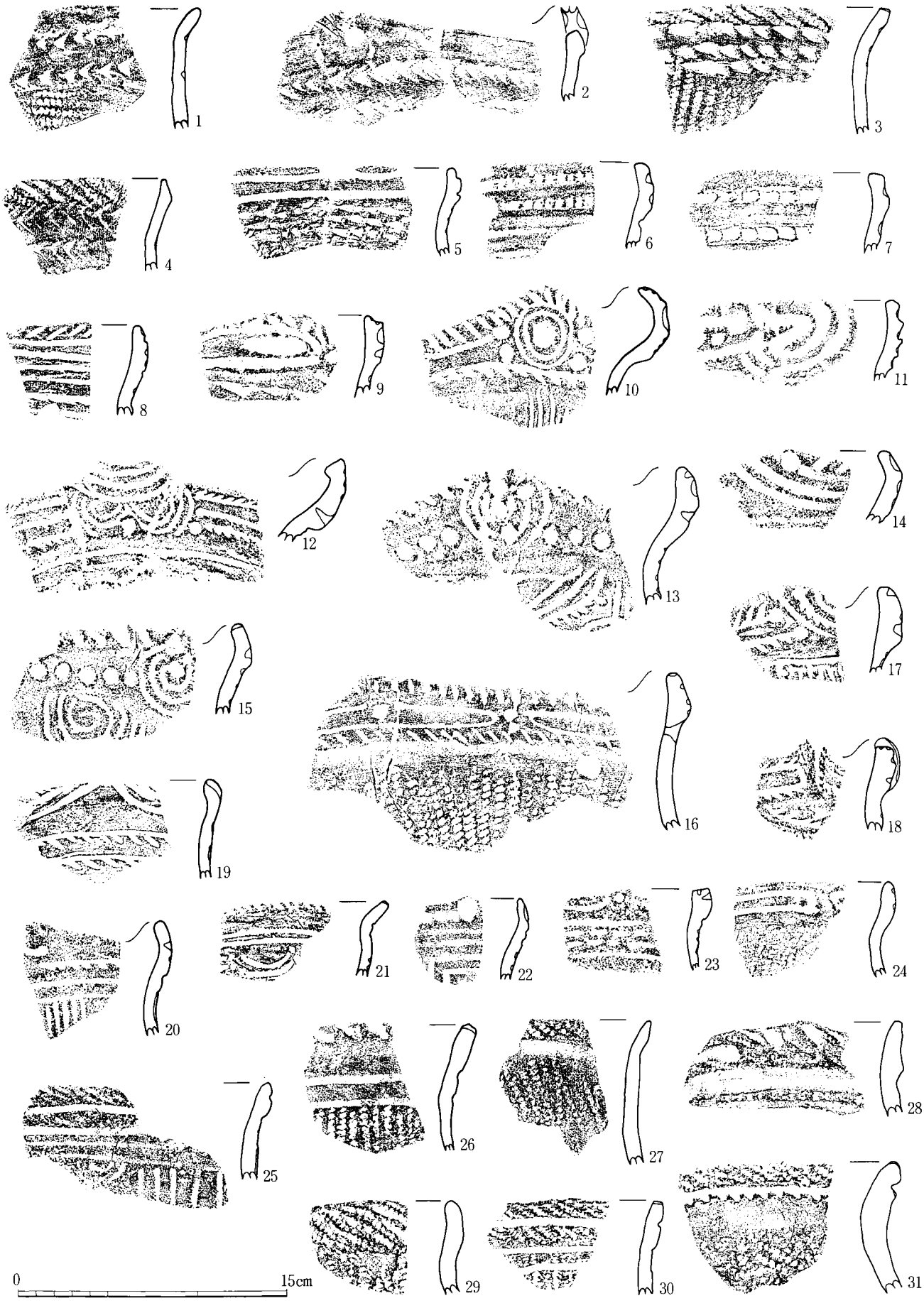
図版79　土器拓本　1～8．第10・11号住居跡　9～13．第12号住居跡　14～18．第13号住居跡　19～34．第14号住居跡　35～37．第15号住居跡



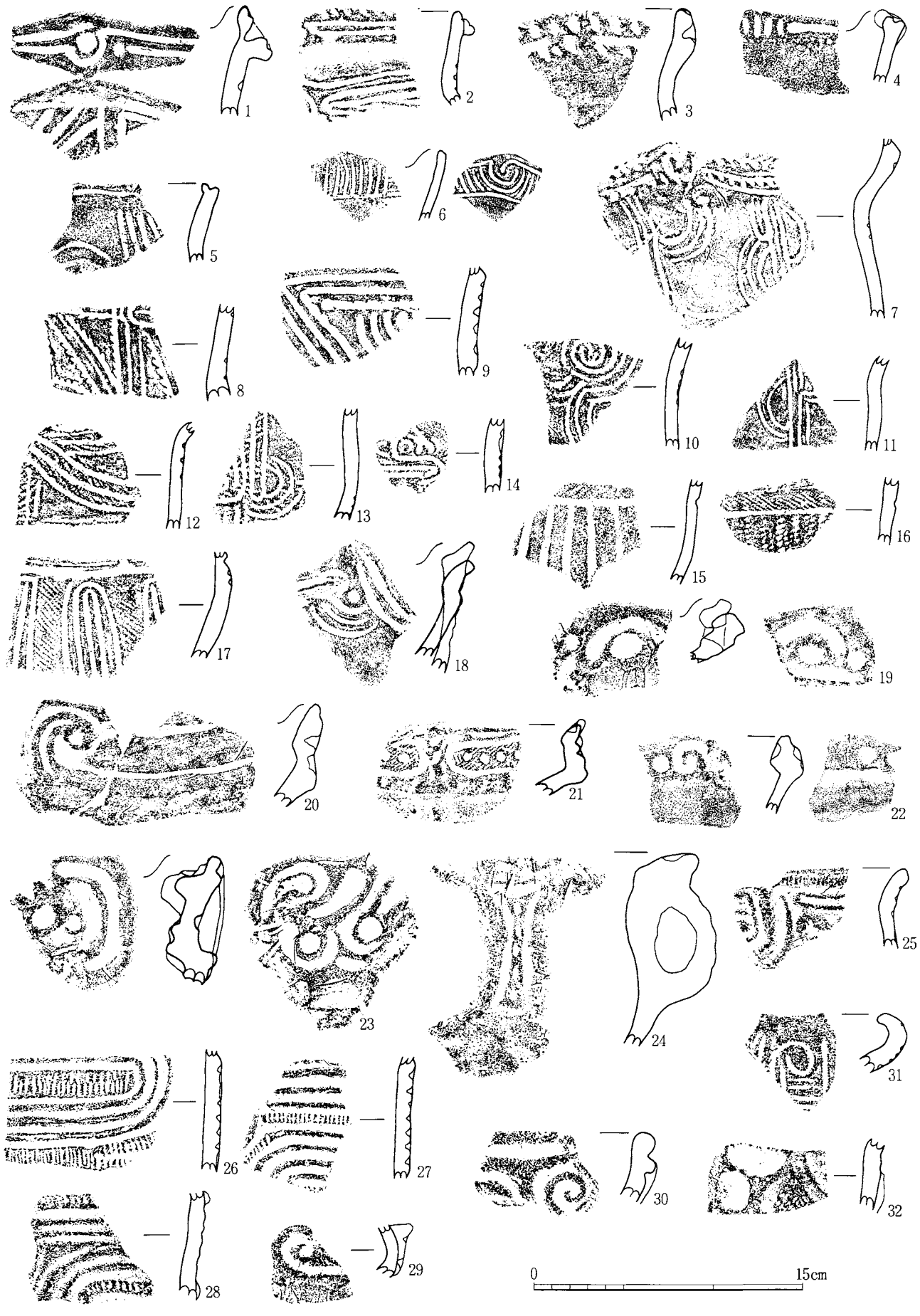
図版80　土器拓本　1～15．第16号住居跡　16～27．第17号住居跡　28～33．第18号住居跡　34～36．第19号住居跡



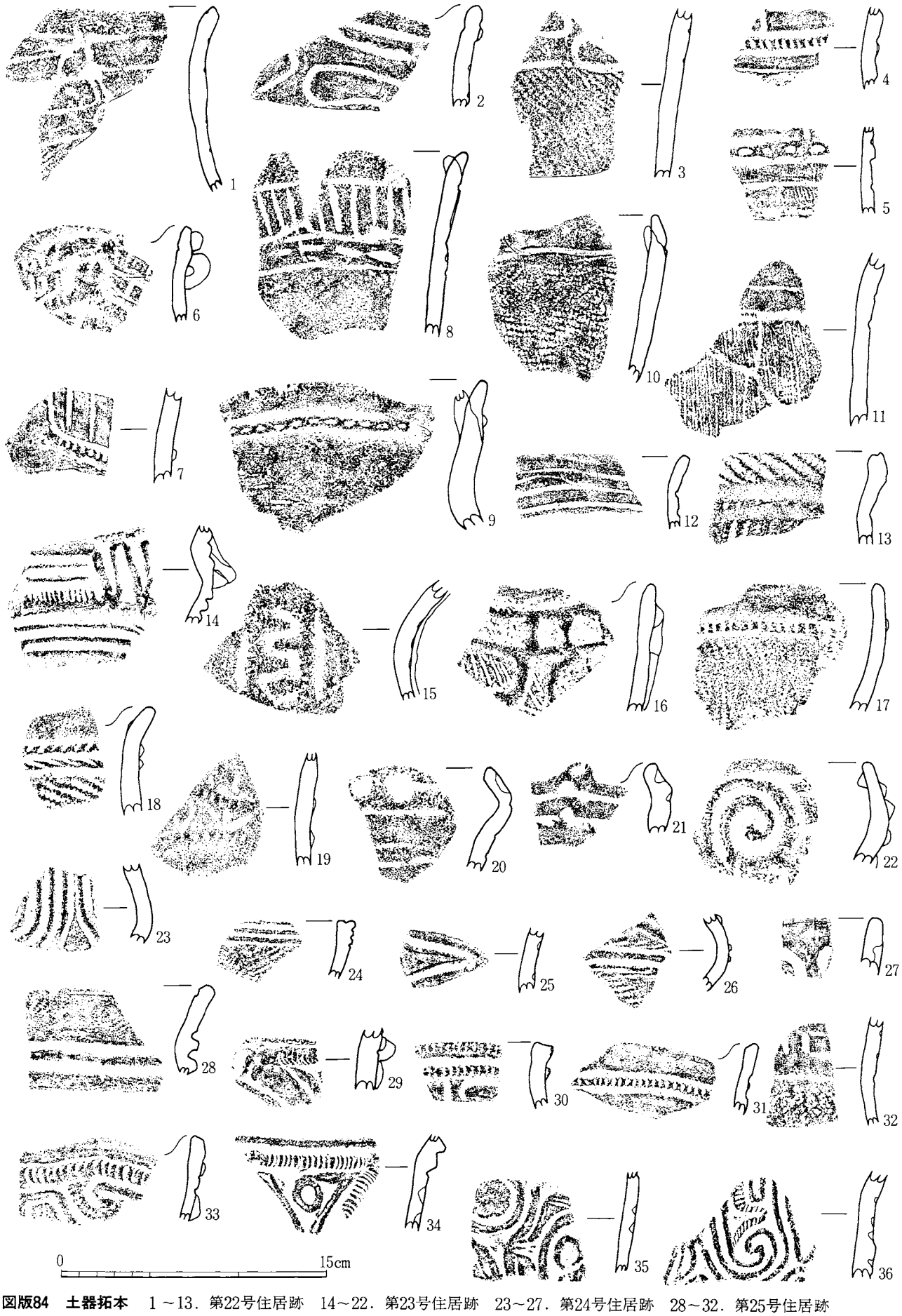
図版81　土器拓本　1～15．第20号住居跡　16～30．第21号住居跡



図版82　土器拓本　第21号住居跡

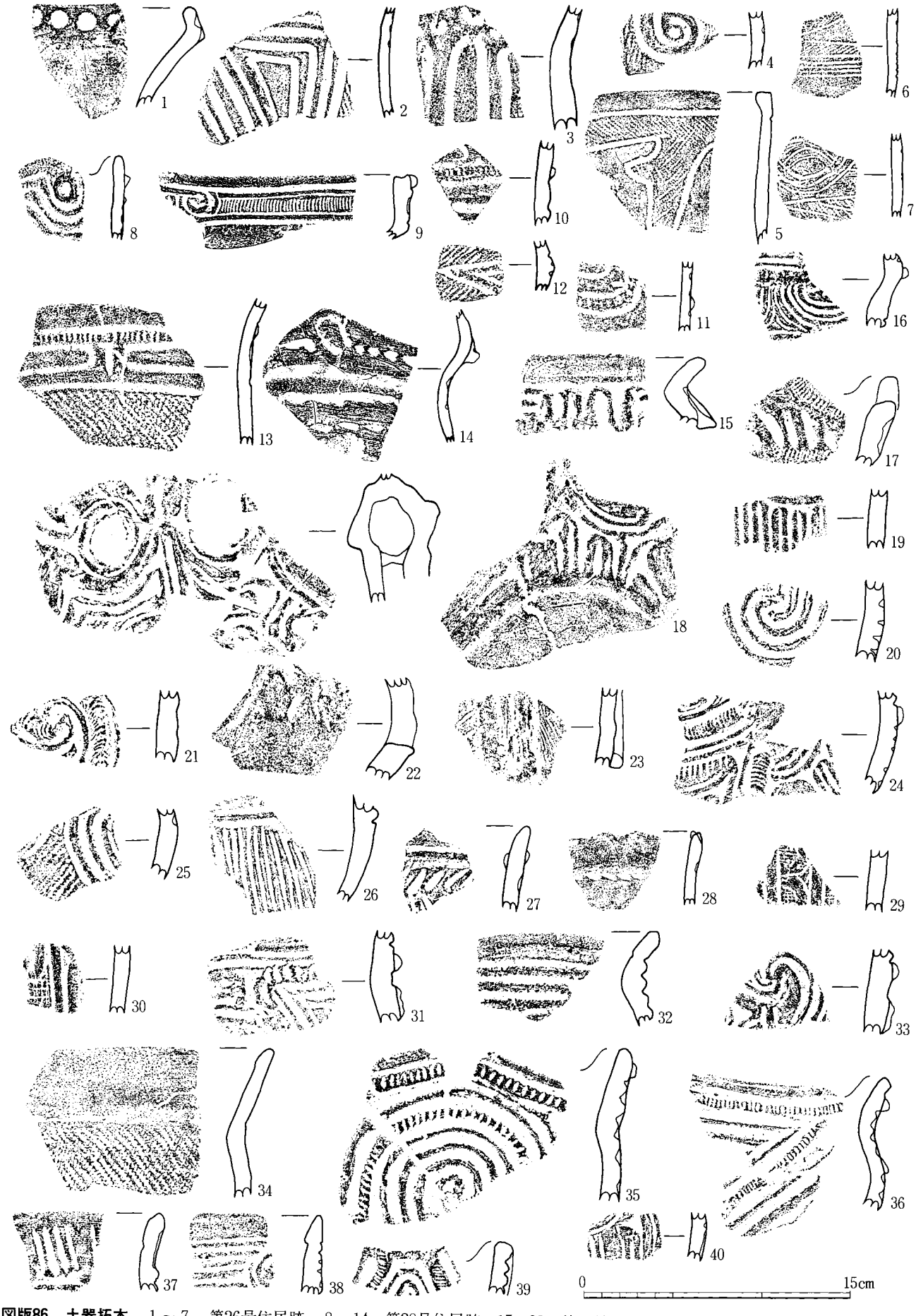


図版83　土器拓本　1～24．第21号住居跡　25～32．第22号住居跡

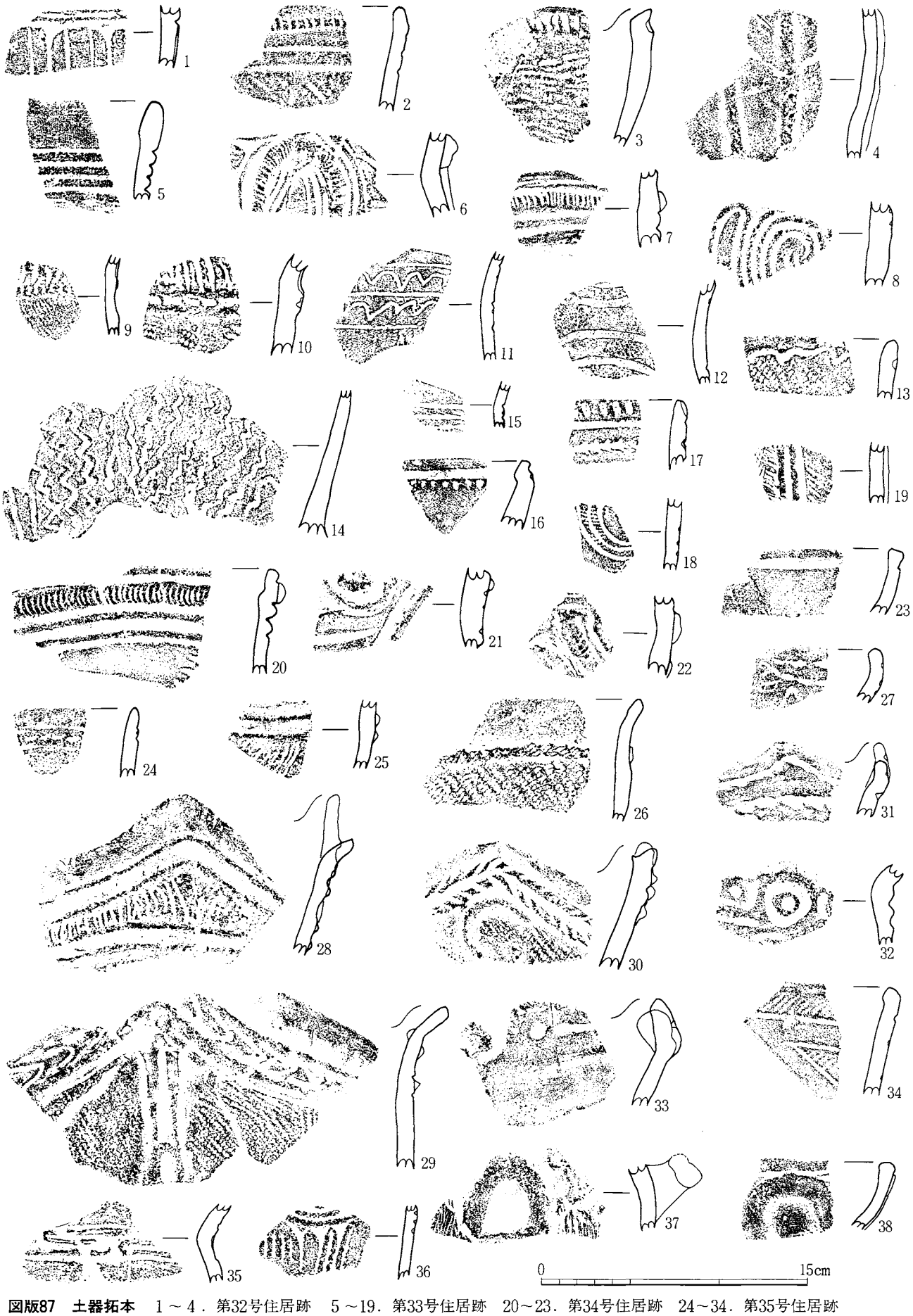


図版84　土器拓本　1～13．第22号住居跡　14～22．第23号住居跡　23～27．第24号住居跡　28～32．第25号住居跡
33～36．第26号住居跡

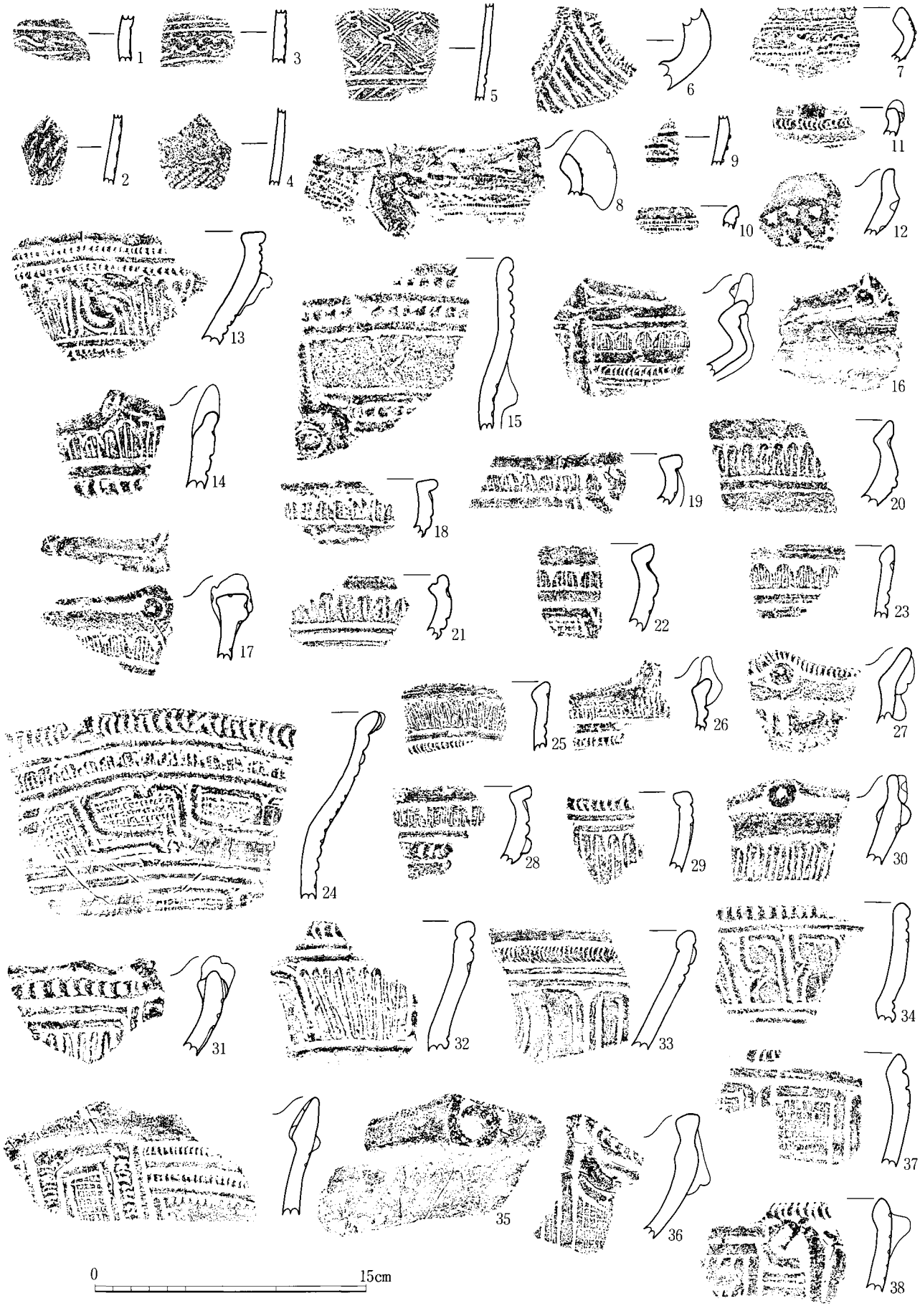
図版85　土器拓本　第26号住居跡



図版86　土器拓本　1～7．第26号住居跡　8～14．第28号住居跡　15～23．第29号住居跡　24～28．第30号住居跡
29～34．第31号住居跡　35～40．第32号住居跡

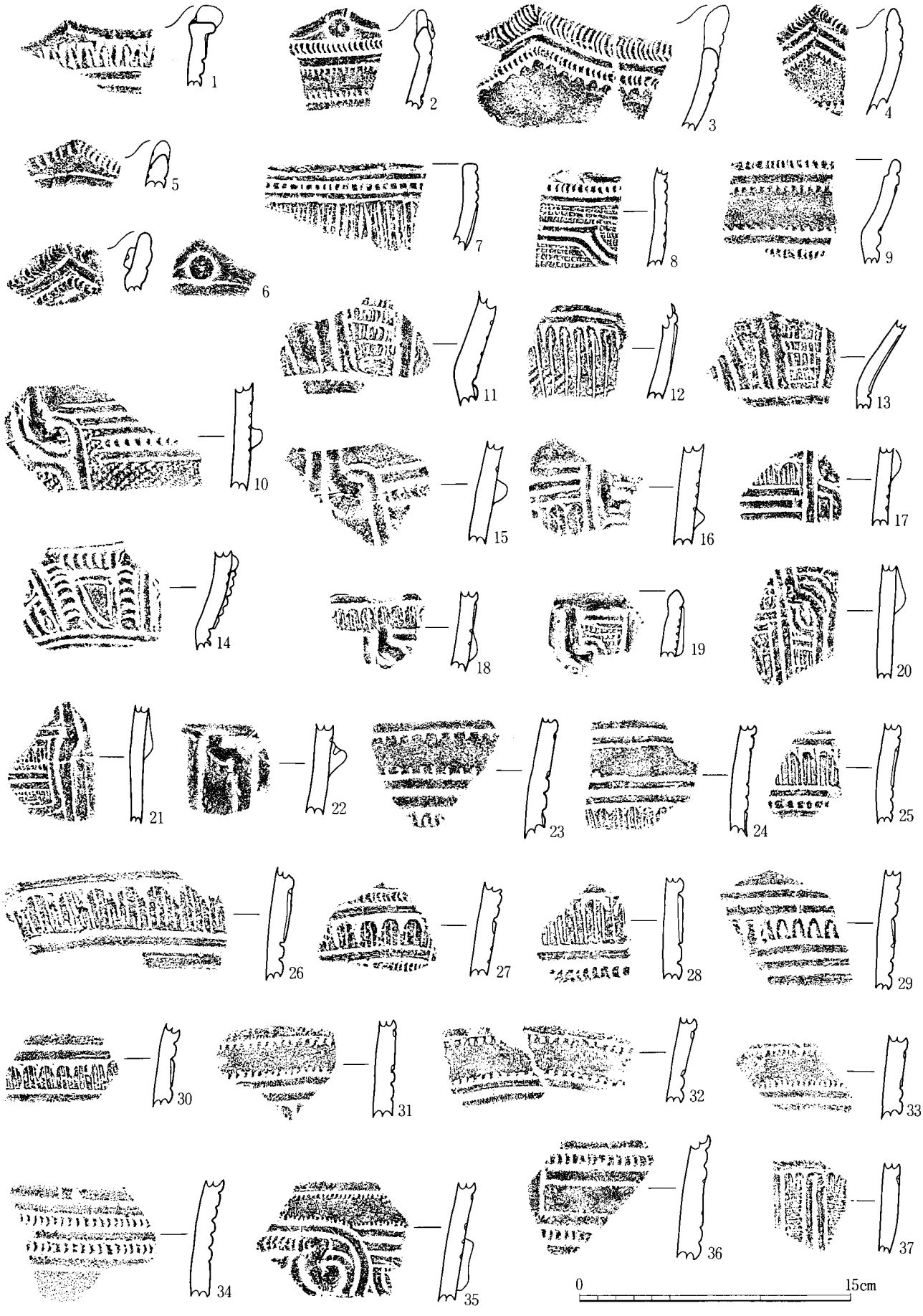


図版87　土器拓本　1～4．第32号住居跡　5～19．第33号住居跡　20～23．第34号住居跡　24～34．第35号住居跡
35～38．第36号住居跡

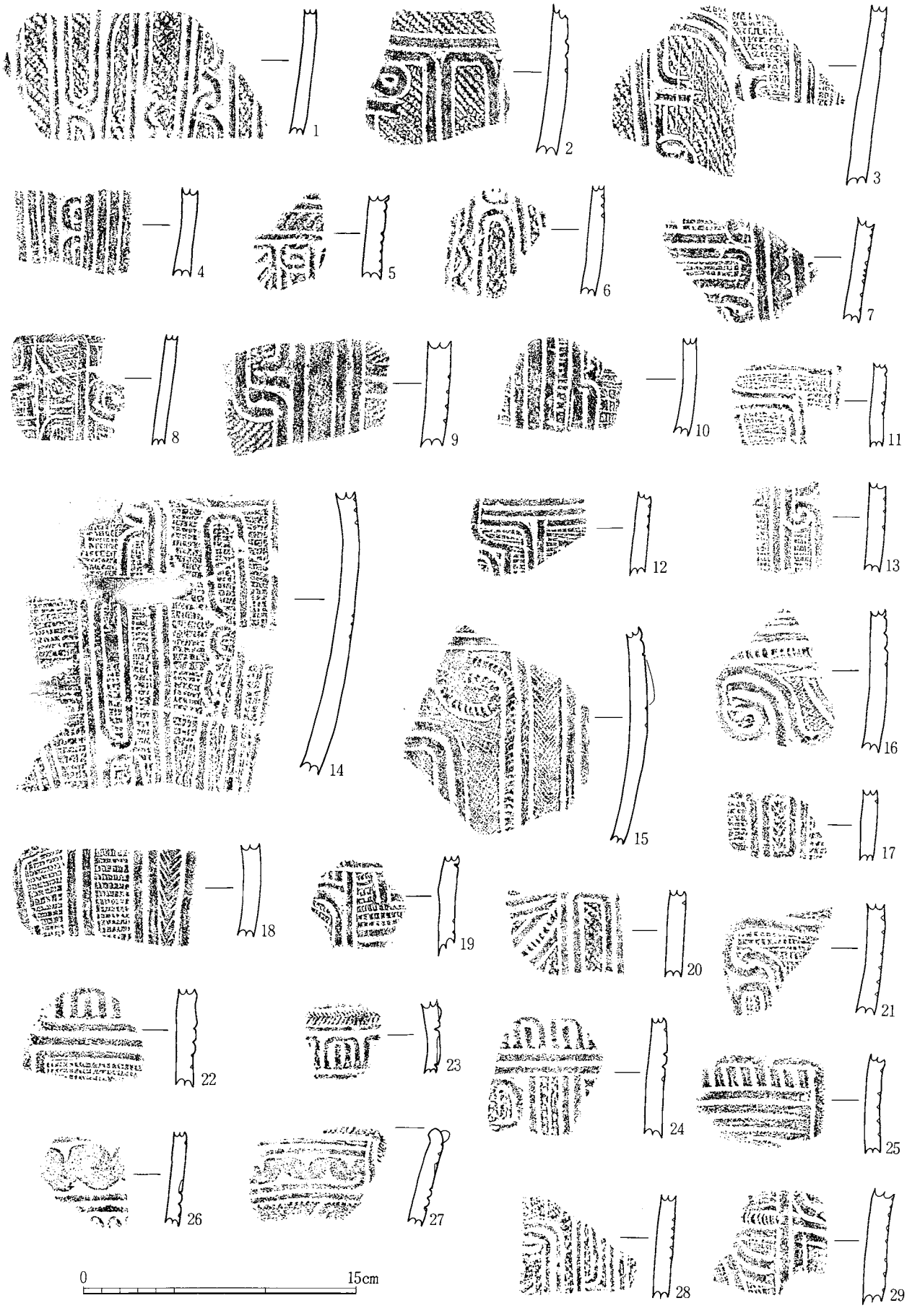


図版88　土器拓本　早期・前期・中期前葉

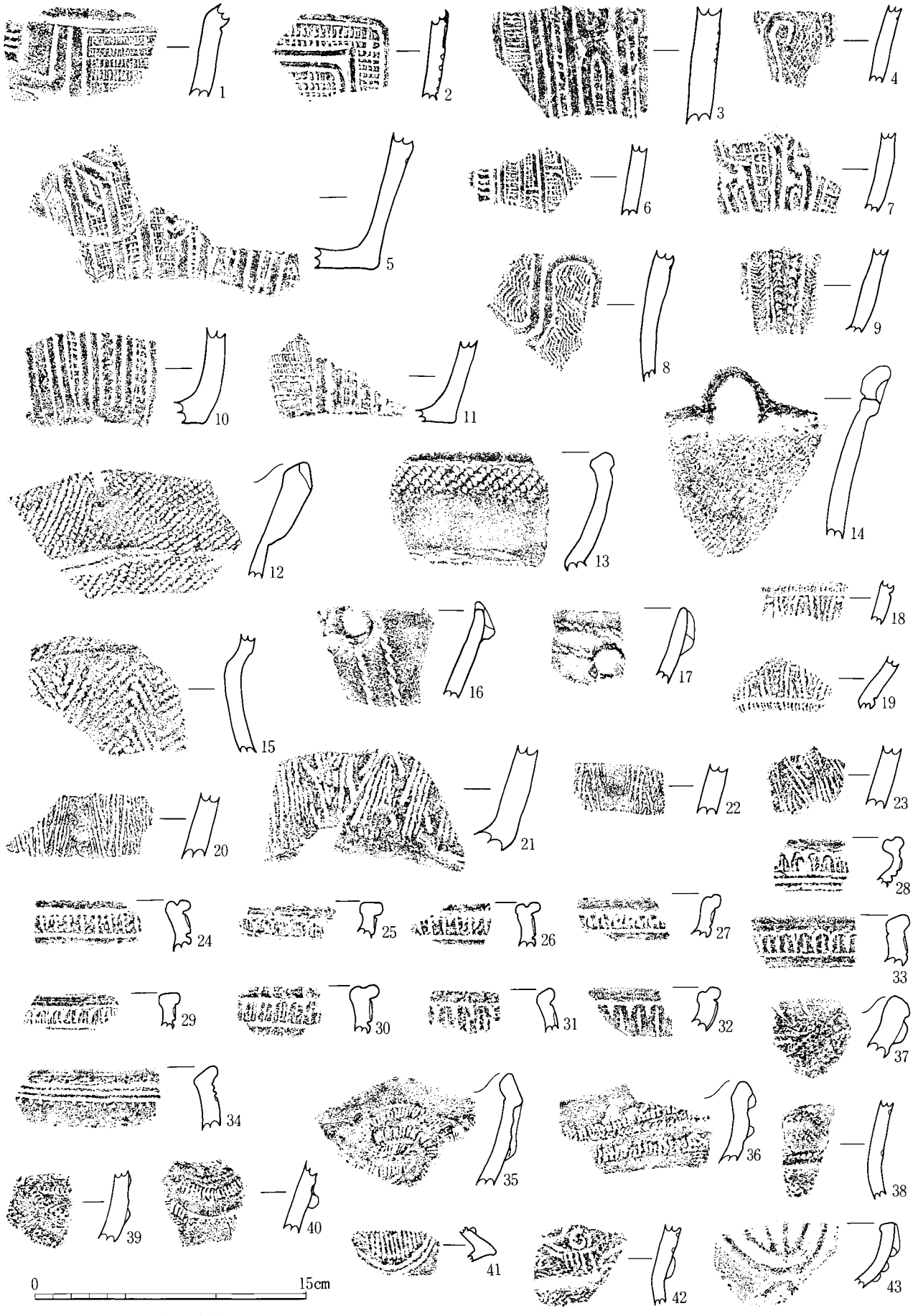
図版89　土器拓本　中期前葉



図版90　土器拓本　中期前葉



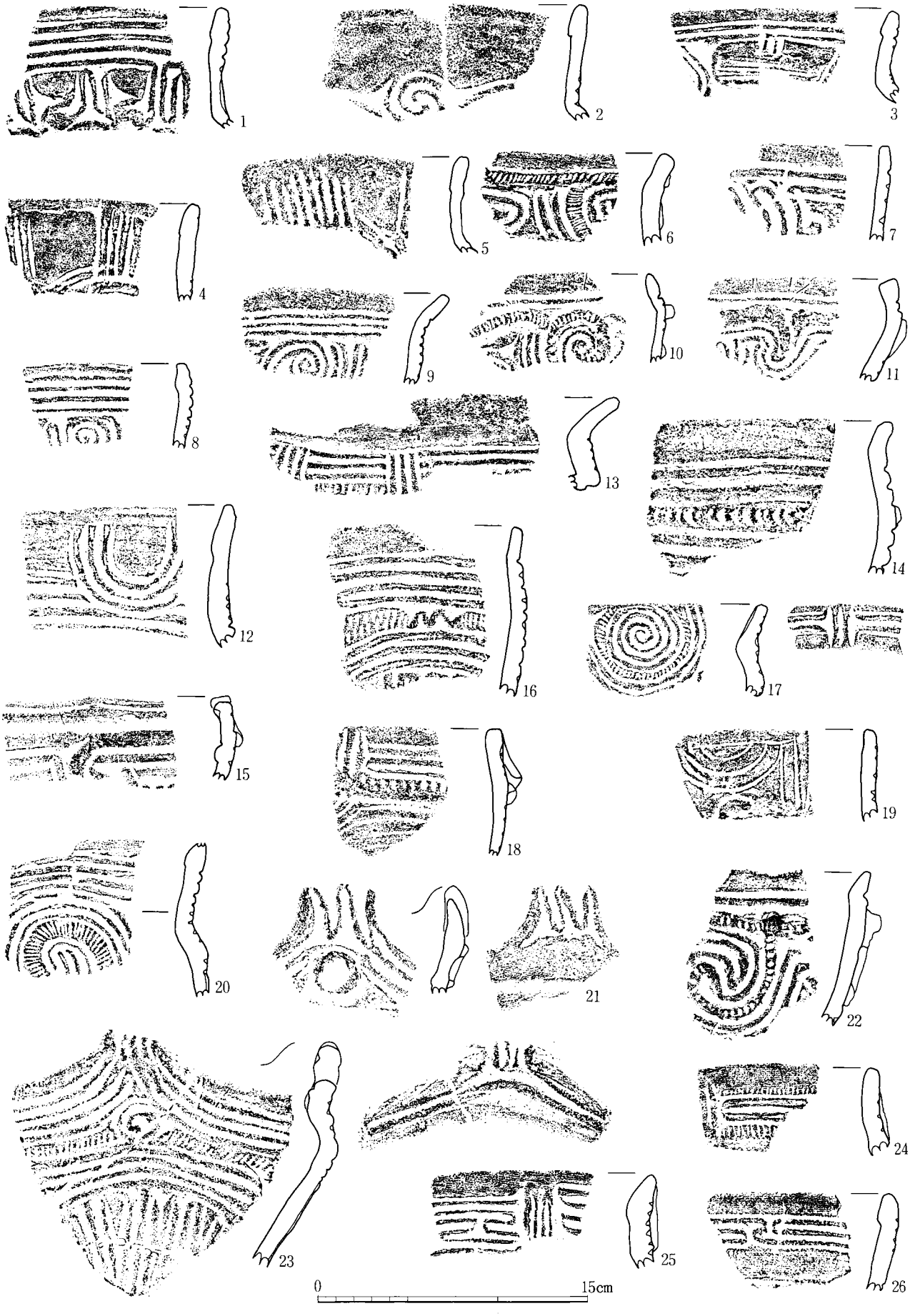
図版91　土器拓本　中期前葉



図版92　土器拓本　中期前葉

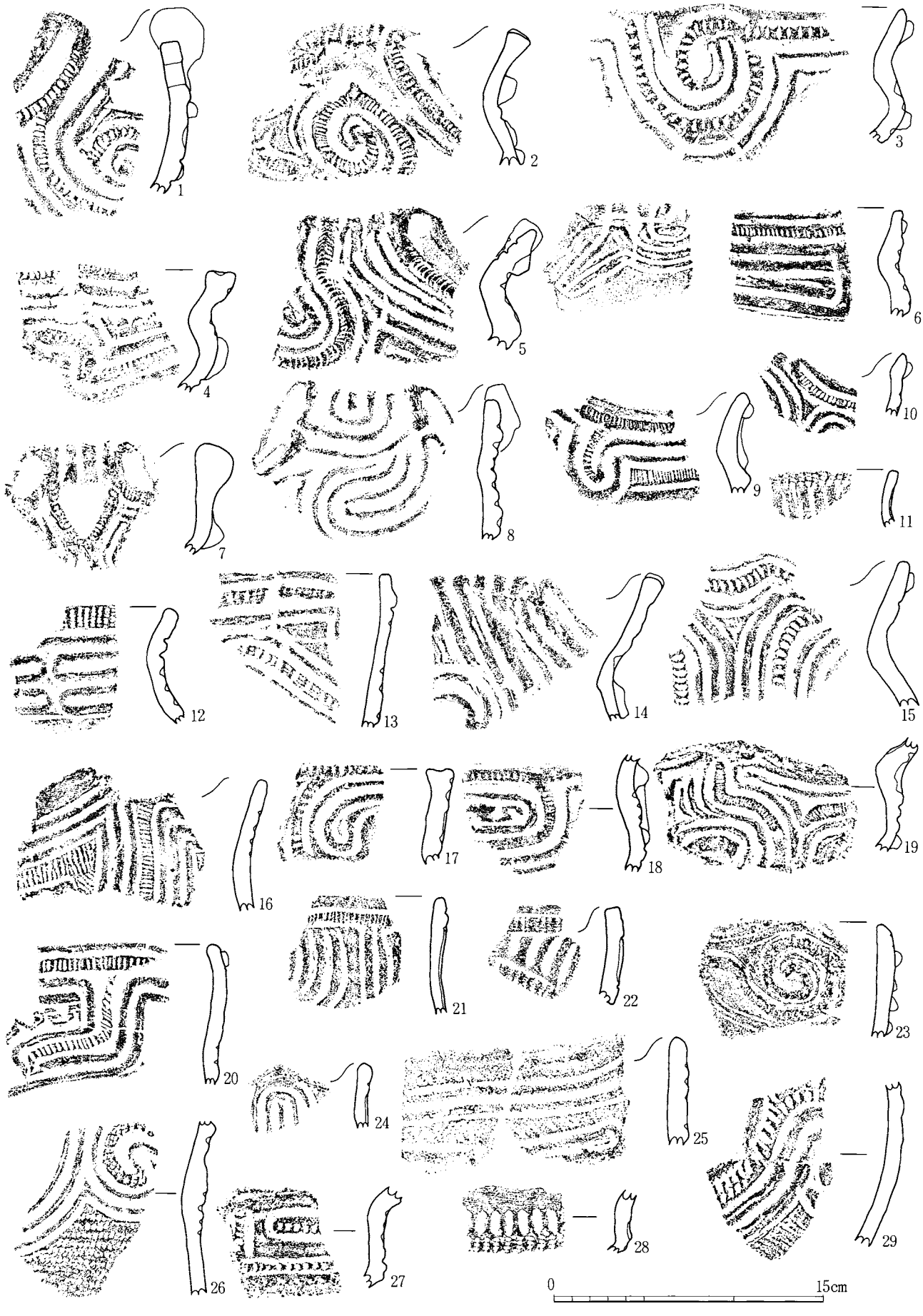
図版93　土器拓本　中期中葉

図版94　土器拓本　中期中葉



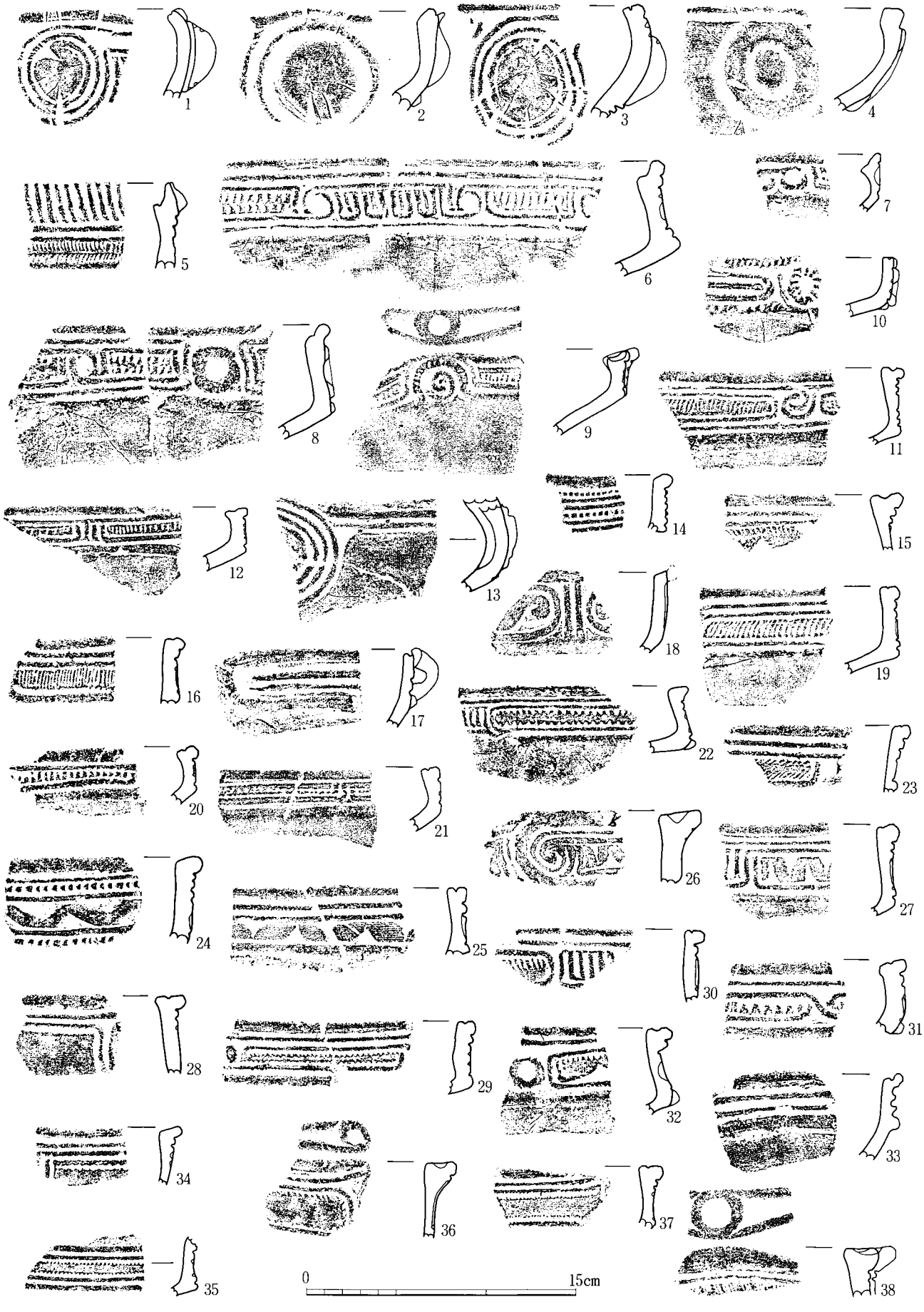
図版95　土器拓本　中期中葉

図版96　土器拓本　中期中葉



図版97　土器拓本　中期中葉

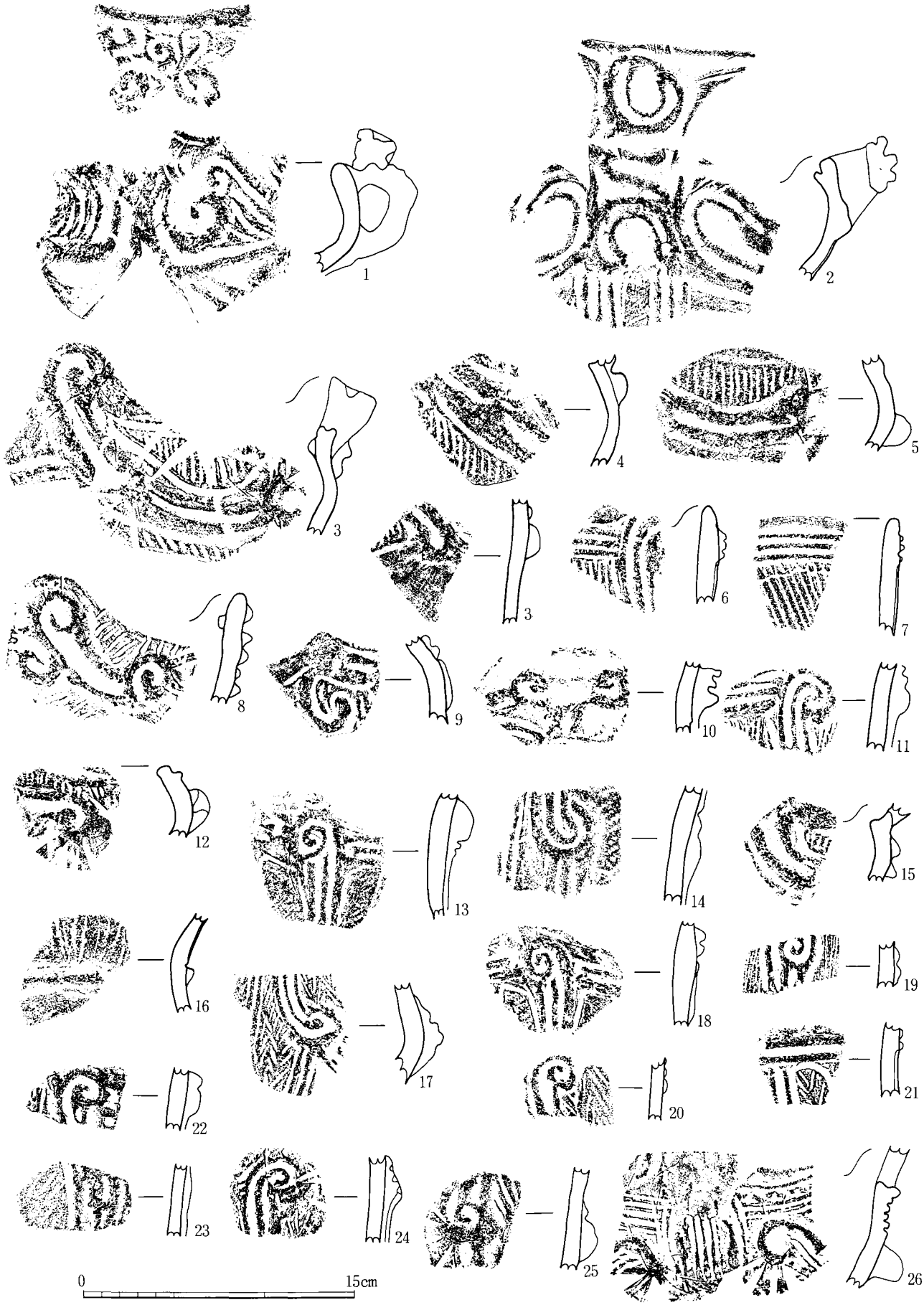
図版98　土器拓本　中期中葉



図版99　土器拓本　中期中葉

図版100　土器拓本　中期中葉・後葉

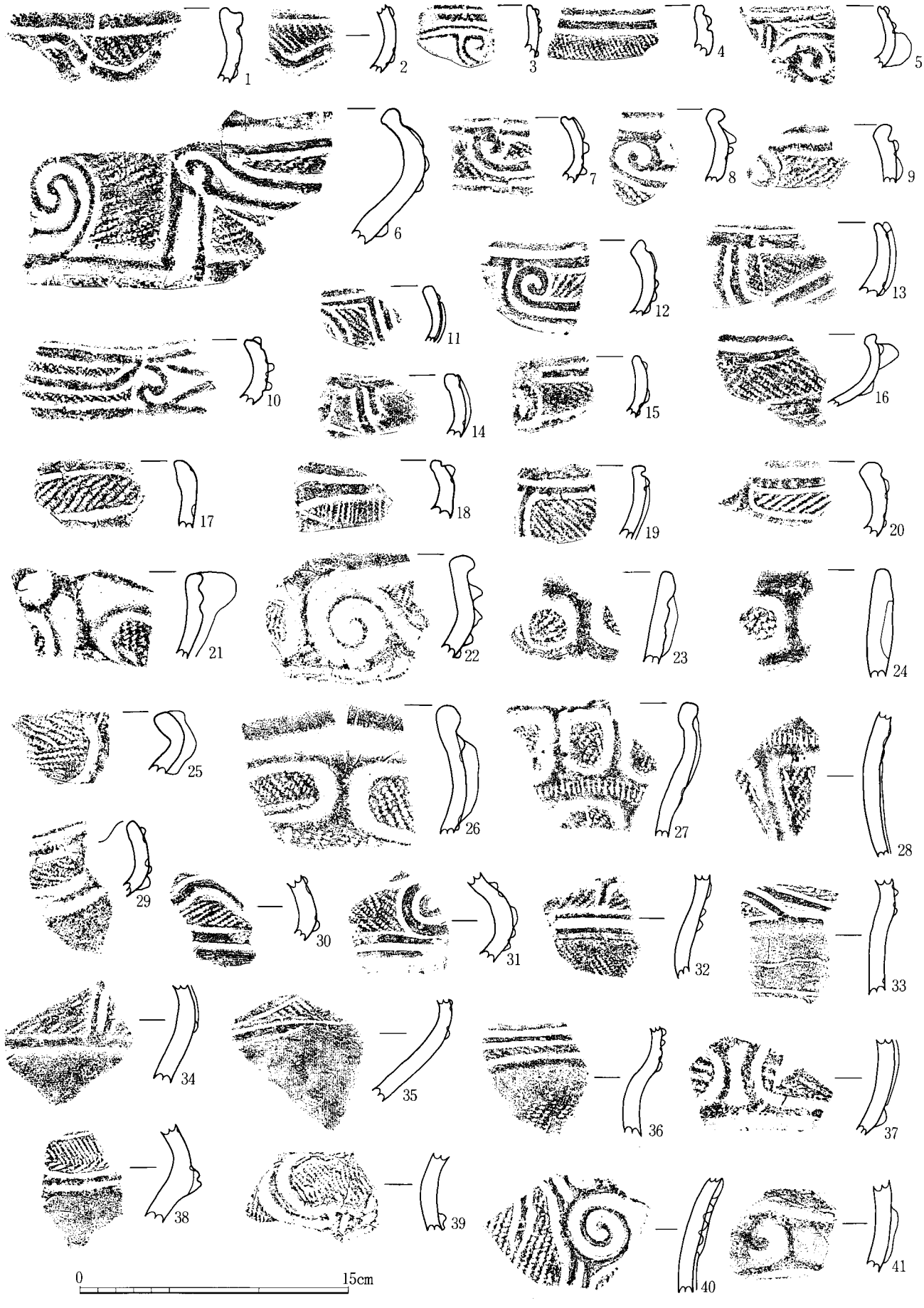
図版101　土器拓本　中期中葉・後葉



図版102　土器拓本　中期中葉・後葉

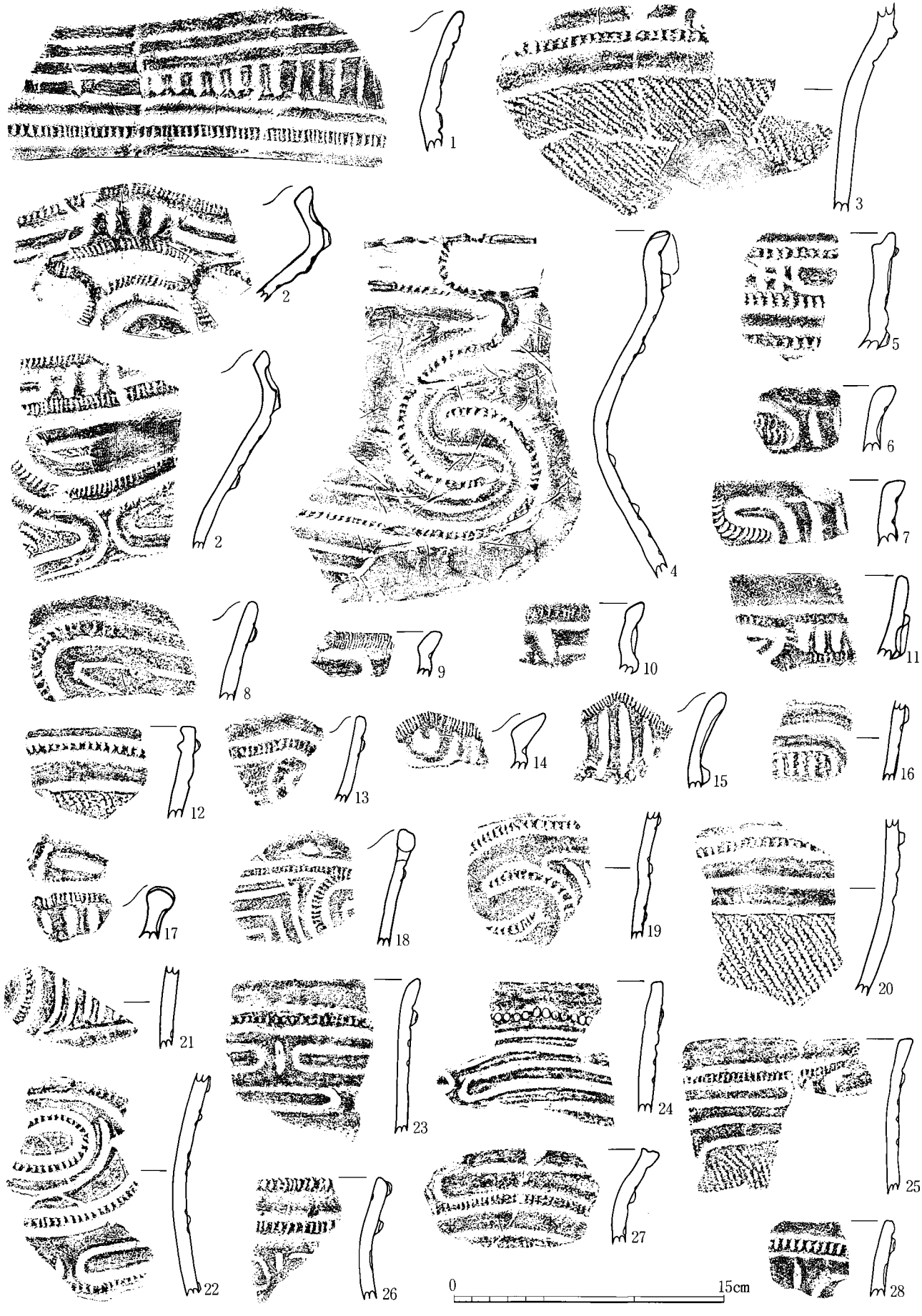
図版103　土器拓本　中期中葉・後葉

図版104　土器拓本　中期中葉・後葉



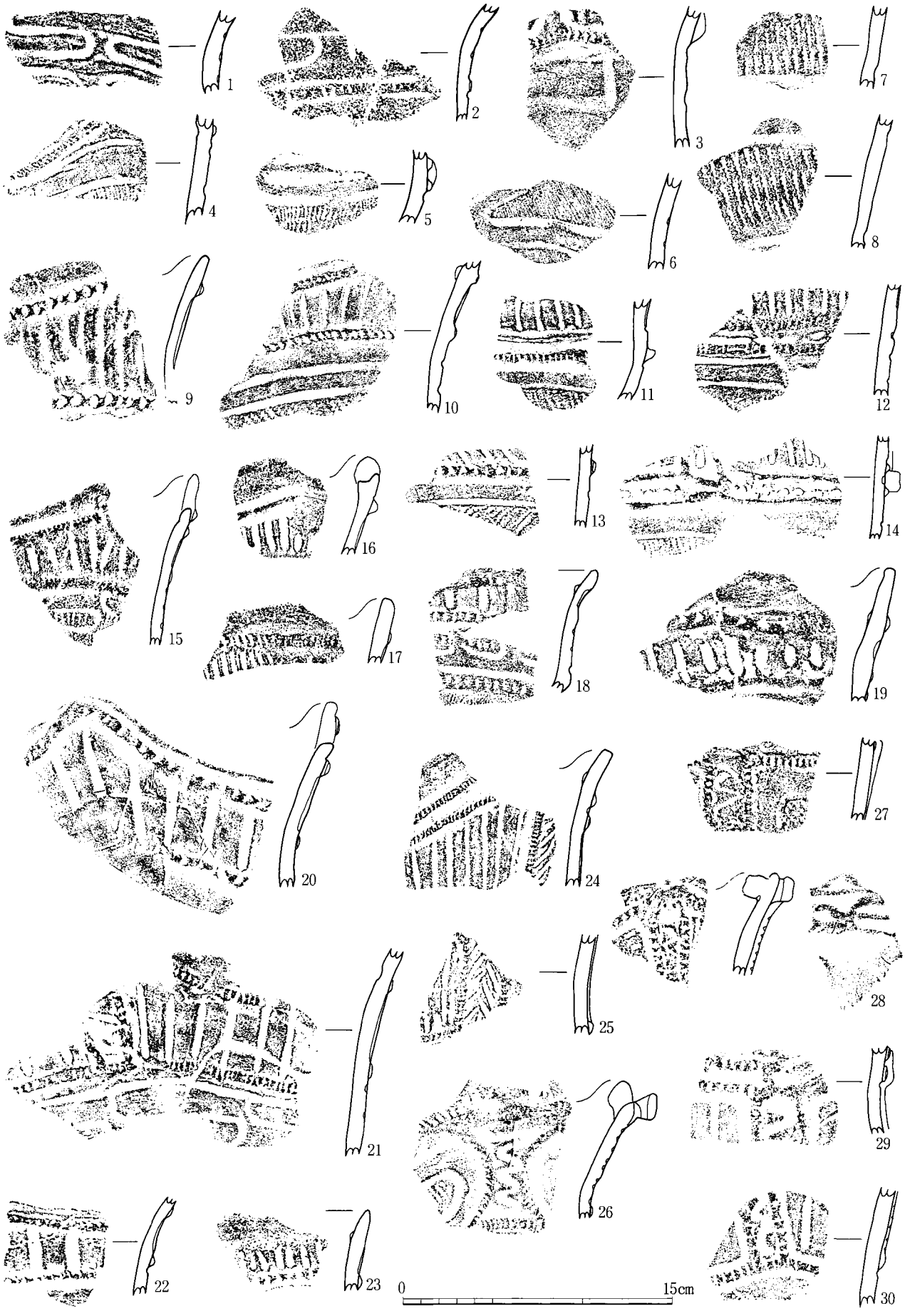
図版105　土器拓本　中期中葉・後葉

図版106　土器拓本　中期中葉・後葉

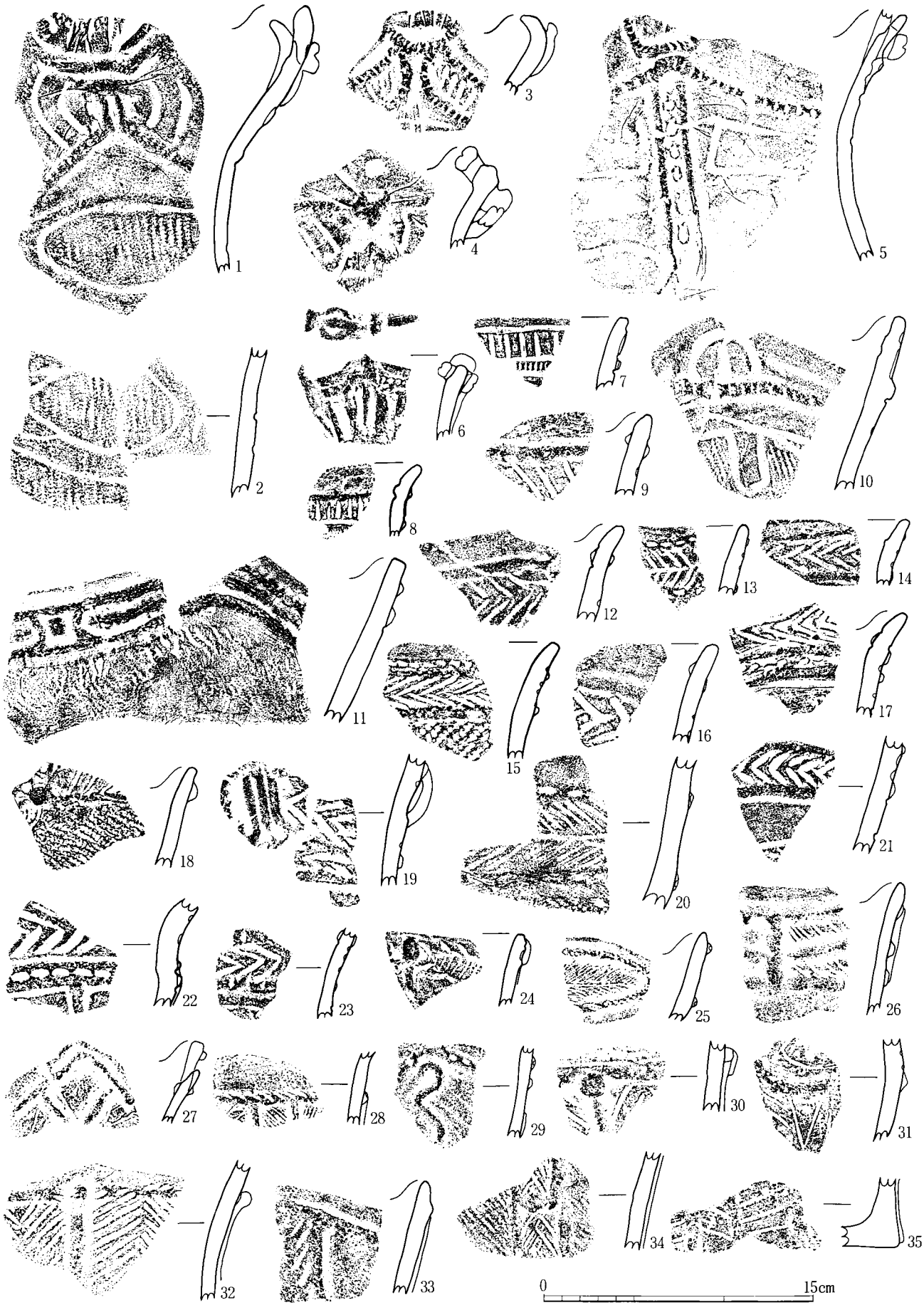


図版107　土器拓本　中期中葉・後葉

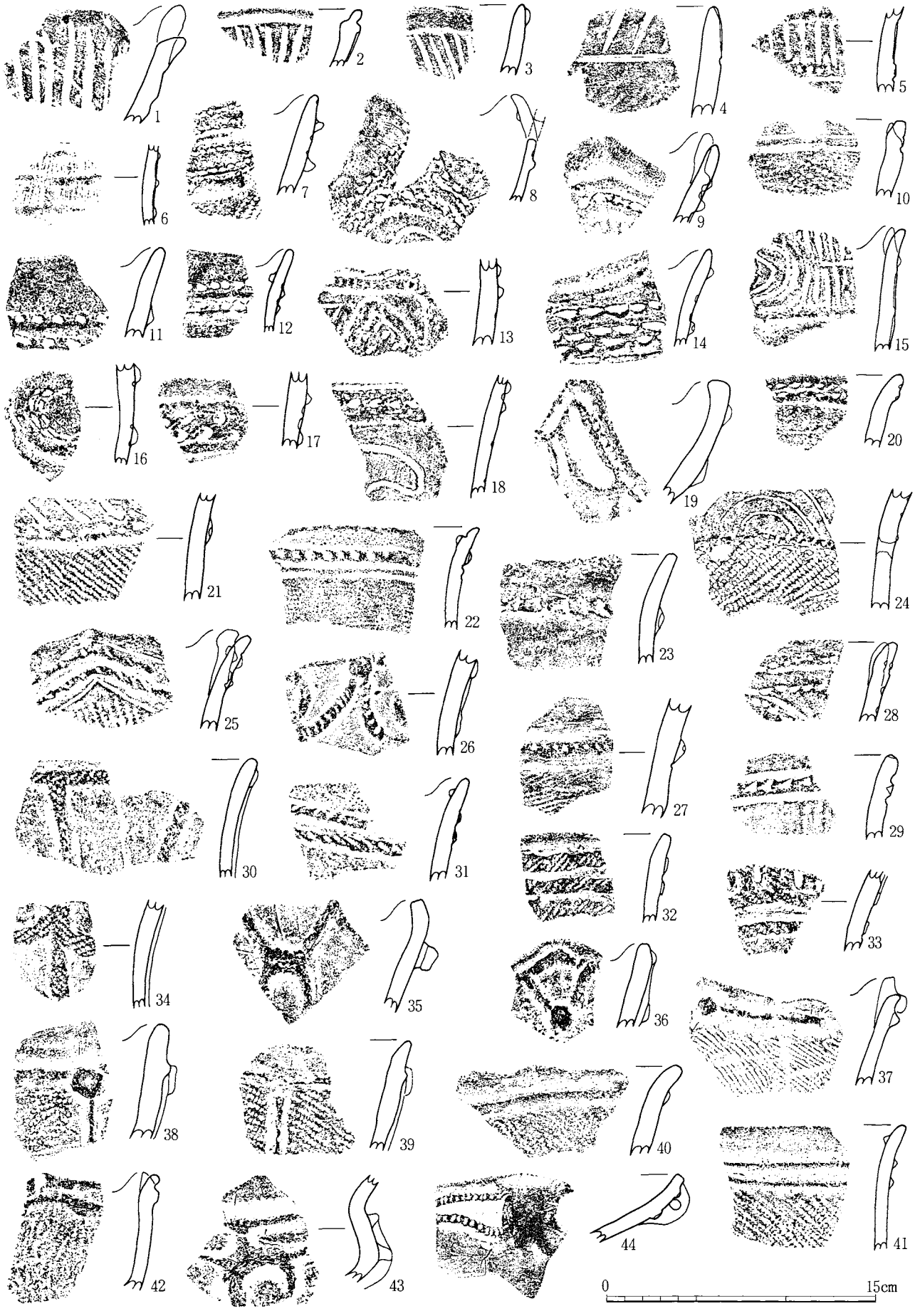
図版108　土器拓本　中期後葉



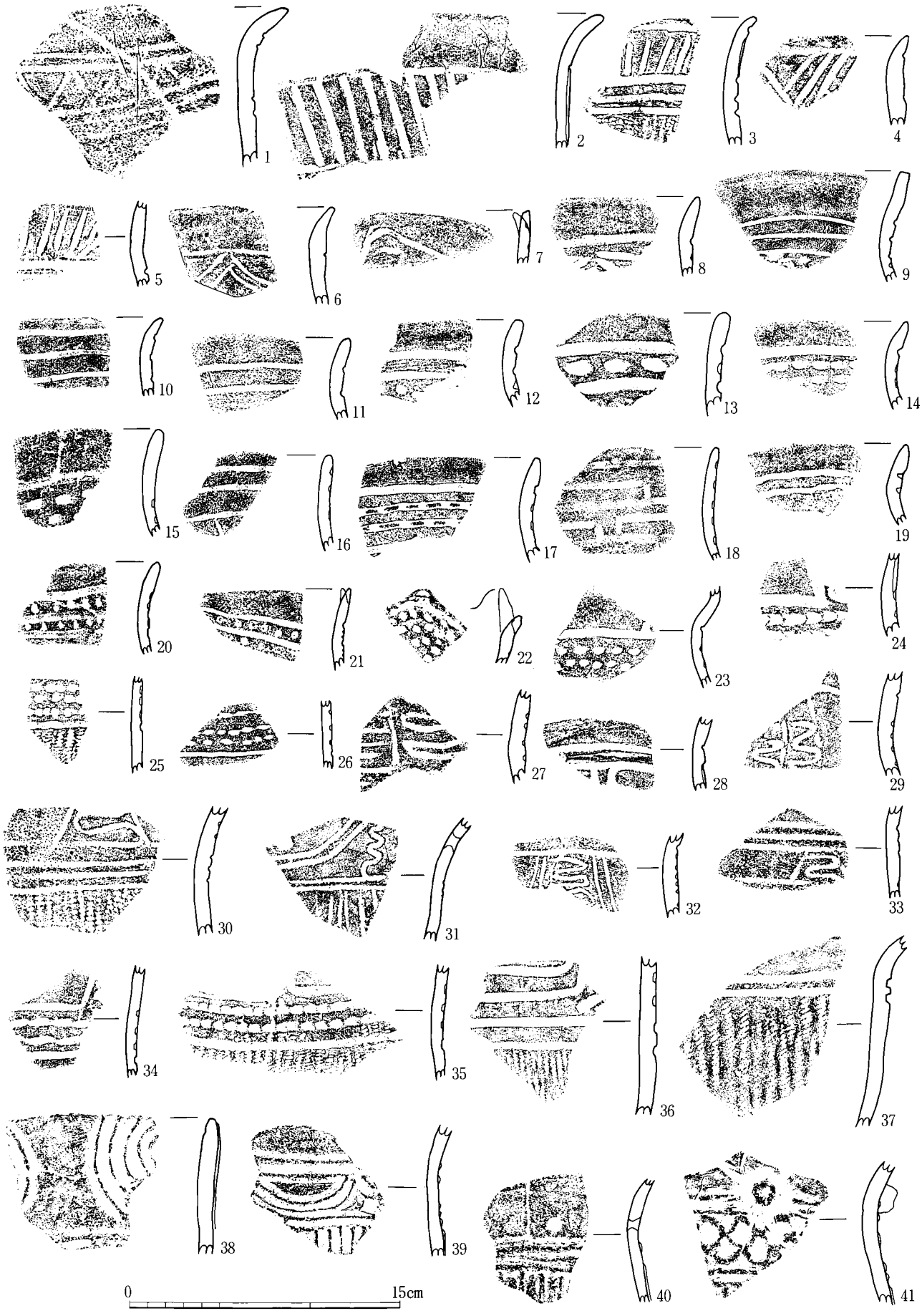
図版109　土器拓本　中期後葉



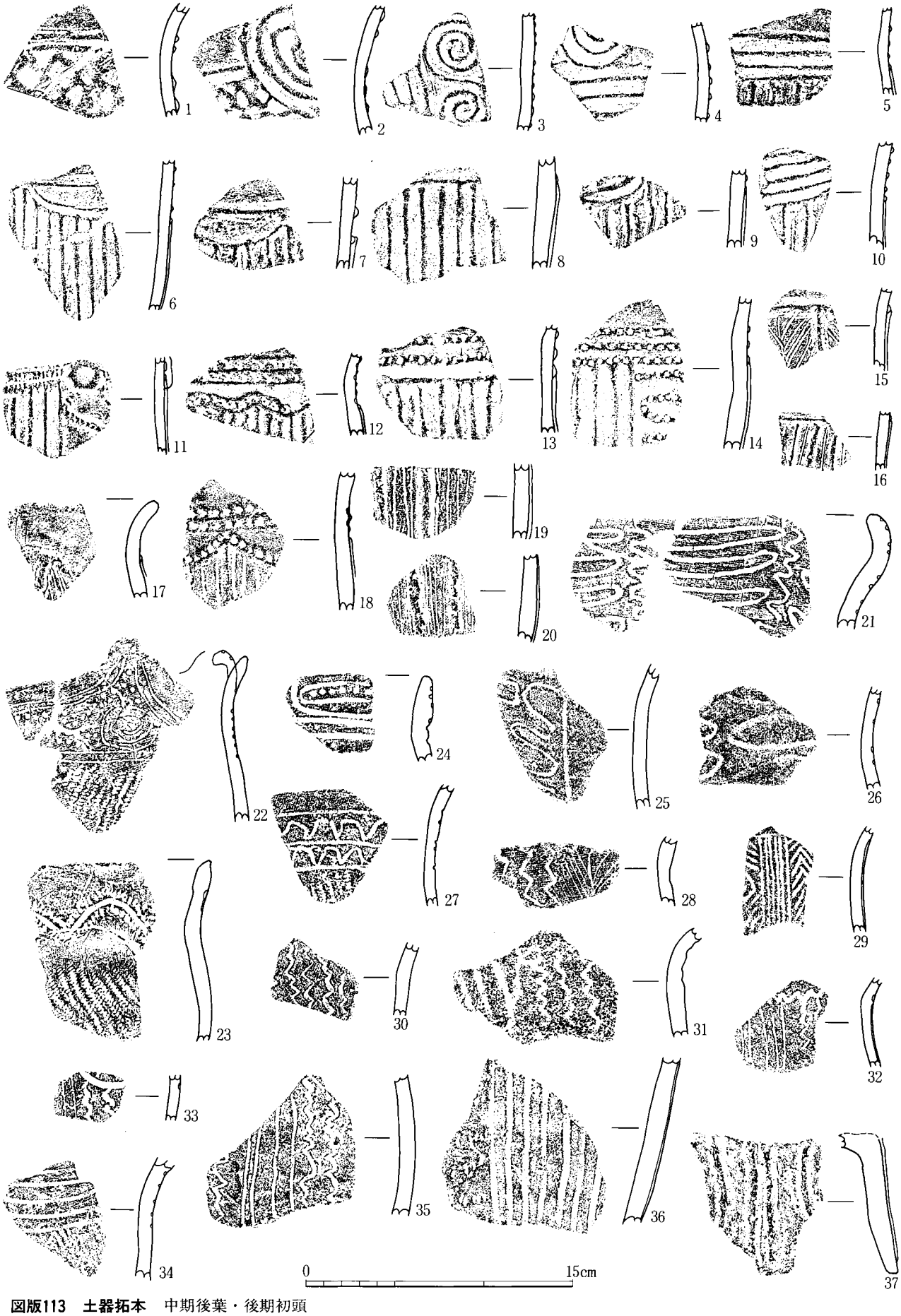
図版110　土器拓本　中期後葉



図版111　土器拓本　中期後葉



図版112　土器拓本　中期後葉

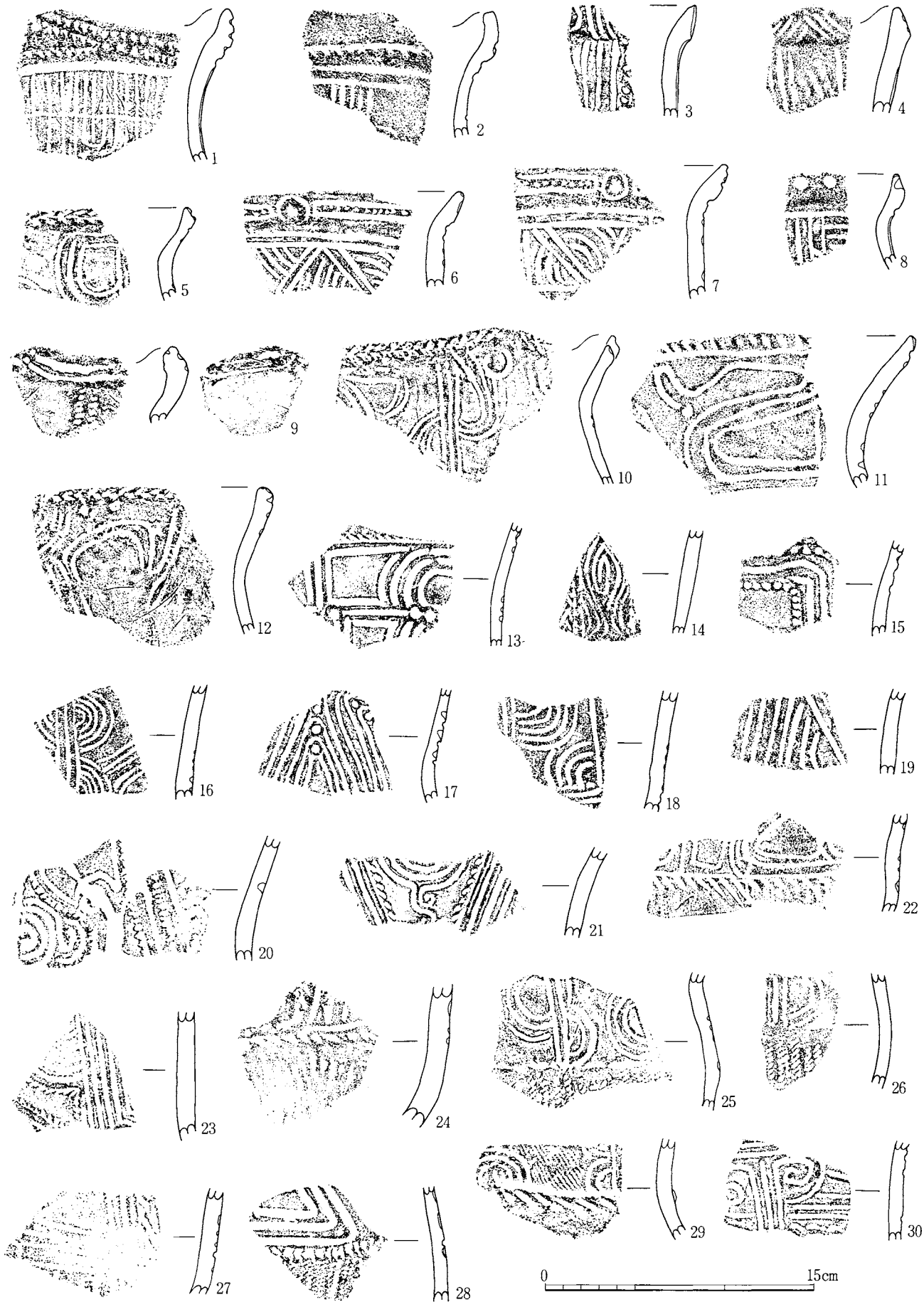


図版113　土器拓本　中期後葉・後期初頭

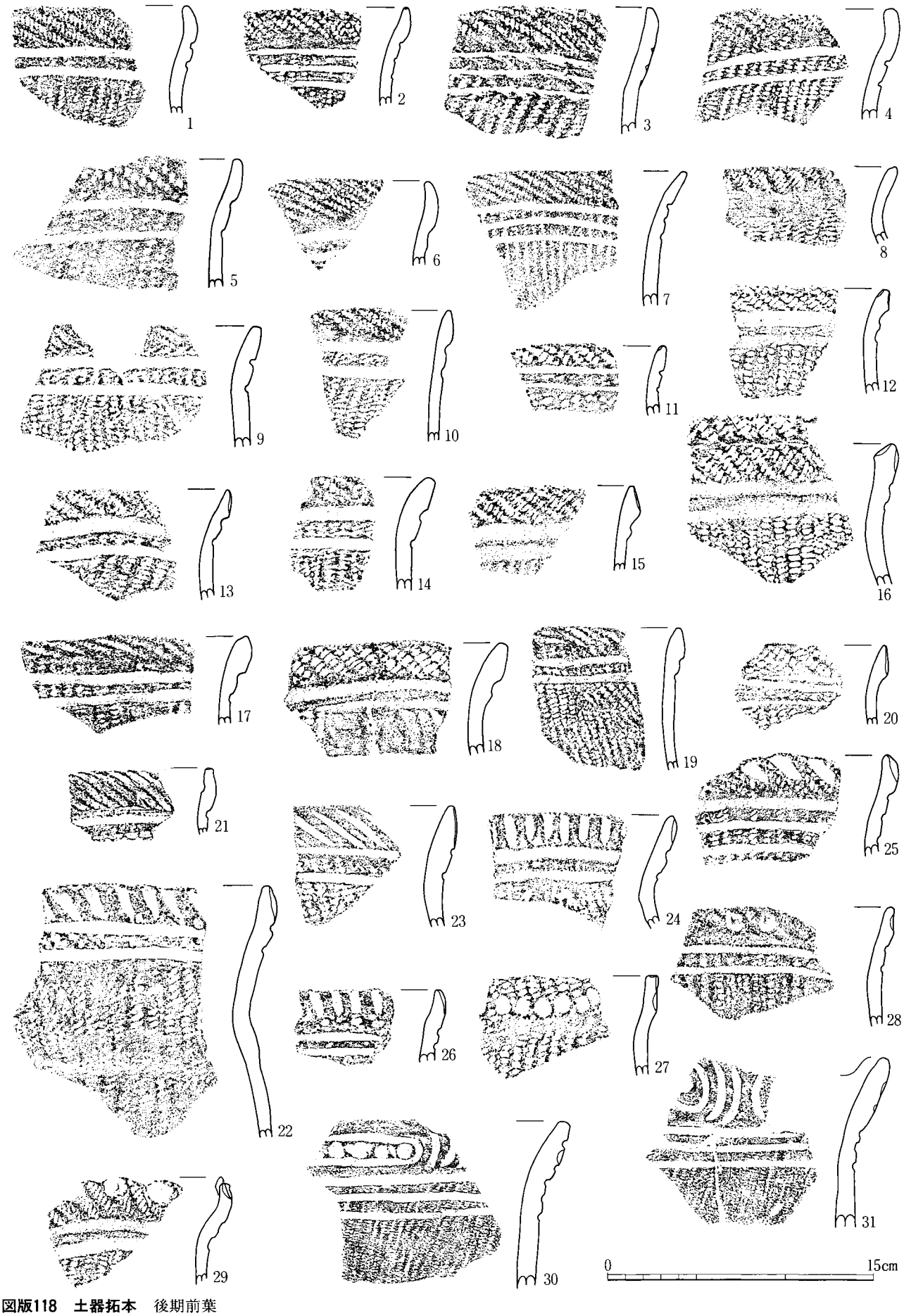
図版114　土器拓本　後期前葉

図版115　土器拓本　後期前葉

図版116　土器拓本　後期前葉



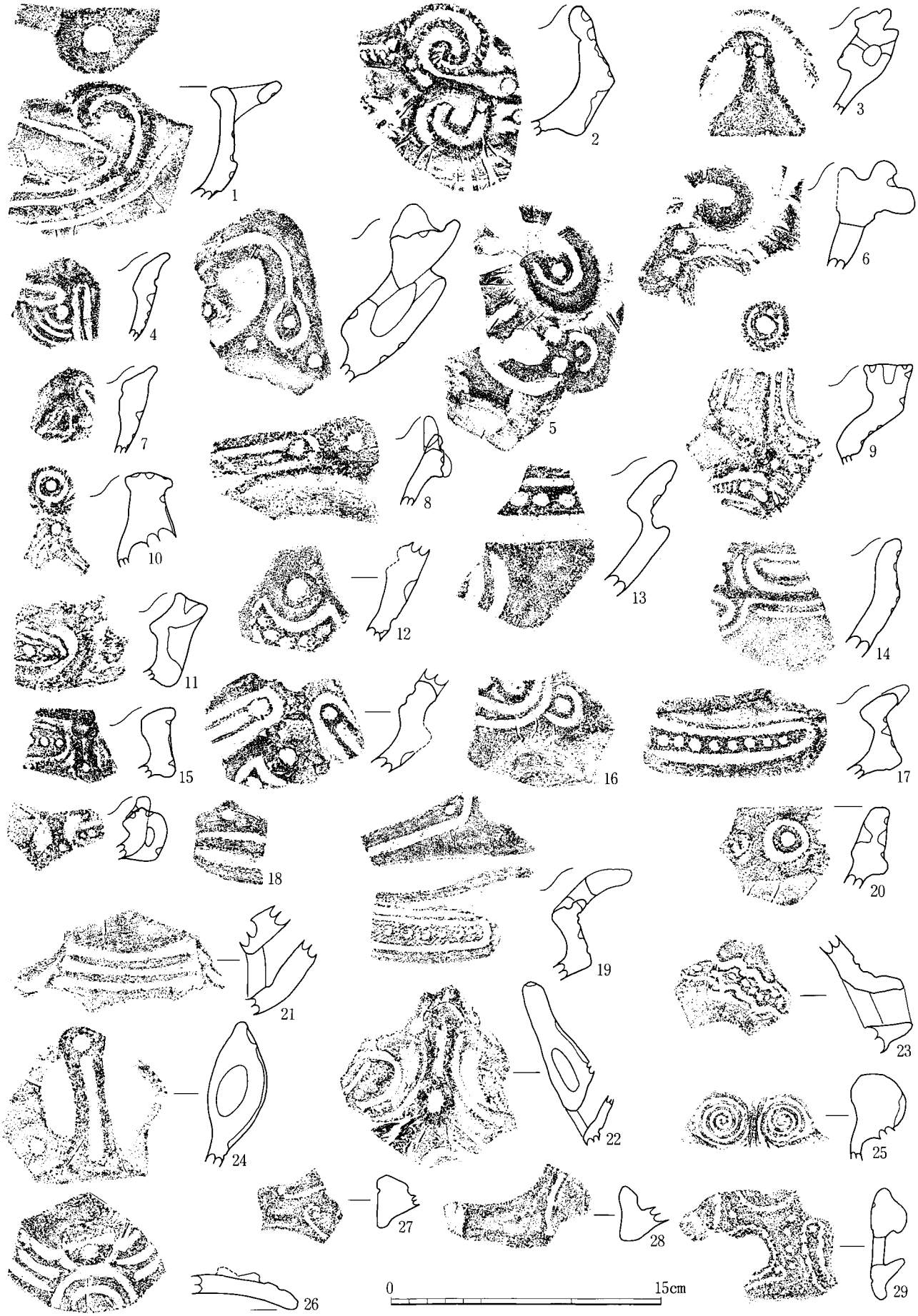
図版117　土器拓本　後期前葉



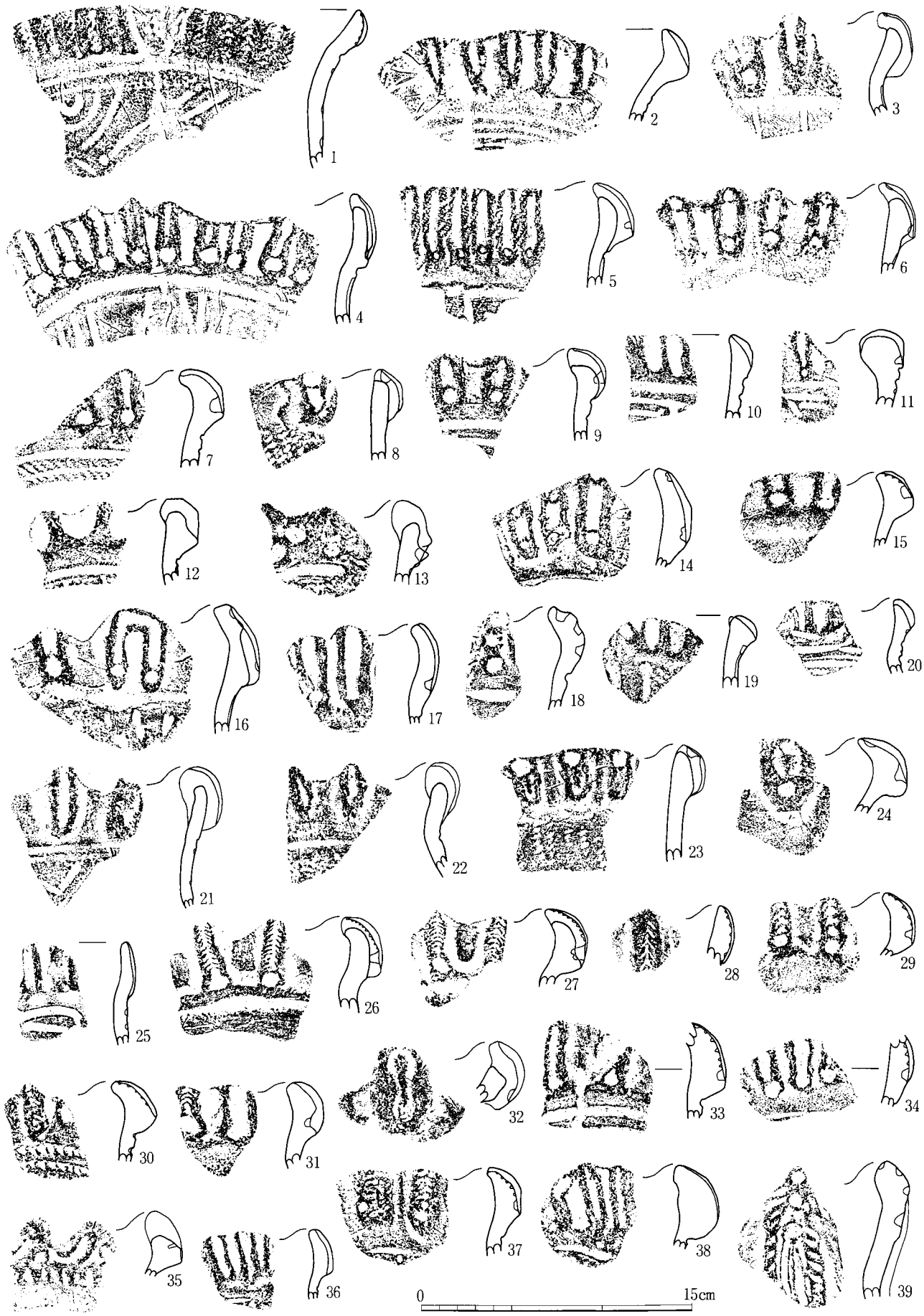
図版118　土器拓本　後期前葉

図版119　土器拓本　後期前葉

図版120　土器拓本　後期前葉

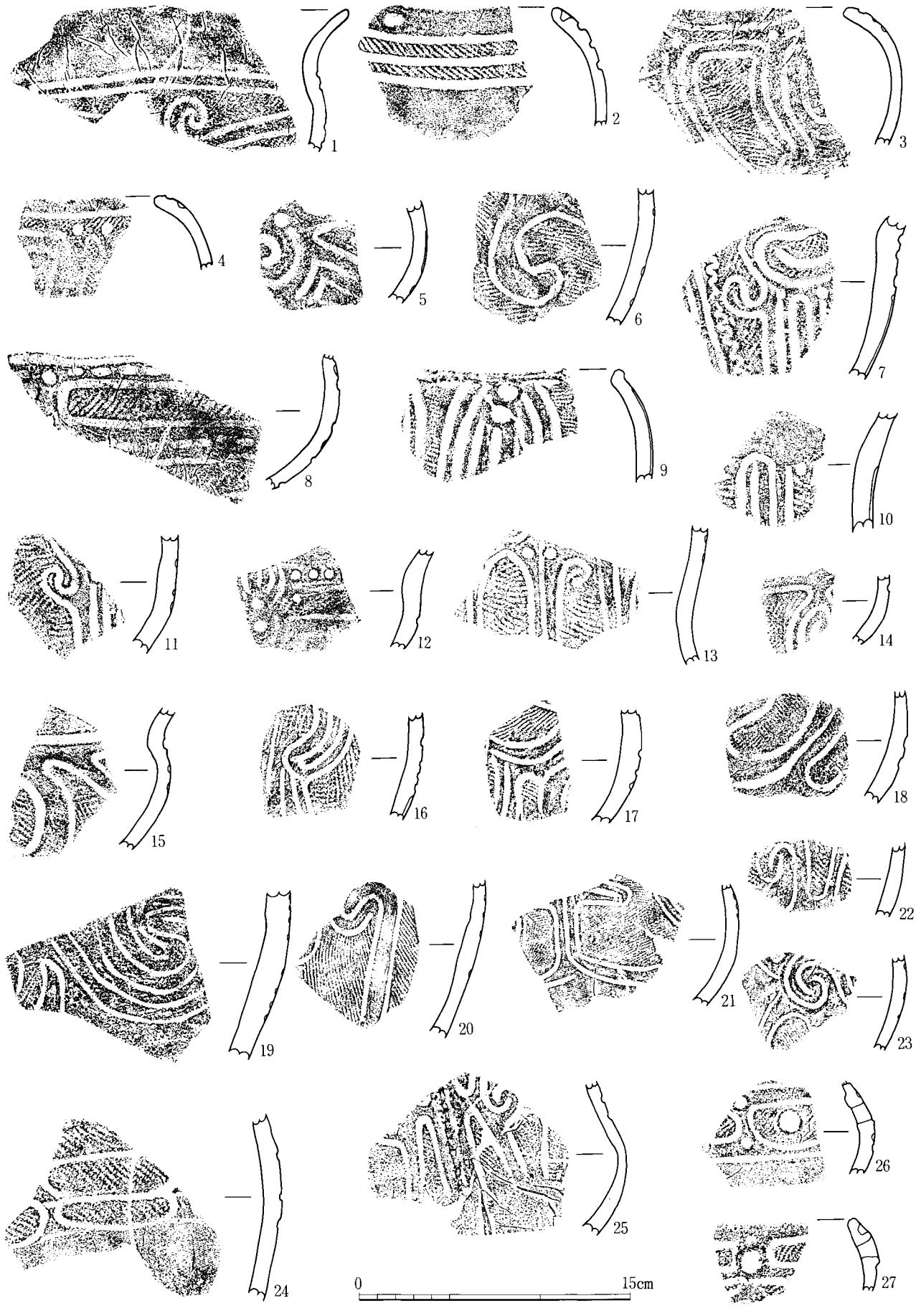


図版121　土器拓本　後期前葉

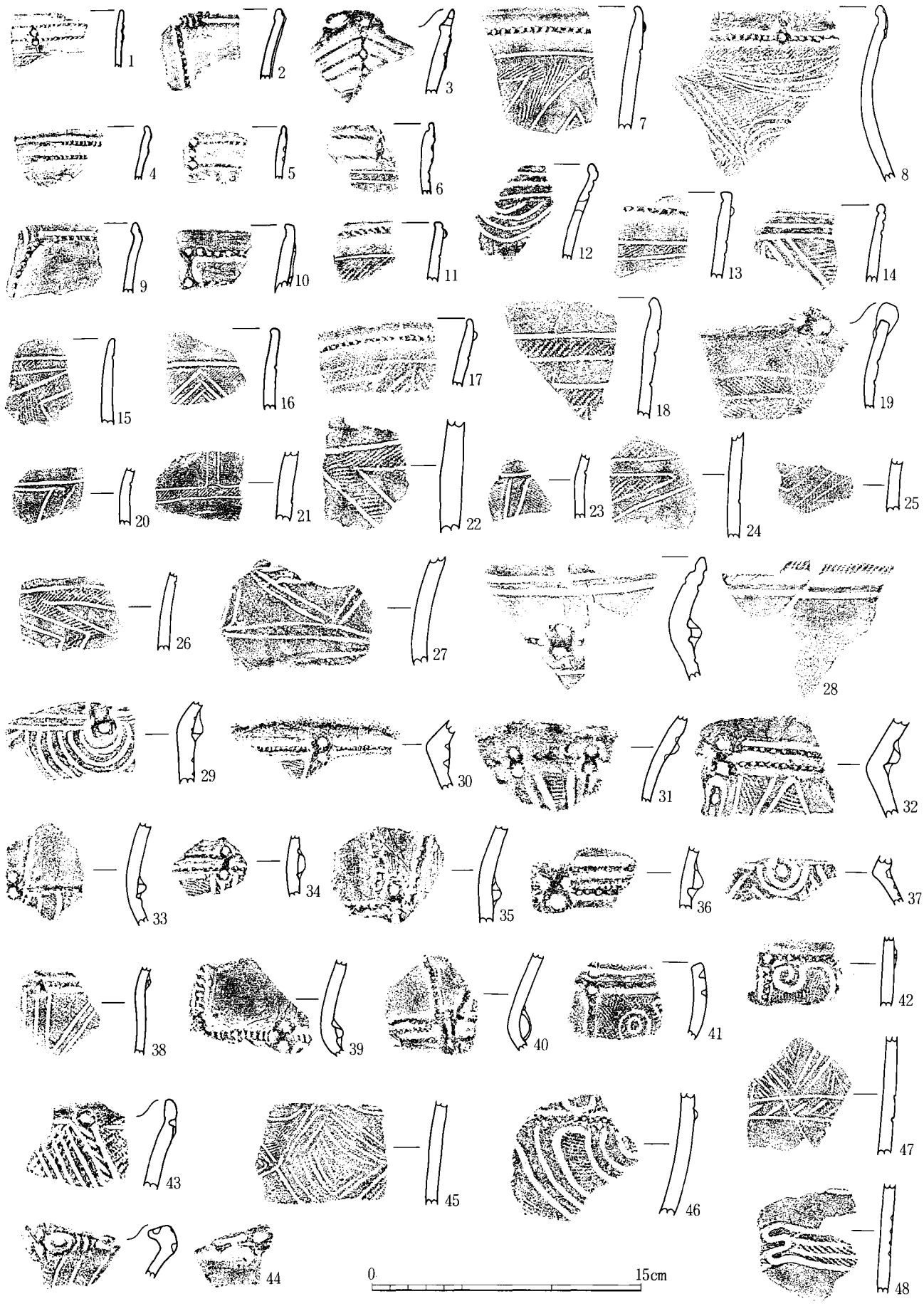


図版122　土器拓本　後期前葉

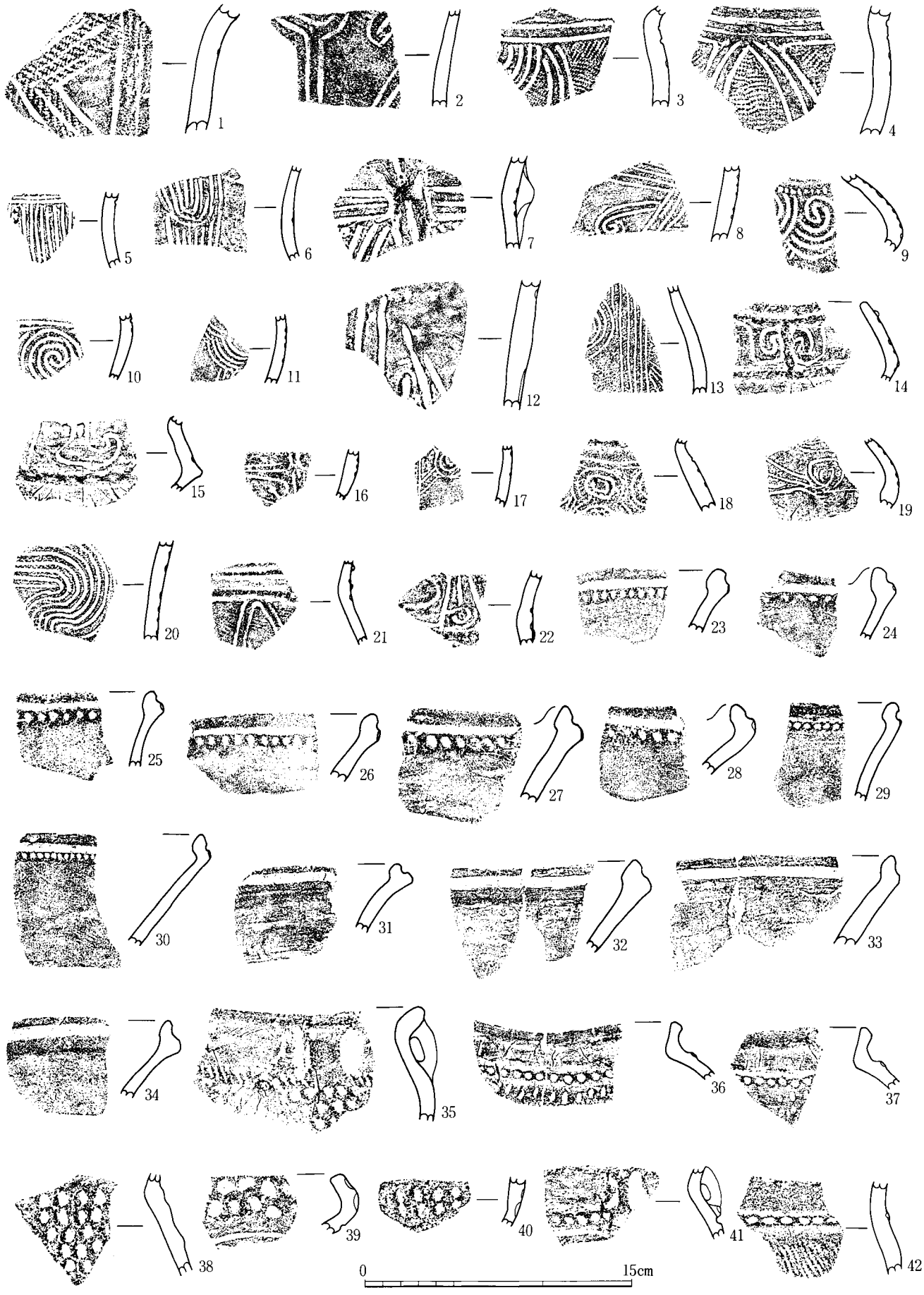
図版123　土器拓本　後期前葉



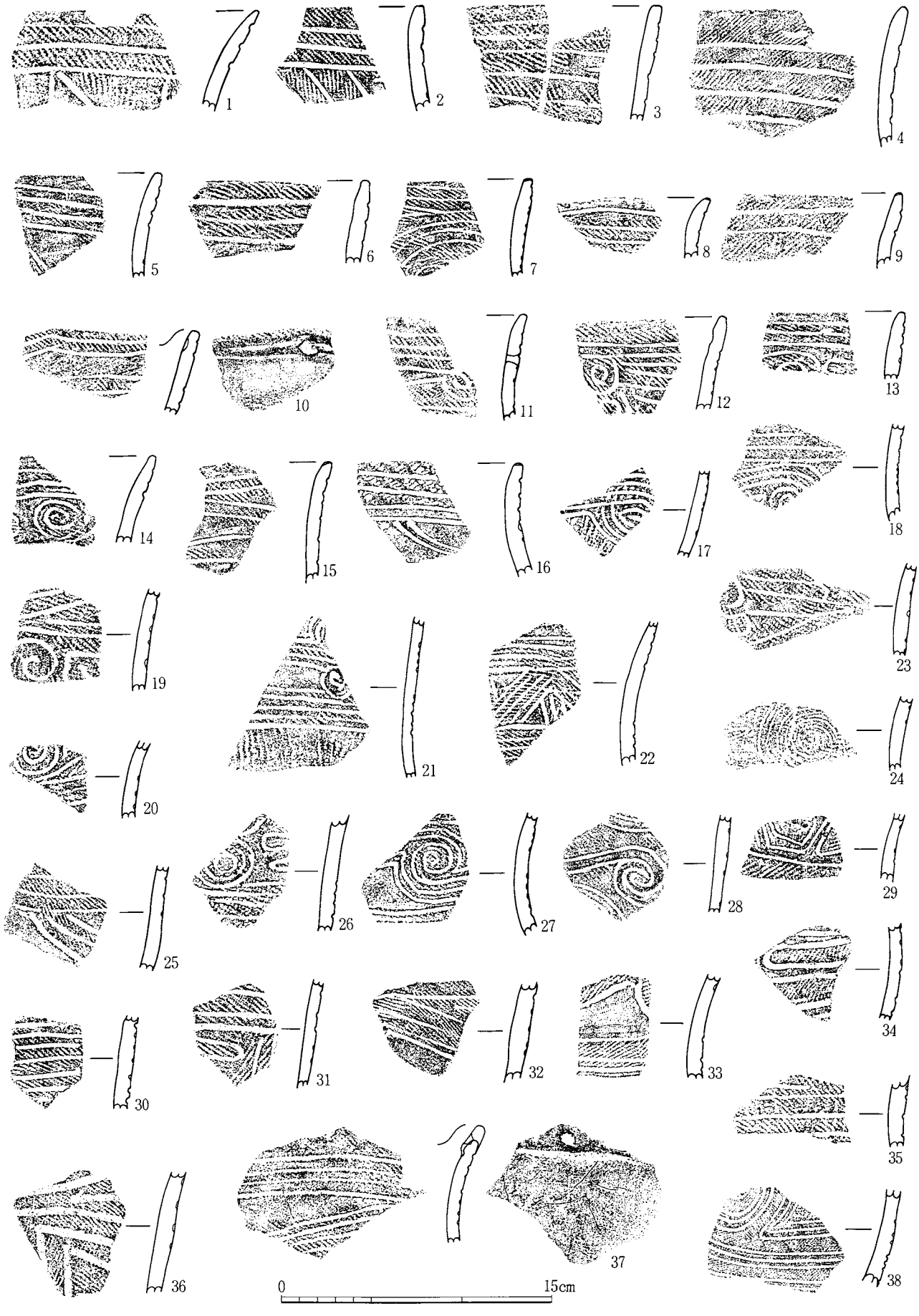
図版124　土器拓本　後期前葉



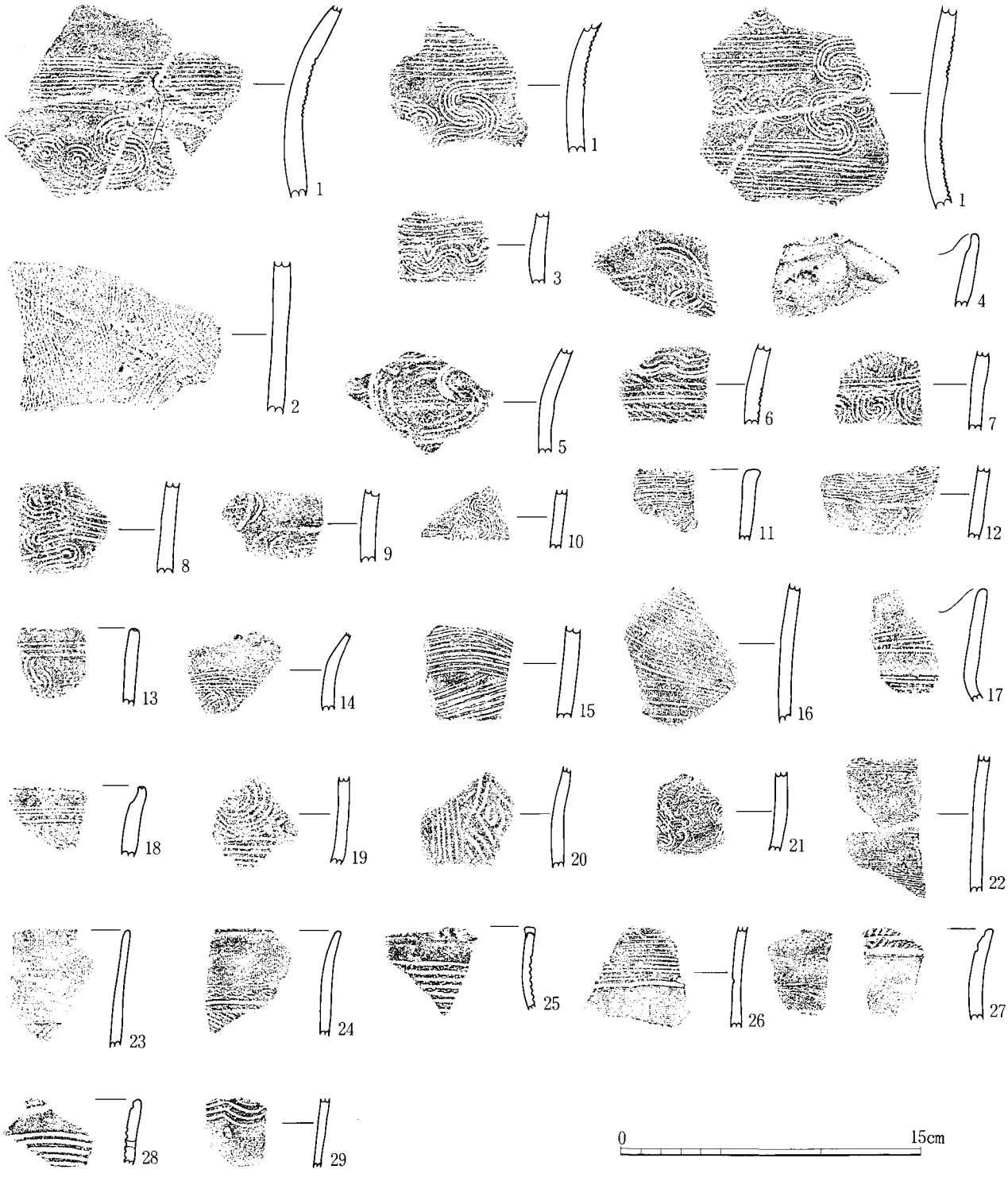
図版125　土器拓本　後期前葉



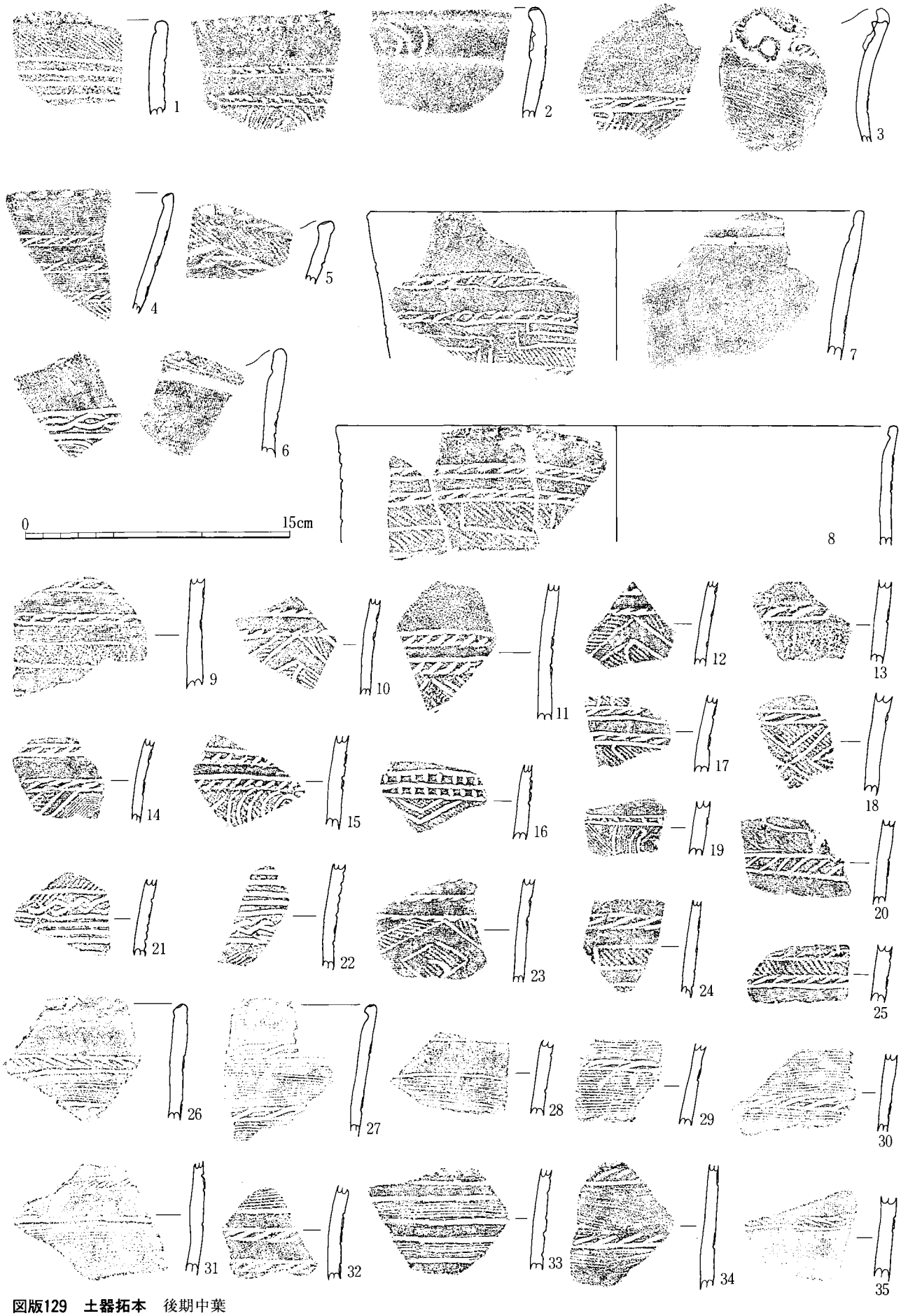
図版126　土器拓本　後期前葉



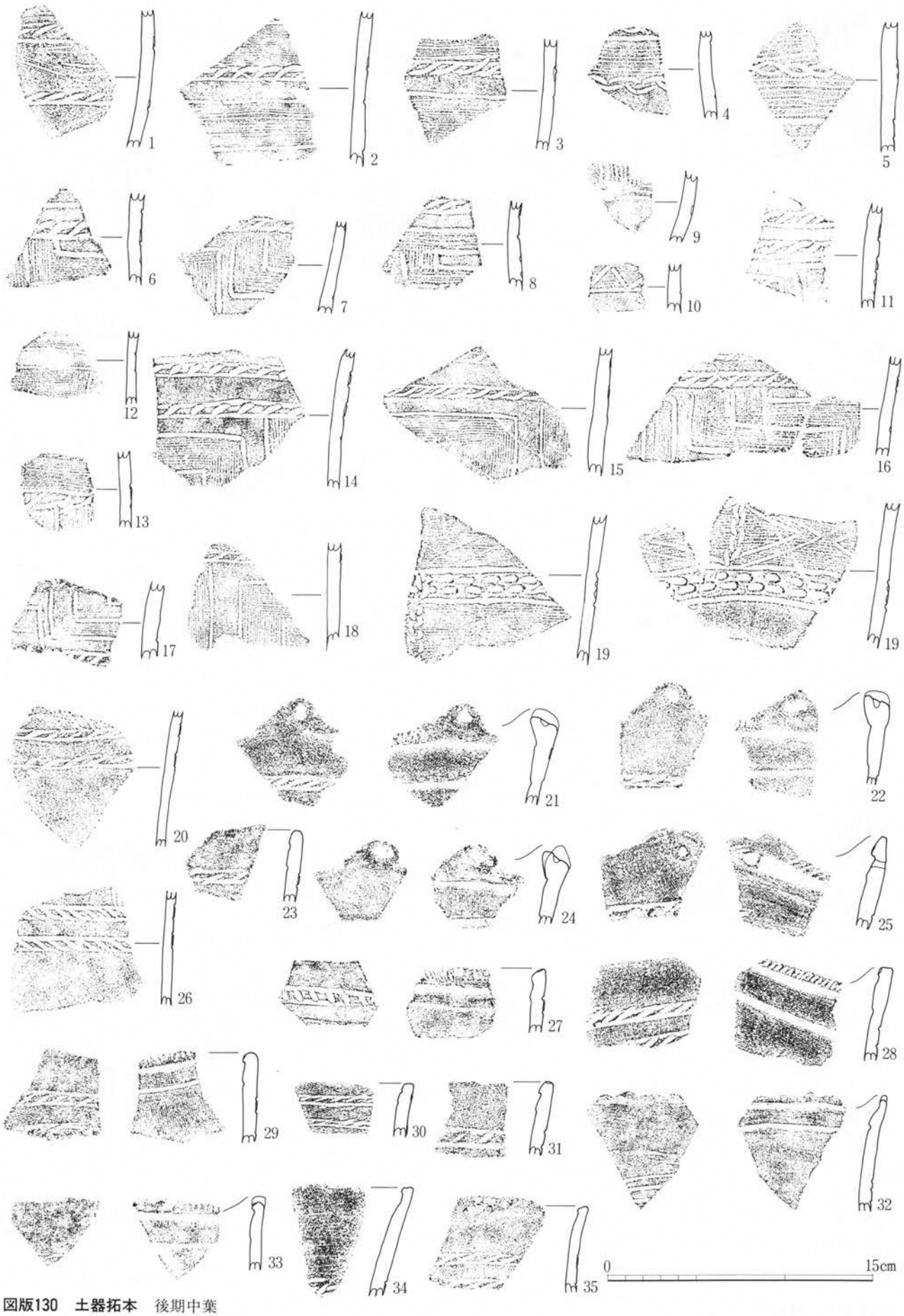
図版127　土器拓本　後期前葉



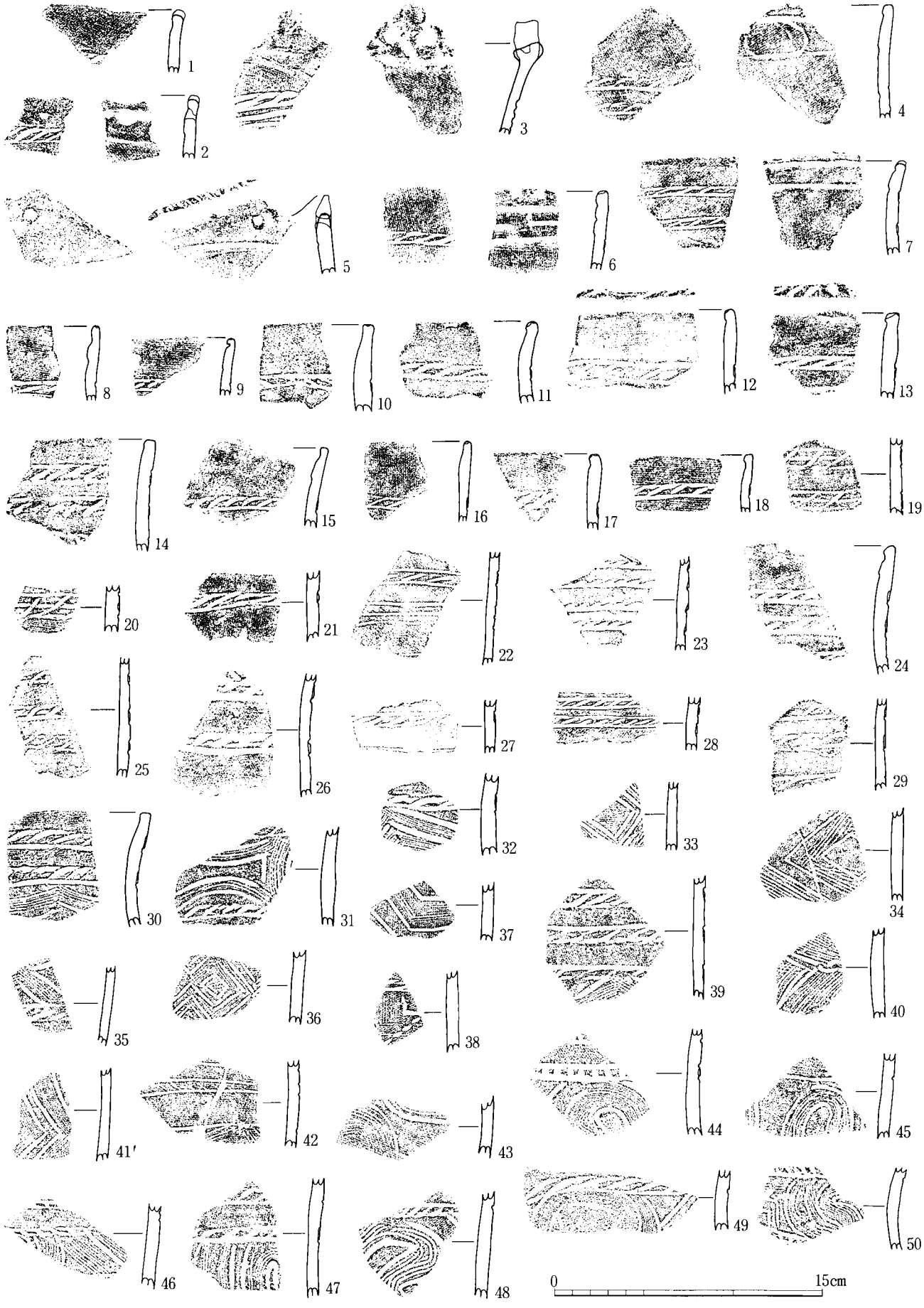
図版128　土器拓本　後期中葉



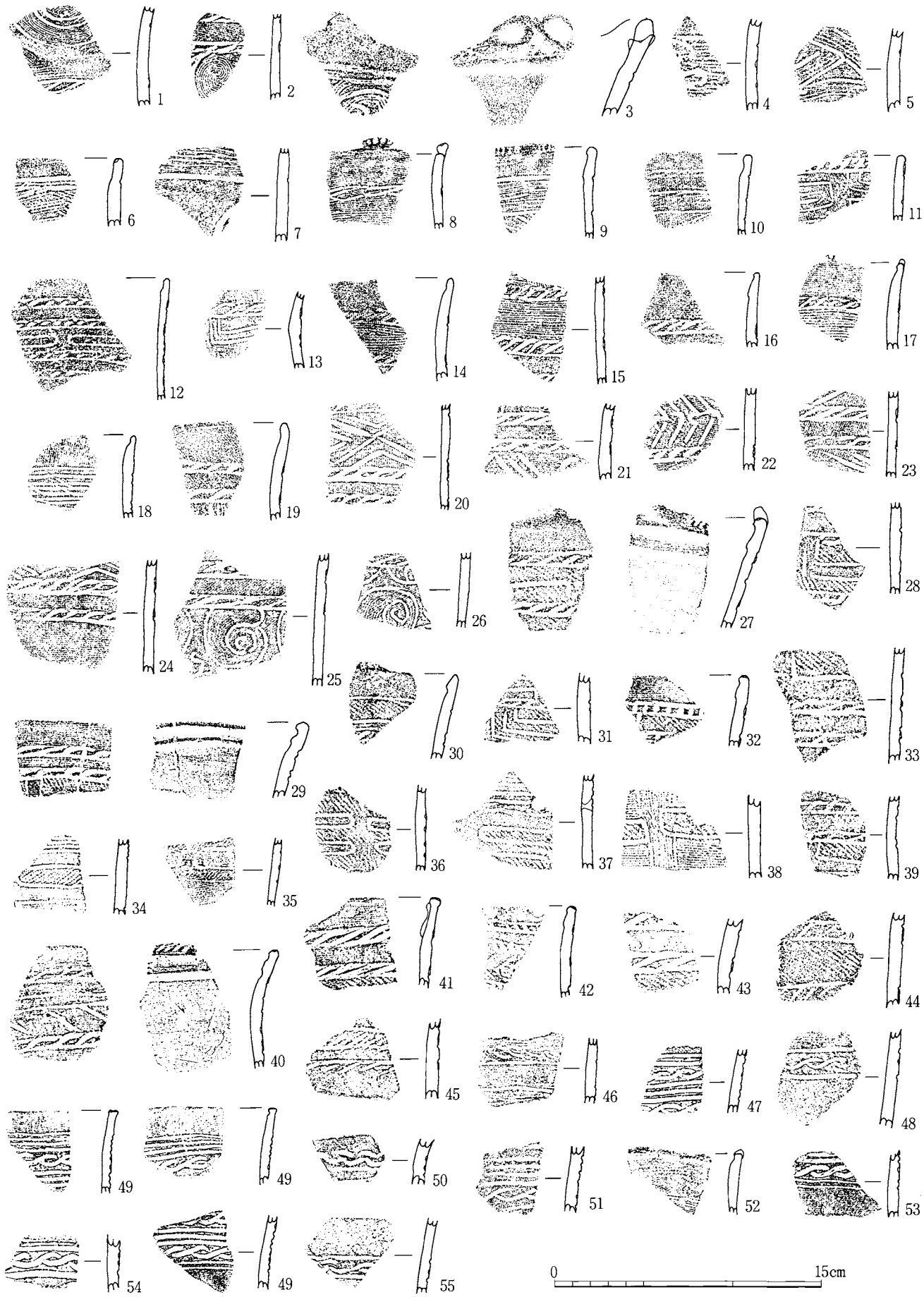
図版129　土器拓本　後期中葉



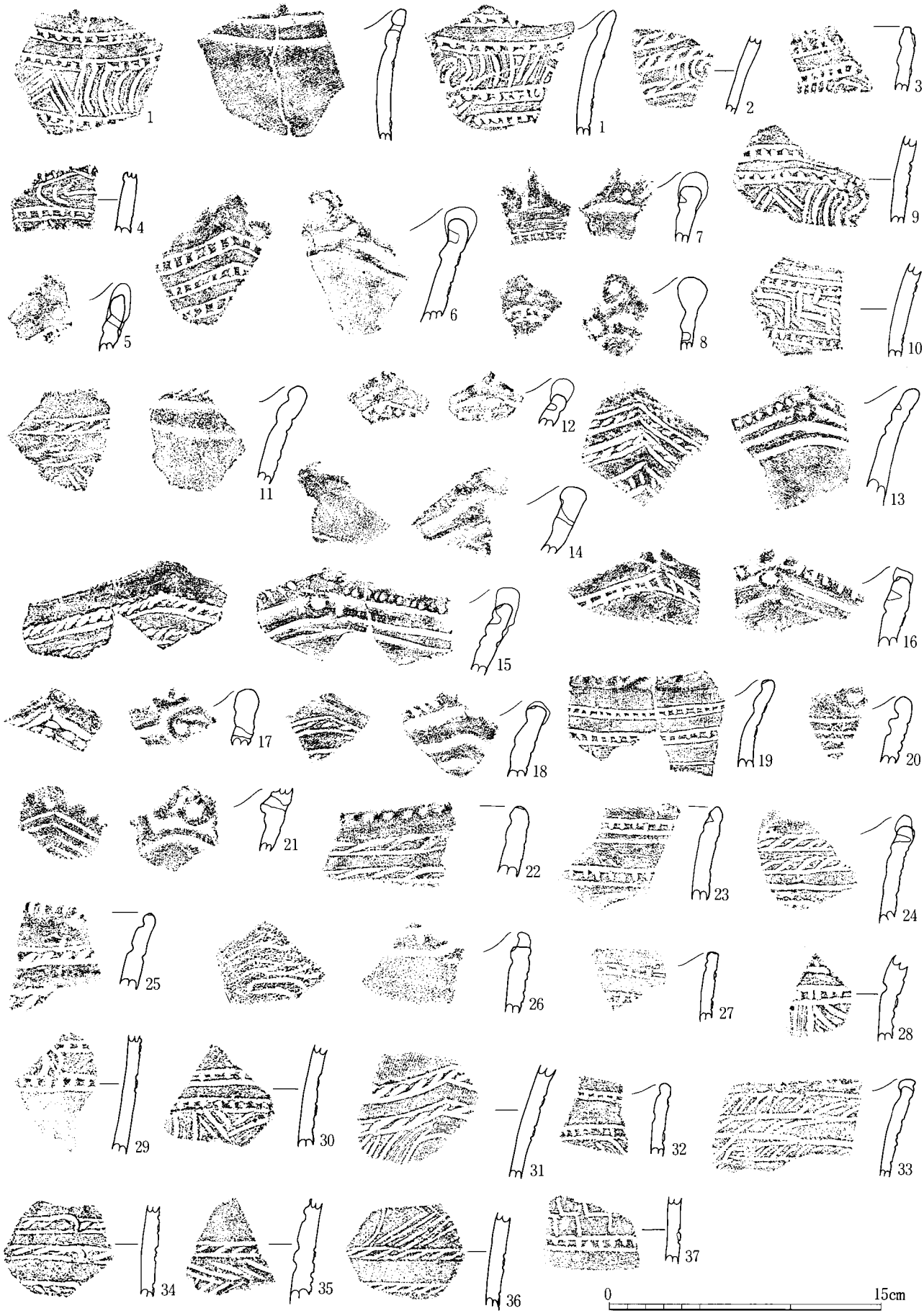
図版130　土器拓本　後期中葉



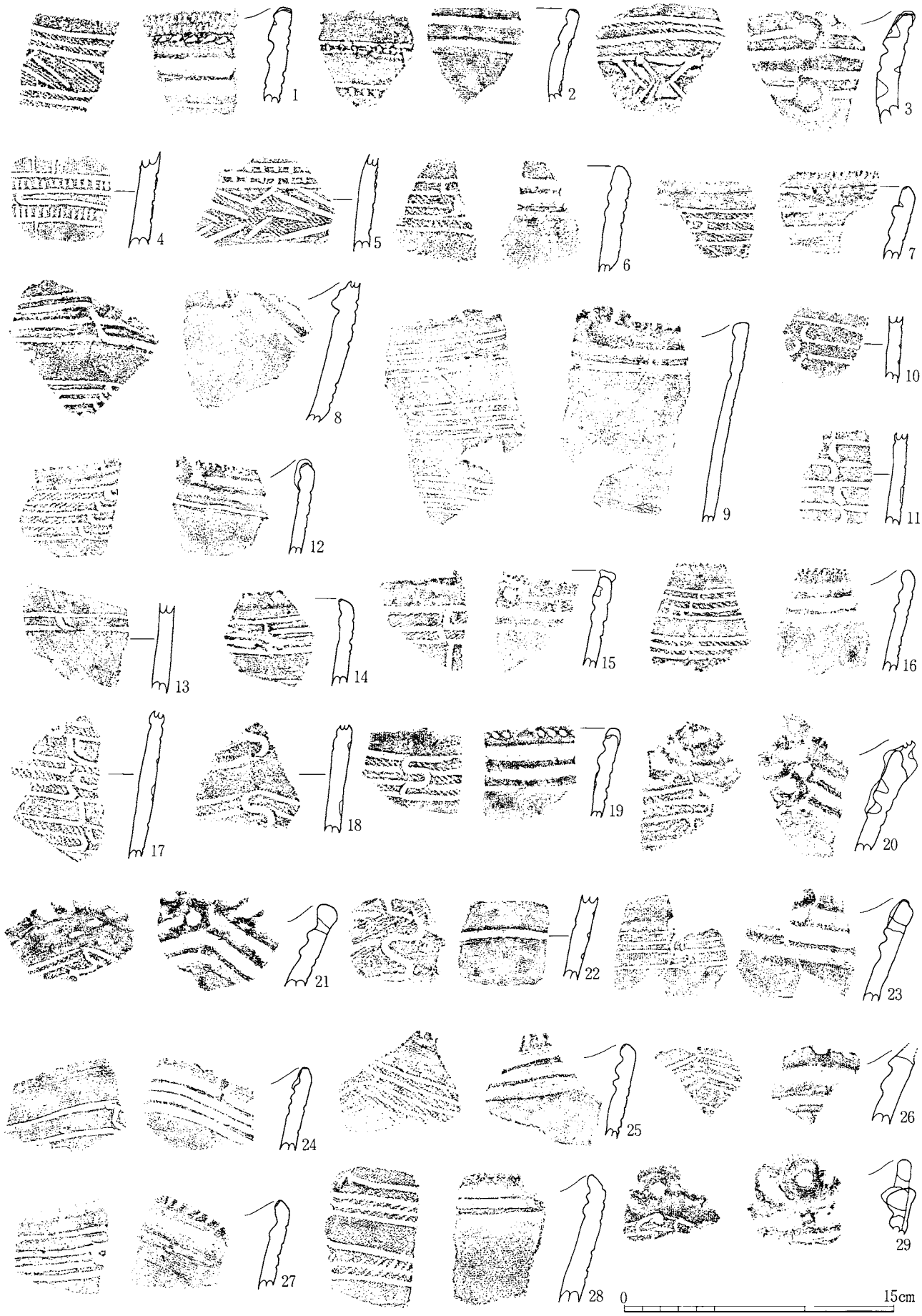
図版131　土器拓本　後期中葉



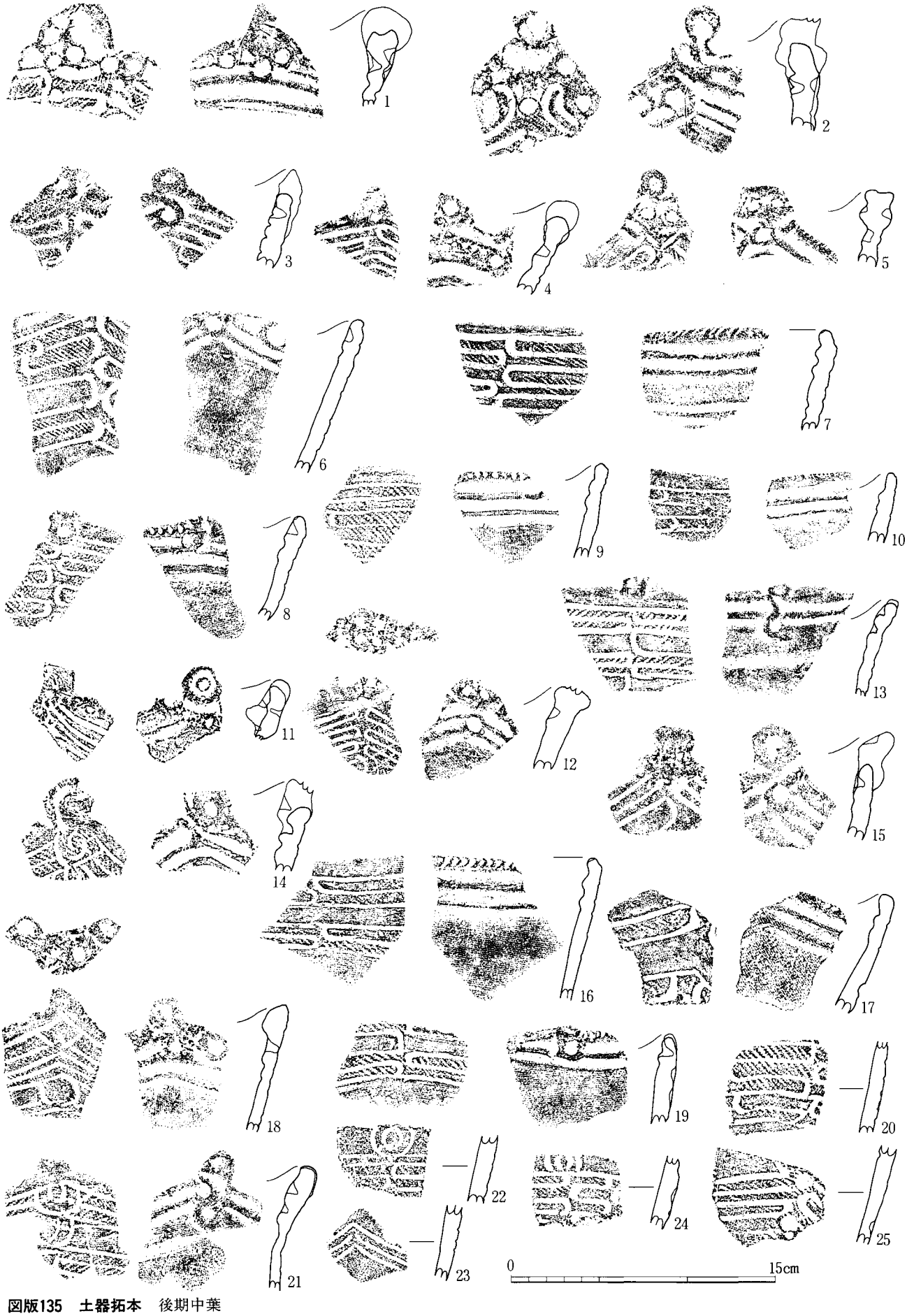
図版132　土器拓本　後期中葉



図版133　土器拓本　後期中葉

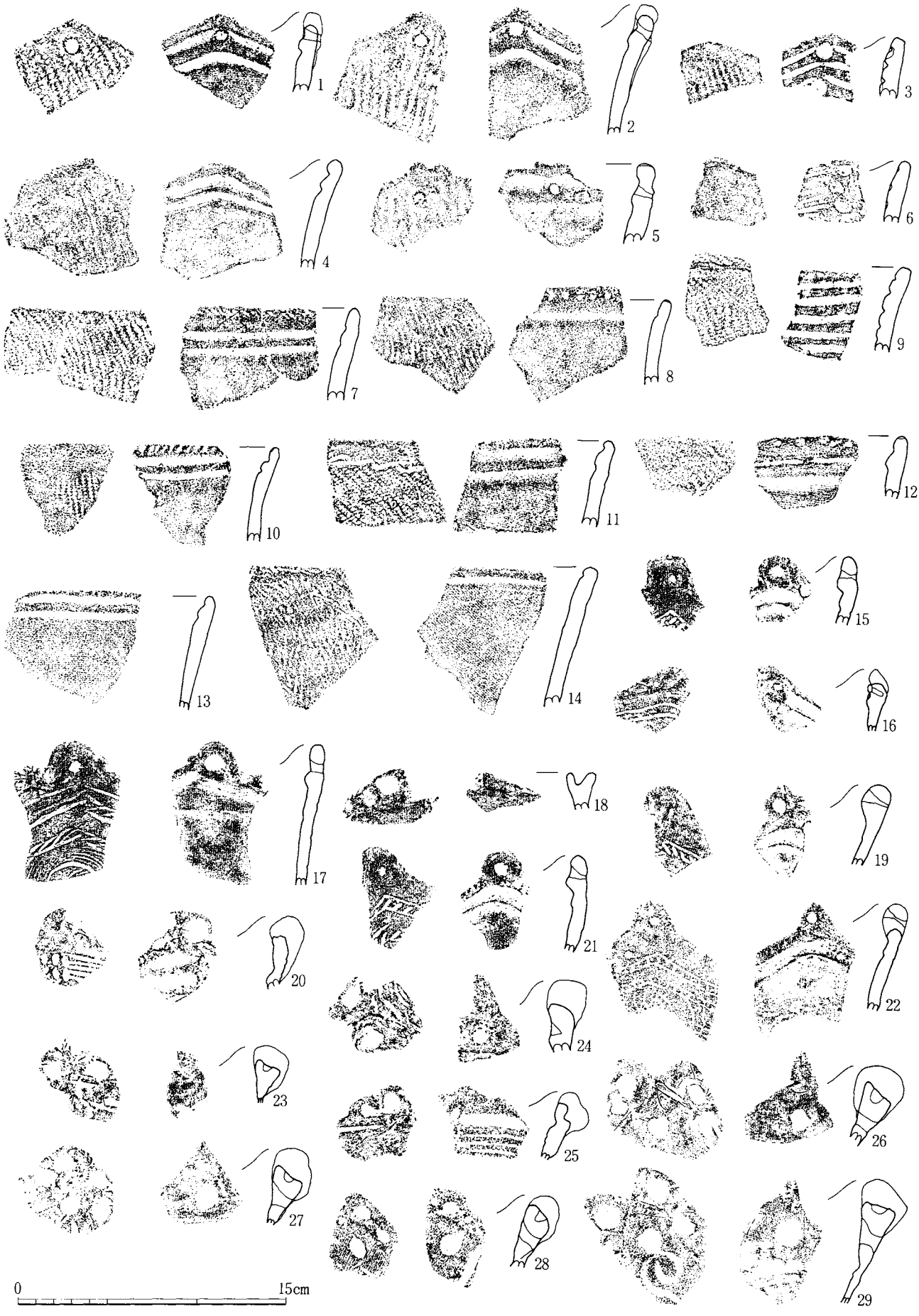


図版134　土器拓本　後期中葉



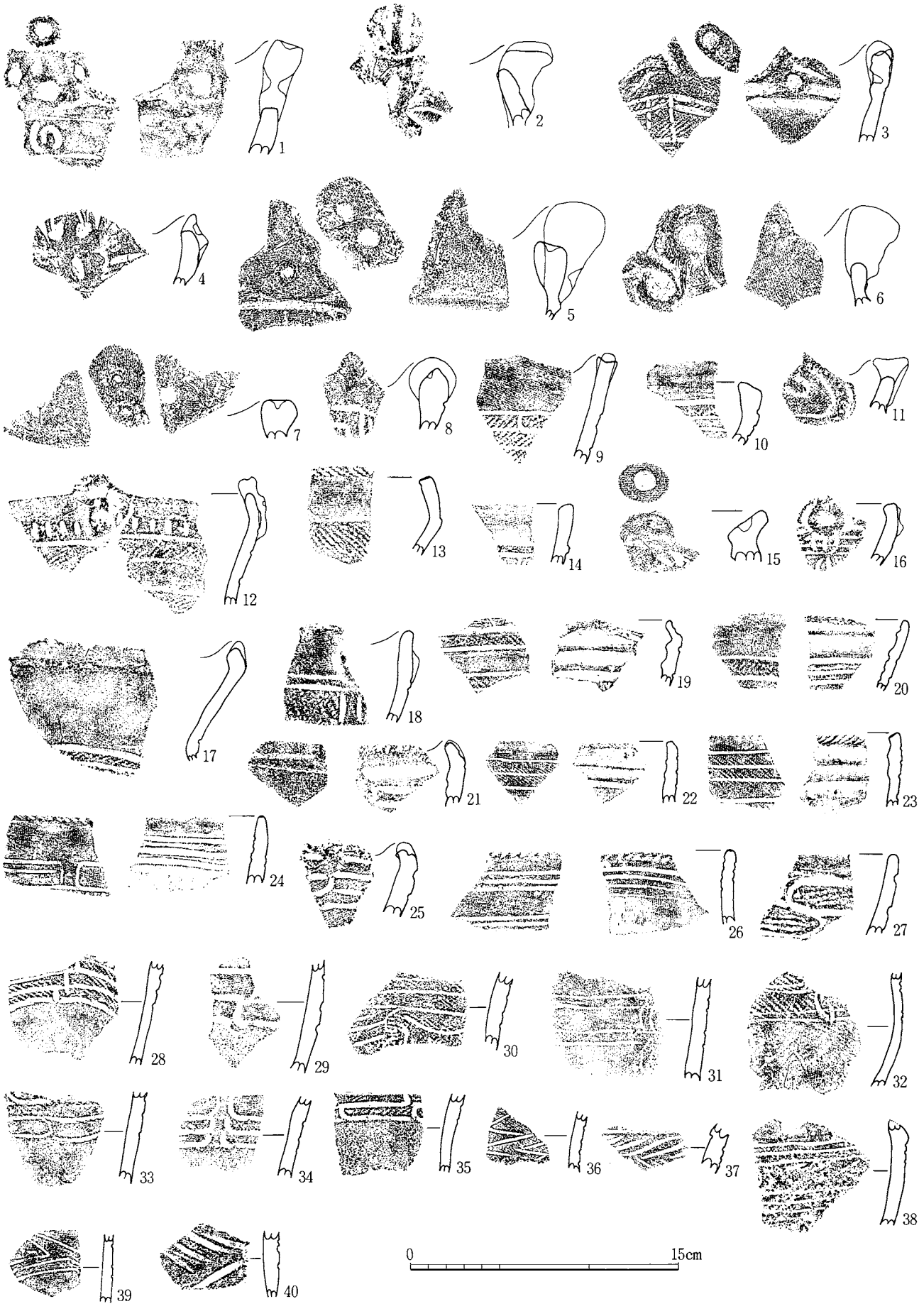
図版135　土器拓本　後期中葉

図版136　土器拓本　後期中葉

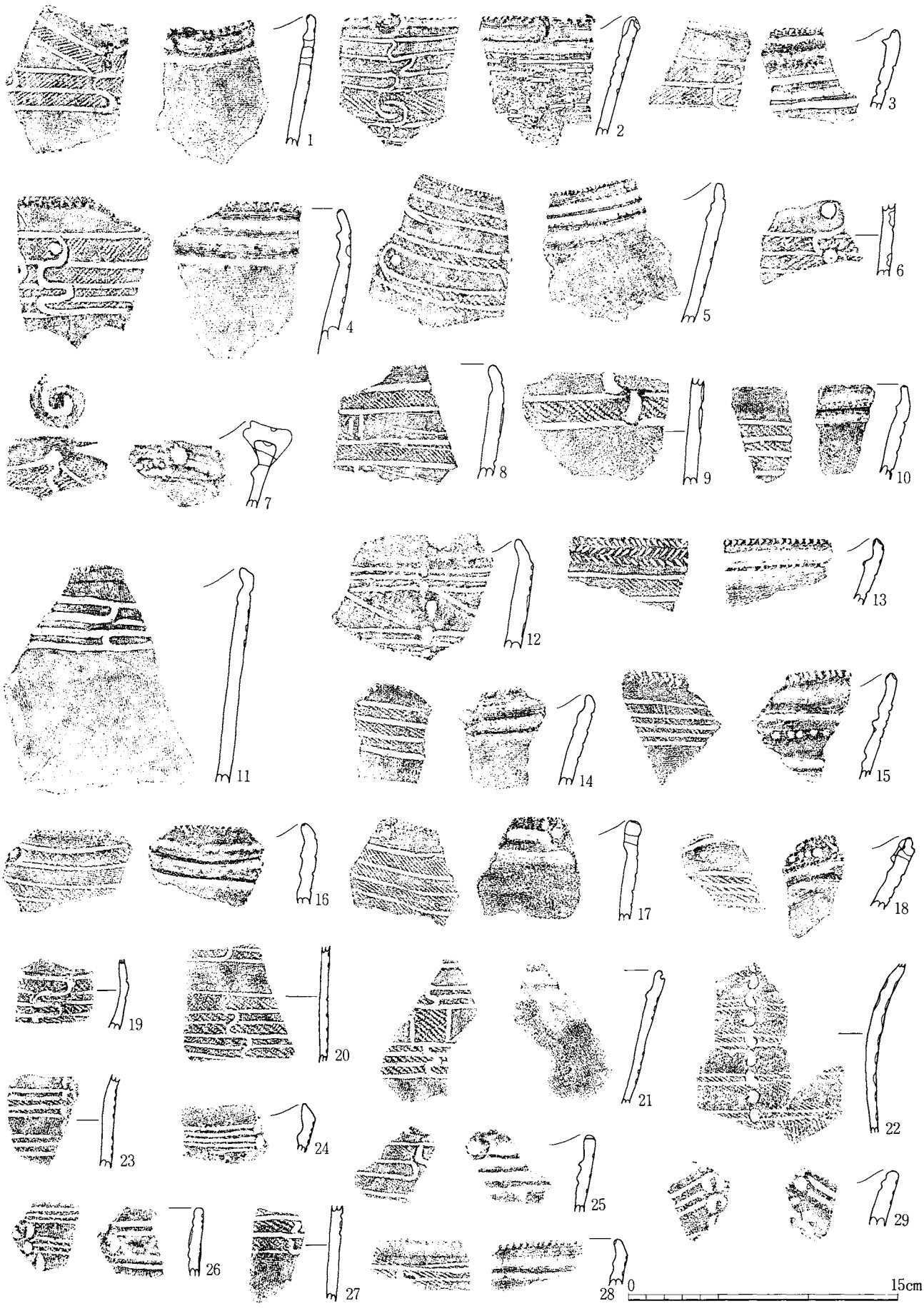


図版137　土器拓本　後期中葉

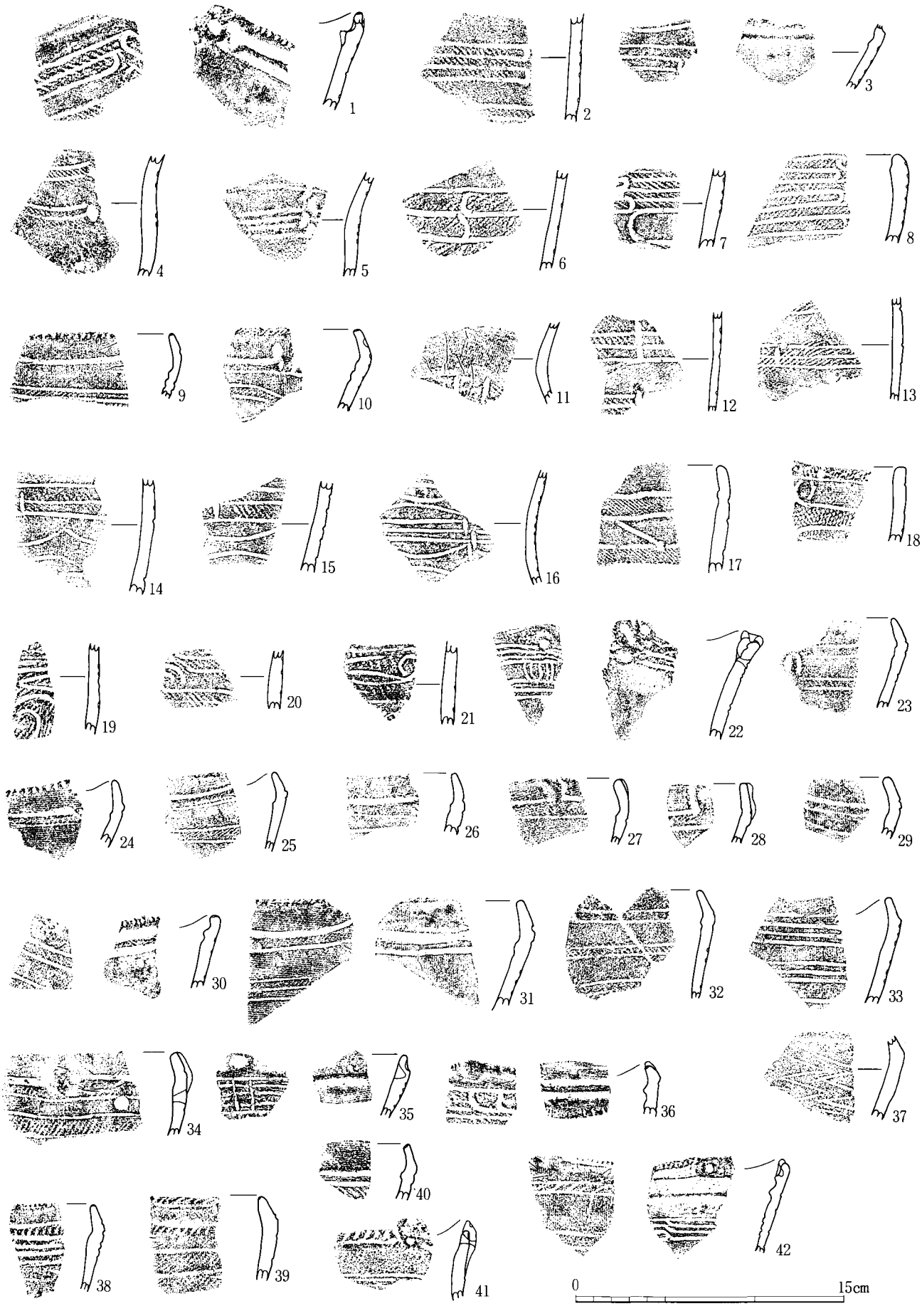
図版138　土器拓本　後期中葉



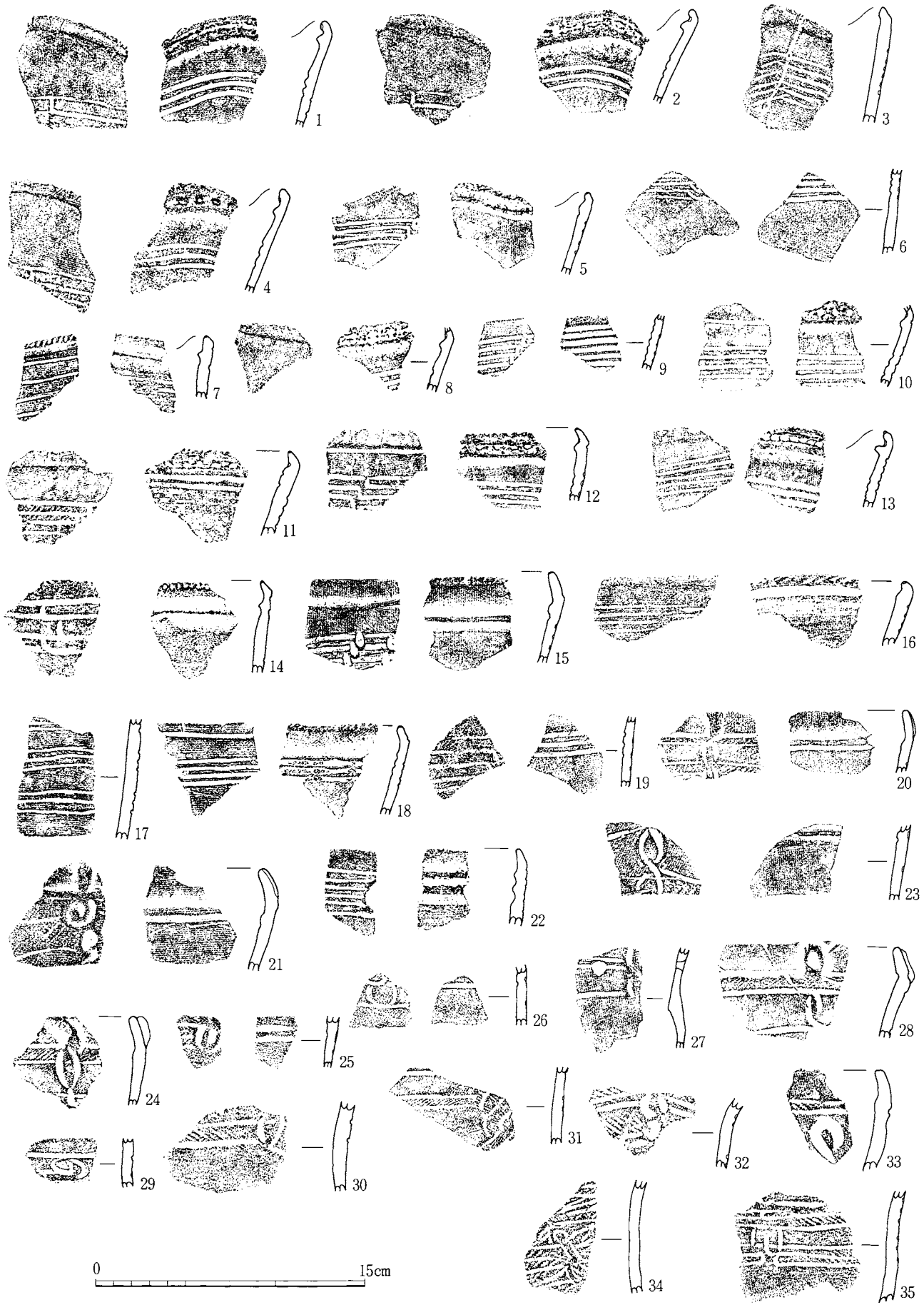
図版139　土器拓本　後期中葉



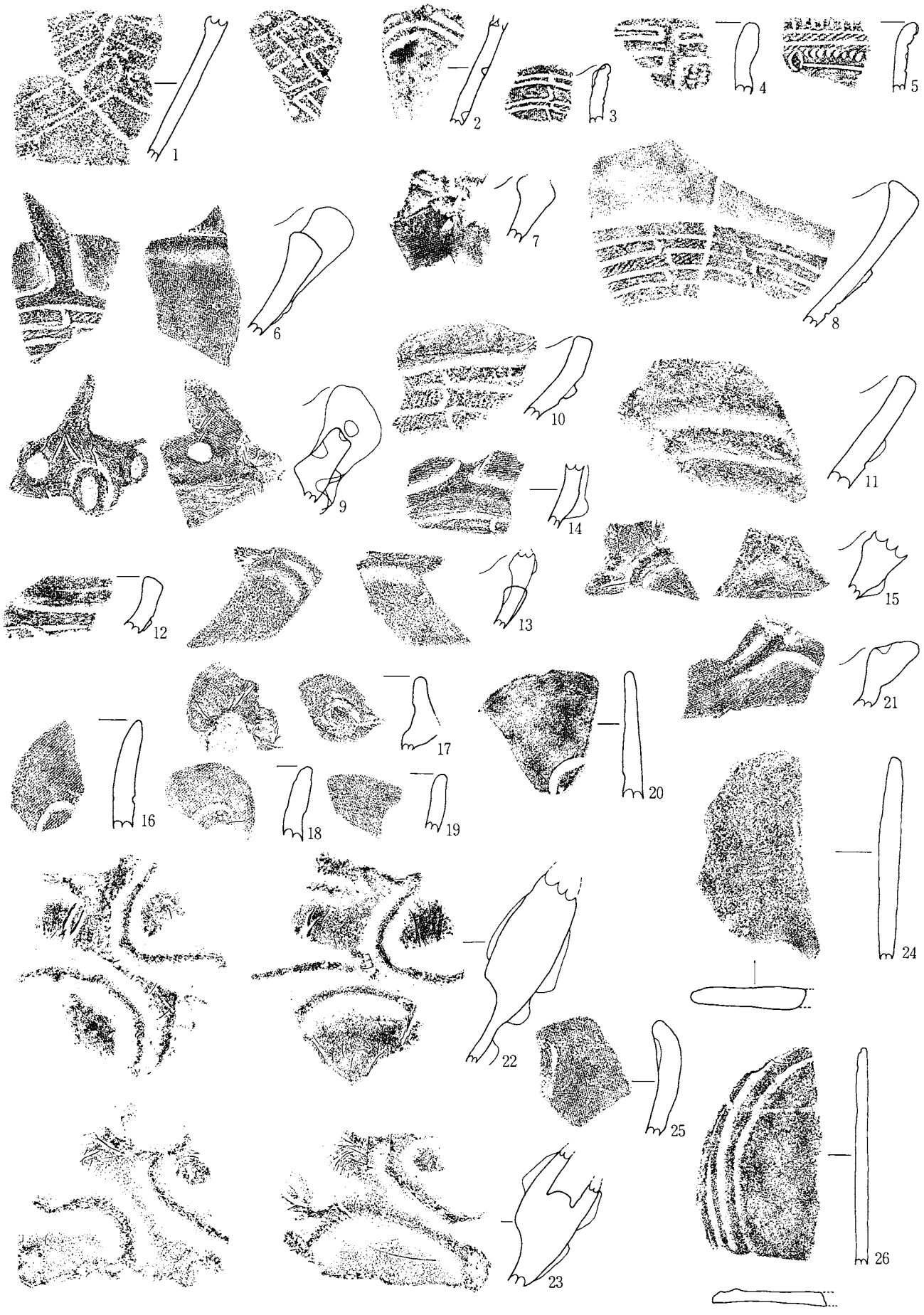
図版140　土器拓本　後期中葉



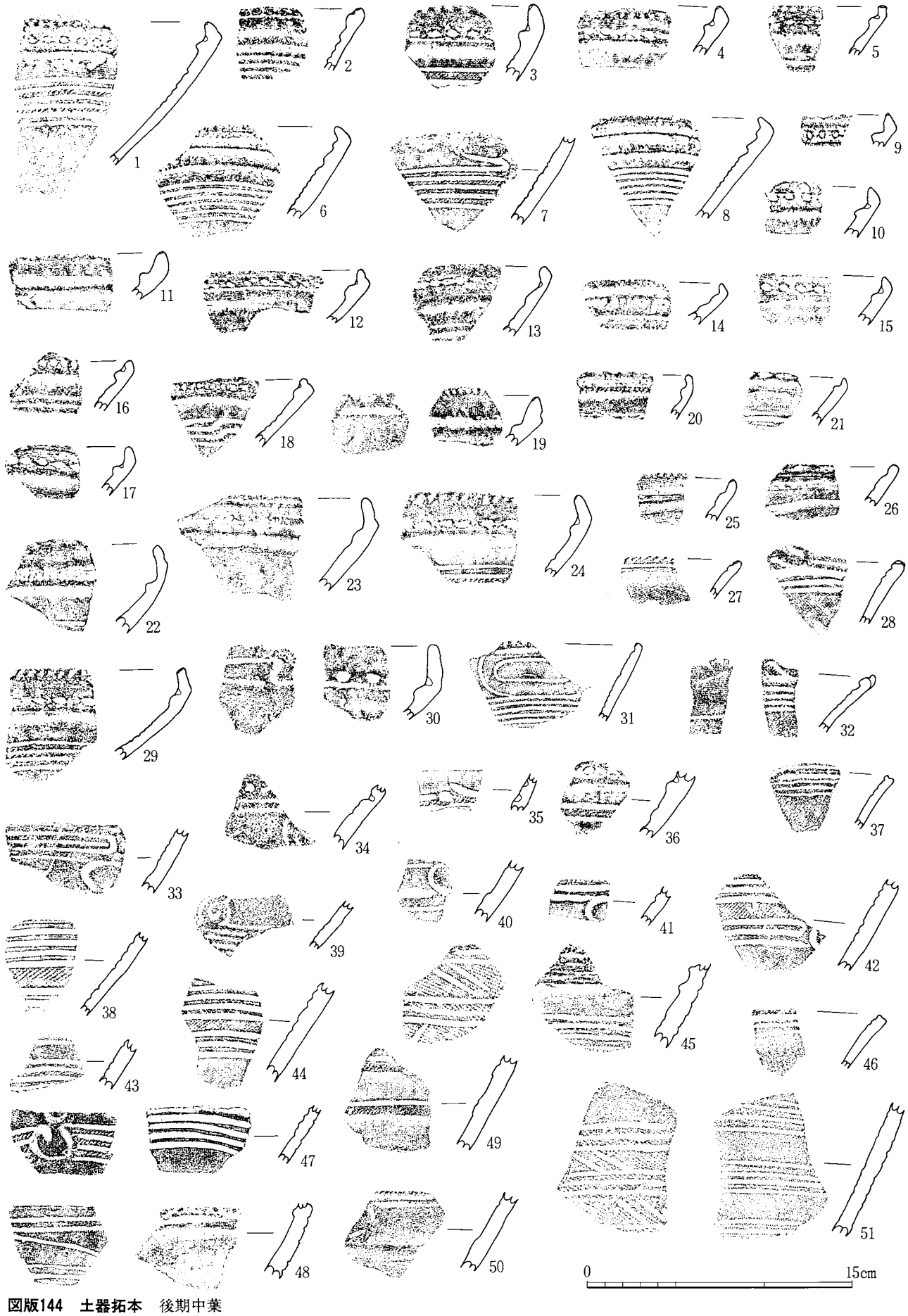
図版141　土器拓本　後期中葉



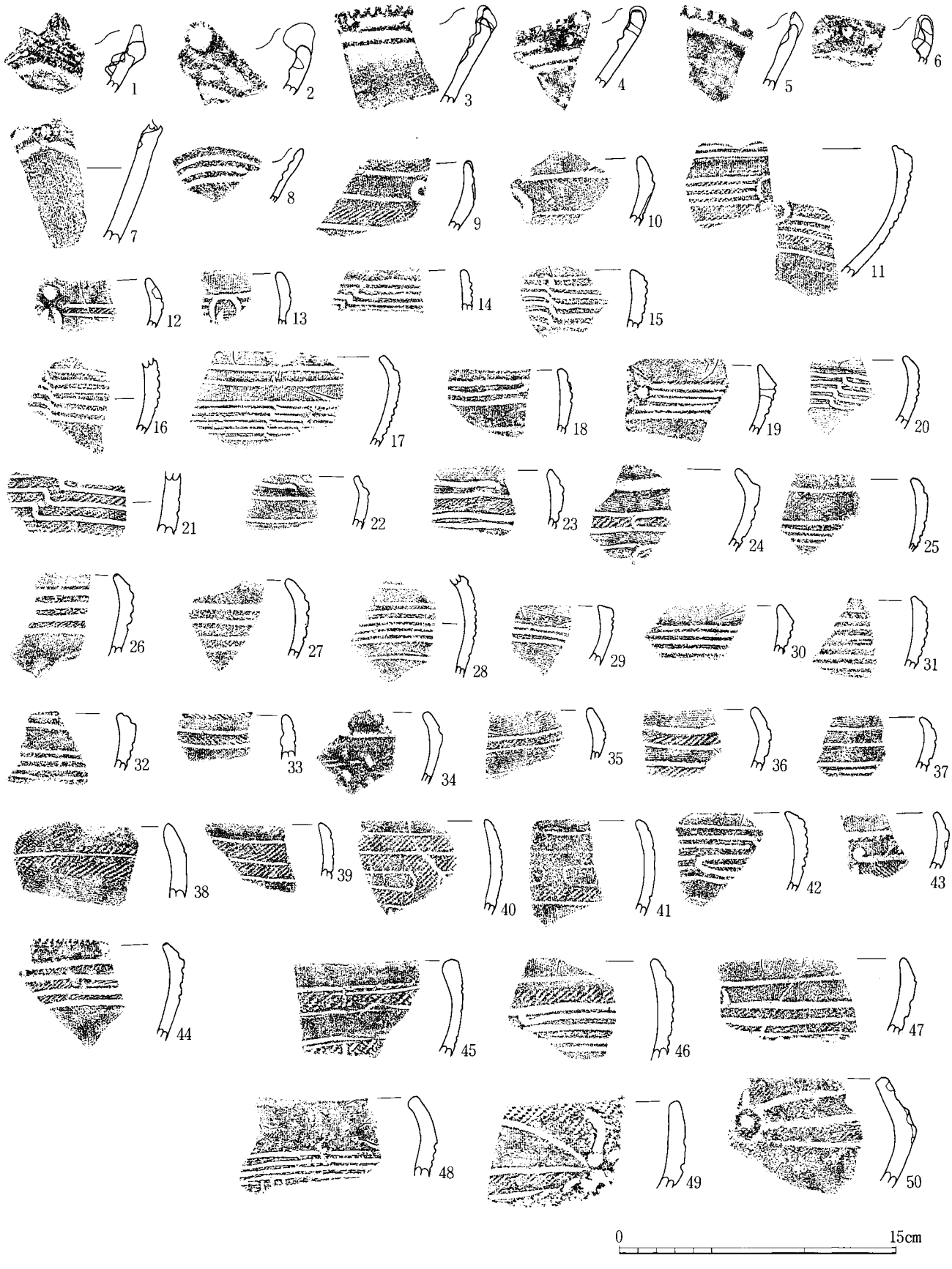
図版142　土器拓本　後期中葉



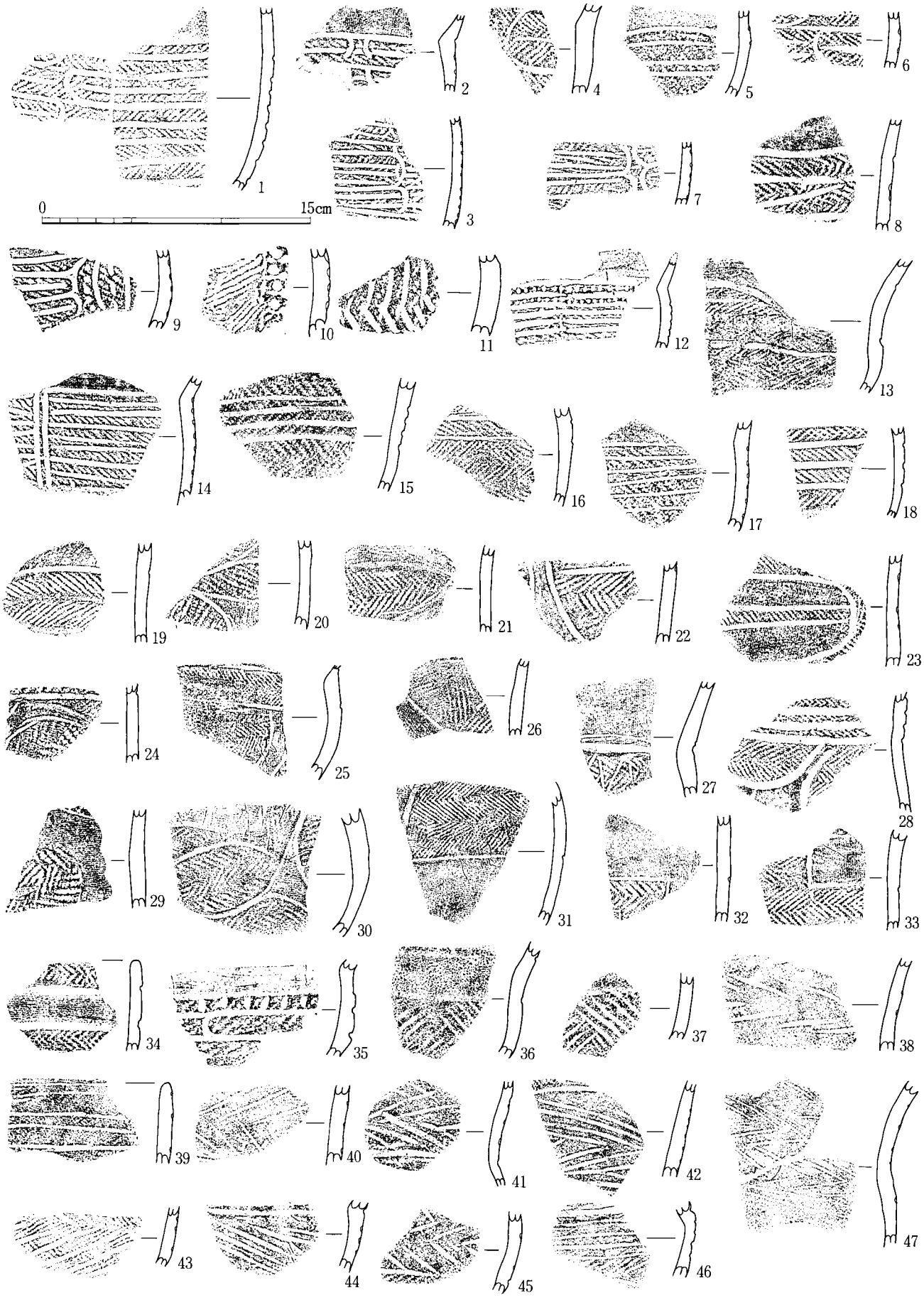
図版143　土器拓本　後期中葉



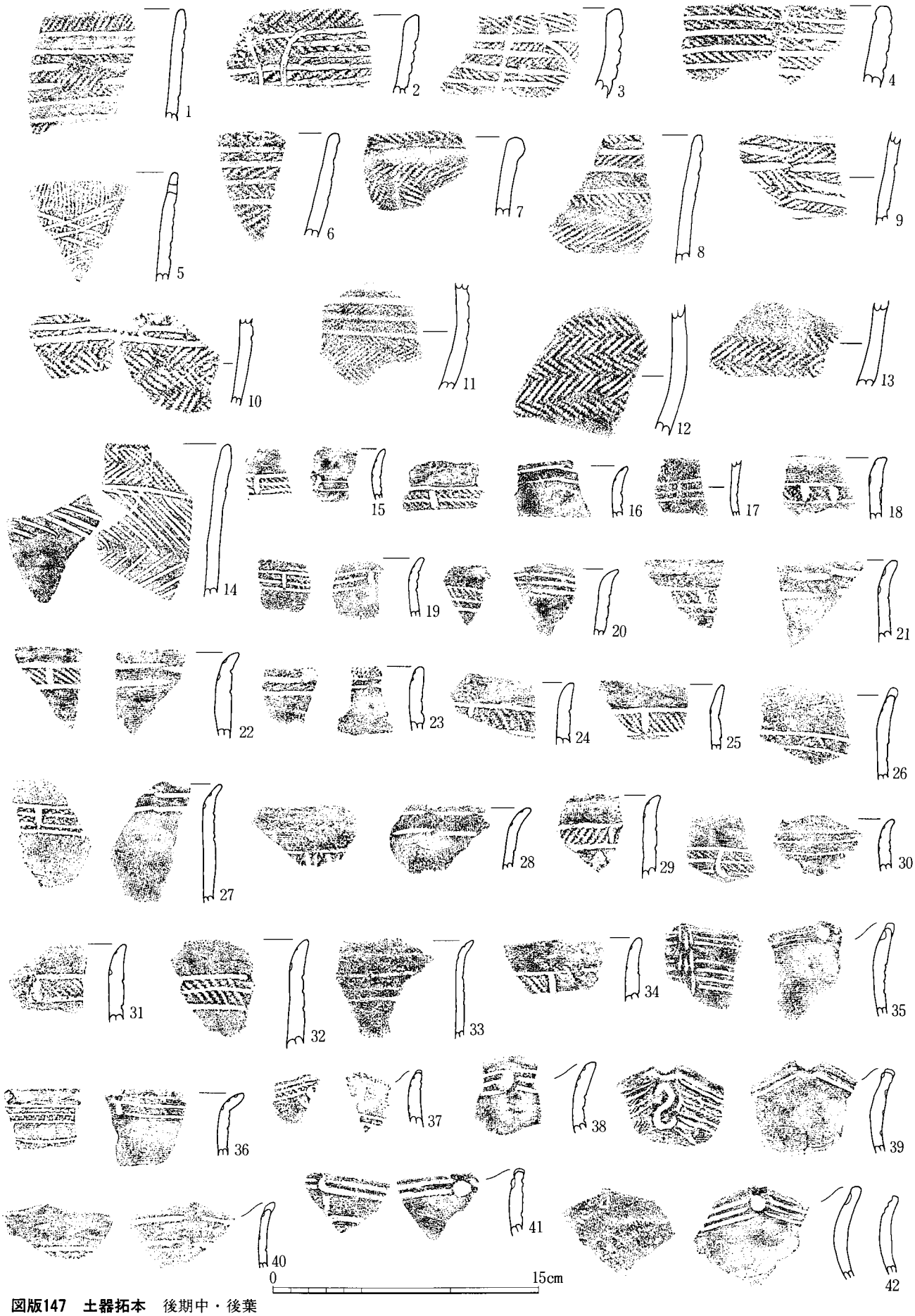
図版144　土器拓本　後期中葉



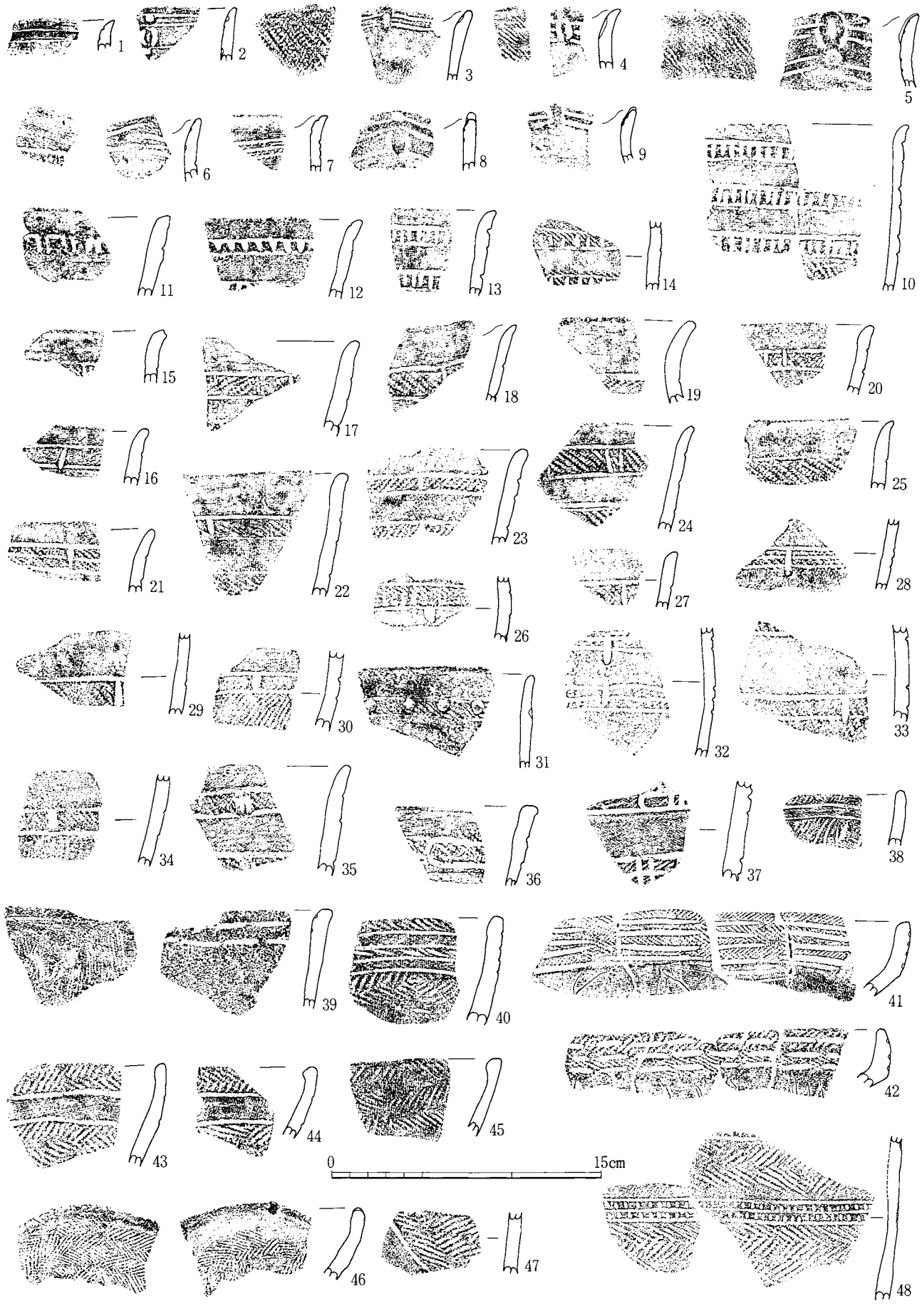
図版145　土器拓本　後期中葉



図版146　土器拓本　後期中・後葉

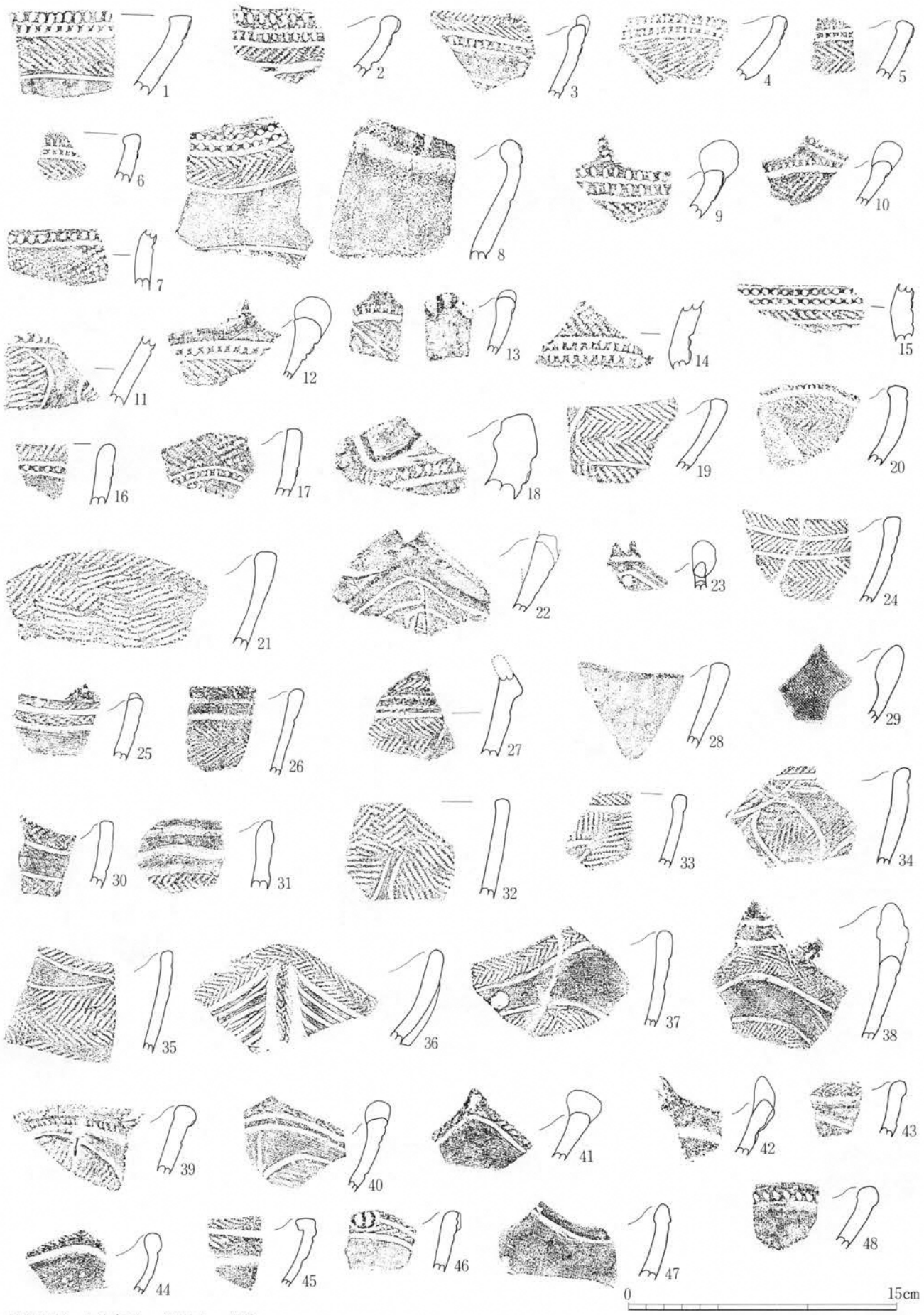


図版147　土器拓本　後期中・後葉

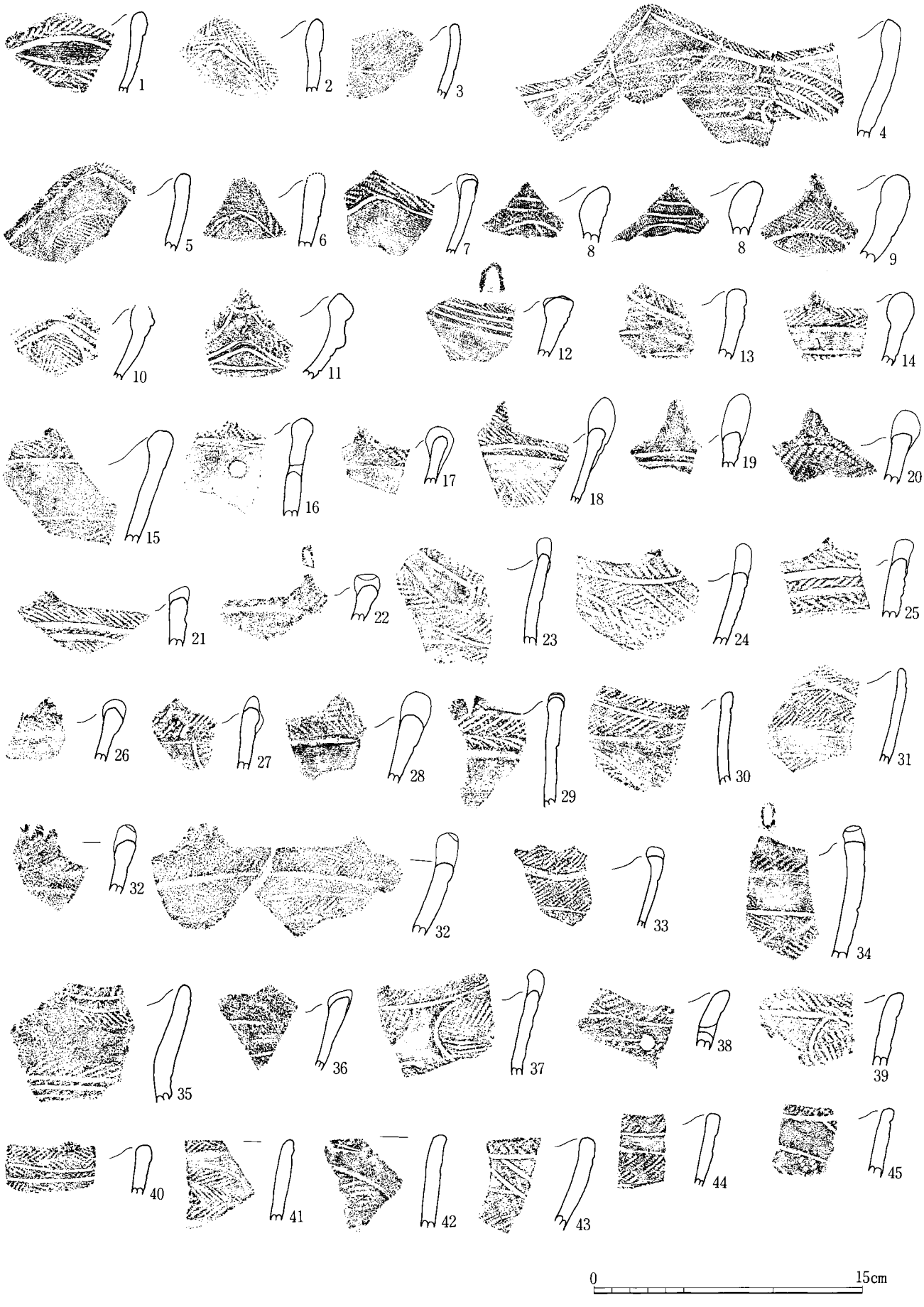


図版148　土器拓本　後期中・後葉

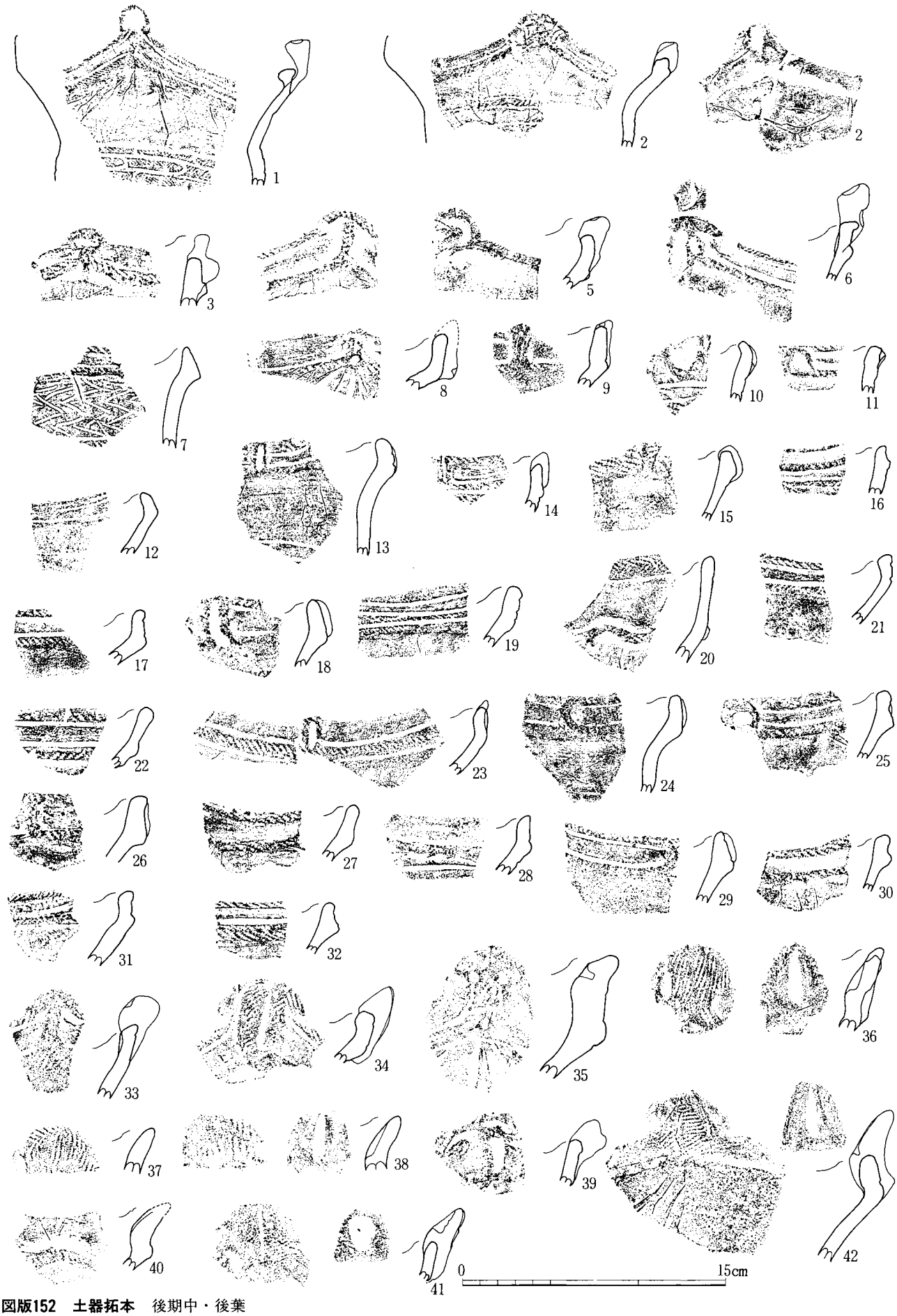
図版149　土器拓本　後期中・後葉



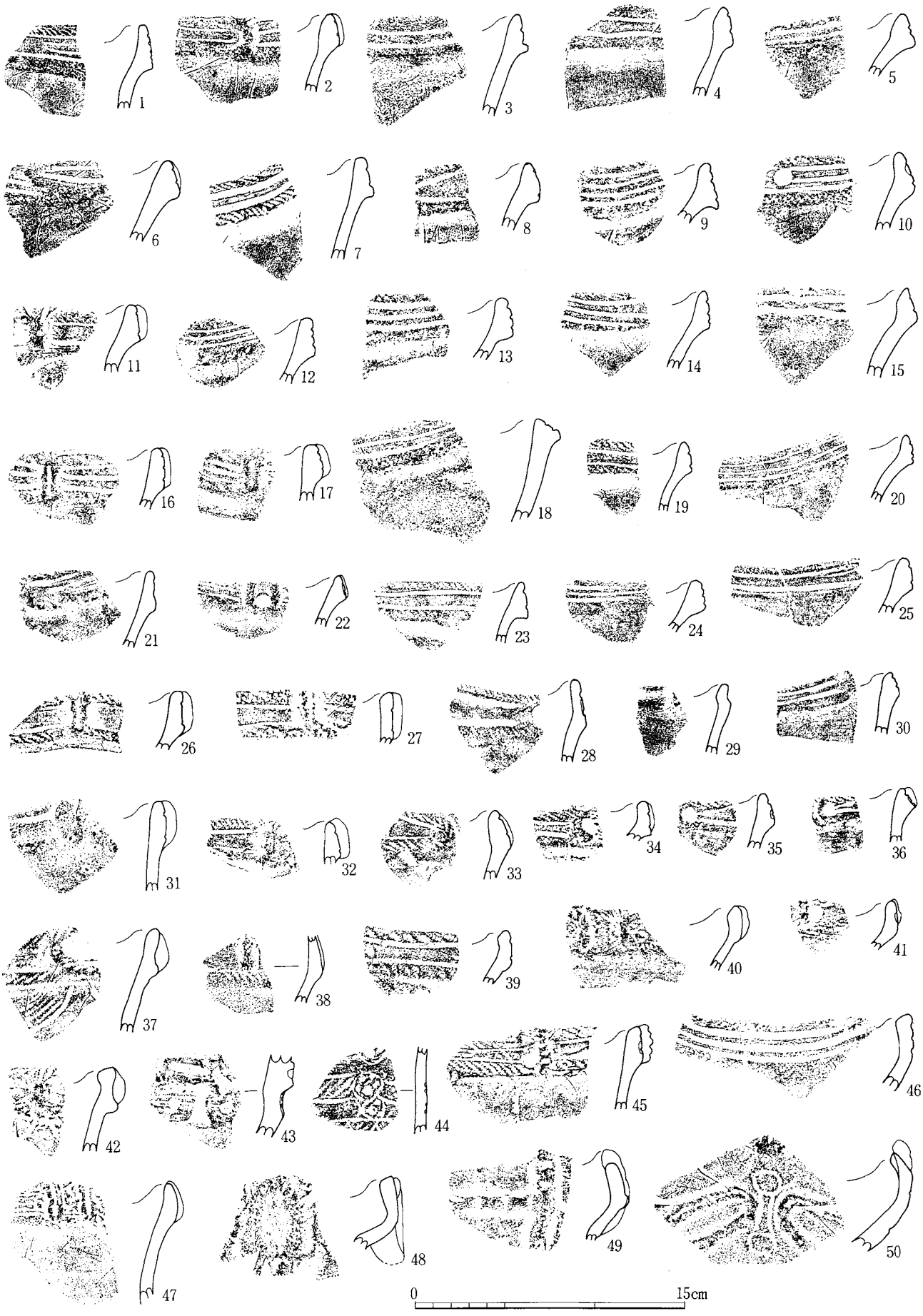
図版150　土器拓本　後期中・後葉



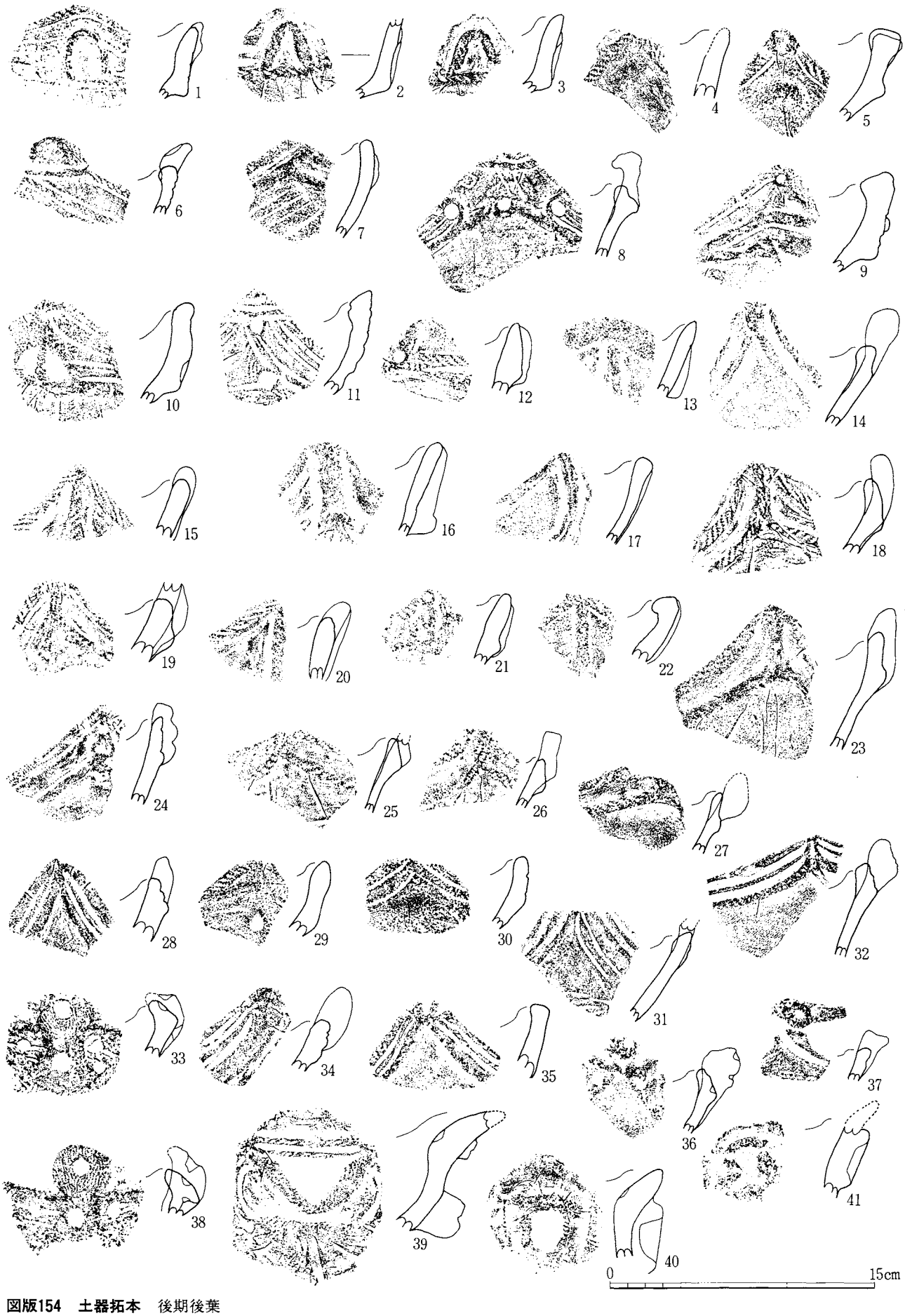
図版151　土器拓本　後期中・後葉



図版152　土器拓本　後期中・後葉



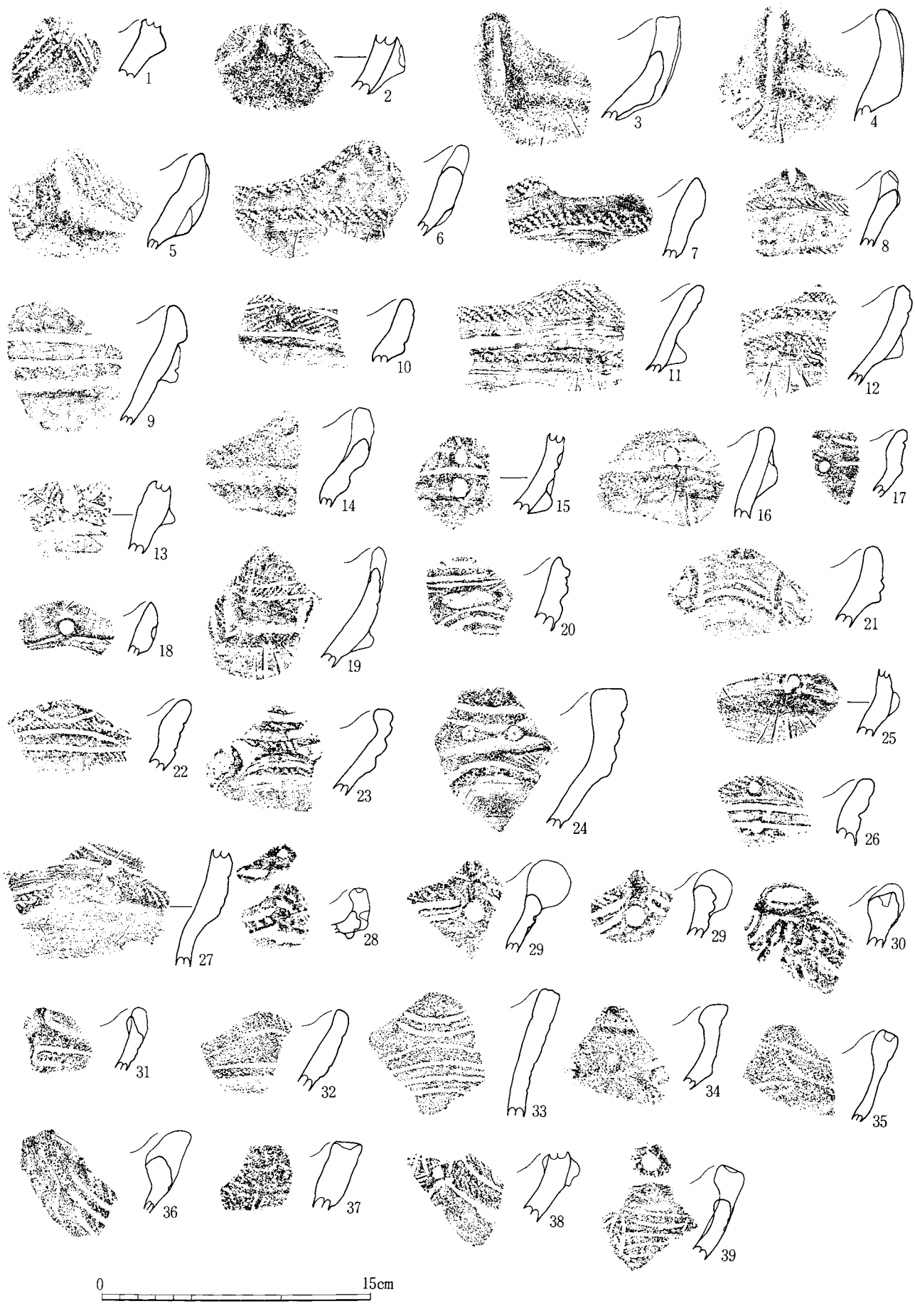
図版153　土器拓本　後期後葉



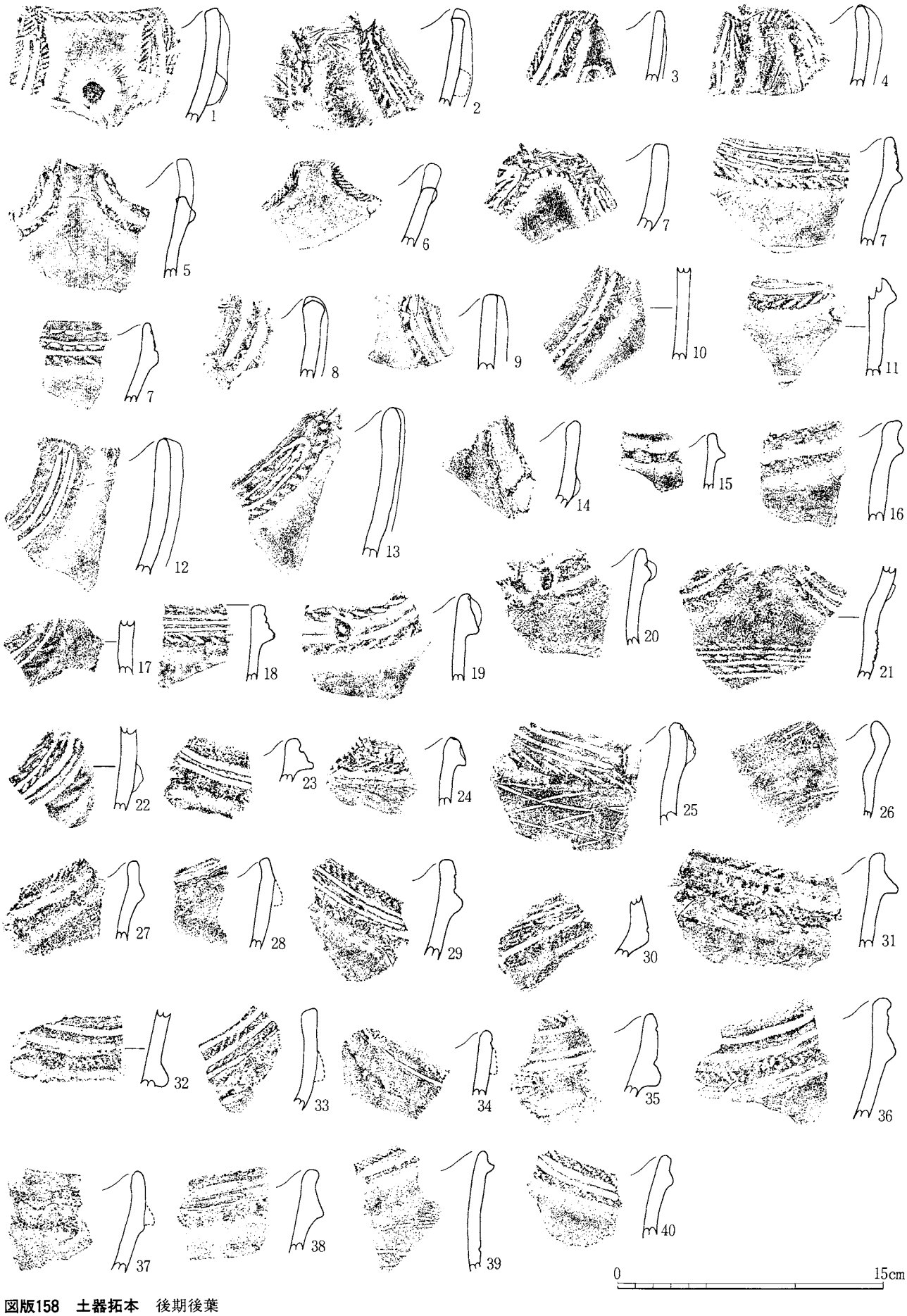
図版154　土器拓本　後期後葉

図版155　土器拓本　後期後葉

図版156　土器拓本　後期後葉

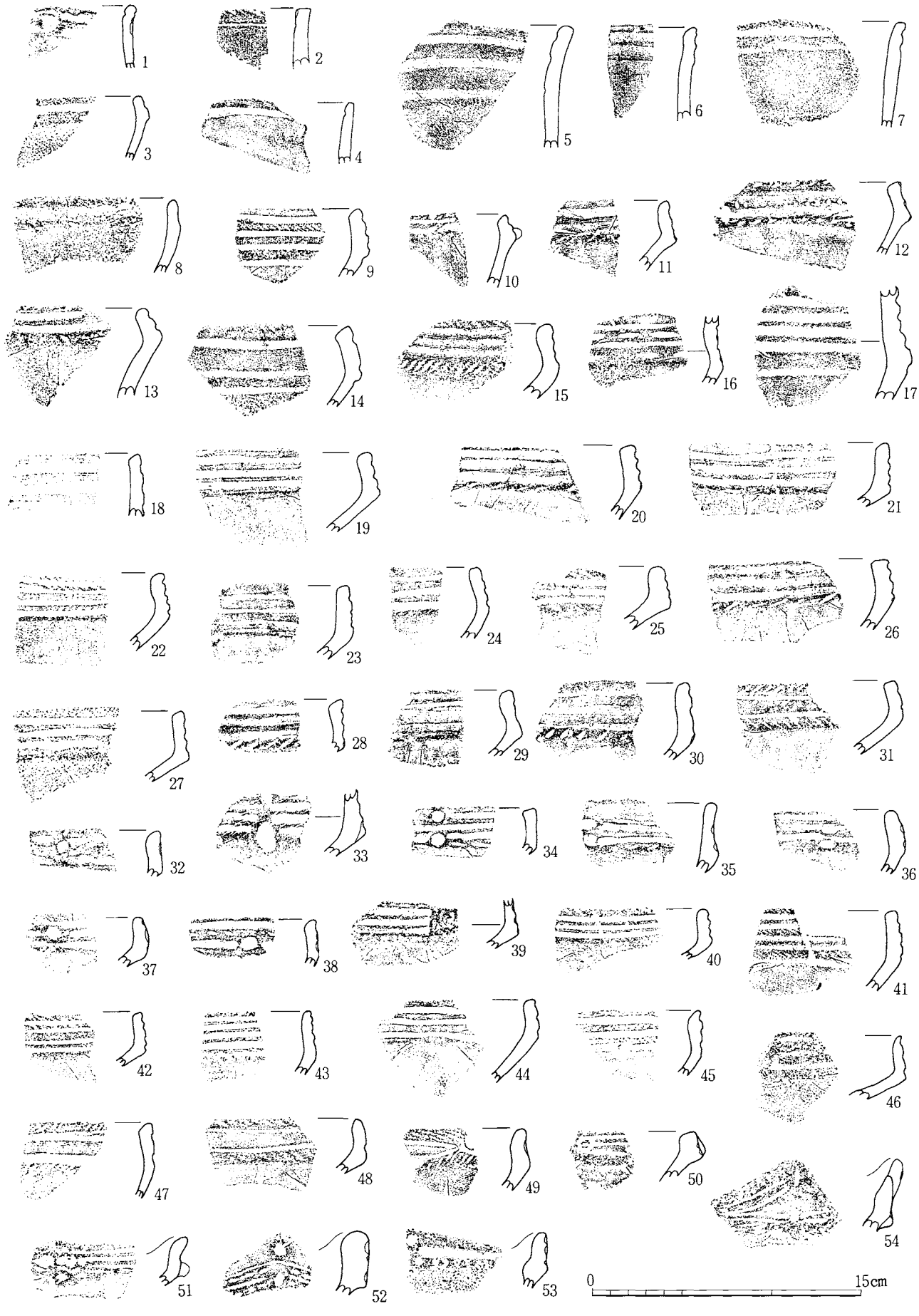


図版157　土器拓本　後期後葉

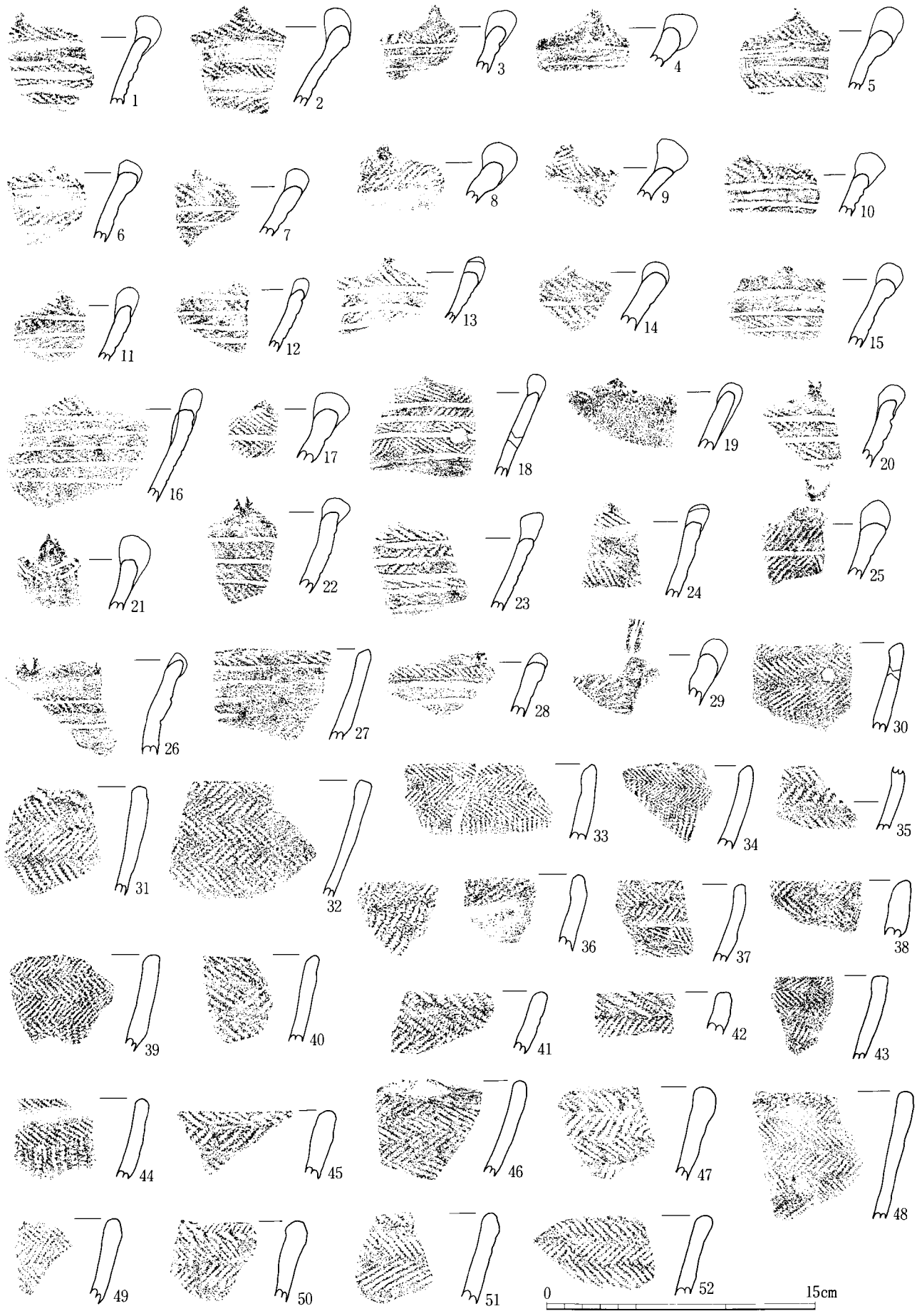


図版158　土器拓本　後期後葉

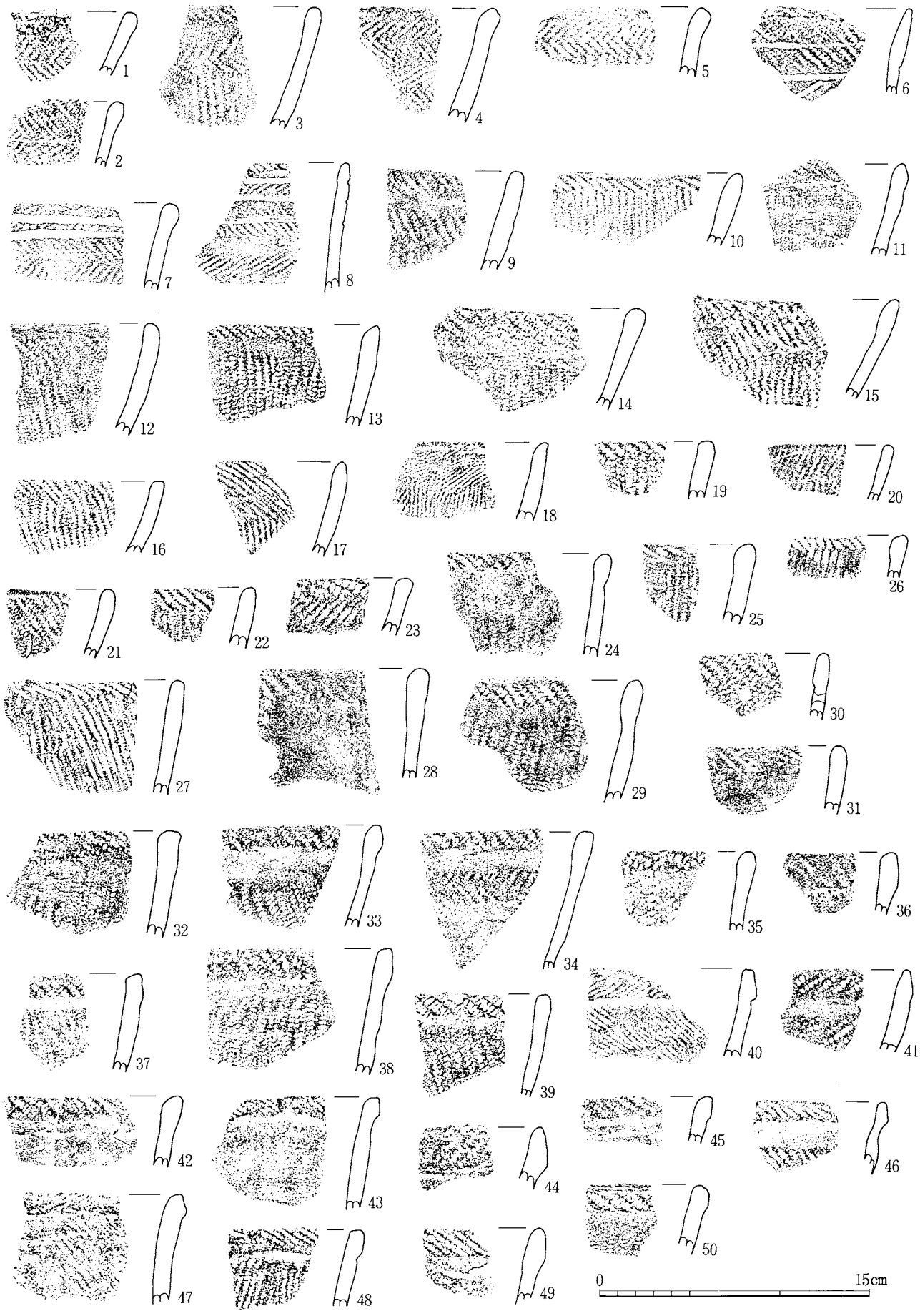
図版159　土器拓本　後期中・後葉



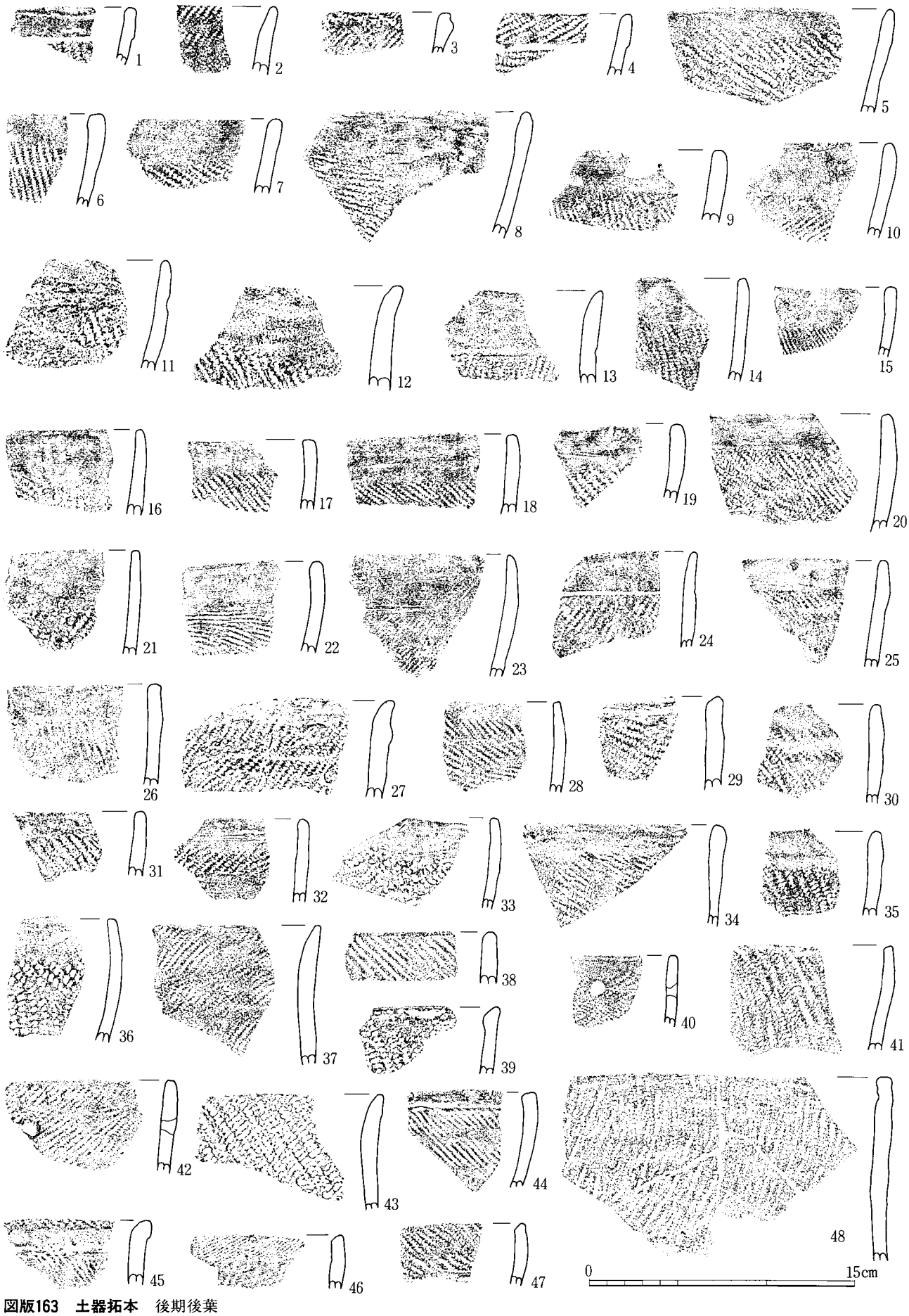
図版160　土器拓本　後期後葉



図版161　土器拓本　後期後葉

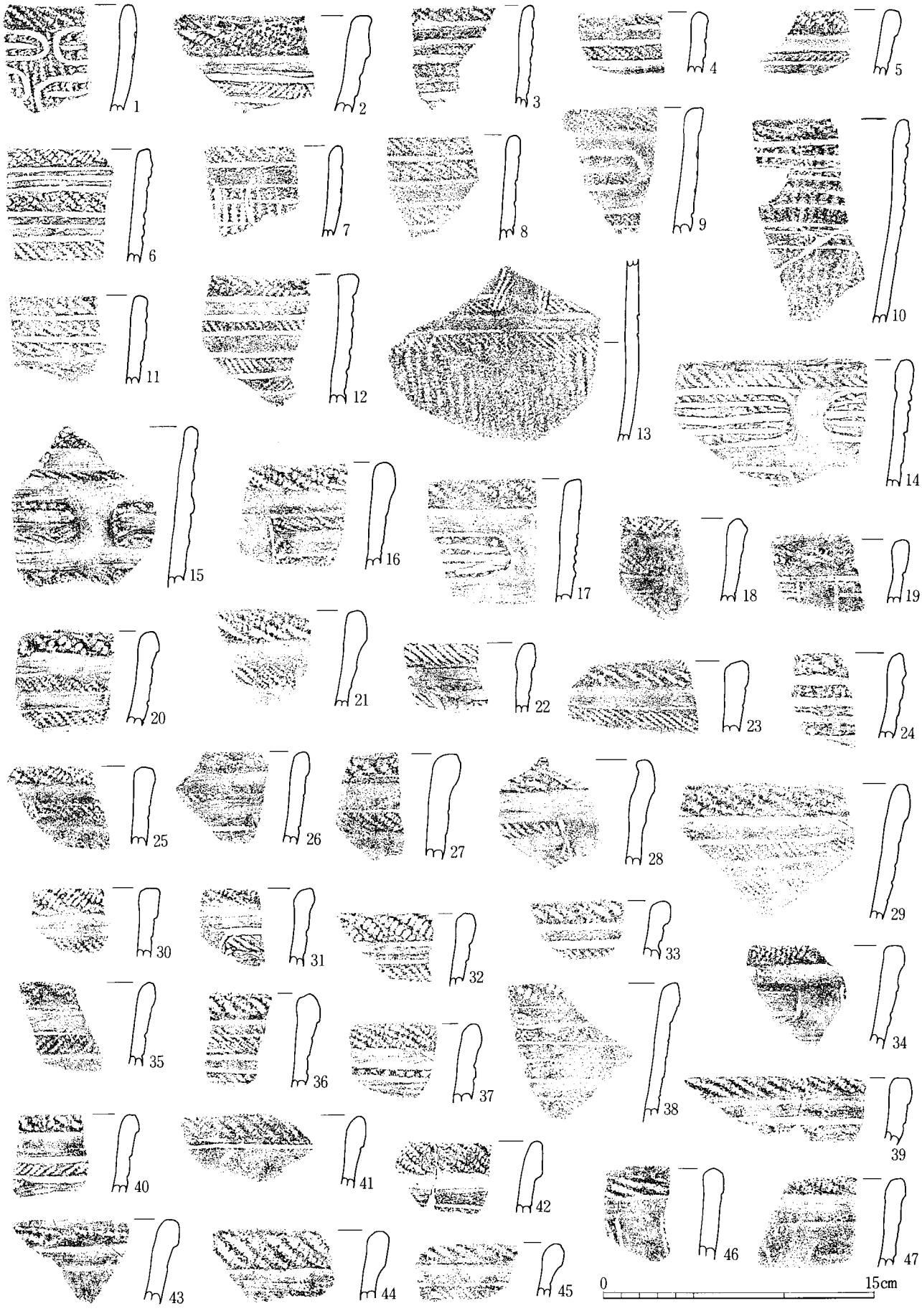


図版162　土器拓本　後期後葉

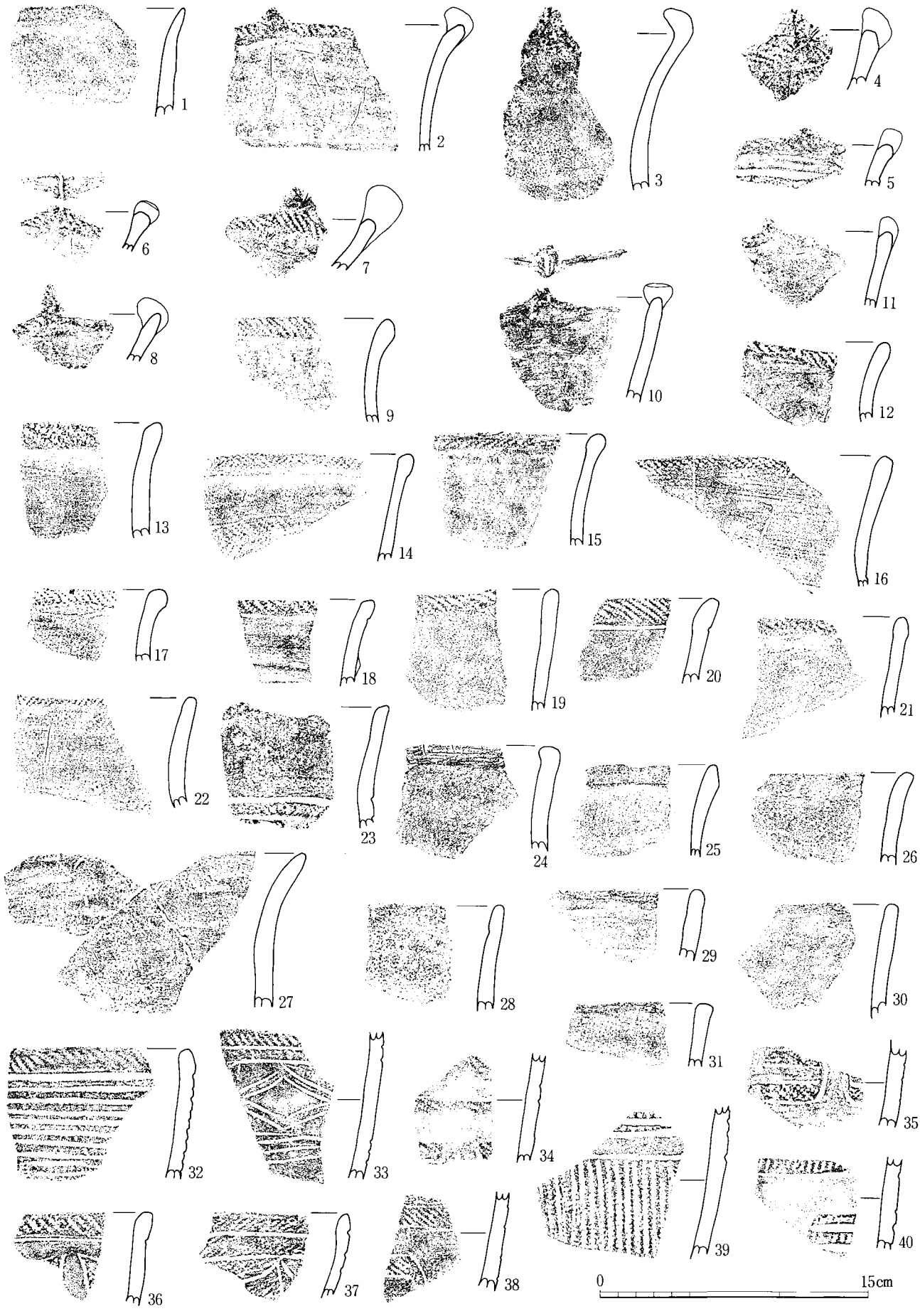


図版163　土器拓本　後期後葉

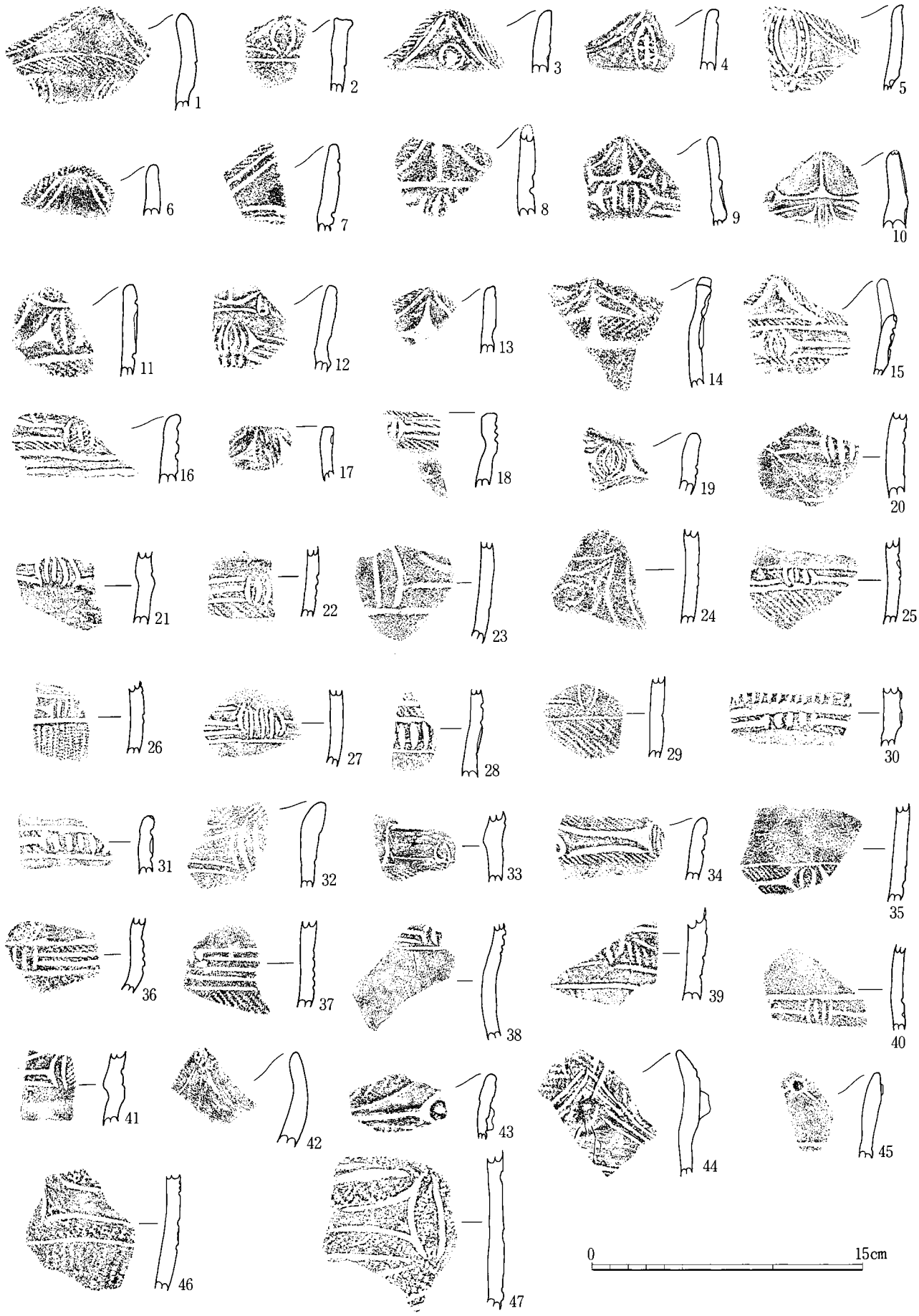
図版164　土器拓本　後期後葉



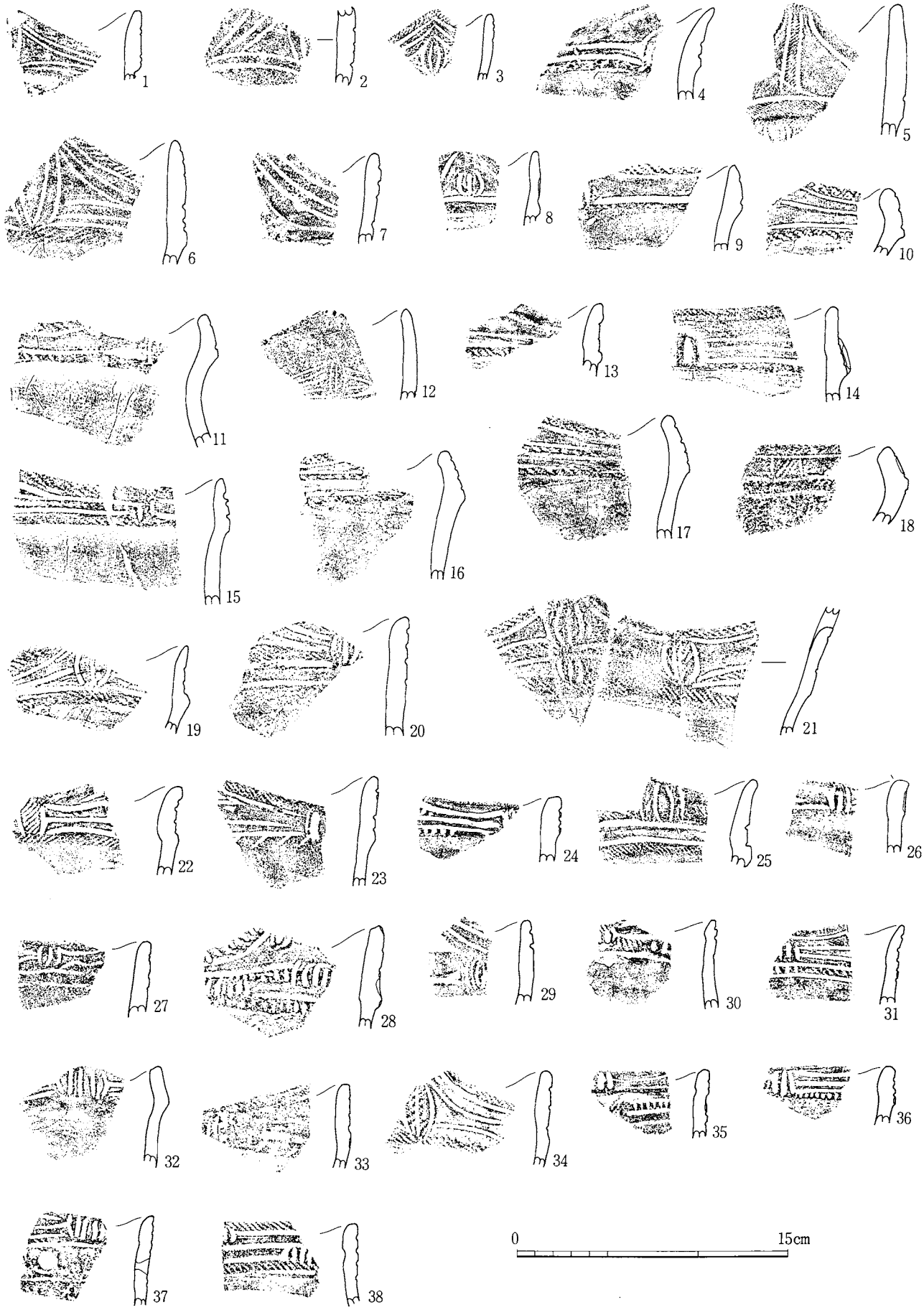
図版165　土器拓本　後期後葉



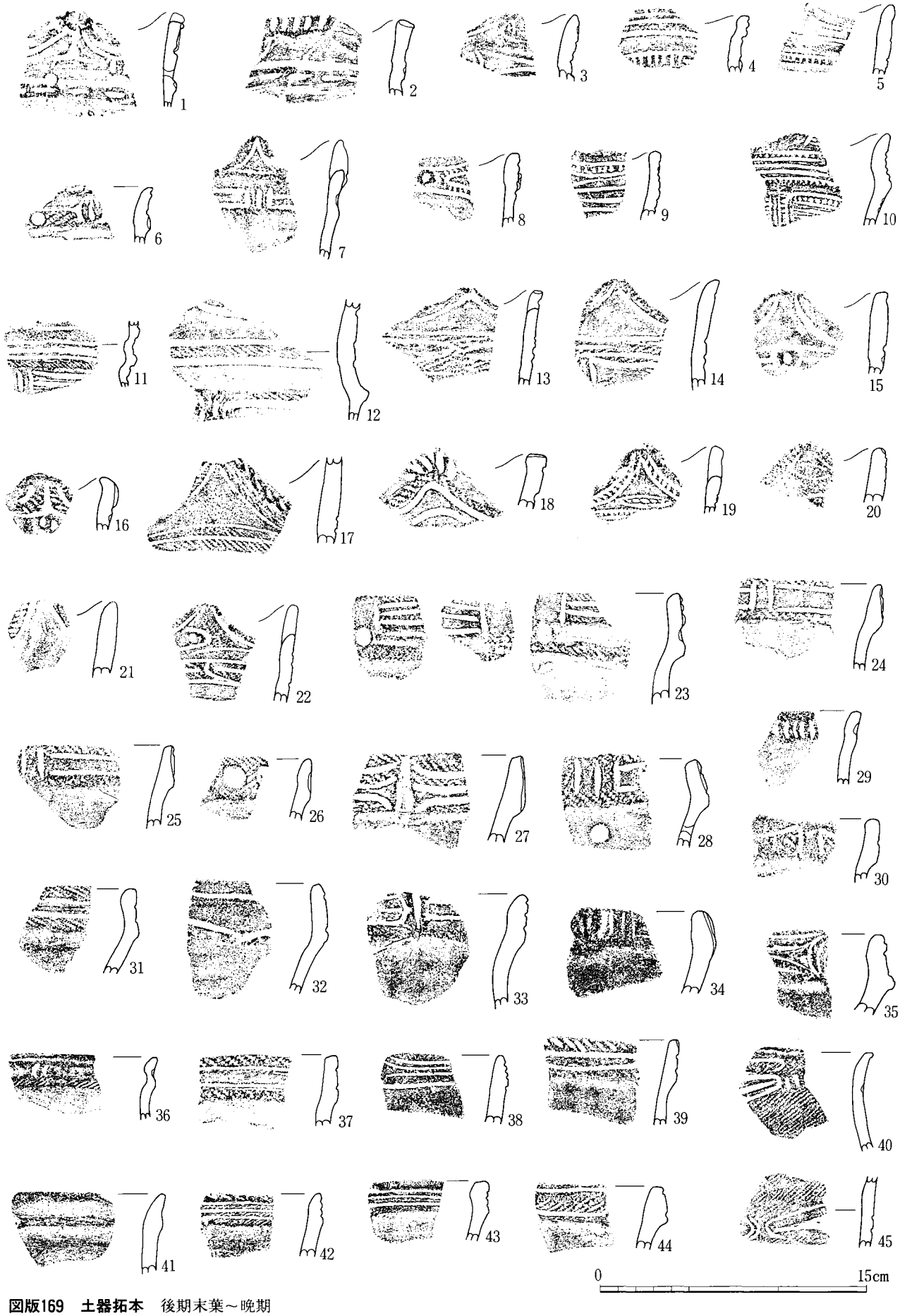
図版166　土器拓本　後期後葉



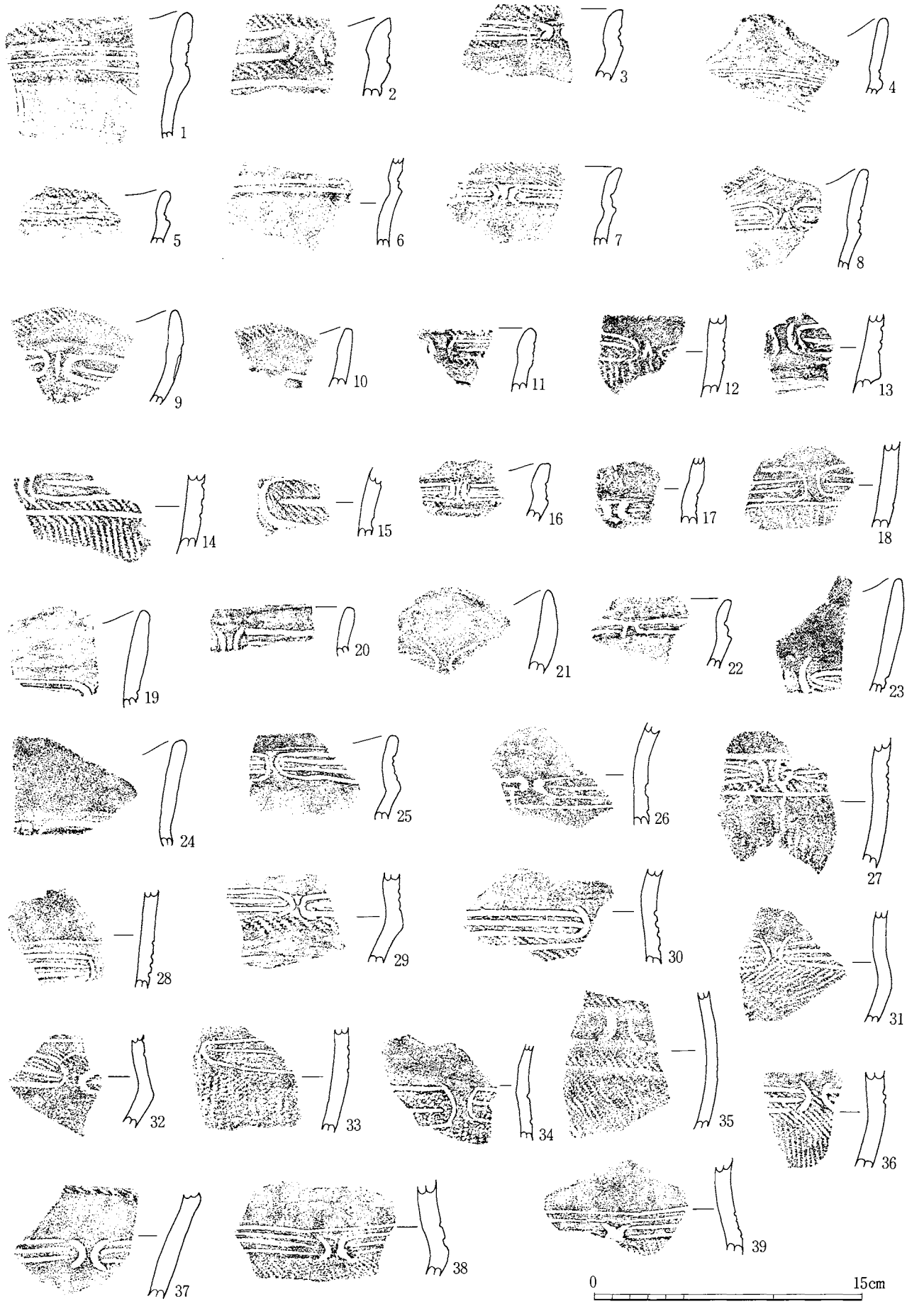
図版167　土器拓本　後期末葉



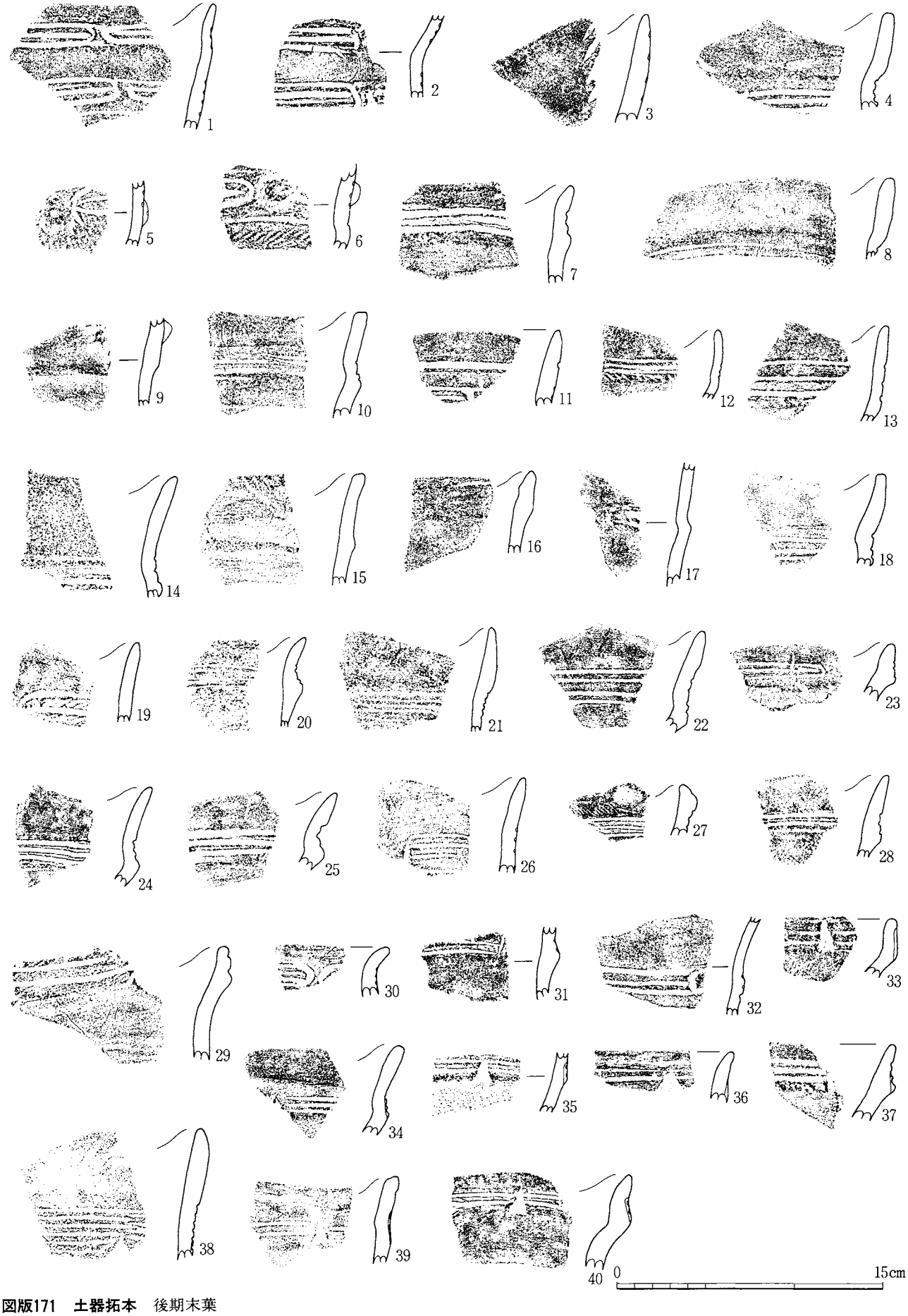
図版168　土器拓本　後期末葉



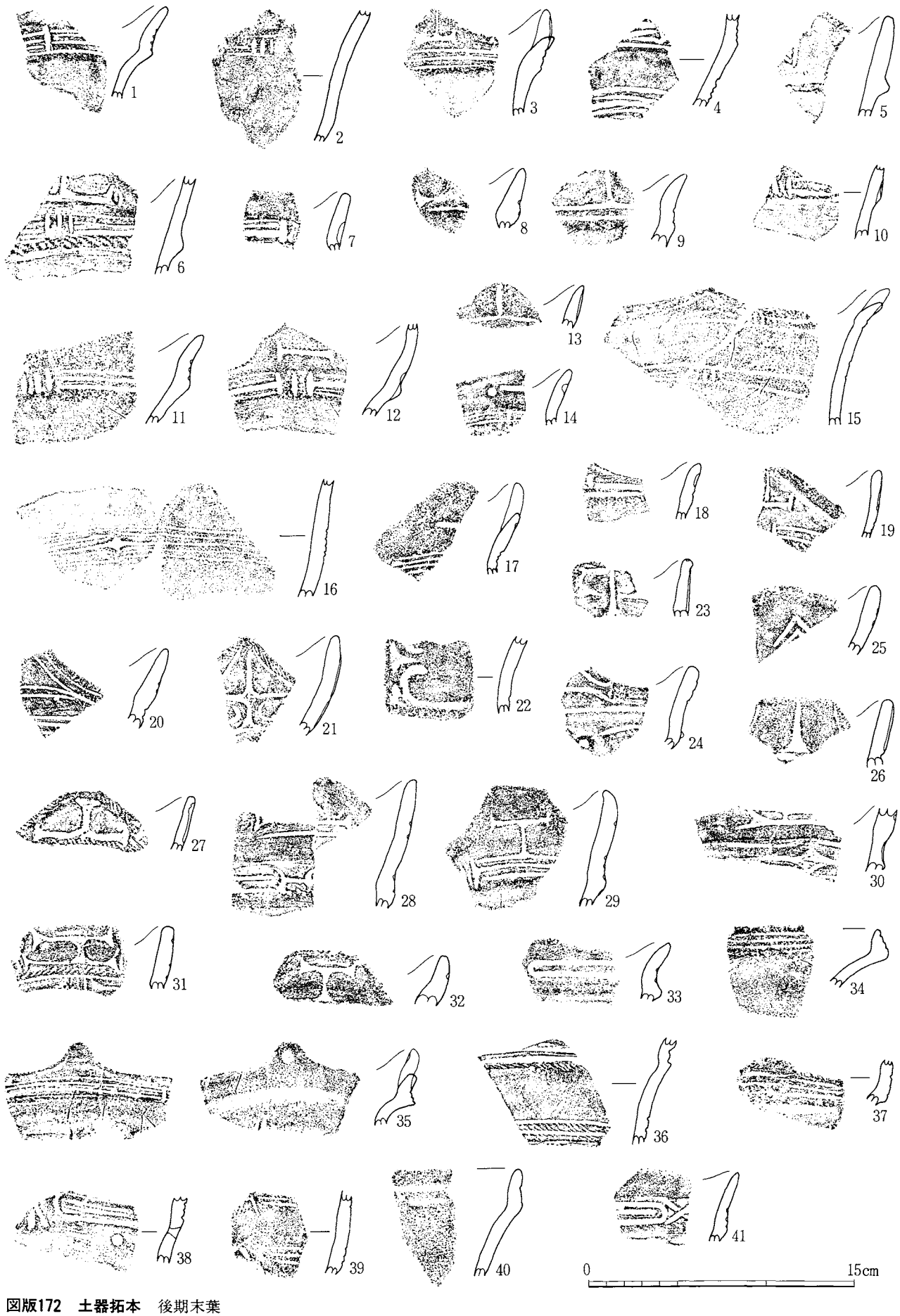
図版169　土器拓本　後期末葉～晩期



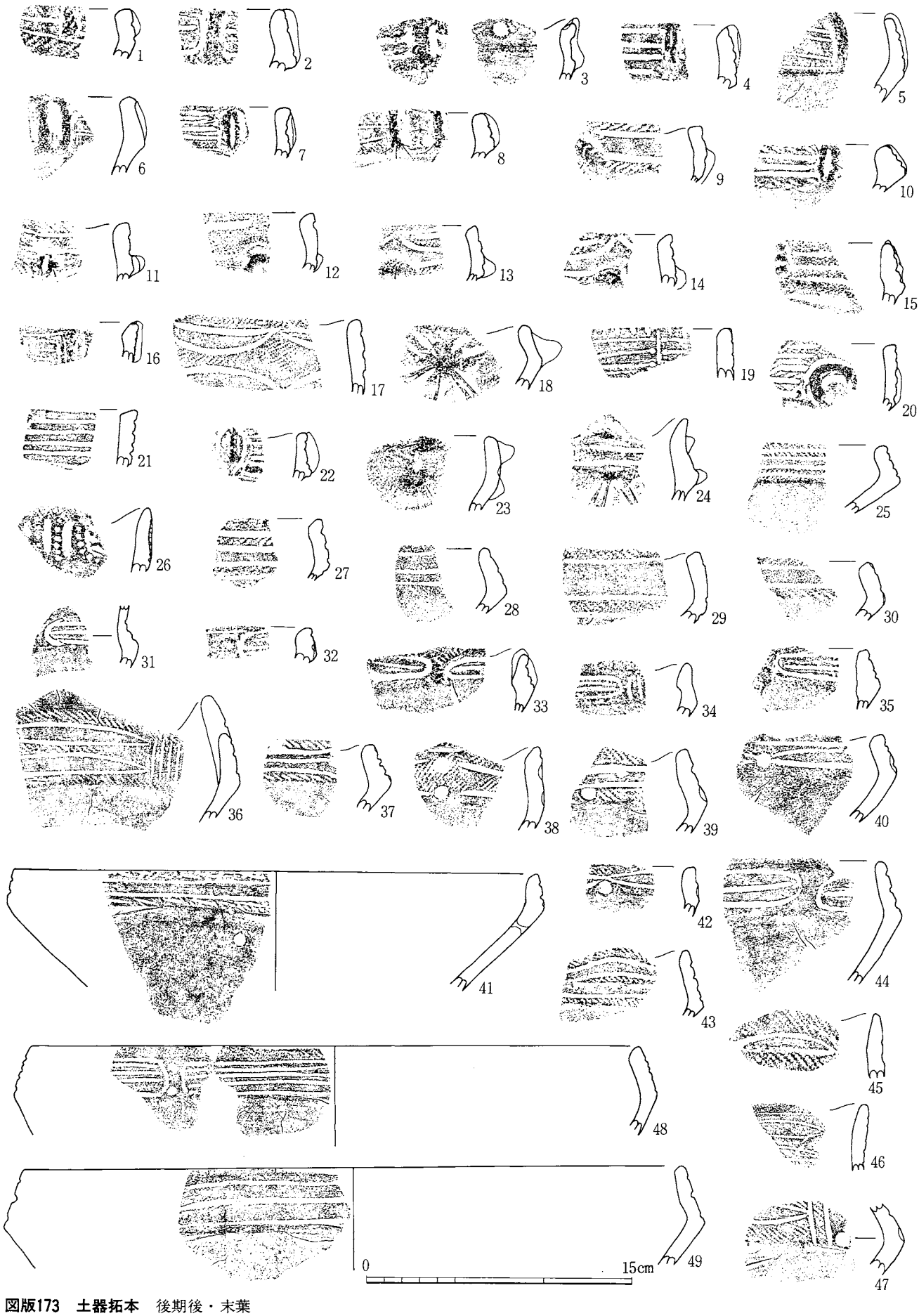
図版170　土器拓本　後期末葉



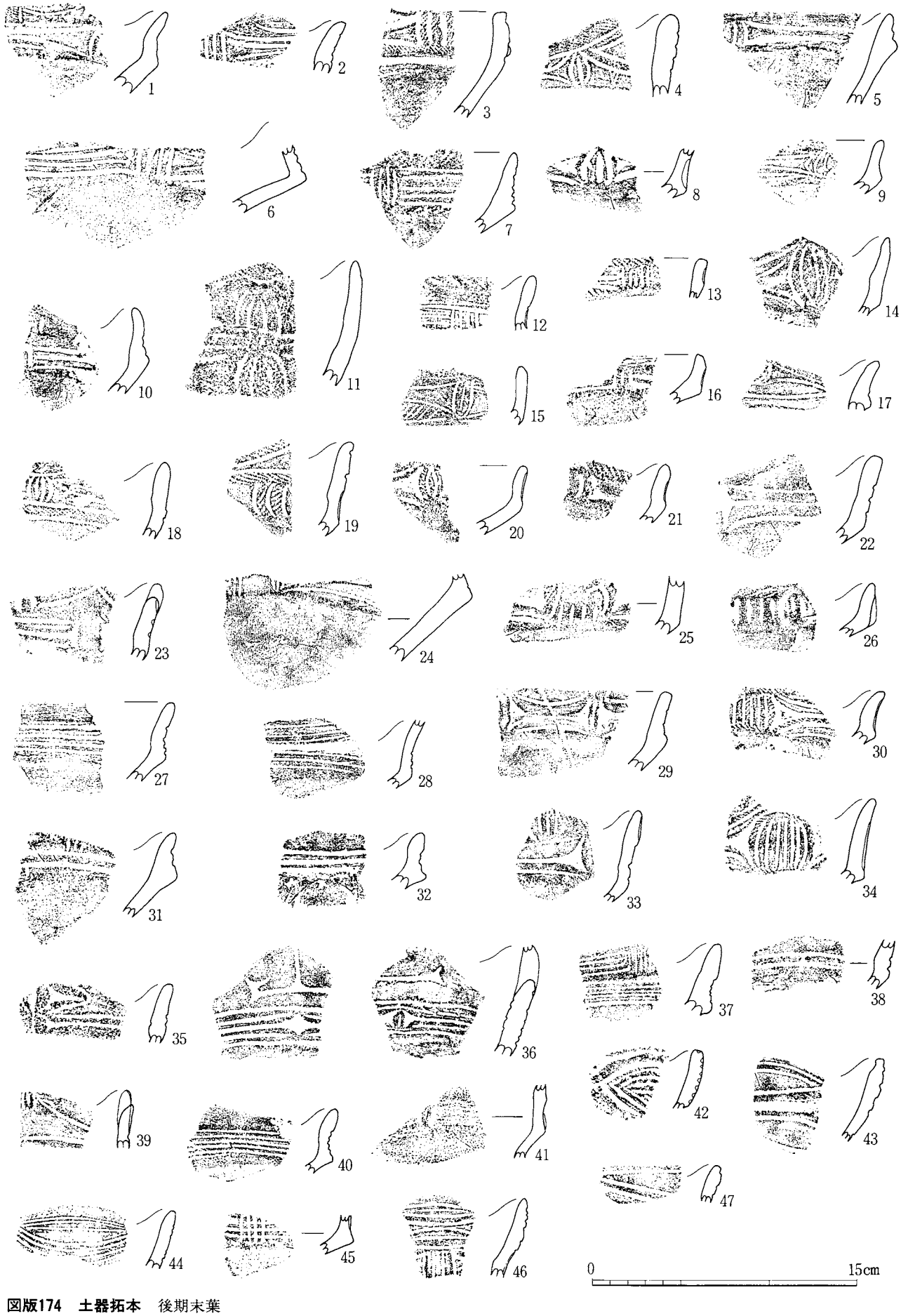
図版171　土器拓本　後期末葉



図版172　土器拓本　後期末葉

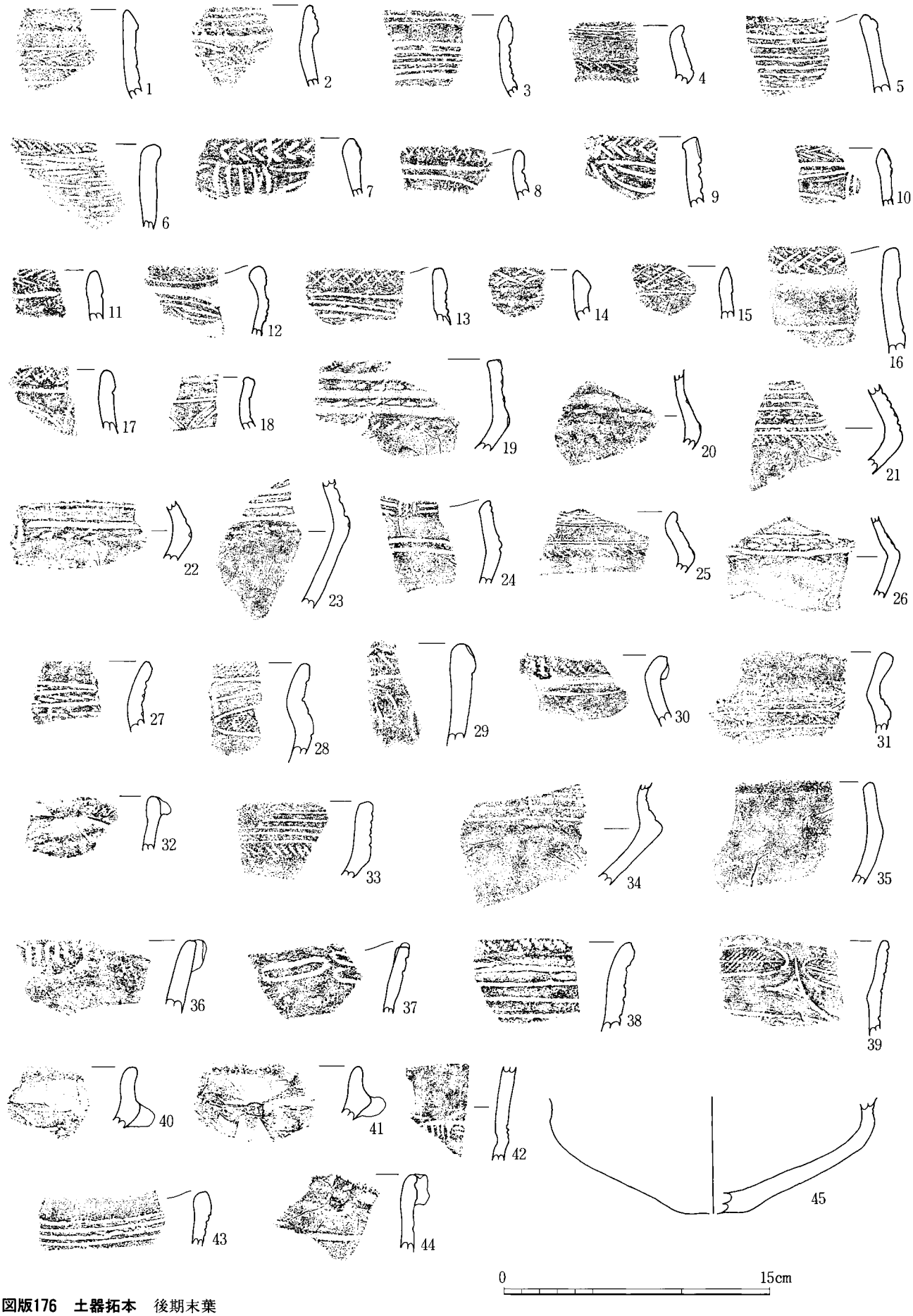


図版173　土器拓本　後期後・末葉

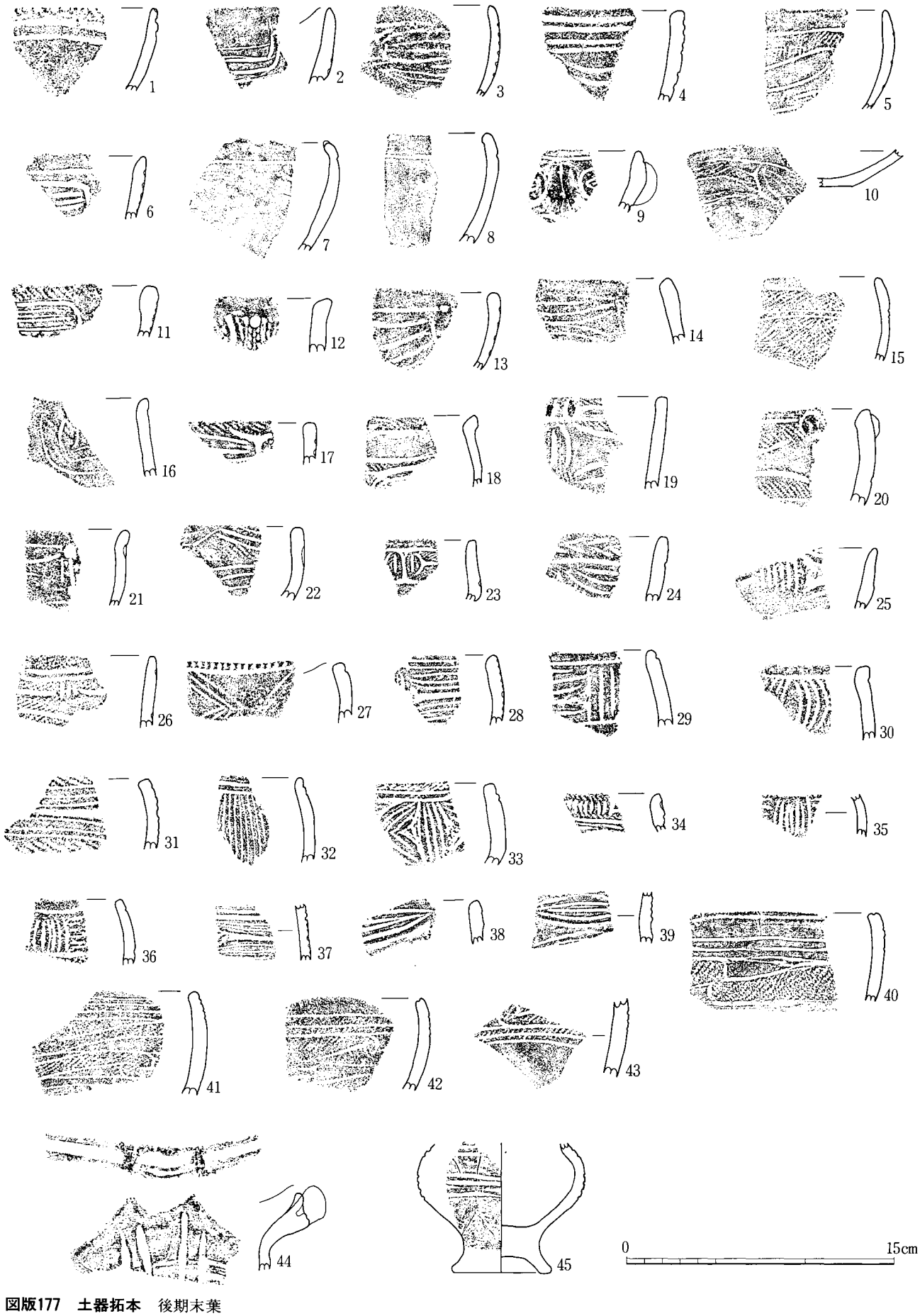


図版174　土器拓本　後期末葉

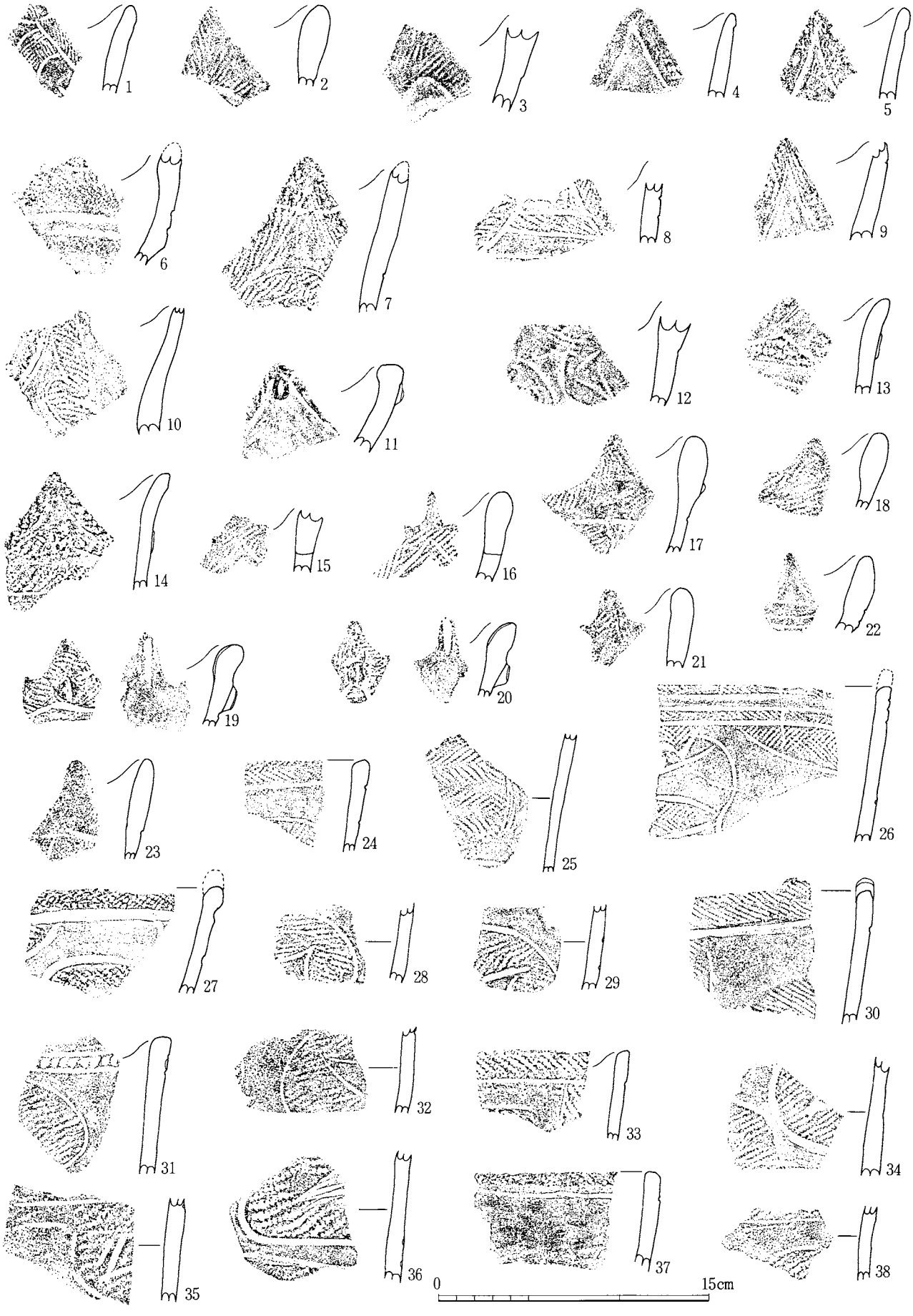
図版175　土器拓本　後期末葉



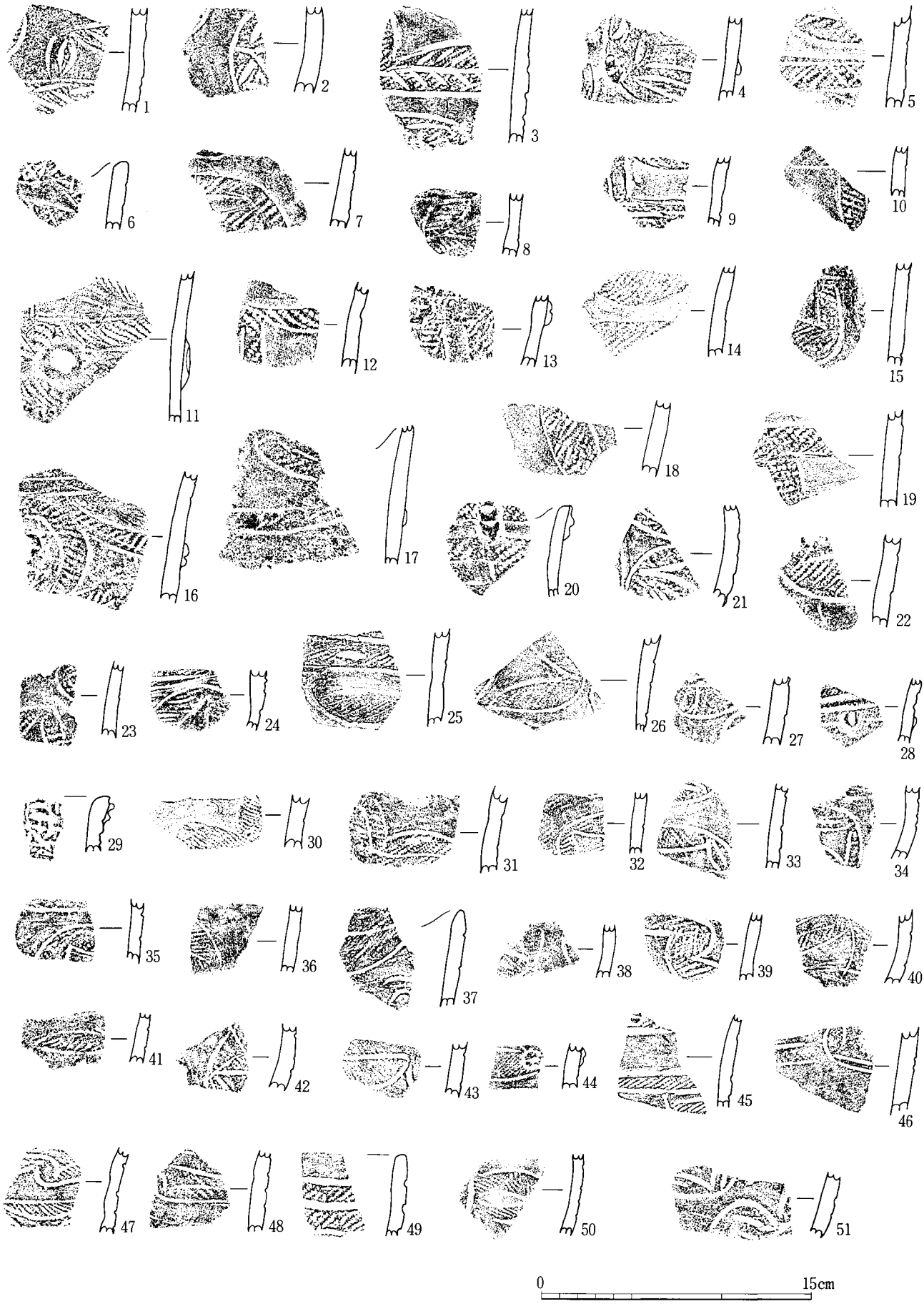
図版176　土器拓本　後期末葉



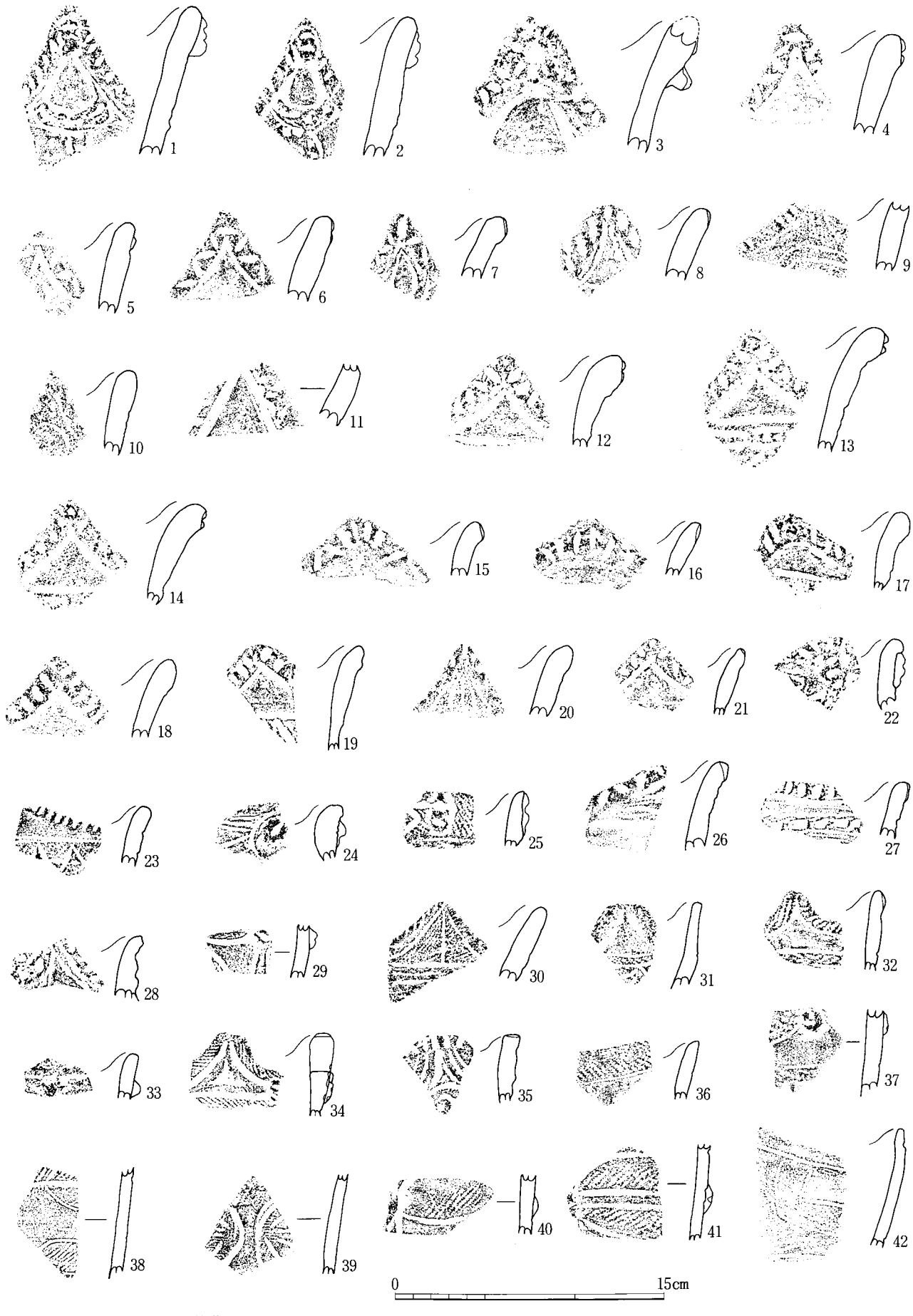
図版177　土器拓本　後期末葉



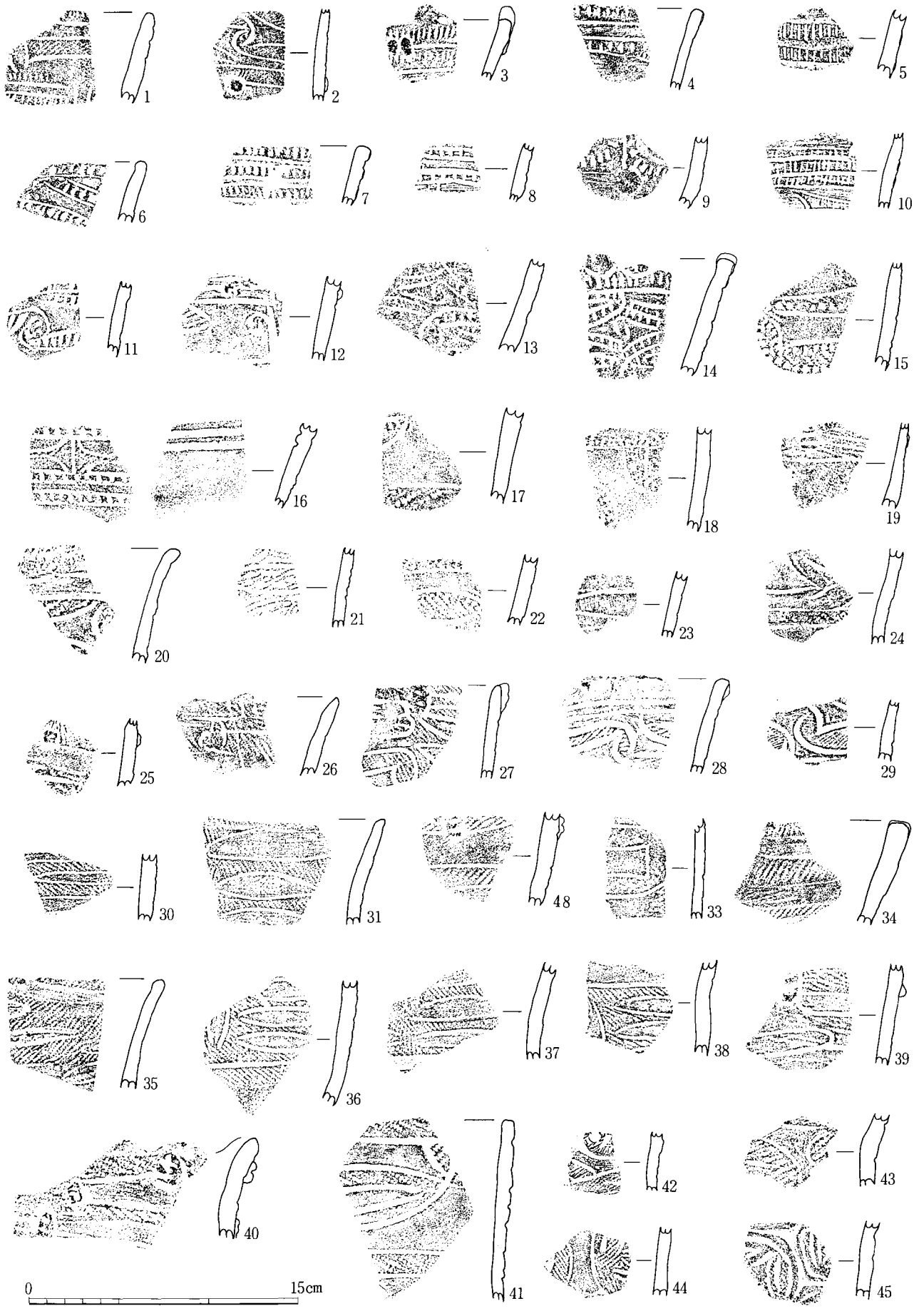
図版178　土器拓本　後期後葉



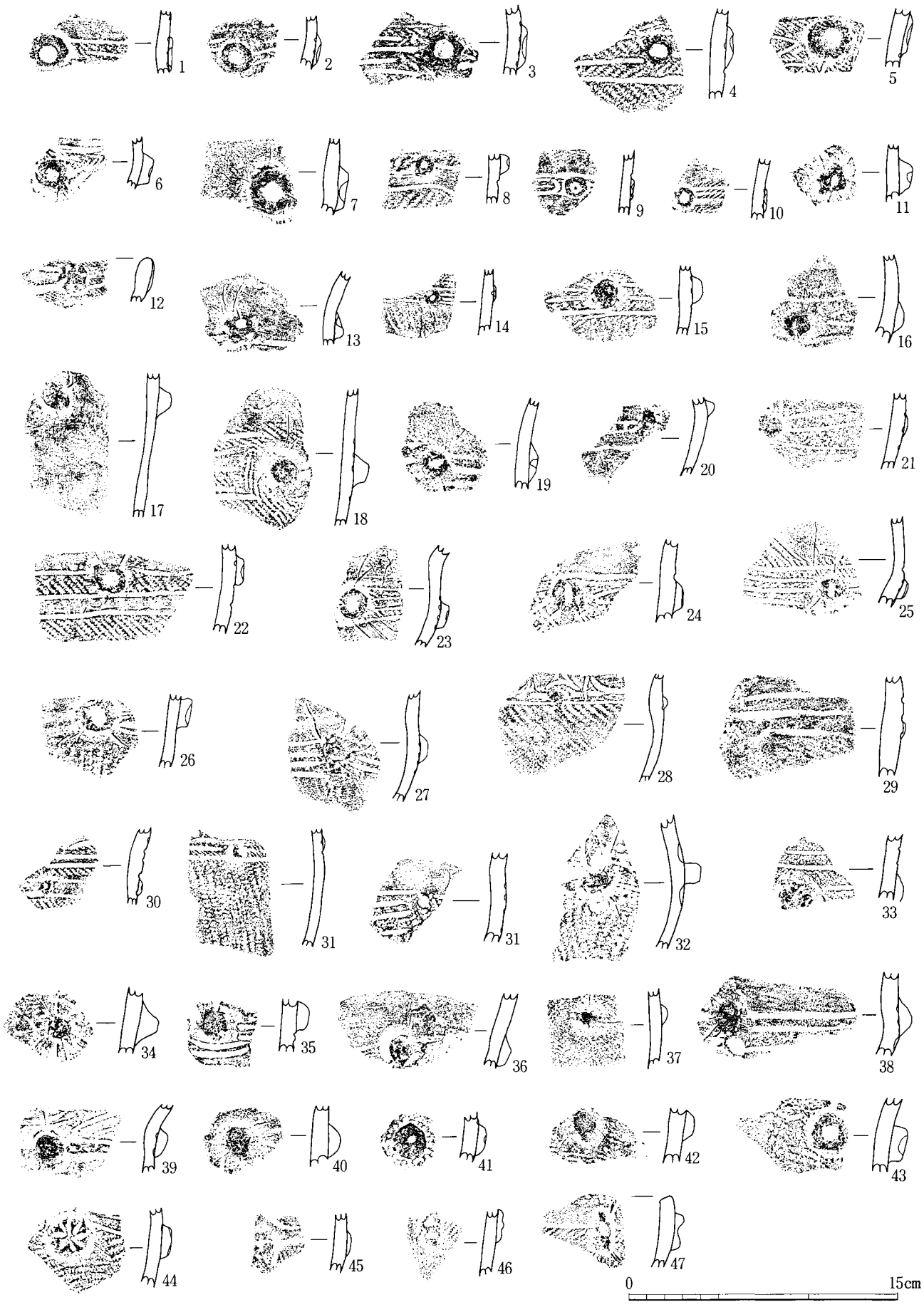
図版179　土器拓本　後期後葉



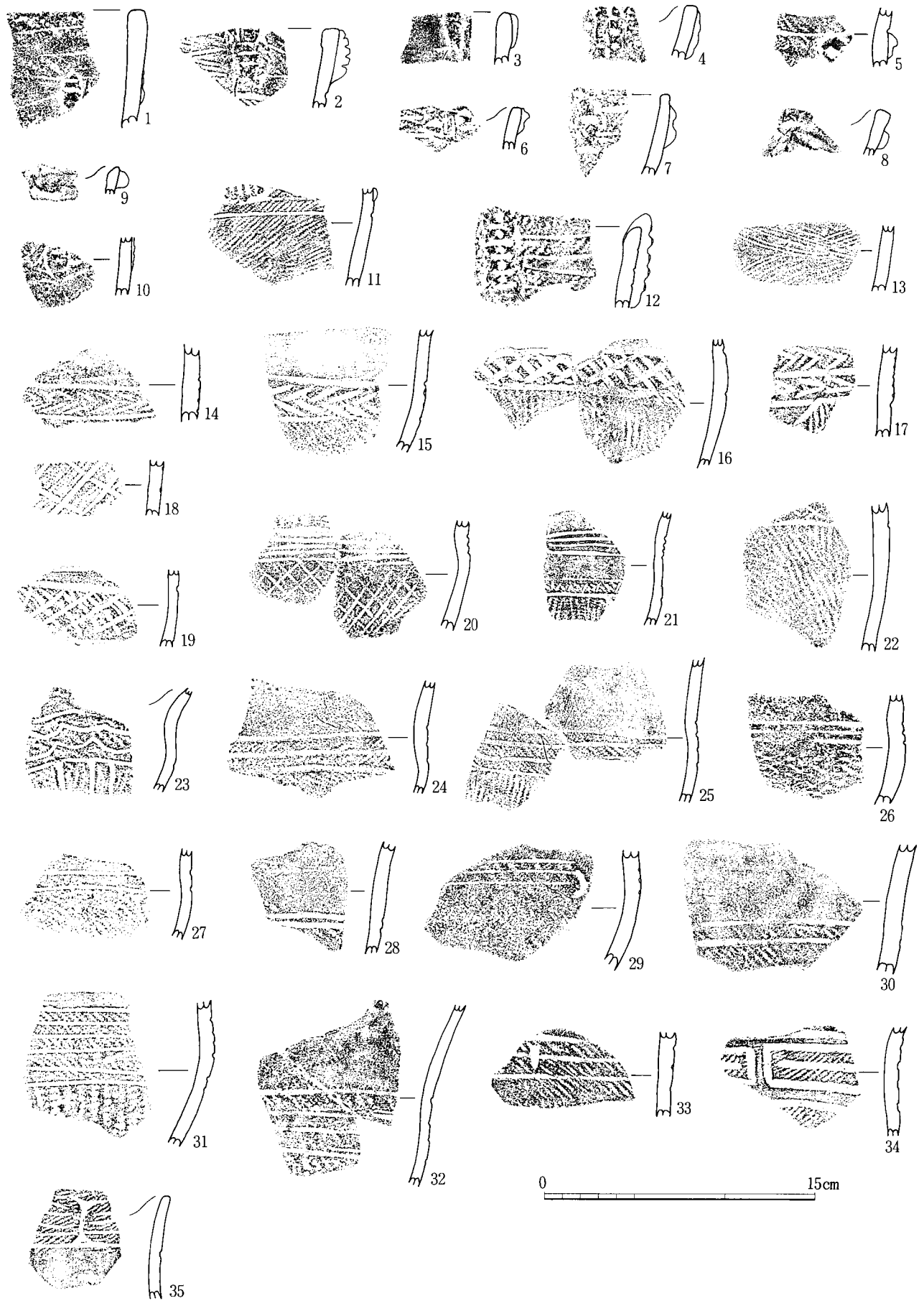
図版180　土器拓本　後期後葉



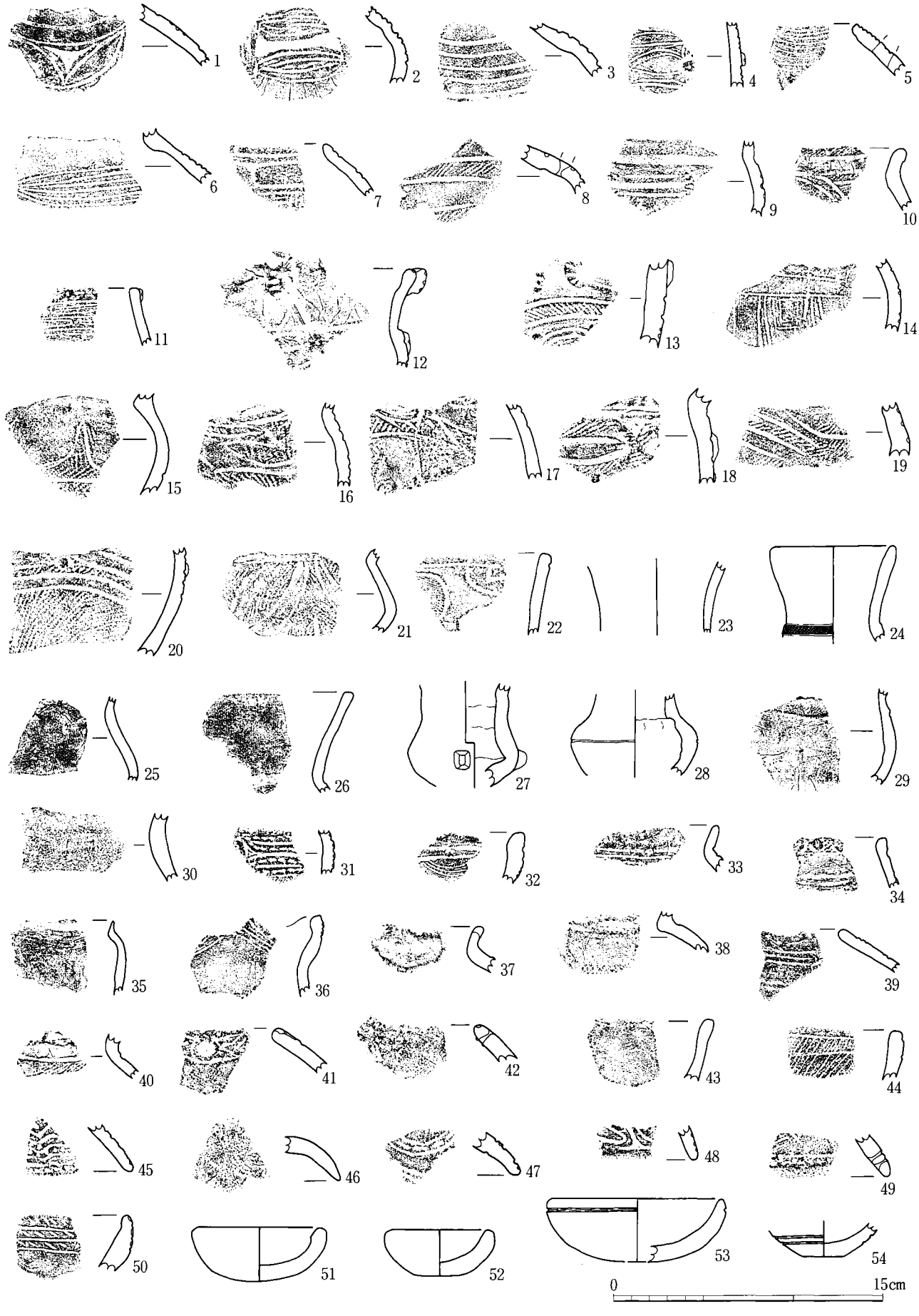
図版181　土器拓本　後期後葉



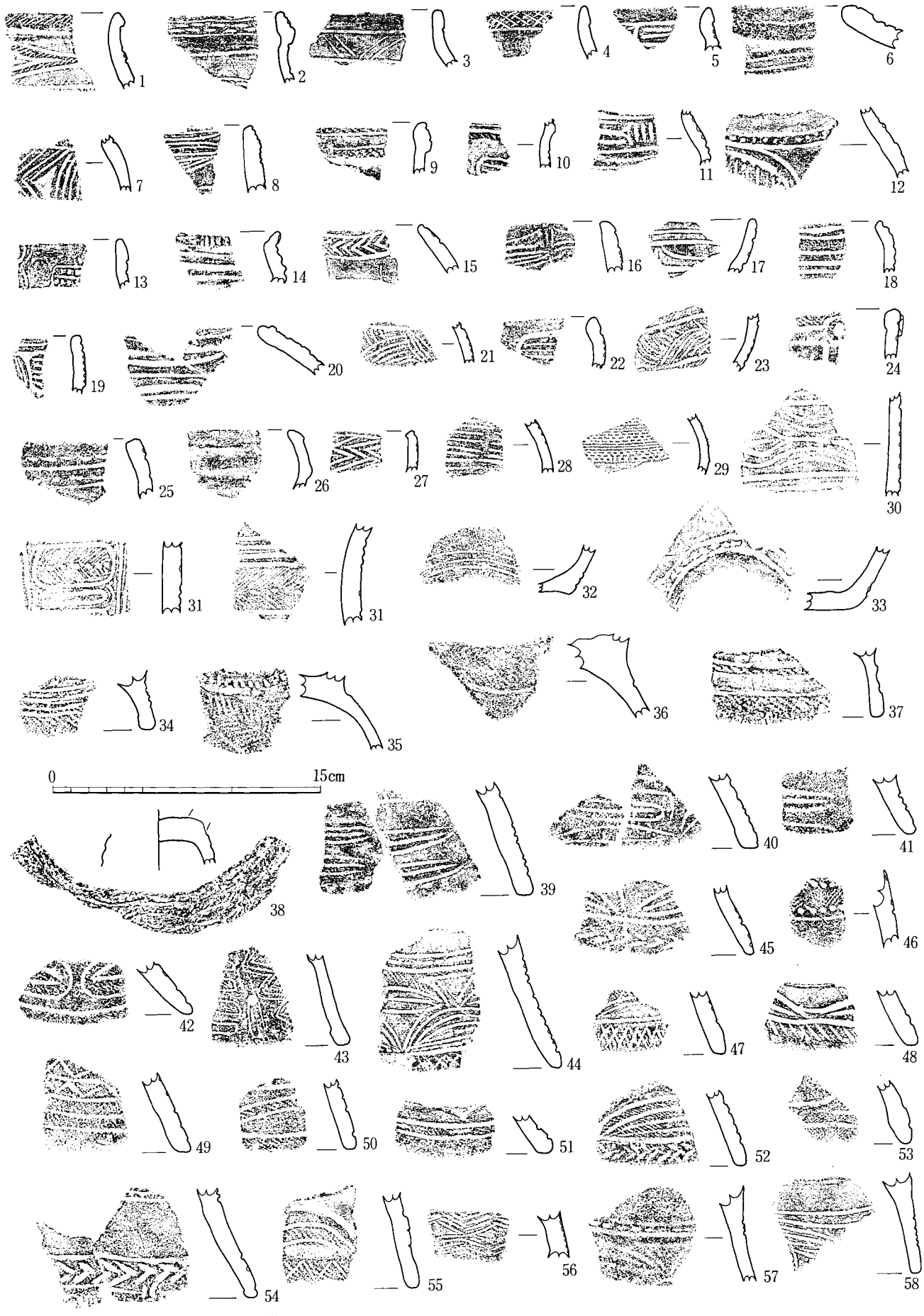
図版182　土器拓本　後期後葉



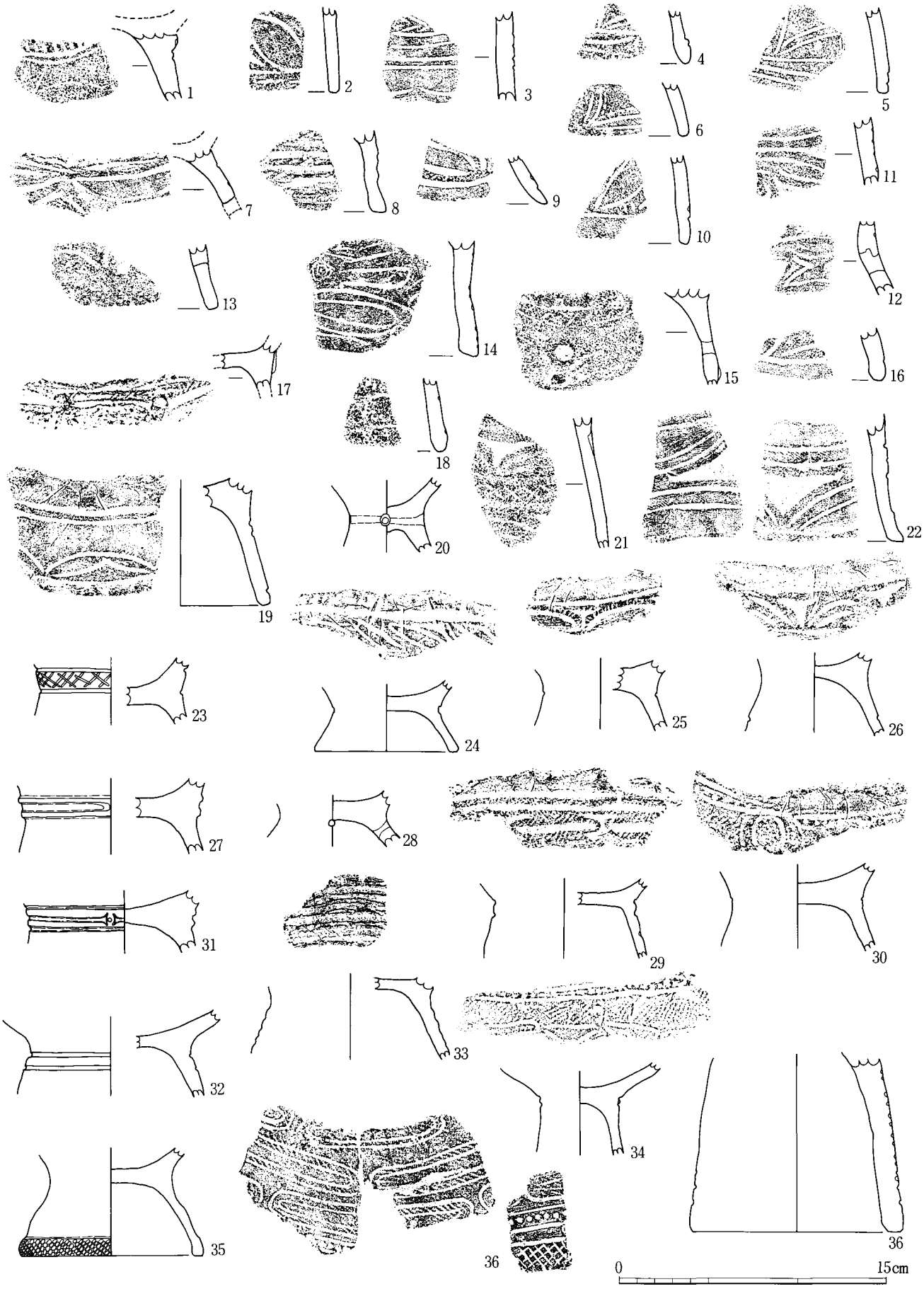
図版183　土器拓本　後期後葉



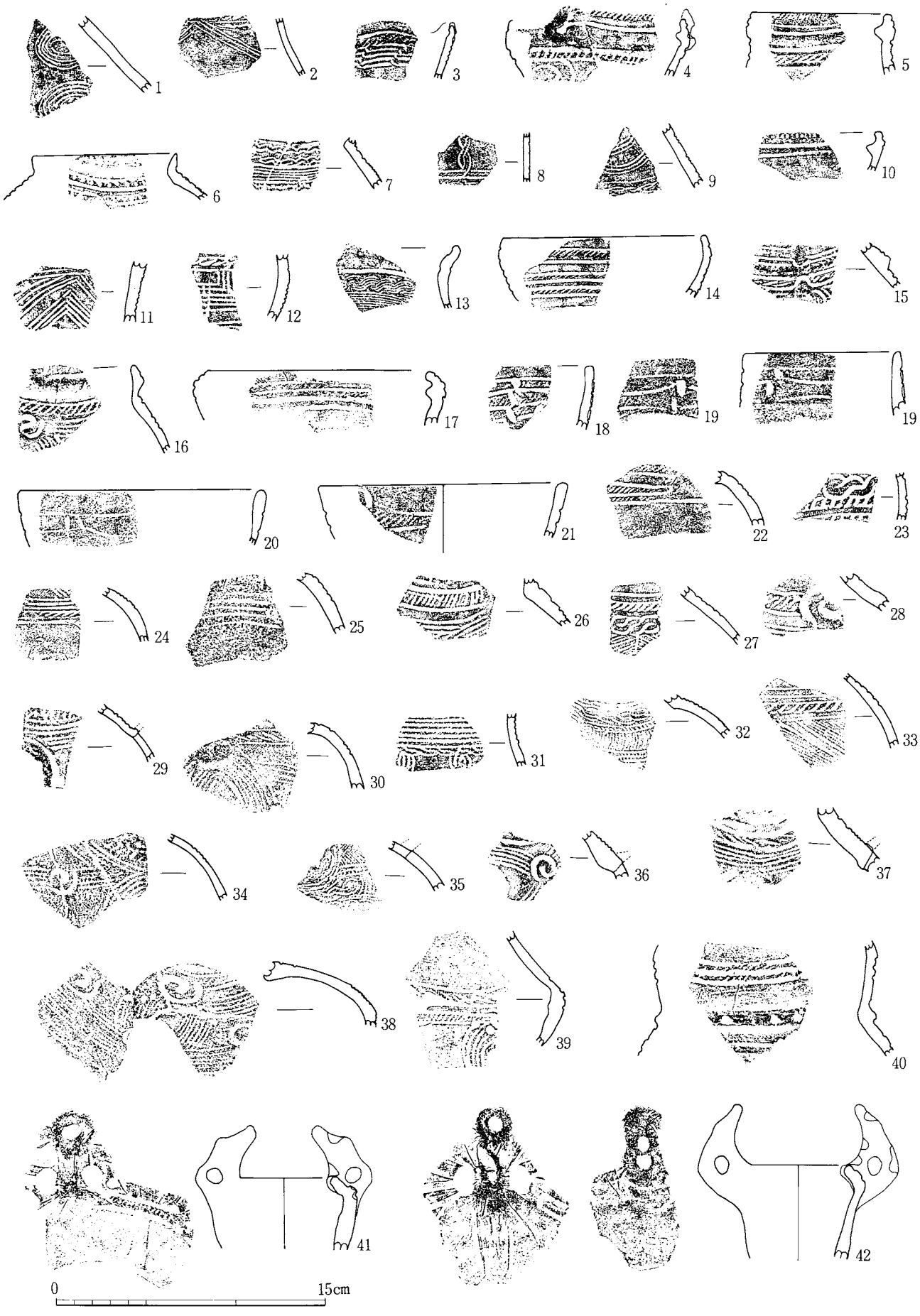
図版184　土器拓本　後期後葉～末葉



図版185　土器拓本　後期後葉～末葉



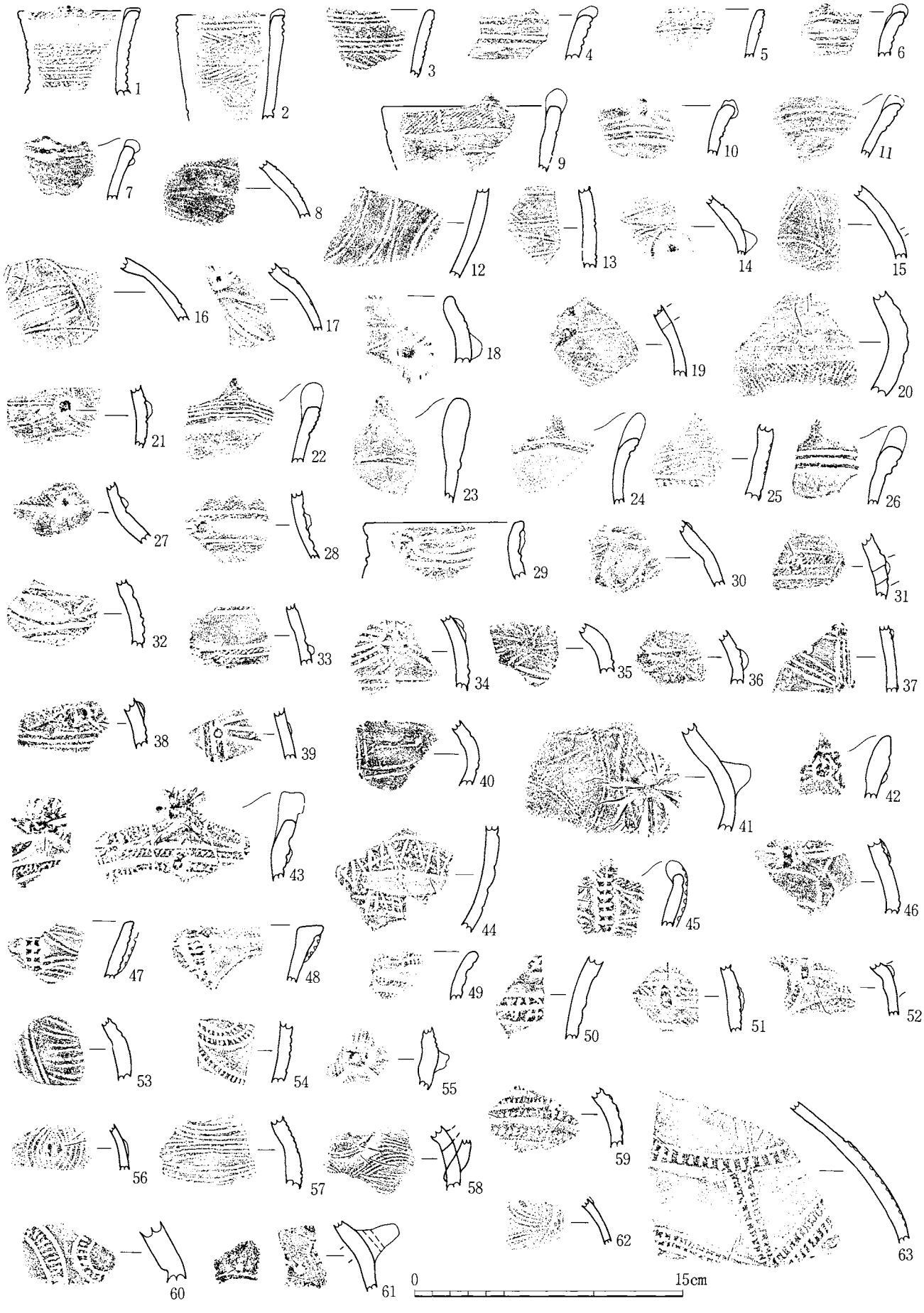
図版186　土器拓本　後期～晩期



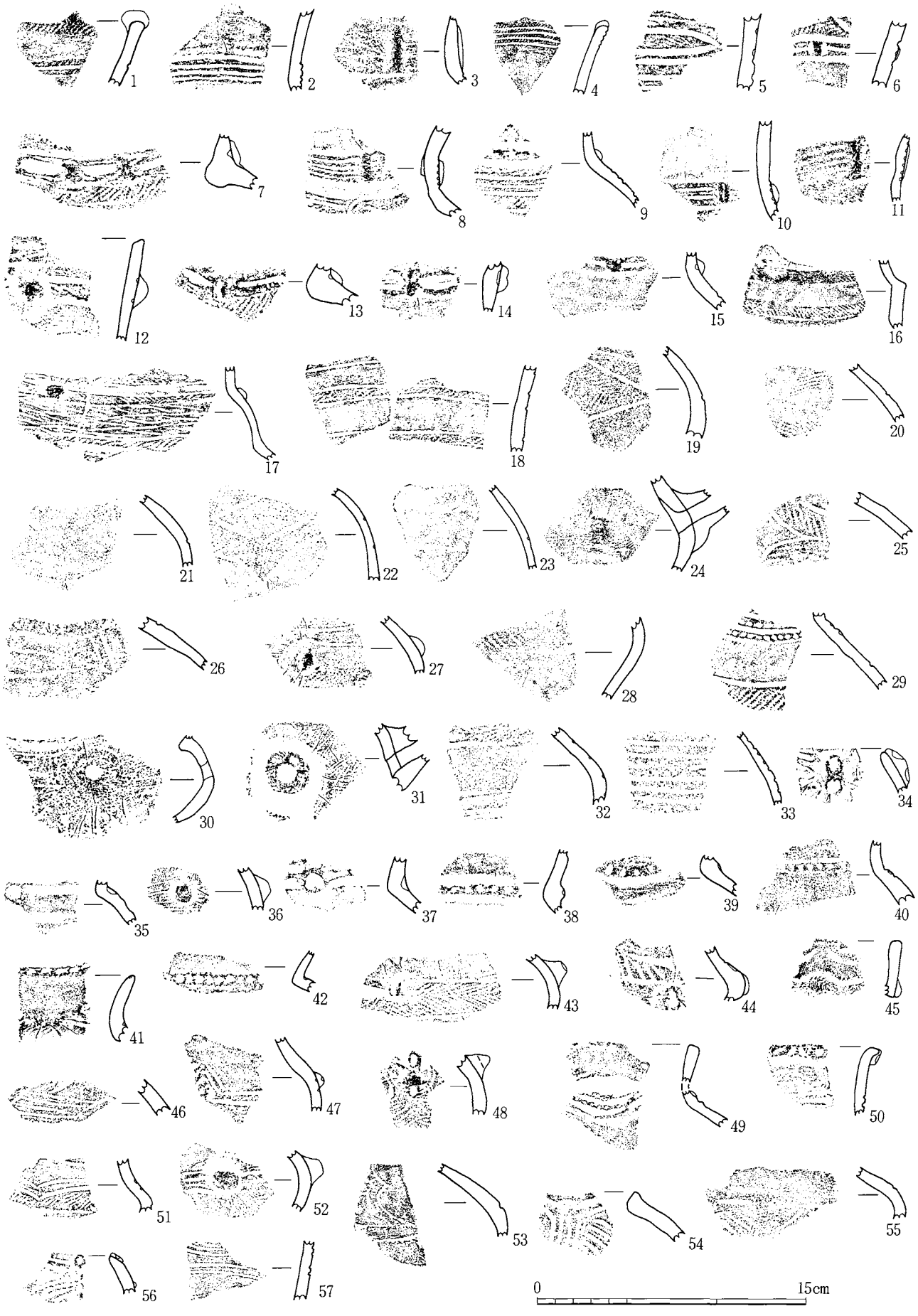
図版187　土器拓本　後期注口土器

図版188　土器拓本　後期注口土器

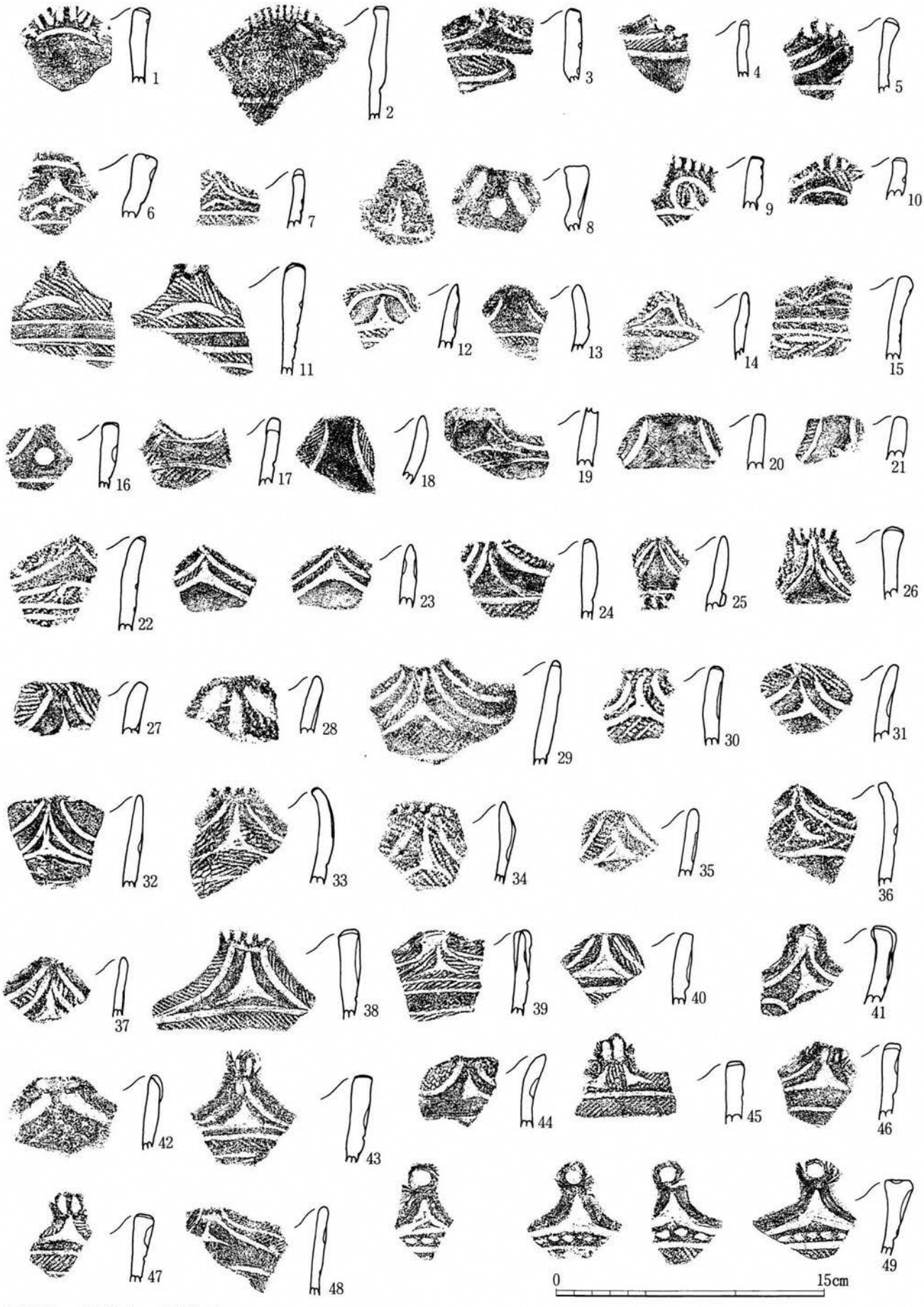
図版189　土器拓本　後期注口土器



図版190　土器拓本　後期注口土器



図版191　土器拓本　後期注口土器

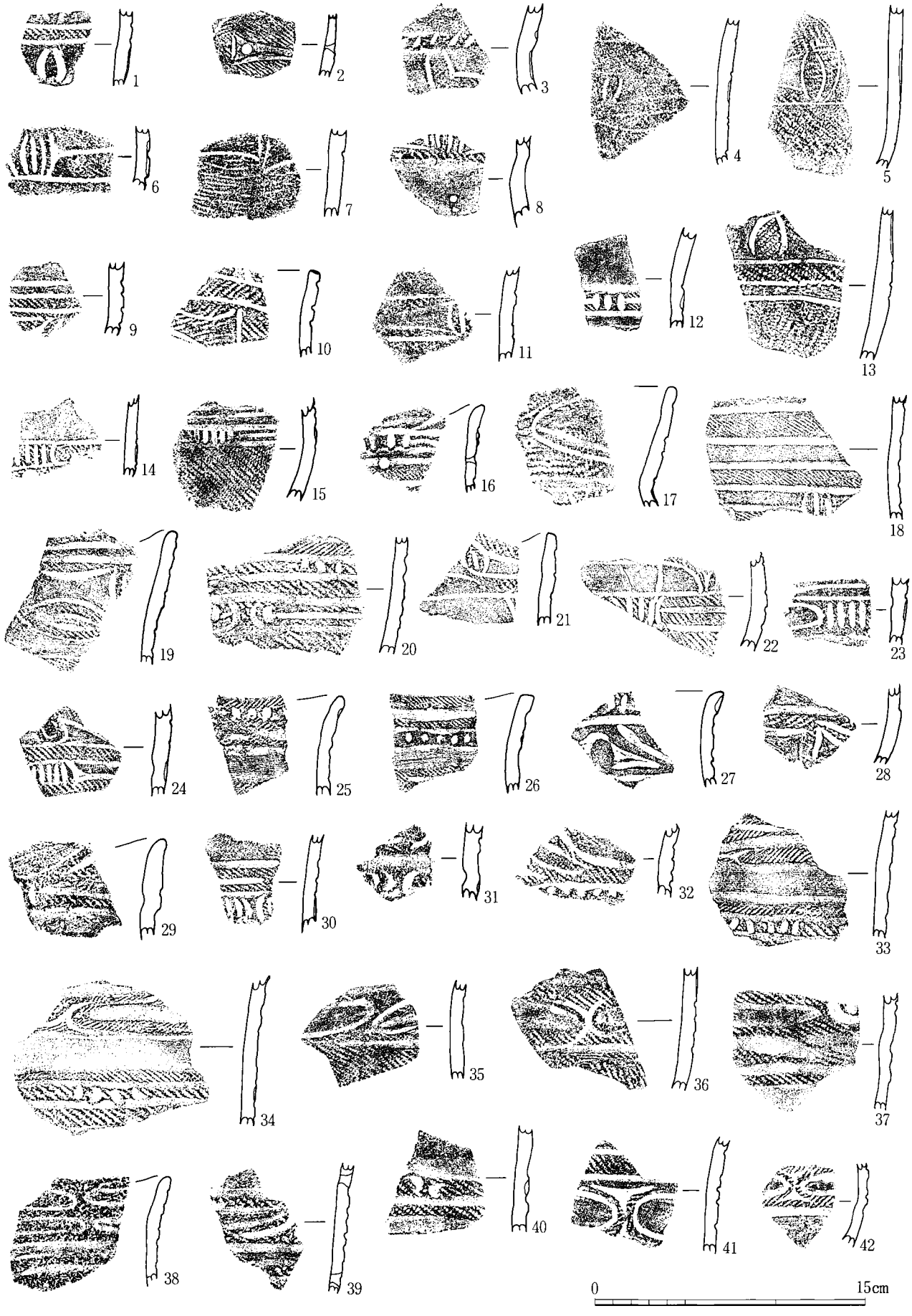


図版192　土器拓本　晩期初頭

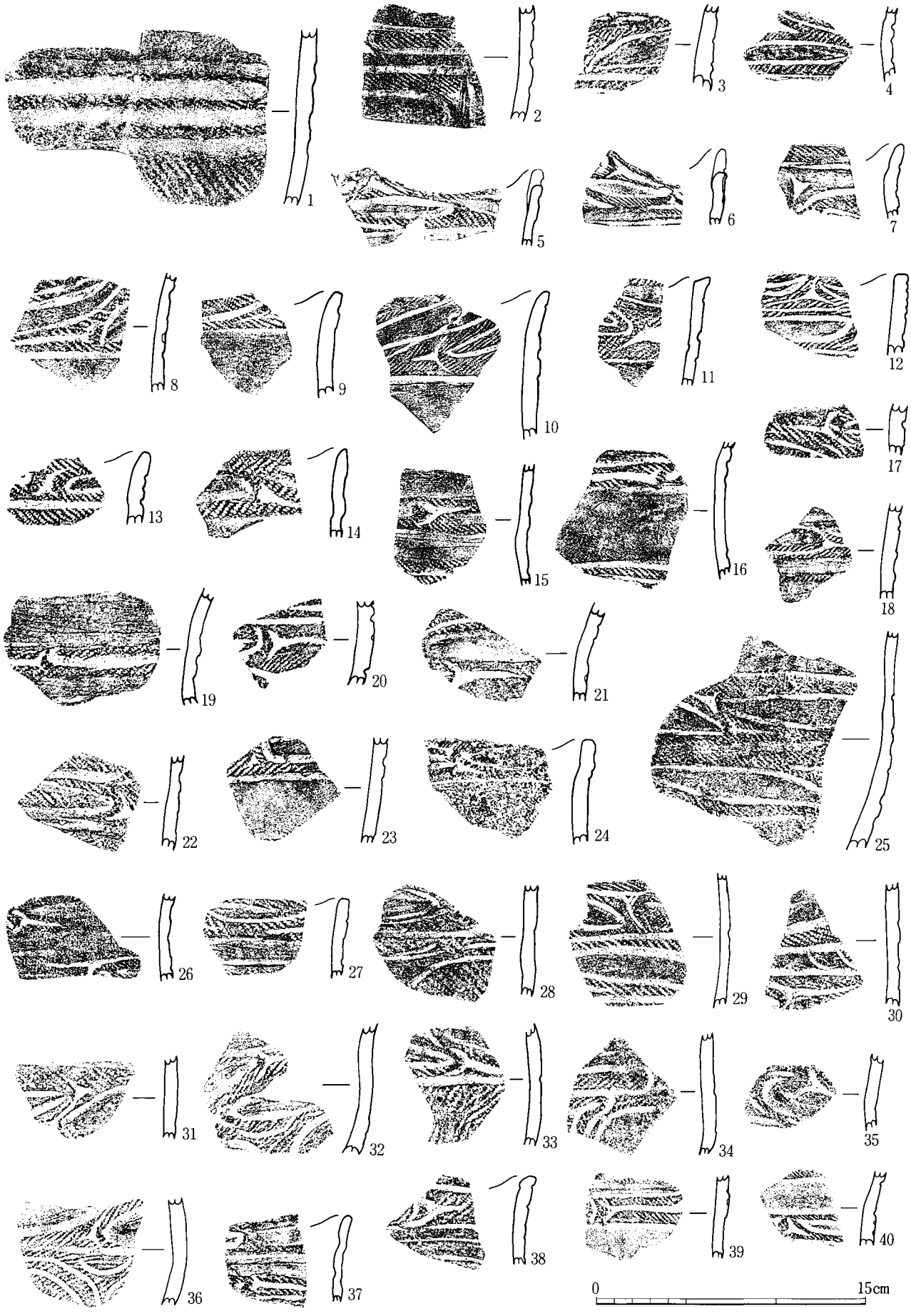
図版193　土器拓本　晩期初頭

図版194　土器拓本　晩期初頭

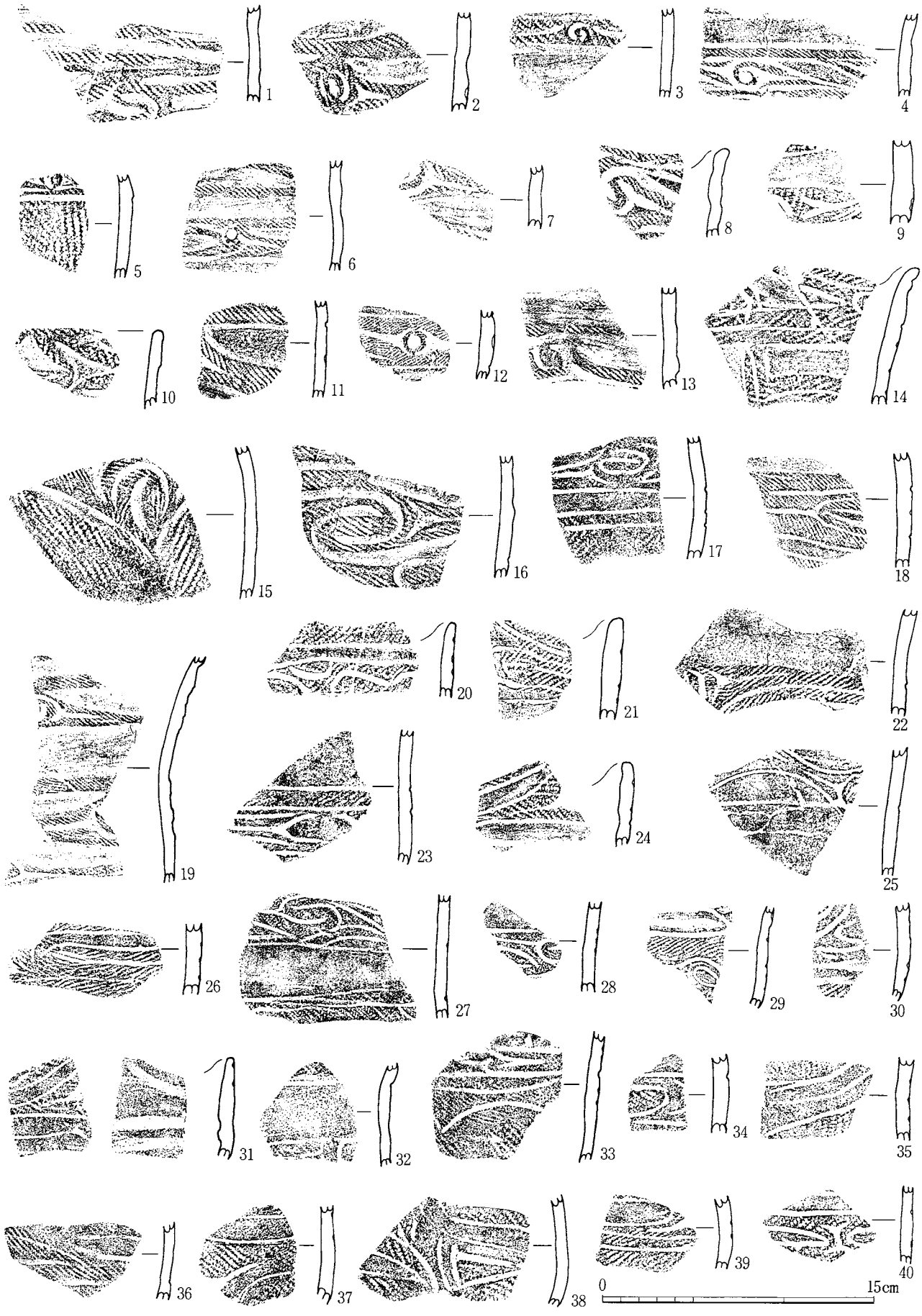
図版195　土器拓本　晩期初頭



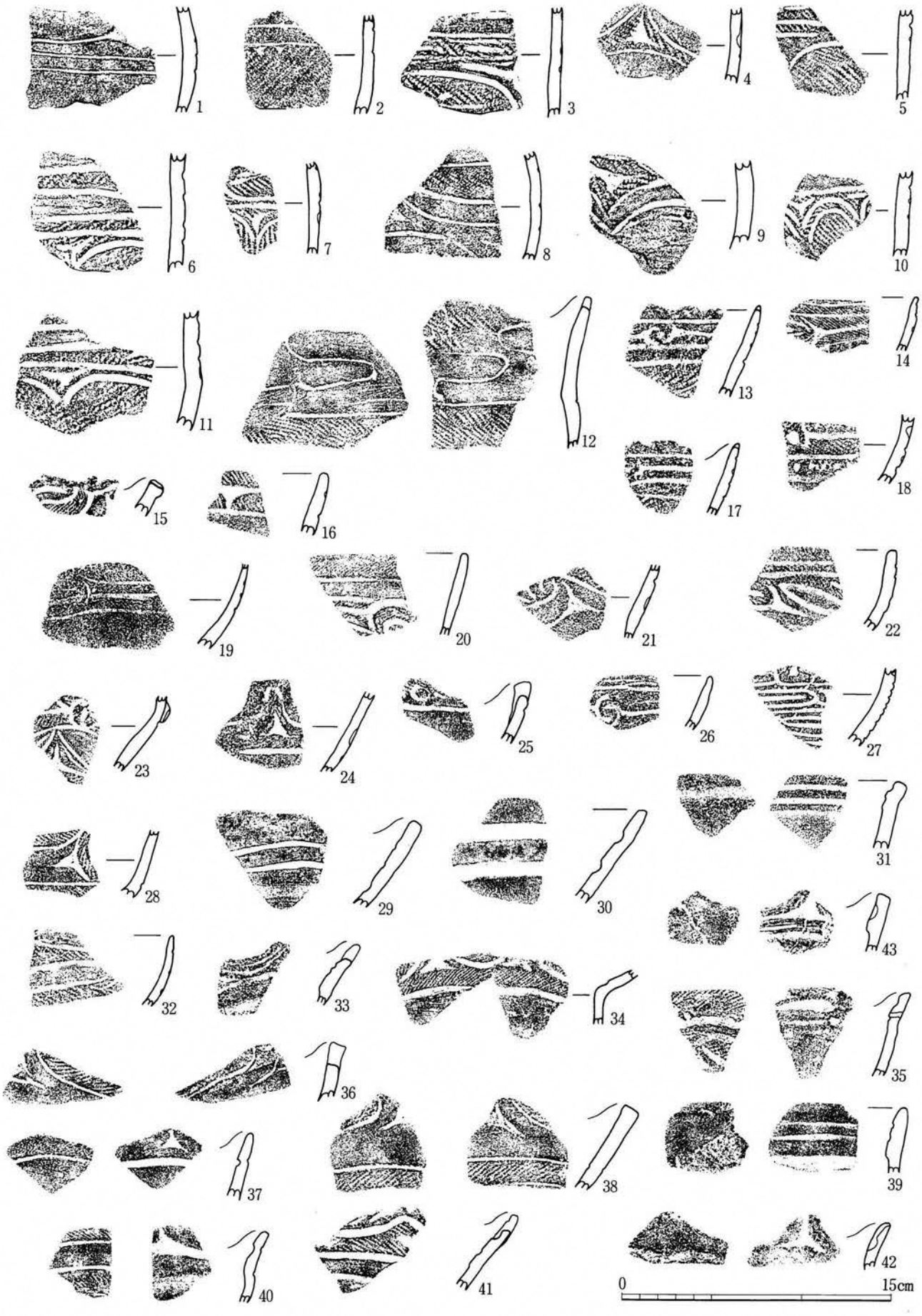
図版196　土器拓本　晩期初頭



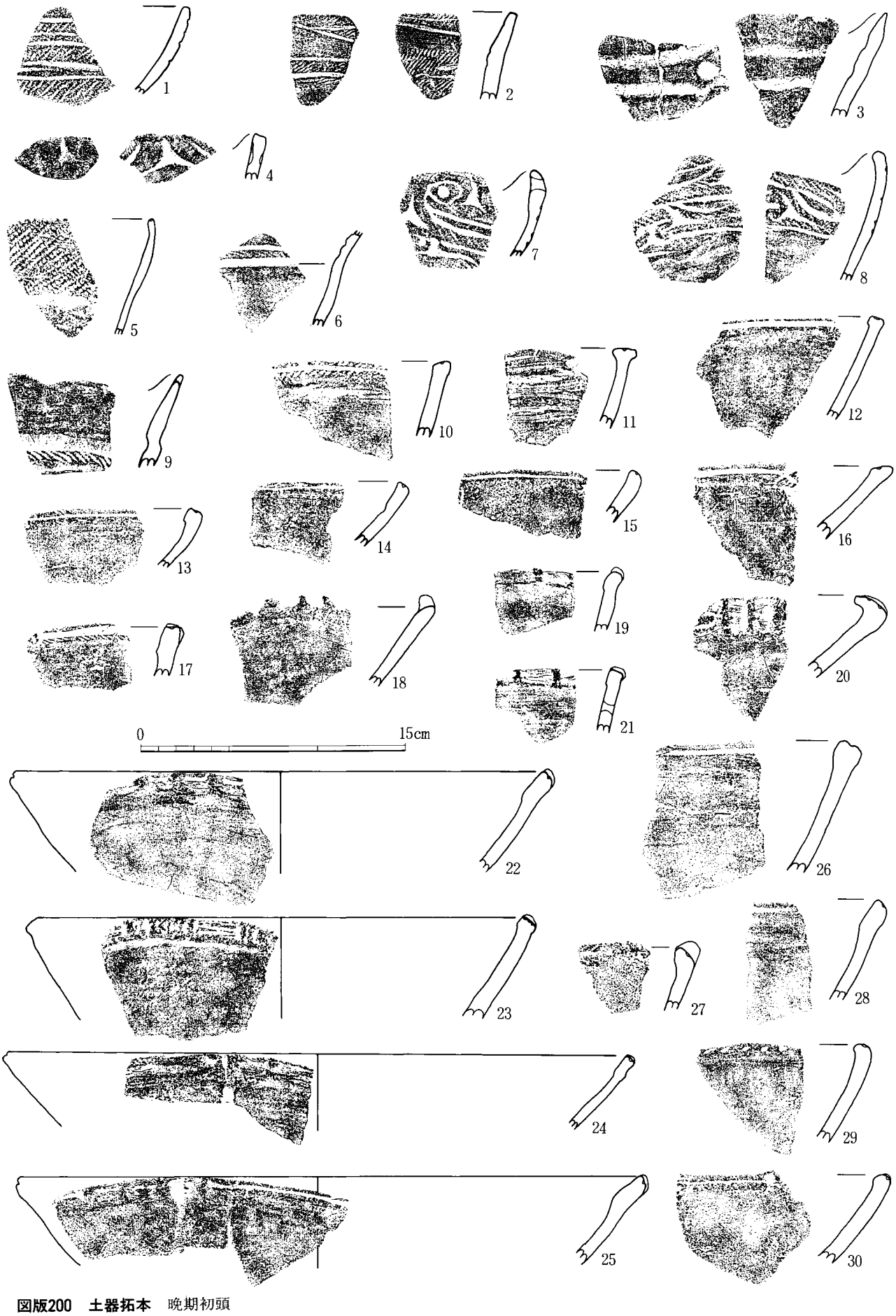
図版197　土器拓本　晩期初頭



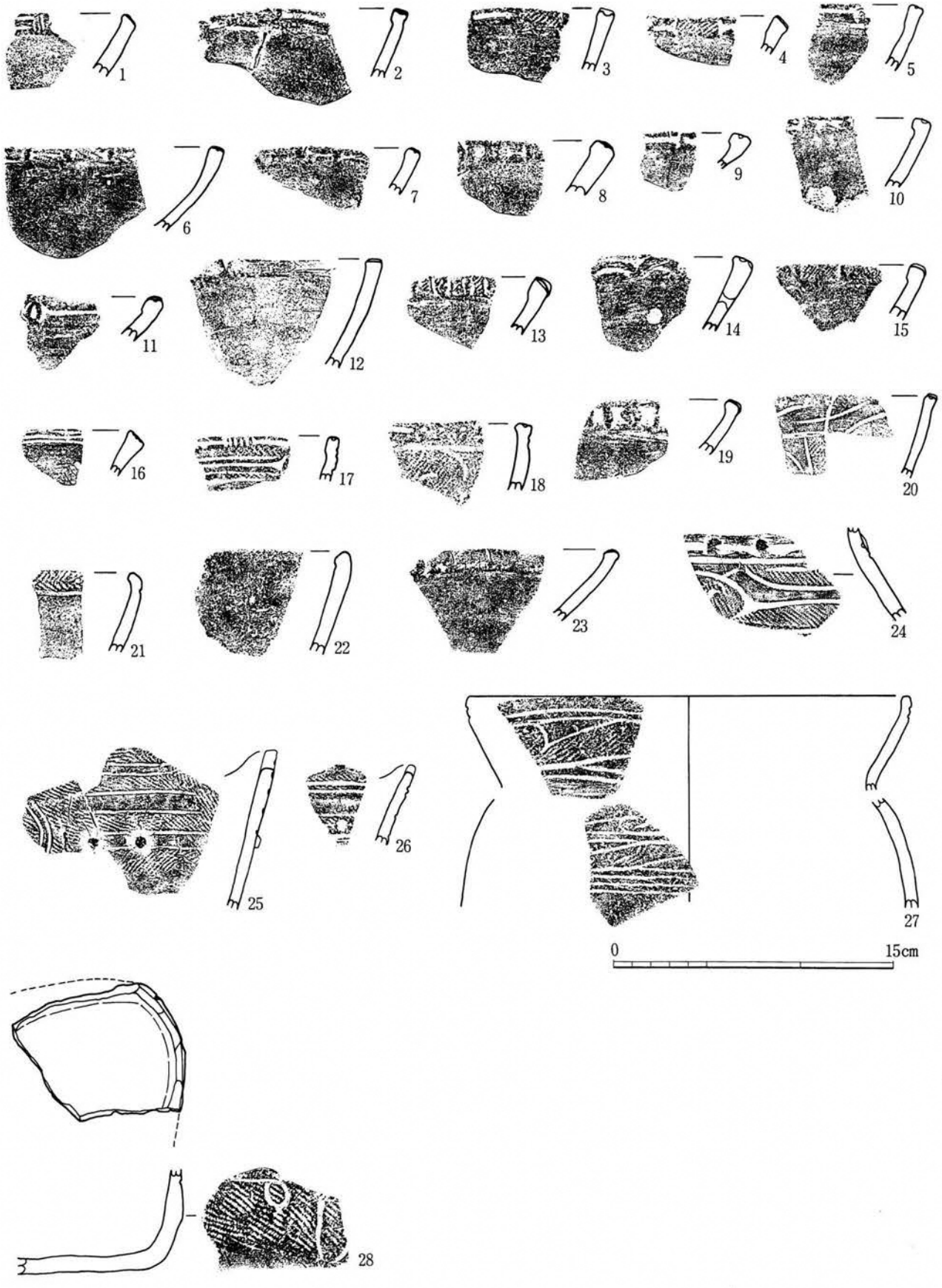
図版198　土器拓本　晩期初頭



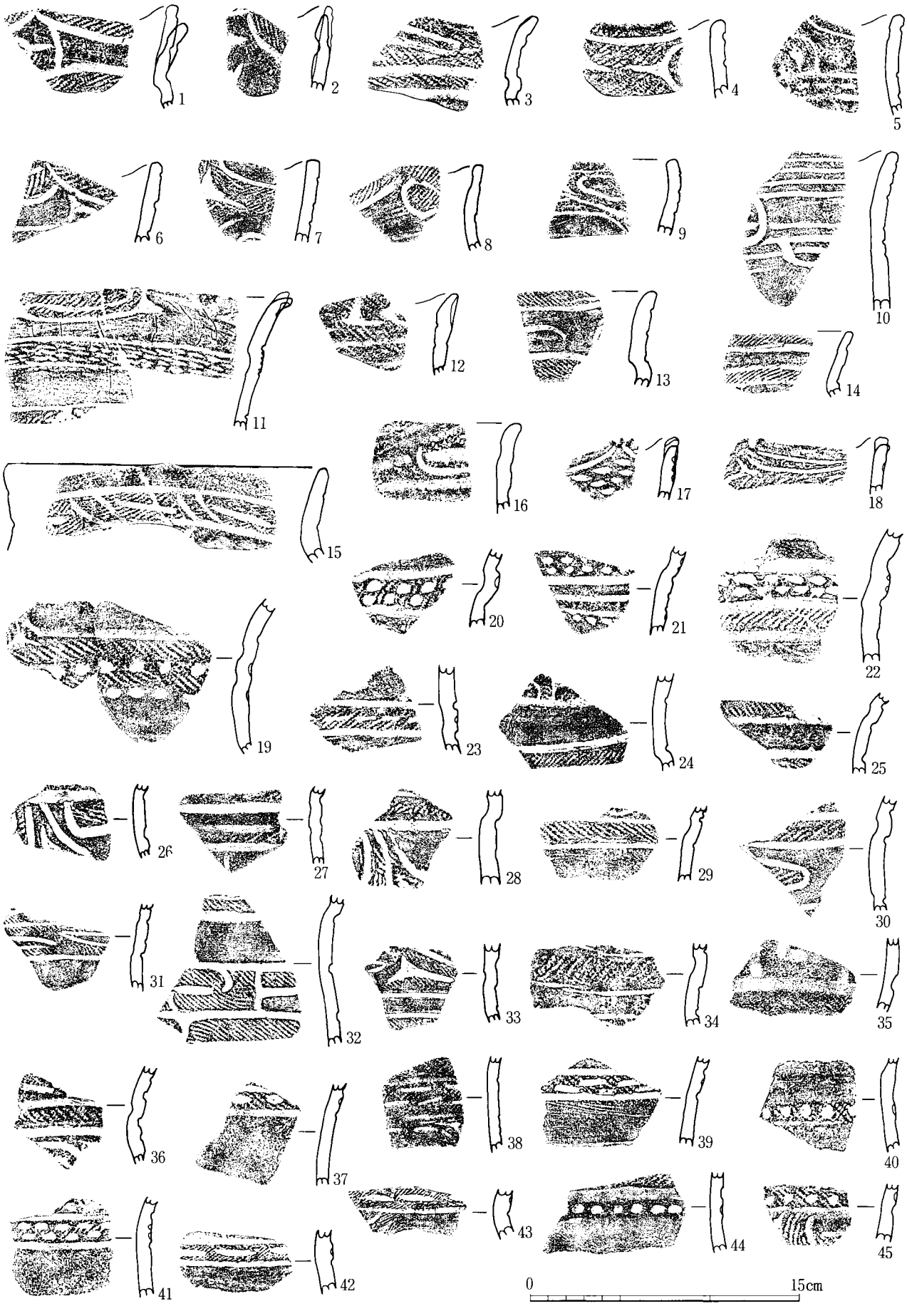
図版199　土器拓本　晩期初頭



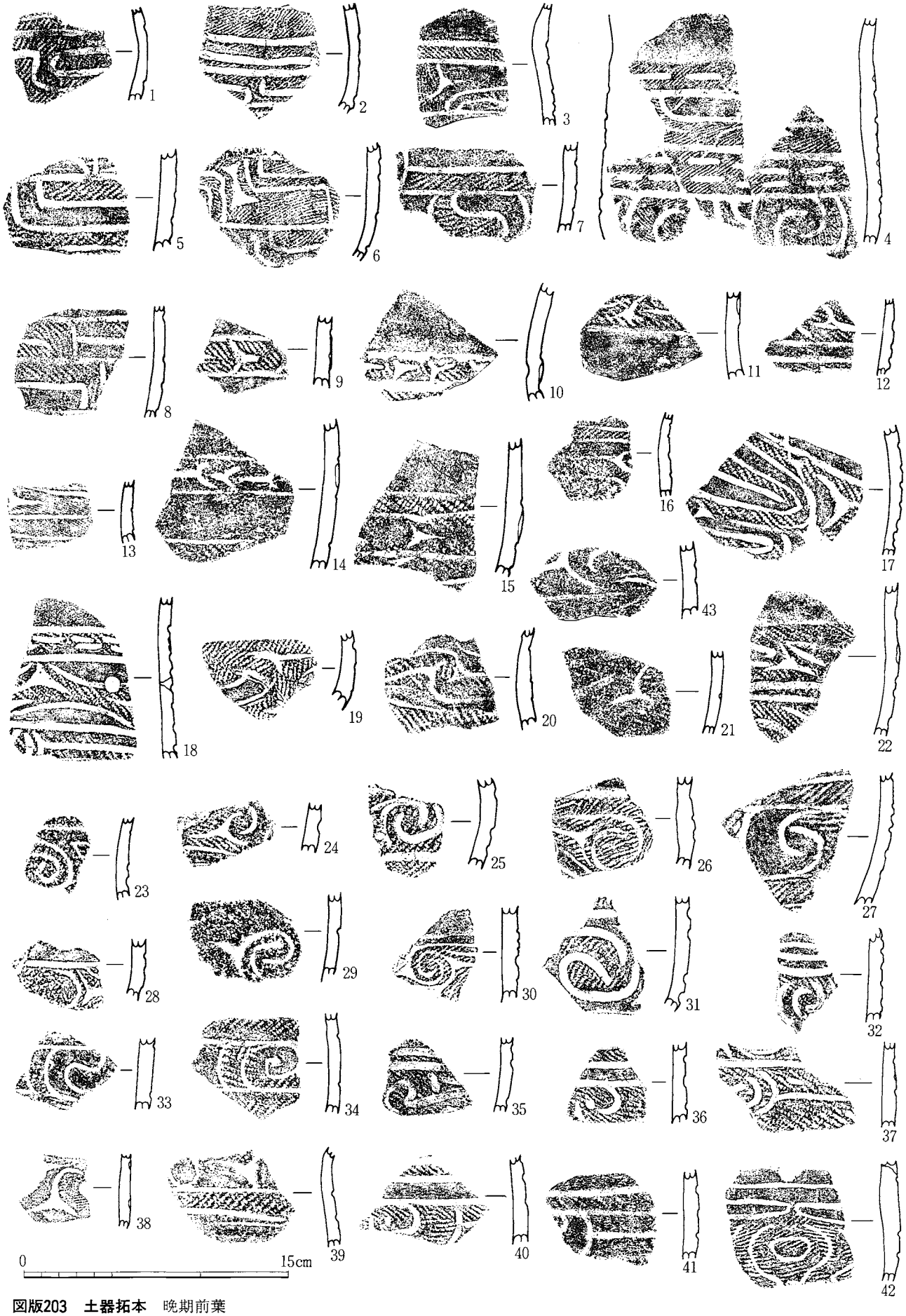
図版200　土器拓本　晩期初頭



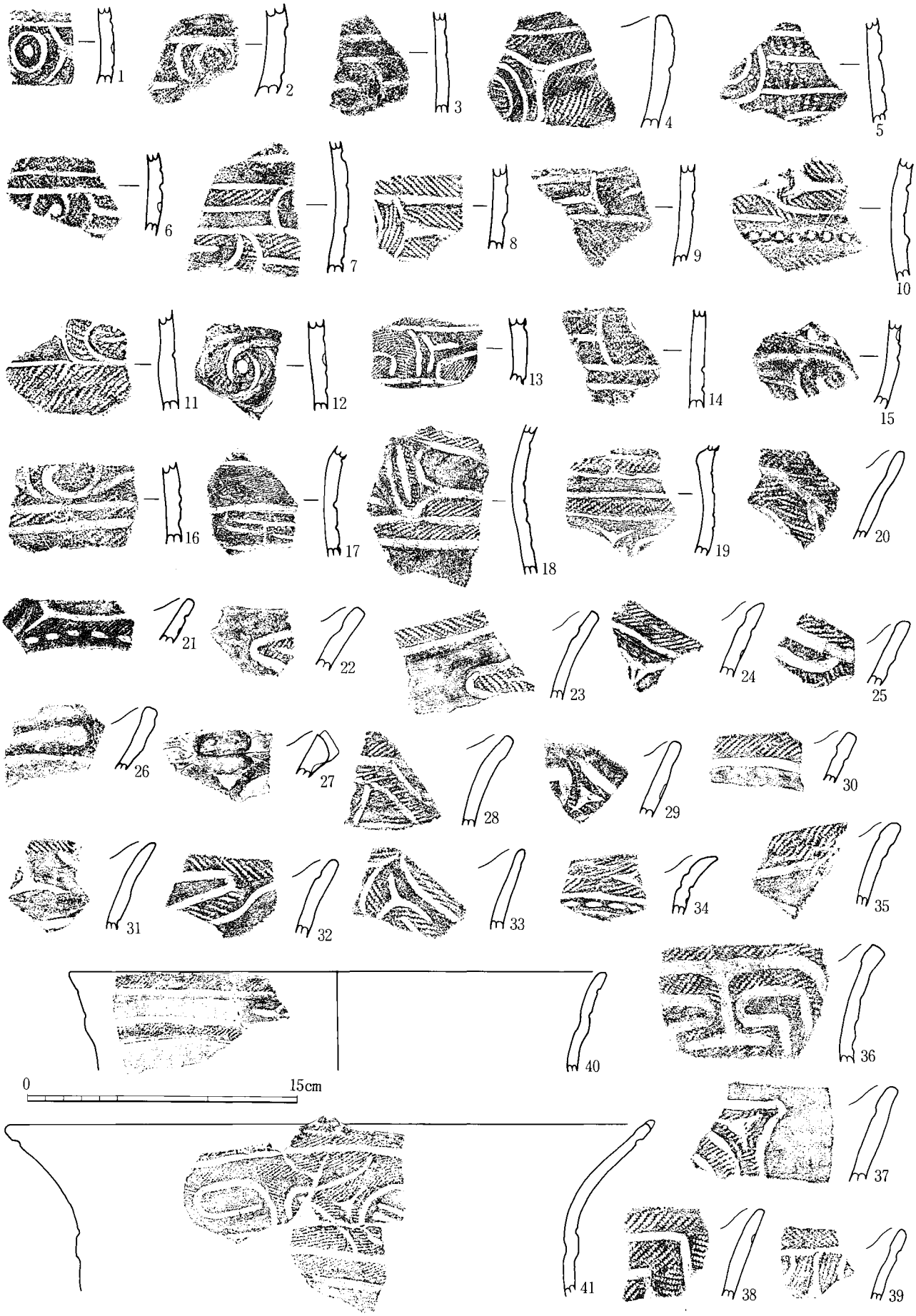
図版201　土器拓本　晩期初頭



図版202　土器拓本　晩期前葉

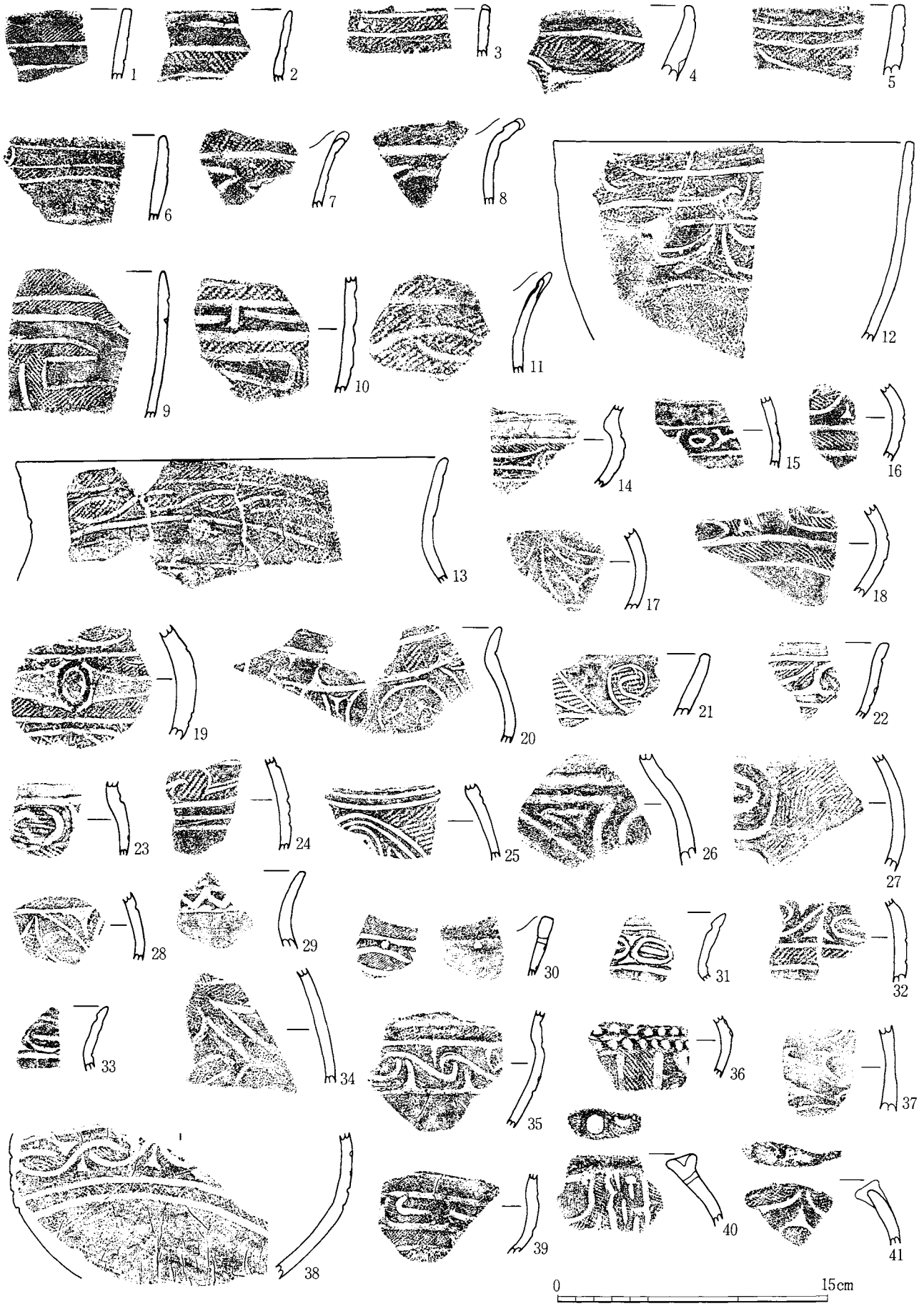


図版203　土器拓本　晩期前葉

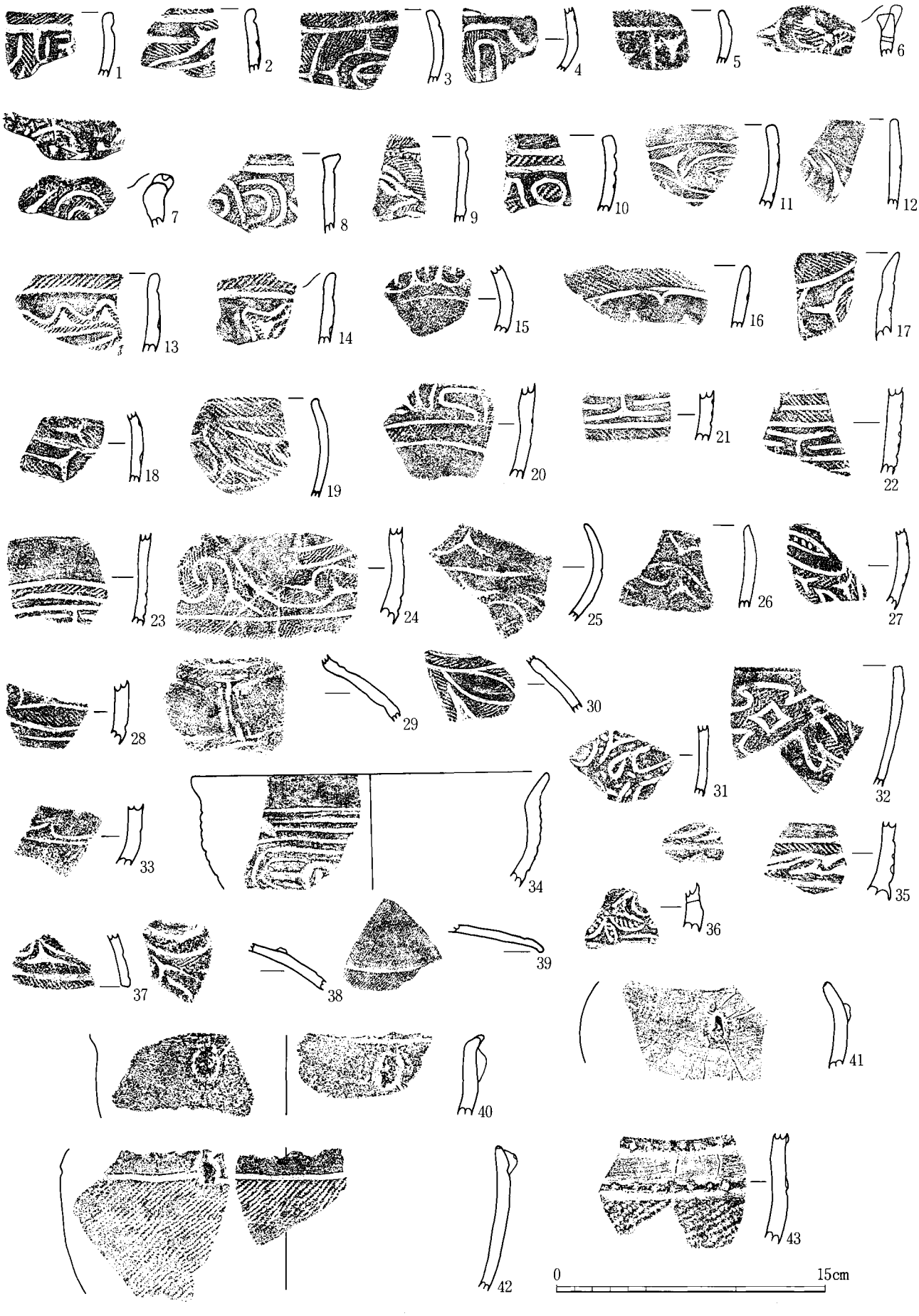


図版204　土器拓本　晩期前葉

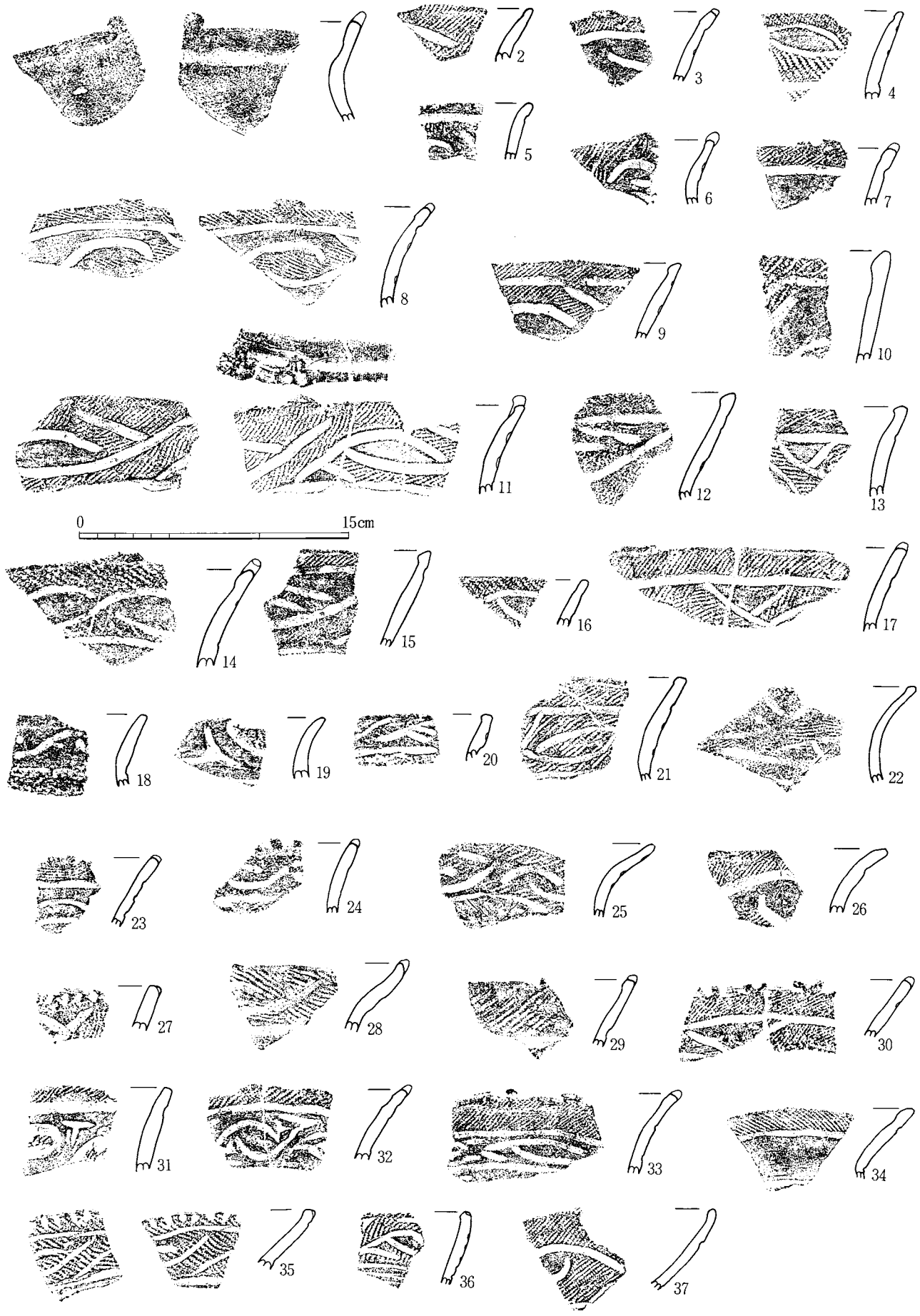
図版205　土器拓本　晩期前葉



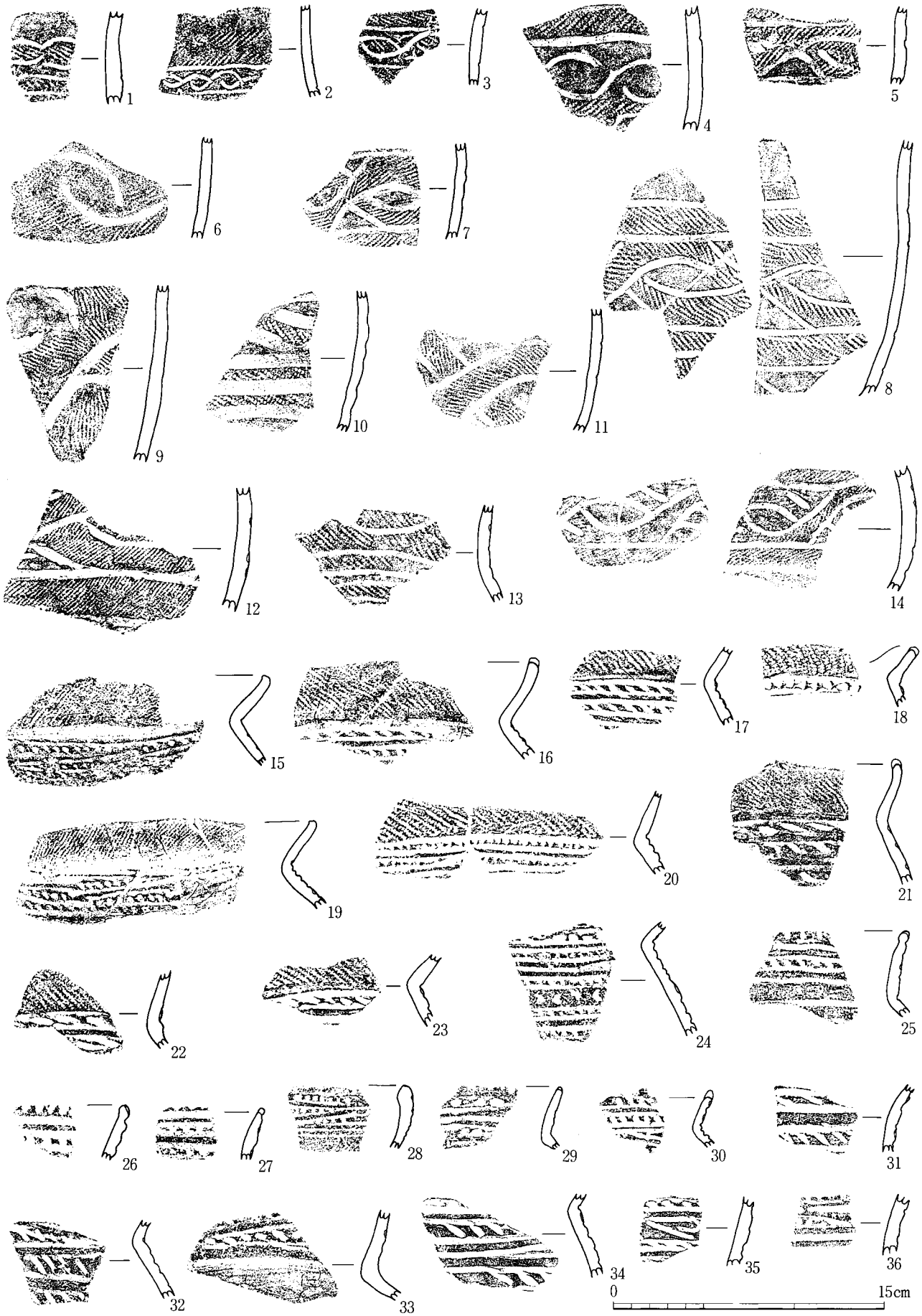
図版206　土器拓本　晩期前葉



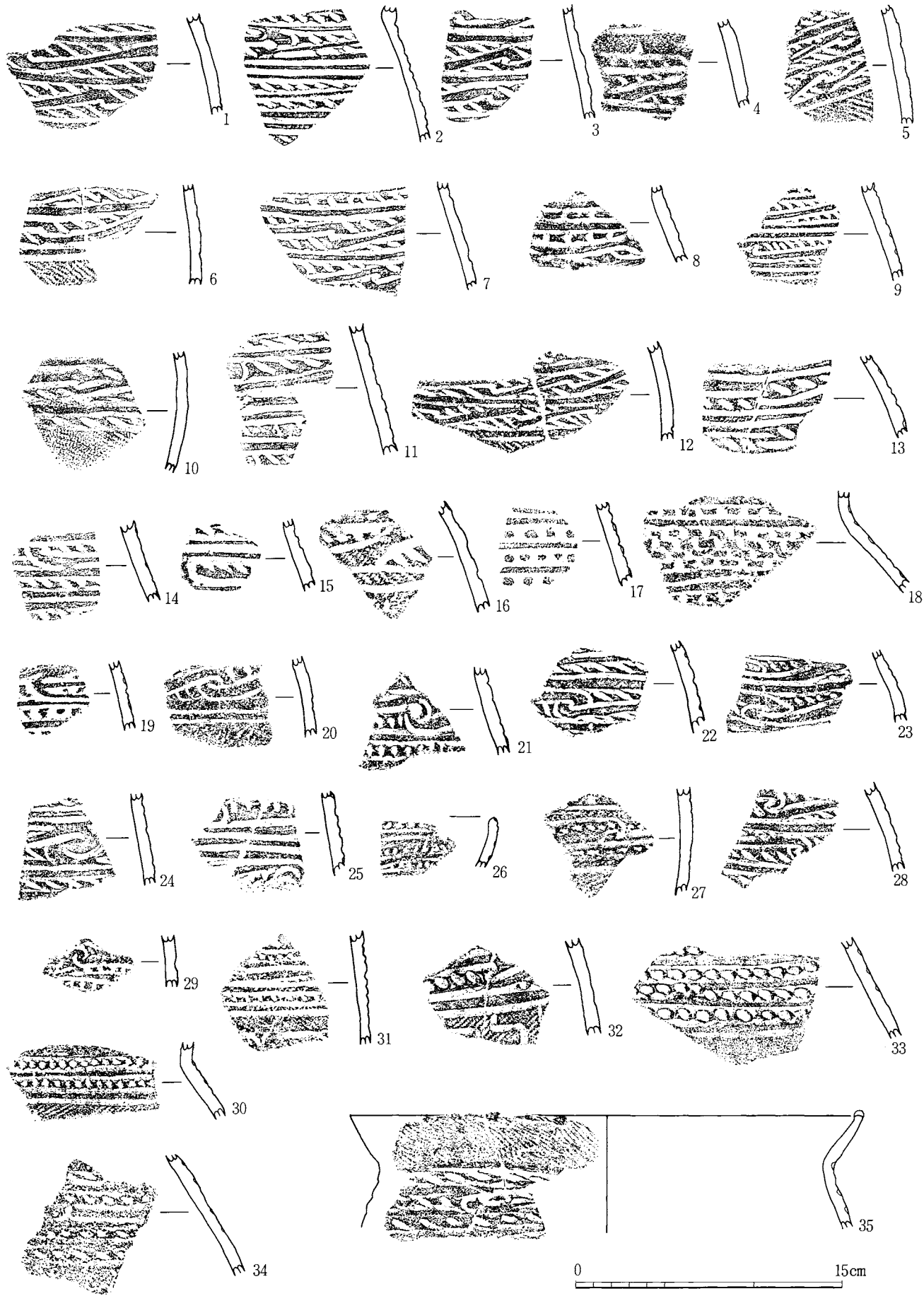
図版207　土器拓本　晩期前葉



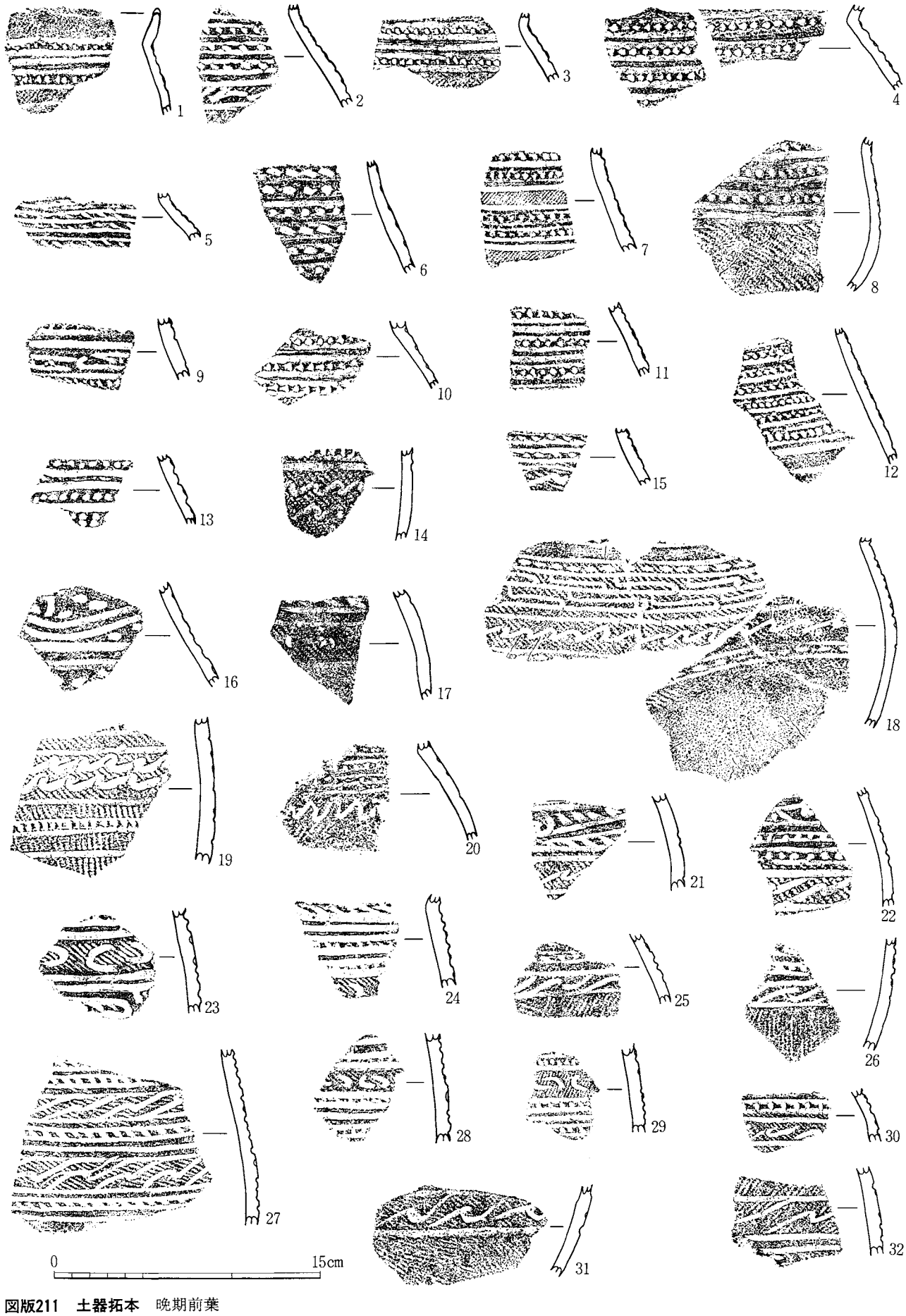
図版208　土器拓本　晩期前葉



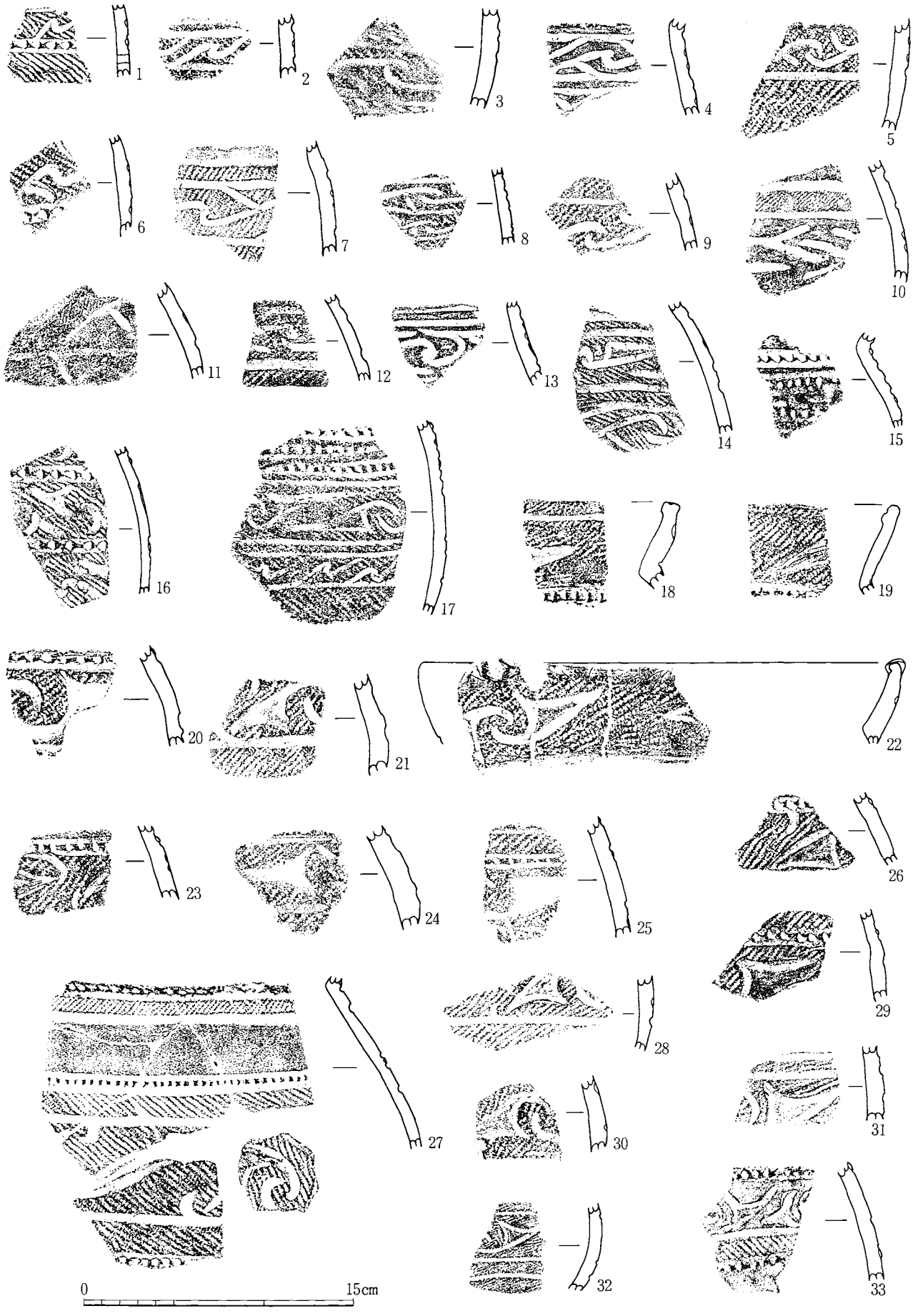
図版209　土器拓本　晩期前葉



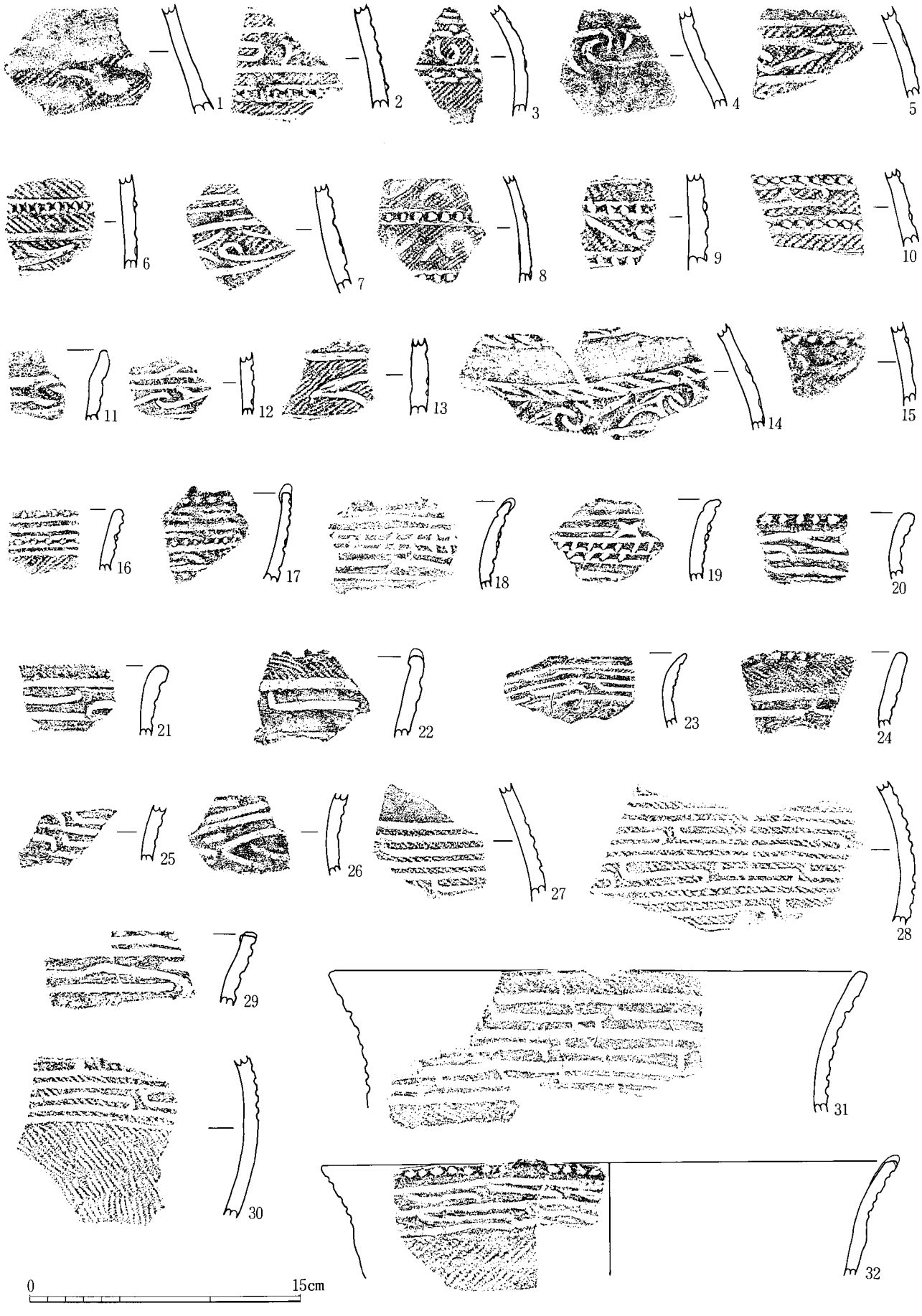
図版210　土器拓本　晩期前葉



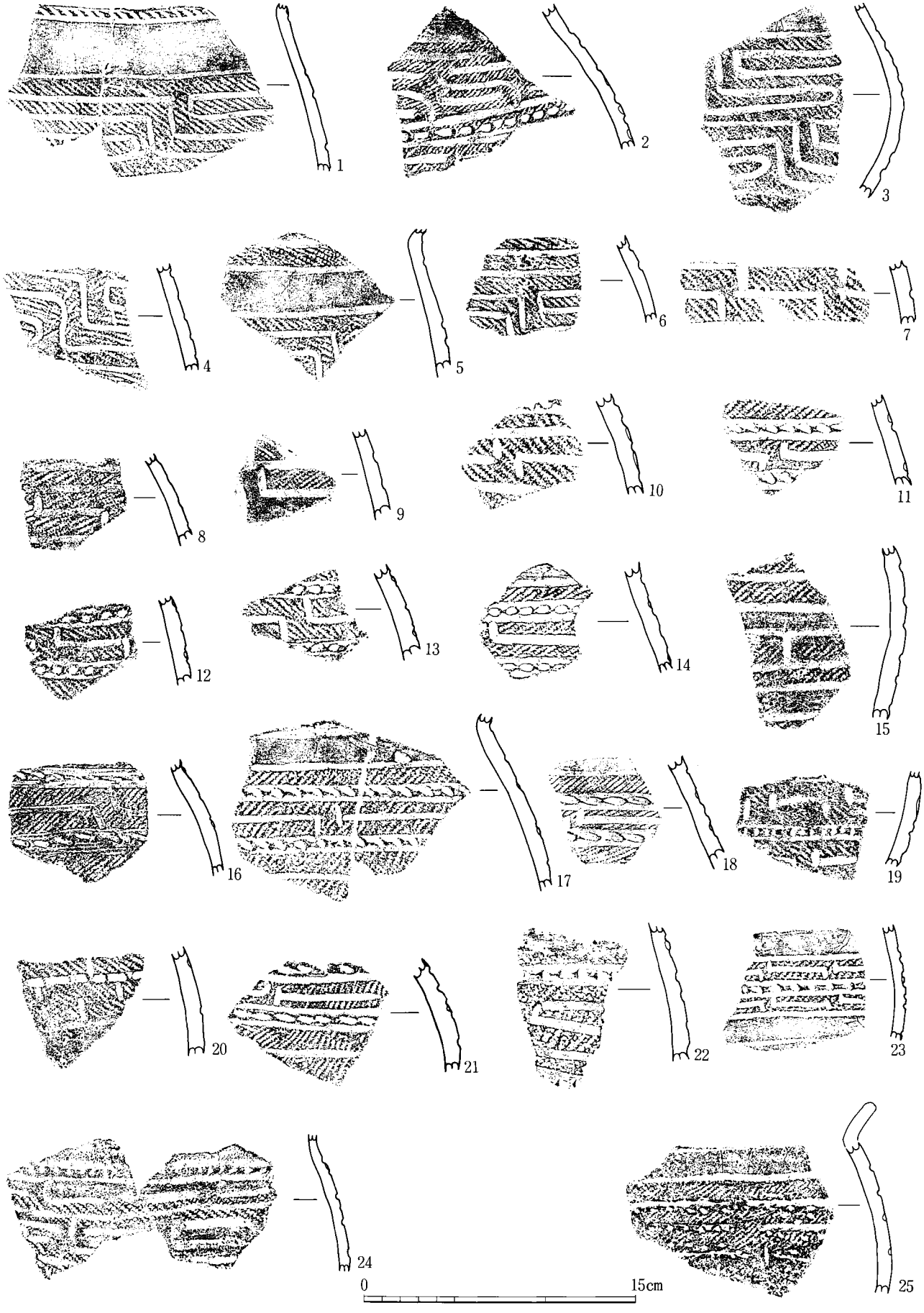
図版211　土器拓本　晩期前葉



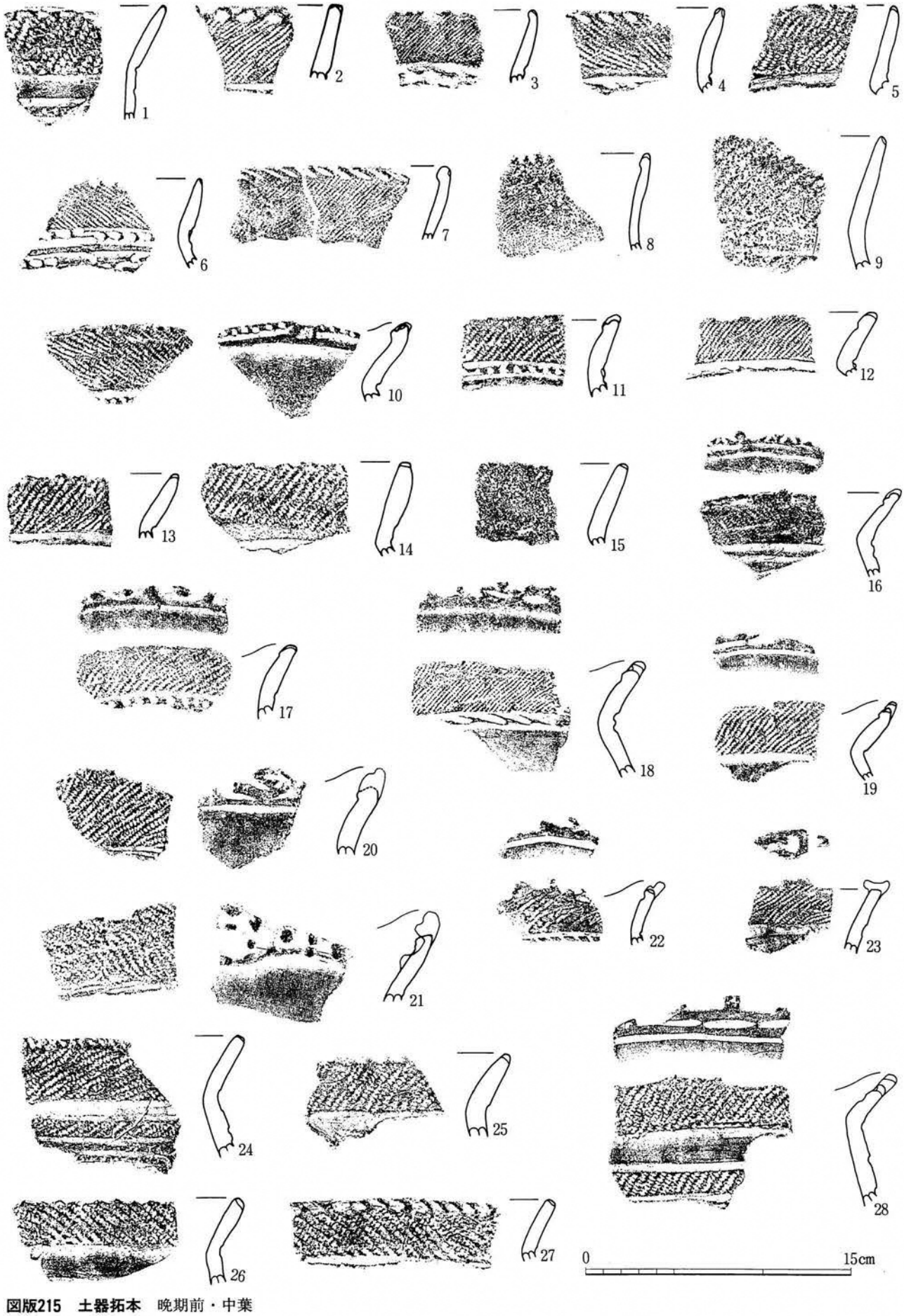
図版212　土器拓本　晩期前・中葉



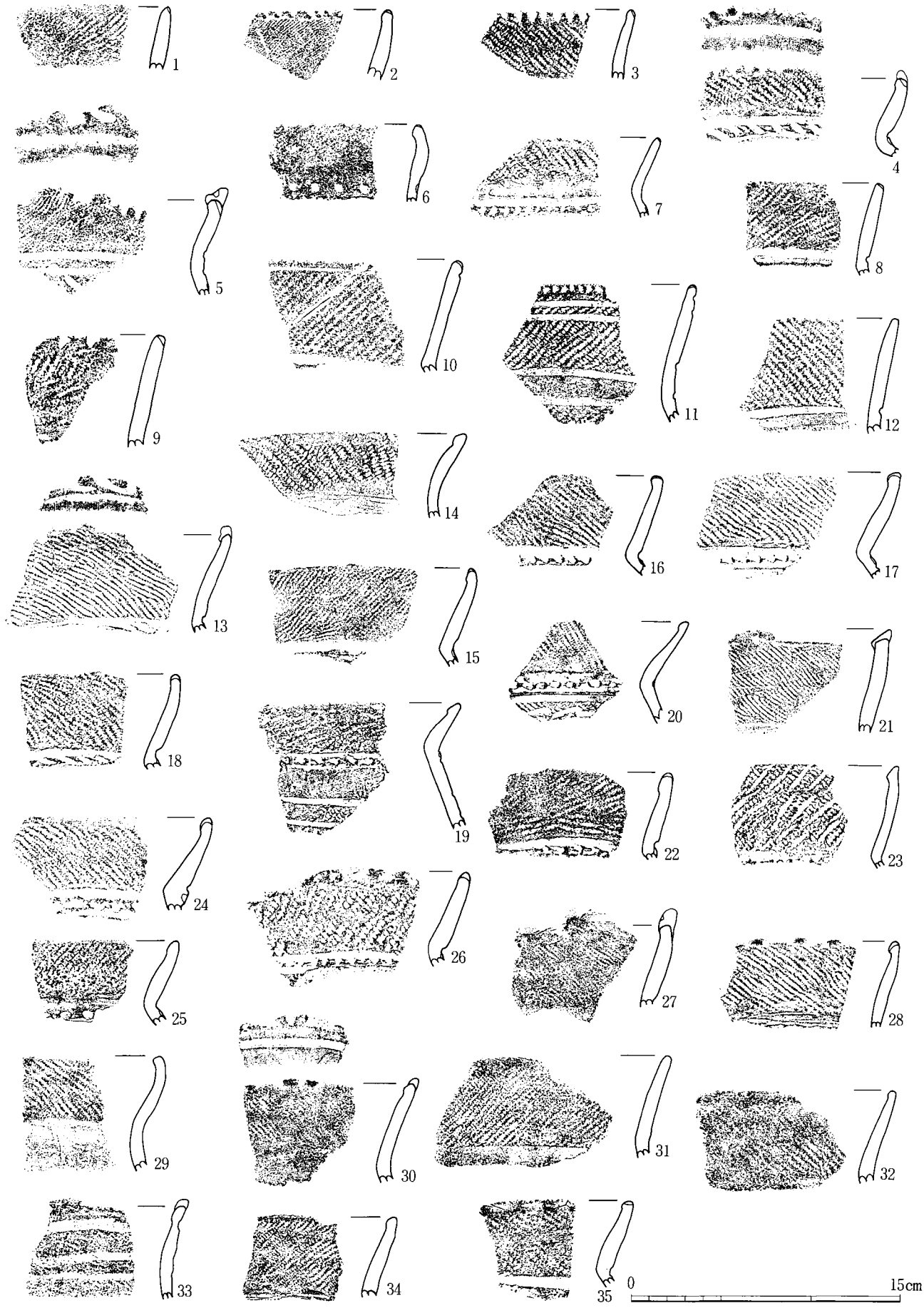
図版213　土器拓本　晩期前・中葉



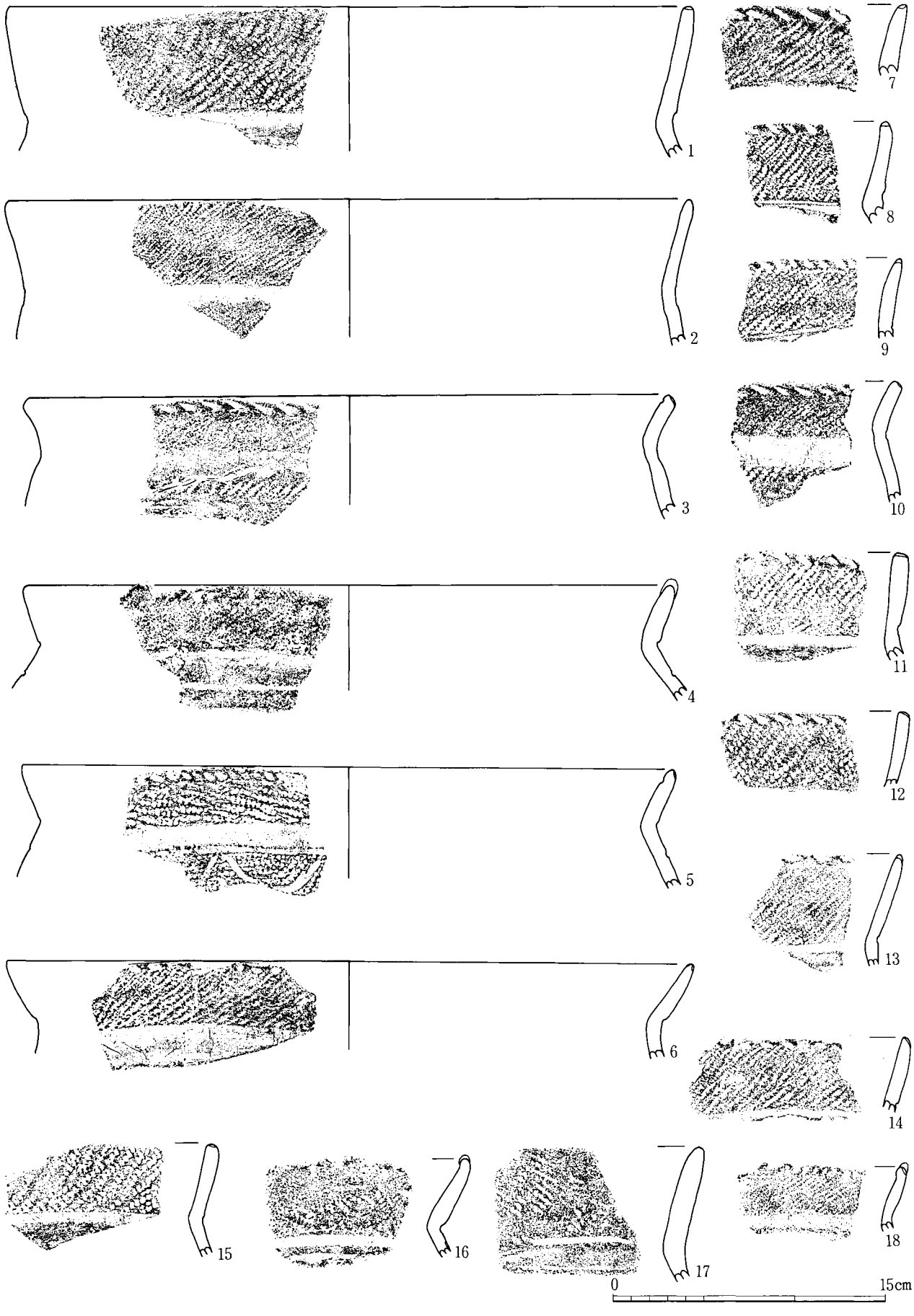
図版214　土器拓本　晩期前・中葉



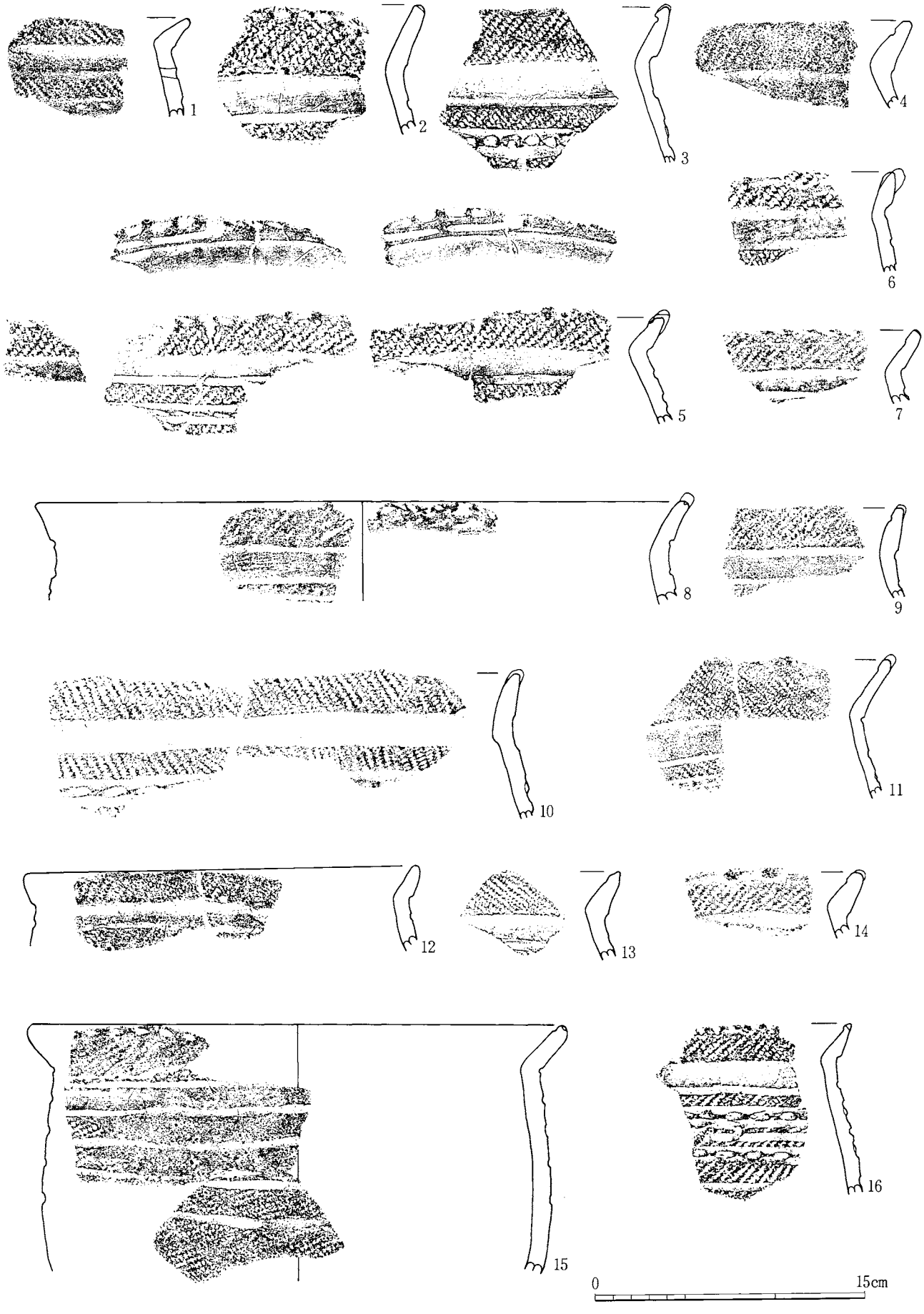
図版215　土器拓本　晩期前・中葉



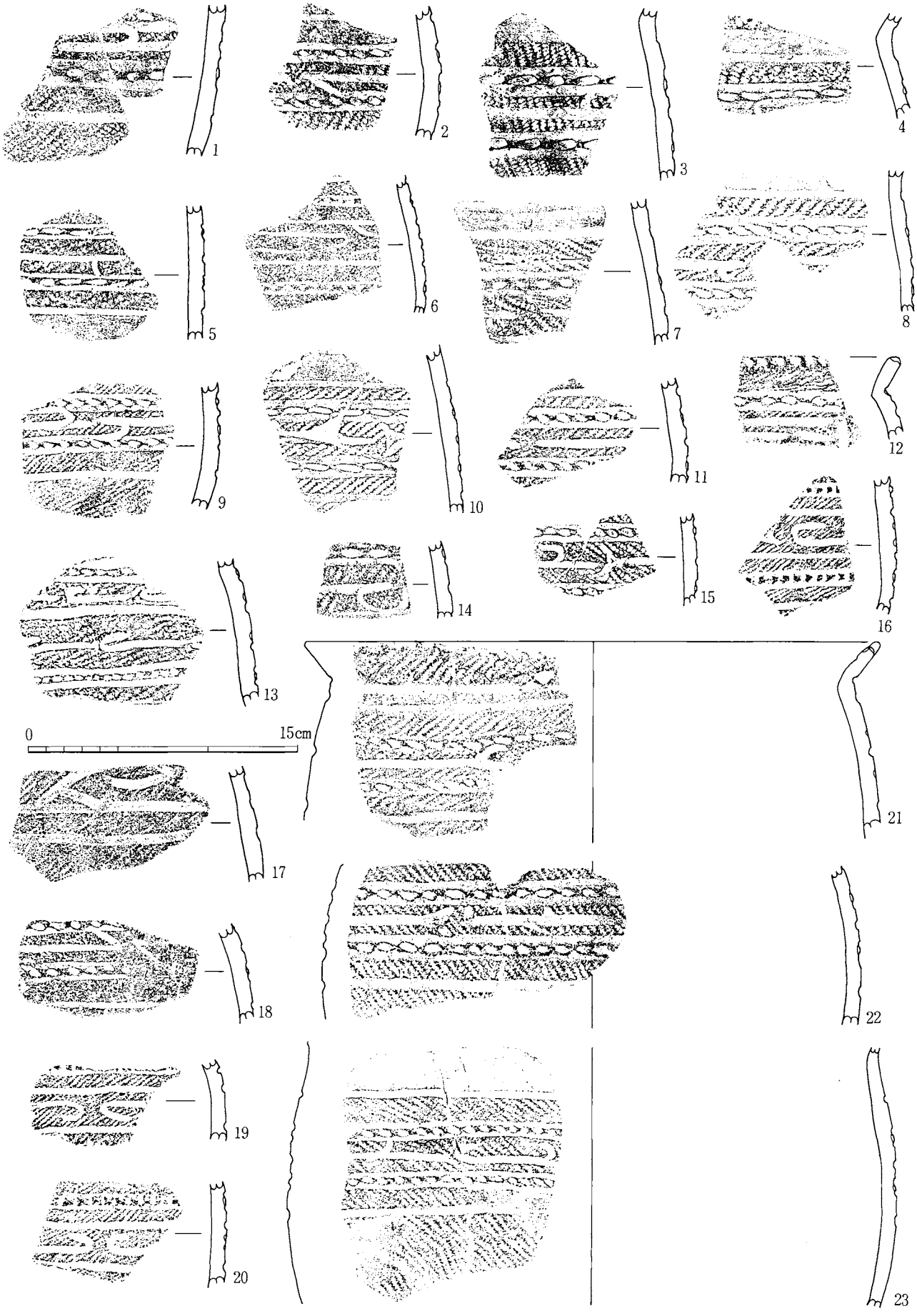
図版216　土器拓本　晩期前・中葉



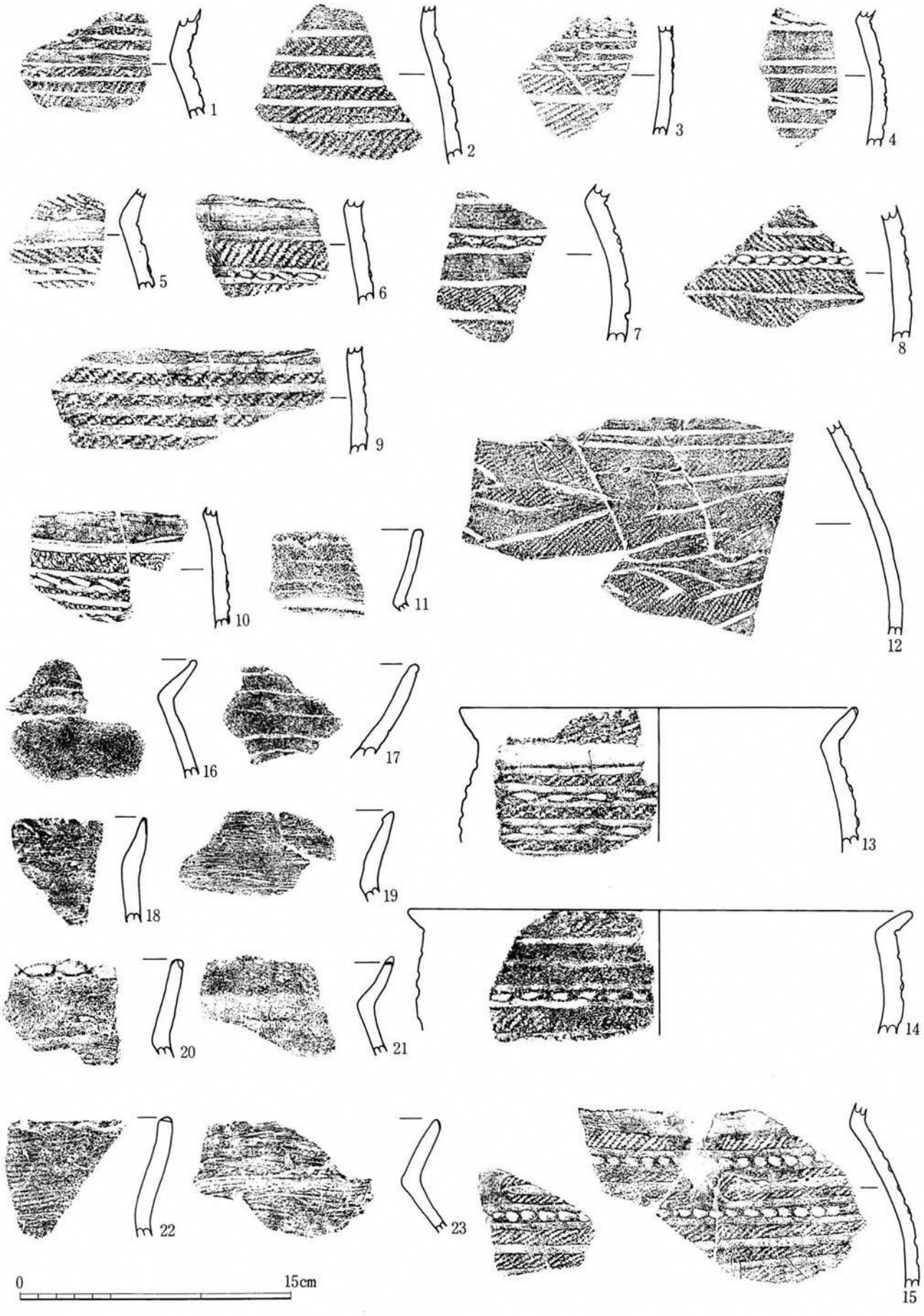
図版217　土器拓本　晩期前・中葉



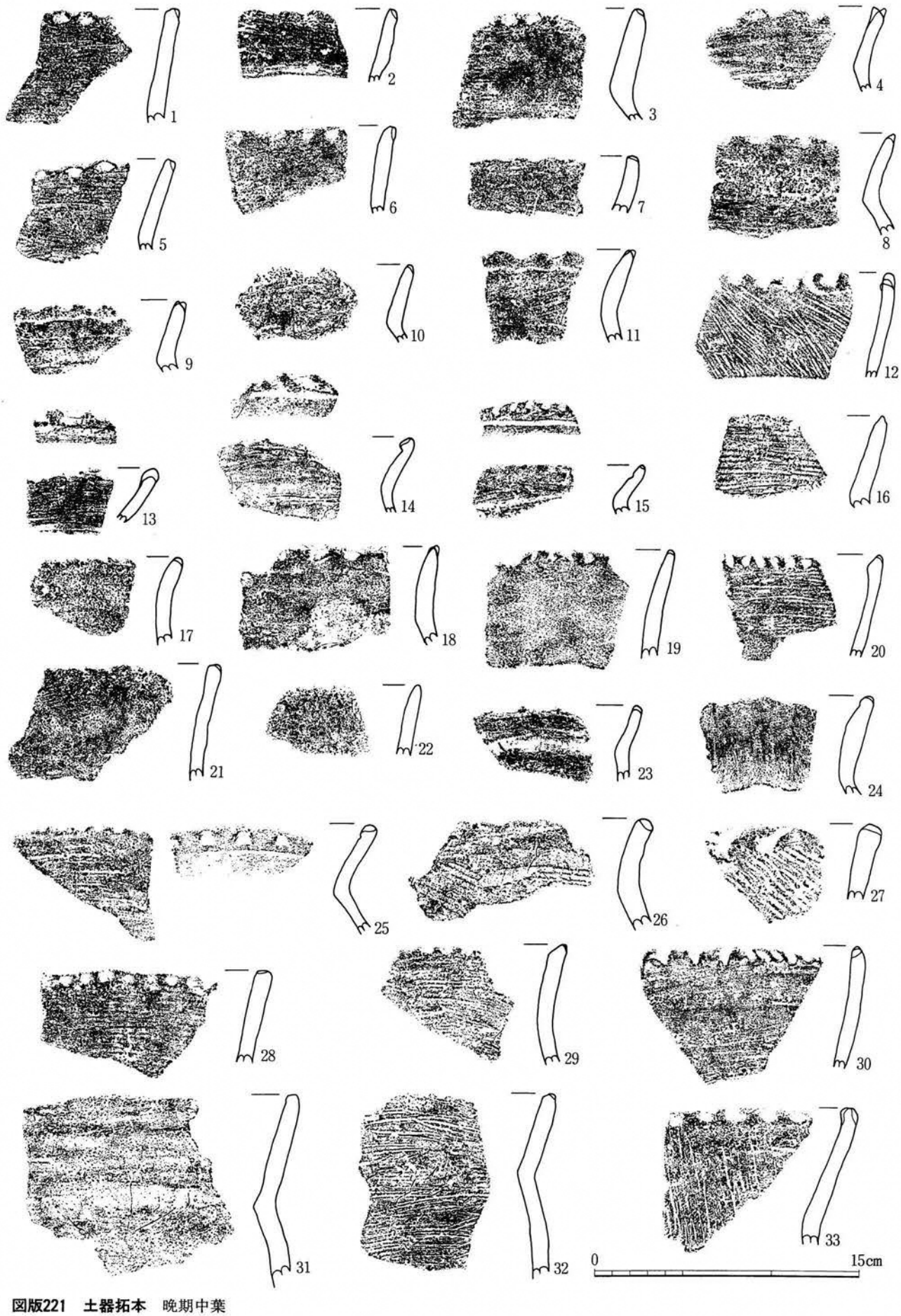
図版218　土器拓本　晩期中葉



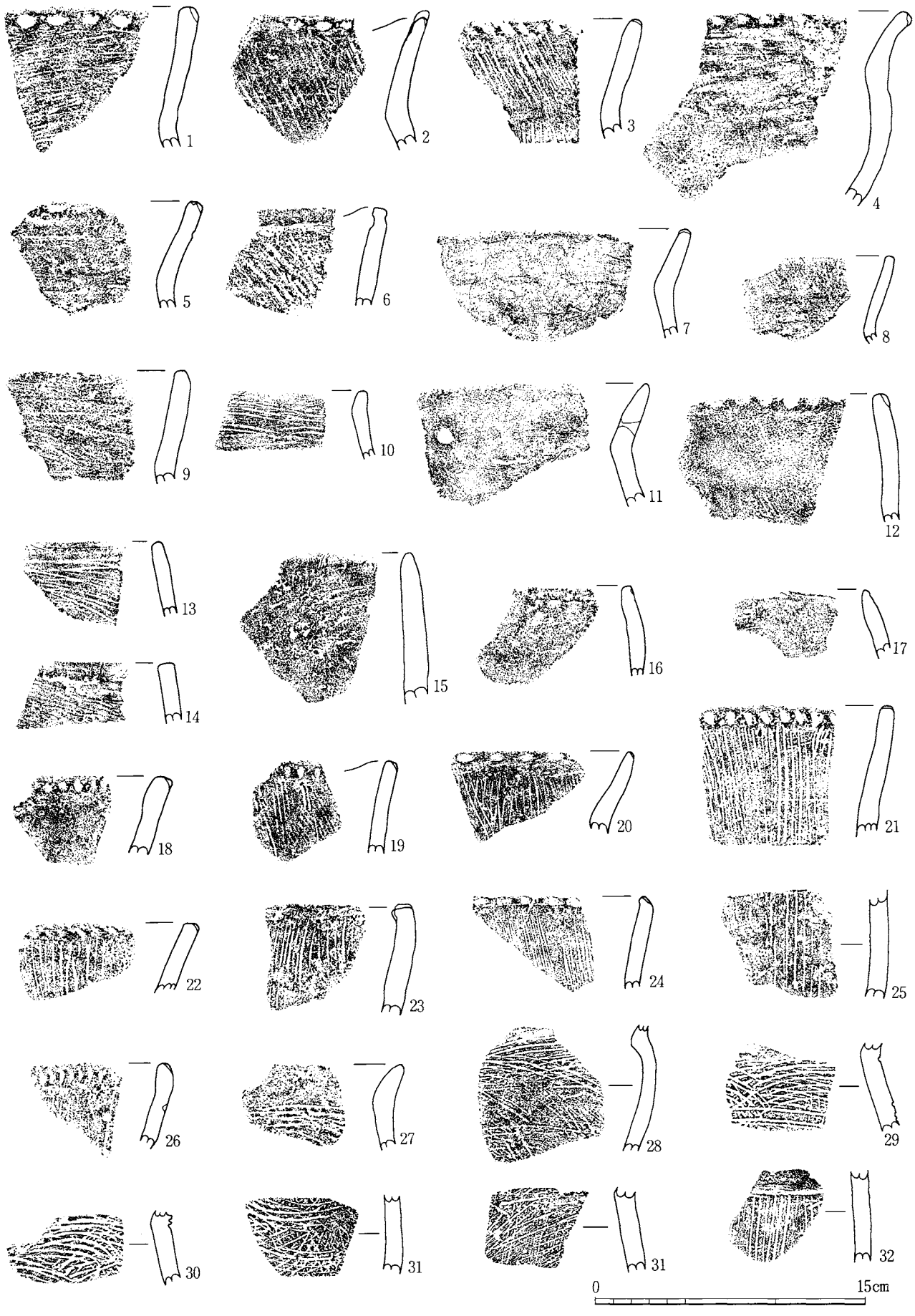
図版219　土器拓本　晩期中葉



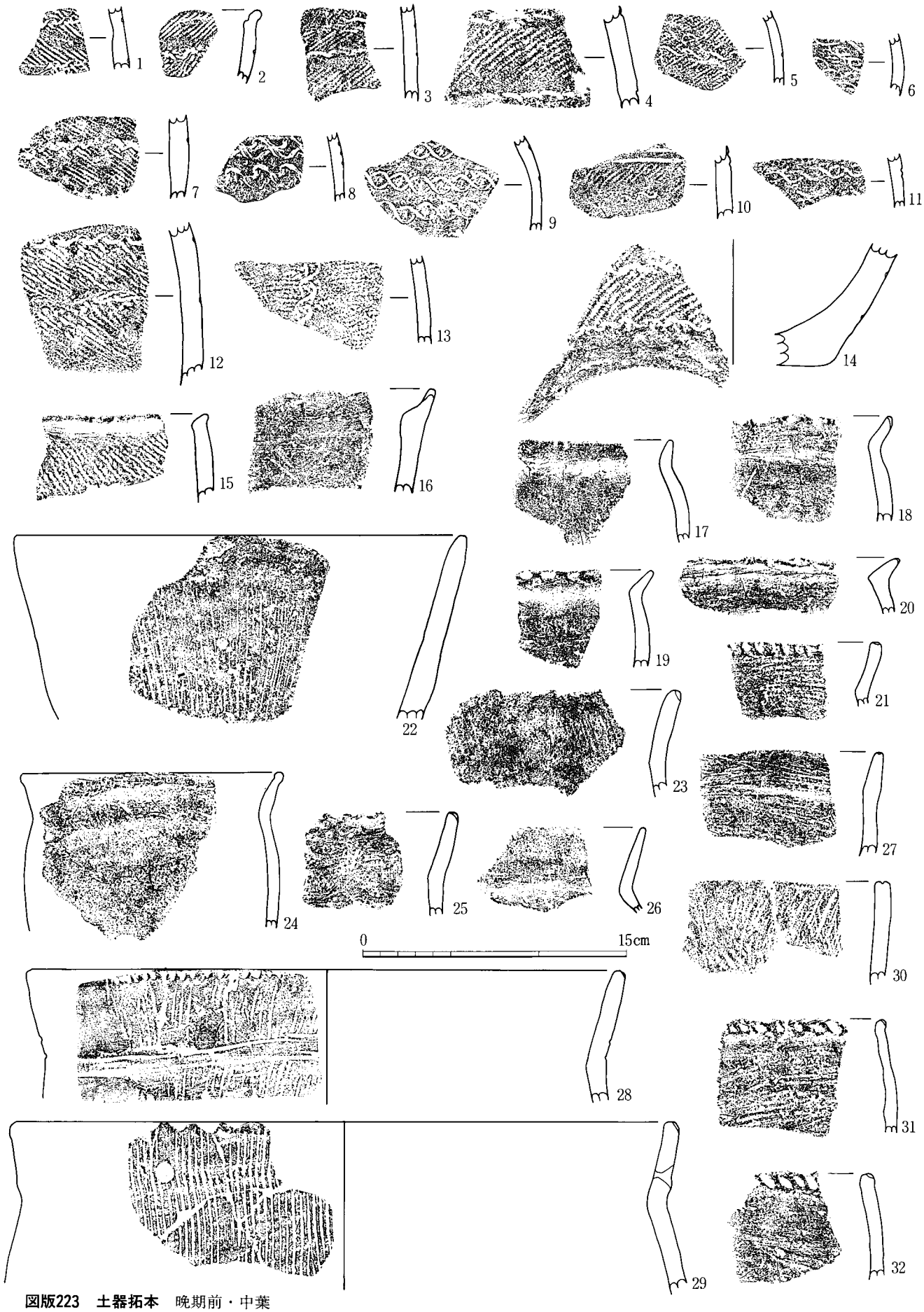
図版220　土器拓本　晩期中葉



図版221　土器拓本　晩期中葉



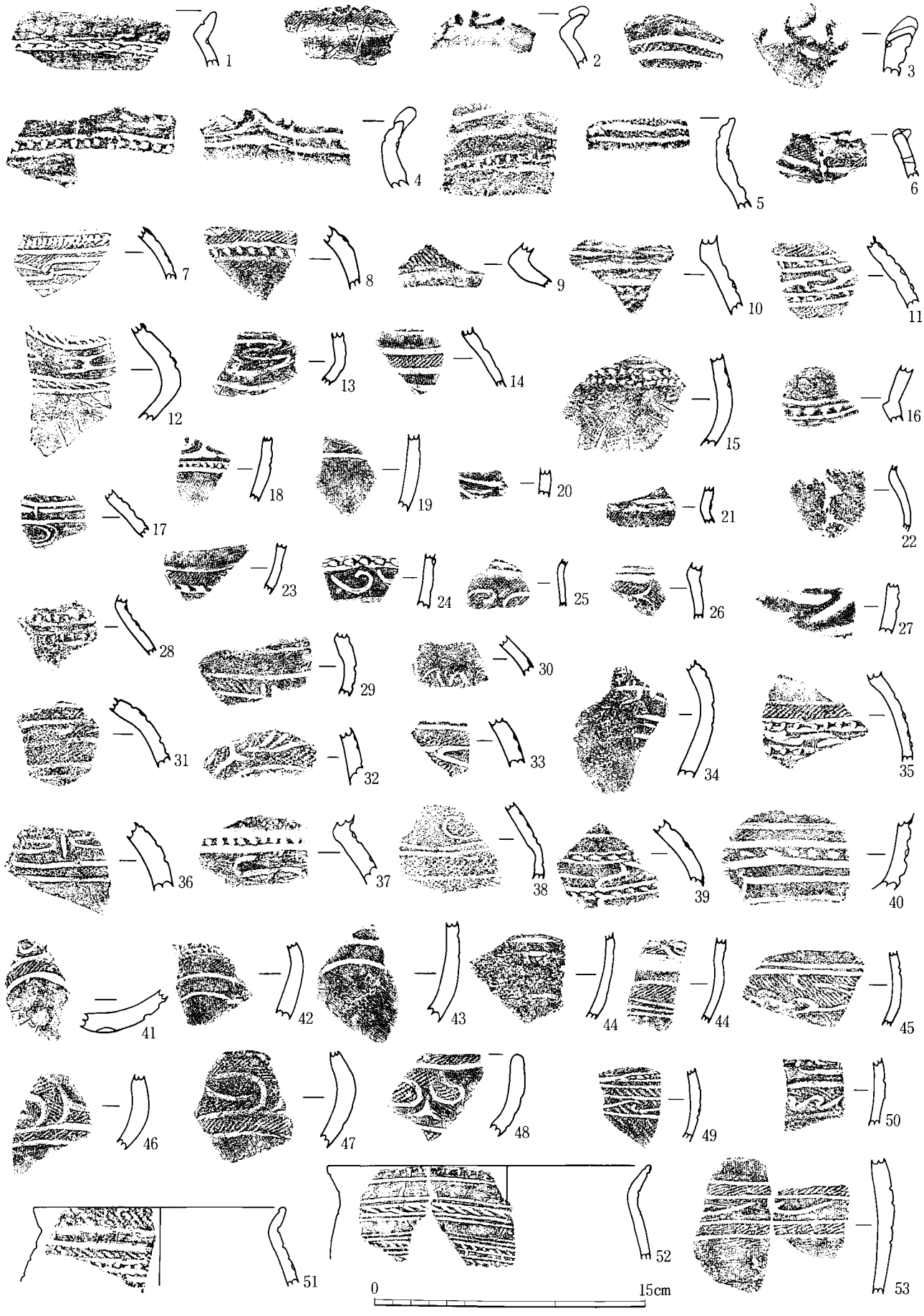
図版222　土器拓本　晩期中葉



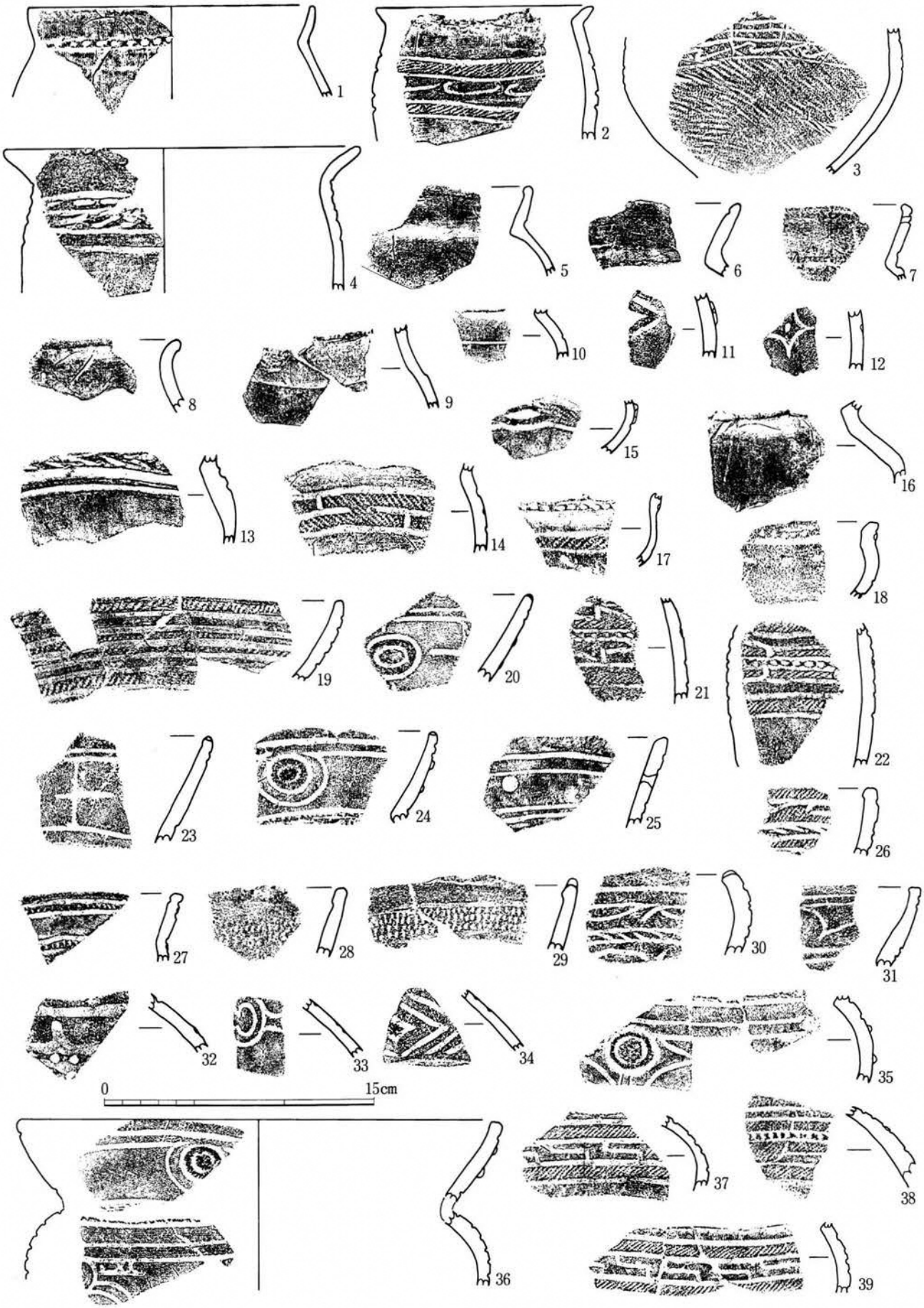
図版223　土器拓本　晩期前・中葉

図版224　土器拓本　晩期前・中葉

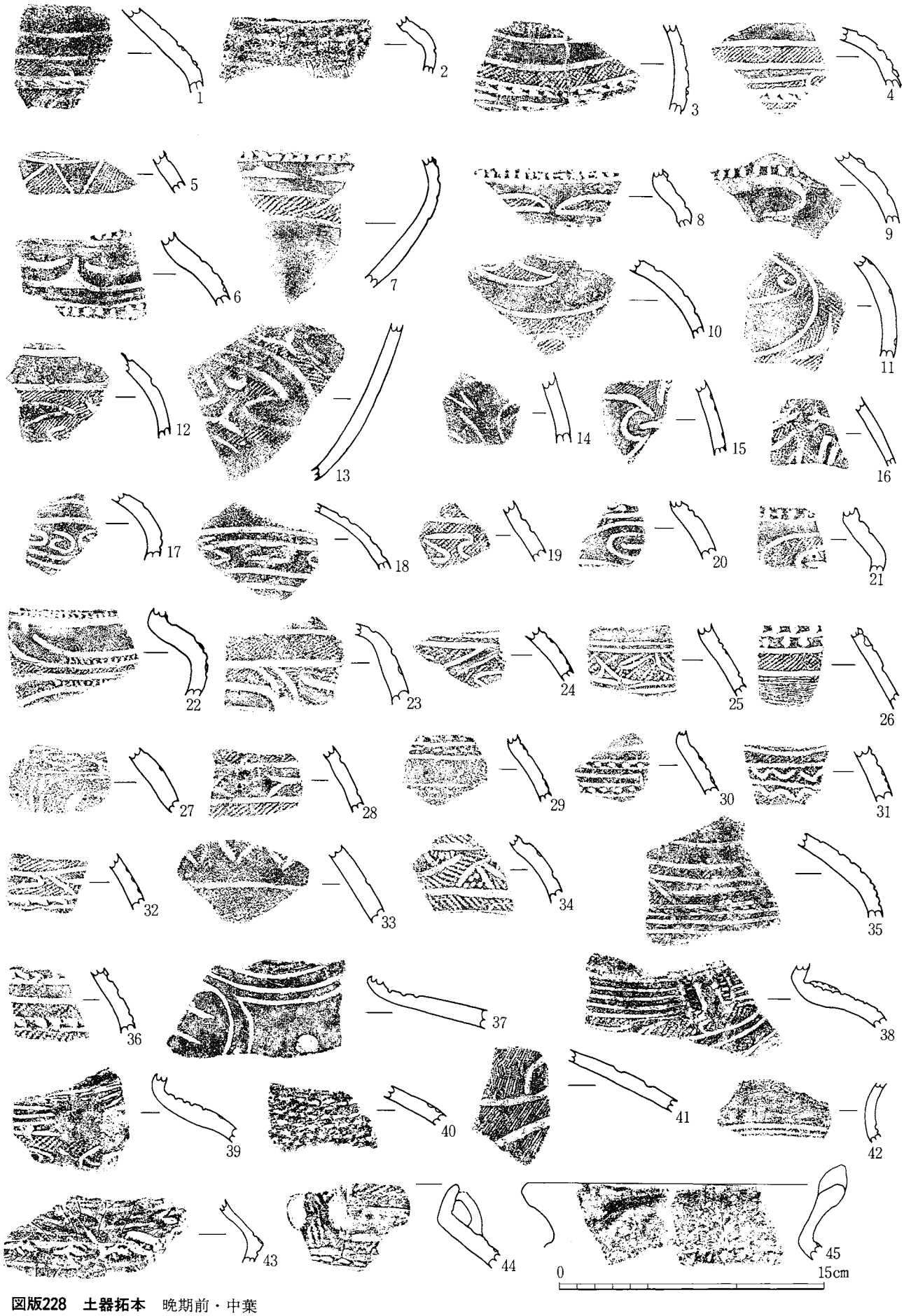
図版225　土器拓本　晩期前・中葉



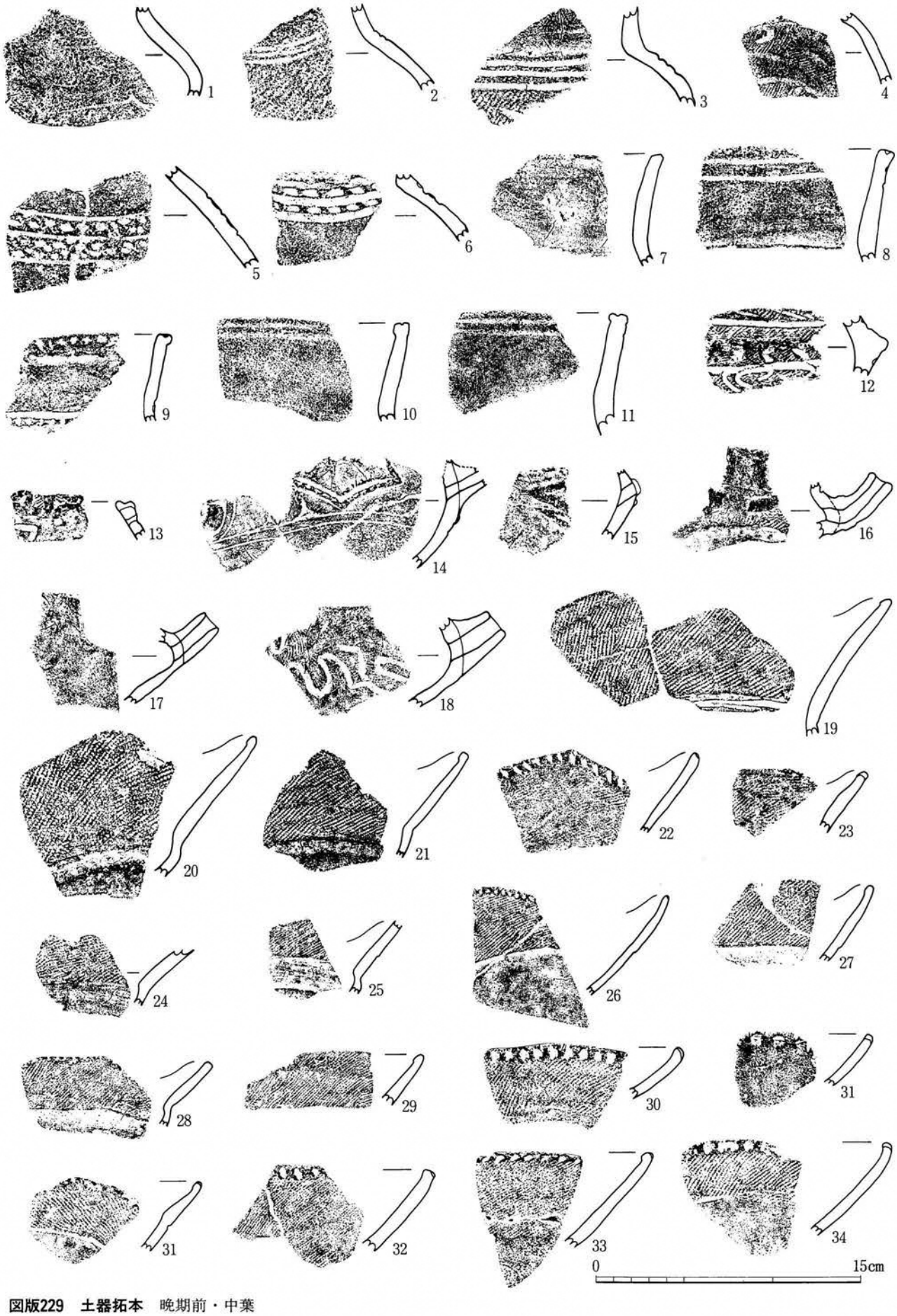
図版226　土器拓本　晩期前・中葉



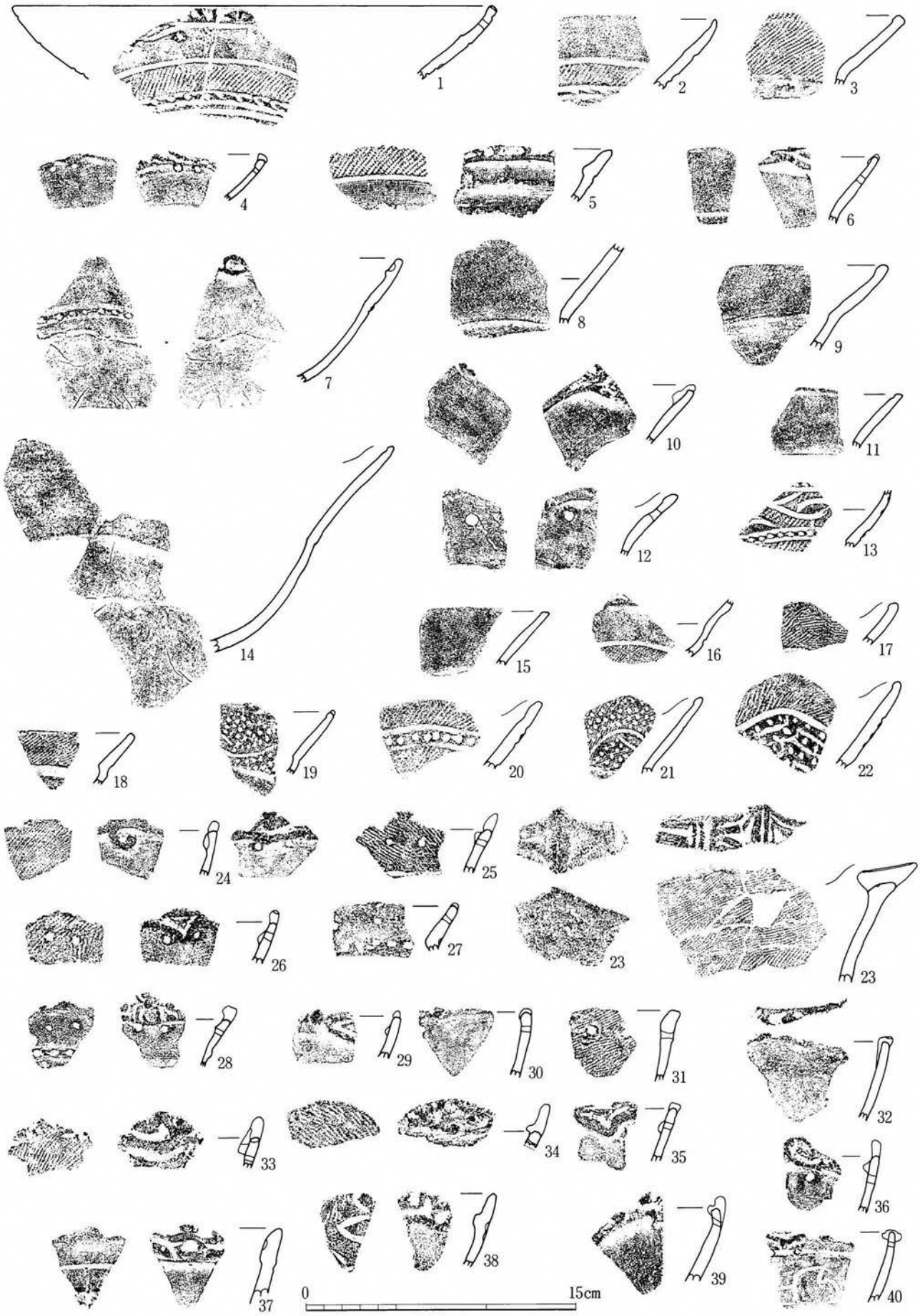
図版227　土器拓本　晩期前・中葉



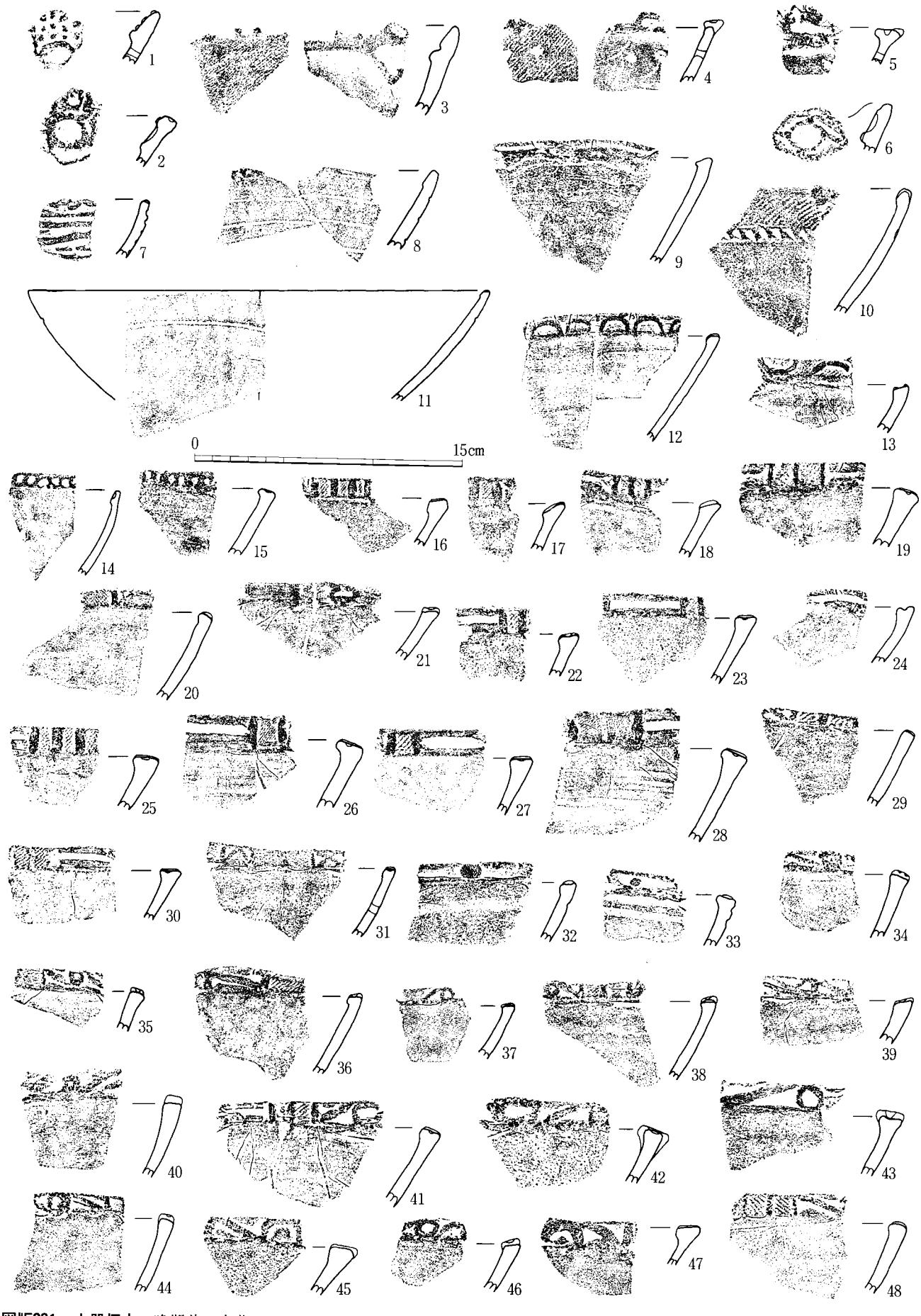
図版228　土器拓本　晩期前・中葉



図版229　土器拓本　晩期前・中葉



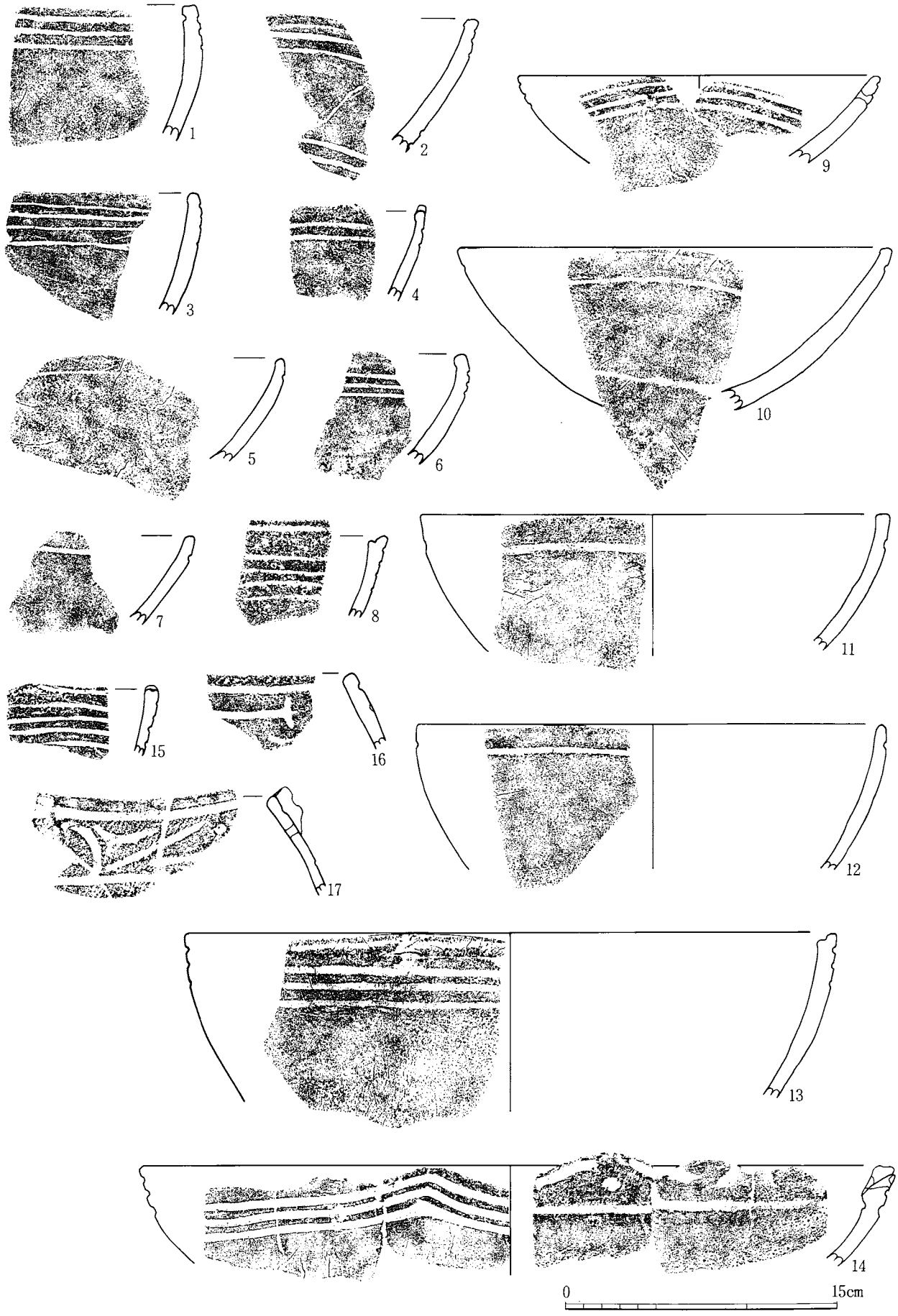
図版230　土器拓本　晩期前・中葉



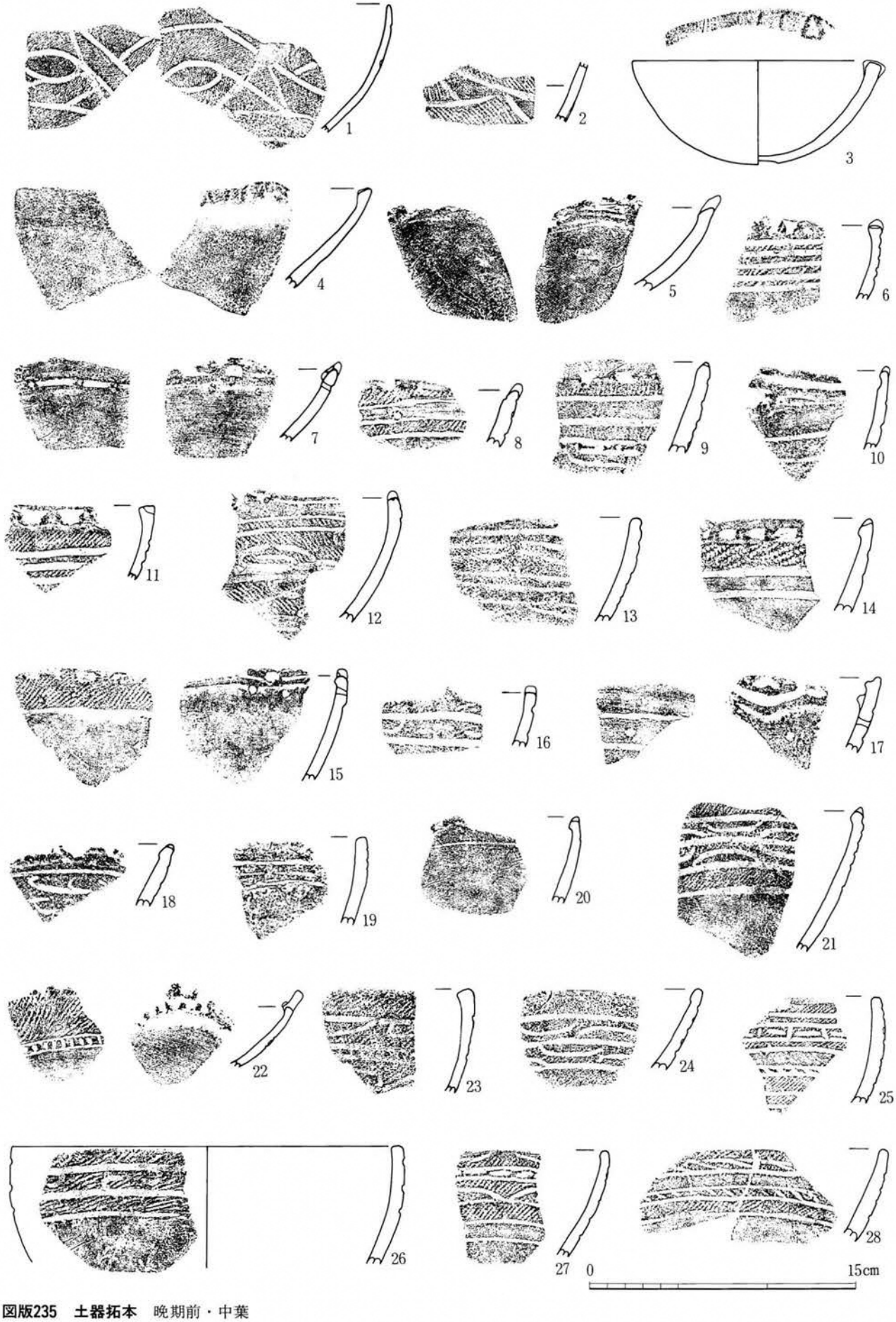
図版231　土器拓本　晩期前・中葉

図版232　土器拓本　晩期前・中葉

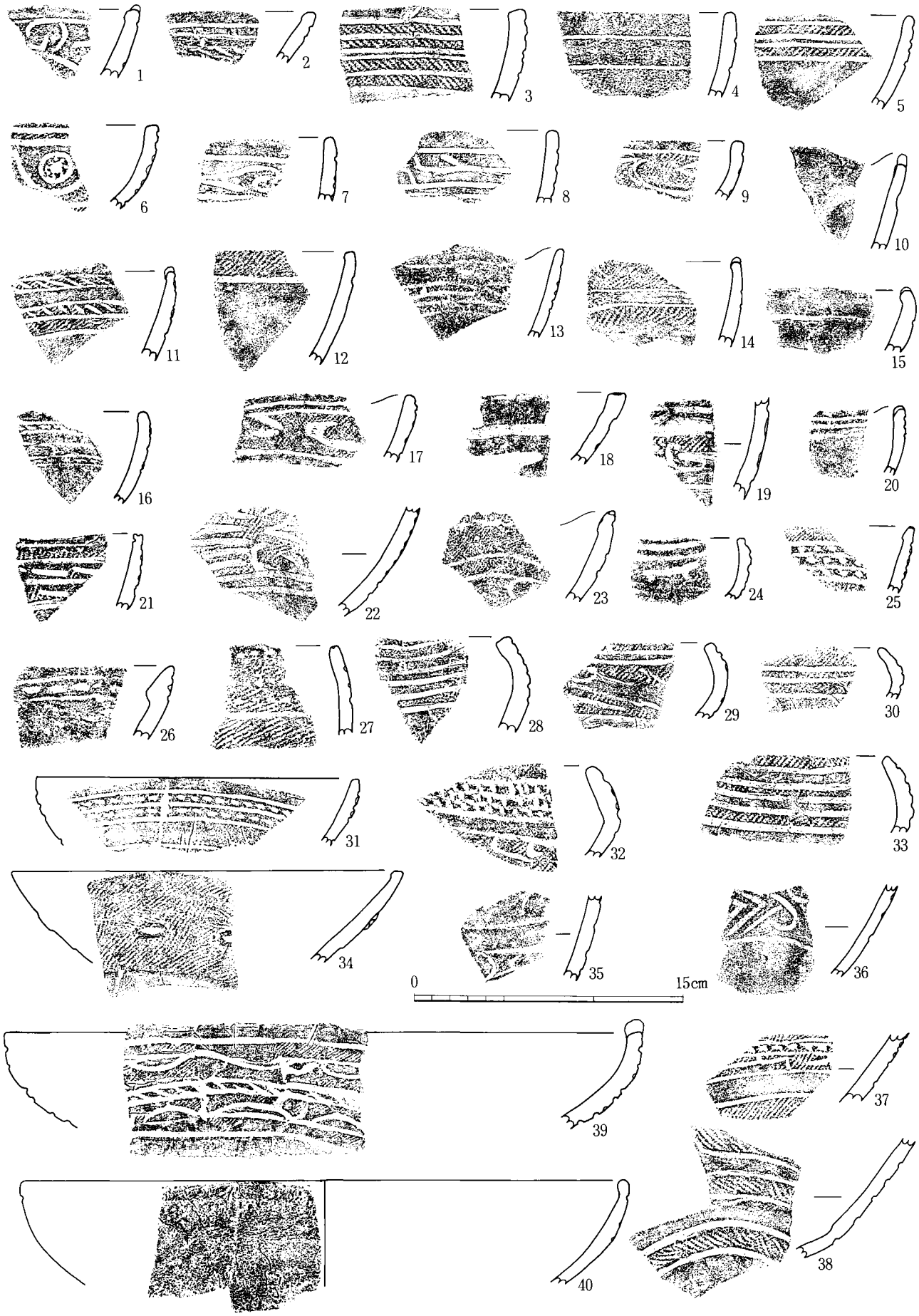
図版233　土器拓本　晩期中葉



図版234　土器拓本　晩期中葉

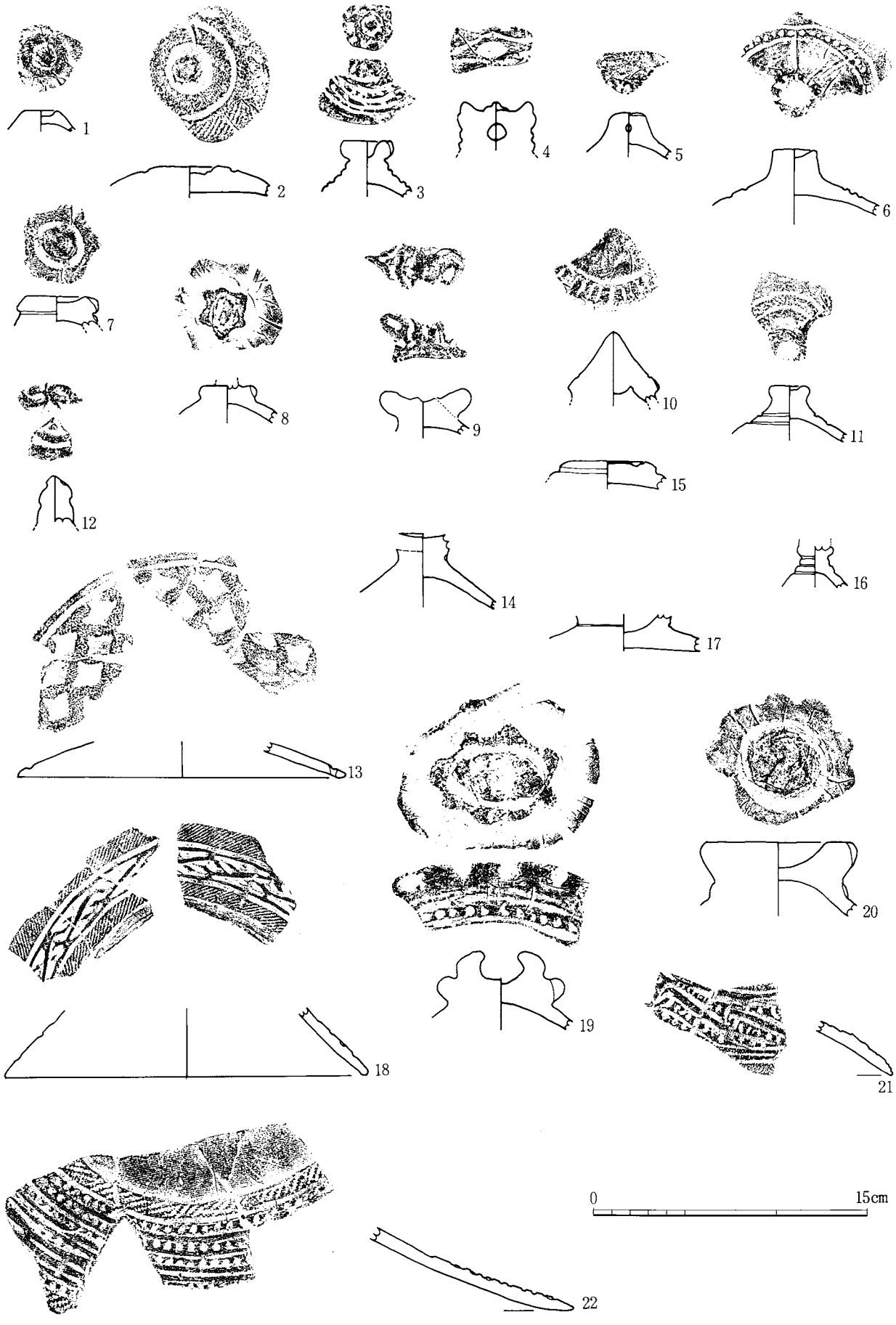


図版235　土器拓本　晩期前・中葉

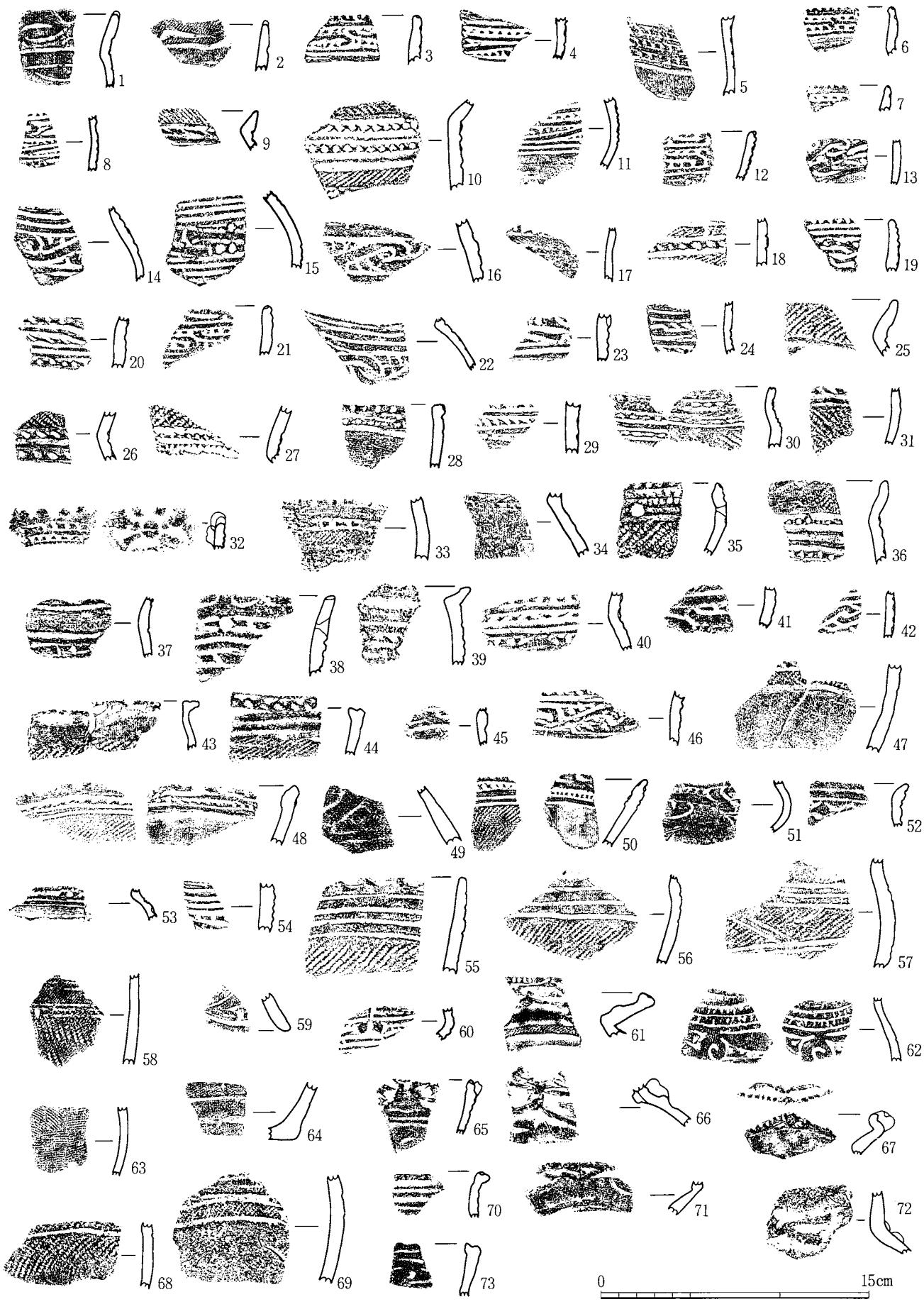


図版236　土器拓本　晩期前・中葉

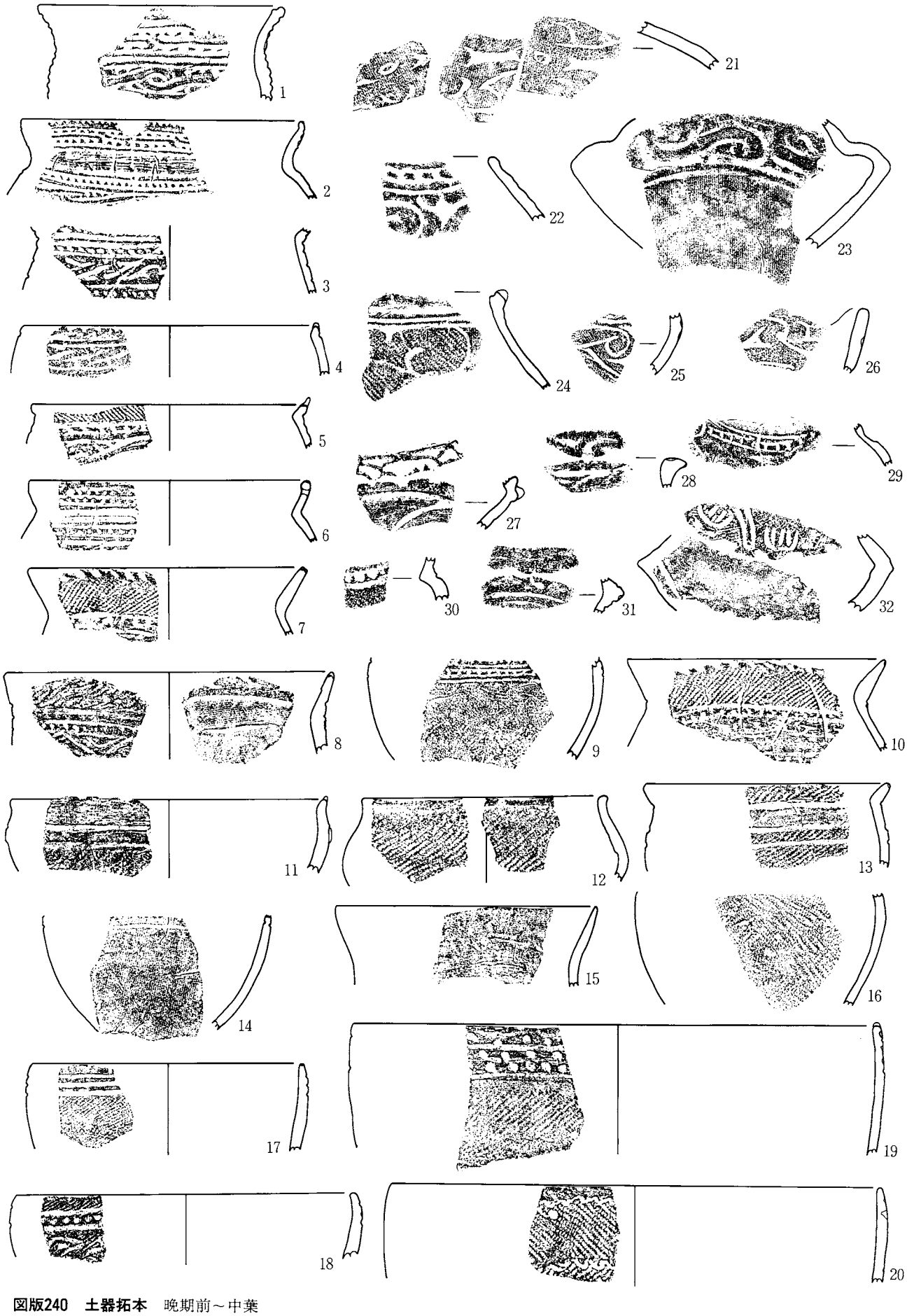
図版237　土器拓本　晩期前・中葉



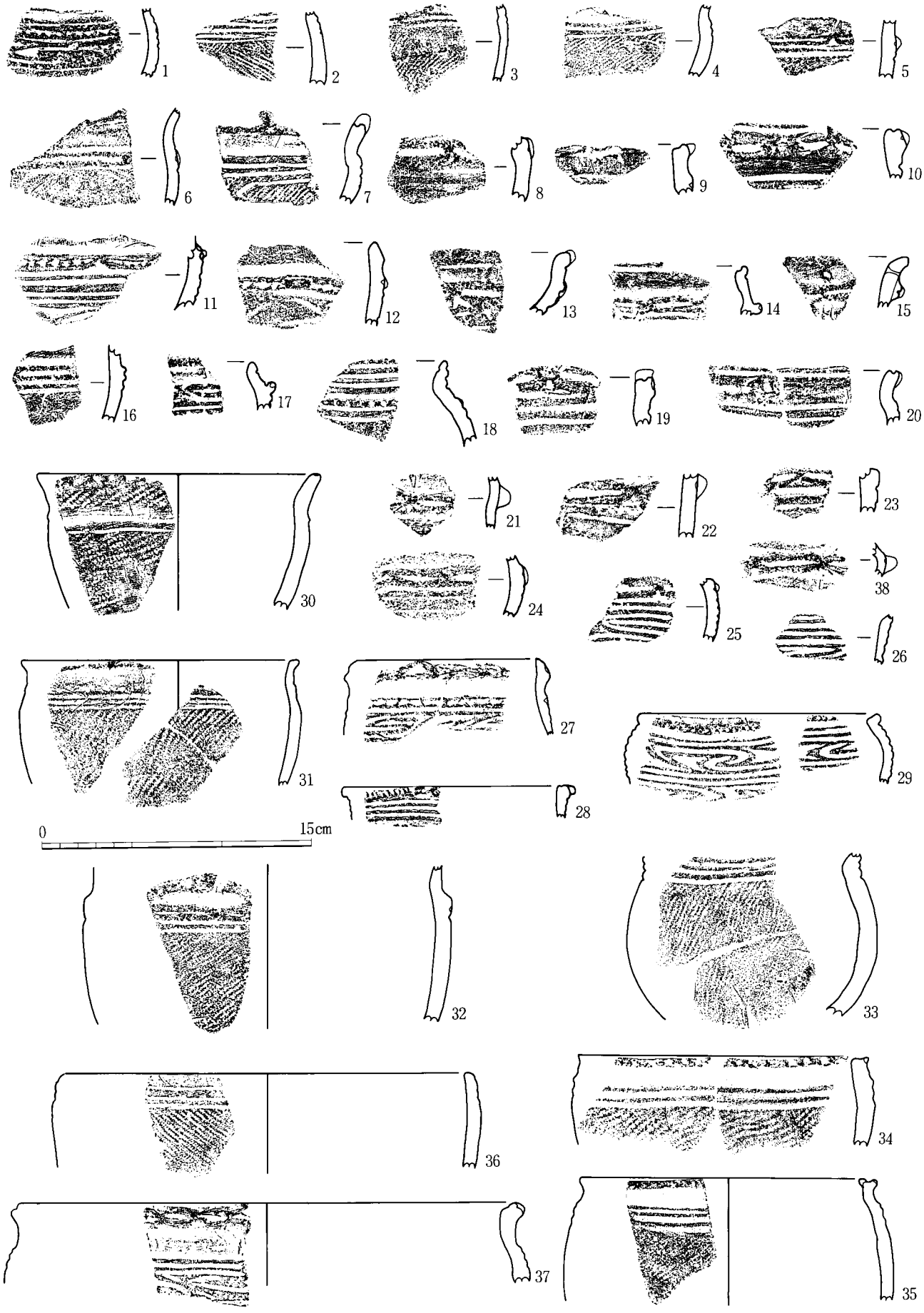
図版238　土器拓本　晩期前・中葉



図版239　土器拓本　晩期前・中葉

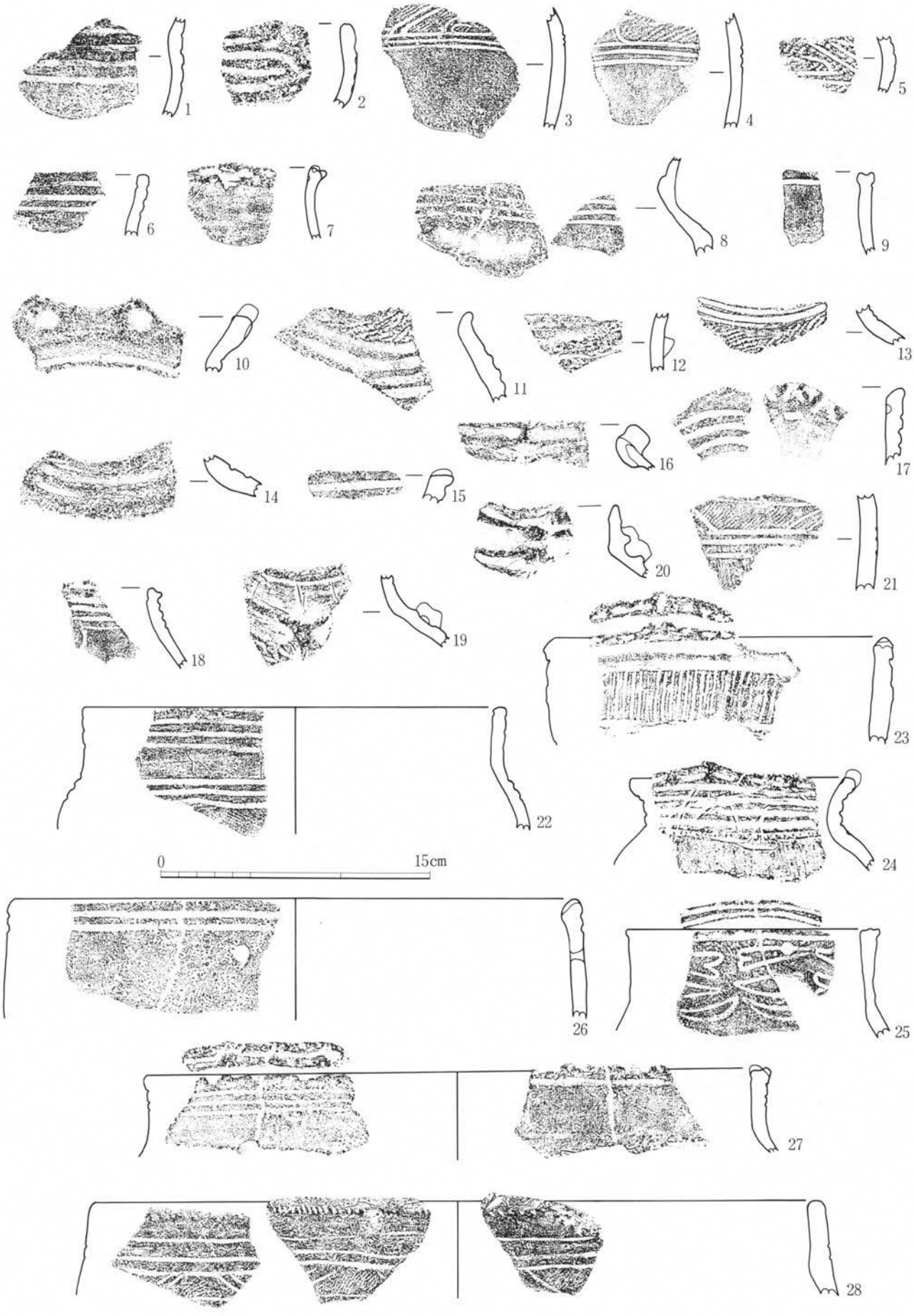


図版240　土器拓本　晩期前～中葉

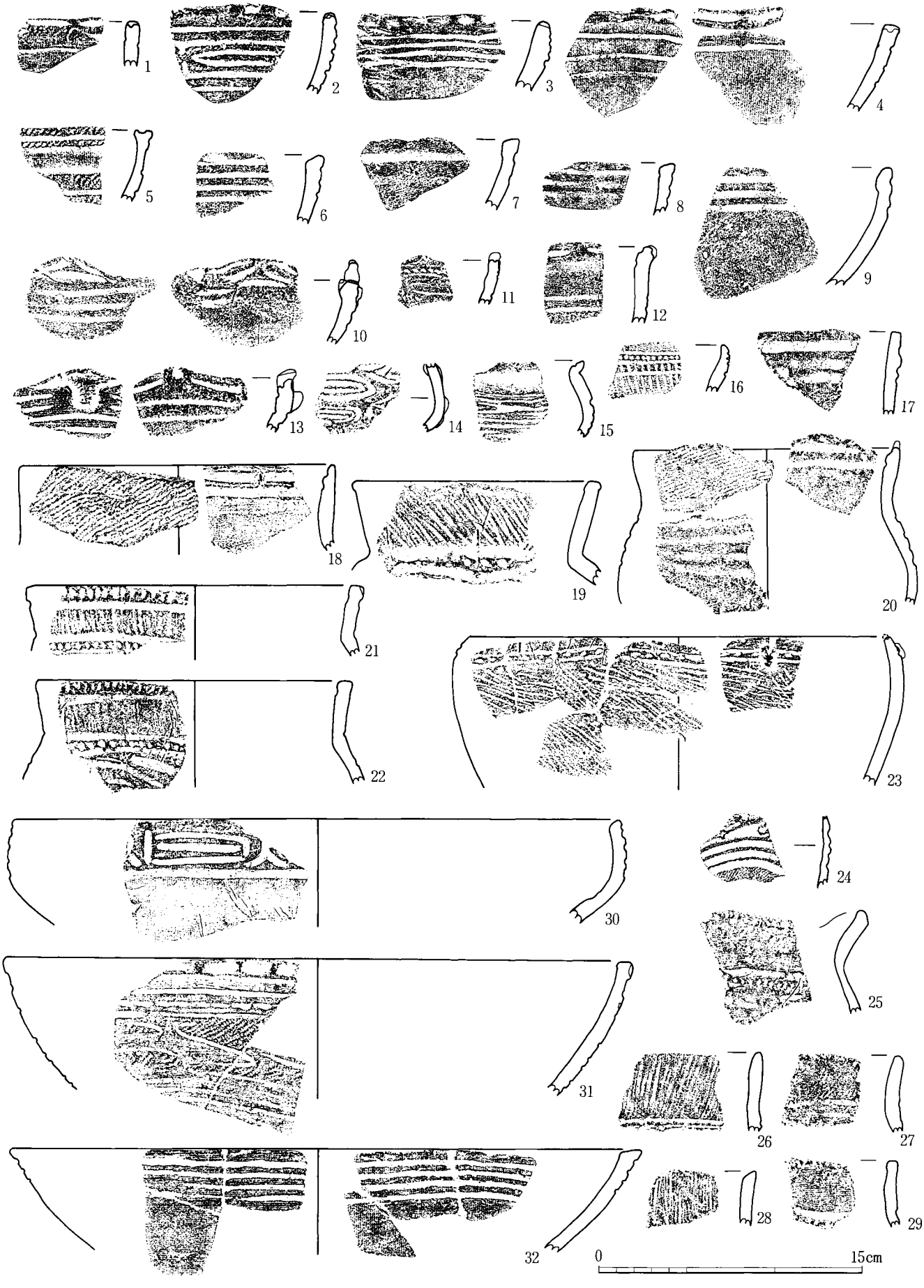


図版241　土器拓本　晩期中葉

図版242　土器拓本　晩期中葉

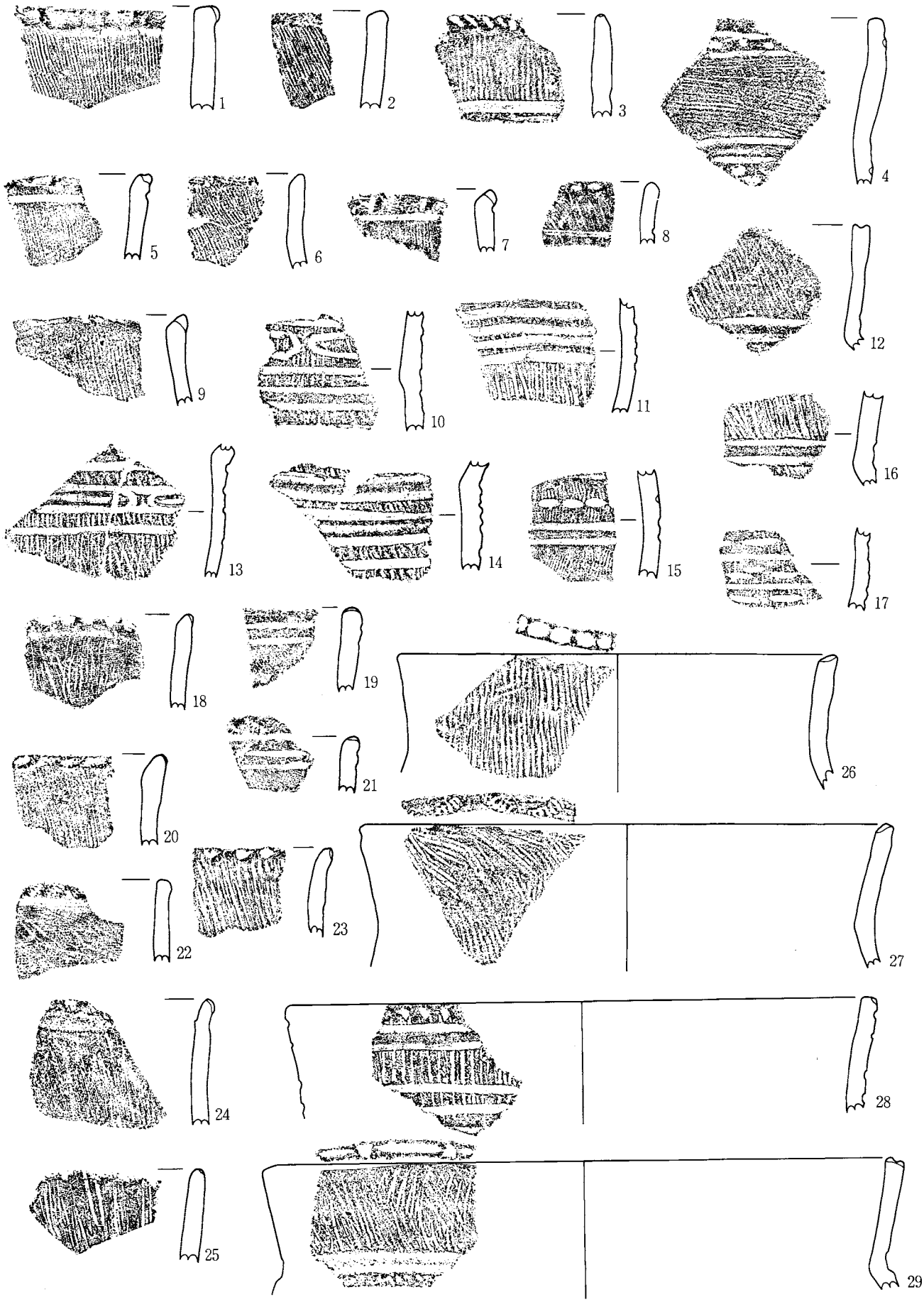


図版243　土器拓本　晩期中葉

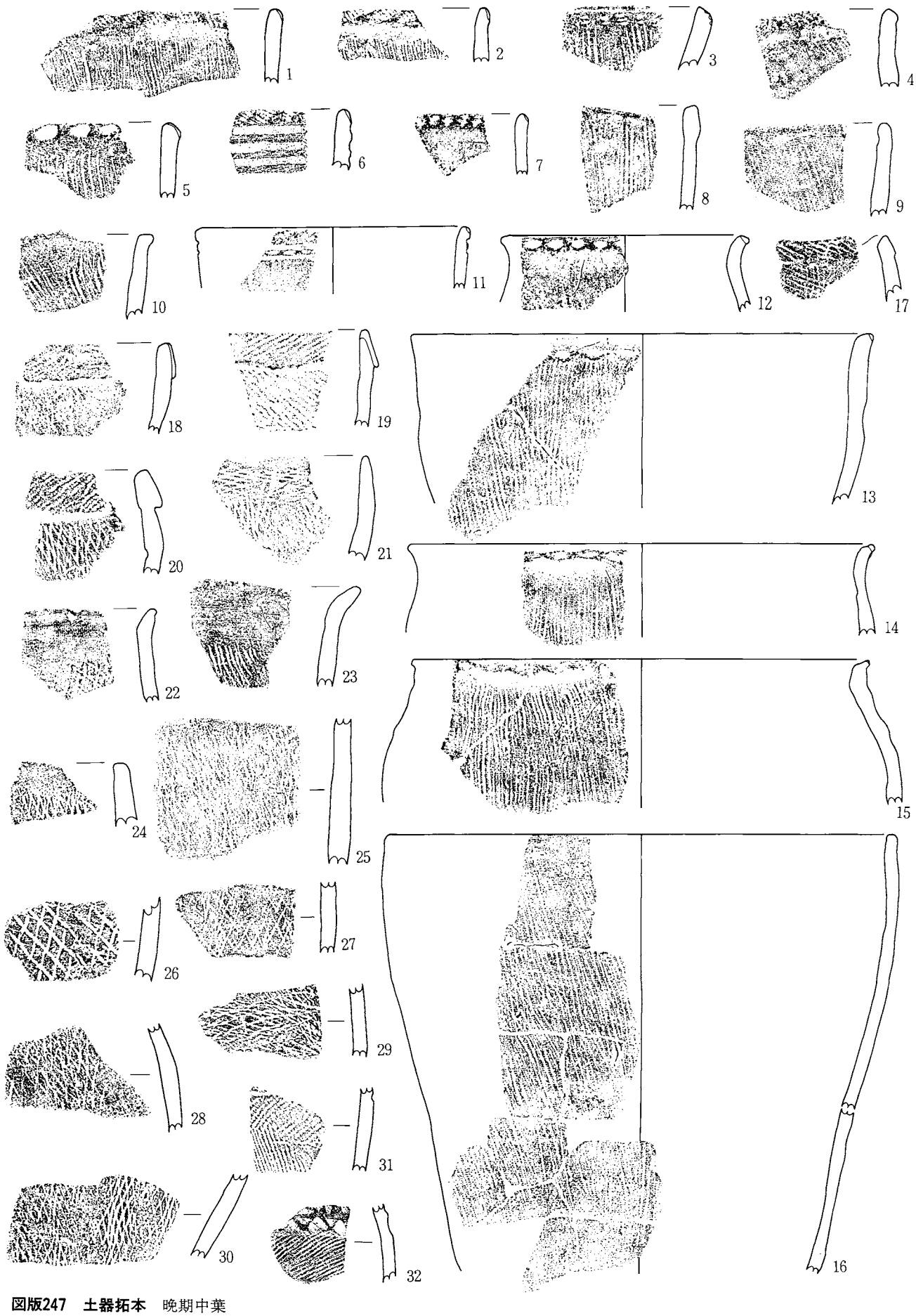


図版244　土器拓本　晩期中葉

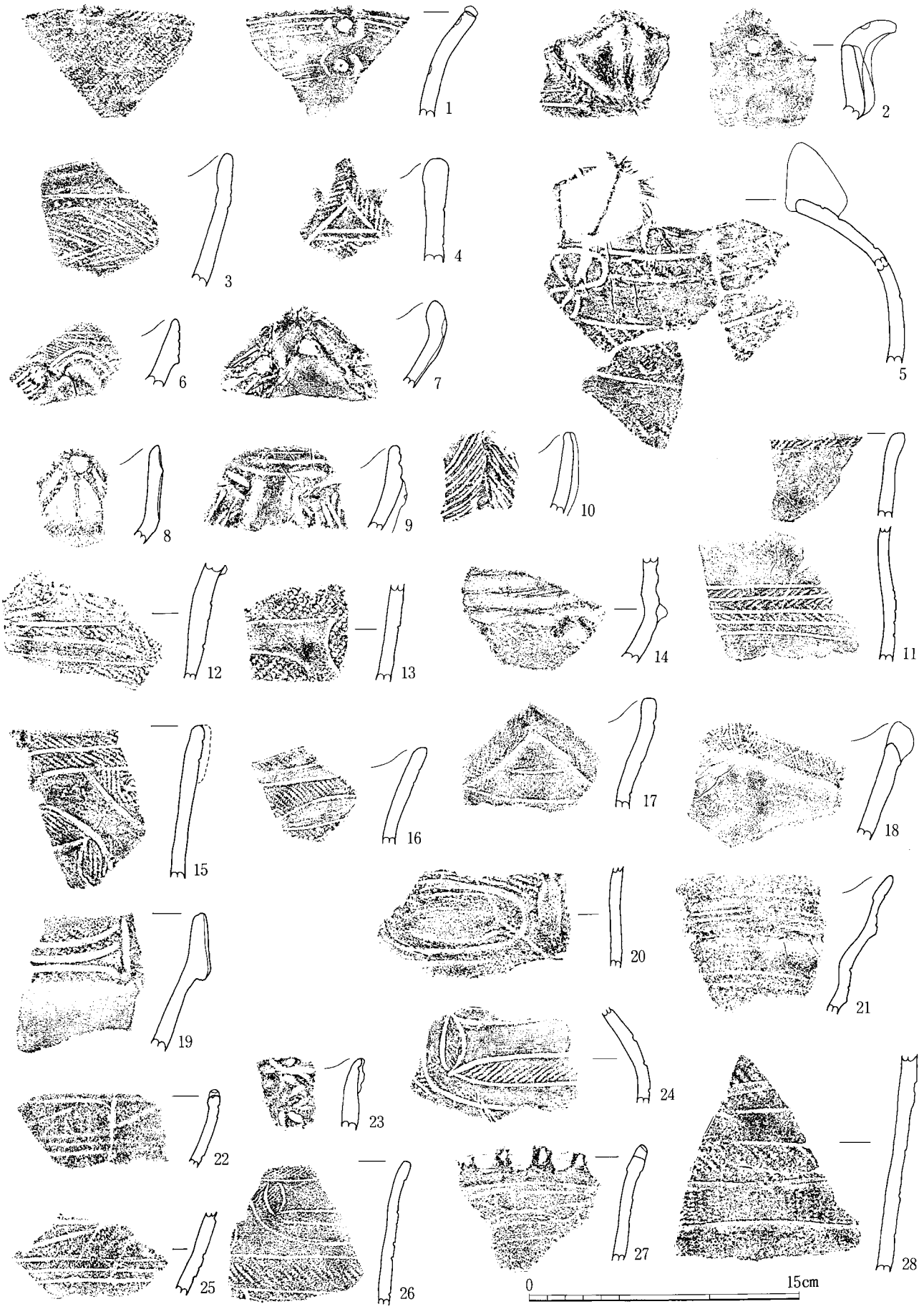
図版245　土器拓本　晩期中葉



図版246　土器拓本　晩期中葉



図版247　土器拓本　晩期中葉



図版248　穴出土土器拓本　1．第396号穴　2．第1043号穴　3．第282号穴　4．第1345号穴　5．第516号穴　6．第296号穴　7．第1172号穴　8．第1157号穴　9．第1502号穴　10．第704号穴　11．第675号穴　12．第409号穴　13．第543号穴　14．第536号穴　15．第149号穴　16．第346号穴　17．第694号穴　18．第149号穴　19．第769号穴　20・21．第282号穴　22．第1332号穴　23．第1196号穴　24．第560号穴　25．第1038号穴　26．第877号穴　27．第1115号穴　28．第1353号穴

図版249　穴出土土器拓本　1．第2014号穴　2．第171号穴　3．第356号穴　4．第1115号穴　5．第1007号穴
6．第927号穴　7．第967号穴　8．第1013号穴　9・10．第1301号穴
11．第694・774・788号穴　12．第1304号穴　13．第1387号穴　14．X91Y41穴フク土
15．第1358号穴　16．第625号穴　17．第423号穴　18．第1027号穴

北陸自動車道遺跡調査報告

朝日町編6

境A遺跡―土器編（本　　文）―

発行日　平成3年3月31日
編集者　富山県埋蔵文化財センター
発行者　富山県教育委員会
印刷者　㈱チューエツ